狂文俳文集

全

四方山は年にて隠居住吉町に
賤田屋をとらへ待しまあまし小盃
とりあはせ折々の古ね酒。さかな
にはからけんとあつ葛(?)妻のあらき
ものあらしみてや一大戦場の
おそしく黒岡(?)半日乃閑を得たり。
いでや見物の腕をこし。吾党

の連中のちかし、の種となれ
しふるくおもひいらなる机(?)を乃
読む(?)の書をとしく梓にちり
ば此世に伝る(?)事しかれ
如し。

天明壬寅閏(?)月　四方山人

近代日本文學大系　第二十三卷目次

卷之三

賦類

譜類

卷之四

說類

巻之六

箴類

銘類

誄類

巻之七

歌類

部歌

文類

卷之八

傳類

碑類

卷之九

辯類

表類

卷之十

論類

頌類

讃贊類

書類

第一卷

歌類

詩類

第二巻

賦類

行類

吟類

教令類

書狀類

第五卷

論類

解類

傳類

記類

第六卷

序跋類

對問類

第七卷

辯類

說類

頌類

第八卷

贊類

銘類

前篇下

前篇續

後篇上

後篇下

續篇

中

下

拾遺

目次

下

四方のあか……八二七—九〇三

上

下

四方の留粕

下

上

目次

下

目次終

解題

文學博士　笹川種郎

誹文概說

山水清潤なる京洛の天地に生れ、濃艶衣に勝へざる婦人の手に育てられた中古文なるものは、如何にも優美で、なよやかなものであつたが、鎌倉時代に入りて、時代相の影響を受けると、漢語も多く交り、漢文脈を傳へて、自づと雄壯のものとなりて、いはゆる近古文なるものを作り出す事となつた。保元平治物語から、平家物語、源平盛衰記を經て、太平記になると、著しく其の時代相が發揮せられてゐる。此等戰記物の文體は、室町に入りて、義經記、曾我物語を出してゐるが、他方には謠曲が作られ、口語體の狂言が創められ、お伽草子も作られた。江戸時代に入ると、假名草子より浮世草子となり、八文字屋本となり、諸種の小說を出し、さま〴〵の文體が行はれることとなつた　古淨瑠璃は時代とともに進歩し、幾多の新しい淨瑠璃を作り出して、文藻

の見るべきものがあつた。然も一方には國文學者の擬古文あり、漢學者の平易な、解り易い近代文も行はれた。更に俳諧者になると、俳文を作り出し、狂歌の作者は狂文をものし、諸種の文體は千紫萬紅いろ〳〵さま〴〵に目もあやであつたのである。

俳文は俳味を帶びた文章である。俳味と云へるは、卽ち俳諧趣味である。俳諧の義は固より滑稽を主としたもので、宗鑑宗武貞德宗因以下談林の諸家が作る所は、多く滑稽調を持つてゐた。いはゆるをかしみ、卽ち、諧謔の類である。伊丹の鬼貫に至つて「句を作るに姿詞をのみ工みにすれば、まこと少なし。只心を深く入れて、姿言葉に係らぬこそ好ましけれ。」と道破して、おもしろく作るよりは、底深く匂ひあるを主張した。芭蕉に至つては、風雅の誠を唱へ、寂、栞、細みを說いて、自然を法とした。俗中に雅を求め、世間の裏に出世間を寓するを本意として、此にいはゆる俳味なるものは生じたのであつた。蕉門の高足東華坊支考が續五論に「俳諧といふに三あるべし、花月の風流は風雅の體なり。をかしきは俳諧の名にして、寂しきは風雅の實なり。この三の物に及ばざれば世俗のたゞ言となりぬべし、詩と云ひ、歌と云ふ、俳諧は高下の情もらすことなし。」とあるが如く、俳諧は高下の情を一切取りて、之を詩化するものであつた。そも俳諧の道といふは、第一に虛實の自在より世間の理窟をよく離れて、風雅の道理に遊ぶを云ふなり」

と同じ人の誹諧十論に說いてゐるところも、亦此の理を云つたものである。

此の誹味に依りて作られた文體が卽ち誹文であつて、古風に流れず、今樣に墮せず、言葉つきなだらかに、流暢典雅にして、しかも頗る氣のきいたところがある。支考は其の選するところの本朝文鑑に序して「今の選場には、古今に文章の體を選びて、たとへ金玉の聲あるも、物に對して虛實を知らざらんには、人に敎ふる道なからんと、我が師五ヶ條の法を遺して、文章の家の式目とはなせり。先づは第一に文章の虛實を知るべし、敎書詔狀の理論にはあらず。第二には文章の起結を知るべし、一篇の斷續たしかならねば埒なし。第三には二句の長短を知るべし、句讀の法に叶はざれば讀み難し。第四には假名と眞名との配(くばり)を知るべじ、倭文は手爾遠波の事なればなり。さて第五には誹諧の筆格を立て、歌人連歌の跡を追はざるべし。然らば誹諧には此の一格ありて後の人をして今の人を慕はしめば、生きては先翁の光をかゝげ、死しては我が家の名を傳へざらんや。」と云へるは、鬼面人を嚇すもので、寧ろ同門の五老井許六が風俗文選の自序に、「吾が朝往昔のむかしより、大和詞の文筆、庫にみち車にみてん。されど世に行はるゝ言葉、多くは女官の筆にして、源氏狹衣の類、男女の中を盡し、實は歌よますべき道びきなるべし、共に歌連歌の文法にして、誹諧文章の格式一言もなし。先師芭蕉翁、始めて一格を立て、氣韻生動を現はせ

り。たとひ鄙言漢字を交へたりとも、心は吉野龍田の花紅葉を慕ひ、和歌の浦に志をよせて、難波津の細きよしあしをたどり知るべし。縦横自在を盡したりとも、ひとつの趣意を立つる所なくては、童蒙の見い物がくしに落ちて、果ては俗耳を仕様となさる、甚だ無下の事なるべし」と云つてゐる方が善く俳文を説明してゐる。畢竟古雅の死文字を弄せずして、鄙言漢字を交ふるも、新しい生き〳〵した、しかも風流を旨とする文章を意味するのである。

俳文は先づ芭蕉に其の端緒を開いたと云ふべく、著すところに『野ざらし紀行』、『鹿島紀行』、『笈之小文』、『更科紀行』、『奥の細道』、『嵯峨日記』の紀行、日記類を初めとして、其の他に幾多の小品文がある。雄渾なるものあり、飄逸なるものあり、清麗なるものあり、しかも閑寂の趣しつとりと篇外に溢れて、妙云ふべからず。

二十日餘りの月微に見えて、山の根際いと暗きに、馬上に鞭を垂れて數里未だ鷄鳴ならず、杜牧が早行の殘夢小夜の中山に至りて忽ち驚く、

（野ざらし紀行）

日既に暮れかゝる程に、利根川のほとり布佐と云ふ所に着く。此の川にて鮭の網代といふものをたくみて、武江の市に鬻ぐ者あり、宵のほど其の漁家に入りてやすらふ。夜の宿腥し。月隈なく晴れける儘に夜舟さし下して鹿島に至る。晝より雨頻りに降りて、月見るべくもあらず。麓に根本寺のさきの和尚、今は世を遁れて此所におはしけるといふを聞きて尋ね入りて臥しぬ。頗る人をして深省を發せしむと吟じけん、暫く清浄

の心を得るに似たり。暁の空聊か晴れける。和尚起し驚かし給ふれば人々起き出でぬ。月の光雨の音たゞ哀れなる氣色胸に滿ちていふべき言の葉もなし。遥々と月見に來たる甲斐なきこそ本意なきわざなれど、かの何がしの女すら時鳥の歌えよまでかへりわづらひしも、我が爲にはよき荷擔の人ならんかし。（鹿島紀行）

卯月中比の空も朧に殘りて、はかなき短夜の月もいとゞ艶なるに、山は若葉にくろみかゝりて、杜鵑啼き出づべきしのゝめも海の方より白みそめたるに、上野とおぼしき所は麥の穗波あからみあひて、漁人の軒近き芥子の花たえだえに見渡さる。（笈之小文）

高山奇峰頭の上に蔽ひ重なりて、左は大河流れ、岸下の千尋の思ひをなし、尺地も平ならざれば、鞍の上静かならず、只危き煩のみやむ時なし。棧はし寢覺など過ぎて、猿が馬場たち峠などは四十八曲りとかや、九折重なりて雲路に辿る心地せらる。歩行より行くものさへ眼くるめき、魂しぼみて、足定まらざりけるに、かの連れたる奴僕いとも恐るゝ氣色見えず、馬の上にて只眠りに眠りて落ちぬべきことしあまたたびなりけるを、あとより見上げて、危き事の限りなし。（更科紀行）

の類、實に手に入つたもので、情景雙つながら備はつてゐる。

蕉門の諸高才逸足は何れも俳文に得てゐたが、取分け優れてゐたのは、許六である。旅賦、百花譜など最も出色である。然も許六は、俗語俗字を巧みに配合し、多少の滑稽味を交へて、風雅の情を忘れざる處に、糞を拔いてゐる。去來、支考、汶村、木導等、何れも此文に長けてゐた。或は五音相通の假字にて韻を踏んだり、其の間に技巧を弄するものもないではなかつたが、とに

かく、一種の文體を文章界に樹立したのである。支考が和漢の文法を混用して文法に序文發端、發語、起語、結語、返辭、決辭、釘辭、歎辭、括辭、語路、助語、押字、抱字、句鎖、枕詞、句拍子、句讀長短、語路斷續を分類し、句格を種々分つたなどは、寧ろ煩に堪へないのである。

蕪村は春泥集に序して、「誹諧は俗談を用ゐて俗を離るゝを尚ぶ、俗を離れて俗を用ゐる、離俗の法最も難し、彼の何某の禪師が隻手の聲を聞くといふもの、則ち誹諧禪にして、離俗の則なり。」と云ひ、太祇句選に跋して、「太祇嘗て小言すらく、靑丹よし奈良法より奈良茶と云はんこそ、誹諧のさびしみなれ云々。」と說き、昔を今に叙して、「もはら蕉翁の寂栞を慕ひ、いにしへに返さん事を思ふ、是れ外虛に背いて內實に應ずるなり、これを誹諧禪と云ひ傳心の法と云ふ」と述べてゐる程に善く誹味を鼓吹してゐた。蕪村は丹靑の技に長じて、南畫の名手であつたが、又畫中に誹趣を寓して、減筆の誹畫をも作つた。彼の畫は新意ありて、奇抜に、一代の霸者であつたが、田能村竹田は之を池大雅と比較して、「大雅は正にして譎ならず、春星(蕪村の字)は譎にして正ならず。」と云つてゐるが如く、匠氣のある事は否まれない。誹諧に至りても、いはゆる天明中興の宗として、極めて新奇を出してゐるが、寧ろ自然ではなくして作つてゐると云ふ點があつた。殊に好んで漢語を用ゐ、巧に支那の典故を取つて我が藥籠中の物としてゐた。彼の誹文に於ても、

こもりくの初瀬の堂の片隅に、ますらをの檜木笠うち敷きて、ゆかしき春の旅寝姿は、よきもの見たる吉野の勞を休めんとなるべし。　(隠口塚序)

の如き、なだらかな國文調のものもあつたが、寧ろ其の得意とするところは、

最高頂上に人家見えて、高尾村といふ。波鮎を業として、世渡るたよりとなすよし。茅屋雲に架して、斷橋水に臨む。かゝる絶地にも住む人ありやと、そゞろに客魂を冷す。　(宇治行)

四明山下の西南、一乗寺村に禪房あり、金福寺といふ。土人口稱して芭蕉庵と呼ぶ。階前より翠微に入ること二十歩、一塊の丘あり、即ち芭蕉庵の遺蹟なりとぞ。もとより閑寂玄隠の地にして、綠苔やゝ百年の人跡を埋むと雖も、幽篁なほ一爐の茶烟を含むが如し。水行き雲停まり、樹老い鳥睡りて、頗りに懐古の情に堪へず。ことやうやく長安名利の境を離るゝと雖も、ひたぶるに俗塵を厭ふとしもあらず、鷄犬の聲籬を隔てゝ、樵牧の路門を違へり。豆腐賣る小家も近く、酒を沽ふ肆も遠きにあらず。　(芭蕉堂再興記)

の類であつた。

然し誹文の絶頂は横井也有の鶉衣で、自由自在に言葉を驅使して、輕妙飄逸を極め、誹文の誹文たるところを善く現はしてゐる。彼は六林文集に序して、

「然るに世の誹人ともがらも五七五はいふべし、只誹諧の文章は難し。風俗文選世に行はれて後、其の體を學ぶ者の間にあるも、善くいふものは甚だ稀なり。古人の文とても其の風體一つならず、祖翁の筆を評するは、いとこちたきわざなれど、潛かに是れをいふべくは、蕉翁の文は正しくして、俗中に雅を失はず、言、

はやごとなき人の編笠羽織にやつして、花のもとの牀几によりたれど、田樂串に手を觸れず、茶許り飮んで作らひたるが如し。其の位に至らぬ人の及ぶ事も難からん。東華坊支考が文は働きて遁らず、おもしろくいひなぐりて、情を深く含ませたり、例へば諸藝に勝れたる當世男の、座の興に三味線とりて合の手ばかり彈きすてたるが如し、彦根の許六は物の姿情を盡くして、詞を飾るにおぼれたれば、やゝ卑きに似たれど、さりとて雅趣のなきにあらず、例へば何がしの忠信梅川などの人に讀まれて見知られて、駒下駄に尺八吹いて大道に肩怒らし、あはれ傍に人なきが如しといはゞ、其の磊磯たるは論ずるに及ばず、只今和漢の故事古語を知り、俗の諺にも入りわたり、其の影を用ゐてあらはならず、長きを縮め、堅きをこなして、俗ならず雅に過ぎず、主意よく、本末を貫きたるをこそ調ひたる文章とは云はめ、誠に難からざらめや。

と、云つてゐるのは、彼の俳文觀である。

也有の俳文は之を芭蕉に比すると上品ならずして、品格卑しと說くものがある。然し芭蕉の俳文は許六、支考に至りて漸く通俗平易の文字を混じて來た。也有に於ては更に雅ならず俗ならずとの見地から、多少の滑稽味を交へて、成るべくこれを平易通俗ならしめようとしてゐる。然も其の裏に雅趣の横溢してゐる事は其の特色である。俳文なる一種の文體は、必ずしも俳諧師が作るが故に俳文ならずして、別に這の種の俳味を帶ぶるが爲なるを知らば、也有の作の如きは最も善く其の特質を具有してゐる。芭蕉のものは韻致高いが、寧ろ雅に過ぎてゐた。許六支考は漸く

俗中に雅を求めようとつとめた。也有に至れば輕妙瀟逸の文を以て巧に俗を雅化することを忘れなかつたのである。誹文は誹諧師が作るが故に誹文たるのではなく、誹味を帶ぶるがために誹文たるのである。青丹よし奈良の都では雅に過ぎる。奈良漬は俗に流れる。奈良茶となると誹味がしつとりと潤つて來る。

壘は常に青かるべし、障子行燈に白きを厭はず、清きことは其の內にあり。其の居清ければ住む人の心卽ち清し。あるじもとより風月に遊べり。口に風雅を云ふとても清からざれば佳句を得難し。(中畧)あけては金城に登りて青雲の志たわまず、暮れては閑居に休んで白雲のさかを樂しみ、長く青白舍の主たらんにぞ、青白舍の名空しからじとぞ。 (青白舍記)

梢にある物は風の恐れあり、土に隱るゝ物は雨の憂へあり、かの蓮胤が車二つに積むと云ひしも、猶此のものの安きにはしかず、あるじは之に倣ふものか。 (蝸牛齋頌)

何と旨いものではないか。

狂文概說

誹文は誹諧師が作るが故に誹文たらずして、誹味を帶ぶるがために誹文と稱すべきが如く、狂文も亦狂歌師が作るが故に狂文たらずして、狂歌調を有するがために狂文と稱すべきである。也

有の誹文と狂文との間は極めて接近すと稱するものもあれど、也有の文が誹文にして狂文たらざるは、誹味ありて、狂歌調なきが故である。多少の滑稽ありとも、狂文と誹文との間には自らと區別がある筈である。尤も大田南畝の如きは、也有の文章を慕ひ、其の著鶉衣を印行するに至つた。六林の披文に、「爰にまた東都の四方先生あり、予遙かに其の芳名を慕ふ事久し。然るに此の鶉衣は翁少壯より老に至るまで生涯四時の不斷著なりき。簞笥に收めて隱し置きて人には與へられざりしを、東都の先生は如何にしてか聞きつけられけん、或人に言傳てて、其の地合染色をも見ばやの望みあり。翁生前傾蓋はあらざれども、高山流水の音知る人また外にやはあると、前津の蓬廬へ驅け込んで、そこを守れる文樵なる男に錆びたる鍵取らせて、押入の柚木を探し、文匣の底ふるひて、數多の中に襟垢のつかぬを彼是とえり出し、速かに之を贈れり。日あらずして梓に上せられ、遠近の好士に一襲づゝ衣配せばやとの沙汰あり。誠に翁に於て隔世の知音といふべし。さぞな泉下にも雀躍して歡喜あらん。そも四方先生の高誼は海内皆知る所なり。也有翁の上は先に發句集のはしに拙き筆を添へぬれば、かたがた爰に贅せず、たゞ四方先生の此の一擧を深く感じて、聊かそのあらましを附するのみ」とあるが如く、南畝が也有に私淑するの深き知るべきである。誹文が狂文に影響の多大なる、又推して察せられる。

許六に師説、獲麟解解等があるが、何れも題を假りて、自家の所見を述べたのである。蕪村の宴樂序は李白の春夜宴桃李園序に倣つて、又別の趣がある。六樹園の新吉原細見序に至りては、桃李園序をもぢつて、之を滑稽化したところに、狂文の妙があり、文藻の凡ならざる所があるではないか。

天地は揚屋の二階の如く、光陰は客衆に似たり。浮世は夢の四手駕、通ひ路の寛濶に燭を乗つて夜遊ぶこと實にゆゑあり。況んや陽春我に假すに仲の町の夕榮を以てし、花魁我を呼ぶに文章を以てするをや。君が笑顔の桃李園、簾を揚げて、花に坐し、櫺子を明けて月に醉ふ。價千金、金谷の酒は物かは春の吉原。

此に狂文と誹文との著しい差別のあることが知られる。然し中には此の兩者の甚しく善く似通ひて、いづれを誹文、いづれを狂文と定め難いのも少なからねど、兩者の間には自づと差別がなくてはならない。

數々の橋越え過ぎ、兩國の河づらに漕ぎ出づれば、風は帽子の袖裏まで吹き返すは、秋もたゞ此の水上より立ち初むるなるべし。椎の木の蟬口ぐらし今日も暮れぬと啼きすさみ、岸の茶屋々々火影を爭ふ程、今戸あたりにかけ船も纜を解き、絲竹を鳴らしておのがさま〴〵に泛び出でぬ。京に四條の牀を竝ぶるより爰に百艘の船唄をつらねたるは、誠に都鳥の目にも恥ぢざるべし。舟として諷はざるはなく、人として狂せざるなし。高雄丸の屋形の前には花火の光、紅葉を散らし、吉野屋が行燈の影には樺櫻の煙花よりも艶し。幕の

內の舞子は鶯囀聞くにゆかしく、舳先の生醉は御足見るに花なし。伽羅薰物のかをり心ときめきて、咬物通ふ振袖は燭臺のすきかげいとわかく、大名の次の間には袴着たる物眞似あり。女中の酒の座には頭巾被りし醫者坊あり。かしこにどよむ大笑ひは如何なる興にかあらん、こゝに船頭のいさかふは何の理窟もなき事なり。老人の集會は仙家のかげをうつし、役者の聲色は芝居もこゝに浮ぶかと疑ふ。卵子々々田樂々々瓜西瓜三味の長絲賣る聲西南にかしがましく、東北に漕ぎめぐる。風呂をたく船、酒を賣る船、菓子にあらぬ饅頭あり、鼓にあはぬ曲舞あり。あるは三圍隅田川に浮かれ、あるは兩國の橋にとゞまる。遊ぶ姿こと〴〵なれども、樂しむ心二つならず。それが中にも猶淺草のあさからぬ契りたるべし。待乳山の待ちやわぶらんと、更け行く空に漕ぎ別れて、里に引かるゝ人もあるべし。さるはいかならん遠近も同じ心におもてを竝べて見もし聞かばと、爰にだに物の悲しく、事足らはぬ心地せんも、はた惜からずや。やゝ銀河の水東西に流れ、あなにくやのさもめ鳥ひま白き窓に啼きかはせば、さしも所せき船も皆いづち行きけん、霧渡るそなたに漕ぎ消えて、瓜の皮のみ漂ふ曉の名殘こそ見しには引きかへて、また哀れなれ。　（隅田川涼賦）

とは、也有が誹文にして、

日も暮れぬ、はや船に乘れとは、向うへ渡れといふことか。いざ言問はん、遊ぶ氣はありやなしや。椎の葉ならぬ革の葉の、後に煎酒の洗ひ鯉を盛り、山椒の實は小粒でも、蒲焼の鰻の長ざきに伴ふ。咬物の赤味噌あかぎして、どんぶりのどんぶりはまる生簀のほとりに、藝者の三線堀の名の藥研でおろすかと疑ひ、太神樂の曲太鼓、日毎に一萬度もまはるべし。斯く浮かれたる世にしあれば、都鳥の嘴と足の赤きも、秋葉の猿の尻のやうに覺え、晉子が夕立の句も、稲荷の狂歌の額の事かと、己が田へ引く水草の、きよき所のとつ國

より、北の國とははるかわたる程近きわたりの、四方の眺めは、名に負ふ葛西の太郎月より、吉崎の大黒屋、々越えくれのせはしきまで、いづくはあれど武藏屋と、地口有武が言むるにまかせて、紫の一本ならぬ、赤良が一筆しめすになん。（向島賦）

とは、四方赤良（太田南畝）が狂文である　狂文はどこまでも洒落のめすが、諧文は品位を保ちてどことなしに、寂しみと侘しいところとがある。

狂歌の淵源は古く、一に俳諧歌とも、又夷曲とも云ひ、江戸時代に入りては、油煙齋貞柳、半井卜養などが出て、輕口談謔を主としてゐたが、天明以後に盛んとなり、通俗の語を以て感ずる所、見聞する所を述ぶることとなり、蜀山人即ち四方赤良を初めとして、朱樂菅江、宿屋飯盛（石川雅望即ち六樹園）唐衣橘洲、元木阿彌、鹿津部眞顔、三陀羅法師、手柄岡持等輩出し、夥多の狂歌集、狂文集、狂歌合、狂歌繪本、月並集、歳旦の摺物等が刊行せられ、寛政、享和、文化、文政より幕末に及んで、實に隆盛を極めた。其の中、狂文集の重なるものは、風來山人の「六六部集」、蜀山人の「老萊子」「千紫萬紅」「萬紫千紅」「四方のあか」「四方の留粕」、六樹園の「都の手振」「吾嬬なまり」「北里十二時」、元木阿彌、平秩東作、竹杖爲輕の「寶合の記」、重[illegible]音人の「狂文棒歌撰」、鹿津部眞顔の「四方歌垣戲文章」等である。しかも其の優れた作者は、蜀山人と六樹園とであつた。

奥の細道

元祿二年三月二十七日、芭蕉が江戸を發足して奥羽行脚に上つた其の紀行で、芭蕉の風懐を見るべき最もよきものである。同行は門人の河合曾良。途に日光山に登り、那須野ヶ原、白川の關越えて、五月一日は飯塚（飯坂溫泉）に宿る。「溫泉あれば、湯に入りて宿を假るに、土坐に筵を敷いて怪しき貧家なり、灯もなければ圍爐裏の火影に寢所を設けて臥す。夜に入りて雷鳴り雨頻りに降りて、臥せる上より漏り、蚤蚊にさされ眠らず、持病さへ起りて消え入る許りになん。」とあるを、今日の飯坂に比すると、實に隔世の感ありて、當時奥羽行脚の困難を想見するに足る。芭蕉當年四十六歳、決して老いたりとは云ふべからねど、羇旅の哀愁には、幾そたびか、心細きを感じたであらうか。「遙かなる行末を抱へて、斯かる病覺束なしと雖も、羇旅邊土の行脚、捨身無常の觀念、道路に死なん、是れ天の命なり。」とまで云つてゐる。然し此の困難と悲哀とは、彼をして其の吟腸を養ひ、其の奚囊を重からしめたに與りて、多くの功があつたのである。五月四日には仙臺に入り、松島、鹽竈に遊び、更に北して、平泉に藤原氏三代の榮華の跡を弔ひ、岩手より出羽に入り、尾花澤より山形領に越え、庄内の地に入りて、六月三日羽黑山に上り、同八日月

山に登りて、鶴岡に宿り、酒田に下り、象潟の雨に西施のねむの花と觀じ、鼠ヶ關を越えて、越後より越中に入る。遙かに滄波浩渺の間に佐渡ヶ島を望み、親知らず子知らずの險を過ぎ、黒部四十八ヶ瀬の數々の川を渡り、七月十五日加賀の金澤に著き、山中の温泉に浴し、此にて腹を病んで伊勢の長島に赴かんとする曾良と別離の涙を灑ぎ、之より孤影悄然として越前に赴かんとする。金澤の北枝見送りて丸岡まで慕ひ來る。斯くて永平寺に詣で、福井より八月十四日敦賀に宿し、氣比の松原に遊ぶ。門人路通も此まで出迎へて美濃の大垣に入り、曾良の伊勢より來るに會し、九月六日伊勢の遷宮を拜まんと舟中「蛤の二見に別れ行く秋ぞ」の一句を題した所で筆を止めてゐる。清麗高雅の筆で、よく旅中の情と景とを寫してゐる所に無限の妙味がある。

風俗文選

十卷、寶永三年、芭蕉の門人森川許六の編する所である。許六は江州彦根の城主井伊氏の家臣で、三百石を領した。名は百仲、字は羽官、通稱を五助と云ひ、五老井、菊阿佛、風狂堂、琢々庵等の號がある。芭蕉に從ひて誹諧を學び、狩野安信に就いて畫を修めて、風韻の掬すべきものがあつた。芭蕉も畫は此の人を師としたのである。曾て五老井を結び、そこにある泉を五老井と

稱し、又庵の四趣を草字藤、楊揮豆、雲花園、紫芝園と云つた。五老井記は許六自ら選び、草字藤の説は朝倉程巳、楊揮豆の賦は北山毛執、雲華園の銘は松井許村、紫芝園の賛は許六自ら述作してゐる。江州堅田光明遍照寺の住職にして、芭蕉門であつた僧李由と友とし善かつた。許六人となり、傲岸にして、蕉門の他子を見ること塵芥の如くあつた。「當時もて囃す門人(芭蕉門)の誹諧は、全く先師(芭蕉)の流にはあらず、晉子(其角)は作を好みて、己が一風を立てたり、近頃日の風體は、誹諧の名を改め、餅とも酒とも名づけたらんに、何の違ひかあらん。東華坊(支考)は賢き者なり、先師身まかりて後、自ら上手と云はせ、師説に疎き事もあるにや、麁質新古の取違へもあるべし、誹諧を弘むるには利ありて、誹諧の道を殘すためには、大きに害あり。他の誹諧の事は措いて論ぜず、其角支考は下手にてはなし、先師の口癖は善く眞似ける。芭蕉流にはあらず、芭蕉流正風體の血脈を得たる者は我なり。」(直指傳)とまで揚言してゐる。晩年癩を病んで人と交はることを避けた。名古屋の萬子が其の病狀に近づき、對酌した逸話は誹家奇人談に出てゐる。正徳五年八月二十六日、享年六十歳にて歿した。臨終の偈に「一時打破屎糞壺、芬々臭氣供ニ梵天。」「下手ばかり死ぬる事ぞと思ひしに、上手も死ねば糞上手なり。」とある。許六は又文章を善くした。風俗文選は蕉門諸子の誹文を見るのに最も善いが、その中でも許六は最も優れた一人

である。『四季辭』『旅賦』『百花譜』等いづれも朗々として誦すべき好文辭である。百花譜の現存するものに、許六自ら畫いて、自ら文を書けるものがあるが、文と畫とともに面白い。『山水譜』は彼の畫論として見るべきものである。

本朝文鑑

九卷、芭蕉門の各務支考の選に係る。享保三年刊行せらる。此の篇の姉妹篇としては和漢文操がある。支考は美濃之原北方村の人、初めは禪門に入りて黄雲山大智寺の僧となり、鎭藏主と稱したが、後に伊勢の山田に隱れ、涼菟の爲に勸められて芭蕉の門下となつた。醫を業としては見龍と稱し、自狂坊、蓮二坊、梅花佛、東華坊、西華坊、野盤子、獅子菴の別號がある。其の後美濃に歸りて、誹諧道に於ける美濃派の祖である。享保十六年二月七日歿した、享年六十七。『誹諧十論』、『爲辨抄』、『葛の松原』、『續五論』、『東華集』、『西華集』等著す所が多い。嘗て寶永辛卯年八月十六日、自ら終焉の記を作りて追善句集『阿難話』を選した。其の人となり豪放磊落にして、文章を善くした。本朝文鑑に錄する文も、最も自作が多かつた。此の書は他の書と異にして、評註を生命とし、支考一家の文章觀を隨處に述べた所に其の特色がある。卷尾に許六を弔する文を

掲げて、強敵許六を悼んだ所は、支考生平の面目が見えて面白い。然るに我が師東華坊は、固より方外の友にして、我が師は作意の流行ならんには、作はつゝる日の道理を云ひ、其の人は作意の無盡なれば、是れを故翁の直指なりと爭ふ。譬へば黄梅の即心即佛と悟れるを、馬祖は非心非佛と爭へる如く、我が師は其の人の好む所を破するのみ、何かは言語の作不作を爭はん。」など、流石に斯の人の洒々落々と、又自ら高うするを見るべきである。此の書の序に誹文五條を說いた所は注意すべき點である。

鶉衣

前後續拾遺とも十四卷十二冊は、横井也有の誹文を集めたものである。其の鶉衣と題せしゆゑよしは、卷頭に、「あやしくはえもなききれ〳〵を集めつゞりたるを鶉衣とは云ふなり、實にその鶉ならば、たゞ深草の深くかくろへてかりにだも人には知らるまじきものにこそ。」とあるにて知られるが、也有は之を世間に傳ふる事を欲せず、篋底深く藏してゐたのである。然るに之が世間に流布するに至つたのは、太田蜀山人の力に依る。蜀山人は本書に序して、「いにし安永の初め、隅田川のほとり長樂精舍に遊びて、也有翁の借物の辨を見侍りしが、餘りに面白ければ、うつし

歸り侍りき。それより山鳥の尾張の國の人に逢ふ每に此の事うち出でて問ひ侍りければ、金森桂五、兎の裘にはあらぬ鶉衣と云へるもの二卷を持て來て見せ給へり。翁亡くなりぬと聞きて、なほ馬相如が書き殘せるふみもやあるとゆかしかりしに、細井春幸、天野布川に託して、其の門人紀六林の寫してける全本を贈れり。ふき返し見侍るに、唐錦たゝまくをしく、頓に梓のたくみに命じて、これを世上に晴れ衣とす。翁の文に於けるや、錦を著て上襲し、けたなる袖をまどかになして、善く人の心を寫し、よく方の外に遊べり云々。」とあるにて知られる。也有の文に傾倒したものは、蜀山人ばかりでなく、六樹園も拾遺に序して、「いでやさかさまに著朝服より葛巾山服の老いの木までさる斑襴の色に誇らずして、ふたのの賤しきを棄てず、常談俗語に心をやりて、常のすさみとせられしは、はうきにさらずほしぎぬの勝れて高き心とぞ知られたる。あはれ六德備へし君子にておはしけるを、十德きたる誹諧子とのみ思ふめるは、ばくものをのみ目に觸れし古著の市のふみちがへなりけり。」と推賞してゐる。也有は尾州德川家の重臣で、名を時般、又並明、順學、通稱持右衞門、羅隱、半掃庵、暮水翁の別號がある。也有又野有と記す。文武の道に達し、好んで誹諧を作り、誹文を善くした。前津の里に隱退して、風雅の道淺からず、天明三年八十二歲にて歿した。病來辭二世路一、久隱舞津廬、八十餘年夢、驚回曉寺鐘。きのふけふと思ひ

つゝ經し身のほどぞ中々長き世はかぞへぬる」は病牀の吟詠で、「短夜やわれには長き夢覺めぬ」

とは其の辭世であつた。著す所、鶉衣の他に、『管見草』、『短硯錄』、『小革籠』、『野夫談』、『永代藏』、『無夜食談』、『みなむすび』、『自話傳難陳』等があり、詩集を『蘿隱集』、和歌集を『[illegible]客集』、狂歌集を『行々子』と云ふ。誹諧の集に、『千句集』、『五百句集』、『蘿葉集』、『蘿落葉』、『蟻塚集』、『もり捕』があり、漢和聯句に『[illegible]洋編』がある。

小革籠

一種の訓話であるが、輕妙の筆致を以て文を遣つてゐる。誹諧文庫の也有、集中題に、

小革籠は何者の作なるかは明かならず、寫本にて傳はりしを、文化年中印行したるなり。素より俳諧には關はりなき、年少男女への道話に過ぎざれども、其の筆のはこびは、輕妙洒落、亦これ一種の俳文として見るべく、現に此の書を印行するにあたりては、其の鶉衣の評判高かりしに由りてか、この篇も『うづら衣三篇小革籠』と題して發售したるなり。刊本亦稀なり。

とありて、刊本の序を載せてゐるが、其の序は次の如きものである。

いでや世に人を教へ導くの書は多かれど、かど〳〵しき漢文字は幼き人々のたやすく心得べきにもあらず。さりとて作り物語は百を勸みて一を誡むといへるなどもあれど、見過ちて淫れたる方にや流れなん。唯也有

翁の筆し給へる小革籠と云ふ書こそ常言戯語を以てことゝされし物なれ。誰しも讀み得られて面白く、誠となるべき書なれ。年比寫しかきて傳へしを、我が友暴仙普く世に博めんとて印板になし、書も一ツ二ツ書き加へたり。某之を見るに、暴仙は深く也有翁の心を得しものならんか。其の書様或は詞により、或は心を汲みて書きもし、寫しもしたれば、誠に此の書の羽翼とも云ふべし。見ん人此の書の深き心を得んとならば、つらつら書様を見よ。思ひ半ばに過ぎなん。冊子になりて、はし書をとありしまゝに、拙き筆を執る事爾り。

文化三寅の孟春　　半洲

今此に載する所の本書は此の刊行書に非ずして、也有が自筆の稿本に依つたのである。此の稿本に依ると、也有の自序にあるが如く、明和二年の春の作である。序にある下手談義、單朴翁が書き集めたる雜長持のことは、本文中にも「近年靜觀坊が下手談義、單朴翁が雜長持、輕口のなぐさみ本に仕立て、結構なる教訓、あらゆる世間の人情を盡せしが」とある。其の落ちこぼれを拾うて入れたからとて、「小革籠」と名づけたのである。別に附錄がある。

稿本には也有自ら描いた插畫が四枚ある。一枚は無借斎（本文には夢借斎とある）にて主客談話する體、一枚は本文中にある、「あはれ今世には人と見えても、佛神の御目からは、又犬が參詣したよ、猫めはにやんの願ひに來たぞと、さこ澤山に御覽あるべし。」の一段、一枚は附錄の古市が雪の夜に大盡の門を訪ふ所、今一枚は桑名町の伯父が來た體を寫してゐる。此の稿本の題辭には

「也有翁自筆小革籠、附錄共、羽洲園題」とある。印章は「松浦」、「羽洲」とあるから、羽洲園の姓は松浦氏である。

卷頭の寫眞版には稿本の本文一葉と插畫一葉とを掲げて、也有の風懷を偲ぶ事にした。猶本篇には天明評壇の雄なる谷口蕪村の評文を載錄しないから、之に代ふるに蕪村の時雨の消息を玻璃版にして掲げて置いた。『から檜葉』に依ると、「ことし〔天明三年〕秋の末、門人毛條に招かれ、宇治の奥田原といふ所に杖を引きぬ。絶壁懸河、奇石怪岩に眼を喜ばしめて、帛を裂く琵琶の流れや秋の聲、是は白氏が四絃一聲如レ裂レ帛といへるに思ひよせしとぞ。かくて其の秋も過ぎ、冬枯の寒も時雨がちに、蟋蟀草庵の戸にすだき、朝々の風、衣を透す比ひより、何となく氣力安からず、腹痛老身を苦しめ、日毎に惱み勝なりければ、おはやと人々訪ひよりて、服藥怠る事なく、介抱大方ならず、もてかしづき侍りぬ。されど老病日増に篤く、醫療さま／＼に心を用ゐると雖も、しるしなければ、おの／＼庵中に集まりて、かはる／＼病牀に參り、とさまかうさま老情を慰め侍りけり。」とありて、之より病日ましに重く、遂に其の年十二月二十四日、六十八歳にて歿したのである。時雨の消息は宇治に遊んで以來病牀に親しんでゐる事が敍せられて「大方天年も盡し候故、やがてアッチものと覺悟いたし心細く候」などと心細いことが云つてある。歿前十一月

餘の筆にかゝる。宛名の不二庵は芭蕉門の桃枝齋桃夭の門から出た桃居のことで、大阪に住してゐた。『から檜葉』に、「嗚呼此の叟去つて蕉門一方の柱碎けたり。」と前書して、「氣短に消えしや春の雪佛」の追悼句がある。『小革籠』の稿本とともに私の所藏する所のものであるが、卷頭へ掲げて置いた。狂歌師の眞蹟は、狂歌集の出版の際に盡く之れを讓り、式亭三馬の舊藏にかゝる蜀山人自筆を刊したる『江戸花海老』(家藏)の序を複寫して載せて置いた。

風來六々部集

前後篇四卷、共に六部の狂文を集めた故、此の名がある。「風來先生書捨て給ひし反古を太平館主人拾集めて六部集といふ、其の言意外に出て一家の文法古今獨歩といふべし、今に至りても我人共に見ん事を欲りす、然るに彼の集早くも世に乏しくなりもて行く儘に、こたび櫻木に彫り、猶殘れる花をも集めて六部を增補し、前後四卷となし、六々部集とはなりぬ。」と餘貨樓銅多の緒言に云つてある通りである。風來先生は卽ち平賀源内で、名は國倫、字は子彝、鳩溪と號し、讃州の人である。天竺浪人、松籟子、風來山人、森羅萬象翁、福内鬼外等の別號がある。人となり奇才に富み、國學を修め、本草學に精しく、長崎に赴きて、蘭語を學び、藥物を硏究し、外國の

珍器を購入し、これを摸造するに長じた。大阪の豪商中島屋喜四郎に勸め、甘蔗を備後に植ゑしめ、これに教ふるに培養法を以てし、喜四郎爲に巨利を博する事を得た。又京都及諸所に遊び、寶曆中江戸に到り、官醫田村元雄と物産の學を修め、或は風琴を長崎に得て之を某侯に贈り、或は電氣の機械を見て之れを作り、又石綿を以て火浣布を作るなど、種々發明する所があり、屢長崎に往來した。幕府は之れを奇としたが重く用ゐず、諸侯も亦其の才を認めた者はあるが、重祿を以て之を聘用しなかつたが爲、放逸酒を使ひ、色に耽り、大言壯語、一世を愚弄した。安永八年他人に連坐して獄中に死すとも稱せられ、又發狂して人を殺し獄中に死すとも云はれ、又潛かに釋放せられて、長壽を保つたとも云はれて、諸說一樣でない。要するに才子才の爲に誤られて不平不滿に其の晩年を終つたのである。文才あつて、作る所の『神靈矢口渡』の戲曲世に行はる。

物類品隲　淨貞五百圖　火浣布考　火浣布略
神農本草經圖　神農本草倭名考　本草比肩　食物本草
四季名物正名　日本物產譜　源氏大草紙　金毘羅利生記
・六々部集　當世さよ嵐正續　仙術金のなる木　虛實山師の辨
當世野夫論　根南志草　風流志道軒　祕術工夫

等がある。不平の境遇と豪放の性質とは、當世を罵倒し、愚弄せずんば已まないところがあつたから、彼の狂文には、自づと其の鋒鋩が閃いてゐる。『平賀鳩溪實記』に、「斯くて源内は種々工夫を廻らしけると雖も、更に取上ぐべき人なければ、我が才よりは人の才の長じたると心得て、最早我が望みも成就の程計り難し、さりながら、今我を評判するに、とかく滑稽の事に落せり、幸ひなるかな、世上に浮世本流行して輕薄第一の風俗なり、此の時に乘じて人の情を汲み取らば、亦階梯ともなるべしと思案して、種々の浮世本を著述して、梓行暇なかりしとなり。」とあるは、未だ十分に源内を知つたものの言ではない。

六々部集に載するところは

（前編）　放屁論　　放屁論後編　　痿陰隱逸傳（除く）
　　　　阿千代之傳　　蛇蛻青大通　　力婦傳
（後編）　吉原細見里のをだ卷評　　飛んだ噂の評　　天狗髑髏鑑定緣起
　　　　飛花落葉　　菩提樹之辨　　細見嗚呼御江戸序

である。とかく斯の人の作には下がかつたところが多く、際どい點が少からぬは、其の放縱の性

の然らしめる所ではあるが、其の間に嘲世罵俗の氣風が見えてゐる。「阿千代之傳」に、

釣瓶蕎麥は細きを嫌はず、やまやが豆腐は白きを嫌はず、竹村が卷煎餅は、商賣のかたきを賞し、仲の町の甚作谷は、齒こたへのせいゝゐを感ず。甘露梅は下戸食ふて舌打し、袖の梅は醉醒してゲツ／＼す。八朔の白小袖は、時ならぬに何の雪ぞ、七月の燈籠は、晴たるに何の月ぞ、うちへ向ての松の内、あらたまの禮者餅、庭の焚火に草市小さく、俵の櫻は秋のにはかとかはれども、替らぬものは實なきの格式」

などとある文才はまことに達者なもので、京傳三馬と相並んでの名文家と云はねばならぬ。

四方のあか

上下二卷、太田南畝の狂文を集めたものである。南畝、名は覃、字は子耜、通稱直次郎、後に八右衛門と改む。南畝は其の號、杏花園、遠櫻山人、巴人亭、石楠齋、四方山人、紬羅山人、南極老人、四方赤良、蜀山人、寢惚先生等の別號があるが、蜀山人最も善く世に知られてゐる。蜀山人の號をつけた由來は、蜀山集の自序に、

「二十とせ餘りことせばかりの事にやありけん、もろこしに渡さるべき銅の事承りて、蘆が散る浪華にありける時、公ならぬ市人らと文書つかひて、まことの名をかくにもあらじと、銅の名を蜀山居士といへれば、蜀山人々々々と書きすさみしを、まことの名と思ひとりて、蜀山々々と呼ぶこととなりぬ。

文政六のとし睦月のはじめ十日　蜀山人七十五歳にしてかく

とあれば、五十餘歳以後の號である。南畝は幕府の臣で、國學及び漢學に精通して居た。然し其の性風雅を愛し、狂歌に巧みに、又文章を善くした。當時の狂歌壇は彼を以て其の盟主と仰いでゐたのである。著す所、

三餐餘興　改元紀行　葦の若葉　壬戌紀行
革令紀行　小春紀行　調布日記　玉川披砂
武江披砂　春夏帖　かくれ里の記　四方のあか
四方の留粕　蜀山文集　寐惚先生文集　賣飴土平傳
檀那山人藝舍集　二大家風雅　めでた百首夷歌　蜀山百首
狂歌百人一首　千とせの門　巴人集　巴人集拾遺
千紅萬紫　蜀山集　宛丘子傳　をしてるの記
科場窗稿　寛政御用留　尺牘　甲驛新話
粋町甲閨　江戸花海老　通詩選笑知　李不盡通詩選

狂歌諺解　道中粋語錄　和漢同詠道行　春笑一刻
鸚の味噌津　鶯笛　阿姑麻傳　半日閑話
濱田問答　俗耳鼓吹　迴遊從之　石楠堂隨筆
・百舌の草莖　玉油揉綴　玉油又綴　玉川砂利
向岡閑話　金曾木　南畝莠言　奴凧
假名世說　一話一言　一話一言補遺　虚言八百萬八傳
返々目出鯛春參　壽鹽商婚禮　漢國無體此奴和日本　梶原再見二度の賭
手練偽なし　落噺わらひ　和漢同評　通詩選諺解

或は『甲驛新話』『粋町甲閨』の如き洒落本、『此奴和日本』『虚言八百萬八傳』の如き黄表紙に文才を披瀝し、或は『假名世說』、『一話一言』の如き隨筆に博學を示してゐるが、狂歌に至りては、殆んど彼の天分で、彼自らこれを得意としてゐた。初めは牛込に住し、後駿河臺に移り、文政六年四月六日歿す、享年七十五。

『四方のあか』は六樹園が序して、「このふみは四方の赤の一本氣にして、かりにも水くさき駄酒を交へず。」と云へるが如く、蜀山人の文の粋を輯めたものである。

『四方のあか』に載するところの『日ぐらしの日記』に笠森稲荷のことを叙して、

笠森稲荷の宮居を見れば、木立もの古り、とりゐ立てり。ふたつきの土器に、白き色と黒き色の團子を盛りて、小女ゆききの人を見る毎に、米のかへ土のかへと呼ぶ。あが友何がし秋の頃より、

醫者も手をとるやわれこのひとにして

かかるへのこのやまひあることと

と詠じて、枕に臥したれば、いでや此の宮しろに、祈らぬ事はあらぬかねの、土の團子捧げつゝ、名もかさもりの神、あが友が持病のたひらけく、萬代のやすらけく守らしめ給へと申していでぬ。

こゝは過ぎし明和の頃、お仙と云へるいらつめの、茶を調めて、人の心をうからかせし、古き跡なり。葛飾の眞間の手古奈のたぐひにして、奈良坂や兒手柏の二面、燈ともしの陰と頼みしが、とにもかくにもねぢ錠の、鍵屋の錠もぢんとおりて、またも再びあひがたなく、こしかけし牀几の足さへ跡かたなく、兒手柏の根つこをも、いづこの里へほりうつしけん、とんだ茶釜が藥罐と化けて、松風のみぞ音高き、人間萬事塞馬の如し、かたがた油斷すべからず。

笠森稲荷大明神　鍵屋阿仙稱二美人一
土器碎爲二土團子一　只今唯有二煮花新一

又

面桝似足

笠守稗祠日暮邊　醉中相伴例者賢
殊含播者頃按舌　曾識高名有阿仙

と、お仙の追懐をしてゐるが、此のお仙は淺草觀音境内に楊枝店を開いて、銀杏娘と呼ばれた柳屋お藤と相對して、明和頃の江戸代表美人で、鈴木春信や一筆齋文調に依りて雙方其の艶姿を描かれたものである。蜀山人は最もお仙の美を推賞して、賣飴土平傳にも其の美を歌ひ、お仙お藤の優劣に就いては團扇をお仙に揚げてゐる。

四方の留粕

上下二卷、同じく太田南畝の狂文を蒐めたものである。文政二年正月吉日、鹿津部眞顏が序して「いざたまへよきあかこひにと、書屋と共に、うしのみもとに參りて、此の殿の奥の酒屋のうはたまり、あはれ中酌をだにとこひ求めたりしに、留粕といふ物四十枚ばかりとう出て云々」とあるが如く、こはるゝ儘に出版したものと思はれる。但し此の中、鬼念佛畫讚は狂歌はないか、『四方のあか』にも見えてゐる。

都の手振

一卷、六樹園の著はせる江戸の繁昌記である。六樹園、姓は石川、名は雅望、字を子相、通稱を五郎兵衞と云ふ。五老齋、逆旅主人、蛾術齋の別號がある。江戸小傳馬町三丁目の旅館糠屋七兵衞即ち浮世繪畫師石川豐信の子である。蜀山人に從ひて狂歌を學び、宿屋飯盛と曰ふ。後內藤新宿に移居した。學を好み、博覽多識にして著す所が多い。其の著に「雅言集覽」、「源語餘滴」等がある。又戲作も少なしとせぬ、狂歌の宗匠となり、弟子三千人と云ふ。文政十三年閏三月二十四日、享年七十八歲にて歿した。

此の書は雅文にて俗事を巧に寫したもので、加藤千蔭の序にも「其の書ける事は、さとび事ながら、詞はみやびごとにとりなせり」とあるが如くである　鄙びた民謠までを雅語に飜譯したなど、相當の苦心がある。馬喰町の條に「酒をたうべつ、五さくの酒を、一合たうべて、醉ひいやゑしぬ。」「盆の十六日に舞人は揃ひつ、稻の穗よりも、いとよく揃ひつ」夜鷹の條にある「ものこしの虎てふ神は云々。」「わがせこが、いざなひゆかば、いかならん云々」「わがおもふ某殿は云ふ」の類である。雅語にてやれる文の中に滑稽味を混じた處に、並々ならぬ文才が窺はれる。

吾嬬なまり

二冊、六樹園の狂文を集めたものである。文化十年の板。六樹園の狂歌狂文等に關する重なる書目は次の如くである。

天明新鐫五十人一首狂歌文庫　天明新鐫百人一首古今狂歌袋　狂歌百人一首（蔦の屋板）　狂歌百人一首（司丸屋板）
狂歌畫像作者部類　狂歌五十人一首　職人盡狂歌合　自讃狂歌集
飲食狂歌合　狂歌堀川太郎百首　狂歌堀川次郎百首　狂歌二十日鼠子
しみのすみか物語　梅がえ物語　北里十二時　堀川初度狂歌集
堀川後度狂歌集　狂歌道中記　新居狂歌集　新曲選狂歌集
狂歌笛竹集　草のはら　狂歌花鳥風月集　狂歌長嘯集
新古一會狂歌合　新曲選狂歌集後編　狂歌評判記　狂歌阿淡百人一首

六樹園の戲作には、黄表紙に「豐前豐後兩國の名取」等、讀本に、「近江縣物語」、「飛驒匠物語」等がある。

六樹園の狂文は縱横自在にして品致も亦賤しくない。蓋し彼が學殖の然らしめる所であらう。

解題　終

おくの細道

松尾芭蕉

おくの細道

松尾芭蕉

月日は百代の過客にして、行きかふ年も又旅人なり。船の上に生涯をうかべ、馬の口捕へて老いをむかふるものは、日々旅にして旅をすみかとす。古人も多く旅に死せるあり、予もいづれの年よりか片雲の風にさそはれて、漂泊の思ひやまず、海濱にさすらへ、去年の秋、江上の破屋に蜘の古巣を拂ひて、やゝ年も暮れ、春立てる霞の空に白川の關こえんと、そゞろ神のものにつきて心をくるはせ、道祖神のまねきにあひて、取る物手につかず、股引の破れをつゞり、笠の緒付けかへて、三里に灸すゆるより、松島の月先づ心にかゝりて、住めるかたは人に讓り、杉風が別墅にうつるに、

草 の 戸 も 住 み か は る 代 ぞ 雛 の 家

面八句を庵の柱に懸け置き、彌生も末の七日、あけぼのの空朧々として、月は有明にて光をさまれるものから、不二の峯かすかに見えて、上野谷中の花の梢、又いつかはと心細し。むつまじきかぎりは宵よりつどひて、船に乗りて送る。千住と云ふ所にて船をあがれば、前途三千里の思ひ胸にふさがり

りて、幻のちまたに離別の涙をそゝぐ。

行 く 春 や 鳥 啼 き 魚 の 目 は 泪

これを矢立の初めとして、行く道なほ進まず。人々は途中に立ち並びて、後かげの見ゆるまではと見送るなるべし。

今年元祿二とせにや、奥羽長途の行脚、只かりそめに思ひ立ちて、呉天に白髪のうらみを重ぬといへども、耳にふれて未だ目に見ぬさかひ、若し生きて歸らばと、定めなき頼みの末をかけ、其の日漸く草加といふ宿にたどり着きにけり。痩骨の肩にかゝれる物先づくるしむ。只身すがらにと出で立ち侍るを、紙子一衣は夜の防ぎ、浴かた雨具墨筆のたぐひ、あるはさりがたき餞などしたるは、さすがに打捨てがたくて、路次の煩ひとなれるこそわりなけれ。

室の八島に詣づ。同行曾良が曰く、此の神は木の花さくや姫の神と申して、富士一體なり。無戸室に入りて燒き給ふ誓ひの御中に、火々出見尊生まれ給ひしより、室の八島と申す。又煙を詠み習はし侍るもこの謂れなり。はたこのしろといふ魚を禁ず。緣起の旨世に傳ふ事も侍りし。

三十日、日光山の麓に泊る。あるじの云ひけるやう、我が名を佛五左衛門と云ふ。萬正直を旨とする故に人かくは申し侍るまゝ、一夜の草の枕も打解けて休み給へと云ふ。いかなる佛の濁世塵土に示

現して、かかる桑門の乞食順禮如きの人をたすけ給ふにやと、あるじのなすことに心をとゞめて見るに、唯無智無分別にして正直偏固の者なり。剛毅木訥の仁に近きたぐひ、氣稟の清質尤も尊ぶべし。

卯月朔日、御山に詣拜す。往昔此の御山を二荒山と書きしを、空海大師開基のとき、日光と改め給ふ。千歳未來をさとり給ふにや。今此の御光一天にかゞやきて、恩澤八荒にあふれ、四民安堵のすみか穏かなり。猶憚り多くて筆を擱きぬ。

　あらたふと青葉若葉の日の光

黒髪山は霞かゝりて、雪いまだ白し。

　剃り捨てて黒髪山に衣かへ　曾良

曾良は河合氏にして惣五郎と云へり。芭蕉の下葉に軒をならべて、予が薪水の勞をたすく。このたび松しま象潟の眺め共にせんことを悦び、且は羇旅の難をいたはらんと、旅立つ曉髪を剃つて墨染にさまをかへ、惣五を改めて宗悟とす。仍つて黒髪山の句有り。衣更の二字力ありて聞ゆ。

二十餘丁山を登つて瀧有り。岩洞の頂きより飛流して百尺、千岩の碧潭に落ちたり。岩窟に身をひそめ入れて瀧の裏よりみれば、うらみの瀧と申し傳へ侍るなり。

　暫時は瀧にこもるや夏のはじめ

那須の黒羽と云ふ所に知る人あれば、これより野越に掛りて、直道をゆかんとす。遥かに一村を見かけて行くに、雨降り日暮る。農夫の家に一夜をかりて、明くれば又野中を行く。そこに野飼の馬あり。草刈るをのこに歎きよれば、野夫といへどもさすがに情しらぬには非ず。いかゞすべきや。されども此の野は縦横にわかれて、うゐ／＼しき旅人の道ふみたがへん、あやしう侍れば、此の馬のとゞまるところにて馬を返し給へと、かし侍りぬ。ちひさきもののふたり馬の跡したひて走る。独りは小姫にて名をかさねと云ふ。聞きなれぬ名のやさしかりければ、

かさねとは八重撫子の名なるべし　曾良

頓て人里に至れば、あたひを鞍壺に結び付けて馬をかへしぬ。黒羽の館代浄坊寺何がしの方に音信る。思ひかけぬあるじの悦び、日夜語りつゞけて、其の弟桃翠などいふが、朝夕勤めとぶらひ、自らの家にも伴ひて、親属のかたにも招かれ、日をふるまゝに、一日郊外に逍遥して、犬追物の跡を一見し、那須の篠原をわけて、玉藻の前の古墳をとふ。それより八幡宮に詣で、与市、扇の的を射し時、別しては我が国氏神正八幡とちかひしも、此の神社にて侍ると聞けば、感応殊にしきりに覚えらる。暮るれば桃翠宅に帰る。

修験光明寺と云ふ有り、そこにまねかれて行者堂を拝す。

夏山に足駄を拝む首途かな

當國雲岸寺のおくに、佛頂和尚山居の跡あり。

竪横の五尺にたらぬ草の庵むすぶもくやし雨なかりせば

と、松の炭して岩に書き付け侍りといつぞや聞え給ふ。其の跡見んと、雲岸寺に杖を曳けば、人々すゝんで共にいざなひ、若き人多く道のほど打ちさわぎて、覺えず彼の麓に至る。山は奥あるけしきにて、谷道遙かに、松杉黒く、苔したゝりて、卯月の天今なほ寒し。十景盡くる所、橋をわたつて山門に入る。さてかの跡はいづくの程にやと、後の山によぢのぼれば、石上の小庵、岩窟にむすびかけたり。妙禪師の死關、法雲法師の石室をみるがごとし、

木啄も庵はやぶらず夏木立

と、とりあへぬ一句を柱に殘し侍りし。これより殺生石に行く。館代より馬にておくらる。此の口付のをのこ、短冊得させよとこふ。やさしき事を望み侍るものかなと、

野を横に馬ひきむけよ郭公

殺生石は温泉のいづる山かげにあり。石の毒氣いまだほろびず、蜂蝶のたぐひ、眞砂の色の見えぬほどかさなり死す。又清水ながるゝの柳は、蘆野の里にありて、田の畔に殘る。此の所の郡守戸部某

の、此の柳見せばやなど折々にのたまひ聞え給ふを、いづくの程にやと思ひしを、今日此の柳のかげにこそ立ちより侍りつれ。

　田一枚植ゑて立ち去る柳かな

心許なき日かず重なるまゝに、白川の關にかゝりて、旅心定まりぬ。いかで都へと、便り求めしもことわりなり。中にも此の關は三關の一にして、風騷の人、心をとゞむ。秋風を耳に殘し、紅葉を俤にして、青葉の梢猶あはれなり。卯の花の白妙に、茨の花の咲きそひて、雪にもこゆる心地ぞする。古人冠を正し、衣裳を改めし事など、淸輔の筆にもとゞめおかれしとぞ。

　卯の花をかざしに關の晴着かな　　曾良

とかくして越え行くまゝに、阿武隈川を渡る。左に會津根高く、右に岩城相馬三春の庄、常陸下野の地をさかひて、山つらなる。かげ沼と云ふ所を行くに、今日は空曇りて物影うつらず。須賀川の驛に等躬といふものを尋ねて、四五日とゞめらる。先づ白川の關いかにこえつるやと問ふ。長途のくるしみ身心つかれ、且は風景に魂うばはれ、懷舊に腸を斷つて、はかばかしう思ひめぐらさず。

　風流のはじめやおくの田植うた

無下にこえんもさすがにと語れば、脇第三とつゞけて三卷となしぬ。

此の宿の傍に大きなる栗の木陰をたのみて、世をいとふ僧有り。橡拾ふ深山もかくやと閑に覺えられて、ものに書き付け侍る。其の詞、

栗といふ文字は、西の木と書きて、西方淨土に便りありと、行基菩薩の一生杖にも柱にも此の木を用ゐ給ふとかや。

世の人の見付けぬ花や軒の栗

等窮が宅を出でて五里許り、檜皮の宿を離れて、あさか山有り。路より近し。此のあたり沼多し。かつみ刈る頃もやゝ近うなれば、いづれの草を花かつみとは云ふぞと、人々に尋ね侍れども、更に知る人なし。沼を尋ね、人にとひ、かつみ〳〵と尋ねありきて、日は山の端にかゝりぬ。二本松より右にきれて、黒塚の岩屋一見し、福島に宿る。あくればしのぶ文字摺の石を尋ねて、忍ぶの里に行く。遙か山陰の小里に、石なかば土に埋もれてあり。里の童の來りて敎へける、昔は此の山の上に侍りしを、往來の人の麥草をあらして、此の石をこゝろみ侍るをにくみて、此の谷へつき落せば、石の面下ざまにふしたりと云ふ。さもあるべき事にや。

早苗とる手もとや昔しのぶ摺

月の輪のわたしを越えて、瀬の上と云ふ宿に出づ。佐藤の莊司が舊跡は、左の山際一里半ばかりに

有り。飯塚の里鯖野と聞きて、尋ね〳〵行くに、丸山といふに尋ねあたる。これ庄司が舊館なり。麓に大手の跡など、人の教ふるに任せて涙を落し、又かたはらの古寺に一家の石碑を殘す。中にも二人の嫁がしるし先づ哀れなり。女なれどもかひ〳〵しき名の世に聞えつる物かなと、袂をぬらしぬ。墮涙の石碑も遠きにあらず。寺に入りて茶を乞へば、爰に義經の太刀、辨慶が笈をとゞめて什物とす。

笈も太刀も五月にかざれ紙幟

五月朔日のことなり。其の夜飯塚にやどる。温泉あれば、湯に入りて宿をかるに、土座に筵を敷きて、あやしき貧家なり。燈もなければ、ゐろりの火かげに寢所をまうけて臥す。夜に入りて雷鳴り雨しきりに降りて、臥せる上より漏り、蚤蚊にせゝられて眠られず、持病さへ起りて、消え入る許りになん。短夜の空もやう〳〵明くれば、又旅立ちぬ。猶夜の餘波心すゝまず、馬かりて桑折の驛に出づる。遙かなる行末をかゝへて、斯かる病覺束なしと雖も、羇旅邊土の行脚、捨身無常の觀念、道路に死なんこれ天の命なりと、氣力聊かとり直し、路縱横に踏んで、伊達の大木戸をこす。鐙摺白石の城を過ぎ、笠島の郡に入れば、藤中將實方の塚はいづくの程ならんと、人にとへば、これより遙か右に見ゆる山際の里を、みのわ笠島と云ふ、道祖神の社、かたみの薄今にありと教ふ。此の頃の五月雨に、道いとあしく、身つかれ侍れば、よそながら眺めやりて過ぐるに、蓑輪笠島も五月雨の折にふれ

たりと、

　笠島はいづこ五月のぬかり道

岩沼に宿る。

武隈の松にこそ目覚むる心地はすれ。根は土際より二木にわかれて、昔の姿うしなはずと知らる。先づ能因法師思ひ出づ。往昔むつの守にて下りし人、此の木を伐りて名取川の橋杭にせられたる事などあればにや、松は此のたび跡もなしとは詠みたり。代々あるは伐り、あるひは植ゑ継ぎなどせしと聞くに、今将千歳のかたちとゝのほひて、めでたき松のけしきになん侍りし。

　武隈の松見せ申せ遅ざくら

挙白と、云ふものの餞別したりければ、

　桜より松は二木を三月越し

名取川を渡りて仙台に入る。あやめ葺く日なり。旅宿をもとめて四五日逗留す。爰に画工加右衛門と云ふものあり。聊か心ある者と聞きて、知る人になる。この者年頃さだかならぬ名どころを考へ置き侍ればとて、一日案内す。宮城野の萩茂りあひて、秋の気色思ひやらるゝ。玉田よこ野つゝじが岡はあせび咲くころなり。日影ももらぬ松の林に入りて、爰を木の下と云ふとぞ。昔もかく露ふかければ

ばこそ、みさぶらひみかさとはよみたれ。薬師堂天神の御社など拜みて、其の日はくれぬ。猶松島鹽釜の所々畫に書きて送る。且紺の染緒つけたる草鞋二足餞す。さればこそ風流のしれもの、爰に至りて其の實を顯はす。

あやめ草足に結ばん草鞋の緒

かの畫圖にまかせてたどり行けば、おくの細道の山際に十編の菅あり。今も年々十編の菅菰を調へて國守に獻ずと云へり。

壺碑　市川村多賀城に有り

つぼの石ぶみは高さ六尺餘、横三尺許り歟。苔を穿ちて文字幽なり。四維國界之數里をしるす。「此城神龜元年按察使鎭守府將軍大野朝臣東人之所置也。天平寶字六年參議東海東山節度使同將軍惠美朝臣朝獦修造也十二月朔日。」と有り、聖武天皇の御時に當れり。むかしよりよみ置ける歌枕多く語り傳ふといへども、山崩れ川落ちて道改まり、石は埋もれて土にかくれ、木は老いて若木にかはれば、時移り代變じて、其の跡たしかならぬ事のみを、こゝに至つて疑ひなき千歳の記念、今眼前に古人の心を閲す。行脚の一德存命の悦び、羇旅の勞れをわすれて、泪も落つるばかりなり。

それより野田の玉川、沖の石を尋ぬ。末の松山は寺を造りて、末松山といふ。松のあひ〳〵皆墓はらにて、はねをかはし枝をつらぬる契りの末も、終りはかくの如きと悲しさも増りて、鹽がまの浦に入相のかねを聞く。五月雨の空聊かはれて、夕月夜かすかに、籬が島もほど近し。蜑の小舟こぎつれて、魚わかつ聲々に、つなでかなしもとよみけん心も知られて、いとど哀れなり。其の夜目盲法師の琵琶をならして、奧淨瑠璃と云ふものをかたる。平家にもあらず、舞にもあらず、ひなびたる調子うち上げて、枕近うかしがましけれど、さすがに邊土の遺風忘れざるものから、殊勝に覺えらる。早朝鹽竈の明神に詣づ。國守再興せられて、宮柱ふとしく、彩椽きらびやかに、石の階九仞に重なり、朝日あけの玉がきを耀かす。かかる道の果て、塵土の境まで、神靈あらたにましますこそ我が國の風俗なれと、いと貴けれ。神前に古き寶燈有り、かねの戸びらの面に、文治三年和泉三郎寄進と有り。五百年來の俤、今目の前にうかびて、そぞろに珍らし。渠は勇義忠孝の士なり、佳命今に至りてしたはずといふ事なし。誠に人能く道を勤め義を守るべし、名もまたこれにしたがふと云へり。日既に午にちかし、船をかりて松島にわたる。其の間二里餘、雄島の磯につく。

抑も事ふりにたれど、松島は扶桑一の好風にして、凡そ洞庭西湖を恥ぢず、東南より海を入れて、江の中三里浙江の潮をたゝふ。島々の數をつくして、欹つものは天を指し、ふすものは波に匍匐ふ。

あるは二重にかさなり、三重に疊みて、左にわかれ、右につらなる。負へるあり抱けるあり、兒孫を愛するがごとし。松の綠こまやかに、枝葉汐風に吹きたわめて、屈曲おのづから矯めたるが如し。其の氣色窅然として美人の顔を粧ふ。ちはやぶる神の昔、大山祇のなせるわざにや。造化の天工、いづれの人か筆をふるひ詞を盡さん。

雄島が磯は地つゞきて、海に出でたる島なり。雲居禪師の別室の跡、坐禪石など有り。將、松の木陰に世をいとふ人も稀々見え侍りて、落穂松笠など打ちけぶりたる草の庵閑かに住みなし、いかなる人とは知られずながら、まづなつかしく、たち寄るほどに、月海にうつりて、晝のながめ又あらたむ。江上に歸りて宿を求むれば、窓をひらき二階を作りて、風雲の中に旅寢するこそ、あやしきまで妙なる心地はせらるれ。

松島や鶴に身をかれほとゝぎす　　曾良

予は口をとぢて眠らんとしていねられず。舊庵をわかるゝ時、素堂松島の詩あり。原安適松がうらしまの和歌を贈らる。袋を解いてこよひの友とす。且杉風濁子が發句あり。

十一日、瑞巖寺に詣づ。當寺三十二世の昔、眞壁の平四郎出家して入唐、歸朝の後開山す。其の後に、雲居禪師の徳化に依つて、七堂甍改まりて金壁莊嚴光を輝かし、佛土成就の大伽藍とはなれりけ

る。彼の見佛聖の寺はいづくにやとしたはる。

十二日、平和泉と心ざし、あねはの松、緒だえの橋など聞き傳へて、人跡稀に、雉兎芻蕘の往きかふ道、そこともわかず、終に道ふみたがへて石の巻といふ湊に出づ。こがね花咲くとよみて奉りたる金花山、海上に見わたし、數百の廻船入江につどひ、人家地をあらそひて、竈の煙立ちつゞけたり。思ひかけず斯かる所にも來れるかなと、宿からんとすれど、更に宿かす人なし。漸くまどしき小家に一夜をあかして、明くれば又しらぬ道まよひ行く。袖のわたり、尾ぶちの牧、まのの萱原などよそめに見て、遙かなる堤を行く。心細き長沼にそうて、戸伊摩といふところに一宿して、平泉に至る。其の間二十餘里程とおぼゆ。

三代の榮耀一睡の中にして、大門の跡は一里こなたに有り。秀衡が跡は田野に成りて、金鷄山のみ形を殘す。先づ高館にのぼれば、北上川南部より流るゝ大河なり。衣川は和泉が城をめぐりて、高館の下にて大河に落ち入る。康衡等が舊跡は衣が關を隔てて南部口をさし堅め、夷をふせぐと見えたり。さても義臣すぐつて此の城にこもり、功名一時の叢となる。國破れて山河あり、城春にして草青みたりと、笠打敷きて時の移るまで泪を落し侍りぬ。

夏 草 や つ は も の ど も が 夢 の 跡

卯の花に兼房見ゆる白毛かな　曾良

かねて耳驚かしたる二堂開帳す。經堂は三將の像を殘し、光堂は三代の棺を納め、三尊の佛を安置す。七寶散りうせて珠の扉風にやぶれ、金の柱霜雪に朽ちて、既に頽廢空虚の叢と成るべきを、四面新たに圍みて、甍を覆ひて風雨を凌ぎ、暫時千歳の記念とはなれり。

五月雨のふり殘してや光堂

南部道遙かにみやりて、岩手の里に泊る。小黒崎みづの小島を過ぎて、なるごの湯より尿前の關にかゝりて、出羽の國に越えんとす。此の道旅人稀なる所なれば、關守にあやしめられて、漸うとして關をこす。大山を登つて日既に暮れければ、封人の家を見かけて舍りをもとむ。三日風雨あれて、よしなき山中に逗留す。

蚤虱馬の尿する枕もと

あるじの云ふ、これより出羽の國の大山を隔てて、道さだかならざれば、道しるべの人を頼みて越ゆべき山を申す。さらばと云ひて、人を頼み侍れば、究竟の若者、反脇指をよこたへ、樫の杖を携へて、我々が先に立ちて行く。けふこそ必ず危き目にもあふべき日なれと、辛き思ひをなして後について行く。あるじの云ふに違はず、高山森々として一鳥聲きかず、木の下闇茂りあひて、夜行くがごと

し、雲端につちふる心地して、篠の中踏み分け／＼、水をわたり、岩に蹶いて、肌につめたき汗を流して、最上の莊に出づ。かの案内せしをのこの云ふやう、此の道必ず不用の事有り、恙なうおくりまゐらせて仕合したりとよろこびてわかれぬ。後に聞きてさへ、胸とゞろくのみなり。

尾花澤にて清風と云ふ者を尋ぬ　かれは富める者なれども、志いやしからず、都にも折々かよひて流石に旅の情をも知りたれば、日比とゞめて、長途のいたはり、さま／＼にもてなし侍る。

涼しさを我が宿にしてねまるなり

這ひ出でよかびやが下の蟾の聲

まゆはきを俤にして紅粉の花

蠶飼する人は古代のすがたかな　曾良

山形領に立石寺と云ふ山寺あり、慈覺大師の開基にて、殊に清閑の地なり、一見すべきよし、人々のすゝむるによりて、尾花澤よりとつてかへし、其の間七里ばかりなり。日いまだ暮れず、麓の坊に宿かり置きて、山上の堂にのぼる。岩に巖を重ねて山とし、松柏年舊り土石老いて、苔滑かに、岩上の院々扉を閉ぢて、物音きこえず、岸をめぐり、岩を這うて、佛閣を拜し、佳景寂寞として、心すみ行くのみおぼゆ。

閑かさや岩にしみ入る蝉の聲

最上川のらんと、大石田と云ふ所に日和を待つ。爰に古き誹諧の種こぼれて、忘れぬ花の昔をしたひ、蘆角一聲の心をやはらげ、此の道にさぐり足して、新古ふた道にふみ迷ふと雖も、道しるべする人しなければと、わりなき一巻残しぬ。このたびの風流爰に至れり。

最上川はみちのくより出でて、山形を水上とす。ごてん、はやぶさなど云ふおそろしき難所あり。板敷山の北を流れて、果ては酒田の海に入る。左右山覆ひ、茂みの中に船を下す。是に稲つみたるをや、いな船とはいふならし。白絲の瀧は青葉の隙々に落ちて、仙人堂岸に臨みて立つ。水みなぎつて舟あやふし。

五月雨をあつめて早し最上川

六月三日、羽黒山に登る。圖司左吉と云ふ者を尋ねて、別當代會覺阿闍梨に謁す。南谷の別院に舎りして、憐愍の情こまやかにあるじせらる。

四日、本坊において誹諧興行。

有りがたや雪をかをらす南谷

五日、權現に詣づ。當山開闢能除大師はいづれの代の人と云ふ事をしらず。延喜式に羽州里山の神

社と有り。書寫黒の字を里山になせるにや。羽州黒山を中略して羽黒山と云ふにや。出羽といへるも鳥の毛羽を此の國の貢に獻ると風土記にはべるとやらん。月山、湯殿を合して三山とす。當寺武江東叡に屬して、天台止觀の月明らかに、圓頓融通の法の燈かゝげそひて、僧坊棟をならべ修驗行法を勵まし、靈山靈地の驗效人貴び且恐る。繁榮長へにして、めでたき御山と謂ひつべし。

八日、月山にのぼる。木綿しめ身に引きかけ、寶冠に頭を包み、強力と云ふ者に導かれて、雲霧山氣の中に氷雪を踏みて登る事八里、更に日月行道の雲關に入るかとあやしまれ、息たえ身こゞえて、頂上に臻れば、日沒して月顯はる。笹を鋪き篠を枕として、臥して明くるを待つ。日出でて雲消ゆれば湯殿に下る。谷の傍に鍛冶小屋と云ふ有り。此の國の鍛冶、靈水を選んで、爰に潔齋して劔を打ち終り、月山と銘を切つて世に賞せらる。彼の龍泉に劍を淬ぐとかや、干將莫耶の昔をしたふ。道に堪能の執あさからぬ事知られたり。岩に腰をかけて、しばしやすらふほどに、三尺ばかりなる櫻のつぼみ半ばひらけるあり。ふり積む雪の下に埋れて、春を忘れぬ遲ざくらの花の心わりなし。炎天の梅花爰にかをるが如し。行尊僧正の歌の哀れも、爰に思ひ出でて猶まさりて覺ゆ。すべて此の山中の微細、行者の法式として他言する事を禁ず。仍つて筆をとゞめて記さず。坊に歸れば、阿闍梨の需めに依つて、三山順禮の句々短冊に書す。

涼しさやほの三日月の羽黒山

雲の峯いくつ崩れて月の山

語られぬ湯殿にぬらす袂かな

湯殿山錢ふむ道のなみだかな　曾良

羽黒山を立つて、鶴ヶ岡の城下長山氏重行と云ふものゝふの家にむかへられて、誹諧一卷有り。左吉も共に送りぬ。川舟に乘つて酒田の湊に下る。淵庵不玉と云ふ醫師の許を宿とす。

あつみ山や吹浦かけて夕すゞみ

暑き日を海にいれたり最上川

江山水陸の風光數をつくして、今象潟に方寸を責む。酒田の湊より東北の方、山を越え、礒を傳ひ、いさごをふみて、其の際十里、日影やゝかたぶく比、汐風眞砂を吹き上げ、雨朦朧として鳥海の山かくる。闇中に莫作して雨も又奇なりとせば、雨後の晴色又頼もしと、蜑の苫屋に膝をいれて雨の晴るるを待つ。其の朝天能く霽れて、朝日花やかにさし出づる程に、象潟に舟をうかぶ。先づ能因島に舟を寄せて三年幽居の跡をとぶらひ、むかうの岸に舟をあがれば、花の上こぐとよまれし櫻の老木、西行法師の記念をのこす。江上に御陵あり、神功皇后の御墓といふ。寺を干滿珠寺と云ふ。此處に行幸

ありし事未だ聞かず。いかなる事にや。此の寺の方丈に坐して簾を捲けば、風景一眼の中に盡きて、南に鳥海天をさゝへ、其の陰うつりて江にあり。西はむや／＼の關路をかぎり、東に堤を築いて、秋田に通ふ道、遙かに海北にかまへて、浪打入る所を汐こしと云ふ。江の縱横一里ばかり、俤松島にかよひて又異なり。松島は笑ふがごとく、象潟はうらむがごとし。寂しさに悲しみをくはへて、地勢魂をなやますに似たり。

象潟や雨に西施がねぶの花

汐越や鶴はぎぬれて海涼し

祭禮

象潟や料理何くふ神まつり　曾良

蜑の家や戸板を敷きて夕涼　美濃の國の商人　低耳

岩上に雎鳩の巣を見る

波こえぬ契りありてやみさごの巣　曾良

酒田の餘波日を重ねて、北陸道の雲に望み、遙々のおもひ胸をいたましめて、加賀の府まで百三十里と聞く。鼠の關をこゆれば、越後の地に歩行を改めて、越中の國一ぶりの關に到る。此の間九日、

暑濕の勞に神をなやまし、病おこりて事をしるさず。

　文月や六日も常の夜には似ず

　荒海や佐渡によこたふ天の川

今日は親しらず子しらず、犬もどり、駒返しなど云ふ北國一の難所を越えて、疲れ侍れば、枕引寄せて寐ねたるに、一間隔てての方に若き女の聲二人表りと許ゆ。年老いたるをのこの聲も交りて物語するをきけば、越後國新潟と云ふ所の遊女なりし。伊勢參宮するとて、此の關までをのこの送りて、あすは古郷へかへす文したゝめて、はかなき言傳などしやるなり。白波のよする汀に身をはふらかし、あまのこの世をあさましう下りて、定めなき契り日々の業因いかにつたなしと、物いふをきく〳〵寐入りて、あした旅だつに、我々にむかひて、行方しらぬ旅路のうさ、あまり覺束なう悲しく侍れば、見えがくれにも御跡をしたひ侍らん、衣の上の御情に、大慈のめぐみをたれて、結縁せさせ給へと、涙を落す。不便の事には侍れども、我々は所々にてとゞまる方おほし。只人の行くにまかせて行くべし。神明の加護かならず恙なかるべしと云ひ捨てて出でつゝ、哀れさしばらくやまざりけらし。

　一つ家に遊女もねたり萩と月

曾良にかたれば、書きとゞめ侍る。くろべ、四十八ヶ瀬とかや、數しらぬ川をわたりて、那古と云

ふ浦に出づ。擔籠の藤浪は春ならずとも、初秋の哀れとふべきものをと、人に尋ぬれば、是れより五里、礒傳ひしてむかうの山陰にいり、蜑の苫ぶき幽なれば、蘆の一夜の宿かすものあるまじと、いひおどされて、加賀の國に入る。

わせの香や分け入る右は有磯海

卯の花山、くりからが谷をこえて、金澤は七月中の五日なり。爰に大阪よりかよふ商人何處といふ者あり。それが旅宿を共にす。一笑と云ふものは、此の道にすける名のほの〴〵聞えて、世に知る人侍りしに、去年の冬早世したりとて、其の兄追善を催すに、

塚も動け我が泣く聲は秋の風

ある草庵にいざなはれて

秋涼し手毎にむけや瓜茄子

途中吟

あか〳〵と日は難面くもあきの風

小松と云ふ所にて

しほらしき名や小松ふく萩すゝき

此の所太田の神社に詣づ。實盛が兜、錦の切あり。往昔源氏に屬せし時、義朝朝臣より賜はらせ給ふとかや。げにも平士のものにあらず。目庇より吹き返しまで、菊から草のほりもの金をちりばめ、龍頭に鍬形打つたり。實盛討死の後、木曾義仲願狀にそへて此の社にこめられ侍るよし、樋口の次郎が使せし事ども、まのあたり縁起にみえたり。

むざんやな兜の下のきりぎりす

山中の溫泉に行くほど、白根が嶽跡に見なしてあゆむ。左の山際に觀音堂あり、花山法皇三十三所の順禮とげさせ給ひて後、大慈大悲の像を安置し給ひて、那谷と名付け給ふとや。那智谷組の二字をわかち侍りしとぞ。奇石さまざまに、古松植ゑならべて、萱ぶきの小堂岩の上に造りかけて、殊勝の土地なり。

石山の石より白し秋の風

溫泉に浴す。其の功有馬につぐと云ふ。

山中や菊はたをらぬ湯の匂ひ

あるじとするものは久米之助とていまだ小童なり。かれが父誹諧を好み、洛の貞室若輩のむかし、爰に來りし比、風雅に辱しめられて、洛に歸りて貞德の門人となつて世に知らる。功名の後、此の一村

判詞の料を請けずと云ふ。今更むかし語りとはなりぬ。
曾良は腹を病みて、伊勢の國長島と云ふ所にゆかりあれば、先立つて行くに、

ゆき〳〵てたふれ伏すとも萩の原　　曾良

と書き置きたり。行くものの悲しみ、残るもののうらみ、雙鳧のわかれて雲に迷ふが如し。予も又、

今日よりや書付消さん笠の露

大聖寺の城外全昌寺といふ寺にとまる。猶加賀の地なり。曾良も前の夜此の寺にとまりて、

終宵秋風聞くやうらの山

と残す。一夜の隔たり千里に同じ。吾も秋風を聞きて衆寮に臥せば、あけぼのの空近う讀經の聲すむまゝに、鐘板鳴つて食堂に入る。けふは越前の國へと、心早卒にして堂下に下るを、若き僧ども紙硯をかゝへ、階のもとまで追ひ來る。折ふし庭中の柳散れば、

庭掃いて出づるや寺に散る柳

とりあへぬさましして、草鞋ながら書き捨つ。
越前の境、吉崎の入江を舟に棹さして汐越の松を尋ぬ。

終宵嵐に波をはこばせて月をたれたる汐越の松　　西行

此の一首にて數景盡きたり、もし一辯を加ふるものは、無用の指を立つるが如し。

丸岡天龍寺の長老、ふるき因あれば尋ぬ。また金澤の北枝と云ふもの、かりそめに見送りて、此處までしたひ來る。所々の風景過さず思ひつゞけて、折節あはれなる作意など聞ゆ。今既に別れに臨みて、

物書いて扇引きさく餘波かな

五十丁山に入りて、永平寺を禮す。道元禪師の御寺なり。邦畿千里を避けて、かかる山陰に跡をのこし給ふも、貴きゆゑある事とかや。

福井は三里ばかりなれば、夕飯したゝめて出づるに、たそがれの路たど／＼し。爰に等栽といふ古き隱士有り。いづれの年にか江戸に來りて予を尋ぬ。遙か十年餘りなり。いかに老いさらぼひて有るにや、將死にけるにやと、人に尋ね侍れば、いまに存命して、そこ／＼と敎ふ。市中ひそかに引き入りて、あやしの小家に夕顔へちまのはひかゝりて、雞頭帚木に戸ぼそをかくす。さては此のうちにこそと、門を扣けば、侘し氣なる女の出でて、いづくよりわたり給ふ道心の御坊にや、あるじは此のあたりなにがしと云ふものの方に行きぬ、もし用あらば尋ね給へと云ふ。かれが妻なるべしと知らる。むかし物がたりにこそかかる風情は侍れと、頓て尋ね逢ひて、その家に二夜とまりて、名月はつるが

のみなとにとたび立つ。等栽も共におくらんと、裾をかしうかゝげて、路の枝折とうかれ立つ。漸く白根ヶ嶽かくれて、比那ヶ嵩あらはる。あさむつの橋をわたりて、玉江の蘆は穂に出でにけり。鶯の關を越えて、湯尾峠を越ゆれば、燧が城、歸山に初鴈を聞いて、十四日の夕暮つるがの津に宿をもとむ。その夜月殊に晴れたり。あすの夜もかくあるべきにやといへば、越路のならひ、猶明夜の陰晴はかりがたしと、あるじに酒すゝめられて、氣比の明神に夜參す。仲哀天皇の御廟なり。社頭神さびて、松の木の間に月のもり入りたる、おまへの白砂霜を敷けるがごとし。往昔遊行二世の上人、大願發起の事ありて、みづから草を刈り、土石を荷ひ、泥渟をかわかせて、參詣往來の煩ひなし。古例今にたえず、神前に眞砂を荷ひ給ふ。これを遊行の砂持と申し侍ると、亭主のかたりける

月清し遊行のもてる砂の上

十五日、亭主の詞にたがはず雨降る。

名月や北國日和定めなき

十六日、空霽れたれば、ますほの小貝拾はんと、種の濱に舟を走らす。海上七里あり。天屋何某と云ふもの、破籠小竹筒など、こまやかにしたゝめさせ、僕あまた舟にとりのせて、追風時のまに吹き着きぬ。濱はわづかなる海士の小家にて、侘しき法華寺あり。爰に茶を飲み酒をあたゝめて、夕ぐれ

のさびしき感に堪へたり。

寂しさや須磨にかちたる濱の秋

浪の間や小貝にまじる萩の塵

其の日のあらまし、等栽に筆とらせて寺に殘す。露通も此のみなとまで出でむかひて、美濃の國へと伴ふ。駒に助けられて大垣の莊に入れば、曾良も伊勢より來り合ひ、越人も馬をとばせて如行が家に入り集まる。前川子、荊口父子、其の外親しき人々日夜とぶらひて、蘇生のものにあふが如く、且悦び且いたはる。旅のものうさも未だやまざるに、長月六日になれば、伊勢の遷宮をかまんと、又舟にのりて、

蛤のふたみにわかれ行く秋ぞ

おくの細道　終

風俗文選

五老井許六選

風俗文選序

月澤 律師 李由 述

維城の羽官子、五老井の許六、滑稽誹諧新古の文章を拾ひ集めて風俗文選と題す。むかしやまとの文を集めて、これを本朝文粋といへり。我おもふ、此の文粋は本朝の人の述作にして、文の體まつたく漢文なるべし。今許六が文選は、和國の文章にして、其の體おのづから漢文にかなへり。むかしよりやまと詞多しとも、皆々雙紙物語のたぐひのみにして、本朝の文章と稱すべき物は、今此の風俗文選の事なるべし。それ漢文は文字の數を定め韻をふみて、其の格まぎれ難かるべし。されど同じ文章をもて、文選と古文とに記する所、其の體相違あれば、漢文とても慥かならずと見えたり。まして和文には、文字の數さだまらず、韻字とてもなし。しかるを去來が鼠賦に、五音相通のかなをもて韻とす。是れ和文に韻をふめる一格なり。あながち韻を用ゐるにもよらず、其の事にしたがひ自由なるべし。向後體をわかつ事は、其の題の趣によつて、其の體をさだむるを、學者心得とすべし。 江東脩律師李由丁丑年於四梅廬序。

風俗文選序

落柿舎去来

世に誹諧の文あつて、其の集といふものいまだ聞かず。先師一たび思ひ立ち給ふ事侍れど、心にかなふ物稀なれば、空しくやみぬるも十とせ餘り五とせなるらん。今や門葉のたれかれ、風雅に腹ふくるゝまゝに、管城に槊を横へ、文場に臂をふるふものすくなからず。今此の文集に斧を入れて、始めに柴門辭あり、終りに頌讃の風流を盡す。或は書あり、或は論ありて、說賦のまことを述べ、文誄の哀れを殘す。自ら堪能の才ありて、許多の體をもらされず。これを千歳の後に施して、はいかい文章の手本とせば、彼の童子の師の句讀を教ふる類ならんや。此の文をしれる者は此の道をしる者なり。作者みづから五老先生と稱するものは、湖東森氏六子にして、虛實にあそべる人といふべし。しからば今の名望を感じて、此の文選を戀ひざらめかも。寶永元秋日序。

風俗文選序

東華坊　支考　序

もろこしに文選あるときは、吾が朝に文選なからんやと、ことしえらびて遊ぶものは、湖東の武子許羽官なり。凡そ文章は周孔の心を傳へ、莊孟の筆に鼓舞せられて、和漢に心を傳ふれども、姿を傳ふるものは又まれなり。人は其のすがたにつたふべく、その心はつたへがたしとぞおぼえぬる。文章に何の心かあらん。心は天地の心なり。姿は世々に變化して、其の變化をしれる人をこそ、姿をしれる人とはいふなれ。昔の人の下惠をまなべるも、道につたふべき心なければ、姿の變化をまなべる人とはいふべし。されば源氏物語は、始め終りありてたやすからず、人の見てあそぶ處も、巻々にまちまちなるべし。狭衣は歌にあそべりとぞ。うつほ、竹取、おちくぼの草子など、清少納言が枕雙紙は見る事にあそび、聽く事にあそびて、はじめ終りあらせんとせばいかでかは。榮華物語とかいへるものを、我いまだ見ねばよくもしらず。伊勢物語のこと葉はぶきたるをさへ、土佐日記はまた更なり。日記はおのれがおぼえ書なれば、人の見てえ知らぬ事をも、我は見てあそぶらんかし。記と紀とは、おなじ心ながら、旅には紀行といふ事もあるにや。世に平家物語といふものありて、ひとへにもの、

ふの草紙にはあらせじとて、祇園精舍の鐘の聲に、無爲の遊びを書き添へたるなり。平家物語とつけたる名も物に對したる名なるべし。鴨の何がしは、方丈の記に遊べる人なり。發心集といふ物は、さるものとも覺えぬにや。四季物語といふものありて、其の人の作にあらずとこそ。撰集抄のみいとたふとし。歌の心のきすくなるは、よして撰者の法師のあそび處なるべし。兼好法師のつれ〴〵草は、それには劣りても侍らんか。硯にむかひて物をさだめねば、世情の境目にあそぶ合點と見えたり。あるひは宗祇の終焉記も、あるひは長嘯の擧白集も、おのれ〴〵が心にあそびて、むかしの姿を傳へおといふことなし。天はこれをもて月にあそび、地はこれをもて花にあそぶ。龍吟すれば雲起り、虎嘯けば竹すゞし。梅に鶯、紅葉に鹿、いづれかかたちを傳へずしてあそばん。先師つねにいへりけり。漢には之乎者也の四字をもて、貴賤尊卑の詞を分ち、和には手爾遠波の四字をもて、苦し涼しの時宜をとゝのふ。文章はまして手爾遠波の事なりとぞ。されば一句の長短をしらず、二句の句讀をしらざれば、よむ者息のつぎはを忘れて、海雲(もづく)海鼠腸(このわた)とすゝり續けたらんは、はてしなき心やすらん。世はかくそしりてもあそび、又そしられてもあそぶ中に、我は此の文選の時をほめて、あそぶものなるべしとか。

寶永元年甲申臘月日

風俗文選自序

五老井許六撰

文は貫道の器なり、孔子も餘力あらば、これを學べといへり。吾が朝往昔のむかしより、大和詞の文筆、庫にみち車にみてり。されど世におこなはるゝ言葉、おほくは女官の筆にして、源氏狹衣のたぐひ、男女の中をつくし、實は歌よますべき道びきなるべし。共に歌連歌の文法にして、誹諧文章の格式一言もなし。先師芭蕉翁、始めて一格をたてゝ、氣韻生動をあらはせり。たとへ常言漢字を交へたりとも、心は吉野たつ田の花紅葉をうらやみ、和歌の浦に志をよせて、難波津の細きよしあしをたどりしるべし。縱横自在を盡したりとも、ひとつの趣意をたつる所なくては、童蒙のもて遊び物づくしに落ちて、果には松坂の仕舞ひとなせる、甚だ無下の事なるべし。今こゝにあらはす文章、體は二十、文は一百十有餘篇、皆々誹諧文章なり。これをよみこれを學びて、此の門に入るべしとて、あま五老井許子六撰み集めて、寶永二乙酉歲、自序して風俗文選とは云爾。

作者列傳

芭蕉翁者伊賀之人也　武名松尾甚七郎　奉仕藤堂家。壯年時辭官遊武州江戶。風雅爲業　號桃青　乃誹諧正風體中興開祖也　嘗世爲遵功修武小石川之水道四年成速捨功而入深川芭蕉庵出家　年三十七　天下稱芭蕉翁。遊東西南北說風雅助諸門人。國中悉歸芭蕉風。一過難波津伏病終卒　年五十一　葬江州義仲寺

浪化者。東門主一如大僧正之連枝也　號應眞院。居于越中井波瑞泉寺。一日遊洛會芭蕉翁效風雅。後著有磯海前後集。病斃　年三十一

僧丈艸者。尾州犬山產也　壯年辭武出家　隱松本山上　蕉門之騷客也　能詩　後三年閉關而終不出　病死　常讀法華經。年四十四。

僧千那者。江州堅田產也。居于本福寺。釋名妙式上人。嘗任律師。號蒲萄坊。中華蕉門之高弟也。

僧李由字買年。近州之產也　居于光明遍照寺。釋名亮隅上人　嘗任律師　入蕉門而學風雅年久。故著韻塞。篇突。宇陀法師之書。病死　年四十五

支考字盤子。號東花西花。亦號獅子庵。濃州之産也。入蕉門業風雅。一方門人也。先師滅後。遊東西南北。説風雅而助諸生。故往々慕支考風者多矣。中遁居于勢州山田。後歸故國。作誹書數篇。辨誹諧之論。

晋其角者。武州江戸産也。生醫家。不學醫術。終業誹諧。寶井氏。號狂而堂。蕉門之一人而後起己一風。著誹書數篇。

嵐雪者。服部氏。不知何許人。業風雅。遊武江戸。蕉門之高弟也。後別妻出家。

野坡者。越前州人。生商家。居于武江戸。蕉門之學者也。一遊西海。不定其所居。隨師得炭俵之撰號。

北枝者。加州金澤之人也。業磨工。見蕉翁好風雅。北方之逸士也。

凉菟者。勢州山田神職之人也。業風雅。初號團友。

露川者。伊賀之人也。生商家居于尾名護屋也。好蕉門之雅風。

雲鈴者。奥州南部之人。産武。壯年入道自號摩詰婁且人。風雅師東花坊。一渡佐渡島著入日記。

告仲者。洛陽人也。居于六條。業佛畫。好風雅。師李由。自號柳後園。著佛長紙二卷。

路通者。不知何許者。不詳其姓名。一見蕉翁聽風雅。其性不實輕薄而長遊師命。飄泊之中著誹諧之書。

凡兆者。加州之產也。業醫居于洛。學蕉門之風雅。一罪事不知其終處。

素堂者。山口氏也。居于武陽。避世務隱于深川。友芭蕉翁善。

嵐蘭者。不知何許人。松倉氏。業武奉仕板倉家。而奉諫速辭官。携母隱于武之淺艸。蕉門之老弟也。爲月遊于鎌倉病死。

荊口者。濃州大垣之武士也。宮崎氏。蕉門故老之士也。此節。千川。文鳥三士之父也。後致仕改名東子。

去來者。肥前之產也。後隨兄居于洛陽。向井氏也。中華蕉門之高弟也。號落柿舍。隨師撰猿蓑。後病死。年五十三。

萬子者。加州金澤之武士也。生駒氏。號此君菴。蕉門之英士也。

厚爲者。加州大聖寺之武士也。河地氏。蕉門之英士也。病死。

木導ハ者。江州龜城ノ之武士ナリ也。直江氏。自ラ號ス阿山人ト。蕉門ノ之英才ナリ也。師翁稱ス奇異ノ逸物ト。

汶村ハ者。江州龜城ノ之武士ナリ也。松井氏。字ハ師薑。號ス九華亭ト。蕉門ノ之達士ナリ也。嘗テ能クス書畫ヲ。

綸ハ師トス五老井ヲ。

毛紈ハ者。江陽彥城ノ之武士ナリ也。北山氏。號ス大雅堂ト。好ミ風雅ヲ愛ス書圖ヲ。師トス五老井ヲ。

程已ハ者。近州龜城ノ之武士ナリ也。朝倉氏。號ス白日堂ト。愛ス蕉門ノ之風雅ヲ。

朱廸ハ者。江陽彥城ノ之武士ナリ也。寺島氏。號ス甘露臺ト。年久シク好ミテ風雅ヲ而入ル蕉門ニ。病死ス。年四十二。

撰者許六ハ者。江州龜城ノ之武士也。名ハ百仲。字ハ羽官。森川氏。號ス五老井ト。別ニ號ス菊阿佛ト。一タビ見エテ蕉翁ニ。得タリ正風體ノ實ヲ。血脈道統ノ之門人ナリ也。常ニ友トシテ李由ニ撰ス誹書數篇ヲ。

以上二十八人

風俗文選　巻之一

五老井許六撰

○辭類

柴門ノ辭

芭蕉翁

送レ歸ルヲ許六ガ之故郷ニ一餞別之文ナリ也

去年の秋、かり初に面をあはせ、ことし五月のはじめ、深切に別れををしむ。其のわかれにのぞみて、ひと度草扉を敲いて、終日閑談をなす。其の器、繪を好み風雅を愛す。予こゝろみに問ふ事あり。繪は何の爲好むや。風雅の爲好むといへり。風雅は何の爲愛すや。畫の爲愛すといへり。其のまなぶこと二つにして、用をなす事一つなり。まことや君子は多能を恥づといへれば、品二つにして、用一つなる事感ずべきにや。畫はとつて予が師とし、風雅はをしへて予が弟子となす。されども師が畫は精神微に入り、筆端妙をふるふ、其の幽遠なる處、予が見る所にあらず。予が風雅は夏爐冬扇のごとし。衆にさかひて用ゐる所なし。たゞ釋阿、西行のことばのみ、かり初にいひちらされし、あだなるたはぶれごとも、哀れなる處おほし。後鳥羽上皇の書かせ給ひしものにも、これらは歌に實あり

て、しかも悲しびをそふると、の給ひ侍りしとかや。されば此の御こと葉を力とし、其のほそき一すぢをたどりうしなふことなかれ。猶古人の跡をもとめず、古人のもとめたる所をもとめよと、南山大師の筆の道にも見えたり。風雅も又これに同じといひて燈をかゝげて、柴門の外におくりてわかるゝのみ。

瓢辭　　許六

男鹿なく、此の山里と詠じける、嵯峨野の方に隠れたる人あり。まだつり兀の跡もきえかね、わり菱の系圖話に、甲州の劍も今は菜刀一丁の身帶にて、あまりさびしさに、垣に瓢箪を植ゑて、折ふしの筆次手にや、中にもしたゝか物に書き付け侍る。

兜にもならで果てたるふくべ哉。無名子とは見え侍れど、身は雲水の便りなき浪人ひがみとぞ覺えける。かの岡に草刈るをのこあつまり、此の兜のにくさに、わざと返しとはなくて、

かまきりに降參したるふくべ哉、とぞ笑ひける。主ききつけて、陋巷にあつて一瓢のたのしびは賢人の上、里の子はしるまじ。草刈の中より、其の賢人くらべならば、許由はかしがましとて捨てたりとのゝしる。あるじいよ／＼勝つに乘つて、かかる名物もしらず、汝等は田植の煎じ茶を入れ、種物の納め所と覺えたるこそ口をしけれ。花はむつかしき色もなくて、楊墨がこゝろざしに叶ひ、源氏の

卷の名となり、歌人の腸にまとひたる夕顔ぞかし。

抑夕がほの、玉樓金殿にさがりたる由緒をしらず、たゞ喰物とぼしき五條あたりに徘徊して、貧乏神の神木はこれなるべし。隱士が曰く、汝宇治の物語をしらずや。こたへて曰く、其の拾遺の瓢も咎なき鄰人が一命を絶てり。これ全く瓢の罪といはん。かかる目出度きひさごに何の罪かあらん、かれ佛緣深きゆゑ空也上人には携へられ、鉢たゝきの祖師とはなりける。かのさゞ波や、堅田の海士が海老すくひも佛緣の内かとぞいひける。隱士大きに打腹立ちて、汝がいひ分皆々理窟の論なり。曾て風雅をしらず。古人生前一瓢の樂しみは、身の後の金よりは勝したりといへり。草刈がいはく、其の集といつは上戸の情なり。瓢のかたちをいはん、腹便々と肥えふとりて、口のせまきは何ぞや。せまくて餅の入らざるは、下戸のなげきなりと大笑して、歌つて云く、滄浪の水、すめらばつけて泳ぐべし、濁らば鯰を押ふべしといひて、去つて共に物いはず。

示秋之坊辭　　支考

あら秋の坊や、紅葉の秋か、世の秋か、又たゞ秋の坊なるか。見ればいとにくさげに、見ねば又なつかし。好惡は人の心にありて、彼は一物もなきものなり。むかし湖南の幻住庵に、一夜の夢をむすびしが、其の夜も知らずよみしやすらん、にくみしやすらん。無常迅速の一句をあたへて先師も餞ま

でおくりは申されしか。今此の草庵に同じ心にすね合ひたる法師の、相住んで侍るが、物いはぬ日の終日も侍りて、かく住みけることそあやしくたふとけれ。我またこゝに來りてあそばゞ、何某がこすねといふ歌よみにやあらんと、そこの人々もわらひけるなり。秋の坊が云く、はいかいはさる事ならんか。曰く、さだむべからず。誹諧にくはしからんとせば、世情におちて、心の花にうつろひぬべし。花なきは又世の風流なし。世にはたゞするすみならんこそ、法師達におきてはさることなれ。たゞはいかいにはあそぶべし、俳諧にまどふべからず。しひてくはしからんとせば、東花坊が如き、世情のうき名とりてん。はいかいのくるしさ、誠にしかのみならんや。

瓜ふたつ二つにわる手や座頭　記

示僧古鏡辭　李由

こゝに僧あり、古鏡といふ。學業にわしりて、東湖の濱にあそぶ。産は濃州關ならば、など志津、孫六が鍛ひを得て紫電白虹赫々とし、三尺の光を振はざるや。天下誰あつてか敵するものあらん。さるはむかしの劍、今の菜刀とおぼえ、俊成卿の花の鏡もうち曇り、今は閑村の禰宜にうゝもれ、祭のはやしにもたゝかれず、終に鐘鉦の奉加道具にきはまり、きりふちまるくけふも又丸し。此の人かつて詩をよくす。多情有聲の畫を彩り、美言無絃の琴をあやつるといへども、猶風雅に足

なそばだて、敷島の道をさぐり、一とせ先師、關の旅寢の比まみえて、一棒をうけたりといへども、いまだ澀皮もむけず。今幸ひに予に參じて、又鏡を磨がんとす。風雅はもと明たる物なり。鏡の物の影をうつすが如し。汝元來磨くことをしらず。速かに去つて、水銀を求め來れ。

分別に花のかゞみも曇りけり

贈新道心辭　丈艸

世をのがれて道を求むるほどの人は、皆一かどの志を發して、まことしきつとめどもしあへれど、も年を重ねぬれば、又かれこれにひかるゝ緣おほく、事繁くなりて、更にはじめの人ともおもほえぬふるまひのみぞおほかる。古人も此の事をいましめて、出家は出家以後の出家を遂ぐべきよし、勸めはげましぬ。魯丸子は美濃の國蜂屋の山里にあそびて、いまださかんなる齡のいかなる緣にや、俄に墨の袂に染めかへて、塵のすみかをかけ出で、山寺にかきこもれるよし、傳へ聞き侍りて、今のこゝろざしの正しきに、猶後の出家をおこたらぬ、みさをのほどをねがひて、拙き辭を申しおくりぬ。

蚊屋を出て又障子あり夏の月

燒蚊辭　嵐蘭

蚊、蚊、帳中の蚊、汝を燒くに辭をもてす。汝此の辭を聞く時は、わが手に死すとも、みづから足

れりとせよ。夫れ澤雉は、樊中にやしなはれんことをねがはずと。彼は心をとる。これは食をとるとふて、人の肌にせまる。かれを愛せんや。これをにくまんや。きりぎりすは草にかくれて、草の爲にやかる。汝は帳に入つて、帳の爲にやかる。あはれなるかた、いづれとかせんや。

蟪蛄促織の火に入るは、戀故ときけばわりなしや。雨に濡れ露にそぼちて、誘はれし風だにもつらし。げに玉の緒の絶えなん事もしらず、いく僞りの夜や賴み來し。汝がやかるゝ事、何を情とせんし。義經の逆落しは、暫時さしおく。須山小宮山が夜討は、かくれて謀をなすといへども、天下の爲にして、名おのづからしたがふ。又汝といはんや。

虞舜は頑父をさけ、日本武尊は夷賊を遁れ給ふ。共に天にして汝といふべきにあらず。大盜あに樞戸を穿たんや。汝がふるまふを見るに、帳をたるゝ時は、其の鬭々の間をうかゞひ、垂れをはつて縱横の透間を尋ね、凡て小破の所を求め、人の後につきて入らんとはかる。嗚呼跖蹻が徒にはあらじ。すべて汝がおこなふ處、猛き事もなく、たのしむ事もなし。あはれなるかたにもあらず、やさしきかたにもあらず、たゞ憎むべきものの甚しきなり。

蚊、蚊、帳中の蚊、汝をやくに辭をもてす。汝此のことばをきく時は、我が手に死すともみづから

足れりとせよ。

子や啼かん其の子の母も蚊の喰はん

鉢扣ノ辭　　去來

師走も二十四日、冬もかぎりなれば、鉢たゝき聞かんと、例の翁のわたりましける。ことしは風はげしく、雨そほふりて、とみにも來らねば、いかに待ち侘び給ひなんといぶかりおもひて、

箒こせ眞似ても見せん鉢たゝき、と灰吹の竹うち鳴らしける、其の聲妙なり。火宅を出でよとほのめかしぬれど、猶あはれなるふしぶしの、似るべくもあらず。かれが修行は瓢簞をならし、鉦打ちたたき、二人三人つれてもうたひ、かけ合ひても諷ふ。其の唱歌は空也の作なり。かくて寒の中と、春秋の彼岸は、晝夜をわかず、都の外、七所の三昧をめぐりぬ。無緣の手向のたふとければ、かの湖春も、わが家はづかしとはいへり。常は杖のさきに茶筅をさし、大路小路に出でて、商ふ業かはりぬれど、さま同じければ、たゝかぬ時も鉢たゝきとぞ、申されける。あるひはさかやきをすり、或は四方にからげ、法師ならぬすがたの衣引きかけたれど、それも墨染にはあらず、多くは萌黄に鷹の羽打ちちがへたる紋をつけて著たれば、月雪に名は甚之丞と越人も興じ侍る。されば其角法師が去年の冬、ことごとく寢覺はやらじと吟じけるも、ひとり聞くにや堪へざりけん。打解けて寢たらんは、

かへり聞かんも口をしかるべし。明してこそとの給ひける。横雲の影よりからびたる聲して出で來れり。げに老いほれ足弱きものは、友どちにもおくれて、ひとり今にやなりぬらんと、翁の長嘯の墓もめぐるか鉢たゝき、と聞え給ひけるは、此のあかつきの事にてぞ侍りける。

四季ノ辭　許六

古今和歌文章謂二四季一者多矣。假令姿用二誹諧詞一爲レ之。其情和歌文章不レ可レ更。今此辭。全篇以二財寶之上一言二四時情一。是誹諧也。

行く年の晝夜は絶えずして、而ももとの晝夜にはあらず。子取婆々の足手を伸し、隱坊の鋤鍬休する時なし。人若かりし時の月日は、行く道ゆるやかに廻り、老いての後の光陰は、纔かに徑路を行くにきはまれり。五十年來のすぐるは、一杯の蕎麥切よりも早く、今又五十年生きん事は、田樂を翫すよりも易し。つらく\/一とせの變相を見るに、いづれかあはれならざるはなし。むかし紫氏淸氏の物語にも、華ちり、時鳥とかはるあはれをのべて、錢金のあはれをいはず。世渡るわざのはたらきは、たゞ此のものの手柄にして、神佛とても及び難し。まづ春の御賀の引出物より、八朔歳暮の奉り物、皆金銀の手柄にて、下萬民の末々まで、千代萬代を十かへりと、あふぎ奉るもことわりなり。金子の威德とて大判は裸で出仕し、白銀は付臺とて卑下したるこそ哀れなれ。錢は凡夫の手に落ちて、青ざ

し一貫文を頭とし、こき箸蠟燭一挺きり、二十五十の年玉まで、皆相應にこそめでたけれ。春寶引をせぬ人は、六月の蚊にくはるゝとて、しはき親にもゆるされて、錢つかはすもことわりなり。惠方參りの十二燈より、よろづの神々はとりそふられて、細き穴から世の中を、廣く惠みをたれ給ふ。梅は花の兄とかや、春の風やはらかに吹きて、里の中道滿行をつたふ頃、まづ江南の一二輪咲き初めて、白きは本色といひながら、南鐐のきむき風情をこのむならん。柳連翹の黄色に、菜たね山吹のあたゝかにさけるは、かの大判の裸をうらやむか。鶯の金衣鳥とは、直に似せ金の同類なるべし。きぬさらぎ二日の宮は、まだ鴨の羽音ながら、日影うらゝかに、南の障子押しやり、飛石よりかげろふ燃ゆる頃、かはらけの捻りもぐさ、誰にかすゆらんと、おぼつかなく見なさるゝ。風くらうたる惡太郎、小路がくれを尋ね出し、お乳めのとより廻し、あたり近きやいとの姿をかり招き、筋違風門すゑられて、涙のかゝる饅頭も、中々それもうるさくて、やう〳〵膝をすべり落ち、からき命いきたる心地して、灸鑵の芥子銀は、湯氣のたつまで握られて、何貫ふ物とは知らねども、たゞ嬉しとばかりおぼえける。明日は初午とかや、錢數寄の稻荷殿、御簾の中より、千貫の散錢にめでさせ給ふ御物好こそ有りがたけれ。されば佛とてもいやにはあらず、黄金の膚を願ひ、閻浮檀金を最上と覺え、極樂には金銀を鋪くとかや。いづれの佛神に詣でても、錢箱の響きにめで給はぬはなし。世の中の人の心の、花に

はうつりやすく、奢りは日々に長じて、田舎の金銀は、すべて都のあたゝまりなるべし。西東の遊び所、南北の參り事、すべて錢なし人は、一足も進み難し。櫻は四方山にさきこぼれても、吉野を花の名所とはいへり。飯貝六田の軒端より、幾重の雲をわけつらん。此の御山は彌勒の代に使ふべき金とかや。昔より世の人の、面白しと思ふもことわりなり。やう〳〵やよひも暮れて、ほとゝぎすの來るべき、卯月の空打曇りたる、片山里の垣根の雪は、何を卯の花とうらやみけん。錫も鉛もともに白銀の膚なるべし。牡丹の花の白きはさらなり。世に稀なる紅とて、長安の豪富はもてあそび、これに魂をうばはれける。その面白き所は、たゞ小判を植ゑて詠むるなるべし。雲雀は終日に囀り、水鷄はよもすがら敲く。池鯉鮒野の馬市なるべし。一歩はひとつふたつなどいひ習ひけるに、馬買ひ牛買ひの詞とて、五つぶ十粒とならべて數へ、伯樂が錢金を指あてに、集まりたる遊女野郎のたぐひ、賽ふり樗蒲一のより所にして、廣野の小屋のたゝずまひ、暫し里あるこゝちなるべし。はやし祭、喰ひ祭、打ちつゞき、桑子庭に起きかゝる頃、茶山いそがしく、からし種こぼるゝなど、麥跡の田植さへおくれて、例の五月雨ふり續き、舟にて市に入る時、矢矧堤はきれて道筋かはり、大井川とまりて、島田金谷に、陣を張る大名小名いくかしら、猶行末の川々、いかばかり出づらんと心細し。此の時例の一歩小判の働きこそ、目さむるわざなれ。梅雨晴れの六月空さえて、峯に雲おく頃、植田沸え返り、天

地は蟬の聲に鳴きひしがれ、一日の暑さもたへて、千とせをふる思ひなるに、十九土用とかや、京田舍熱病にたふれ臥し、家々わらはやみはやりて、水藥師の泉も其の功ぬるく、驗者のいのりもたえまある頃、紫雪とかや、世に良藥ありて、たち所に醒めたり。これこそ黄がねの鍋にて、黄金を煎じたる物なれ。やゝすゞ風栗の葉むけに立ちそめ、芋の葉ぶりつく頃は、金氣世におこなはれて、星合の空もうち過ぎ、物際近づく頃、革財布とびまはり、丁銀箱を出てうそぶく。奥の世の中打ちつゞき、巡禮のほりつどひ、金の直下る頃を、巡禮小判とはいふなり。家々むかひ火燒き捨て、魂祭るころ、旦那寺の小僧、棚經とてよみありく。物喰はせ酒のませ、やがてかけ合ひに、一粒包みてやれば、まだはづかしと思へるいとあはれなり。やう／＼生身玉、養父入事過ぎて、躍見る心にはなりぬ。彼の島原と申すは、二十四日をかぎりと定め、世界の金銀は、此の時この里にとらるゝなるべし。たゞ夜さの假のにほひに心とゞまりて、これよりえにしの中立となるたぐひもあれば、釣りがへといふはいかにぞや。こはき風、あらき日影をさへ、いとほしと思ふべき身を、いま／＼しく大神にふらば、昆布干鮭の思ひをすらん。あるは家を賣り、家督をうりて、くはず貧樂の道樂人、つまる所は誹諧師なり。いくとせか松島象潟の旅をうらやみ、此の秋しきりに姨捨更科の月見んと、三衣袋に身帶をたたみ込み、木曾の御坂を越えかねて、尾花のつてにまねかるゝ、かけ路の下の草枕、一夜二夜はもて

なされて、長逗留に飽されぬる、たゞ行くすきの袖の露、あらはにと見せてあはれなり。秋もはやくるる菊の名に立ちて、黄々白々錐に東籬といふは、いづれも金銀をうらやむたぐひか。時雨ふりそむる頃は、諸家の壺開きとて、名物の寶くらべ、風流に似て、金づくのはたらきなるべし。霜月朔日より野郎の顏見せ、給分は小判なり。むかしは吉原堺町と打ならび、中なるが葺屋町、天下の金をとろかして、まぶといふ詞も、此の時より出づらん。今朝からは師走とかや。乙子の朔日とて、節季候の來初むる日なり。客はうとき里の冬氣色、比良の高根、志賀の山、むかし長等の峯の雪、都の方はあられふる、音羽の瀧の音もなし。嵐木がらし、唐がらし、岡部の里の冬ごもり、何な師走の年くれて、金一段に責め寄せたり。かはせ小判、大名借、つゝみ置して相坂をこえ、高瀨の舟のおち帆、海路ははるかにとられ行く、鄙の旅寢をあはれなる。神は人の敬ふによつて威をますとかや。伊勢熊野のお初尾時、薬代は銀一枚、衣配りは小判なるべし。すでに煤と明け餅と暮れて、二十九日といふなり。けふは小の大晦日、一日の遊びとはいひながら、一年中の大油斷、今此の時に顯はれたり。三千世界の金銀は、けふ一日の亂世にて、入りみだれ〳〵、當る所さはる所、皆ことゞくしたがへて、壽永も已に暮れにけり。抑やまと歌は、神代より傳はりて、おもき國の諷びなれば、天下誰あつてこれをおさん。されど末の代に當つて、和歌の道に對するものは金なり。目に見えぬ鬼神をなかしめ、をと

こ女の中をやはらげ、たけきものゝふの心をなぐさむるものはこれなり。上古はいやしきものに言ひしなされたる、それもさることながら、今やうは此の物ににくまれたる人、此の界にては一日の逗留ならず、たゞあはれなるは金なるべし。

風俗文選 卷之二

○賦類

南都ノ賦　汶邨

あをによし奈良の都は、御さぶらひ三笠山の麓なり。元明天皇、和銅三年、藤原の宮より、此の京に移さる。大宮殿、大佛殿、佛神を崇めて王法を輔く。若宮のやしろ、月日の宮、竈殿、尾上の宮、鏡の神は、橘廣繼をまつり、浮雲の宮は鹿島立のはじめとす。氷室、率川、東大寺の八幡、二月堂に若狹井あり。三月堂、四月堂、釣鐘は、久我の入道の詩をとゞめ、大門の折釘は、源の賴朝の幕を張り、興福寺は七堂伽藍、はじめは山階寺といひ、中比に馬屋寺と號す。東金堂、中金堂、食堂、講堂、南圓堂には、補陀落の藤をうつして、順禮の札を納め、東圓堂には、いにしへの八重櫻を殘して、花垣の莊を領す。西金堂の樂をあらため、南大門に移して、薪の能をはじむ。七度半の使に、四座の猿樂をめす。雨天には紙を蹈んで試み、夜陰には薪を積んで焚く。保生が鉢の木に、名人の號をとり、大倉が芭蕉に、達人の名をあらはす。水屋の能、若宮の能、春日祭、御祭、素絹に大衆の顏を

つゝみて、大華表につらなり、錦を著て、松の下に弓矢の立合を舞ふ。頭屋の兒は牀木に腰をかけ、赤衣の仕丁は棒を横ふ。大名馬、大名槍、大太刀持、小太刀持、競馬、流鏑馬、長谷川黨は甲冑を帯し、射手の兒は、綾藺笠に弓矢を持つ。關白代は束帶して、藤の花を簪し、バチヨの兒は供つれて、腰に木履をつくる。ハイデンの神子、奈良の神子、細男、氷室付の樂人、トカミ、柏手は、仕丁の宿老、頭屋の御幣、田樂のビンヅロ、春は二月の雪をちらし、冬は霜月の花をさかす。手向山に、菅家の紅葉を詠じ、武藏野に、業平のわか草をよむ。雪消の澤、野守の池、御手洗川、佐保川、一位、二位、五位の橋、馬出、轟、故鄕の橋、鶯の瀧、靑龍の瀧、森は神垣、手分の杜、地獄谷、千手谷、劍塚、逢火塚、むら雨の絶間には、雲井坂に晴れを祈り、雉の羽音には、若草山に眠りを覺す。鹿は春日野に臥し、魚は猿澤の池に浮ぶ。衣懸柳、良辨杉、夜泣の地藏、文使の地藏、元興寺の鐘は、鬼の手の痕になだれ、十三鐘は、七つ六つの間につく。角寺、紀寺、般若寺には、大塔の宮を隱し、何がしの坊には、義經の鎧を留む。重衡は治承に燒き、松永は永祿に亡ぼす。俊乘坊の跡をふんで、龍松院は願を起す。輿懸石は伊勢の御の眺望をなし、柳綠花紅の碑は、紹巴翁のしるしとかや。華原磬、泗濱石、蘭奢待の伽羅、鴨の毛の屛風、柳生家の劍術、寶藏院の十文字、法花寺の作り犬、西大寺の豐心丹、法論味噌、力饅頭、なら漬、奈良酒、奈良こんがう、なら團扇、墨、曝、世に名高く、

打箔、中繼は此の京より起る。岩井が具足、文殊が打物、膠、緑青、鞣、鼓の皮、土風呂、灰焙烙、櫟、木練、なら茶はヤヂウと名づけ、晝食を硯水といふ。油煙取、五合桝宜、亡号坂の石、穢多村の木格子、赤き物は、頭屋の赤飯にたとへ、痩せたる人は、金堂の鉦打といふ。木辻の待宵、鳴川の別れ、情に萬金を盡し、思ひに一命を輕んず。日は七日、景は八景、町々に御門の名ありて、五條三條の巷を分つ。夏冬の朝起き、春秋のなりはひ、諸國に勝れ、諸人にこえたり。是れ皆舊都のあり難き遺風なるべし。

鎌倉ノ賦并序　　　許六

それ相模の國鎌倉は、郡の名にして、大織冠鎌子丸の時、靈夢によつて、鎌を埋むの地なり。この故に郡の名とす。染屋の時忠、總追捕使として、文武の御宇より、聖武の神龜年中まで、こゝに居す。それより上總介平直方、これに住して、八幡太郎義家朝臣より、源家代々居住の地なり。

賦して曰く、

三代の將軍、九代の執權、春の花さけば、秋の紅葉と變ず。柳のみやこ、よねこしの里、鶴が岡、雲井の嶺、下の若宮は、賴義朝臣の建立にして、上の若宮は、源二位の勸請なり。宮柱ふとしき立てゝ、民の戶煙賑へり。江の島は、三辨財天、三浦三崎に、杜戶の明神あり。鳥合が原は、相模入

道が闘犬の地、由井の濱は、下河邊の莊司が、笠懸を射初むる。小袋坂、稻村が崎、七里が濱。月かけが谷には、暦をつくり、扇が谷には、佐竹の紋の畦あり。腰越の寺には、辨慶が申狀の下書を殘し、兒が淵には、白菊が最期の歌をとゞむ。片瀬川には、宗尊親王の影をうつし、滑川には、青砥が錢を搜す。日蓮盛久が首の座、景清からいとが籠の跡、大塔の宮は、佞臣の讒に苦しみ、實朝の卿は公曉がために弑せらる。勝長壽院には、義朝の髑髏を葬り、法華堂には、賴朝の墳墓を築く。西行上人は、三夜に軍法を說き、定家卿は、七年和歌を談ず。化粧坂は、少將に名高く、神前の舞臺は、靜が舞をはやす。和田、畠山、千葉、北條、管領屋敷、梶原屋敷、佐々木屋敷には、馬ひやし場の水あり、正宗が舊跡には、刀を鍛ふ泉を見る。花が谷、蛇が谷、梅が谷、松葉が谷、建長寺、最明寺、圓覺寺、壽福寺、海藏寺は、石割が翁の開基、松が岡は、實朝の尼寺なり。籠釋迦、鐵地藏、深澤の大佛、長谷の觀音、金洗澤、星月夜の井、橋の下の小歌は、あめ牛あくらが威勢をそしり、小栗の說經は、橫山が強盜を語る。阿佛、長明が日記、重衡、俊基の紀行。春は雪の下に花を蹈んで惜しみ、夏は山の内に鵑を待ちて眠る。美奈能瀨川の月、御輿が嶽の雪、礎のあとには、感慨の情をまし、鳩の聲は、懷舊の腸を斷つ。鯉は兼好が筆にいやしめ、左蒔の榮螺は、實平が鐙相を殘す。苔、磨砂、海老、柴胡、すべて魚鼈の類、あまかうきいとまあらず、高瀨おしおくり、かぶは盡日なし。名

にしの地藏は、武相の境にして、六浦、金澤は、むさしの地なり。瀬戸の明神には、四橋一覽の眼をさき、能見堂には、八景總詠の詩を見る。照手の松、筆捨の松、金澤の文庫といふは、稱名寺にありていまはなし。文殊像、普賢像、こく梅、櫻梅、せいこ梅、青葉の紅葉。わづかに西湖、さくらの二樹をとゞむ。大きなるものは、賴朝のかうべにたとへ、廣き所は、かまくら海道に比す。今の戸塚はいにしへの材木町といひ、大磯の宿は、遊女町の沙汰なり。されど、東南に海近く、西北に山つらなれり。境地狹くしてすでに谷々の號あり。むかしの繁華繁榮を論ぜば、なんぞ今の泰平不易の江戸に及ばんや。

芳野ノ賦　　丈艸

よし野を御吉野といふは、皇居の地なればなり。山、川、里、嶺、嶽、高根、尾上、山の井、花園を詠ず。すべて二十一代の歌數三百七十餘首、猶家々の集、物語類、詩連誹諧のたぐひ、佐川田喜六があさな〳〵、貞室老人のこれは〳〵まで、かぞふに中々いとまなからん。さればもろこしの吉野とは、おほいまうちぎみの誹諧の歌より始まり、芳野川花の音するとは、慈鎭和尚の大きなる歌の手柄なり。川は巴が淵よりわかれて、紀の和歌山に落ち、山は大峯より續きて、那智高野につらなれり。藏王堂は、三ところに安置し、一郡は八鄕とかや、上市よりは飯貝にわたり、下市をこえては、六田

よりのぼる。妹背山をへだて、高取の城にむかふ。ちもとの櫻、日本が花、櫻田の谷、さくらが嶽、關屋の花、瀧ざくら、雲井櫻、布引の櫻、花矢倉、花籠の水。嵐山は、龜山の御宇に都にうつされ、袖振山は、天武帝より五節の舞を始む。清見原の天皇は、國栖人の舟にかくし、後醍醐帝は、吉水院を皇居に定む。義經も此の院にやどり、秀吉も此の寺を本陣とす。賀名生は要害の御所、如意輪寺には御廟を築く。廚子の戸びらに、南帝敕作の詩を、自らあそばし、過去帳の奥には、楠正行最期の歌をとゞむ。判官の鎧、辨慶が太刀。口の山門は、彦四が痛腹の所、つゝじが岡は、忠信が空腹の地なり。勝手の寶藏には、靜が舞の裝束を納め、子守の拜殿の歌仙は、定家卿の眞蹟、炎上ののち狩野永徳が筆なり。櫻木の宮、金情の明神、力乞の不動、廻り地藏、尊算の御影堂には、花供養の餅をまき、五臺寺、櫻本は、當山の先達なり。大瀧、宮瀧、西河の瀧、高瀧、蟬が瀧、清明が瀧、菜摘川、とく／＼の清水、外象の橋、神子の水、鷲の尾の鐘、龍返しの岩、龜石、巨石、大杉殿、人丸塚、若葉の鳥居、鎧懸の松、かげろふの小野、猿引坂、琴堂、琵琶山、青根が嶺、釋迦が嶽、七十二なびき、八十の窟、これ皆順逆、二つの通路なるべし。產は頭巾、ほらの貝、火打、塗物、紙、漆、葛、榧、煙草、釣瓶鮨、柹、木の子、籠細工、木鉢、材木、山折敷。櫻は吉野に名だかく、よしのは櫻にて名を擧げたり。麓より奧の院まで、左右の山々、前後の谷々、たゞ雲を攀ぢ上り、たゞ雲をくだるが如し。海道の吹き

だめには、落花の波を揚げ、木の間の嵐は、雲からぬ雪をふらす。色ははやく、匂は遲し。閑落山の淺深によれり。春此の山に上り、いづれか花の盛りならぬ所はあらじ。たれ嘆じの名目は、伊勢櫻、江戸ざくら、火櫻、樺ざくら、うば櫻は葉のなきをいひ、しほ竈上は濱に咲くといふことにや。熊坂といひ、楊貴妃といふ。世に色よき杜若は、八橋と名付け、よく垂るゝ萩を、宮城野と號す。さればむかしより、たゞさくらの名に吉野といへる花をきかず。たゞ吉野とも櫻とも、理窟をつけぬこそ高みなれ。

松島ノ賦

芭蕉翁

そもそも事ふりにたれど、松島は扶桑第一の好風にして、凡そ洞庭西湖を恥ぢず。東南より海を入れて、江の中三里、浙江の潮をたゝふ。七十二峯、數百の島々、欹つものは天を指さし、ふすものは波に匍匐ふ。あるは二重にかさなり、三重にたゝみて、左にわかれ、右につらなる。負へるあり、抱けるあり、兒孫愛するが如し。内ふたご、外ふたご、鏡島、かぶと島、牛島、蛇しま、内裏島、屏風じま。籬が島は、あまの小舟漕ぎつれて、肴わかつ聲なに、つなでかなしもとよみけん俤を殘し、末の松山は寺となりて、松のひまひま墓を築く。羽をかはし、枝をならぶる契りの末も、終には皆かくの如しと悲し。野田の玉川、沖の石、宮城野の萩、武隈の松、猶此の境に名をならべたり。しほが

まの浦には、鹽がまの明神あり。神前のかな燈籠、文治三年、泉三郎寄進と記す。雄島が磯は地つゞきにて、雲居禪師の別室の跡に、座禪石、瑞巖寺は、相模守時頼入道の建立、當時三十二世のむかし、眞壁平四郎出家して、入唐歸朝の後開山す。其の後伊達政宗再興して、七堂伽藍となれりける。法蓮寺は、海岩に峙ち老杉影をひたし、花陰波に響く。松の緑こまやかに、枝葉汐風に吹き撓めて、屈曲おのづからためたるが如し。其の氣色窅然として、美人の顏を粧ふ。ちはやふる神のむかし、大山つみのなせるわざにや。造化の天工、いづれの人か筆をふるひ、詞を盡さん。

富士ノ賦　　嵐蘭

不二は日本の蓬萊山なり。むかし孝靈五年、山はじめて現ず。徐福も此の山に登りて仙藥を求め、かぐや姫も神と化してこゝに蹤をとゞむ。峯は八葉にわかれて根は四州にまたがる。道路は三日よりのぼりて、千筋にわかれ、すそ野は東西に長うして、百里につらなる。形けずりたるが如く、高きこと北斗に近し。夜陰に烟をかすかにし、夏天に雪をいたゞく。山間に海をたゝへ、山上に眞砂を降す。和國異朝類するものなく、三國名山と稱して、義楚六帖に甚だほめたり。日本武尊は、東夷をたひらげて、草薙の名をあらため、右大將頼朝は、ものゝふをあつめて、牧狩をかゝる。鳴澤の池は、俊成の假名をとゞめ、人穴の奧は、仁田が無分別さうなり。十郎の宮、五郎の社、西行は五文字をすゑかね、

探幽は墨色にあぐむ。猿は古今の序に、二流に讀まれ、雲は廻船に怖れて、一尺八寸の號をとゞむ。禪定の人は、寶冠に頭をつゝみ、下向道は、小袖の袂をふるふ。絶頂の鰶、半腹の雀、巣鷹は大心にして、伊豫の松山におとし、赤鳥の羽音には、臆病になつて、都の方に逃げゝる。ふじ海苔、不盡灰、富士甘艸、ふじ黄芪、栗、栃、松、檜の木のたぐひ。往還は竹の下越、根原ごえ、關は足柄の關、横はしりの關、あら井の渡口、佐夜の中山、海を隔て、峯をかさぬ。三保清見寺の見越、箱根、鎌倉の姿、日本、兩國の橋上には、馬上の人の首をめぐらし、赤坂、駿河臺には、乗物の窗に眦をさく。遠くは朝熊山をかぎり、ちかくは原よし原のあたりなるべし。諏訪の湖には、倒の影を浸し、甲州の府には、三つ岸に見えて、扇の繪はこゝなるべし。むかしより、詩歌連誹の句數、合はせてこれをつまゞば、大かた此の山の高さには比せむ。されど古今の間、たゞ一首秀でたる者は、赤人の白妙なるべし。其の餘は此の山に對して、萬が一にも及ばず。吾が翁、富士吉野の句、一生なしとかや。東路に赴く人は、かくなりがたきふじの詠に、心力を費し、又あづま路におもむかぬ人は、かく有り難き富士を見ずして、一生を終るも、共に殘り多きことなるべし。

湖水ノ賦　　李由

近江、もと淡海なりしを、大宮にちかき江とて、近江につくり、遠き江を、遠江と號すとかや。仁

皇十二代、景行の御宇、滋賀の郡に、遷都あつて、高穴穗宮に行幸す。三十九代、天智帝、大津の宮にうつり、廢帝の御宇、保良の都をたつ。近州はじめは十三郡、保霾潤澤、種千倍を得。春氣早く到り、日本四番、大上々國と稱す。仁皇七代、孝靈五年、地裂け湖となる。同時富士山現す。されば不二禪定するに、近江人を先達とさだむ。善積一郡は、すでに湖となりて今はなし。わづか磯といふ一村殘り、古郡變じて、坂田の新郡に屬す。同國余吾、筑摩江の兩湖あれど、大きさわづかに二里に過ぎず。たゞ日本みづうみと稱する物は、琵琶湖のことなり。形似たればとて、其の名とす。佐々波賀國とは、風土記に出でて、樂々波や丹穗てるの文字は、萬葉より始まれり。東西十里、南北二十餘里、山谷のしたゞる所、八百八川、湖を圍む水郷五百餘村、中に大小の島あり。竹生島は周廻一里、寺院九坊、天女をあがめて、若つなぎの神事あり。空海の祕密を封じ、經政の撥をひゞかす。武島は、ちくぶの半ばにたらず。沖の島は、沖津島山とよめる。漁人僅かにすめり。白石といふは、四石湖上に峙ち、樹木一株もなし。奥の島は、人家數百、疊の表を產とす。猪崎、岡山、黑津の八島。たら島は水鳥の巢つくり、勢田の中島には、蛇柳あり。入龜、出龜の二島は、筑摩江の中に浮ぶ。山は比良四明の翠をひたし、鏡伊吹の影をうつす。橋は勢田、青柳の橋。松は辛崎、千々の松。蓮は支那に名高く、蓴菜は四川に肥えたり。柳大根、兵主蕪、八幡蚊屋、長濱絹、高宮布、野洲さらし、高

鳥硯、武佐墨、白部石、舟木材木。庭石は木戸に宜しく、盆山の敷砂は大洞の白石、（是レ方解石也）伊吹の産は、蕎麥、からゝ、艾、石灰、藥種の類、すくも、岩木。日野椀は會津の根本、しがらき燒は高麗の藥なり。混元丹、百々薬、播磨田杖、醒が井餅、多賀杓子、綣村鍋、四十九張の煙管、池の川縫針、守山氈、國友鐵炮、武佐判の八合升、（是ハ柴田勝家之製、軍中兵粮ノ助ケトス）端黒のチバン、（佐々木家ノ員景製也、其ノ子孫ノ者ノ名ニテ今ニ之ヲ）大津馬は飛驒村木を飛ばし、鎌倉の生食も、本此の國より出でたり。湖中の魞頭は、尾上片山に結旨を藏き、石垣つきは阿野人を天下に用ゐる。白鬚の御神は、湖水七度の蘆原を見給ひ、唐崎の明神は日本武の御廟なり。多賀、日吉の神社は、しらぬ人なくして更なり。筑摩の神は、鍋の數に名高く、新羅の社は、源氏の大將より、威を繇すとかや。大津四の宮の神社、今濱の八幡宮、豐浦の神は、皆竿を守り、宇賀野の神明は、第十四座の遷座なり。彦根山の天神は、活津彦根命と申し奉る、金色の御神なれば、金龜山に迹を垂る。吾がすむ平田山、鳴宮の天神は御旅所なり。流天神は、大津彦根命なり。木德の神にて、千々の松原に宮居し給ふ。名は神代よりはじまりて、大納言經信、贈答の歌にも、彦根山とよめるなり。山上の觀世音、堀川の御宇、寬治三年、白川の上皇、御幸の地なり。神社佛閣、金龜山の城の爲に、地を移して、今の北野寺に同坐あり。石山は觀音道場、石は白瑪瑙、山は黃金なり。江州金山の始なり、三井は園城寺、鐘に名高く、むかしながらの山ともよめり。夫れ山と

いへば、延暦寺にきはまり、寺といへば園城寺をさす。共に押出したる靈場なり。坂本西教寺は、天台淨土の一本寺、堅田の浮御堂は、惠心僧都の千體佛、長命寺は、順禮の札に顯はれ、猪崎の不動尊は、梅飛の術に名高し。矢取の地藏、木の本の地藏、石塔寺には天竺阿育王の塔を留め、是レ所謂八萬四千塔ノ中、日本ニ來止、ミツノ其ノ一也。平流山は、行基四十九院を建てて、都率の内院を移す。三國傳記ニ云、昔靈鷲山ノ一峯ノ湛ミ、湖水ノ滴ニヨロス、其ノ下ニ醸レテ石ト化ス。今ノ荒神山ノ蛇石是レナリ高野永源寺は、寂室派の一本寺、女人の高野山になぞらへ、番場の辻堂は、一向時宗の源にして、仲時已下の過去帳よりは、如是畜生の願文にて隱れなし。百濟寺の下乘は、小野道風の眞蹟、池寺の八大の繪は、金岡の筆なり。正樂寺は、佐々木道譽が菩提所、コンノウイの狂言、白藏主が寺なり。飯滿寺般若坊には、那須與市が願書をとゞむ。野寺の鐘、練貫の水、金尾寺の本堂は、飛驒の匠が建てて、千年の星霜をかさね、瓦屋寺は、太子、天王寺の瓦をつくらせて、其の殘り此の地に埋めて今もあり。東西本願寺の御坊、院家一家の寺々、清涼寺、龍潭寺は、禪の道場、綺には千貫の聲を含み、門には萬里の舟をとゞむ。菅山寺は世に稀の寺といふ。菅家の遺愛寺なり。安土山摠見寺は、信長の城跡、日本天守の始まり、七重の甍を輝かす。樓門の名額、此の寺に殘る。觀音寺は、佐々木の城山、すなはち觀音城なり。今濱の城は、太閤秀吉の城の持ち初め、坂本の城は、明智光秀が終りをとれり。俵藤太のながれは、蒲生家に殘り、六角、京極は、佐々木のわかれなり。

稻毛三郎は、供御の瀨を知つて、多勢を渡し、賤ヶ嶽の七本槍は、後代に名を擧げたり。木の匠の興後は、甲良の莊より出で、道を坂東に傳へ、鍛冶の貞宗は、高木より出でて、名を鎌倉に揚げたり。猿丸、黑主の舊跡をとゞめ、僧元政、季吟翁、皆此の國の產なり。すべて歌名所一百餘ヶ所、猶撰集に殘るもの少なからず。近江八景は、騷人墨客これを翫ぶ。これ近衞政家公の歌をはじめとす。國中土に灰汁なく、水に泥なし。音聲に淸濁をわかちて、うらの言葉をつかふ。桑によろしく、又茶に宜し。世に川魚といへる物は、湖魚の事なり。汐ならぬ海士のいとなみもをかしけれ。大網、卷網、四手、跡懸、手丸、唐網、魞、簗、カリ〳〵、竹篊、あさり、いさりのあはれも深かるべし。鯉、鮒は總名にして、鯉の品類、鮒のたぐひ、其の名かぞふにいとまなからん。春は山吹の子をいだき、秋は鱗に紅葉をちらす。江鮭、鱒の名を變じ、鰣、鯎の味を分つ。取りよき物は鈇となつけ、鯰は王城五十里を去らずとかや。勢田鰻、和爾鯎、氷魚は近江に限る。（内膳式云、田上ニ取進シタルヲ宇治ニテ東、九月ヨリ十二月マデ供之氷魚ノ捕ト云ノ網代ト云ナリ。）不賀比、（鯛ノフト、鯖ノカト、鱒ノヒノ合ハセテ、其ノ形トスル魚也。）鮎、小鮎、鮠、鯽、水鮮子、山水鮭、ギヽ、鰉、蟹、小鰕、蜷、蜆、胴龜、石龜の類、獺は魚を祭り、川太郎は相撲は好く。船は大津百艘と稱す。八江の湊、津々浦々、大丸子、小丸子、小ばや、川御座は大名船、高瀨、傳馬は川舟なり。投半に大石を積み、艜は耕作の助けなり。（准二肥付馬一不レ入二舟數一）棚なし小舟、堅田舟。比良の八講は、舟人湖上の風を恐れ、

論義とは、風の定まらぬをいふ。トイテとは、日和風、ハヤテとは、雨を誘ふ、勢田嵐、伊吹風、ヤマセ風、テガセ風。サキ風は春夏の名にして、秋冬は日あらしなり。根わたしは湖上の風の名にして宮内卿は漕ぎ行く舟を詠め、臥佛老人は、路縦横と吟ず。眞野の鶉に袖をぬらし、山吹の崎にはこ鳥を聞く。萬木の鷺、老曾の時鳥、鶴、白鳥、鵆、水鶏。鹿は玉川に啼きて、百足は三上山をまくとかや。王の濱の郁子を獻じては、新木の供御を備へ、在士の藤咲きては、藤堂家に花を捧ぐ。栗木の栗の木は、神代の沙汰にして、花澤の花の木は、今も咲くなり。龍燈松は巳待の夜毎に光をあげ、大藪の雨夜には、星鬼の火を蓑に映す。抑江州八十餘萬石、皆此の水に養はれて、年々の貢を備へ、大嘗會の稻穗を奉るも、たゞ此の湖の潤ひなるべし。

前麿山賦　　　支考

麿山者丸山也。在リ二肥ノ長崎ニ一歌舞之地也。

七月十日、けふは二萬五千日の功徳とかや。殊に女心の頼みおける物詣での日なるべし。此の津の遊女共の、人も見、人にも見られんと、よそほひたちたるに、ゆきゝの追風に心ときめきせられて、花すゝきの靡き合ひたる野邊は、男山もあだにたてりと見ゆらんかし。さるは浮草の世に浮かれて、身をあだなりと見る人は、浦の見るめも、いかにあだならん。今さしあたりたる物思ひはなけれど、

風俗文選巻之三

○賦類 附譜

鼠賦并引　去来

此賦以ニ五音相通ノ假名字一爲レ譜ト

鼠、一つの名はよめが君、又よめともよめり。其のたね品あり。四尺の鼠は國外にして、おほきなるは五六寸、ちひさきは寸にみたず。山椒の眼、小豆の鼻、歯に錆をつけて小袖も齧ふこく、耳は木の芽のふたつに似たり。尾をきつて筆のさやとなさばなしてん。背腹のいろはあでて、うすくも濃くも染め出せり。其の行くや、夜出でて晝隠る。常にぬすみをもて身をやしなふ。まことに憎むべきものの一つなり。乃ち賦を作りて曰く、

二月鼠の穴を塞ぐ、つくづく汝がいたづらを思へ。家に居て人をおそるゝは、足のうらに疵持ちけらし。油をのむことと、世の酒にひとしけれど、いつしか沈醉を見ず、粟を盡し器をそこなふは、殊更にいはじ、大豊をかむ牙にふるれば、病を生ず。騒かしき文をならして、男女の中をもさまたげ、怪

しき巣をつくりて、源平の亂をきく。何をへつらひて、佞人のためしに引出でられ、いかによりてか、書を焚く代の宰相となしぬる。神佛の尊さも、尿糞に汚したてまつる。草の根をはむ日の鼠は、俊成卿の恨みなりけり。つくづく汝が危きを思へ。それ人の賢しきや、萬木體をまき、吹矢を儲け、黐をぬりて、往來もたやすからず。けはしき城を頼むとも、地を防ぐ手段はあらじ。杳かなる客をながめては、鳶のつかまん愁へわするべからず。桁走り、障子のほり、早業得たりがほなるも、思はず升にかゝりて、いかばかりの思ひをすらむ。虚死仕てしあはせに、東坡が袋を逃げたりとも、生捕られてなまなか、張湯が文をうけなむ。或は鈴を頸にさげて、兒童の戯れとなり、あるひは筆の用に毫をぬかれて、老いの悔いを殘せり。あやまりて蝙蝠とあなづられ、鼯鼠と笑はれ、史に吹鼠と書しみて、人の爲にぞ悦ばれぬる。我さへ悲しきを、燒鼠となりて、狐狸の命とられんこそ、あさましく罪ふかけれ。つくづく汝が尊きを思へ。日よみの初めに呼ばれて、位司いやしからず、百敷のかしこきも、甲子をむかへて、年の號あらため給ふぞかし。あら玉の春立ちかへれば、子の日の御賀あり。子祭といへるは、いづれの長者の傳へなる。からの日本の歌にもよめり。海原や、もしほの陰に友なふなまこは、海鼠と書かれ、秋風の尾花が末に妻こふ鶉は、田鼠の化したるなり。烏羽玉の闇き夜は、いかづちともなれり。象といへる獸すら、かつ恐ぢ懼れぬる。麝香鼠は筑紫に住みなれて、こと國

に行かず(五)、かづき姿の若やかなるは、嫁入の繪虚事(きそらごと)にぞ(六)、どこの乙子を七郎とは申す(七)、新左衛門とつけるは、さかやきすりての後なるべし(八)。大ねら小ねら(九)、將(はた)二十日鼠と名のり(十)、月々十二の子をうむ(十一)。誰が家にかとりつくし得む(十二)。もし白子出でて、福の神にや愛せられむ(十三)。汝が隠里何處(いづく)のほとりぞや(十四)。武藏野の鼠穴にや(十五)、出羽の境の鼠(ねず)が關なるか(十六)、信濃の奥の鼠宿なるか(十七)、目出度たきをもて、かり初の世をむさぶる(十八)、などか歸らんことを思はざる(十九)。窮鼠(きうそ)かへりて猫を嚙(か)むの志ありとも、三井の頼豪(らいがう)が、千疋のいきほひすら、本意を遂ぐることは、猶きこえざりけり(二十)。

旅賦 并引　　許六

旅は風雅の花、風雅は過客の魂、西行宗祇の見殘しは、皆誹諧の情(なさけ)なり。我が翁白川の田植歌を聞き初め、奥羽の關をめぐり、高舘の夏草に、兵共が夢を驚かし、あつみ山の夕涼みには、吹浦を詠め、佐渡に横ふ天の川に、初秋の袂を絞る。それより蛤の二見を渡りて、七百三十餘程を吟ず。曾良が落髪の力量を感じて、一鉢の飯を分けて、風流を盡さる　ひとひ芭蕉庵をたゝき、繪の雜談に及ぶ時、予に旅十體の繪を書かせて、讃じて何某が求めに應ず。其の風雅にたよりて、俗語をあつめ、狂賦五段となす。あなかしこ奥の細道、草枕の類にはあらず。

旅店のさま、上段に書院床、劍菱(けんびし)のすかし、火のなき火燵(こたつ)にやぐらかけて、門口の入湯桶、かたぶ

けて居ゑたり。底に小砂のさはるは、夜べの殘りもいぶかし。出女のたて島は、春秋をしらず、根太板敷は落ちて、隅々まで疊とゞかず、天井簀は、雨もりにさはうき、鐵行燈はくらく、紙はやれたゞの心といふことに燃えたり。錢賣、草鞋賣にせがまれ、漸うに枕をかたぶけ、心よき寐入りばなは、馬さしの聲に夢を破る。出立ちはじつといひふくめたるに、旅人も亭主もよく寐て、夜のあけてふためくつらもにくし。

　大名の寢間にもねたる寒さ哉

道づれの上をいはゞ、船頭の胸づくしをとり、駕籠廻しをたゝき、馬さしとつかみ合ひ、一僕の譁にきぶるをねめまはし、鶏のなかぬに、つれの男を起し、提灯とぼして、夜道を行くを手柄とし、入湯の一番に入りたがるは何の爲ぞや。こつはの枯葉に雨のはら／＼といふ前に、

　世話やきの友にあきたる旅の宿

といふ句も、此の情にかなへり。
海道の賣物に、餅酒のなき所もなし。磨針峠の餅をくはねば、木曾閻王の前にて、からきめを見るといへり。寒天にも冷素麪を進むるは、逢坂の茶屋、饅頭のほか／＼と見えたるは、見付の宿なり。卵子の煮ぬきは、木曾の旅、はな紙は竹にはさみ、錢の看板は筒をかけたり。蒟蒻の田樂は、何もの

の喰ひけるぞ。

乘りかけに春の蜜柑やうつの山

舟川の上、馬駕籠の情、しばしく數へがたし。五月の大水も、かり貸しの手形に出入り、おいが草の戸は流るれど、首だけの借錢を納して、しばらく息をつぐものは、島田金谷の賊なり。水の淺深を何文目とこたへたるは、大きなる洒落なり。天龍の中の瀬は、馬人足を空にまどふ。乘る人は股だけ入りて、荷を肩にかけて待ち、上るものは、負はれ支度して舟端に立つ。旦那が棺をかたねたるは、渡し場の情なり。馬士駕籠舁は、輕重に日月をおくり、一杯の酒に、浩然の氣をやしなふ。一生を漂飄々とすまして、雲介の號を蒙り、炎暑の日も、甚冬のあしたも、榎の木の下に眠りて、蝶の都に到る。終に飲み喰ひを座敷につかす。汁かけて出す馬士の食と作られ、小便ははしりながら、吸ひながらは手の裏にはたき、錢は耳の穴に納め、金は犢鼻褌に結ぶ。一とせの名殘も暮れて、世にある人々のことぶく月日を、出替りの季と定めけるは、世をやすうおくる人にも倒たり。

出女も出かはり顔や年の暮

流浪漂泊の上にこそ、哀れなる例は多けれ。獨坊主には宿をかし兼ね、同じ所に二夜はとめず。五月雨の朝、霙の夕暮に、情ふかきあるじは、長持くさき布子かして、ぬれたるものを燒火にあぶるも

あるは三寶荒神といふ物にしがみ付きて、しばらく足を休むれど、極めの札場より追ひおろされ、却つてのらぬ前より股をすくめ、雨方の手に杖を携へて、歩むべしとも見えず。人間病死の到來は、時も所もまたず。醫療のたすけうとく、懐中のふり藥は、やう／＼急病を防ぐ。巡禮飛脚の族は路頭に倒れ臥し、片目なる肝煎に追ひたてられ、邑備の騒ぎにて門下に入り、おとなへござなり、終に黄泉の下に赴く。かねて何國の土とならん、終りをしらず。犬走の土中にこめて、年の齢、衣類の模樣を小札にしるされて、何國のいかなる人と、いふ名もしらずなり行くなり。岡部の辻堂の笠に、詩文をよみて、同行の別れを惜しみ、隅田川の念佛を尋ねて、我が子の古墳にのぼる。今來古往の人、旅懐の情を盡して、風雅の腸をさらす。能因は白川の歌をよみて、ふたゝびみちのくにおもむき、仁部鳥の二句を求めて、すみやかに故郷に歸る者は、貞室老人なり。東海道の一すぢもしらぬ人の、風雅におぼつかなしといはれし、翁の聲耳の底にとゞまる。

揚揮豆賦　毛紈

赤小豆殿の能には、一に依に納まり、ここにつとあかうて、是れよりあかのと仇名を取る。初春の粥には疫を除き、卯月の空の牡丹餅、うるはしき名目を畧して、今樣のいき過ぎは、ぼた／＼とのみいひならはし、歌よむ人は、秋の夕のあはれなる名を好みて、萩の花とめされてより、誹諧の人は、

鄭しらすともよむなり。饅頭の唐韻あくときは、アンとよばれ、學のつよき物識りのこびる時は、赤飯ともいふなり。深更とは理窟人の名つけたる名にして、おかつきと解く謎なるべし。蕪蔞亭に君臣の義を盡し、七步の詩は兄弟の情を述ぶ。從兄弟煮、不死汁の名は、いづれの御時にはじまりたる由緒をしらず。又あや折の竹にからめき、張鼓の緒につながるゝも、かれが中の一つの遊びなり。嫌ひとなれば大きに嫌ひ、好きに逢ひぬればおほきにすく。かかる堪能を持ちながら、頓の料理に煮えかぬるは、いかなる小豆殿の御分別かおはしけん。

円梅廬賦

僧　李由

恙を怖れたる時は、窟に住居し、氷の雨の用心とて、岩窟の所々に殘りたる世もあるに、廂に孫廂を下し、下側にしころをつけて、民の竈の賑はひけるこそめでたけれ。堅田の蘆の舟に年を重ね、乞食は橋の下に子を産むたぐひ、鶯の巣のやさしく、烏の巣のふつゝかなる、皆おのれ／＼の生得なり。ことしの秋、予ひとつの巣を營む。燕の土をはこび、蟻の塔をくみて、四根の梅をたどり、頓白の家をかふるたぐひにはあらで、病鶏が塒に憑む、鳳凰の威をふるはんよりは、凡鳥の嘲りたからんことを喜ぶ。山鳩が進物の鷹と吹き上げらるゝも心ぐるしく、たゞ一日の閑鷗とおぼえて眠る。蝸牛の釜打破らんとせがまれては、又出でて蛐蜒の部とのらめく。蛇の貝の半造作、榮螺の蓋の戸もつら

ぬ住居ながら、風雅の友つどひ來れ、貧主寄居蟲の家をわすれて、例の夜興の寄合ひしまゝ、はやき
れてたのしむかな。

閑居賦　　　支　　　付

廬山の雨の夜に月をしたひ、たれこめて春の行衞しらぬ住居もあるに、ましや吉野の奥は住みうく
とも、うき世の嵯峨のさがなきよりは、中々すみよかりけらし。栗栖野のおくの、菊紅葉の園伽藍も、
柑子の垣に見おとされ、宇治山の隱家には、梅柳の風流を盡くれど、人喰だにさめたり。花はひとらし
のさびしきをうらやみ、水はとくとくの苔をしたふ。秋は東籬の下をめぐつて、春の哀をさらし、冬
は西嶺のさむきを望みて、笠の重きをわする。茶粥相撲の輕みに、五臟を洗濯し、紙子着物の寒きさ
音に、千石をかへたり。詩は三籟の趣を悟り、歌は山家の風を好む。手鼓一つ、鉦一つ、樽一臂、
米四五升、手鼻の拍子を覺えて、紙のたくはへを忘れ、自剃りの自由を得て、耳の菖蒲をのがる。壁
一重に市聲の喧しきをへだて、簾一枚に車馬の埃を避けたり。世を捨て、世に捨てらるゝ類ひ、まつ
ことさらなくて明しくらすこそ、まことの閑居とはいふべけれ。今の閑居めくものを見るに、食には八
珍を盡し、酒には五味をなしむ。摺板の障子には、四季の花鳥を彩り、皮付きの柱には、樟ふくらの
名木を求む。額には花紺青の文字を彫め、軸にはきれ人形の箔を光らす。罷き所には水を湛へ、高き

所に亭を築く。琴三味線の夕べ、小歌浄瑠璃の暁、鄰家の眠りをさまし、行人の足をとゞむ。粉白く黛翠なるもの屋をつらね、帯廣く袖長きたぐひ廓をめぐる。牡丹芍薬に数金を尽し、蘇鉄海石に財をつひやす。伽羅は交趾をくべて蚊ふすとし、燭は会津をたてゝ、月の光を奪ふ。或は地黄枸杞子を植ゑて、地子をつぐのひ、又は瓜茄子を作りて、八百の店に出す。夕顔の借屋に、鄰の生業を語らせ、柑類の果物には、錢の算用を聞く。これらの閑居も彼の清貧の閑居と名を同じうせんや。古人いへる事あり、小人閑居して不善をなすとは、此の閑居の見通しなるべし。

招蓮賦　　支考

西方に吾が翁の魂あり、行きていづこにか帰らざらん。たましひ速かに帰り来れ。ことし神無月十日あまり、湖南の舊草に、門人あそんでたましひを待つ。さればなどか帰り来ざらん、たましひそれ帰り来れ。柴門に春の花ちれば、鳥驚きて別れをうらむ、蓬窓に秋の月落つれば、人荒れて住まずなりぬ。さればすみれ草の住みよき世の中に、何に都の花の面影とはよみけん。時鳥の行方なかりけんにも、春の夜の終にかへらずやありける。しからばたましひいづこに行くとしてか、還るに還らざらん、還り来れ〱。王孫むかしは草とおもひぬ。芭蕉の香いまや衣にみつらん。まして花薄の穂に出でよ、まねかばなどかへらざらん、速やかに還り来れ。東花坊に、此の日のあるじまうけせんに、かい

蕎麥切は、宇津の山道の細き手際にはあらねど、むかしの心わすれざればなり。豆腐は夜寒の都ちかく、蒟蒻は黒津の里の名にしおへり、いかで世の人の風味にあまからんや。琥珀の霜をふるは、果やゝかうばしく、瑪瑙の氷をふくめるは、酒更にみどりなり、香花なほさばかりならんや、魂まつ歸り來れ、たましひ何にかあかざらん。さゞ波や、打出の濱のむかしおぼゆらん、水渺々とながれて、山更に長し。長等の山の山櫻も、たゞ春のあだなる物に咲きちりて、志賀の古びぞ年々なりける。かの辛崎の松の孤りのみ、花の朧のちぎりやは忘れん。殊にあはれむべき比良の高根は、入江の駒とむべき人こそなけれ。むかし堅田の、秋の夜寒に落ちては、病鴈の旅ねに、其の身を侘びしが、其の後のたよりは聞かずなりぬ。さるは水ぐきの岡の、名のみとむらん、鏡山の面影も、今宵は待つ人あるにぞありける。松風の音羽山とかや、こなたの岡はまそばの花も咲きたり。世に逢坂の關はあれど、粟津の原のあはでや歸らん、魂こゝに歸り來れ。世にいふ天堂は、人の心あまし。さるは風月の情過ぎたらん。地獄はたゞおろそかに、まして風雅のいとまもなからん。されば彌陀ほとけのねぶりて、いとたふとげにおはせど、左右の御手の置き處なからんに、地藏ぼさつは色のみ白うして、梅の花の寒き所こそおはせね、閻王宮の人々も、たゞ世の人の是非のみ見んとすらん。そも打解けたる心もあるまじ。しかるに杜國嵐蘭がともがら、圖司何がし、岐山の落梧までに、明暮の心隔つまじけれど、

ドとせ餘りの風雅の變におくれたれば、それも心ゆかぬ所ありて、相手にはいととほしからんに、然らばたましひ誰にかよらん、歸りて是れを見ざらんや。たましひとく歸り來れ。むかし誹諧に、詩歌の信ありといはれて、鶯の花に鳴き、蛙の水にすめるたぐひ、何れか信なからんと、俗は是れをもて世をいとなみ、僧は是れをもて後世を頼まんとせしに、中比はいかいは信あらずとふみやぶられて、信ある人は、このまことなしと誹り、僞ある人は、このいつはりなしとよろこぶ。そも又炭俵、後猿蓑の變なるべし。今や誹諧は、信あらざるにもあらずといはんに、世に指をたふすもの、終にいくばくもあらず。其のあらずといふもの、こゝにあらざらんや。此の日の魂すみやかに歸り來れ。かへらば吾が翁にせん、魂誠に歸り來れ、魂誠に歸り來れ。

○譜類

百鳥譜　　支考

鶴は仙家のものなり、是れがみさをは人にちかからず。昔陶淵明に、達磨の風骨ありといへるものは、鶴に淵明が風流あることをしらず。されば野草の花の、あきらかにひらきぬる時、柴門の月のあらたにすめる夜ならん、此のもののひとりは見まくおもふなり。しかるを鳶の無能にして、衣裳もおろ

はば江湖の僧の、一夜二夜にちぎり捨てて、身を雲水にまかせたるが、年を經て後は、見しらぬ人もおほかる。されば行脚の身の、人にもおくられ、おのれもおくりたらんに、涙のこぼるゝは、いかなる時にかあらん。かの法師の、宿かし鳥とよみつゞけぬるより、孤村に出でて夕陽を啼き盡せば、誰が家にか今宵もおくらんと、あぢなきことも思はるゝなり。

鷓鴣とは名のかしこきものなり。青草の暮の雨には、遊子の魂をおどろかし、黄陵の曉の雲には、旅人の涙を催す。すべて夜啼くものは悲しきに、水鷄は隱逸の風情を得たり。

星月夜のおぼつかなきころは、磯のちどりのおほくあつまりゐて啼くは、心もきゆべくて悲し。ただ人の別墅なる所に、水の湛へもいと淺くて、晝は來馴れてあそぶらん。戸などかいやりたる音に驚きて、忽ち二三聲のすゐ行くは、其のあとも遙かに見送られて、河風寒しと思ひ出でたるは、またるる人もなくて、何にかはせん。

鴫はましてたつ時のあはれなるに、馬糞といふ鷹の、風にひるがへりたる、なまうかびにていとにくし。彼の澤の夕暮は、江山の風情をそなへたれば、もろこしの雲夢ときこえし澤は、いかなる澤にかあらん。

白鷗は人をさけて、おのれ靜かなるものなり。しかるを諫鼓鳥の、おのれ啼きて、人をさびしがら

んとす。なべて卯の花の曇りは、いとねぶげなるに、夕日の影も木の間にちり殘りて、山には思ひかけぬ鳩も啼くなり。啼く所のさだかに知れねば、是れもいと寂し　此のものは偏に雨の日を悲しぶるとかや。百花の深き所ならば、終日ぬるともいとはざらまし。

梟の晝出でゝ、迷ひありきぬるいとをかし。かならず笑はれじと、はたらきたる顔にもあらず。さるたぐひの老僧にや、むかしも市中に遊びゐけるなり。

深草に住むなる鶉は、其の聲すみやかにして、世をはゞからず。山にもちかく、水にも遠からず、粟の穂の靜かなる時は、こゝにも出でゝ遊ぶなるべし。

啄木鳥の飢ゑをしのびかねて、木にそひ、梢をたゝきあるきて、終日靜かならぬこそ、はかなきわざなれ。かぎりなき生涯の、いとなみとならば、誰も／＼あさましき事おほかるべし。されば空山の日影に、霰たばしりて、楢の柏もちり／＼に吹かれ行く比は、此の鳥の聲の更に幽にして、いざや、張道士が家を、とぶらふも人に似たれ。

木がらしの夜一夜吹きあかして、しのゝめには吹かずなりぬるを、さし出づる朝日の、殊に珍らしう、さし籠めたる障子のかぎりは、もゆるばかり長閑なるに、物の影のさと過ぎて、またゝきもあへぬは、いかなる鳥にか侍らんと、いとも／＼思はるゝなり。蓋し鳶などのゆるやかに舞ひありくも、

穀をはめる鳥の、まどかにして細やかならぬは、誠に備はりたることとなるべし。嘴のさきのかいまがりたるは、おのれが友をやぶるべきたくみにや、いとおそろし。

鳥にして鳥の名にあらざるものは、鵺鴟の一名を混滑々といひ、倭國にも行々子といふ鳥ありて、聲は少しにごりたるやうに侍れど、啼く時はやゝ涼し。かの明々といふ鳥は、かしら二つにてはあるよし、むかへて我が友となさば、米櫃の底をやはらはれんかし。

世を便々といふ鳥ありて、春秋のさかひをしらず、遊ぶ所又常なし。しかれども巣つくらふ鳥の、明けては忘れ、暮れてはかなしめる類にもあらず。たまたま啼く聲はありながら、公冶長が耆ならねば、知るものなし。一說ニ夜遊ビテ朝寝ヲ好ム鳥也。其ノ餌ハ、蕎麥白米ノ類。假頭ハ隆ナリ。誠にしるものなからましかば、世にありて是れも又詮なし。其の形にたゞへたる隆鼻鳥は常に人の惡をたゞし、愛宕高雄ノ山ニ在リ、杉ノ木ニ棲ム鳥ナリ。迦陵頻は聲の美におぼれたれば、我はしらず、かの蝙蝠といふものにしたがはんか。

百花譜　許六

當世の人の花過ぎ、古人の實すぎたる、いつれの時か、花實兼備の世あらん。

梅の風骨たる事、水陸草木の中に、似たる物はあらじ。十月一陽の氣に、燦々たる江南の玉妃、まづゑめるより、生涯を物すきにくるしみ、風流のほそみに終る。是れを色にたとへていはば、吉野、

高尾などいふべき遊君の、心おとなしく、名を恥ぢ、いき過ぎたる心より、相火の高ぶり、かたち痩せぎすに涙もろく、きのふの我に飽きける心より、一たび著たる衣類調度など、ふたゝび目にもかけず、人に打ちくれ、食くれる男なれども、愚擬なるにはすりぬけ、請出さるゝ場所をはづして、はずんだる男の一言に、百年の富貴をかへたり。借錢の利に利を重ね、やう／＼盛りも過ぎたる頃、生前の本望を遂けて、幽なる住居に、朝夕の煙をたてても、なほ物ずき風流の細みに富めり。子さへなくて、夏冬の寢覺もやすし。待つ事もなくて、世を靜かにいとなみ、同穴のかたらひを、なせる人には似たり。

紅梅といふ花は、一度彼岸参りの心を動かし、未開紅の光をはなちぬれども、やがて莟くだけ、花ひらけてより、日々におとろへ、雨風を帯び、夕日にしらけて、つぼめる色を失ふ。たとへば下過ぎたる野郎の、大躍りにつらなり、心ならず風流をつくりたる心地ぞする。

櫻は全盛の傾城なり。天晴當風に打ちこみたる風俗、行末明日のたくはへの、一點もなき花なり。

海棠は、同じく時を得たる野郎の、大夫と仰がれ、勢ひもさかんに、世の中猛との〻しれども、質素にしてうるほひ少なし。誠に香のなき一色の、缺けたる心地こそ本意なけれ。

梨花は、本妻の傍に侍る妾の如し。よろづ物思ひに打沈み、常に人の下にたてるが如し。

芍藥といふ花は、いまだ嫁せざる娘の、齢も二八に餘りたるが、ねよげに見ゆる心地ぞする。
罌粟は、眉目容すぐれ、髪ながく、常は西施が顰を愛して、桂臺に眠り、後世なゞどのことは、露ばかり心にかけぬ身の、一念のうらみによりて、ごそと剃りこぼして、尼になりたるこそ、肝つぶるわざなれ。
杜若は、のぶとき花なれど、うつくしき女の衰へして、恥をしらぬに似たり。
あやめは、小づくりなる女の、目を病める心地ぞする。
百合花は數品おほし。笹ゆり、博多ゆり、鬼百合、色は異なれども、元來一種にして、生得いやしき花なり。たとへば輿車につれし位なければ、かゝへ帶つよくからげあげ、上づりに脛たかく、あゆみ出でたる女に似たり。
姫百合は、十二三ばかりなる娘の、後に帶うつくしく結びたるがごとし。
合歡の花のねぶげなるは、深閨の中に縫物をかゝへ、晝眠る女に似たり。過ぎにし夜半の、いかなる事かありて、かくはねぶりけん、いとおぼつかなし。
其の中に青顔の目を覺したるは、二十にちかき頃まで、男心しらぬ女の、はじめて宮づかへに出でたる頃の、よろづつきなきありさまならんか。

紫陽花の花は、色白に肥えふとりたるが、ちかくよつて見れば、白病瘡のあとのすき間もなくて、興さめてやみぬ。

蓮は、うつくしき所すくなし　たとへば上手の繪にかける天人の顔にひとし。どこやら佛めきて、心こそおかるれ。

卯の花は、第一名目よし。時鳥の來べき頃は、かならず咲くと覺えたるこそをかしけれ。うつ木の花といふ人は、無下のことなり。卯の花月夜の夕すゞみに、しろめなる衣裳に、黒き帶仕なしたる女の、ふと打ちつれたるが、行き違ふ程もなく立ちわかれて、顔のほどもおぼつかなく見かへせば、はや尻影ばかりを、見送りたる心地ぞする。何方へか通ふらんと、いとなつかし。

朝顔の盛りすくなきは、よき女の常は病がちに打ちなやみ、土用八專のかはるゝ、隙なきに打臥し、一月の日數も、二十日はかしらからげ、引込みたるが、たま／＼空晴れきり、朝日さし出でたるに、心地よげに打粧ひ、衣裳などあらためて、ほのめき出でたるに似たり。

鷄頭は、和のなき花なり。よからぬ女の、一筋に貞女をたてるがごとし。

らにの花は、蝶の羽に薰物すと、先師の腸より捜し出し侍るこそ、其の佳人の面影もなつかしければ、これに先をこされて、口を閉ぢていはず。

鳳仙花といふ花は、是れもけば〴〵しく、紅粉鐵漿を粧ひ、人の眼を驚かす樣なれども、手に携へて見るべきものにもあらず。木ぶり葉つきのいやしき事は、彼の出女の李喰ふ口もとには似たり。

女郎花は、いにしへより女にたとへ、我落ちにきと、法師の破戒によめるは、女郎の二字になづめるならんか。初秋の風によろめき立てるも、菊にさきをかけられたらんは、手柄やすくなからんと、思へる物ずきこそやさしけれ。此の女郎花といへる物、花にしてはちと請取りがたし。たとへば聲のうつくしきを選みて、小歌を習はせ、髮をおろして是れを比丘尼といふなり。大率は女色にして、かさりなければ、大象をつなぐべき執心のきづなもなし。さればとて、男色のかたつまりたる類にもあらで、男女の中にたてる風俗なり。此の花百花に類するすがたなし。古人蒸せる粟のごとしといへるは、草實のたぐひに比すべきか。莖も花も等しく黄にして、下葉すくなによろめきたるは、彼の比丘尼のたぐひとや見ん。

桔梗は、其の色に目をとられり。野草の中に、思ひかけず咲き出でたるは、田家の草の戸に、よき娘見たる心地ぞする。

萩はやさしき花なり。さして手にとりて愛すべき姿はすくなけれど、萩といへる名目にて、人の心を動かし侍る。たとへば地下の女の、よく歌よむと聞きつたへたる、なつかしさには似たり。

はらに、櫻は白妙に、青松は綠にして、これ其の和漢各別の沙汰なるべし。富士は下野長く、景大なうに書くべし。松島はあやしくたへに、景冷しかるべし。象潟は景を殘してあはれに、九世戸は景奪分にして麗はしかるべし。須磨明石はあはれにさびしく、吉野龍田は花やかに哀し。住吉は神久さて面白く、泊瀨はむかしなつかしかるべし。六玉川、近江八景、風雅の上をもて知るべし。唐の僧、和の江湖を見ていへることあり、これ唐の西湖に十倍せりと。和畫西湖をうつして、興ある所をはしらす。唐の西湖は水淺くして、人の遊ぶ湖にあらず、たゞ遊人の舟のみといへり。世上に洛中洛外の繪とて、切箔總金おきちらし、丹青鮮かに彩り、黄白細微に文をなす。奴の鬢髭に墨を點じ、傾城の脣に丹を含む。これ其の遠近をしらざるものなり。假令丹青は塗るとも、洛中洛外の景色は、まつたく山水の部にして、遠人の格式なるべし。すべて畫圖をよくせん者は、まづ風雅をしるべし。古人畫中の詩、詩中の畫と云ふは、此の所なるをや。世に料理する者、魚鳥を切ることを知つて、喰ふことをしらず、畫工はゑがくことを知つて、面白きことをしらず。されば面白きことしらずして、面白きことを書かざるは、何のおもしろきことあらんや。

風俗文選　巻之四

○説類

蓑蟲類　　素堂

みのむし／＼、聲のおぼつかなきをあはれぶ。ちゝよ／＼となくは、孝に專らなるものか。いかに傳へて鬼の子なるらん。淸女が筆のさがなしや。よし鬼なりとも瞽叟を父として舜あり。汝は蟲の舜ならんか。

みの蟲／＼、聲のおぼつかなくて、かつ無能なるをあはれぶ。松蟲は聲の美なるが爲に、籠中に花野をなき、桑子は絲を吐くにより、からうじて賤の手に死す。

みのむし／＼、無能にして靜かなるをあはれぶ。胡蝶は花に忙がしく、蜂は蜜をいとなむにより、往來おだやかならず。誰が爲にこれをあまくするや。

みのむし／＼、かたちの少しきなるを憐ぶ。わづかに一滴を得れば、其の身をうるほし、一葉を得れば、これがすみかとなれり。龍蛇のいきほひあるも、多くは人の爲に身をそこなふ。若かじ汝が少

かし。深山柴已が竈に折りくべてといへるは、すめるあたりの氣色ならん。かの秦の毛女が賢にも似ず、河陽の焦子が仁にもあらず、唯世渡りのよすがにして、女は都に出でてこれを賣り、夫は山に入りてこれを樵る。頭は日に晒せども黒く、足は泥に染むれども白し。さすがに建禮門院の女房、阿波の典侍の局などいふ人の名殘あるにや。青きひとへは、色香の爲に襟をつくろひ、褄みして二布をあらはし、白き手おほひ、しろきはゞき、白き帯はうすくなゝんでうしろに結びさげ、幾男の心をか動かす。春は躑躅山藤を戴き、茅花虎杖をたばね、行くさきざきへの山づととなしぬ。道のほど一里二里、とほくは三里にあまりて、肩かふる業もなく、花の陰には睡りをもかけず、漸く京の町に近づきては、歸りの事どもいそぎて、大路小路にわかる。或はおろして門をはき、あるひは出口の市に米をしろがへて、小袋の首をくゝる。月の夕はつれにおくれて、紅葉の雨を分け行くこそ、いつかは我が屋にいたらめと、見るをだに物うきに、東の翁の笑ひて曰く、身の賤しきを思へば、宮女もかたらひがたし。心の鈍きを思へば、傾城もなほまじはりがたし。若し妹背をなさんに、此のをなごをなんといたはり給へり。左譏言ながら殊勝にぞ侍る。

閉說關　　芭蕉翁

色は君子のにくむ所にして、佛も五戒のはじめに置くといへども、さすがに捨てがたき情のあやに

くに、あはれなるかたゞヽも多かるべし。人しれぬくらぶの山の梅の下ぶしに、思ひの外の匂ひにしみて、忍ぶの岡の人めの關も、もる人なくばいかなるあやまちをか仕出でん　蜑の子の波の枕に袖しをれて、家をうり身を失ふためしも多かれど、老いの身の行末を貪り、米錢の中に魂をくるしめて、物の情をわきまへざるには、遙かにまして罪ゆるしぬべく、人生七十を稀なりとして、身の盛りなる事は、僅かに二十餘年なり。はじめの老いの來れる事、一夜の夢の如し。五十年六十年のよはひかたぶくより、淺ましうくづをれて、宵寢がちに朝起きしたる、寐覺の分別何事をかむさぶる。愚かなる者は思ふことおほし。煩惱增長して、一藝すぐるゝものは、是非の勝るゝものなり。是れをもて世の營みにあてて、貪欲の魔界に心を怒らし、溝洫におぼれて、生かすこと能はずと、南華老仙の唯利害を破却し、老若を忘れて、閑になられんこそ、老いの樂しみとはいふべけれ。人來れば無用の辯あり。出でては他の家業を妨ぐるもうし。孫敬が戸を閉ぢて、杜五郎が門を鎖さんには、友なきを友とし、貧しきを富めりとして、五十年の頑夫、自書し、みづから禁戒となす。

朝がほや晝は鎖おろす門の垣

師說　　　　許六

いにしへ學ぶものは必ず師あり。師は道をつたへ、業を受け、惑ひを解くものなりと。されどもみる

こしにも、此の事久しく絶えてつたはらず。まして吾が朝には、むかしよりさる事をきかず。往昔神道のさかんなりし時は、唯一の師有りて道を教ふること、退之がいひにかはらず。然るをいつの頃よりか、兩部といふ事はじまり、神道は日々におとろへ、佛法は月々にさかんにして、和國の風俗はたえ果て、やう／＼家々に大黑どのをあがめ、初春をむかへては、惠方棚にしめ引きまはしたるこそ、はつかに和國の道の殘りたるしるしならめ。當世佛道の師たる人を見るに、大路に門おし披き、鐘鼓を打ちて貴賤をあつめ、利益を說きて寶を蓄かす。其の弟子となる者を見るに、孤（みなしご）になりて家業にたよりなき人、あるは飛鳥川の淵瀨に變りて、家を賣（う）り田をうりはてては、行く所なき人、又はあほうの子供、片輪者の行末、父母の產（う）みつけたる黑髮、露ばかりも惜しまず剃り落し、素性法師がつぶりを撫でては、たらちめはかかる凉しき事はよも知らじなど輕（かる）みに落し、何某寺の新發意とはいふなりけり。これもいにしへの師道に相似たれど、世を渡る口すぎなれば、巫醫（ふい）樂師（がくし）、百工の師を求むるにかはらず。又は弓馬兵法の道、諸禮、躾方（しつけかた）、讀書、有職の師たる人の、油斷（ゆだん）せぬ顏つきこそをかしけれ。山伏の師を先達といひ、其の弟子を强力と名付け、比丘尼の師たるものを、お寮（れう）といひて、其の弟子を米かみとはいふなり。伊勢富士の神職の人を、御師（おし）といふは如何なるゆゑかしらず。其の道其の業を教へて、仁におかしとはいへど、年の暮のあはれを感じては、一朱一歩の使を待ちかね、無

蓋の企て、表がへの割付けもうるさく、朝夕の揺鉢時を考へ、夜食の遲き奈良茶を侘びたり。さるは世の風俗にして、教ふる人もぬからず、まして習ふ人も猶ぬかる事なし。こゝに誹諧の師たること、貞德老人よりおこりて、貞室は弟子となり、花の本をうけ繼ぎ、これを天下の宗匠とはいふならし。それより廚子小路に、點者の看板をかけて、あたらしき道を說きて、宗匠めく者出、一座一興の宗匠にして、眞の花のもととはいはず。先師芭蕉翁、ひとり天下に中たり、世擧つて道を受け、まどひを解く。これを天下の宗匠とはいふならし。今のはいかい人を見るに、一生師と賴む人も見えず、見取り聞き取りの人眞似に、朝夕をあやまり、惑ひより惑ひに分け入ることをしらず。人生まれながら知るものなし、師にしたがひて惑ひを解く。師說にうとき人は、自己の善惡を究むることをしらず。先師身まかりて、十とせ餘りことせの春秋をへぬれど、師の餘光いまだ國中をかゞやかせり。其の道を繼ぐ十哲の門人、口をならべて、我こそ血脈道統なれと、手ぼめの宗匠にかざはされ、眞の道統あることを知らず。其の人誹諧をしらんと思はば、まづ其の所の誹諧を見るべし。眞の誹諧一人あれば、一鄕すべて道に迷はず。これ言下に惑ひを解きて、あらぬくま〳〵をたどらぬ故なり。茲に弟子盍蓮、余にしたがひて道を聞くこと久し。我官袴懸命につながれ、沈痾老衰の牀になやみて、たすけとなること稀なり。今かれが爲に師の說作つて送る。必ず余が誹諧のたふときことを知つて、余が誹諧の責

きことに迷ふことなかれ。若し明眼有徳の師あらば、速かに乗りかへて、行きたき方へ行くべし。

名阿段説　　　　許六

左右の下に物をつけて、文字の埒を明したるなこそ、李斯が手柄とはいふなれど、通字ありて己の己とよむまじければ、なくても事は缺くまじくや。名目のなき世ならば、一日もあるまじ。されば味噌桶に水風呂もなさず、巣桶に筏をうかめたるためしは、ありがたき名目にあらずや。さるを今の人、名は天地以前よりつけ置きたると思へる、いとはかなし。けふ名をあらため、明日はや目のさけやう、鼻のかゝり、さも呼ぶべき人とは見する。教識とは顯密の名、鐵叢とつめては謡ればこそ、禪師の號、大むね一派一流の名目ありて、もおこし人の名づくこと、深き心なし。敵を殺して我が子の名とし、白魚を得て其の名を定む。わづか一兩字の間に、ふかき心をふくめ、々可、木端の類も、漸くききあき、一笑、志計もあまりにつたなし。小坊主阿段よく茶をくむ。予が湯をとゞむ事、杜子が鐐奴に等しければ、名づくる説つくつて、かれにとらすることかくの如し。

出女説　　　　木導

傾城傾國は、唐人のつけたる名にして、白拍子、なかれの女は、我が國のやはらぎなるべし。

昔より品類あまた、かぞふにいとまなからん。國々の名目、當世の湯落、綿帽、干瓢、白人、中等

の類、大むね一種より出でゝ、位階の高下は金銀の相當なるべし。たつとからずして較撰に許され、貴人のかたはらに侍るゆゑにや。少と仔細過ぎて多くはふるゑに落されたり。爰に道人がゝりの遊君ありて、終に人の魂をとらかす意氣張りも見えず。まして歌よむ程の態にてもなし。たゞ物くひ酒のみ、言語進退のやすき事は、かりに和光同塵の姿を現はし、慈悲第一の出女とはいふなりけり。倩生涯のありさまを見るに、跡をはしる旅客の勞をなぐさめ、女郎花のたぐひにもあらで、江湖行脚の獨坊主を落さむとす。あるは朝立の旅人を送り、打着姿をぬぎ捨てゝは帯を飛ばし、部屋の戸おしひらきてより、やがて衣引きかつぎ、再寐の夢のさめ時は、腹の減る期を相圖と思へり。高足打の塗膳にすわりながら、通りの馬士に言葉をかはす。やう／＼晝の日さしはれやかにかゞやく比、見世の正面に座をしめ、泊り作らんとて両肌ぬぎの大けはひ、首筋のあたりより、燕の舞ひありく景氣こそ、目さむる心地はせらるれ。闇札の泊りをうけては、あたらしき豎繍に、京染の帯むすびさげて、髪の末のまだ露ながら、門の柱にうち添ひたるは、かれが一世の勢ひなるべし。いかなる人かやどりて、いかばかりの仕合すらんもしらずと、頼母しく見やられ侍る。或はすさまじき髭やつこになぶられ、弓同心の衣のふたつけかへ、座敷の手拍子に輕忽の聲をあげて、返事を答へ、油火かきたてる指は、おのがつぶりにぬぐふなるべし。靑天に塗木履を引きずり、急用には赤脚で飛ぶに、御油、岡崎の全盛

もむかしになり果てて、班女、照手がうけ出されたる取沙汰もなし。もろこしの楓橋にて月落ち鳥啼くの吟も、此の君にあはぬ怨みをのべ、江口の泊りに、宿かさぬ君もなくなりて、今はたゞの所にはなりぬ。伊勢路の彩色はあかめがちにて、大津、草津は少しうすかるべし。冬枯のまばらなる比は、いつとなく弱り果てて、鼻の下の煤氣も寒く、木綿所の小車の音もさびしく暮れて、水風呂の火影に足袋さすわざも侘し。片田舍は法度きびしく、表向きは勤めもせず。されどあはれなる方には心ひかるゝならひ、夜更け亭主しづまり、ぬけ道よりしのびやかに、書院床の小障子あけて、神の瑞籬もはばかりなくて大股に打越え、終に一夜の枕をならぶ。出替りは年の暮を定め、給分の加增は赤前垂をこぎる。物皆終りあれば、古筵も薦にはなりけり。此のものの行方何にかならん。昔は普賢菩薩にもなりたる先例もあれど、今は少しの違ひありて、果ては駕籠舁の妻にこもり、瘦子あまた產み捨て、燗鍋の間に餓ゑて、生涯を終る。未來とても覺束なし、紺屋の地獄まではあれど、出女の地獄の沙汰はきかず。たゞ八萬地獄の門々にたたんも、又あはれなるべし。

雜説　　不知作者

人物禽獸は、其の人物禽獸の紛骨なる所に倒れ、山川草木は、其の山川草木のすぐれたる所にたふる。物皆おのが樂しみ纔かなる所に、たふれ果つるも哀れなることなるべし。瞿曇は無爲に倒れ、仲

尼は仁義にたふる。莊老は寓言にたふれ、神仙は靈異に倒る。伯夷叔齊は賢にたふれ、楠正成は忠に倒る。火はあつきにたふれ、水はひやゝかなるにたふる。砂糖はあまきにたふれ、野老はにがきにたふれ、長はながきにたふれ、短はみじかきに倒る。されば瘡を患ふる人は、痒がりをかく所にたのしみ、貧を苦しむものは、盜賊の難なきことをたのしぶ。是れ皆和漢人情の赴くことは、さら〳〵かはる事あるべからず。昔より風雅に倒るゝ人おほき中に、西行は歌に倒れ、宗祇は連歌にたふる。先師ばせを翁は、はいかいにたふれて、生涯を終る。其の門葉あまたの中に、たふるゝ所同じからず。武の杉風は耳のとほきにたふれて、微細の論をきかざれば、二十餘年半ばは流行し、半ばは流行せず。洛の去來は、風雅の正直にたふれて、春風桃李花の開くる日をしらず、其角は作にたふれ、支考は理にたふる。涼菟はふるみのしたるきに倒れ、露川は誹諧の數にたふる。史邦、木導は風雅のつよみに倒れ、千那、李由は風月の情の過ぎたるに倒る。嵐蘭は鎌倉の月にたふれ、丈艸は松本の閑闊にたふる。杜國は横にたふれ、惟然は高みにたふる。尚白は忘梅の趣向にたふれ、許六は文章の文に倒る。されば芭蕉流に倒るゝものあれば、ばせを流をたふす人もあるなり。鶯は時鳥に倒れ、櫻は紅葉にたふる。人は人にたふるゝもあれば、我は我に倒るゝものなり。

愛梅ノ説　　萬子

全篇說レキテ梅ヲ而無ミ梅ノ字一終ノ句以ニテ一ノ梅字ヲ結レ之ヲ

屈原楚辭にわすれ、菅家宰府に招く。西の對のおぼろ夜に、我が身ひとつをかこち、孤山のたそがれに、疎影横斜をうつす。山路の朝日のどやかにさし出でたる、折りかけ垣の匂ひ殊に春めき、谷の扉うらゝかに打霞み、竹の嵐枯葉がちなるに、初音ほころび、十月江南の天氣、醉客馬にねて、酒家の村を出で、師走の冬籠りたる、越路の雪の中に、朝數寄の袂に匂ひをとゞむ。遍照が折奢、皇后の額、數珠、十露盤の粒、蓍木、染屋の汁、これ皆かれが風姿風情のわづかの端なるべし。彼の說にいへるは、牡丹は花の富貴なる物なり、菊は花の隱逸なる物なりと。是れそのかたちにより、其の愛する人によれり。蓮は花の君子なる物なりと、是れは其の理窟によれり。我は其の理窟をとらず、梅は花の風雅を好むものなり。我は其の風雅を好むものを愛する者なり。

艸守藤ノ說　　程己

在老井西鶴之一也

草臥れて宿かる藤は大和路や、實となつては、誹諧のかたちに現はれ、手折りて途笠にかざさば、大津繪の風流なるべし。高松に寄託して、佞者のためしにひかれ、蜂の傍に來れば、怒つて斧をとるわづらひもなし。藤の性酒をこのむ。山主常に餅をたしなむに何の興ありて、かかる長々とは長きこ

とぞ　我おもふ草字藤は、藤の中の下戸なるべし。情中(うち)にあれば色に出づ。これ其の節のかたちをあらはし、三尺ざかりを咲けるよと、貴士より廻してぞうらやまれける。

打鎰(うちかぎ)に蛸のかぎしや藤の花

草刈說　　露川

松の葉かきは手間(てま)のけしきありながら、その親の貧しきより、其の子はつゞれ着てをかしからず。馬糞かく子のいふなれば、親もなく、兄弟もなく、いづこより出でて、いづこには歸るらん。さゞ波や、粟津の松の木の間かけて、馬の鈴音に風情は得たれど、鮑のいふかひなき名なるべし。此の草刈は、笛の名人、さてこそ牛にも乘せておきたれ。夏は朝がけの、見てもいと涼しく、百合風車刈り入れて、絡緯のゐて鳴く日もあるべし。秋はむら雨のとりあへず、道かきいそぎ、荷ひつれたるに、容また晴れて又をかし。鈴鹿はかかるけしきありて、坂は日の照る所なるべし。

草刈の道々こぼす野菊哉

山芋說　　吾仲

芋に數種あり、山中に生ずるを山芋と號し、自然生と稱して山藥(さんやく)に用ゐる。畑に植ゑてまろかせとなるを、つくねと呼んで、其の功も少なく、其の味も次(つぎ)なり。秦楚(しんそ)には玉延(ぎよくえん)といひ、鄭越(ていゑつ)には土藷(としよ)と

號す。杜詩叢中の法をこゝろみず。陳簡齋は玉延の賦作る。鍾山の薯蕷は、三日炊かるれど色を變せず、我が國みちのくの芋は、絲を引くこと藕のごとし。四月に葉を生じ、初秋に子を結ぶ。ぬかごとよばれて坐禪豆に入れられ、いもが子は這ふほどとよみて、叡聞に預る。寒夜の寐酒には、蛾眉山の芋をすり込み、卯月の麥飯には、まり子の宿のとろゝをうらやむ。世に腎藥ともてはやさるれど、貧僧の爲には少とよみしからず。人參よく人を活かし、よく人を殺す類なればとて、棕櫚芭蕉を植ゑまぜて、其の勢ひをもどされけるこそをかしけれ。

嘲ル宵惑ヲ説　　毛　紈

秋の暮のあはれを知らぬ人は、入麵を好み、長雪隱をする人は、唐様の書をすく、風雅のうつる、うつらざるの違ひなり。かの人生得樂を見ず、眠室にかきこもり、寐ることを樂しみの最上とする。寐酒さめ、夢盡きて、ひたもの寢返れども、夜の明くるけしきもなく、屋普請の胸算用も仕あき、大國を領じ、治めんと思へば、言下に治まり、又は金持の浪人となりては、嵯峨の奥に引込み、卜數頭陀に心を變じては、松島象潟に身をよす。されど繪に書ける色に心を動かし、獻立紙にすわりたる心地せられて、やがて興盡きぬ。たまたま庚申の夜ありて、宵寢せぬ物とおどされ、大欠に懸金をはづし、田樂の燒くるを待ちかね、病人の夜伽に當つては、藥風爐に額を焦す。かかる人たのしぶといふ

ことをしらず、琴棊書畫は屏風の模様とおぼえ、花鳥風月は手本に書くとばかりしる。昔宰予が晝寢も、夜ふかすあてに寐つらんかし。古人の燭をとるといへる、誠に故あり。人生七十今時はいさゝ、たとひ五十で死にたりとも、百年の算用にはたつべし。晝ありく鶺鴒は、鷹につかまるれど、夜出づる怪鳥は、網にかゝりても、やがていなさるゝを、たふとしとおぼえたり。

○解　類

獲麟解　許六

魯の哀公十四年、西の狩に麟を得たり。孔子大きになげき給ひて、春秋をとゞむ。たれ麟はいづれの時出でて、孔子は見覺え給ふぞいといぶかし。鼠は愚にして火難の家をさけて命を保つ。麟は四靈の隨一にして、狩あることをしらず、うろたへ出でたるも又いぶかし。孔子みづから聖に高ぶり、もしや牛馬の生まれそこなへるにてやありけん。これも又いぶかし。麟うせ、道行はれざる物ならば、道は麟にのみありて聖人の上にはなきことにや。猶又いぶかし。麟ほろぶれば、聖人も共にうせ給ふ例にてもあるや。たとひ聖人うせ給ふ例ありとも、道はまさしく存せり。是れとても歎くにたらず。儒道たふとしとおもふものは、麒麟を第一にたふとび、次に聖人をあがむべきか。箸折るれば親に離

れ、櫛の歯欠くれば子に別るゝ占ひとて、童蒙のものは深く悲しめり。審かるゝ每に親にも離れず、櫛木履欠くるたびに、子を失ふにてもなし。されば仁義の占ひもあはぬためしもありぬべし。麟をすかぬ聖人もありや、又聖人を好まぬ麟鳳もありや。むかし三皇五帝より以來、孔子の外出でたる聖なし。和國も神代より打ちつゞき、當時百年枝をならさぬ聖朝なるに、麟鳳出でたる取沙汰もなし。犬は戸口を守り、鷄は時を報ず。麟出でて人もおどさず、鳳鳴きて旅客の夢を破る能なし。出ぬ方の聖人、いよ／＼目出たかりぬべし。見ぬ唐土の鳥もねじと、徹書記があやまりたるは、もし出ぬ方をよみたるにや。世間聖人をしらずして、麟鳳にのみ目をつけて、末の凡夫の不目利は、かの一言のあやまりにて、聖人なしとおもふなるべし。今此の麟を解して見るに、とまり兼ねたる春秋の、よき場所に出で合はせ、舉句の趣向と見こなしたらば、何の麒麟に理窟のあらんや。

長汀隱解　　　許六

一藝の達人は、鄕黨に上座を許され、名字持ちたる人と、座席の爭ひをする。早喰ひ、早糞は男子の一藝とは稱し侍る。此の藝おほくは無風雅の人にあり。たとひ一藝はつきたりとも、一藝一德ありて、萬德一藝にはかへがたからんか。されば甲斐の名將の分別所に定め、山といふ隱語を殘し、森蘭丸が、きざみ鞘かごへたるは、信長公も藝者と見えたり。詩歌連誹の名句も、此の所より產み出し、

大悟十八度も、此の宅に入りて工夫をきはめ、つくづくと一とせのあはれを盡して、鳴くや霜夜の蟋蟀、薦の編目をもる月夜まで、人に心はつくるなり。いにしへより朝市に隱家ありといへるは、たしかに此所のことなり。世務所用のいとまなき身も、しばらく閑闊する時は、印綬を解きて、公役を許す。いそぎ閑居に入りて、跡を遠ざけ、半日の寂寞を樂しまんと、尻をかゝげて走る。

何おもふ長嘯院のしぶ團

藪醫者ノ解

汶村

世に藪醫者と號するは、本名醫の稱にして、今いふ下手の上にはあらず。いづれの御時にか、何がしの良醫、但州養父といふ所に隱れて、治療をほどこし、死を起し生に回すものすくなからず。されば其の風をしたひ、其の業を習ふ輩、津々浦々にはびこり、やぶとだにいへば、病家も信をまし、藥力も飛ぶがごとし。それより物替り星移つて、今は長助も長庵となり、助たは助盆となる。當時の藪達を見るに、先づ門口に底拔けの駕乘物をつるし、竹格子に賣藥の看板をかけて、文字の紺青も、半ばは兀げたり。たまさかの藥取りを頼みて、藥店にはしらせ、物申は暖簾の内に答へて、女房の顏をつゝむ。町役には牢舍を療じ、藥代にめでては、河原者にのます。牛膝には牛の膝を尋ね、鶴虱は鶴のしらみをさがす。藥のみも次第にかれて、胃の氣よわり、元氣衰へて、果ては何がし村の道場の

明きをまつ。我が誹諧の道をもてこれを押せば、師說もいまだとほからざるに、其の手筋を失ひながら、宗匠めくをみるに、今はやらるゝ紗綾ちりめんの、乘物の中もおぼつかなく、緋衣木蘭色のさとりの拂子も、心許なけれど、佛法には藥毒の氣遣ひなければ、其の分なるべし。たゞ藪醫者のやぶはらに、又出る竹の子も、藪とならんこそうるさけれ。

風俗文選卷之五

○記類

落柹舍記

去來

嵯峨にひとつのふる家侍る。そのほとりに柹の木四十本あり。五とせ六とせ經ぬれど、このみも持ち來らず、代かふるわざもきかねば、もし雨風に落されなば、王祥が志にもはぢよ、若し鳶烏にとられなば、天の帝のめぐみにもられなんと、屋敷もる人を、常はいどみのゝしりけり。今年八月の末、かしこにいたりぬ。をりふしみやこより、商人の來り、立木に買ひ求めんと、一貫文さし出し悅びかへりぬ。予は猶そこにとゞまりけるに、ころ／＼と屋根はしる音、ひし／＼と庭につぶるゝ聲、よすがら落ちもやまず。明くれば商人の見舞ひ來り、梢つく／＼と打詠め、われむかう髮の頃より、白髮生ふるまで、此の事を業とし侍れど、かくばかり落ちぬる柹を見ず。きのふの價、かへしくれたびてんやと侘ぶ。いと便なければ、ゆるしやりぬ。此の者のかへりに、友どちの許へ消息送るとて、みづから落柹舍の去來と書きはじめけり。

栖ぬしや木ずゑはちかきあらし山

幻住庵記

芭蕉翁

石山の奥、岩間のうしろに山あり、國分山と云ふ。そのかみ國分寺の名を傳ふなるべし。麓に細き流れを渡りて、翠微に登る事、三曲二百歩にして、八幡宮たたせ給ふ。神體は彌陀の尊像とかや、唯一の家には、甚だ忌むなることを、兩部光をやはらげ、利益の塵を同じうし給ふも又たふとし。日比は人の詣でざりければ、いとゞ神さび、物靜かなる傍に、住み捨てし草の戸あり。よもぎ根笹軒をかこみ、やねもり壁落ちて、狐狸ふしどを得たり。幻住庵と云ふ。あるじの僧何がしは、勇士菅沼氏曲翠子の伯父になん侍りしを、今は八年ばかり昔になりて、正に幻住老人の名をのみ殘せり。予又市中をさること十年ばかりにして、五十年やゝちかき身は、蓑蟲のみのを失ひ、蝸牛の家をはなれて、奥羽象潟の暑き日に面をこがし、高すなごあゆみ苦しき北海の荒磯にきびすを破りて、今歳湖水の波にたゞよひ、鳰の浮巣のながれとゞまるべき、蘆の一本の陰たのもしく、軒端ふきあらため、垣ね結ひそへなどして、卯月のはじめ、いとかりそめに入りし山の、やがて出でじとさへ思ひそみぬ。さすが春の名殘も遠からず、つゝじ咲き殘り、山藤松にかゝつて、時鳥しばしば過ぐるほど、宿かし鳥の便りさへあるを、木つゝきのつゝくともいとはじなど、そゞろに興じて、魂呉楚東南にはしり、身

に瀟湘洞庭に立つ。山は未申にそばだち、人家よきほどに隔たり、南薫峯よりおろし、北風海を浸して涼し。日枝の山比良の高根より、辛崎の松は霞こめて、城あり、橋あり、釣たるゝ舟あり。笠とりにかよふ木樵のこゑ、麓の小田に早苗とる歌、螢飛びかふ夕闇の空に、水鷄のたゝく音、美景物として足らずといふことなし。中にも三上山は、士峯の俤にかよひて、武藏野のふるきすみかも思ひいでられ、田上山に古人をかぞふ。さゝほが嶽、千丈が峯、袴腰といふ山あり。黑津の里はいとくろう茂りて、網代守るにぞとよみけん、萬葉集の姿なりけり。猶眺望くまなからんと、後の峯に這ひ登り、松の棚つくり、藁の圓座を敷きて、猿の腰掛と名づけ、彼の海棠に巢をいとなび、主簿峯に庵を結べる、王翁徐佺が徒にはあらず。唯睡癖山民となりて、孱顏に足をなげ出し、空山に虱を捫つて坐す。たまたま心まめなる時は、谷の淸水を汲みて自ら炊ぐ。とくとくの雫を侘びて、一爐の備へいとかろし。はたむかし住みけん人の、殊に心高く住みなし侍りて、たくみおける物ずきもなし。持佛一間を隔てて、夜の物をさむべき處など、いさゝかしつらへり。さるを筑紫高良山の僧正は、賀茂の甲斐何がしが嚴子にて、此のたび洛にのぼりいまそかりけるを、ある人をして額を乞ふ。いとやすやすと筆を染めて、幻住庵の三字を送らる。やがて草庵の記念となしぬ。すべて山居といひ、旅寢といひ、さる器たくはふべくもなし。木曾の檜笠、越の菅蓑ばかり、枕の上の柱に懸けたり。晝はまれまれと

ぶらふ人々に心を動かし、あるは宮守の翁、里のをのこ共入り來りて、ゐのしゝの稻くひあらし、兎の豆畑にかよふなど、我が聞きしらぬ農談。日既に山の端にかゝれば、夜座靜かに月を待ちては影を伴ひ、燈を取りては罔兩に是非をこらす。かくいへばとて、ひたぶる閑寂をこのみ、山野に跡をかくさんとにはあらず。やゝ病身人に倦んで、世を厭ひし人に似たり。つら／＼年月の移りこし、拙き身の科を思ふに、ある時は仕官懸命の地をうらやみ、一たびは佛籬祖室の扉に入らんとせしも、たよりなき風雲に身をせめ、花鳥に情を勞じて、しばらく生涯の計とさへなれば、終に無能無才にして、此の一筋につながる。樂天は五臟の神をやぶり、老杜は痩せたり。賢愚文質のひとしからざるも、いづれか幻の栖ならずやと、思ひ捨ててふしぬ。

まづたのむ椎の木もあり夏木立

十八樓ノ記　　芭蕉翁

美濃の國、ながら川にのぞみて水樓あり。あるじを賀島氏といふ。稻葉山後に高く、亂山左右にかさなりて、近からず遠からず。田中の寺は、杉のひとむらにかくれて、岸にそふ民家は、竹のかこみのみどりも深し。曝布所々に引きはへて、右に渡し船浮ぶ。里人行きかひしげく、漁村軒をならべて、網をひき釣をたるゝ、おのがさま／＼も、たゞ此の樓をもてなすに似たり。暮れがたき夏の日も忘る

はた瀟湘洞庭に立つ。山は未申にそばだち、人家よきほどに隔たり、南薫峯よりおろし、北風海を浸して涼し。日枝の山比良の高根より、辛崎の松は霞こめて、城あり、橋あり、釣たるゝ舟あり。笠どりにかよふ木樵のこゑ、麓の小田に早苗とる歌、螢飛びかふ夕闇の空に、水鷄のたゝく音、美景物として足らずといふことなし。中にも三上山は、士峯の俤にかよひて、武藏野のふるきすみかも思ひいでられ、田上山に古人をかぞふ。さゝほが嶽、千丈が峯、袴腰といふ山あり。黒津の里はいとくろう茂りて、網代守るにぞとよみけん、萬葉集の姿なりけり。猶眺望くまなからんと、後の峯に這ひ登り、松の棚つくり、藁の圓座を敷きて、猿の腰掛と名づけ、彼の海棠に巣をいとなび、主簿峯に庵を結べる、王翁徐佺が徒にはあらず。唯睡癖山民となりて、孱顏に足をなげ出し、空山に虱を捫つて坐す。たま／＼心まめなる時は、谷の清水を汲みて自ら炊ぐ。とく／＼の雫を侘びて、一爐の備へいとかろし。はたむかし住みけん人の、殊に心高く住みなし侍りて、たくみおける物ずきもなし。持佛一間を隔てて、夜の物をさむべき處など、いさゝかしつらへり。さるを筑紫高良山の僧正は、賀茂の甲斐何がしが嚴子にて、此のたび洛にのぼりいまそかりけるを、ある人をして額をこふ。いとやす／＼と筆を染めて、幻住庵の三字を送らる。やがて草庵の記念となしぬ。すべて山居といひ、旅寢といひ、さる器たくはふべくもなし。木曾の檜笠、越の菅蓑ばかり、枕の上の柱に懸けたり。晝はまれ／＼と

ぶらふ人々に心を動かし、あるは宮守の翁、里のをのこ共入り來りて、ゐのしゝの稻くひあらし、兎の豆畑にかよふなど、我が聞きしらぬ農談。日既に山の端にかゝれば、夜座靜かに月を待ちては影を伴ひ、燈を取りては罔兩に是非をこらす。かくいへばとて、ひたぶる閑寂をこのみ、山野に跡をかくさんとにはあらず。やゝ病身人に倦んで、世を厭ひし人に似たり。つらつら年月の移りこし、拙き身の科を思ふに、ある時は仕官懸命の地をうらやみ、一たびは佛籬祖室の扉に入らんとせしも、たよりなき風雲に身をせめ、花鳥に情を勞じて、しばらく生涯の計とさへなれば、終に無能無才にして、此の一筋につながる。樂天は五臟の神をやぶり、老杜は瘦せたり。賢愚文質のひとしからざるも、いづれか幻の栖ならずやと、思ひ捨ててふしぬ。

まづたのむ椎の木もあり夏木立

十八樓ノ記　　芭蕉翁

美濃の國、ながら川にのぞみて水樓あり。あるじを賀島氏といふ。稻葉山後に高く、亂山左右にかさなりて、近からず遠からず。田中の寺は、杉の一むらにかくれて、岸にそふ民家は、竹のかこみのみどりも深し。曝布所々に引きはへて、右に渡し船浮ぶ。里人行きかひしげく、漁村軒をならべて、綱をひき釣をたるゝ、おのがさまざまも、たゞ此の樓をもてなすに似たり。暮れがたき夏の日も忘る

るばかり、入日の影も月にかはりて、波にむすぼるゝかゞり火の影もやゝ近く、高欄のもとに鴨飼まゐるなど、誠にめざましき見ものなりけらし。かの瀟湘の八つのながめ、西湖の十の境も、凉風一味のうちに思ひためたり。もし此の樓に名をいはんとならば、十八樓ともいはまほしきなり。

此のあたり目に見ゆるもの皆凉し

五老井記　　許六

靈泉あり、水のたゝゆること、纔かに尺あまりにして、三尺の盆池より流れ出づること、潺々滔々たり、五老井と名づく。別墅をひらきて、五老庵を結ぶ。主人姓は森、名は許六、みづから五老井先生と僭す。五老は予が別號なり。驛が原不知哉川をながれて、鳥籠の山南に近し。十旬の休暇をうかゞひ、半日の閑を領する所なり。遙かに聞く、東江ばせをの翁、錫を坂西に廻かしめ給へるの折ふし、靈泉を共に汲んで、風騷の匂ひを、葎の中にとゞめんとならし。其の水の清きことは、惠山の泉脈を通じ、甘きことは肅州の金泉にひとし。立ちかへる春の朝、白散の藥をさげてより以後、四時の生涯を養ふことかぞふべからず。一とせの間に、わきて泉を賞ぶことは、夏を主とす。霍山鳴が井盤の納凉、西上人の柳の陰も、今此の水に傚そひぬ。其の徳其の要廣大にして、神佛の尊きをすゞしめ、且堯の井を掘り、禹の水土をたひらげてより、四民猶おだやかならしむ。後に山あり、さゝ栗の岡とい

ふゞ晴れに望み、雪に對して、眺望きはまりなし。湖水の島々、江南江北の山のたゝずまひ、日枝伊吹の嶺、比良三上の高根に、眥をさく。西南の間に千鳥が閣あり、聖徳太子の御歌より、大士の名所となりぬ。枝を扱きては鼪を逐り閣に登る。巌は韲をたすけ、栗は若粥を炊ぐ。抑庵は、纔かに莚三枚をまうけて膝を容れ、賓主六人一座に余からず。茶椀五つ、枕五つ、筆墨の外に物なし。月に杜鵑をそへ、野路の錦に、里の砧を合はせて、秋を悲しむ。庭に帚をあてず、樹に木鋏を入れず、窗前の草おのづからなり。たま／＼畑を穿てば、絡の瓜種を求め、五色の茄子を植うるといへども、山蟻の為にせゝり荒さる。吁濟居士、文書に僻する事二十餘年、子瞻、是之を師とし、楊子、梅道人が骨髄を伺つて雲裏りばせを、炎天の時、自然に一味の風雅を兼ねんとす。世上予が筆墨を楽しみて、予が心頭の楽しびをしらず。風雅は是非をあらそひ、書圖は綿童の前のたはぶれとなる、いまだ風雅の為に、文書を楽しぶといふものを聞かず。予と共に志を同じうして、はやく居をたすけよや／＼、終日樹下に徘徊すれども、更に答ふるものなし。四鄰の鳥聲、花間の蜂蝶のみ。笑つて青天に腹鼓を鼓し、五老の流れに耳を洗つて歸る。于レ時元祿五年壬申春二月、於二婆羅樹林下一識レ之。

水筋をたづねて見れば柳かな

九花亭ノ記　汶村

亭主あり、九花と名づく。九華は何ぞや。抑九花安妃に神仙の名にして、山に九花あり、丹に九花あり。舍に名よぶは主伎の用ゆる處、魏の武帝は臺に名づけ、唐の伊氏は室に名づく。觀あり、殿あり、帳あり、扇あり。菊に九花の名ありて、茶にも又此の美稱あり。上清眞人は、日月を呼んで七寶九華とし、李正臣は、壺中の九華をたくはふ。建勲は九花先生と號し、荀鶴は九花山人と稱す。我が四柱の亭、九は陽の極數といふ理窟にも渡らず、華は壯麗のひくみにもあらず、たゞ方寸をやしなふの天地にして、春は曙、千里鶯啼きて、梅かうばしき朧月に嘯き、青楓風凉しく、ほとゝぎすあやめにかをり、水鷄若竹に敲く。蔬女郎花露細うして、菊は黄に、柞さびしけなり。比良伊吹遠くそびえ、金龜金花ちかく峙てり。亭外の風物少なからず、亭中の物數、又いくばくぞや。屏風、傘、味噌、疊、馬一匹、鶴一羽、亭あり、其の人は誰ぞ。近陽城下、松氏汶村みづから記すといふ。

琵琶亭ノ記　　許六

むかし嘉祥の比、貞敏といふ人、三面の琵琶を唐土より傳はり、猶代々に作りおかれたる樂器おほしといへども、あるは火の爲にやかれ、又田舍の土に落ちて、口をしきことのみおほし。こゝに名物一面ありて、終にもてあそぶ人なし。島の經政も、撥短うしてとゞきがたく、關の蟬丸も、膝せまければするゝ所なし。柱には四つの島々をたてて、落つべきわづらひもなく、何某が袂のそくいひもいた

けらなるべし。鏡面には唐崎の松をゑがき、覆手には、勢田の長橋を横へたり。二つの月は、出しは入方のながめを添へ、四時の細き絲筋を、絃手にねぢあけ、花さそふ山風に、春の別れををしみ、鶉鳴く濱の夕暮には、秋のあはれを悲しむ。あけては彈じ、暮れてはをさむ。倦む時は比良横川に足を打ちかけ、眠る時は三上伊吹に枕を高うす。此の亭のあるじは誰ぞ。杉原氏、みづから高ぶり、これを琵琶亭と名づく。昔伯牙がしらべも、鍾子期が耳なくては益なし、これをきく人は誰ぞ、五老井の許子六、力を合はせ口に任せて記す。同じ穴の狐の寄合ひ、犬の嗅ぎつけぬ間を重寶と見るべし。

風臺水臺ノ記

許六

四梅廬の南北に、風臺水臺を築く。風は涼をとり、水は月を弄するの心なるべし。春の風あたゝかに吹けば、水香しうして、梅の影を浸し、秋の嵐雲に音信れては、池あれて荷葉おおそかなり。主人律師、風に乘じて遊び、醉客李氏酌んで月をとる。兼て榮耀をこのまざれば、まして名利の煩はしきもなし。常に風狂の遊上、此の臺にのぼつて、風水の二つを諍ふ。其の爭ふ所は、たゞ餅酒にあり。上戸方は、風臺にふかれて水をうらやみ、下戸等は、水臺に腹をふくらかして風を望む。其のいどみを見るに、蝸牛雙角の諍ひに等しく、源平水陸の戰ひに似たり。されど酒のみは、吞みおぼれ、足よろめきて、下る事得難く、餅好きは、胸焦れ、喰ひおもりして、更に動くに懶し。終に相引に引退き、

上戸は桓公の蚊となつて禮を忘れ、下戸は蝦蟆と化して腹を撫でて、樂しむのみ。

○紀行類

鹿島紀行　芭蕉

洛の貞室、須磨の浦の月見に行きて、松かげや月は三五夜中納言といひけん、狂夫のむかしも懐かしきまゝに、此の秋鹿島山の月見んと、おもひ立つことあり。伴ふ人ふたり、ひとりは浪客の士、ひとりは水雲の僧、僧はからすの如くなる墨の衣に、三衣の袋をえりに打掛け、出山の尊像を、厨子にあがめ入れて、背中にせおふ。拄杖曳きならして、無門の關もさはるものなく、あめつちに獨歩して出でぬ。今ひとりは、僧にもあらず、俗にもあらず、鳥鼠の間に名をかうぶりの、鳥なき島にも渡りぬべくて、門より船に乘りて、行德といふ所に至る。船をあがれば、馬にものらず、細脛のちからためさんと、歩行よりぞ行く。甲斐國より、ある人の得させたる檜木もて作れる笠を、おの／＼いたゞきよそひて、やはたといふ里をすぐれば、かまがいの原といふ廣き野あり。秦甸の一千里とかや。目もはるかに見わたさるゝ。つくば山むかうに高く、二峯ならび立てり。かの唐土の雙劔の峯ありと聞えしは、廬山の一隅なり。雪は申さずまづ紫のつくばかなとは、我が門人嵐雪が句なり。すべて此の

由は、日本武尊のこと葉をつたへて、連歌する人の、はじめにも名づけたり。和歌なくばあるべからず、句なくば過ぐべからず。誠に愛すべき山の姿なりけらし。萩は錦を地に敷けらんやうにて、為仲が長櫃に折り入れて、都の土産に持たせたるも、風流憎からず。きちかう、をみなへし、かるかや、尾花みだれ合ひて、小男鹿のつま恋ふ聲、いと哀れなり。野の駒、所得がほにむれありく、又あはれなり。日すでに暮れかゝる程に、利根川のほとり、布佐といふ所につく。此の川にて鮭の網代といふものをたくみて、武江の市にひさぐ者あり。宵の程、その漁家に入りてやすらふ。夜の宿なまぐさし。月くまなく晴れけるまゝに、夜船さしくだして鹿島に至る。晝より雨しきりに降りて、見らるべくもあらず。麓に根本寺のさきの和尚、いまは世をのがれて、此の所におはしけるといふを聞きて、尋ね入りてふしぬ。すこぶる人をして、深省を發せしむと吟じけん、しばらく清淨の心を得るに似たり。曉の空いさゝか晴れぬるを、和尚おどろかし給ふれば、人々おどろき出でぬ。月の光、雨の音、たゞ哀れなるけしきのみ、むねにみちて、いふべき言の葉もなし。はるばると月見に来たるかひなきこそ本意なきわざなれど、かの何がしの女すら、時鳥の歌、えよまでかへりわづらひしも、我がためにはよき荷擔の人ならんかし。

月はやし梢は雨を持ちながら　翁

雨に寢て竹おきかへる月見哉　曾良

南行ノ紀

李由
許六

鳥は黒く生まれながら、鷺の白からん願ひもなし、笠はあるにまかせ、雨を凌ぐ物に、菅蓑はあれど、今様は合羽で仕廻ふ。錢を入れたるは、草鞋一足にて、天晴旅人の出立は出來たり。十月晦日といふ日に、蝸牛の家を離れ、名吉の國廻りにうかれ出でて、田づらの柳、木瓜、すゝき、遠音の雉子のうす曇り、旅の心にはなりきりたり。前途路遠しと、杖の頭をからふかし、首にかけたる頭陀袋、身は雲水の果てしなき、布引山の山中に、道連せばやと見れば、見しれる聖なりけり。男是れより、角文字やいせの野飼の跡や先やと打ちつれ、やがて土山の泊りにつく。手ぶるき水風呂の時宜に時をうつし、聖長袖の役に、其の夜はあら湯を請取る。明日よりは湯番の前後を定め、猶日々のこと筆に記さん。これも湯番につけて廻すべしとて、書記も湯番も男に渡しぬ。

明くれば彌生朔日、湯番の男ぬからじと起きて、行くべき所へ走る。例の一盞長々と勸めければ、聖もゝ尻にて待ち兼ねたり。天氣よき夜明の雲あひしらみかゝり、並木の木陰、まだほのくらく、遠近人の笠の内、そろ／＼見えたり。鈴鹿山越えんとて、聖駕籠、男馬。

天井に首はつかへて山ざくら　聖

伊勢はてる馬士の鈴鹿や花曇り　男

下り坂、山あひくらく、朝霞の中に、坂迎の話も程なくちかよりたり。

鶯も竹屋どまりや朝あらし　聖

昔氣色は、閑の地藏にて見るなり。茶店をすこし打ちたゝきて、しばらく、腰をかけたり。

田樂やあふのく口になく雲雀　男

たそがれ過ぐる比、雲津に著けば、宿の案内もおぼつかなし。

二日、聖夜ぶかく起きて、非番の男を起す。煤氣たる行燈の影に、會津盆の打ちひらめたるに、日野椀の壺皿、いとさびしげにつきすゑたり。見る目いぶせく胸ふさがり、やがてもかゝらず、杉箸しらけ直し、腹のけしきつれなければ、其の日の假をはらふ。はき物は寝所よりしめつけ、笠は上壇より著ながら、此の宿を出でたり。前後の家並はしづまりかへり、左右の鷄の聲、みだれたる中を出でぬけて、火繩の火影ちら〳〵と見えがくれなり。紀行毎に、溫庭筠が早行も聞きあきぬれば、此の度は法度にして、雲津川の假橋を渡る、かくはいへど景氣胸の内にうかめたり。松坂の矢川といふは、人の面白がる所なり。其の所さき肩にとへば、今は絶えてたゞの所になりたりといふ。筑摩、朝妻、江口、神崎は、むかし語りとも覺えぬるに、きのふの淵は、けふの矢河となりて、人かはり、家かは

りぬれば、搗き米の船には、おなしく蠅のむらがり、草履草鞋の鏇は、徒らに風に動く、今は其の上に色香もなし。

　松坂や越後屋とへば江戸ざくら　　男

　出女の雲むら消えて明野哉　　里

宮川の渡りを越えて、代垢離の子供は、蛙の如く、一錢剃りの鋏は、鬢に損たり。

　髪結の腰にしだるゝ柳かな　　里

山田に入りて、何かし大夫のもとにつく。日高ければ、參宮の支度して出でたり。

抑、神前に詣でぬれば、よろづの事は忽ち忘れて、かたじけなさの一すぢに、涙はおとし侍りぬ。

　奉納二句

　青海苔も和光の塵のひとつ哉　　男

　松櫻川を隔てゝ墨の袖　　里

天の岩戸に入れば、燈明かゞやかし、常闇のむかし思ひ出でられ、有り難き事かぎりなし。

　穴藏と見ればおそろし雉子の聲　　男

内宮に詣でて、御社近き杉のむら立ちに、御裳濯川は請く流れ、御實前はしんしんとして、くり石

の上に畏り拜し奉る。つたなき心にも誠はありて、またとらなき嶺の松風身にしみわたり、小袖の膚にさはりぬるも、いま／＼しき心地せられ、あまりに忝きと思ふ折は、さむきものなり。文奉納、

百八のなみだのかゝる蕨かな　嬰

今ぞしる月日の花も梅さくら　男

つきせぬ御名殘も暮に及べば、すでに御暇申して出でたり。二見の方もゆかしけれど、行くさきいそがしければ、思ひとゞまりて、例の大たの許に歸りて臥しぬ。

○序類

曠野集序　芭蕉

尾陽蓬左、橿木堂主人荷兮子、集を編みて、名をあら野といふ。何故に此の名あることをしらず。予はるかに思ひやるに、ひとゝせ此の郷に旅寢せしをり／＼の書き捨てを集めて、冬の日といふ。其の日かけ相つゞきて、春の日また世にかゞやかす。けにや衣更着彌生の空のけしき、柳櫻の錦をあらそひ、蝶鳥のおのがさま／＼なる風情につきて、聊か實をそこなふものもあればにや、糸遊のいとかすかなる心のはしの、あるか無きかにたどりて、姫ゆりの何にもつかず、雲雀のおほ空にはなれて、

蕉翁のきはまりなき道芝のみちしるべせんと、此の野の原の野守とぞなれるべらし。

元祿二年彌生書

猿蓑序

其角

はいかいの集つくる事、古今にわたりて、此の道のおもて起すべき時なれや。幻術の第一として、其の句に魂の入らざれば夢に夢見るに似たるべし。久しく世にとゞまり、長く人にうつりて、不變の變をしらしむ。五德はいふに及ばず、心をはらすべきたしなみなり。彼の西行上人の、骨にて人を作りたてて、聲はわれたる笛を、吹く樣になん侍ると申されける、人には成りてはべれども、五の聲の別れざるは、反魂の法のおろそかにはべるにや。さればたましひの入りたらば、アイウエオよく響きて、いかならん吟聲も出でぬべし。只誹諧に魂の入りたらんにこそとて、我が翁行脚のころ、伊賀越しける山中にて、猿に小蓑をきせて、はいかいの神を入れたまひければ、たちまち斷腸の思ひを叫びけん、あだに懼るべき幻術なり。これをもとゝして、此の集を作りたてて、猿蓑とは名づけ申されける。これが序も、其の心をとりて、魂を合はせて、去來凡兆のほしげなるにまかせて序す。

宴二スル柳後園一ニ序

支考

世にあそぶ人ありて、綾羅錦繡に樂しぶ時は、樂しみつきて後たのしむものなし。山林樹下にあそ

ぶものは、心にみたざれば、世にうらやむかたも出できぬべし。此のふたつのさかひに居らざるものを、心に天遊ありとぞ、昔の人もいへりける。されば柳後園の何がし、三四の友達ありて、遊ぶこと日あらず。額には閑の一字を題して、靜かならぬ時は横になし、やかましき時はさかさまに置きて、其の時の心に隨ひ行くは、大小の額見る心にや侍りけん。此の日東花坊も、此の中にあそびて、人々酒飲まんと催したるに、心に物をとめ、口に餘情をいふ人ならば、罰は金谷の酒もをしからん。誹諧に案じ入りたる時は、こよりといふものにして、くさめさせむとぞたはぶれける。

近江八景序　　千那

近江八景は、湖水の絶景をあつむ。比良堅田より、三井石山に連なり、粟津辛崎を見渡し、勢田矢橋を合はせ、瀟湘の八景になぞらへ、八つの所を定む。そのかみ永祿第五、仲秋の月に乘じて、近衞の政家公、石山寺にあそべる時、始めて此の景を詠ず。すべて我が朝國々の八景、諸寺諸山の十境、題せずといふことなし。されど此の湖上の八つに、いまだ並ぶものを見ず。いにしへより、八つの詩歌はあまたあれど、誹諧の八景あることを聞かず。されば近江八景はあふみ人がよしとして、繪は五老子が筆をかり、題はわが里、堅田の病鴈の夜寒をはじめ、自他遠境の作を集めて、すでに近江八景の一軸となす。これを集め、是れに自序するものも、江州の産、蒲萄坊の主人僧千那、筆を本福寺の

東軒にとる。

四絶文章序　　李由

許氏が五老井に四絶あり、絶は絶勝の義なるべし。一つには神宇樓、二には揚揮亭、三には雲花園、四には紫芝閣なるべし。我問ふことあり、四は須彌の四州によるや。曰く、然らず。四海四方の四にあらずば、四時四月の四ならずや。曰く、然らず。四恩四教の四に頼らずば、四民四姓の四の數によるや。曰く、然らず。四天四睡を願はずば、四十四時の四をうらやむか。曰く、然らず。我憫然として、問ひをやめたり。許子が曰く、分別理窟は我が有にあらず。若し三絶五絶の増減あらば、吾子が算用はたた所に相違すべし。唯一二三四の第四番に當れば、四絶とはいふなり。むかしおろかなる法師あり。無才にして法名の文字にくるしめり。ある人をしへていはく、まづ法の一字をかしらにかうぶらしめて、下はいろはを以てつくべしと。法師おほきにちからを得て、やがて法以、法呂と、段々に名つけて、すでに十二の篇にいたり、第六の番に當れり。時にかはらけ賣り身まかりて、法名たべといへば、法六と改名して、やがてとらせぬ。妻子ふかく悲しび、たとひ此の世の業は是非なし、せめて來世に生まるゝ時、此の苦患を助けたべといへど、法師かしらをふりて、我が法名は土のたぐひにはあらず、今六の當番なれば、是非なしとて、終に法六になして贈りぬ。今子が四絶もかくの如し

とゞおの／＼これを感じて、說、賦、銘、贊の四文を書して、終に五老志にとゞむ。某李由これに一章を加へて、おそらくは五絶とならんことを知りて、やがて四文章の始めに序して、此の心をのべて、此の罪をのがるゝのみ。

要文集序　　許六

相坂山の杉に雪はふれども、法華經々々と囀り出し、淀のわたりの夜深きに、本尊かけた／＼とぞ鳴きける。百千のとりどりに、おのが一聲の外に、かはりたる音聲もきかず。鳥のかあ／＼と鳴き暮し、雀のちい／＼と同じ事囀るに、飽かずやありけん、本尊をかけ、法華經よむ鳥は、かあ／＼ちいちいよりは、少し物しりたる顏つきこそをかしけれ。其の顏つきにても、同じ事ばかり囀るに、イヤ、チウ、にくし可愛しのかはりめやありけんかし、よくぞ聞きわけける。もろこしの鸚鵡といふ鳥は、人のいふことをよく眞似ける。此の國に渡りても、和語を聞きしり、父、母、爺、口鼻をよくぞまねける。此の鳥此の國になければ、始め終り慥かならず。かれもこれも、もどかし鳥といふは、父母の產みつけたる囀りもなくて、明暮諸鳥の眞似を所作とし、一生餌袋にたくはへたる囀りもなし。たゞさら／＼、つら／＼と霰ふりける柞原に、あることないこと虛言八百、これを樂しみの最上とおぼえて、筆にまかせ書き付けたるを、要文集とぞ申し侍りける。

畫樓繪合ノ序　　許六

和朝のいにしへ、繪かく人の中に、火難に家を燒きて、不動尊の妙筆をふるひ、あるは他の國に起き、漢王の夢に入りて、雪ふねの名を殘す人もありけり。當世の風情はあはれすくなし。布袋、福祿壽の二筆を覺えて、あつはれ畫師の一列に入る。弟子となり、師と賴む時、第一番に人前ををしへ、次に筆法をしめす。唐土のゑがく人は、樓を造りて人を禁ず。起きてゑがき、寢てゑがき、おのが精神を盡す。猫をゑがきて鼠を絶やすも、むべなるかな。われ畫樓を造らんこと望み久し。されど沈痾老病につかれて、筆をとる日稀なり。一とせの中、夏暑の六七月は、墨爛れ、膠とらけて、ゑがく日なし。冬寒の三月は、水凍り、筆かじけてゑがく日なし。是れを一とせ五ヶ月の禁筆とさだむ。猶雷雨風雷は、一日の禁筆、又公私のいとまをぬすみ、花に坐し、水に戲れ、月に嘯き、雪に吟じて、又ゑがく日すくなし。たま／＼清朗の日あつて、ゑがかんと席をうつし、水を汲む時、例の雜客入りみだれ、或は物喰ひ、酒飲み、炭火にからをはたき、果ては莊蝶が生寫しにあき果て、今年の春、頻りに畫樓を造る。おほきさ方丈餘り、東西の銘は、薄暮雲霧のくらきを拔く。北に書齋あり。半日は樓にのぼり、半日は齋にこもる。人來りて繪を好む時、きはめていふ詞あり。遲きことは三會の曉を期すと約してかへる。次の日來りて、はや遲々の罪を責む。予が鄰家にすむ人、一生ゑがくことを知ら

ず、一生遲々の罪をうけず。我たま〳〵繪なつて求めに應ず。遲しといへども鄙人にははやし。三年過ぐる日は五年めなり。五年終る時は、七年の月日なり。これ成就の時節としるべし。樓成つて門弟子六人題を採つて、人物山水花禽をうつす。各一軸を懷にして左右に列なり、すでに勝負を爭ふ。此の撰にもるゝ門人すくなからず。これを畫樓の繪合といふ。樓主五老井許子六、自ら序作つてふける。鄭公が樗散にして、老畫師と稱するのみ。于レ時元祿壬午ノ冬、十一月日書レス之ヲ。

麻生後ノ序　　　　　許六

麻生の名を、烏帽子折ともいふは、好きに赤烏帽子と同じゑぼしの釋なるべし。すべて世は好き嫌ひの二つより流れ出でて、天地黑白のたがひともなるべし。妹といふは人丸の好き、西行はなりけりより事起りて、後京極殿は、雪の明ほのやうを好きたまふ。俊成卿の鶉に、寂蓮法師の槇の夕暮は、たま〳〵なるべし。桃といへば、桃鄰に極まり、翁は蒟蒻をすかれたり。是れは精進物の沙汰に及ぶべし。晋子が傾城に、阿山人が出女は、朝夕にして、名護屋の柿の、かの字のひゞきは、末摘花のから衣と、同じ五音のカキクケコなるべし。烏落人が赤いは〳〵の赤きは、好きに赤烏帽子の、あかい所を發明したり。されば、撰者の范字も、柳後園の人なれば、柳の靑き所をも、此の集に述べらるべしと、俳諧大居士跋す。

銀河ノ序　　芭蕉

北陸道に行脚して、越後國出雲崎といふ所にとまる。彼の佐渡が島は、海の面十八里、滄波を隔てて、東西三十五里に、よこほりふしたり。みねの嶮難谷の隈々まで、さすがに手にとるばかり、あざやかに見渡さる。むべ此の島は、こがね多く出でて、あまねく世の寶となれば、限りなき目出度き島にて侍るを、大罪朝敵のたぐひ、遠流せらるゝによりて、たゞおそろしき名の聞えあるも、本意なきことに思ひて、窓押開きて、暫時の旅愁をいたはらんとするほど、日すでに海に沈んで、月ほのぐらく、銀河半天にかゝりて、星きら／＼と冴えたるに、沖のかたより、波の音しば／＼はこびて、たましひけづるが如く、腸ちぎれて、そゞろに悲しびきたれば、草の枕も定まらず、墨の袂なに故とはなくて、しぼるばかりになん侍る。

あら海や佐渡によこたふ天の川

番椒ノ序　　野坡

たうがらしの名を、南蠻がらしといへるは、かれが治世、南蠻にて久しかりしゆゑにや、詳かならず。酸漿子、天覗き、容見、八つなりなどいへるは、己がかたちを好める人々の、翫びて付けたるなるべし。皆やさしからぬ名目は、汝が生得のふつゝかなれば、天資自然の理、さら／＼うらむべから

す。かれが愛をうくるや、石臺にのせられて、竹縁の端のかたにあるは、上々の仕合なり。ともすれば雷鉢のわれ、底ぬけ釣瓶に培はれて、やねのはづれ、二階のつま、物ほしの日陰をたのめるなど、あやふく見え侍るを、朝貌のはかなきたぐひには、誰も／＼思はず、大方はかづら籠つり籠の籬にかしづかれて、貧乏樽の口をうつすみさかなとなり、不食無菜の時、不圖取り出され、多くは奴僕豆腐の比、紅葉の色を見するを、榮華の最上とせり。かくはいへど、ある人北野詣での歸るさに、道の邊の小童に、こがね一兩くれて、汝が青々とひとつみのりしを、所望せしことありといへば、いやしからるべきにもあらず。しかじ、いまは其の人々も此の世を去りつれば、いよ／＼愛をも頼むべからず。からき目は見すべからずと、小序をしかいふ。

石臺を終に根こぎや番椒

風俗文選卷之六

○箴類

飲食色欲ノ箴　許六

善は常なり、惡は變なり、惡出でて後善顯はる。善惡に迷はぬ人は、其の善惡になづまぬ人なり。食は禮より重く、色は民と共にせよとかや。されど食の命をやしなひ、色のあはれをしれる功も、なづむ心より、やがて大病を生ぜり。色は三教ともにくむこと甚しきゆゑに、甚だ制せられず。和朝歌道のをしへの高きことは、戀を第一とす。色は風雅なり、風雅は仁なり、惻隱の心なり。大舜の二女に嫁したまへるも、今日おして見る時は、是れ畜生なり。かの流れを汲むやからは、これらをもよしとなづめり。元來畜生兄弟姉妹と嫁することをせずは、人倫は姉妹と嫁する事を道とやはいはんか。彼の教へには、後なきを不孝の第一とたてて、孝を五倫の始めにおけり。若し周公、孔子、天性精の虚したる人ならば、子なけん。第一の孝道は缺けぬべし。是れとても聖人のまつたきといふべきか。桀紂が極惡も、子あれば是れ孝子なり。子なき君子にはまし侍らんか。

吾が朝、いづれの御時よりか、西域の教へを廣めり。此の教へは後なきを第一とせり。其のなかれをたつる者世に多し。大路を行く人も、十が三四はこれなり。神の道に合してこれを南部と云へり。扶桑東夷の機をよくしり、且小國の分量をよくさとせり。地の狹く、人の過ぎたる國なり。彼のやからの人々、後なきを不孝とし、鼠の子を産み捨て侍らば、程なく富士山もこぼち入れられ、湖も彌鹿飛びを切りぬく沙汰に及ばん。堂塔に金銀を鏤め、法事法席に美を盡すといふとも、其の費えは國にとゞまりて、他の所へはもれず、多くの眷屬の食らひつぶし侍らんよりは、いとめでたし。佛供といへる物は、供へたるばかりにて、嘗てへらず。是れ日の本建立の源ならんか。こゝを切れ、かしこをたて、子孫あらせじと思ふなりと宣ひて、一人の罪人となり給ふ、御心こそありがたけれ。しかはあれども、此の頃は僧のかくし子といへるものあれば、少しはもどるか。

饂飩は汁をほめられ、蕎麥切は、辛味に威をとられり。奈良茶は、跡一杯を茶につけらるれども、其の號を持てり。飮食器物共に、勝れたる極品の物は、賓客のもてなしとせるに、煙草ばかりは、亭主を奔走せり。客人たばこは、へらぬを調法とせるは何ぞや。

餅は心地よき物、酒はうれしき物、茶は寂しき物、餅くひは酒をのまず、酒好きは饅頭をくはず、是れ天の自然か。たま〳〵上戸に、嫌ひなき生まれつきあるは、牙あるものの角をいたゞきたる類と

やいはん。

傾城の色は、許子が見届けて、いひふるしたれども、遊君の情は、下品にこそをかしきことはあれとて、木導は出女の上を盡せり。よき遊女のきぬぎぬのうつり香は、こぬか袋の匂ひとも思はるゝや。傾城の匂ひは、郡内縞のうつり香ならん　追込辻君のたぐひは、にほひ倂て定まらず。

隱居の妾ほど、うらやましからぬ者はあらじ。定まれる名をさへいはれず、若きも、祖母々々とよばれつることこそうたてけれ。色欲におぼれて、あくまで淫するものは、男女に上下のたがひありて、高家富貴の人の妻は、七人半のあてがひといへるも、男子の德とおぼえり。たとひ七人が一人といはれたりとも、いやとはいふまじきに、半ばとかぎりたる、はしたの妻こそおぼつかなけれ。

下駄の男、鼻紙の知音と定めて、いくたりのたまを重ね侍るは、下女やはしたの上の奢りなりけり。

筑摩の祭のあとたえて、行はれざるは、かれらが爲には、おほきなる仕合ならん。かかる淫樂の世となり行くも、神道の衰へたる、神のとがめとやいふべき。

鮟鱇、河豚魚といふ魚あり、形も大きにうまれつきて、あくまで肉をくはれながら、汁を吸はるゝをも手柄にいはれけるこそ、大きなる損なれ。

鯛は魚の最上とほめられながら、鼻屎にて釣られける例もありや。いと口をし。

鯑といふものは、魚類の下品にいひなされて、賤しきもののそへ物となるのみならず、田畠の肥となることそ、なほ口をしけれ。しかれども、正月のことぶきに引出されて、上臈のまじはりをするを自慢顔なり。されども頭ばかりをはやされ、獄門の如くになりて、口々にさされ、果ては箸の先にかゝりて行方しらず成り行きけるも、猶々口をし。

かながしらといふ魚は、あたまがちのみにて、くふべき所すくなし。彼のかしらのかたき所に手柄ありて、産屋のことぶきには、かしらかたかれて出づる。惟然坊が、つぶりのやはらかなるは、彼にも似よかし。

魚鳥の匂ひをもてなさるゝは、むしろ喰はれながらも、本意とやは思ふらん。

鴫は、芹の香の俤を殘し、雉子は昔なつかしき匂ひをとゞめり。痩せて小兵とはいへども、雲雀のいきりもの、水無月の鶴鴈とほこりける。

生海鼠といふものの匂ひは、たとふべき物なし、牛蒡の香にかよひてをかし。松茸のふんふんたる物に、毎度柚の相客に出でらるゝたぐひ。

燒蛤の馨しきには、胡椒の粉の鼻に入りたるがうれし。かほやきの匂ひ、風流にはあらねどうまき匂ひとやいはん。

ある法師の、茄子の鴫燒をほめられければ、傍の俗人、鴫の茄子燒も又よしと返しける。

時を感ずるといへるは、かけ菜に打大豆汁の春めきたるもあるに、つまみ菜に、唐がらしの青くさきは、初秋のあはれをすゝめり。

芹燒のたうを、春の景物に選み置くは無念なり。定家の卿、冬の花に梅を讀み給ふいとよし。

鰤は、節振舞をかぎりとし、鯖は生身玉を終りにとれり。

さんちやは四つ時、出女は八つを威勢の盛りといふべし。吾が翁、色と義の道をしめしたまへる詞にも、

色をおもふ事は、うどんを見るがごとく、

義を守るものは、唐がらしの辛きに類せよと。

山葵、生姜、蓼、からし、山椒の辛き類も、各其の場所を得たり。海鼠腸といへる物には、わさびの打ちあがりたるからみをすり込み、昆布に卷き込まるゝ時は、山椒の手柄を見せたり。鯉のにつけの淸げに、飯鮹のおぼつかなき味をもてる。

色は思ひのまゝならぬを命とはよめり。あはぬをかこち、逢ふ夜の鳥をうらみ、待つ宵の鐘に戀の情を盡せり。湯殿紫部屋のせは〴〵しきちぎりに、百とせのよはひをのべたる心地して、さらぬ顏を

つくりて出でたるもをかし。せはしき事を、戀の哀れといふとも、八坂北野の茶屋ものの振廻ほど、手廻しなるはなし。燭臺を握り、階子に上り、客を迎ふるより進退に左右の手を空しくせず。内の亭主心得て、二階口へ銚子杯さし出し取肴あまたならべり。二三獻の過ぐるを待ちかね、屛風引廻したるは、つまみくらひたる、鮹や醂貝の、胸につかへたる心地やせん。

玉子、山芋は、腎の藥とばかり覺えて、同じ食ひものならば、水をます物にしくはなしとて、朝夕すゝめり。虛實ともに病となりて、剋する所をしらず。古人も、口よく病を致し、其の徳を敗る。口を守ることは瓶の如くせよとはいへり。吾が生は限りあり、情欲は限りなし。色好むものは、みだりに淫せず。傾城に家を亡ぼすものあれど、賢慮をしたる人をきかず。

聽ノ箴　許六

耳はきくことの役者にして、聖人耳に惡聲をきかずといふは、大きなる無理なり。たとひ山林深谷に隱れたりとも、惡聲を聞くまじとはいひ難かるべし。されば釣鐘も通せぬかな聾をよしとはせず。瘂は元來母の胎内より聾にして、此の世の音聲を聞かずとかや。元來舌の短きにはあらず。其のかたちを見ず、其の聲を聞きて好するものは、神鳴、ほとゝぎすの類なるべし。尤も鳴神は、雲中の沙汰なればさもあらんか。昔より此の鳥、此のこゑをなくと、慥かに引合ひてきく人なし。當世は鳩、鵯

の類、此のこゑを鳴くもしらず、たゞ本尊かけたとなけば、是非とも此の鳥にきくもおぼつかなし。和漢詩歌の相違あり、千聲萬聲、たゞ鳴くとばかり詩には作れり。此の國の歌には、鳴かぬことをかこちて、きかぬうらみをよめり。つまる所はひとつなり。和國風流の手柄にして、此の鳥に限らず、此のたぐひ多し。琴をきんとよむは、禁の字の心なるべし。此の音を聞く時は、邪念を禁ずることなり。もろこしの人は、常住これを左右にし、旅行にも携へ、瀧を詠むるにももたせたり。すべて一日の中、見ることは一にして、聞く事は九つなるべし。須臾の間も、耳中に物の音聲の、客とならざる間なし。されば見る警めよりも、聞く警めはきびしかるべし。其のかたち見たらんよりも、其の聲を聞くに、情をます類こそ多けれ。むかしより見ぬ戀にあこがれ、おもひをちゞにくだき、傾城の箱階子あらゝかに踏みならす音は、見るよりも其の音に胸つぶるゝわざなれ。蕎麥切はおろしの音に心ときめき、樂屋の笛の調べは、其の猿樂のめでたく、舞ひかなづるよりもゆかしきわざなれ。鄰家に餅つく音、極熱の頃、垣を隔てて車井のはしる音は、其の亭主の心まで涼しく思はれ侍る。和朝もてはやす小歌、淨瑠璃、箜篌、三味線、是れ皆婬樂とて、君子はいやしまれける。此の音曲をきく時は、何のあて事もなくて不圖戀慕の思ひを催す。鉦鐃鉢の音は、我れ人心よからぬ聲と、おぼえたることこそことわりなれ。此の音聲は、無常を催すことを、第一につくれり。むかし聖人樂を以て天下を治め給ふ。

我が朝の樂も又同じ。たれ樂は、天地を動かし、神鬼をなかしむるものなり。これを聞く人惡をなさずといふことなし。是れ其の民の邪を禁ずるの源なり。されば畔を讓り、戸ざしを忘るゝもことわりならん。婬樂暗に戀の思ひをなし、鉦鐃鉢、自然に死の近づくことを悲しぶ。是れ人心の私なきしるしなり。何ぞ聖人樂を以て、國を治むるに治まらざらんや。王昭、西施が美なるをきけど、人終にほれたるためしなし。これ其の王昭西施に念を動かさざるしるしなり。吾が情たゞしき時は其の物にあづからず。聖人耳に惡聲をきかずといましめ、禮にあらざればきくことなかれといふも、此のあたりのいましめなるべし。

○銘類

机ノ銘　　芭蕉

閑なる時は肘をかけて、嗒焉吹嘘の氣をやしなふ。靜かなる時は書を繙といて、聖意賢才の精神をさぐり、靜かなる時は筆をとりて、義素の方寸に入る。たくみなすおしまづき、一物三用をたすく。高さ八寸、面二尺、兩脚にあめつちのふたつの卦を彫にして、潛龍牝馬の貞に習ふ、是れをあげて一用とせんや、また二用とせんや、

東銘　　支考

雙白堂主野紅子、夫妻相共好風雅。因有雙白之號。東銘指野紅、西銘指其妻。

むかし人の繪を書きそめしに、丹青は後のことなりとて、此の白の一字をぞたふとまれける。身に錦繡をまとひ、頭に金冠をいたゞきて、君といひ、臣といひ、男といひ、女といふ。さるは人の見て名づけたる名なるべし。しかるに女のをみなへしは、嵯峨野の露のよすがもあるに、男のをみなへしは、いづこの野邊の秋にかあらん。たゞ此の雙白堂の主(あるじ)とならば、かの高山の翁に頭ならべて、花も面白からん、月も面白からん。其の銘にいはく、

花鳥にさとればもとのしら髮かな

西銘　　許六

つよからずつよからぬ女の風雅は、絲筋の如く、此の絲五色に汙(けが)れざれば、狂客の悲しみをそへても、何がしが緇塵(しぢん)にそまらざるよろこびを見せたり。天(あま)の香來山(かくやま)の衣をたち、布引の機物をはへたる絲すぢも、皆是れほそみより出でたる女の手わざならん。猶日本紀の局(つぼね)が、初音の卷にいひけん、瀧のよどみの年なみより、水上としつもりて老いにけらしな。黑き筋なしとは、共に雙白堂の過りなるべし。其の銘にいはく、

髪の花女瀧男瀧のかざしかな　　嵐雪

茶椀銘

黒茶椀あり。花の朝は、ますく\くろく、雪の夕は、いよく\黒し。月待つ宵のやみをさぐり、闇夜に鼻をとられしは、おのく\つちめくらのまじはりなるべし。

撿校　貧僧　大黒　小ぐろ　はちの子　早ふね　小雲雀

三代目をのん子といふ、のんここそなほふかき意味あれ、祕してしばらく殘す。

まつむしのりんともいはず黒茶椀　　汶村

雲華園ノ銘

五老井四絶ノ一章也

夫れ茶は龍鳳を貴とするは、歸田錄の詞なり。和漢飲食の中の重味なり。陸羽が茶經にのする所、建州、洪州に名茶多うして、杜牧もこれをほめたり。和朝明惠といふ聖、唐巴東の實をとりて、始めて越前の國に植ゑ、都の北、栂の尾に移せり。猶茶の土地に佳ならずとて、終に宇治山に掘り移して、上林何某が家をかゞやかす。近世の土産は、駿州の安部、美濃の茎長、熊野、近江、其の中に江東の茶勝れたり。政所、松の尾は極品なり。しがらき、宇治、田原は、又其の次なり。白山禪師來朝

して、唐茶の鍋煎を製す、世もつて隱元茶と號す、これは是れ出し茶なり。それより首の長き茶罐を作つて、給仕の小坊主をたすけ、几下脚頭にすゑて、手づからくむ。其の銘に云く、

能くさます　　能くまじはる
よく悟る　　よく寂す
能くすゝむ　　能くへらす

六の徳を兼ぬるといふとも、茶ありて水なく、水ありて茶なくは益なし。龍井、金砂の二泉は、茶を烹るによろし。二の間の水、柳の水ありと雖も、許子が五老井を汲んで、此の茶を烹る時は、白雲椀に滿ちて花徘徊す。一たびこれをすゝる人は、專ら風雅の志を進む、盧仝が七椀といふは長過ぎたり。

飯鮓銘　　　吾仲

飯鮓は、いづれの時よりかもてはやしけん、此の六條の銘物にはいへりけり。今は公の奉りものに數ふれば、下ざまの人は、口を限りても待つべし。まして卯の花の咲く比は、此の物のけしきも清からんに、藤の花の咲く時に、それが節をあはせたらん、いかなる人の深き心か侍りけん。是れにて二季草の名も、世の人はいふべし。器物は、杉の香もてつけたる折に入れて、此の花をかざしにも、

又は文など付けてもやるべし。かくことたゞしきやうなれど、すべて上さまの翫び物なり。長良の鮓はむかしをしのぶより、梅津かつらの名にしられて、大津、松本の旅人も、笠をかたぶけずといふことなし。かの茄子たけの子の鮓といへば、何のこけらにも似かよひて、尼法師のこがれものならんに、これは形のもてはなれたれば、人の得しらぬも尤もなるべし。是れに宜な称といふものを、など添へては給はらぬぞと、或人のいひたるを、飯すし見るたびの、笑ひ草にはいふなるべし。其の銘にいはく、

以テ飯ヲ名ヅク鮓ト。鮓ニシテ而非ズ飯ニ。一ハ貼ス鱧ノ皮ヲ一ト、重ヌ鳥ノ子一。色ハ於レ雪白ク、香ハ非ズシテ梅ニ薫ル。

藤ノ花衛ハ暗ク、橘ノ香已ニ近シ。貴介ハ亡ビ褒メ、下臈ハ未ダ知ラ。昔ハ和ス王ニ。似タリ之ニ是ヲ照ス。

座右ノ銘　芭蕉

人の短をいふ事なかれ。
己が長をとく事なかれ。

銘に云く

ものいへばくちびるさむし秋のかぜ

是非斎ノ銘　許六

是を是とするは諂へるにちかし。

非を非とするは謗るに近し。

羽官平日、儒釋道の書をよむ。道は儒の枝となり、儒は佛のむかふ座主にとれり。若し醋吸ひの三翁、世に再生して、吾がはいかいの道を闇推せば、きはめて是非齋の遊びを覗いて、善竹の連衆に入らんと、あのかより望まん。

○誄　類

嵐蘭誄　　　　芭　蕉

金革を褥にして、あへてたゆまざるは士の志なり。文質偏ならざるをもて、君子のいさをしとす。松倉嵐蘭は、義を骨にして實を腸にし、老莊を魂にかけて、風雅を肺肝の間にあそばしむ。予とちなむこと、十とせあまり九とせにや。此の三とせばかり、官を辭して岩洞に先賢の跡をしたふといへども、老母を荷ひ、稚子をほだしとして、いまだ世波にたゞよふ。されども榮辱の間に居らず、日々風雲に坐して、今年仲の秋中の三日、由井、金澤の波の枕に月をそふとて、鎌倉に杖を曳き、其のかへるさより、心地なやましうして、終に息絶えぬ。同じき二十七日の夜のことにや、七十年の母に先だ

ち、七歳の稚子におもひを殘す。いまだをしむべき齡の、五十年にだにたらず、父の爲には、腹おしきりても悔ゆまじきうつはものの、はかなき秋風に吹きしほたれたる草の袂、いかに露けくも口をしくもあるべき。今はの時の心さへ知られて悲しきに、老母の恨み、はらからの歎き、親しき限りは聞き傳へて、偏に親族の別れにひとし。過ぎつる睦月ばかりに、稚子が手をとりて、予が草庵に來り、かれに號得さすべきよしをこふ。王戎五歳の眼ざしうるはしと、戎の一字を摘んで、嵐戎と名づく。其のよろこべる色、今日のあたりをたらず。いける時むつまじからぬをだに、なくてぞ人はしのばる習ひ、まして父のごとく、子のごとく、手の如く、足の如く、年頃いひむつびたる仲の、愁ひの袂にむすぼほれて、枕も浮きぬべきばかりなり。筆をとりて思ひをのべんとすればすつたなく、いはんとすれば胸ふたがりて、たゞおしまづきにかゝりて、夕の雲にむかふのみ。

秋　風　に　折　れ　て　か　な　し　き　桑　の　杖

丈　艸が　誄　　　　　　　　　　　　　去　　　來

今歳二月末の四日、月は草庵に殘る物から、禪師身まかり給ひけりと、湖南の正秀が許よりしらされけるにぞ、胸ふさがり涙とゞめかねぬ。つくづく此の人の昔を思ふに、尾張の國に生まれ、犬山に仕へて、勇猛の名もありしとかや。一日若黨一人を供し、ひそかに君父の前を忍び出で、道の傍に髪

おしきり、墨染には引替へられける。常の物語には、指の痛みありて、刀の柄握るべくもあらねば、かく法師にはなり侍るとなり。ある人のいへるは、其の弟に家祿讓り侍らんと、かねて人しれず志ありて、病にはいひよせられけるとなん。其の後洛の史邦にゆかり、五雨亭に假寢し、先師に見え初められしより、二疊の蚊屋の内に、頭をおし並べ、四間の火燵の上に、面をさしむけて、吟會おほく此の人をかかず。先師の言に、此の僧此の道にすゝみ學ばば、人の上にたたんこと、月を越ゆべからずとのたまへり。其の下地のうるはしきことうらやむべし。然れども、性苦しみ學ぶことを好まず。感ありて吟じ、人ありて談じ、常は此のこと打忘れたるが如し。先師深川に歸り給ふ頃、此の邊の句ども、書き集めまゐらせけるうち、大原や蝶の出て舞ふおぼろ月などいへる句、二つ三つ書き入れ侍りしに、風雅のやゝ上達せることを評し、此の僧なつかしといへとは、我が方への傳へなり。又難波の病牀、側に侍るもの共に、伽の發句をすゝめ、けふより我が死後の句なるべし、一字の相談を加ふべからずと宣ひければ、或は吹飯より鶴を招かんと、折からの景物にかけてことぶきを述べ、あるは叱られて次の間に出づると、たよりなき思ひにしをれ、又は病人の餘りすゝるやと、むつまじきかぎりを盡しける。其のふしぶしも等閑に見やり、たゞうづくまる寒さかなといへる一句のみぞ、丈艸出來たりとは、感じ給ひける。實にかかる折には、かかる誠こそ動かめ。興を探り、作を求むるいとま

あらじとは、其の時にこそ思ひ知り侍りけれ。先師遷化の後は、膳所松本の誰かれ、たふとみなつきて、義仲寺の上の山に、草庵をむすびければ、時々門自啓き、曲々水相逢ふなどと打吟じ、あるは杖を横へ、落柿舎を扣いて、飛び込んだまゝか都の子規とも驚かされ、予も彼の山に這ひ登りて、脚下湖潤ノ水、指頭花洛ノ山と、眺望を共にし侍りしを、人は山を下らざるの誓ひあり、予は世にたゞよふの役ありて、久しく逢坂の関越ゆる道もしらず。去々年の神無月一夜の閑をぬすみ、草庵に宿りて、寒き夜や思ひつくれば山の上と申して、こよひの芳話によろづを忘れけりと、其の喜びも斜ならず。更け行くまゝに雷鳴地に響き、吹く風扉を放ちければ、爐寒欲ス分ニ閑ヲ是寶、滿山ノ雷雨慢ス寒更ニと眞じ出でられ、笑ひ明して別れぬ。身の上を嘆くからず哉と聞えし、雪氣の空も再び行きめぐり、今かなしき名のみ残りける。凡そ十年のわらひは、三年のうらみに化し、其の恨みは百年のかなしみを生ず。をしみても猶名残をしく、此の一句を手向けて、来しかた行末を語り侍るのみ。

なき名きく春や三とせの生別れ

去来ヲ誄　　　　許六

維(これおもんみれば)寶永元甲申の年秋九月、落柿舎の去来卒す。嗚呼悲しいかな。此の郎は、向井氏が勝老人の末の子に生まれて、筑紫の方におひたち、名は平次郎、武を業とし、若かりし時より洛に居す。周

矢を捨てて十五年と吟じたるは、十五年先の事なり。今はせて三十年來の大隱士、和名これを浪人とはいふなりけり。いつの頃よりか、先師蕉翁にまみえて、風雅の名に高ぶり、京師にかまへて、諸子のかしらに坐す。南西の氣を抑へ、東北の風を護す。天下蕉門の高弟と稱して、あら野の時、正風體のまなこをひらきて、

　湖の水まさりけり五月雨とかや。猿蓑の選を蒙りて、不易流行の巷をわかち、後猿の新風にのぞみても、終に幽玄の細みを忘れず。

　木がらしの地にも落さぬ時雨かな

ほとゝぎす啼くや雲雀の十文字とは申しけり。又いづれの仲秋にや、

岩ばなやこゝにもひとり月の客と吟じて、先師の耳を驚かし、月賞翫の第一、古今の秀逸には極まりたり。すべて一代秀逸は、二兩句もてる人さへ稀なるべし。此のをのこは、已に數句に及へり。二十餘年薪水の功積み、嵯峨の落柿舍に師を迎へ、石山の幻住庵に老を訪ふ。心ざし深くて、一とせ難波の變を聞きて、速かにともづなを解き、義仲寺の葬りにも、肩衣に鋤鍬を携ふ。死後の城を堅く守り、諸生をなづけ初心をたすく。越の浪化にかはりて、有磯、砺浪の書を撰じ、崎の卯七を助けて、渡り鳥を集む。此の秋我が大願に力をよせて、文選序者の一人にすゝみ、病牀に伏しても、三度自他

の書を寄せたるに、いかなる蕉門滅亡の月日にやありけん、去年の冬は、中越の院家薨じ給ひぬ。ことし衣更着、丈艸卒す。秋九月此の郎去つて、手もぎ足もぎの思ひをさせて、人の腸を斷たせけるぞや。猶生き殘りたる十大弟子の中にも、世のたすけとなりがたきもあるべし。其の人かの人と、かへまくほしと思ふ方も有るべし。從來の因緣ふかきえにしありて、しかも同じ痾疾のやまひをうけて、共に終りをとれり。身は貧閑清寂の高みに遊びながら、老兄法印の孝養を忘れずして、常は心ならぬ餘所のいとなみもいそがしく、ある時は攝家親王の御館に候じ、遠近の來客に對し、四時の運氣を察し、二六の陰晴を考ふ。されど花鳥の細みを忘れず、月雪のあはれに、情をなやます。病ありて、起臥の寂しさを知らずとかや。猶思ふ人のなきにしもあらで、此の事かの事仕果してん。今宵は森の下露わけそぼちて、小萩がもとに袂しぼらんと、玉だれのひまもとむるに、あらぬ障りのみ出で來がちにて、初夜過ぐる雪駄の音も程なく靜まり、夜がれのみぞ多かる。又の日もつとめて、とくより例のいそぎに、心のどまるきはもなくて、そゞろごとに暮しつゝ、夕陽西にかたぶけり。こよひこそと物くひ湯あみし、みじか羽織に長刀、足ばやにすべり出でて、東がしらにむかうたるは、天晴私の黨の旗頭熊谷笠の見いれもよしや。よしやあしやの取沙汰はせで、うき名は賀茂の早瀬にながせど、川風寒み千鳥さへ啼きて、下庵ちかき聲づくろひ、仕はてざるにさつと明けて、打入りたるけはひ、しば

しいふべきことさへなくて、燈火ほそき方に向ひ、盆ひき寄せ少しくゆらせてより、心地つきたり、此の程四五日のとだえに、珍らしと見るなでしこの、もとゆひものびやかに、露けき心地せられて、あはれなること草に、節小袖の染模様も、いまだ其の夜はきはまり兼ねて、膝のはつれに打ちふしたれば、小夜もやう／＼更けて、衣手さむくそひ臥したり。明けばとく歸らんなど、契りかたらふひまもなくて、南禪寺の豆腐屋も曉をおかし、白川黒谷の鐘も、手枕のすき間をつたふに、うち驚かされて、帶引締め、刀ぼつ込み、氷交りの朝川渡えて、小茅中ぬきの頃、京にはいきつきたり。今はの時の人しらぬ、心の中さへ思ひやりぬ。現の境も千々の思ひをくだき、娘の生ひさき、其の子の母の行末、いかに覺束なく見果てつらん。アヽ、悲しい哉。松本山の僧か身まかりぬる時は、此の秋我に誄せらるべしとは、よも思ひよらざりまじ。今我辭を作りて彼を痛む。此の次必ず我か番にあたらんも又哀れなるべし。アヽ、悲しい哉や。

風俗文選　卷之七

○歌　類

落柿先生ノ挽歌　　支考

此歌四章ニシテ前後ニ加フ連俳之歌三章ヲ。漢ニ無シ此法。蓋和文ノ一體歟。

ことしはいかなる年なれば、かくあぢきなき人をのみ見るらん。去年(こぞ)の神無月は、浪化の君に別れて、霜の光に名をしたひ、粟津の丈艸は、此のきさらぎの願ひにみちて、花の陰に歸り給ひぬ。卯月のはじめは、落柿舍に日をくらし、其の事彼の事語り合ひて、是れよりたれが身の上をや、鳥も啼くらんと、はかなゐいひしが、去來はいはるゝ人の數に入りて、かくいふ我ばかり殘り居たらん、沖の石の友を失ひて、老いの波のよるかたなき心地ぞせらるゝ。なき人の此の頃おほき世やさらにと、むかしの人のなげかれしも、かくあぢきなき折なるべし。人は二十(はたち)ばかり、三十(みそぢ)も過ぐるまでは、おのれが友達も、同じ心のすこやかにおひたちて、たま〳〵なき人の上を見ても、哀れとは思ひけれ、驚くは

どの悲しさにはあらず。よそめも過ぎ行くほどよりは、幾(いく)とせの交(まじ)はりをかさねて、その人ならねば此の事はしらず、あはでは戀しう、見ざらんはいかにと、文にもいひかはすほどに、けふは其の人もなくなりて、世は扨はかなきもの哉と、ことし初めて知らるなり。誠に此の人よ、風雅は武門より出づれば、堅き所にやはらみありて、先師もそれをゆるし給へりしが、我はやはらぎたる所にかたみあらんをと、逢ふ時はたはぶれていひもしつ。まして蕉門の高弟にして吾が輩の先生たるをや。何にか此の人ををしまざらん。我のみかくをしむにやあやし。其の歌に曰く、

家は聖護院(しやうごゐん)の森に隱れて、　寒き梟(ふくろふ)の聲に驚き、
名は落柿舍の梢に殘りて、　空しき秋の色を恨む。
世ははたいかならん、　我はたかくならん。
窓のあらしに燈をまもり、
軒のしづくに影をしたふ。
をしむべし、ア丶、かなしむべし、ア丶。

柿の木もあれ行く猿の涙には、夜こそねられね、人も歎(な)くらん。嵐の山の山あらし、世にあらしとは山ぞしる、嵯峨野に人のさがなごゝろや。

○部　歌

あふみぶり　　よみ人しらず

鶯にきとろはさぶいみなべらのうらしがことの軒にけよやれ

自得　　ばせを

思ふことふたつのけたる其のあとは花のみやこもゐなかなりけり

題しらず　　おなじく

あみ雜喉を升にはかりて賣る人は買ふ人よりもあはれなりけり

二かいより落ちてよめる　　去來

などてかくいそがしいとて二階からおちての後はひまになりけり

やまひにふして　　許六

白がゆはきらひなれども病めば只いひをばくはで啜るなりけり

○文　類

誹諧發願文

浪化

人死して六道に生まれ、辛き目見んは、ひとへに娑婆の業因によれりけるとかや。世に立花する人は、たてては崩し、くづしては又たて、終日大汗ながし、膝のさきに枇杷の葉つけて、馬の耳の思ひをなし、屈曲を好みて、鐵釘に打ちつけ、針がねにしばりからめて、見る目も苦しかるべし。われらが在すの庵に、千山萬水の思ひをこめんも、猶々氣づまりならんかし。若し立花せんとならば、信根の松を心に立てて、ながしに清見寺の梅ならば、少しは心のびやかなる風情も有るべし。されど一時の榮華も盡きて、また椿ころりと落ちて、無常をしめし、木槿一日の榮をさとりて、程なくしをるゝ例の心短きにや、やがてぬき捨て、果ては煙と立ち登る。それさへあるを、碁うつ人は、赤目引きつり、喰物時をわすれ、終夜同じこと並べたらんは、飽かずやあらん。よき手あしき手とて、一座打ちこそり、案じふくれ、碁石の限り蒔き盡す時、何のをし氣もなく打崩したるは、さりとは殘り多き事なるべし。さしも手間入れて案じたらんは、せめて五日十日もながめよかし。此の人死にたらん後は、必ずさいの河原に生まれて、父母戀しがる子供に立ちまじはり、地藏おぼさつの御衣の下に隠れ、あけくれ同じ事すらんも、又哀れなるべし。若し一枝さして諸佛に奉り、一日投げてはあみだぶ唱へたらん人は、うたがひなく西方に生まれて、百味の外の飲食には、なら茶、蕎麥切はくひ次第たるべし。

今吾はいかいの結縁は、狂言綺語のふるみにおとし、百韻千句の數を合はせて、一座の透間はあみだぶと申して仕舞ひ侍りける。

聖靈ノ祭文　　李由

それ婆婆のありさまは、寸地に五穀を植ゑぬ所なく、寡婦が紡績の隙なる日なし。されど貧乏に追ひまかれて、餓口更に閉づることかたし。いかなれば極樂淨土の臺を去り、百味の飲食をさし置き、盂蘭盆になれば、取る物とりあへず、瓜の馬の迎ひを待ちかね、麻骨の杖引きずり、戸板あら莚の座敷つき、莧荒和布の賞翫、殊にきり麥冷素麵の腹中あひこそ覺束なけれ。淨土のあまみに飽きて、婆婆のからみをよろこばれたる聖靈もあるかし。地獄の釜の御戸ひらけたらんは、たまさかの仕合なるべし。食好みの振舞まではちと奢りの沙汰にもなるべし。たゞ修羅畜生のあぶれ者、中有の浪人かれきとこそ、思ひやられ侍れ。つねに願ひ置かれたる作善功德、讀經念佛の行は、そも何になりたるぞや。佛果を得られたる歷々も、餓鬼あしらひに思はれ、中にも新聖靈は、藥籠持の尻にまぎれて、外側に直ることこそ哀れなるべけれ。生前の列座の頃は、あたま數よみて、隔だてもせられたるに、灰の足跡に人數をしられ、終に送火のあかりに、はやし出されて、草葉の陰に歸りても、料理馳走の評判せんは、もとの人界より、願ひ損の後生なるべし。伏して惟みれば中元の佳節、浮屠の教へにおほは

れ、目連の母を始めとし、西の海へ父を沈めしあはれまで、放逸の衆生、たま／＼五倫親屬の名を呼び出し、我も一たび此の馳走の數には入るべし。一念の慈悲に、寺の小僧が腹をふくらかし、一包をよろこばしむるこそ有り難けれ。あがり膳は齒の跡もなし、果ては魚鳥のたすけとなりぬ。報恩經に一とせの中六度、聖靈の來去の日ありて、上古は年の暮にも、此の祭ありしを、いつの比の僞學よりか、世間一統にいひ合はせて、其の沙汰もなくなりたるは、唯つまる所は、坊主の迷惑とはなりにけり。聖靈達々々、今年は殊に穗いるもよし。地獄極樂の亡者達、才太郎畑のいき過ぎまで、誘ひ合はせて御出であるべし。六日飛脚の頓死を聞きたて、一紙の祭文は御免を蒙らんと、仍テ謹ミ如シ斯。

聖靈よ蓮にあまらば芋ばたけ

剃髮ノ文　　支考

浪花の舍羅、剃髮の前も舍羅といひ、ていはつの後も舍羅といふ。此の舍羅を捨てて、どの舍羅をか求めん、舍羅々々として、更に舍羅なし。

一たびは瓢の花のあたまかな

祭ル猫ヲ文　小序　　同

此文ハ以二四六之法一ヲ用二漢字ノ韻一ヲ也是レ令ク似ニテ誹諧之漢和ニ一而不ル然給ノ

以萬葉手爾波ノ文字ヲ用ヒ之為ニ和文ヲ用ル的ノ之始ニ太ダ奇也。

李四が草庵に、一つの猫兒ありて、これをいつくしみ思ふ事、人の子をそだつるに異ならず。ことし長月二十日ばかり、鄰家の井に悪び入りて身まかりぬ。其の墓を庵のほとりに作りて、釋自圓とぞ改名しける。彼をまつること、人をまつるに異ならねば、此のたび爪牙の罪をまぬがれて、菱成男子の人果にいたらんとなり。其の文に曰く、

秋の蟬の露に忘れては、　鳥部山を四時に嘆き、
秋の花の霜にほこるも、　馬嵬が原の一夜に衰ふ。
きのふは錦繍に千金の裘たりしも、　之壬
けふは墨染の一重の尼となれり。　連梨
　　柏木ノ衛門の夢、
されば
　　廬堂和尚の詩に
戀にはまとのふ、　欄干に水ながれて、　梅花の朧なる夜、
貧にはぬすむ、　障子に雨そゝいで、　螢火の闇なる時。

鼠は可捕とつくりて、虞美は杜工部、
蛙は無用といましめて、異見は白藏司。
昔は女三の宮の中、牡丹簾にかゞやきて、花まさにはやく、
今は李四が庵の邊り、天蓼垣にあれて、實すでにおそし。
前生は誰が膝枕にちぎりてか、さらに傾城の身仕舞、
後世はかならず音樂にあそばん、ともに菩薩の物數奇。
玉の林の鳥も鳴くらむ、
蓮の臺の花も降るらし。
涅槃の鐘の聲冴えて、閻爐裏の眠りたちまちにおどろき、
菩提の月の影晴れて、卒都婆の心なににかうたがはん。

如是畜生

南無阿彌

弔古戰場文　　芭蕉

三代の榮耀、一睡の中にして、大門の跡は、一里こなたにあり。秀衡が跡は、田野になりて、金鷄山

のみ形を殘す。先づ高館にのぼれば、北上川は南部より流るゝ大河なり。衣川は泉が城を廻りて、高館の下にて大河に落ち入る。康衡等が舊跡は、衣が關を隔てゝ、南部口をさしかため、えびすをふせぐと見えたり。扨も義臣すぐつて此の城にこもり、功名一時の叢となる。國破れては山河あり、城春にしては草靑みたりと、笠打鋪きて時うつるまで泪を落し侍りぬ。

夏草や兵どもがゆめのあと

断絃文　　許六

鳥の嚶々と啼き、木の丁々とひゞく、專ら友をもとむる悲しみの聲なり。人はいふにたらず、子を捨て妻をすてゝ、山林の友に交はり、琴を斷ち、金を擲つて、まことのこゝろざしを盡し、語りかたらふこそ、浮世の思ひ出とはいふべけれ。假初の旅寢に、一夜二夜の別れをさへ、悲しと思ふならひなるに、あるは雲ゐの國に貶せられ、遠きあら磯に配せらるゝ別れ、いたりて悲しかるべし。されど濁江に影見ざる歎きのみにて同じ世にすむなぐさめもあるなりけり。たゞ長門國に舟を出し、廣島の方に赴く人の別れは、みるめなき海士の呼び聲のいなせもきかず、磯馴松の獨り寂しきに音信るゝ便りもなし。こしかた行末思ひ續けぬる悲しさは、遣る方なからん。我に方外の友あり、江東本田邑、光明遍照寺十四世の僧、亮隅上人、字は李由、一の字は買年、四梅廬と號す。嘗て律師に任ず。姓は

豫州河野の嫡流にして、安藝の宍戸を兼ね合はせたり。母なんやんごとなき深窗の女にして、藤原なりけり。僧三代、我三代、あるは茶に交はりてさびを好み、又は棊に暮して勝負を喜ばず。我と僧は風雅に交はること二十餘年、僧は寺を忘れ、我は家に歸る事をしらず、ひとつ蚊帳にむれ入り、同じ衾に足をつゝむ。若し孔孟の理窟人を親にもたば、生きたる甲斐はあるまじといへば、老佛のいき過ぎたるを、子にしたらん時、身代破滅は立處なるべしとて、是れより天地を護り初めて、牡丹芍藥はひくき花なり、櫻海棠は能過ぎたり、かれは愚癡、それは鈍なりとて、果ては食好みの上に落ちて、餅蕎麥切は急用にたたず、終にはやみの豆腐に流れて、夜中の勝手をおびやかし、面目もなく其の夜も明けたり。月見、雪見、星祭、靈まつり、四梅廬の明ほのには、鳥の初音を待ち侘び、七種の蹈草には、蕗の薹を捜す。筍の藪を覗き、瓜なすびの畠をあらす。風臺に吹かれ、水臺に冷し、爐開きの次手には、歲旦の句を鍛ふ。煤掃の逃げ所、鰒汁の定舞臺、從者が無返事に空耳をつぶし、小僧が白眼もわきむいて通る。遲々たる春の日のみじかければ、長々たる秋の夜長からず。伊勢住吉の物まうでの頃も共に奉幣を捧げ、吉野龍田の旅寢の夜も、同じ花紅葉に臥したり。三日對せざる時は、百日の思ひをなし、五日音信れざれば、三年の月日を隔つるが如し。然るにことし寶永第二、乙酉の六月二十二日の夜、積氣胸膈にさしつめ、誰彼呼べとばかりにて、終に息絶えぬ。親族朋友したしきか

ぎり、末寺諸檀の僧俗男女、足を空にまどひ、國中騒ぎ悲しみ、四日五日はとりつゝみ物しけれど、壁生草の、いつまでかはとて、終に夏野の原に送り捨てて、平田山に立ちのぼる一筋の煙に、遠近の里人もいまはと思ひやるべし。後の事共は、有り難きかぎりとり盡し、法中の高僧、日夜に席をかさね、和泉なるはらからの御坊も、朝夕の誠を勤む。中陰の日數も程なく過ぐれば、つどひあつまれる人々も、おのがかたざまに別れさりぬ。反魂の香も、招魂の祓も、共に手ぶるき處を好まざれば、ふたゝび佛を見る人もなし。無礙堂の垂布の色も、鴈來紅に時を奪はれ、五老井のまつ宵も、一人の席を缺きたり。つら〳〵四とせ五とせ、僧は肝腎に癪をうれへ、我は肺肝に痛をやむ。平生病がちに打ちなやみて、朝の露に世をはかなみ、夕の鐘に命をかぞふ。僧と我といへる事あり、われ死せば、僧口を閉ぢん。僧身まからば我絃をたたん。思ふに蕉門のはいかいも、日々に衰へ、正風の血脈も、次第に絶えて、きく人もなければ、する人も猶なし。孔子の道は、春秋にとゞまり、五老井がはいかいは、此の文選に盡きて、これより後、はいかい聞きの博士とはなるなり。僧すでに身まかりぬれば、我果して絃を斷ちぬ。

風俗文選　卷之八

○傳類

東順ノ傳　芭蕉

老人東順は、榎氏にして、其の祖父江州堅田の農士、竹氏と稱す。榎氏といふものは、晉子が母方によるものならし。今年七十歳ふたとせの秋の月を、やめる枕の上に詠めて、花鳥の情、露を悲しめるおもひ、限りの牀のほとりまで、神みだれず、終に更科の句をかたみとして、大乘妙典の臺に隱る。若かりし時、醫を學んで、倆の産とし、本多何某の公より、俸錢を得て、釜魚甑塵の愁へすくなし。されども、世路をいとひて、名聞の衣をやぶり、杖を折いて業を捨て、既に六十年の始めなり。市店を山居にかへて、樂しむ處筆をはなさず、机をさらぬこと十とせあまり、其の筆のすさみ、車にこぼるゝがごとし。湖上に生まれて、東野に終りをとる。是れかならず大隱朝市の人なるべし。

入る月のあとは机の四隅かな

牧童ガ傳　支考

牧童は、もと小松の素生にして、賀の金城に居ること年久し。家は砥刀の業をもて、よりつれのたつきとはなせりけり。牧童は彼が兄にして、北枝は是れが弟なり。本より謝公が才能をあらそはこれば、かつて阮家の富貴をもうらやまず。たゞ同胞のあはれみ、おのづから世の人の鏡ともいふなりけり。むかしは梅翁の風流をしたひ、中頃は芭蕉の門に入りて、時の風雅に遊べる心の、ふたりともにあそぶ所同じからず。たとへば一巣におひたちぬる鳥の、彼は梅の花の清きに囀り、是れは卯の花の曇れるにあそぶ。遊ぶ處の同じからずといふは、樂しむ心の異なればならし。砥取の山の時鳥も、けふはとぎそと啼き渡れば、夜を梟のあそび數奇となりて、吟席交會此の人ならずといふ人なし。時に居眠りをもて、生涯の得物とせり。ある時は欄干の花にそむき、或時は檐外の鳥を聞きながら、眠り來り眠り去つて、四十年の春秋も過ぎ行きぬれば、貴介もこれを忘れ、高明も是れをゆるし給へば、終に兜率の内院にも、高く眠らんとぞたかぶりける。湖南翁、かつてある法師に向ひて、牧童はよき者なりと申されし由、よくてあしからんや、あしくてよからんや。其の翁ならずは知らじかし。しからば生天は先なるべくとも、成佛は後ならんといへる、むかしの人の心も、人はふたりの人に似じや侍らん。牧童常にいへりけり、我むかし、芭蕉の翁にまみえて、武の素子堂が、浮葉卷葉此の蓮風情過ぎたらんといふ句の物語に及ぶ。此の句は此の蓮と聲に唱へたるがよしと、をしへ給へりし外

は、別に何事もおぼえ侍らずと。時の人是れを評じて、げに人は人のならひありて、さらぬ人をもとも辿りたる樣におよづけいふらん。かくたゞありの人は、世にたふとしと。されば世の中の老いの坂越えたらん其の人は飢寒の間におきて、風雅もやゝあやふからずといふべし。

東花坊賛じて曰く、むかし人は、恆の産なければ、恆の心なしとて、つれづれの法師だに、安部野のあたりに、はなむしろ織りて、都のつてには賣りもせられしが、まして世にある此の人ならば、剛刀のわざのみいときよげなり。かくするどなる物の中にも、かの居眠りのさむまじくは、物と我と忘れたりとやいふべき。物其の我をや忘れけん、我其の物をやわすれ劍。ねぶるに時もなく、さむるに又時もなし。何がし和尚の、虎によりて居ねぶりたらん、世にをこがましく見られがまし。ある上人は、目のさめたらん時、誹諧せよとも仰せられしが、扨はいかいは人の心にすまじきや、たゞ我が心にすなりけり。然れども、人の面白がらずは、我もおもしろからず。此のさかひを知りてこそ、誹諧はすなりけれ。さりや、はいかいは人の心をやはらげて、花に啼く鳥の、花ならずしてかうばしといへる。世のまじはりの媒とならば、彼の鶺鴒のはらからも、などや一巣のよしみなからん。誹諧はたゞ戯れなり、はいかいにはあそぶべし。世にたはぶれ、世にあそぶ時は、草刈笛の世に忘れて、牧童の名もをしむまじけれ。所謂素丁堂が一蓮のちぎり

あらば、其の時の翁の心にあそびて、今も一字の師の影をもふまざれとなり。

公平ヶ傳　　　　　汶　郁

坂田公平は、何れの處の人といふことをしらず、源ノ頼義朝臣に仕へて、公時が男、山姥が孫とはいひ傳ふ。年のほどは三十餘りにして、終に衰老の容なし。其の生質正直正路にして、人の意見を聞かず。一生彼が妻といふものの沙汰なし。其の高名をいはば、夷が千島の末々まで、知らざる人もなく、僅かに見たる者もなし。唯好む物には茶筌髪に鐵棒にて、其の勇力の強き事は、恰も木綿織物の名目にさへなりにける。かかる兵も、すこし艶だちたる所のあるや、公平女とはいへども、未だ男子の號には蒙らせず。治世榮華の程を見んと思はば、和泉大夫が芝居に走りて、寺上りのわらんべ、又はつよみを好む中小姓の、感に堪へたる顔つきを見るべし。つらつら無常迅速の哀れをしるや、いづくの隱元禪師にはだまされけん、ごそとすりて、公平道心とはこゝをいふ。剛き物先づほろぶためし、死ぬべき場所をこしらへ、終に黄泉に旅立たせて、地獄破りの沙汰まではありて、其の後は便りをせず。彼の公平が手柄のほど、上下萬民おしなべて、感ぜぬものこそなかりけれ。

五郎四郎傳　　　　　支　考

筑紫に五郎四郎といふものあり、其の性は小麥の餅なり。明暮これに馴れたる人は、たゞ五郎四と

もいふなり。此のもの野畠の間に生じて、肌おろそかに色黑し。しかれども菓子屋の手にわたりて、百錬千鍛すれば、あるひは饅頭の肌やはらかに、かすてらの味ありて、ほとんど僧を落さんとす。むかし志賀寺法師の、容こそ痩せたれ、心は花の都人を戀ひそめて、玉の緒の歌はよみ給へり。まして其の名も、三輪の山本に住みて、葛城の神の、晝のかたちにもはづることなし。されば心くだり、姿いやしきだに、色はすつまじき世なりけり。五郎四何にか侘しからんよ。あるつらの人は、衣食の價をむさぼらず、酒肆淫坊の眼高しと、人の人にもてはやされて、心の外に見苦しうやつれ、座上にありて虱をひねる。さばかり捨てはてたる世ならば、石上樹下のすまひこそあるべけれ。しのぶ山の闇路も、こゆる人のあればこそあれ、戀せじ酒飮まじとは、誰にかかためたるぞや。先師の曰く、色を思ふこと、饂飩の如くせよと。汝をよろこぶもの、日夜に愛せず、汝をにくむもの、絶えて嫌ふことなし。しからば物の程をいへるなるべし。汝が本性はいやしからねど、多くは賤の女の格子にかゝりて、ありがたき生涯をあやまる。されど世をてらひ人にこびて、身をかざらんとする人には、おのづからまさりもすべし。此のさかひは、汝五郎四が知る所にもあるまじ。何晏がおしろいせぬ顏も、一世の願ひにはあらず。兵部卿の宮の、かりのにほひもまた仇なりとしるべし。世はたゞ世にしたがひて、眼前のたのしびをたのしむべき事なり。

々がほに鏡見せばや五郎四郎

螽蟲ノ傳　　去来

浮世に米といふ蟲あり、母は出雲の國、稲田姫のながれとかや。父はゆくへもしらぬ稲のとのの、夜な／＼かよひ來りて、かくは稲穂の孕み初めけるとなん。ふるさとに侍りし中は、川水にやしなはれ、案山子法師にもりそだてられ、やゝ生ひたちぬるまゝ、賤のふせ屋に籾とよばれ、晝はあら筵の上にならび、夜はせはしき俵の中に臥す。されど久しく民間にとゞまらず、地頭代官のもとに上げられ、或は鞍つぼに這ひのぼりて、須磨逢坂の關をこえ、あるひは船板に飛び移りて、敦賀下田の沖をはしる。終に商家の藏の中に隠れて、恐ろしき空音を啼き出しぬるは、あやしき里に春の鳥の花にたはぶれ、秋の蟲の露を悲しめる思ひにもあらず。時しらぬ蟲の音ながら、春はひとしほ音もまさりけり。又は旱うち續き、雨風さわがしき年の暮には、かならず高ねを出して、嫠婦の胸ををどらせ、窮民の腸を斷たせるのみか、乞食などのこれになきころされんも、いとあはれ深かるべし。常に國々よりあつまりて、おほき時はねよわく、旁々に分れて、すくなき時は音つよし。まことやみづから鳴かずして、人の口をかりて音をふるゝも、あだにあやしかりける蟲のしわざなり。たゞ富貴の場に遊べる事を喜びて、貧賤の竈に入ることを恥づ。しかはあれど、家々に買ひとられ、唐櫃の中の辛きめ

見しより、ながく声ねをとゞめて、いつとなく滅り失せけるにぞ、人々は皆あきれ果て侍られける。

疝氣傳　　李由

疝は病の名にして、氣をつむこと山のごとしとは、素問の說なり。いづれの臟腑より出づることをしらず。陰經に城郭をかまへ、淫囊をかくれ里にさだむ。常は腰のあたりに逍遙して、火箱煖爐の陽氣にうそぶく。かれが一世の手柄をかぞへば、花に啼き、梅に囀る時、人のとがめをうけず。卯の花に千聲萬聲を叫び、陰を感じては、秋の野もせの聲よりもしげく、時雨ふり初むる頃、火燵にやりわたしては、きりぎりすの弱りにひきかへ、高音をはりても、屁負比丘尼の働きも見えず。公界に出でて不圖とりはづしても、おのづから咎を疝氣に蒙らしめ、病氣不相應の大食も、かれが病の色に取りなし、青ざめたる顏色も、ふく病やみと名付けがたし。貴賤老若、男女小兒のさかひもなく、または虛實のわかちもなし。大雪をしり、雨氣をさとり、土用八專には每度蜂起して、胸脇に横はり、痰を帶びては眩暈を起し、怔忡をしては胸を躍らす。世に醫術の良藥ありて、三和五積の煎湯を施し、あるは蕎麥切のおろしに驚き、芥子番椒に目を醒して、斗方を失ふ時か、飛脚の腨にかくれ、瀉腹の勢ひにさそはれて、不圖此の界に下る時、矢場に杖の先に卷き出されて、果ては六條河原にさらされて、尸の上の恥辱をかうむる。一陣やぶれては殘黨まつたからずして、終に太平を謠ひ、腹つゞみを

鼓いて天下戸ざしを忘れたり。

檮や疝氣治まる御代の春

直指ノ傳　　許六

百年後の人に傳へて云く、誹諧直指の傳あり、たとひ上手の名ありとも、理窟あるは、眞の直指の誹諧にはあらずと知るべし。むかし守武宗鑑より以來、興をとるものをはいかいと名づけ、實あることはかつて知らず。先師始めて、躬恒貫之の魂を見ぬき、正風幽かの實を得たり。道のべの木槿は馬に喰はれたるより、あら野猿蓑に至つて、正風の體を慥かに顯はせり。誹諧中興の開山となつて、是れより翁とは稱し侍りける。されば其の風にたなびく門葉、里にみち巷にみてり。されど理窟の境にまよひて、直指のはいかいは一人もなし。夫れ理窟を離るゝはやすし。理窟を離れたる後は、趣向をはなれ、手に携ふる一物もなし。人麿のほのぼの、赤人の田子の浦の場所は、先師のはいかいにして、ふるくさびかへりたることは、たゞ百人一首の歌を見るが如し。無爲の妙句はいひながして盡きず。跡に光明の光を放つ。理窟の句はつまりて跡へもどる。是れ彼の光明をあやまり覺えて、終に理窟の境をしらず。和歌は貫之より、基俊、俊成に傳はり、連歌は宗祇、宗長とつゞく。今先師の誹諧血脈相承の者を聞かず。我東に赴き、始めて師にまみゆる時、旅の句問はれけるに、宇津の山にて、

土團子も小粒になりぬ秋の風、と申しければ、師驚きていへり。汝何れの教へによつて、愚老が流れを見屆けたるやと問ふ。我曠野猿蓑を師とすと。吾子は誹諧の集を見る者なり。今わが膓は見ぬかれたりといふ。再會の日、嵐蘭子に語つて云く、我が門人の器を求めて、誹諧を殘さんと思ふに、昨日許子に會して我が望みを休せり。選集に我が魂をとゞむる時は、後代許子が如きも又あるべし。千歳の後も、愚老が血脈は朽ちざる事をしれり。其の後三月盡の夜、師來りて、終宵閑談して、衣更の句を望めり。我一兩句いへどいまだ叶はず。師のいはく、すべて世の人、句の穩かを好む、上手はあやふき所に居れり。されば上手の上には、かならず仕損じおほし。愚老が當歳旦、

年々や猿にきせたる猿の面は、まつたく仕損じの句なりと。我問ふ、師の上にも仕損じありや。答へて云く、毎句あり、仕損じたらんに何のくるしみかあらん。下手は仕損じを得せずと。我此の時はじめて眼をひらきて、

人先に醫者の袷や衣更といへば、師のいはく是れなり。吾子が誹諧の底は此の所にてぬけたり。はいかいに底ある者は、新古にわたりて自由を得ず。愚老は常に許子が行末を恐れて、みだりに何をいはず。諸門人油斷すべからずといへり。當時もてはやす門人の誹諧は、全く先師の流にはあらず。昔子は作を好みて、己が一風を立てたり。猶頃日の風體は、はいかいの名を改め、餅とも酒とも名づけ

たらんに、何のたがひかあらん。東花坊は賢き者なり。先師身まかりて後、みづから上手といはせ、師說にうときこともあるにや。虛實新古の取りちがへも有るべし。誹諧を弘むるには利ありて、はいかいの道を殘す爲には、おほきに害あり。他の誹諧の事はおいて論ぜず。其角支考は下手にてはなし、先師の口癖はよく眞似ける、芭蕉流にはあらず。ばせを流正風體の血脈を得たる者は我なり。當時ははいかいに醉ひて甲乙をしらず。後世は忽ち醒めて善惡を定むるに遠慮なし。其の遠慮なき人に正風體を示す。

三月盡

けふ限りの春の行方や帆かけ船
春なれや田の青苔に啼く蛙
四五月の卯波さ波やほとゝぎす
わが跡へ缺口に立寄る淸水かな
欄干にのぼるや菊の影法師
香經の間を朝がほのさかり哉
初霜や鐘樓の道の杏の跡

はつ雪や治まる江戸の人ごゝろ

是れ先師滅後の句なり。先師生前の耳を驚かせざるも無念にして、今又一人も、此の句の腸を聞く人なきこそ、猶又無念のことなれ。後人芭蕉翁の血脈、嗣ぐ人なしといふことなかれ。今此の傳を讀んで、定めて過當といはん。謝していはく、過當人も死し、又過當といふ人もほどなく死せん。これその怒りをやはらぐる處なれば、必ず見ゆるしおくべしと云々

○碑類

壺碑　芭蕉

在二奥州市川村多賀城一

つぼの石文は、高さ六尺あまり、横三尺ばかりか。苔を穿つて文字かすかなり。四維國ざかひの數里を記す。此の城、神龜元年、按察使、鎮守府將軍、大野朝臣東人之所里なり。天平寶字六年、參議、東海東山節度使、同じく將軍惠美朝臣朝獦、修造而、十二月朔日とあり。聖武皇帝の御時に當れり。昔よりよみ置ける歌枕、多く語り傳ふといへども、山崩れ川落ちて、道あらたまり、石は埋もれて土にかくれ、木は老いて若木にかはれば、時移り代變じて、其の跡たしかならぬことのみを、こゝ

に至りて、疑ひなき千歳の記念、眼前に古人の心を閲す。行脚の一徳、存命の悦び、羇旅の勞を忘れて、涙もおつるばかりになん。

笠塚ノ碑　　李由

江東平田邑、光明遍照寺の地に、先師芭蕉翁の笠塚あり。十四世の僧某、蕉門に入つて學をつむこと二十餘年、恩は琵琶湖より深く、をしへは打出の眞砂より高し。朝には香華を備へ、夕には句を錬つて、推敲を定めんことを祈る。むかし芳野山にのぼりては、花のあけぼのを見せかけ、竹植うる日は東坡が笠をうらやむ。月のあみだ笠に、時雨霰のいかめしき音を、侘びられたる佛も懐かしとて、死後に此の笠を乞ひうけ、終に土中にこめて、門人各一句をさゝげて、かの塚に同じく納む。世に報恩をのこしたる、長崎に尾花塚、深川に發句塚、越中に翁塚、木曾塚は直に遺骨を葬る地なり。されば西行の塚として、國々に殘したるも、此の類ならん。あなかしこ。死後の門人、師にまみえぬことをなげくことなかれ。はやく塚に來り、季札が劍をかけて、一句をたてまつらば、生前の門葉にひとしかるべしと、弟子李由字買年謹んでこれを書す。

風俗文選　卷之九

○辯類

詩歌誹諧辯　　丈草

一士あり、火燵壇上に誹麾を把つて、諸生に示して曰く、泰平聲震つて、風雅四海に渡わゝこと久し、中にも誹道の一流、あらゆる國郷に入り渡りて、村童野老も干麥を流し、鉄杖を朽たさんとす。然れども、詩歌の高みに涼み居て、古人よばりする輩は、にがにがしく彈指していへり。濫なること、なんぞこゝろざしを養ひ、道におもむくたよりならんや。ひとへに滑稽の雜口、虚言にして、俗中の俗なるものなりと。今我一辯を出して、諸々の境をあらため、道々のおし及ぶべき所を判斷すべし。まづ和歌の徳たること、誰かあふがざらん。上つ代より傳へ來りて、人の心を種とする言葉、其の誠より責めらるれば、鬼もあら男も頂をたるゝ正道なり。其の樣體、たとへば雲の上人の、衣冠つやゝかに、帶劍けだかうして轅の中にいまそかるがごとし。青侍白丁はなだなだしく、警ふよそほひ、住吉玉津島と氣色浮び、あるひはよし野はつ瀬の遊山めきたり。たまたまには富士、淺間、須磨、明石の

逆旅に、浦の苫屋の夕暮までは、ながめつくしぬれど、さすがに蛸壺の底さし覗きて、あはれ知るにたよりなく、小蝦まじりに竈馬鳴く蜑の屋には、腰かくべき褥も見えず。まして野くれ山くれのはしばし、牛道、鹿道、猿すべりの邊は、名を聞くにも及ばず。これその位高く、官高きがゆゑに、下に臨める風景、廢る物おほしといひつべし。詩ははなはだ無礙自在にして、志のおもむく處辭の隨はざるはなし。其の飛行のすみやかなるありさま、かの名におふ八匹の駿馬をまろめ合はせて、飼ひにかうたるが如し。手綱すれば、盤面にしゞまり、鞭すれば、四方八極、時の間なり。況んやその上の風流、山を見て後むきに跨り、句を錬つて手悶えをなしぬ。鞍の上疊勝りにして、前後左右かけさはりなし、嗚呼快なる哉〳〵。如何せん、今是れに乘るもののおほくは桃尻なることを。誹諧のかたあたるや、蓑笠竹杖草鞋しめつけて、朝立したるがごとし。京田舍去り嫌ひせず、一所にあなまとひせず。雪の市中に押され、陽炎の芝原にこけたり、あるは山寺の小料理になぐさみ、土亭に逗留をあかれたるも、一段の笑ひなるをや。月ほとゝぎすの曉を、木の根、岩ばなに寢覺めて、又見ぬ方に歩みをすゝむ。はてかぎりなき津々浦々、薩摩潟、蝦夷が千島の門背戸までも、さらばいへ、殘す物あるかは。これ吾が道の廣みにして、我が遊び所といふべし。氣の向く處、日のおよぶだけ、風せよや風せよやと、募つて覺えず手をうちけれど、從者は例の茶に倦じて、火の氣を打消し、勝手は夜半の

時雨じみけり。

定ル先後ノ辯　　支考

林紅法師、むかし浪化に具せられ侍りて、吾が翁と物いひ、顔をもしれりける人なりしが、其の頃は年いと若くて、風雅もねぶたき比なるべし。此の地に嵐青のをのこありて、其の時の次手ならん、手水湯(てうづゆ)もまだなつかしき梅の花といふ句を、手水湯に竹縁あをし梅の花と、翁の生前に筆を添へられたれば、かれは林紅が下にたたんことを恥(は)ぢ、是れは嵐青が上にあらん事を争ふ。其のあらそひは、まことに君子なるや。東花坊これが判者たらんといふに、いとけぶたし。風雅に通じて、翁を見ざる嵐青は、見ぬ戀にあくがれ、翁を見て、風雅に通ぜざる林紅は、逢うてあはざる戀なり。何(いづ)れも戀の部にはありながら、心とけぬ程はいかにかまさらん。くらぶ山の嵐も吹きあへず、あだし野の露もおきかはりて、八とせのむかし語(がた)りならば、我も其の翁は戀しかりける。世に風雅の信(まこと)あらば、其の翁は湖南におはして、面白き人には見ゆべきとなり。されば風雅の心にあそべ、心の風雅をば求むまじきなり。

逢坂も粟津も果ては秋の草

豆腐ノ辯　　許六

むかし晝とあけ、夜と暮れたる時、豆腐といふ物一丁出でて、名もなく、類もなく、甲もなく乙もなし。只うまきとばかり覺えたるこそありがたけれ。それより小路々々に出生して、世々の聖賢に料理せられ、昔豆腐は、石部金吉とてすたり果て、今やうのおぼろめく物を、豆腐の聖とはいひはやらす。猶五倫五常の獻立を作りて、是れは仁なり、それは義なりと、急用に取出す。七つ入子の三つめ五つめを、もとめに應ずるには似たり。田樂一串にも、仁義は自然にありて、天地をつらぬく風味はもてり。折ふし藪賢人あつて、豆腐をあへ物にせんといへば、朱子程子の鹽から口は、これを異端寂滅と配すれども、元來聰明睿智の飛助ならでは、此の行き過ぎはならず。譬へば用名介が非揚名介口傳云々。鄰家にあたつて、碓を穿てり。終日耳中に客たり。過去の聲は盡きて、未來の音は響かず。たゞ一聲の碓にして、終日一聲のからうすなり。許由むかし堯の天下をうけず、なりひさごもかしがましとて捨てたり。天下國家のたくはへは、輕うして棄つるに易く、耳中の瓢の蓄へは、重うして捨つるに難し。巢父が牛を洗はざるは、元來許由が耳の汙れたるをにくむなるべし。和漢同じ耳垢等が、ほめしるしたるこそ口をしけれ。されば前後なき事をみづから知らば、すたりたる田舍豆腐も、開闢一丁の豆腐に、異なることはなかるまじかし。

天狗ノ辯　　木導

萬の形ある物、いづれか畫圖に寫されぬ物はあらじ。されど眞向きの天狗ばかりはなるまじとて、繪かく人は常に笑ひ侍りけり。いかにぞや、天狗しりの古法眼も、正面の鼻には困りぬらん。此のもの神祇釋教にもあらず、人倫生類の部をのがれて、誹諧の篇には、よき道具ならん。世の人の我慢長ずれば、鼻にあらはれ、天狗となりて、杉の木ずゑに居を卜め、愛宕高雄の山住みを好み、都の秋のなつかしとや、浮世の嵯峨のあたり近き、嵐の山の夜あらしに、木の葉天狗ぞさそはるゝ。又は大峯かつらぎや、高間の山の花ざかり、富士の高根にねぶりては、月雪のふる里を忘れたる、浮世のさまぞ哀れなる。されど名歌などよむべき顏にもあらず。かの里も出かはりやありけん、虛氣たる男をたぶらかし、嫁取りもせぬ宿に、礫を打ちかけ、火事をすかれたることぞうるさけれ。かかる境界にも、何の奢りかありて、無盡の沙汰にはおよび、天狗賴母子と人にいはれ、強ひてその一座につらなり、六波羅の酒盛は、醉狂ひの樂句もいぶかし。うるさき顏にても、花の都人を戀ひそめ、牛若殿に浮名をながし、心中のしるしにや、爪をはなし、果ては竹生島に送られて、寶物の數には入りぬ。ある人、洛の大儒に天狗を問ふ。これ深山幽谷のいきれより、かかる變異は生ずるなり。何の怪とするにたらんと。されば天狗を山谷のいきれといはば、麒麟は聖人のいきれならん、尾長蟲は糞土のいきれにして、虱は乞食のいきれなること慥かなるべし。

甲冑のよろひかぶとをあやまり、行燈提灯をとりちがへたるは、むかしより國中みな誤り覺えければ、取つてあらためたる人を、あやまりといふも理ならん。こゝに一身の中、足を賤しとし、手を貴しと定め置きたるは、いつれか賤しとし、いつれか貴しとせんや。いやしとて終に斬り捨てたる人もきかざれば、持ちにこそ定め置きたけれ。それ足は行步を產として、外の用をしらず。沓木履をかけ、草履わらぢをはきて、直に土をふまず。居る時は、足袋韈に包みまはし、步みつかるれば、馬駕籠に扶け乘せられ、千山萬水の間に坐して風情に嘯く。手は一身の奴にして、定めたる產なし。頭の虱を捏り、眼のあかぎれを撫づる、至らざる所なく、又なさずと云ふことなし。足れいやしきことの第一なるべし。貴人高家の傍に、侍女小姓のつとめあれど、廁の役あることを聞かず。されば我が腳にて、他の鼻端の塵を拂はば、人怒つて我を罪せん。人また我が頭の蠅を、足にて追はば、我是れを貴しと思へど、世の人我に代つて、にくみのゝしり、怒りをうつして、我を阿方と笑するこそ、おほきなる僣上なれ。其の僣上人、蒲團簟に臥して、休する時も、必ず足を伸すを一番とす。湯に入る人も、足からならでは這入りがたし。向後足にあたらしみをつけて、手を古風のふるみにおとさん。但し德利子は、各別の沙汰なるべし。

人参辭　許六

たれ人参は、元氣大補の聖藥なり、からやまと、これを寶とす。とりわき三十年來の和醫、人参ならで、人を療することかたしと見えたり。邪氣濕熱陰虛火動のわかちもなく、人参々々には、病家おほきに草臥れたり。凡そ人参の斤兩はかぎりあり、かぎりなき人参つかひに買ひ取られて、世界の人参威をまし、時を得たり。價高直にして、凡下貧僧の口に入ることかたし。産は朝鮮を最上とす。其の代物たゞごころに魂を失ふ。醫家朝鮮の産を好まるゝは、重きが上の小夜衣、質に置くより外はなし。彼の人参醫者を察し見るに、理窟人の利錢する心になぞらへ、又は低人の價高直物にめでて、ひたすらたふとまるゝと見えたり。人参の力にて、あまねく人の命を助かるならば、邊塞醫療なき地は、人種は盡くべし。假令死ぬるにもせよ、人参に殺さるゝ者なし。人参ある國は、人参にて人を助け、又人参にて人を殺す。生死の算用は、持にして置くべし。されど大切の金銀、つひえぬ方勝ならん。やまひに三つあり。人参にてたすかる病、人参にて死ぬる病、人参なくて活きる病、此の三つの内、人参なくて事缺けぬ方、二つなれば是れも一つの勝なるべし。我沉病を蒙して、折ふし人参を用ゐる。唐の産、朝鮮の産、其の功少しも變ることなし。醫家は人に與へて、外より察し、病者は我が呑みて功を知る。たまたま病家に入りて脈をつまみ、そこそこに尋ねちらし、病見どほしの顔付にて、

合點々々で歸らるゝなり。彼の人參にもり殺され、忽ちあたりたることをしらず、其の功いまだとゞかずして、空しくなりたるに極めぬれば、又人參のききたるをも、たしかには知り給ふまじと覺束なし。きくとあたるとの境目も別れざるに、朝鮮唐の産の微細の能は、知り給ふまじと、猶々おぼつかなし。我おもふ唐より渡す所の數百方の醫書、皆唐人參にて組みたる方なり。若し人參朝鮮にかぎらば、其の國所を記すべし、唐人何の遠慮すべき。されば川芎弱弓のたぐひも多し。それ萊菔は、尾張の産を極上とす。されど大根のなき國所、なくて事の缺けたることをきかざるが如し。それ醫道、誹諧、よく相似たるべし。醫者やまひにむかひて方をつけ、作者前句題に臨みて、趣向をよする所、其の理窟をはなれ、つくつかぬの危き境は上手名人の手際、同じ場所ならん。當時醫をまなび、歌道を習ふ人を見るに、其の稽古前後なり。まづ所作をつくしからして、なほ其の道に精しからん時の學文なるべし。これ古人上手の仕かたなり。さるを學文よりまなび入りて、一切理窟にてすゝむる、祭過ぎての箒掃除なり。むかし丹溪、素問を見て、四十より醫に入る、古今の醫聖と稱す。すべて醫學は狹き物ならん。道を盡し、理を究むるは、素問一部のことなり。其の餘は味噌鹽の獻立にして、以呂波寄せの字盡を引くよりもやすかるべし。今の上手めく人は、毎度素問の語で堅め、本草の說をつばなかす。文旨の病家、平詞を信ぜずして、大きに漢字に驚きて、上手名醫に極む。當世のやまひは

文盲にて、素問本草を聞きしらずして、彼の名人の御藥はかつてきかず。或人犬の吠えかゝるには、虎といふ字を、書いて見すれば、忽ちにぐると習ひ置きて、ある時人喰飛びかゝりけるに、ならひの文字を書いて見すれば、其の手にくらひつかれけり。日本の犬は文盲にて、虎の字のよめぬが如し。たゞ理窟より理窟にくひ入り、是れは上を見てゐる句、これは下を見てゐる句なりと、小功者みの小細工は、みな素人に耳おかければ、終に理窟に勸め入れて、理窟地獄に堕すなり。されば霍亂の賣藥は、くわくらん病みが買ふなりとは、名人の一言なり。百年の後、若し理窟がすたらば、わが僭上のこと草も、又眞となるべし。

射御ノ辯　許六

比類なき勇武の木陰を恃み、百年の高恩は廣く天をいたゞき、三代の微祿は、徒らに地をせばむ。是れを食める腸は、忠義をのべて形となし、武道を鍊つて肉を作る。膚たゆまず、目まじろかず、能登殿の矢尻は、胸板にをれこみ、彦四郎が切先は、腹の皮にをさめかくす。老いは齋藤が髭に近より、年は諸葛が齡に鄰る。嗚呼千行萬行の涙を落し、三思一言の辭を殘す。夫れ武士の武道だて珍らしからずとて、商人のなすにもあらず、たゞ武士は武士の眞似がよきなり。さればとて、武士の武士臭きは、鼻を覆ふ。おのれ／＼が家職の、古き事をしらず、魚物野菜のたぐひも、ふるき物は必ず臭

し。武士の武藝を好むといふは、本意にあらず、其の武士幸ひに武藝に好き當れり。博奕遊興好きに曾てかはらず。武術力量をあてに思ふべからず、馬物具を頼むべからず。佐々木四郎は、わが氏姓の祖なれど、生食頼みに宇治川の先をかけられたり。もし世に生食和墨なくば、先のならぬも不自由なるべし。搦手數萬の油斷人、一騎も殘らず渡しぬれば、佐々木が鎌倉の荒言も、すこしは是れにて戻りけり。嘲り笑ふに似侍れど、佐々木、梶原になつまぬものは、大きに褒めたる言葉とは、必ず知るべし。一とせ大阪表に於て、穴澤といふ天下無雙の長刀の名人も、折下外記にたばかられて、終に組討には討たれたり。一生の骨折は、此の時一度の用なるを、打忘れたる不覺仁の、穴澤をいふにあらず、たゞ藝術を頼むべからず。むかしより、一番槍をしたる人に、上手の號もなく、又下手の號もなし。かくいへばとて、武藝をなすなといふにはあらず。武藝の名稱は、太平の代の看板なり。武藝とて、我が役にあらぬ事は、せぬがよし。しらぬというて恥にならず。立身にしたがひ、役替にのぞみて、其の時すみやかに當役は習ふべし。其の癖當役は無沙汰にして、いらざる說經者の馬乘り習ふ類ならん。一藝勝れたりとも、武の全きにはあらねど、一藝をも愛し給ふは、大將の役なり。我わかかりし時、此の道に深くわけ入り、春の花空しくあり、秋の月もおもしろからず、あけては食を忘れ、暮れては寢る事をしらず。されど弓は力弱くて矢束を引かず。手打は日に病ありて細かにあたらず、

此の二いろの道は口をしく缺けたり。凡そ手足にかぎりあれば、知りても持たでは益あるまじ。劍術は、母方の祖父にしたがひ、正法念流の兵法を學び、すでに未來記の奧義を傳ふ。祖祖父より四代の門弟、二千餘人の中、未來記を嗣ぐもの纔か二三子に過ぎず。これ劍術諸流の源なり。槍は横手柄に利ありとて、父が術を繼ぎ、寶藏院の法印より、我に至りて五代なり。馬は悪馬新當流を學んで、かけひきの道は達者なり。此の三つのものは、一騎武者の手足にして、これを知らぬ者は曾てなし。これに精しからんと思ふに、太刀打はつよく首に斬り付け、槍ははやく敵の胴腹を、突きぬくより外に道なし。馬は其の品おほし、よく乘り得たりとも、軍馬の上を知らぬ時は、おほきに缺けたりとて、黃母衣の隨一、河合氏の祕術を尋ねて、常に數卷のおもむきを、ふところに納む。馬はわが足なり、いたはる道をしらでは、息合病馬に疎しとて、太閤秀吉公の愛臣、桑島左近は和の馬師なり。此の術を尋ね求めて、百二十卷の祕方に渉る。馬の好惡をしらざれば、求むる道に疎し。古今目利は一流にして、山上入道が傳なり。世に馬を見るといふ人あれど、山上入道の名をだに知らず、まして深き習ひある事は猶しらず。往昔は此の藝稱せられて、祿をいたゞくもの多し。今はしる人さへなくなりたり。これを段の目利とはいふなり。馬上の五物、槍合、太刀打、早乘、早おりは、鞍鐙の善惡によれり。これを知りて求めざれば此の事叶はず。大因幡三代より、代々の手曲をしり、寸法、曲尺合、

残る所なくおぼえて、これらを常に肺肝の間にかくし、泰平の世の安居の樂しみとなせり。汝ひととなり、筋骨強く、力つきなば、おのが分限をしりて、當役を勵むべし。功成り名遂げて餘力あらば、天地陰陽の理を探り、仁義五常の道を學びもすべし。これを文武の侍とはいふなり。かならず文に流るゝ事流れ。武士は武道を先にして、文は後にと心得べし。今わが猶子十歳の時、遺誡のはじめに、此の辯を書して、武の魂をいるゝものなり。

○表類

雨乞表　許六

皇天天に位し給ひてより以來、四海の民を愛し、農業おこたらず、蠶飼時をうしなふことなし。あまねく御うつくしみの波は、八島の外まで流れ、ひろき御めぐみの風は、至らぬ里々もなかりけり。しかるに今年の夏六月、大いに旱して、雨一すぢも降らず、千里草枯れて赤地となり、百川水盡きて川原となる。野老たふれふし、村翁飢ゑつかる。牛羊唾かわき、犬馬舌こがれたり。白晝に星あらはれ、日月は赫々としてあかし。龍神も岩穴に引込み、鳴神の駒も膝を屈してたたず。土器の大豆は、忽ちいれこがれて、水晶の艾は、たちどころに火となる。白髭の鳥居は出でて、葦原の變を感じ、鹿

飛岩あらはれては、勘者の勞を盡す。大堰桂の水いさかひには、鋤鍬の鉾先をあらそひ、鳥羽の田づらの古井を汲んでは、釣瓶のひまもなかりけり。されば國王もまことありて、政たゞしく、古代の風を興し、かりほの庵のあらはなるをあはれみ、寒夜のあさつきには、御衣をぬがせ給ふ。百官忠義を盡し、郡土民を撫でては、かぎりある貢物をゆるされけるに、天何の怒りかあつて、かかるからき目見せ給ふぞ、神泉苑の祈りさへしるしなくて、布留の社の名のみ空し。牛を洗うては雨をいのり、蓑笠をかけては氏神をたのむ。天早くあはれみをたれて、雨をほどこし給はば、御湯は大釜を盡し、相撲はあたらしき鼻褌をかかせん。猶ひなびたる笠のをどりもをかしく、装束出立は揃はずとも、借著ばかりはゆるされて、模様は天道次第たるべしと、莊屋肝煎謹んでかくのごとし。臣悲歎の情にたへず、拜表して以て聞す。

嘲ル佛骨ヲ表　　其角

古文傳ノ類、准ズ讀ニ孟嘗君傳ノ之例ニ

むかし韓退之、表を奉つて佛骨を嘲る。今我これを讀んで、退之をあざける。人死して骨となり、骨朽ちて土と變る。佛骨何の王位をけがさん。佛骨もし人を穢さば、禽獸の皮骨は、猶人をけがすべし。人は天地の靈にして、禽獸人に及ばず。たれ束帶の飾りには象牙をたふとび、珍簟の鋪物には、

虎豹の皮にふす。鼈甲は笄につくり、尾毛は筆の用にぬかる。鹿茸、牛角、鯨の鬚のたぐひ、宮室を飾り、器物をつくる。たゝき蝮は、なめて口中を潤し、雉子の胴殻、熊膽は、噛んで直に腹中にはしる。退之佛骨をいやしとし、禽獸をたふとしとするは、何の謂ぞや。若し佛骨細工のたすけにもならずといはゞ、はやく疾鬼にあたへて、錢かねとせざる。假令拂底の鬼ありとも、虎の革の犢鼻褌は取るべしと、かれが淺見を嘲つてしかいふのみ。

しばらくは蠅を打ちけり韓退之

讀二佛骨ノ表一ヲ　厚為

佛骨は西域の人の骨なり、漢土を飛び越え日本に來る。或偶跼蹐に足突き給ふた、いかなる長途留して、厨子にこめられ、外より鎖をおろしぬれば、大小用にかゝらさ目見給ふこそあはれなれ。はやく手作の紫雲に打乗り歸り去り給へ〳〵。

から鮭の舍利にならぬこそ過分なれ

陳情ノ表　支考

美濃國山縣郡。在二雲嶺明眞ノ社一。清書袋紙ニ記二此事由一、東華坊作ル文ヲ。依二此神一云々。愚

譜借二用李令伯ガ之表ノ題號ヲ一耳。

世に天地あつて、天地は人の父母とこそいふなれ。ひとは萬物の上にたてる物なり。その人に我あり、その我に東華坊ありて、西に遊ぶ時は、西花坊ともいへり。東西の二華は、支考が坊號にして、野にある時は、野盤子といひ、家にあるときは、獅子庵といふなるべし。さるは此の御神の氏子にして、風雅はおのづから漂泊のたつきとぞなれりける。昔は桑門に袂を染めて、ほのかに祖佛の影をしたひ、中比は翰窗に燈をとつて、深く孔老の腸を見んとせしも、おのれが智をたのみ、物の理にたどりて、ただ春の蜂の窗にまどへるたとへにぞ侍りける。一とせ湖南の幻住庵に、白頭の翁を見て、よ能は文字をはなれ、風雅は心を遊ばしむる物なりと聞いて、此の翁とあそぶ時は、酒にゑへる人の、何故ならでも、たゞ面白きこゝちにぞ侍りける。翁の曰く、誹諧といふに、三つの品あり、寂寞はその情をいへり。女色美肴にあそびて、麁食のさびをたのしみ、風流はそのすがたをいへり。綾羅錦繍に居て、薦著たる人を忘れず、風狂は其の言語をいへり。言語は虚に居て實をおこなふべし、實に居て、虚にあそぶことはかたし。此の三つの品は、ひくき人に、高き所をいふにはあらず、高き人のひくき所をいふなりとぞいへる。されば此のさかひは、人のほめ人のそしる所なるを、ほめられんと思ひ、そしられんと思ふおのれが思ひにまどひぬるをと。理は始めていたりぬ、事はつくすべからず。かくて誹諧は、まのあたりにありて、口まさにいはんとすれば、心のくまをつくさず。人のやすき所

をまなばんとて、おのれはむつかしき奥をたどり、おのれむつかしからざらんとすれば、人は金玉の手づまをつくす。深からずしてあさく、淺からずして深し。朝に思ひ、ゆふべにいねて、此の心又やすからず。ある夜、曲翠亭に遊ぶことありて、尾の荷兮が蔦の葉の一句を評して、誹諧はかく言ひつくすまじきをと申されしに、さはとむつかしき夢の、さめたる心地ぞせらる。落柿舍のぬし、洒落堂のあるじも、同じ夜のあそびに侍りて、我はかくおぼゆるといへば、人はさも思はずとこそあざむかるれ。よしや我が心のせまりたらん時は、燒火の轉寢に、雪折竹をきき、戶の節穴に、稻妻を見ても我はかくまどひたりと、思ひしらんに、我はわかやすき所を知れりけりと、今宵はじめてぞさだめける。是れよりあづま路のかたに旅立ちて、松島象潟のながめにあき、越の白根のしらぬ行くすゑも、心づくしの旅寢をだに、生の松原の名によそひて、生けるかひありとぞ見はてぬる。今年は老いの名によばれて、此の古里の春をも迎ふなるべし。人の命の定めがたきに、耕さずして食らひ、織らずして著る。我はた世の人に、何をかおほせたらん。入つては此の神の光に照らされ、出でては彼の翁の德にあそぶ。誹諧はおのづから人の上にいはれて、我はいかいの人をあやまてるなるべし。人の誹諧のあしからんをば、我が誹諧のあしきなり。我が誹諧のよからぬをば、神の風雅のよからぬをといふべし。まして夜居りの神心には、朝寢も身につみておほすらんかし。此の表をいさにくみ給ふな、陳

くはかうまで賴むまじき物を。たゞ誹諧に命をかふべくとも、四時の變化に私なからんことを、幣の御まへにかしこまりて、稽首の涙をかけ奉りける。

風俗文選卷之十

○論類

旅ノ論　許六

陰陽にしたがふ蒼生は、これ皆天地の蛆蟲なり。鮓食に生ずる蛆は、生れながら糧に富み、口あきて夜出づる鳥は、觜に觸るをとりて、やう／＼おのが糧とす。されぱとて糧の乏しきを歎き、俄に業をかへん手段もなければ、木啄のつゝき廻り、蜘蛛の網を張りて、待つより外はなし。つら／＼東西に奔走する旅客、糧の爲にせざる人稀なり。かの中に風雅に旅する人に代つて、論をくはふ時、こゝに大國を領じ、大軍を牽ゐて、往來する人は、糧を求むることおほいなれば、また其の罪も甚だ深し　又寶引の錢をたくはへ、十二燈をあつめて、ぬけ參りする二藏三藏、一錢の袖乞に滿足して、五藏をやしなふ。かれと是れとを論ぜば、二藏三八が上にたつことかたし。一日の糧、一月の糧、一年のかて、一生の糧もとめたくはふる計、其の根ふかく、其の源とほし。又馬上飛脚のやからも、旅に生涯を果す。圓位、風羅のたゞびも、旅に死なんとはかりて、心のまゝに終る。さればかたちの

似て、志のたがふ所は、雲泥の論なり。我ことし衣更着はじめより、五月の中ばまでに、旅することすでに四百餘里、おのが身の上を論じて見る時、大軍の將は、罪重しといへども、其の利益大きにふかし。吾今日の一錢をも求めず、五斗の米を荷うて、東西に漂泊すること、馬子駕籠かきの論に落ちて、終には路松の間に餓死せん。さればとて、鮓ふしの蝿を願ひ、螢蟲の藁に飽きけるを、うらやむにあらず。

仁不仁論　北枝

盾つくる人は仁にして、鏃するものは不仁なりとかや。醫をなす人は國を富し、人を醫するの名目は仁にして、實は不仁なるべし。病者多く療ずる人を、名醫とも、はやり醫者ともいふなり。其のはやる所をよろこび、乘物ざゝめかして隙なからんは、不仁の第一なるべし。さればとて、かの藪醫者のはやらざるも、仁とはいひがたからん。たま／＼病人とてむかへたらんをうれしと、羽織打懸け、時得たり顏に、走り出でらるゝこそ、これも不仁なるべけれ。むかしもろこしに、矛盾を一荷にしてうる人あり、矛うらん時は、いかなる盾もたまらずといひ、盾かふ人には、干將鏌鎁も、通ることあたはずといふなり。かたへの人ききて、其方が盾を、其方が矛にてとほさば、いかにやと問はれて、ついにものいはずして、本國に逃げかへりぬ。これを矛盾とて、をかしきたとへにはいふなりけり。

吾が朝にはこれをやはらげて、慶庵とも、いしやほんともいふなり。又は小村の道場坊も、薬をほどこす道は仁者なれど、これもはやりをよろこばれて、縮緬醫者にかはることなし。又は後生たすけんといふも仁の道に近し。されど釋氏も死を喜び、鈴打鳴らしてとぶらはるゝは、これも不仁の沙汰なるべし。昔より此の譬をへ穢多の伯樂とはいふなりけり。

蕎麥ノ論　　許六

天は天すき、地は地すきにして、いづれの時、おもき命あり、又は誰人頼みあつらへ、陰陽五行を以て、萬物化生する事をきかず。聖人天地の沙汰を大きにほめたり。天地はほむれどもよろこびず、そしれども怒らず。これ皆聖賢の理窟にして、元來天地に分別はなし。天は升ることを好き、地は降ることを好みて、四時の替をり、晝夜の苦勞、人もやとはぬ儕上こそ、大きなる損なれ。それより人物山川草木鳥獸まで、おのが一筋に好き入つて、外の物好きは更になし。雨は雨好き、風は風すき、夏は暑すき、冬は寒すき。されば櫻に梅もさかず、鶯がほとゝぎすを鳴きたるためしなし。聖人は聖人好き、阿房はあほうすき、鬼は地獄すき、佛は極樂すき、人は人すき、我は我すきより外はなし。世に儒釋道の好き人出でて、位鼎の足のたてるが如し。世々の方人ありて、わが好きたる道の外なしと思へり。五戒五常は、此方より出づると思へど、五倫五戒の墨曲尺をはづれて、人一日のたたぬ上

は、儒佛なくても事は缺くまじ。儒佛崇敬の人、聖人佛より、飯一杯ふるまはれたる沙汰をきかず。たゞ士農工商の家業の外、さらさら別に大道なし。當時儒好きを見るに、敬の一字は胸中にありて外より察しがたし。たゞ坊主を惡み、佛をそしり、親兄弟身まかる時、大きなる棺槨をこしらへ、檀那寺のやつかいとする、是れより外によきことは見えず。異朝の法に、地を買ひ取りて葬るは、大國の風俗にして、ふかきわづらひなきと見えたり。和國廟のために、地を買ひとらば、神代より日本半國は買ひとられん。砂糖曲物にて埒するこそ、佛家おほきなる手柄なれ。いにしへより鳥邊船岡に葬りあまりたることをきかず。釋氏の事たる事、田畑もたで秋をさめ、蠶飼せずして冬あたゝかなり。人間一種の建立にして、もし此の法なくば、此のともがら、いづれの島にかわれたさん。佛法には精進日あり、昔は祥月一日の沙汰なり。それさへ大小のくり合、閏月の相違にて、命日の鐘もみはおぼつかなきに、眷屬あまた出で來て、飯料不足を補はん爲、毎月にはなりたるとや。月々齋米をやりながら、二親もたぬものなければ、一とせの中、二日はのけて、二十二日魚くはぬ日こそ口をしけれ。佛法修行の人を見るに、其のなす業は坊主のまねなり。成就の時と見えて、くりくりと剃り廻し、袈裟衣の仲間に入つて、上品上生と思へる時、其のなり濟ましたる所を見れば、物も見事なる坊主なり。たまたま佛法を樂しみて、浮世をやすう思はるゝ人のなきこそ本意なけれ。儒佛の最初はあたらしか

らん、次第々々にふるくなりて、聖人佛も出で給はず。是れに誹諧を加へたらば、忽ちあたらしき聖人も出で、當流の佛も出世し給はん。昔堯の二女を許したるは、聟も舅も聖人の寄合ひ、孟子嫂をおほるゝ時、さし合ひをくり始めたるは、豈孟軻の流行にあらずや。佛は功徳をすけり。達磨の無功徳はいき過ぎたながら、これ佛法のあたらしみならん。たれ當時凡家の人、聖人佛になりて何の益かあらん。たゞ一家の中の聖人にて、世の助けにはなりがたし。其の上仕官は浪人のもとゐ、工商農業の人は、金銀田畑をかすめ取られ、道しりだけの損をして、たちまち非人乞食なり。その時例のふるみにおとし、時にあはぬとて仕舞ひけり。とてもなりにくき聖人佛をうらやまむよりは、たゞ愚癡に金銀をたくはへ、世の爲、人の爲、ほどこし侍らば、生聖人、生佛とて、釋迦孔子より有り難からん。例へば饂飩を好く人あり。其の子は蕎麥切を好めり。蕎麥ずきはうどんを謗り、饂飩方はそばきりを惡めり。日夜朝暮此の論やまず。むかしより、蕎とも麥とも、世の一統せざれば、蕎はそば好き、麥は麥ずき、天は天好き、地は地好きには極まれり。そしりてをかしければ謗り、ほめてあたらしき時褒むるものは、我が大道の誹諧なり。

〇頌　類

誹諧ノ頌　　李由

はいかいもと和歌の一體にして、神代よりはじまり、更に連歌より出でたるにあらず。其の法式、連歌に相似たれど、あながち無言、新式に泥む事なかれ。俳諧、誹諧、誹諧、滑稽、諧隱、謎字、寓戲、諷諫、狂言、九つの品にわけられ侍る。いかなるを云ふにかあらん、まさしく知る人なし。公任、經信ごときの人の知らざることなれば、末代に定むべきにあらずとは、御抄のおもむきなり。古今、千載、後拾遺等に見え侍れど、今のはいかいも、九つの中には、相かなへるならん。これ和國末代の風俗にして、四海ことごとくなかれわたり、あまねきもてあそび物とはなりにけり。右筆の早態に、花月のおもしろみを記し、火燵にすりこみ、障子の穴に、雪霙を吟じては、餘所の寒さを侘びたり。獨居無言の行に倦まず、旅店山野の道づれを求めず。豪貴にともなひ、鄙賤にまじはり、夜明しの會に、親の心を休め、年に似合はぬあだ口も、誹諧師に許され、野老村童も、睦月五月のひまを伺ひ、馬士船頭も、山川萬里の勞をなぐさむ。夫れ誹は市中にあつて、山林の寂しきをうらやむものなり。全く山居の道具にあらず。目に見えぬ鬼を泣かしめ、勇武の心を柔ぐることのは、詩歌連俳ともに、其の感ひとしかるべし。かの中にも、一言の活法に、白髪を若やかし、忽ち千歳の命を延ぶるは、獨り誹諧の德なり。鄙言俗風とて、君子いやしめ給ふ。連歌は德高うして、やんごとなき御翫びより

始まり、宗祇一代は百韻に花三本なりしが、宗長の時、深く悲しみ、花四本、雨一つの勅許を蒙る。鰒は毒ありとて、喰ふ人の稀なるに、陰徳をかくし、誹諧俗流とて、捨てられたるに、大きなる手柄ありて、日々の流行に新風をおこす、これ其の德のすぐれたる第一なるべし。

蕎麥切ノ頌　　雲鈴

蕎麥切といつは、もと信濃國、本山宿より出でて、あまねく國々にもてはやされける。されば宇治の茶あつて、同じく茶臼石に名高く、伊吹蕎麥、天下にかくれなければ、からみ大根、又此の山を極上と定む。洒々落々の風流物、たれか是れを崇敬せぬものはあらじ。世に道成寺の能あれば、其の次は三輪にきはまり、饗の料理過ぎて、後段の時は、かならず蕎麥切の場所なるべし。常に胃の氣をめぐらし、諸鬱を散じ、壽命を延ぶる聖藥なるに、いづれの爐氣人か、中風の毒とあだ名をたてられ、蕎麥喰はぬ人も、頓死中風はするなるべし。只蕎麥、人の罪となることを口をしけれ。近頃は慳貪屋の手に落ちて、所化寮の俄客に、青貝の手桶荷ひこみ、比丘尼宿の大よせに、錫の鉢をすゑ並ぶ。壁に紋書きたる大津茶屋には、一本槍の旅客をとゞめ、寢覺の門前の何本もりには、通りの馬士をまねく。有馬の夜食、淀の川舟の乗合、眞那精進の別ちもなく、をとこ女の去り嫌ひもなし。夫れ蕎麥大根は、君臣佐使の付合なるを、越路の國に、胡椒の粉の折形を備へ、都の方には、山葵薑にてやら

るゝこそ本意なけれ。先師翁のいへることあり、當麥切誹諧は、都の土地に應ぜずとて、一生請合ひ申されずとかや。花車を好みたる、あるへいたう盛もくるしく、又一寄づゝの盛並べも、中々待遠なれば、たゞつくね盛の大椀にて、二杯目のとき、はじめて本性には立ちもどりけり。仕舞限りの一雨がさねは、無念無想の境界になつて、うき世の思出を申しけり。

酒徳ノ頌　朱廸

伯倫酒徳の頌作る。其の徳あげてかぞへがたし。さる徳ありて、内損脾虚の病を愁へ、酒毒悪腫の痛を生じ、身をやぶり、徳を失ひ、生酔の號をとりて、朋友のまじはりを斷ち、彼戒のとがを蒙りては、佛の道にそむく。されば盜跖にも徳ありて、伯夷にも損あり。これ其の用ゐる人によりて、其の理のとり誤りなるべし。我今酒の徳を見るに、京奈良の酒屋、伊丹鴻の池の酒藏、日々に身を潤し、月々に屋を潤す。綾羅錦繡に目を見出し、五味八珍に腹をこやす。ある時は吉原島原の揚屋に遊び、大臣とあふがれ、作善供養の場につらなりては、大檀那の號をとる。是れみな酒袋のしぼり粕なるべし。きのふまでは下部の藤次といへるものも、けふは何がし町の名主、宿老の列につらなり、小賣請酒の細望姓も、白壁をならべ、大釜の煙絶ゆる時なし。これ世に上戸といふものありて、酒の徳は顯はれたり。さあらば下戸はあまねく富めるものにやといへど、むかしより下戸のたてたる藏もなしと

は、皆飲みぬけの金銀にて、三葉四葉の酒藏とはなれるなり。是れも又理のとりあやまりなるべし、其の德孤ならんや〳〵。

石臼ノ頌　　芭蕉

市中にあつて、俗塵によごれぬものは、げにそのはじめをよくするよりも、その終りをとぐることはかたし。商山竹林の猛士も、猶出でてつかへ、寛平華山の上皇も、終りたしかならず。たま〳〵これを見るに、たゞ石臼のひとつのみ。聖一國師は、これをもて肉身をやしなひ法身をしる。民家にはまた、麥刈りそむるころよりも、籾こきおとす冬にいたるまで、片時も餘所にすることなし。其の高きことを論ずれば、役優婆塞の庵の中にかくれて、彼たくひを道引きりの上に立つべし。上と下とふたつなるは、ちからたらざる者の爲にもつはらなればなり。不斷土間にあつて、筵より外を見ぬは、謙に居る事のとゝのへるにあらずや。かりにも黄姉の手にとられざることの、ありがたきことを、深くさぐりしるべし。目なだらかなる時は、かますを擔ふ老翁の出で來て、こつ〳〵とする音すみて後は、季札が劒を塚にかくることを耻づべし。名をぬすむ盜人はあれど、石臼をぬすむ盜人はなし。また人の心をみださざるのいたりならずや。月さしのぼる夕顏の陰に、ひとりはおとろの髮をまくね、ひとりは佛のまねをするあたまなりにて、くるしきことをおぼえず。挽きまはす力に、其の飢ゑをた

すぐるは、文よの始めにつたへたまへるにことたかはず。やゝいま様のなつかしき歌のふしにもかよはず、辭も唱歌も古代のまゝにして、枝もさかゆる葉もしげると、しはぶきがちに、わなゝかれたるぞをかしきや。

○讃贊類

西行上人ノ像讃　芭蕉

すてはてゝ、身はなきものと、おもへども、雪のふる日は、さぶくこそあれ

花のふる日は、うかれこそすれ。

神農ノ像讃　凉菟

野にもね、山にも寢る人を、人は神とも佛とも思へども、薦著たる乞食は、門にもたたせず。この皇いまさば、上古の位におはして、下々がゑに物はきこしめすらん。さはいへ、春の野遊びには、醋味噌あらばといひおきけん、慮外ながらもわれらが活計なり。

神農もおもへば莧に野蒜かな

團扇ノ贊　荊口

詩あり、歌あり、はいかいあり。おほくは班女が似せ箔つかひ、これこそ古手の打ちぬきなれ。中にも山崎にすめるさる法師が、

月に柄をさしたらばよき團扇かなとは、いうたりけりとて誰はなし。上弦下弦は、月の部に入れぬ合點も迷惑なり。今當流のちか道は、其れその傍の灸の餅、いかなる人も一串は、鹽梅よしに贊して曰、

味噌つけてあぶらればよき團扇かな　　許六

入學ノ贊　　許六

儒家何かしが猶子、洛に入つて道をまなぶ、賢じていはく、もろこしに擲梓七年のすといふ法、篤にして遲し。當時は二年にして、大木の幅する木あり、油斷すべからず。

木箱にまいなる樹の若芽哉

紫芝ノ圖ノ贊　　許六

在老井四絶之一絶也

靈芝の産たる事、王者仁慈ある時は、かならず生ずと、秦中長久の時なしりける、いとめでたし。されど聖代に、あはじ／＼と待ちけん心長さよ。さる心ながさにては、不圖うち忘れたる代もありけ

んかし。又地靈なれば生ずともいへり。ある書にいはく、東坡夢に人家にあそぶ。堂西に小圃あり。古井の石上に石芝あり。上に紫藤を生ず、折りて喰らふ、味ひ鷄蘇の如し。予が五老井の上に、草字藤あり。其の西に紫芝圃あり。されば坡翁が夢は、余が五老の地なること明らかなり。戲れに賛じていはく、

靈芝よ、靈芝よ。
田夫の孫の手となることなかれ。
禪僧の如意となることなかれ。

我きく、いにしへの韓氏は、楚にあつては、わづか執戟郎にいやしといへども、漢に仕へては、元帥にのぼつて、終に大漢を興す。器物も又同じ。我が朝とゝやといふ名物の茶椀は、魚店何がしの猫の飯器たるを、達人とつて萬貫の道具となせり。これ用ゐらるゝと、用ゐられざるとなり。あなかしこあなかしこ、證文の出しおくれ、出損になることなかれ。

○書　類

院ノ艶　書

やまとの國に梟といふ鳥あり、鶯姫をこひて、文かきやる。ことにそもじはまことゝもじ、いくたびも文かよはして、まことの文字の返し見るまで。

日蓮上人ノ報書

新麥壹斗、たかんな三本、油のやうな酒五升、南無妙法蓮華經と回向いたし候。

以呂波文字後序

上古日本の文字ありて、今に用ゐ來るもの兩三字あるべし。いつの比よりか、漢字渡りて、本朝の文字はたえ果てゝしる人もなし。もと假名字といふは、萬葉書の事にして、訓と聲とを交へ用ゐる。これ以呂波文字のなき以前、男女尊卑これをもて文字の用を達せり。源順が萬葉集のかな付も、聲と訓とのまぎらはしきが故なり。片かなは吉備公の製作にして、アイウエオの五音相通の文字とな大和假名とは此の事なり。又いろは文字は、世に弘法の作とのみおもへるも、一決し難し。一説に、

以呂波仁保へ土。知利奴留遠。

以上十二字護命の作、

和加與太禮曾。門禰奈良牟。宇爲乃於久也末。計不己衣天。安左幾由女美之。惠比毛世寸。

以上三十五字は弘法の作、

京の一字は傳教の作なり。いろははもと四十七字なるを、傳教此の一字を加へて、邊鄙遠境の男女まで、王土の字をしらすべき心ざしにて、一二三より、千萬億の數字は、聖德太子のかぞへ歌を、ここに添へたりといふ。又は空海、勤操、傳教の三師、共に造るともいへり。又兼良の纂疏には、四十

七字は天地自然の聲、彼の漢聲を假つて、和字となすとかや。されば、いろはを國字といひて、天竺震旦になき字とはいひ難し。是れ全く漢字にして、草書の姿なるをや。文の體は、長歌短歌のさまにして、あまねく末世に、手習ふ初めにぞなれりける。さるを後代此の中の字性、とりあやまり、書きあやまることおほし。まづへの字は、へノのへにして、ためずして斜なるべし。これ、へとゑの分ちにて、撓みたるを、おゞゑといふなり。とはトなり。止の字にあらず。すべていろはは訓をとらず、皆聲を用ゐるによつて、トなること明らかなり。つの字に疏多し。たゞ門の字と心得べし。但（傳）日むは牟なり。世に步武と思へるは、點をうつ所になつあり、またく步武にあらず。點は厶の押への點なり。ゐの字はゐいての字にして、木篇に作るは非なり。又をの字は遠の字なり。これを日のを、奥のおといふ。江は衣の字にて、おゞゑといふは、兄の字に歸す。これ橘諸兄の兄なり。上代のいろは文字と、中比今様の字なりは、はなはだちがへり。次第にあやまりもて行きて、あらぬ物になり果てたり。その上、源氏物語出づる比にさへ、はやとりあやまれりとて、紫式部もこれを歎きたるを、當世野郎傾城の書きちらしたる字形には、正字の俤もなく、此の後次第にしる人もなくなり果て、いかばかりの字形にか、なり行かんもはかりがたし。京極黄門定家卿の、かなづかひとて、定めおかれしより、歌道の傳授物にして、是れをしらざるものは、無下のことなるべし。されど大和言葉に用

ゐる假名字には、まつたく字心なし。上古の萬葉書にて知るべし。これ天竺の陀羅尼字の類ならん。假名遣一通は、和國の者のしるべきことにして、しひて吾が誹諧の上にては、ふかく吟味せんもむつかしかるべし。たゞかな書のたぐひには、此の以呂波の正字を、たゞしおほゆるを、第一とすべきことなり。文字のたゞしきもろこしにさへ、文字をとりあやまりて、古篆の篆書に、たがふもの多し。眞は眞なり、行は眞より出づる。草は古篆より出でて、まつたく行をやつすにあらず。草書に精しからんと思はば、篆字にわたつて、其の源をたゞして知るべし。されば和朝のいろは文字も、此の正字をもて、たしかに書かば、たとひ異朝にわたしたりとも、文字の正字はすみやかに、異國人もよみあかすべしと、九花亭の主人、松氏汶村、風俗文選、かなづかひをたすけんが爲に、これを跋す。寶永三丙戌春三月望。

右此本朝文選全部十卷者、五老井許六先生之撰也。嘗聞先師芭蕉翁雖レ有二此志一文章未レ調而止レ之。先生十五年來繼二此志一終其功成。雖レ然甚祕レ之深藏レ之、門人等空歎レ朽二文庫一。二三子合力而僭發二書賈一爲二自他一直二其本書一與二書林井筒屋一彫二之梓一。全無二一字誤一最無類本。只恐僭偸罪。可レ蒙二和歌三神御罰一者乎。

寶永三丙戌年秋九月吉日

五老井門人

本朝文鑑

支考撰

選ニ本朝文鑑ニ序

蓮　二　房

昔より詩歌連誹の四つありて、詩歌にも文章あれば、連誹にも文章あり。文章は其の四つをひろむるものなり。そも文章のそこばくなる、唐土に莊周子あれば、我が朝に紫式部ありて、和漢の文章に人をかすまへざるは、世すでにその跡をとむればなり。本より其の詩には杜陵をまなび、其の歌には人丸をしたひて、其の外は百千の作者あるも、あの詩にならひ、その歌を似せて、自己の心を傳へざらんには、此の外はたゞ上手の名のみならんか。さて連歌には宗祇あり、誹諧には芭蕉ありて、すらに古人を尋ぬるにも及ばず、心の行く所にしたがへども、名人の場は爰に自在なるをや。これよし上手と名人との一歩千里をしれとなり。されど連歌には文章の筆格をたてず、おのづから和歌の家にせいせられて、源氏、狹衣のぬめりをつたふ。連歌はいまだ文格あらずともいはむか。今や誹諧の文法は、はじめて芭蕉の筆頭より出で、詩歌連誹の姿をわかち、風賦雅頌の體をそなふ。さるは和漢の文法に姿情のふたつをしればなり。これより其の門に文學の名をならべて、其の藩を窺ひ、其の室に入る。いづれか先翁の一脈を傳へざる人あらん。江東に菊阿佛は作意を專らにして、百篇すべて誹諧な

らずといふ事なく、閑西に東華坊は法格を明らかにして、一章更に通鑑ならずといふものなし。況んや本朝に假名の詩をつくり、辭の類をあらためて、五七の語路に明かならんをや。しからば百世の學者とても、文章の鑑を前に置きて、文法、句格をまなぶにはしかざらん。我が師やここに其の趣意を傳へて、八代の衰を興せりともいふべし。昔も誹諧の文章はありながら、蜂のさしあひ、蟻の腰折など、浮言、閑語の拍子にかゝりて、王侯の前には翫びがたからん。それを古今の差別とはしるべし。さりや文章の無窮なる、和漢に五人の名をさして、我が家の翁に斯の文あらんには、今日さらに六七人の名のみならんか。誠に山の高からざらんや、誠に海の深からざらんや。誠に我が詞の過當なるなり。されば寶永乙酉の比ならん。湖東の五老井に文章を輯めて、風俗文選と題するものあり。さるは我が門の作者のみにして、其の外は只二三章もあらんか。選者はいはゆる作意に自在なれば、誹諧の意地をたつべくして、歌人、連歌師に敵すればならん。然るを今の選場には、古今に文章の體をえらびて、たとへ金玉の聲あるも、物に對して虚實をしらざらんには、人にをしふる道なからんと、我が師五ケ條の法を遺して、文章の家の式目とはなせり。先づは第一に文章の虚實をしるべし。敎書謟狀の理論にはあらず。第二には文章の起結をしるべし。一篇の斷續たしかならねば埒なし。第三には二句の長短をしるべし。句讀の法にかなはざれば讀みがたし。第四には假名と眞名との配(くば)りをしるべし。

倭文は手爾遠波のことなればなり。さて第五には誹諧の筆格をたてて、歌人、連歌の跡をおはさるべし。しからば誹諧には此の一格ありて、後の人をして今の人を慕はしめば、生きては先翁の光をかゝげ、死しては我が家の名を傳へざらんやと、古人の句法に叶へる物と、新文の筆格をたつべき物と、すべては七十餘篇を選み、我が輩の餘力あらばと、かくは遺誡申されしや。爰において、蓮二が眸を机右の選にかゝげ、白狂が眼を燈下の註にあらつて、本朝文鑑の四字を題するより、始めに我が朝の歌類をあらはし、次に漢家の詩類にならふ。其の餘は梁太子の文選になぞらへて、帝王朝臣のたふときも、工商農夫のいやしきも、たとへば閻王の廳の貴賤なきが如く、其の交りのまして風雅ならんをや。そも／＼文章の專要は、聖賢の道を筆につたへ、君父男女の中をやはらげ、鬼神の心を感ぜしむるに、何かは虚實の一隅によらん。さてこそ五ヶ條の第一をしらば、言語文字はかりの物にして、儒佛萬卷も無益をしるにはしかじ。第二、第三は文章の骨肉にして、第四、第五は文章の皮毛ならん。さるをや、今の世に文章を學ぶ人は、一氣發動の骨肉をもとゝのへず、紅粉の爲に皮毛をよそほふ。まして第一の虚實に不自在ならば、何を文章の姿といひ、何を文章の情として、百世の後に傳ふべきや。それらは昔の浮言、閑語よりも、風雅においては罪も深からん。先師かつて六一經を說きて、これらの悔みあらんには、我が輩のしのびざる所ならんと、寶永の辛卯に、一簣の志をはこびて、享保

の丁酉に萬牛の功をとぐるものなり。

惟子惟支孟秋日

註本朝文鑑序

渡部狂

爰に、我が師のいへる事あり。此の一句は發端にして、爰にとは發語なり。然れば此の序には此の詞を以て兩所に意を分ちたるは、但し論語に述而篇の辭義と見るべし。誹諧もすでに末季におよびて、此の一句を起語とも云ひ、或は句讀の句とも云ふなり。ある人は作意をよろこび、ある人は巧言を好む。此の二句を結語とも云ひ、或は讀とも云ふなり。總て起結と句讀とは同意に似て少し違ひあり。此の序には句讀の點を加ふる故に起なり結なりと許り云はで、句讀をことわらず。されど句中の句あり、句中の讀あり、讀中の讀も亦あるべし。但し句點は旁にあり、讀點は中にあり。四面の楚歌も我聞くにたへたるは、我がはた我耳の老いやしぬらん。此の二句は起語と結語となり。但し四面の楚歌は、楚國の亡ぶる時なれば、誹諧滅亡の聲に臨ふるなり。老いやしぬらんとは、誹諧の變を知れば、己を退けて、人を咎めざるの謂なり。されよ、發語ながら、返辭とも云ふなり萬物に生住異滅ありて、此の句は起語にして、四相は世の變なり。大なる時は百劫にわたり、小さき時は一念にかぎる。此の二句は同じ結語ながら、下の句に連續せり。此等に句讀の用を知るべし。委曲は此の次に註あり。年月日時は變の常ならん。此の一句は讀中の讀なり。百劫一年一月一時と前に續きたることなればなり。前の二句は大小の二を云ひて、後の一句に其の中を云へる。これを錯綜顛倒の法と云ひて、大中小をかきまぜたるなり。變の常とは、四季の轉變にして然ならん。しかるに、昔の誹諧は、上は返す語にして、次は起語なれば何れも句の點なるべきに、或は發語と起語とつゞき、或は返辭と起語と續く時は、纔かに一字二字の間なれば、同じ點のやかましき故に、上には句點を加へ、下には讀點を加ふ。これは註者の心得にして、後文の諸の故實とも云はん、以下はすべて此の序に效ふべし。守武宗鑑より生住して、檀林の後に異滅しぬ。此の二句は結語なり。檀林の後とは、難波の宗因より變動

して、其ののちは長短の句に減亡せり。其の間すでに五十餘年ならん。此の一句は變滅の總結語にして、古代の誹諧の四相を云ふなり。今の誹諧は兜率の内院より、我が宗の光をはなつて、此の一句を句中の眼と云ふべし。爰に誹諧の骨髄と云ふ事ありて、世の文章に此の骨をあやまるなり。此の骨髄を知らざれば、長句に息のつき所なし。一句にして二句となせば、切の句意なり。殊に大古池の蛙の一音より、隨類得解の岐（ちまた）にあそぶ。此の一句は眼中の眼にして、これも大切の句法なり。古池や蛙とびこむ水の音とは、故事に正風の始めにして世に響きたる發句なれば、彌勒出世の佛語に喩ふ。如來一音に演説法、衆生隨類各得解とは、天下の門人の僕々まち／＼なるを云へり。岐の一字には門流の分れを云ひて、已に變動の心を含めり。春は梅の花に鶯の時をたがへず、卯の花の雪にはちどりもまどはざらん。此の二句は起語なり。句中に眼あるに似たれども、春夏冬の三季を雪によせて三句に云へば、意は三句にして起語なり。されば誹諧の正風は、萬物自ら其の所を失はずと、詩歌の正道を花鳥に云へり。秋は紅葉に鹿のなくをかなしみて、四序の幽なには涙もそへぬべし。此の二句は結語ともなれど、前の三句を起語として、一句を結語と見るべし。總て此の四句を影略互見の法と云ふなり。三句の間に四季を云へる故に、夏冬の二字を影略して春秋の二字に互見せり。或は前の二句には花鳥を對し、これを句對の法にして、意對とは違ひあり。或は此の二句は卯の花の夏と千鳥の冬とを雪の一字に隔てたれば、雲土夢の格とも云ふべきか。或は秋の句と春の句と卯の花を隔て、字對すれば、これらは隔對の法と云ふ。總ては錯綜とも見ゆれど、四季を三句に云ふ時は、互見の法に定まりぬ。然れば此の四句には種々の文法ありて、三句を起語とし、一句を結語とすれば、古今に珍らしき句法にして、爰を文章の鼓舞と云ふなり。されば結句の幽玄とは、故翁の正風は四季の自然より出でて、花鳥の情に私なからんには、風雅の感涙も落つべしと、俊成の歌を借りて云へり。爰に住する事三十餘年にして、新より奇をあらそひ、奇より變に狂ふ。此の三句は起語ながら、前の一句より二句を生じて、今の句中の句にして、長短の句法の鎖と云ふべし。或は新奇變の三字を以て、四相に分ちて二句に對したる、正しくは新奇變動の四相ならんに、奇の字に上下の働きありて、これをば互照の法と云へり。影略互見に似て少し違ひたる所あり。滅亡も稍十年には過ぎざるべし。此の一句は古今の誹論の總結語なり。但し三十餘年の句を起語として、滅亡十年の句を結語となし、中間に二句の短語を用ゐたる、これをば隔句の法と云ひて、隔對の如く字をば對せざるなり　しかれば

我が家に誹諧の文章ありて、百世の人の鑑たらんには、彼を捨てこれをまなびざらんやと、此の三句は句讀の中の一體なり。前の二句は句中の讀にして、後の一句は讀中の讀なり。然ればとは返辭なり。亡名の年はしきりにす、めおへるなり。此の句は序者の總結語ながら、決前生後の句法あり。爰に亡名の年とは、師かつて終焉の記を作り、東西二華の號をはづりて、濃の黃山に跡をかくせるが、實に誹諧の變を知りて、獅子庵の遺稿に此のことあり。今や文鑑の時に臨みて、誹諧の變をいふべきにはあらねど、此の二句は起と結にして、もつとも序者の自釋なり。脚下に崐崗の玉を看過して、故宮に瓦を尋ぬる人あらんには、此の二句は意對なり。文字の配りは對せねど、玉と瓦との意對なる故に、兩句ながら起句にして句讀を加ふ。意對なれば、起句となる道理を味ふべし。たとへば杜律の野老河魚も二句一意の對にして一句を二句に分てる故に、同じく起句の點を加ふ。文法の鑑ならん。いはずや、彼をすてこれを學べ、とこそ。此の一段は我が師の詞を返して、此の序の總結語となせり。これより以下には文章を續して、序詞はこれまでの事なり。されば此の段には、句讀の點多し。上の詞を括辭と云ひ、下の詞を釘辭と云ふ。括辭とは見ずや聞かずやなど、俗語にも人を括ると云ふ事なり、釘辭は以下の註にあり。爰に、我が師のいへることあり。此の句は前にありて起語なれは、後語も後端も同じけれど、前には誹諧の我が師を云ひ、爰には文章の我が師を云ふ。兩句た兩所に用ゐるの文鑑ならんか。世に文章をかかぬ人もなけれど、世に文章をしれる人もなし、此の二句は句中の讀にして、或は此の二句を標語と云はん。さるは、韓愈があるはかに云へる、句讀をだにしらざらんには、此の二句は前の結語なれど、さるはと返辭を置きて起語となせり。これは本註の法にして、前の本文を註釋せるなり。本より韓退之が師の說に、句讀は童の業に云へれど、我が門の文者のそれを知らざるは、假名には詞の長短ある故なり。譬へば漢には明の一字を、倭にはあきらかと四字によめり。況んや漢土は文字國なり。いかでよ、道を傳へ惑ひをとくべきやと、此の句は先師の詞の結語なるをやとの挿字に、序者の詞となるいかでよとは、散辭にして何かは詩歌の道を傳へ、連師の惑ひを解くべきやとなり。そは其の人もかくつくして、そは此の人もしらじ此の二句は前の詞を借りて、序者の結語とせり。といふ事なり。此の詞を釘辭

と云ふは、前の二句を此の詞にしあると云ふ事なり。或はとこそとも或はとぞとも此の類の詞多し。其は同じ姿の句を前に、二句する時の事なり。其の時は一句の間を少しふたゝびに作るべし。されども文字の長短をば合はせて、語路の足らぬを云ふなり。譬へば人之可レ畏而人之不レ知と書く時は、而の字は助語にてなけれども讀めるなり。法は復用の所を見るべし。たゞしこれはと共、これは法の要語なり。其の人此の人は文法のおもなり。誠に我が師の文章を吟するに、此の句は起語にして、讀にしは決辭なり。されば決辭と云ふ時は上に一字の詞ありて、下に二句ある時は、何れの詞にても句點を加ふべし。但し一句の時は下に續きて句讀の點はなくても苦しからず。此の點は決辭なり。虛押復用の長短をもかなへ、數量光彩の文字をも對す、此の二句は結語なり。但し虛押光彩などは、爰にを云はん爲に加へしなり。これを漢字に寫す字書の四門をあげて、本より十二門の用を云へり。然るを長短に文字二樣を對せる、此等を字對の心得とすべし。尤も杜詩の對など、態字は大方にして、數量光彩は悉しく對せるなり。

時は、本朝文粹にしこし、此の二句は下の句につゞきたれどこれを句中の讀と見るべし。但し本朝文粹とは、其等の文章にも似たらんと、爰に假名眞名の通用を云へるなり。されば我が師の文章は大概和漢の通用にて、例の遺稿にも文の賦など其の外に四五篇も假名と眞名とに書きまぜたるものあり。さるは古今の序の假名と眞名は意通じて、姿は別なり。爰には一字一點の手爾波とこも、漢文の姿と違はず、然も倭文にして、然も誹諧なり。此の故白樂天もこれには我をゝるべし。此の句は上につゞきて、讀文の上の總結語なり。されば白樂天が事には、唐にも文者は多けれど、日本に來りて詩歌を論じたれば、我が師の通用に、我を折らんと、いたく誹諧の筆法を云へり。されど、歌人の文には、此の段は上は返辭にして、下は起語なれど、句讀の點は前の註にあり。など、なん、なり、けり、かも、かはの手爾波ありて、此の二句は一句にして、讀中の讀ながら、これをも語路の斷續と知るべし。前に兜率の句は、句中の讀にして、爰とは少し違ひあり。句讀は此等に通ずべし。誠に此の二句は手爾波なれば、句中に斷るべき所なきを、なりけりと續きて、とまる節を以て爰に息をつかせたるは、長句を分つる文格にして、此の序に句讀の働きならん。漢字になさばなしがたき所あらんか。此の一句は結語にして、前の長句を分つこ、短語となせるより、此の句も一句の語勢がなら、長句の拍子にて、前の二句を結ぶ。此等に長短の法を味ふべし。すべては長々短々とならぶ中に、長短入れさて、誹諧の筆格と云ふは、此の一句は起語にして、奴の字は發語ながら、或は返辭にもあるべし。假名にしちがふるは文者の働きと云ふべし。

て眞名にあらず、眞名にして假名なるを見るべし。此の二句は結語なり。此の句は假名にして眞名なり、眞名にして假名なりと、和漢に通用の自在を云はんとて、一轉してかくの如く云へり。莊子か筆法に數多ありて、これは錯綜して顚倒せざるなり。倭國は本より倭國の風あらんには、何かは唐人の古文の眞實ならんや。此の二句は起結ながら、或は句中の讀とも云はん。これも一體の格ならん。しかるに古文眞實とは、日本の俗語に初心にかたい男を云へば、今は倭文をほめて、唐のちんぷんかんを笑ふなり。此の句ゐに、歌人連歌の風流なる、詩人、誹諧の寛濶なる、此の二句は起語なり。此の故にとは返辭なり。然れば歌人、連歌と云ひ、詩人、誹諧とのみ云ひて、一個人の人の字を上下に用ゐ、兩個の師の字を響かせたる、これを雙關の法と云ひて、互照の法に似て違ひあり。差別を味ふべし。赤して、此の詞は決辭なり。況んやもこれと同じ。返辭の違ひは前に註す。武門に文あらん人も、以上の三句は起語にして、普く文章の人を云へり。然ればば詩歌、連俳は勿論にして、士農工商の中に武門と云へるは、文武と兩角に立ちたる故に、況んやと決留を置きて運場の珍客を云へるなり。これも影畧の類にて文法の自在なり。此の文鑑の蓮社にあそびて、我を靈運が筆授とは思ふべからず。此の二句は結語ながら、うへは三句を結し、下は一段の總結語なり。但し此の二句の間には、何とぞ一詞入るべきに、これは中畧の法にして、上下の二句に意を含めたり。されば爰に蓮社とは、蓮二を惠遠法師に喩へて、上戸の淵明をば招きたれど、博學の謝靈運を入れざる心なり。さるは文章の虛實ならん、筆授は飜譯の時の役人にて、或は潤文とも云へり。文筆自在の人の役なり。此の靈運も其の役に切々賴まれて、さばかりの學者なれど、例の虛實に不自在にして、謀叛を起して終に誅せらる。然れば註者の自在も、利辯の過當を惡まれて、靈運が如く思はれんかと、一部の註の會釋なり。我はいさ、此の詞は、發語中の返辭にして、不ㇾ知とは人の評を待つなり。東花坊を師とし、蓮二房を兒として、文鑑に此の註者たらんに、此の三句は起結明らかなり。されどもたらんに、下の句に連續せる所は、但し句中の讀とも云はん。我が詞の過當をにくまれて、師兒の恩にむくいざらんは、此の二句は一體あり。我が詞の句は結語ながら、師兒の句は以上の四句の總結語なれば、尤も讀中の讀なり。しかれば此の二句に靈運を結して過當は却って師兒の罪なるべしとなり。なぞ。此の詞を數辭と云へて、上に下にも用ゐるなり。されど前の句に、此の字を置きては上につゞく數辭なり。此等も句讀の一格なり。總ては自己の

心をせめて、我はいさ　さはれ此の序に、　此の詞は返辭と起語なるに、句讀の二點は前に註せり。されば爰には序者の心を返して、序詞の評論も註所の詮義も、好しさらばと打捨て、當と、首尾の文法なり。

然の用を次に云へるなり。但しさはれとは、さはあれの畧語にて、漢文には任他と書きてさもあらばあれと云へり。　起結の註をあらはして、句讀の點をそへたるは、　此の二句は起語なり。然るに此の句を起結の註をあらはし、句讀の點をそへたるとばかり云ふべきに、上にての字と下にはの字との手爾波を置きたるは、上のての字に息をつぎて、語路のつゞかぬためなり。然らざれば、此の二句は一句にも聞ゆれば、二句にもきこゆるなり。此の故に下の句にも無用のはの字を置きたるなり。爰に兩句の意を知らば、助語の用無用を爰に知り、語路の斷續を爰に知り、假名眞名の配りを爰に知りて、句讀の點は實に明らかなるべし。

全く一部の凡例にして、萬端すべてこれにならへとなり。　此の二句も結語ながら、意は一句にして、讀中の讀なり。さらば前に此の格ありて、前の二句にして一句なるに對せり。されば爰に凡例とは、奥に數多ある事を序目の間に書き出して、一所に埒を明くるを云へば、效之の二字は凡例の作法にして、一部の文法句格より、句讀長短の差別など、此の序の註にあげたれば、外題にも凡例の二字あり。但し此の註を凡例と見るべし。尤も此の序には十四條の文法あり。十六條の句格あれば、先づは此の序を看讀して、句讀長短に和漢の差別あると、文法句格の似て似ざるとを知らば、文鑑一部も爰に明らかに、古今の文章も爰に明らかならん。

或曰く、漢に句讀の法と云ふは、語の絶えぬ所を讀と云ひ、語の絶ゆる處を句と云ひて、讀を先にして中に點し、句を後にして傍に點す。然れば句讀は一意にして、句中に讀を分ちたりと見ゆ。譬へば春は野山の雪消えて。鶯の聲も和かに。此の如く兩點して、これを一句と云ひ、此の句を疊みて一章と云へり。尤も此の點は縁省楷書の式にして、漢文は總て此の法なり。されども倭文に考ふれば、句は直地に其の事を言ひ放し、讀は分明に其の理を調停すと見れば、句點を先にし、讀點を後にして、句讀は但し二意とも云はんか。たとへば春は野山の雪消えて、鶯の聲も和かに、柳の色も濃やかなり。此の如く三點して、一句一讀と云ふ時は、或は三句一讀あらんも、或は一句二讀あらんも句中の句と云ひ、讀中の讀と云ひ、或は句中の讀とも云ひて、讀點の終りを一句と見るべし。さるは漢文の讀と句とを合はせて、一埒の處を一句と云はんも、倭文の句と讀とを合はせて、一埒の處を一句と云はんも、纔かに先後の

違ひのみならん。と、漢文は讀を先にして、中間に點すれば、中にある點は中絶の意にして、其の所を句絶とも云ふべき。字書に、讀の字の註にも、校書の點式とは取り違へあるにや。倭文は句を先にして、旁に點せば、詞の絶えぬ印と知り、讀を先にして、中間に點せば詞の絶ゆる印と知らん。但し中の點は連續して、旁の點は斷絶すと云へる點式の道理もある事にや。今は和漢の差別を論ずれば、尤も後惑なからんか、法は見りやすき方に隨ふべし。但し此の序に云へる發語と、起語との二點には、同じく旁に點すべし。註なき時は紛れあらん。

文法

序文　發端　發語　起語　結語

返辭　決辭　釘辭　歎辭　括辭

語路　助語　押字　抱字　句鎖

枕詞　句拍子

句讀、長短　語路、斷續

句格

影畧互見　結前生後　錯綜顚倒

奪胎換骨　無心所著　上中下畧

雲上夢　長短ノ句　蟋蟀　鳥鼠

互照　倒裝　蓋頭　藏尾　雙關
首尾　文對　意對　句對　字對
隔對　隔句　疊語　疊字　變態
本注　頓挫　開合　隱見

右は四十餘條ありて、文法とは一篇の法式を云ひ、句格とは一句の格例を云へり。但し和漢の兩用なり。或は奪胎換骨とは、古人の文章の趣を借りて、意は各別なるを云ひ、或は雲土夢とは連續の語を分けて、文に模樣を附するを云ふ。譬へば月花面白と云ふを、月は面に花は白しと云はんが如し。詩經の書經より出でたる文格なり。或は歇後とは、先に云ふべき事を、後に其の名を顯はせるなり。詩經の七月に此の格あり。或は鳥鼠は蝙蝠にして、物に何方へも紛るゝ事なり。或は雙關は一物を以て上下の働きある事なり。其の餘は字面の訓解に知るべし。尤も毎篇に法格あらんも、一篇の下に注解あらば、其の外は其の篇に效ふべし。

歌　永川詩式、永言謂之歌、亦曰放情曰哥、歌行相似也

詩　詩緒、序人心之感物而形言之餘也、釋名詩者之也

賦　陸機文賦、賦體物而瀏亮、註、賦象事明白也

行　詩人玉屑、如行書曰行、文章音義、行曲也

吟　文選註、吟猶詩也、詩人玉屑、悲如蛩螿曰吟也

曲　詩人玉屑、委曲盡情曰曲、或古有大堤曲也

引　文體明辨、大略如序、而稍爲短簡、蓋序之濫觴也

謠　詩人玉屑、通乎俚俗曰謠、或曰民間之詞也

辭　古文矜式、寄情深而語緩、或語文之些兮詞也

箴　詩緒、箴以譏刺其也、其曰折前事之失也

論　文式、論者宜曲折深遠也、或曰反覆盡事情也

解　文心雕龍、解釋也、莊子有角刃牛字義也

傳　韵會、史氏記載事跡以傳于世、或曰記其姓名也

記　證文、一一分別記之書、曰以備不忘也

辯 說文罪人相與訟也文式宜方折明白也

贊 字彙佐也明也文選有傳贊或曰論贊也

說 文賦註曰辨口之詞明前事虛誕惑人心也

銘 禮記註曰警戒之辭曰銘也釋名託銘其功也

頌 朱子詩傳頌宗廟樂歌美盛德之形容也

奏表 文選李註表明也標也如物之標或曰驗致事曰奏陳事曰表也

教令 蔡邕獨斷諸侯言曰教彙訓也授也亦曰令告戒也命也

書狀 韵會書寫其言如其意也彙狀猶言無形狀以見人也

序跋 說文序東西墻也盧曰次第語也彙跋足也私曰序之先後者也

對問 說文對應無方也或曰从寸寸法度也韵會引說文曰問訊也聘也

日記　說文、日記ハ記ル二往事一也紀與レ記同ジト　私、日日
記ノ二字ハ本朝ニ多ク用ヰル記スル二日用一ヲ之謂也

碑文　說文ニ碑ハ竪テレ石ヲ紀ス二功德ノ祭義ニ運載ニハ
當シレ用レ木ヲモ也

弔文　文選ニハ爲セリ二弔祭ノ類一也弔ハ弔問之義也　私ニ
日可レ言フ二以レ書ヲ而訪問スト也

昔より文章の題名は黑白に明らかならず、大概は似たるもの多し。然れば和漢の文章ともに首尾の文言に心得あらんか、既に文選には弔屈原文とあるに、古文後集には賦類に入れ、滕王閣序も或本には記の類に入れたり。然らば漢文の學者とても分明ならぬとは見えたり。されど文鑑の論に云はば、屈原賦は究めて弔文なるべく、滕王閣の序は記とも云ふべけれど、末に至りては賦と云はんか。閣に序の字は如何ならん。但し此の類に序の字を用ゐば、滕王閣に遊ぶとか會するとか云ふべし。これは其の末に詩あるより不案に序の字を置けるならん。此等に選者の好惡を知ればなり。本より文章の題名は諸抄に其の註は明らかなれど、一字々々の上を註して字面の似たる物は分明ならず。此の故に其の名の紛らはしき合はせて爰に註解せり。尤も其の題の似て似ざる事は、字義と字訓に一歩千里ならん。總ては三十餘題ならんを、爰には二十七題を擧げて不似と相似との差別を註するに、漢文の紛れ

は殊に知らず、倭文は爰に分明ならんか。

或は詩と歌は風雅の第一とするものにて、法格は本より嚴重なり。然れば文選などの部立にも、歌行曲吟の類より引も辭も詩類の中に散在せり。何れも此の名の詩より出で、詩よりも變化の所を知るべし。尤も詩歌の兩題は爰に細註するに及ばず。

或は歌と行も、先づは相似たる物と知るべし。詩人玉屑にも相兼ねて歌行と云ふとあり。されど氷川詩式には言を永じ、情を放ちてさのみ法格を定めずとも見ゆれば、或は長短の句拍子ならんか。但し此の類の中間には君不見など云へる短語ありて、樂府の常語なりと註せり。詩よりも法度を省きたれば、倭文には一體もあらん。本より和歌は註するに及ばず。

或は賦と記とも相似たれど、賦は當前の物を書き並べて文法に風流を盡し、記は往古の起りを記して文法は實體なるべし。但し賦には叶韵の法もあらん。

或は辭と云ふ時は、詩と騷との聲をかねて三體にも歌ふべしと、尤も漢文の辭を見るに、何にても其の事を序し其の末に辭ありて、必ず叶韵の法を用ゐる。先づは古人の漢文に隨ふべし。されど書籍の論によらず、小話に辭と云ふ時は、倭文の一體もあらんかと我が門には試論あり。後の風俗辭に見るべし。誠に漢土は文字國にして、我が國は手爾波の國なれば、辭とは助語の事にして、唐よりも日

本は詞の微情を盡せり。しからば辭の一體は後勘あるべき事ならんか。但し字書には辭とも詞とも俗字爲字の論あれど、文鑑は總て讀み易き方に隨ふ。これより以下の字論とても此の一字に效ふべし。

或は曲と云ふ時は、委曲に情を盡すべしと註したれど、何の文章をか纖細に書きて委細に情をつくすまじき、曲の字の註には不案なり。倭には源順が曲調もありて先づは歌曲の近き物なり。尤も和歌には國曲(くにぶり)と云ひ、躍(をどり)には曲を附くると云ふ。三ッ拍子六ッ拍子より十二拍子と定めて、間脱(まぬけ)と云ふは八拍子なれば、漢に長短の句法など、此等の唱歌に知るべきか。

或は吟と云ふ時は、物を感ずる處より文字に沈思の姿ありて、我と物思ふ歎息の餘音なれば、愚蠻の註に吟の字を盡せり。漢に白頭吟も倭に貧女吟も、文法は但し歌行の類ならん。

或は謠とは世間の風俗歌(はやりうた)にして、里民の諺(ことわざ)を盡すべし。或は歌字と異なる處は、歌は琴の唱歌なれど見れば尊卑の品も明らかなり。和歌は格別なり。

或は引と序とは長短の差別と註したれど、序と引は各別の所あり。強ひて序引の差別を云はば、序は詩歌を先にして何の引並びに序と云ひ、引は詩歌を後にして何の引並びに歌など云ふべし。但し引字は誘引勾引の義にて、詩歌の餘情を誘ひ出す心ならん。卽に文體明辨にも、引とは唐より以後の題名にて、引と名づくるの義分明ならずと。委しくは引類の下に註す。

或は論と解とは各別の趣ながら、論ずれば解する理ありて、書き立て見れば、其の文はまぎるゝなり。されど論は究めて相對する物を論じ、解は大むね一物の理を解す。論は悉く物をむつかしう云ひかけて、曲折深遠に論ずれば、解してもそれを論ずる事なり。

或は說と辨とは物の理非を一合して、明辨に說き分くる所は相似たれど、說は虛誕の理を以て人の心を感動し、辨は實有の理を演べて其の事を辨別すれば、說辨の二樣は各別なり。倭文に虛實の取り違ひあり。

或は記と銘とも相似たれど、記は其の事を記し銘は其の意を銘すと云ふべし。況んや銘は簡約にして文に法ありと註したれば、多くは序詞ありて銘あらんは、記と格別の所あり。但し紀と記は同じ。

或は傳と記とも相似たれど、人の起りを傳と云ひ、物の起りを記と云ふ。此等の道理を故實とは云ふなり。

或は傳贊も傳の類に入るべし。

或は贊と頌とも似たる所あれど、意は似て趣は異なり。頌は萬物の形容を頌し、贊は大方は人品を贊す。尤も字義に其の道理はなけれど、此等も故實と知るべきなり。但し讃の字も通用なり。

或は奏表の類として、君父に奉る奏狀も佛神に捧ぐる告文願文など總て此の題に入るべし。奏表は

上へ奉り書狀は下へ賜れ、或は同輩に贈答す。此の題は紛るゝものなし。但し諷誦文も誓願の詞あらんには、或は書狀の類には申狀返書は勿論にして、移文牒狀等を入るべし。但し移文とは本朝の廻文なり。

或は教令の類と題して慕教の類は勿論なり。或は寺社の制札などを入るべし。教は安堵の教書にして、令は王者の命令なり。

或は對問とは文章を先にし理論を後にすと云ふべし。問者は問を設け對者は對を設けて文法に鼓舞を盡す。譬へば難陳は理論を先にして、對問は理論を後にすと知るべし。本朝文粹には對冊とあり。

或は日記の類と題して、行狀終焉の二記を入るべし。或は紀行と云ふ時は、日記の中に入るべきなり。總て記の類とは格別なり。

或は碑文の類には、碑銘墓誌などを入るべし。すべて此の類は序ありて、其の銘其の誌などあるへし。尤も墓誌の論は碑文の類の下にあり。

或は弔文の類には、祭文哀文など諷誦文をも爰に入るべし。但し此の類は死期の哀傷を演べて、指して法格にかゝはらざらんか。さるは碑文の類などに異なりて、倭文の自由をなさんとなり。此等に和漢の差別を立て文章に私なからんこそ。

或は誄と云ひ原と云ひ删と云ひ啓と云ひ策問と云ひ彈事と云ひ、皆以て倭文の名に非ず、本より倭文に漢語を用ゐる時も、文字の容より其の譯に心得あるべし。此等を文鑑の筆格とせり。況んや原人原道の名をや。但し設論は對問の題ながら論の類にも接すべし。文選の客難賓戲等は、増して誹諧の筆格ならん。然るに連珠の類と云ふあり。此の名は題名の類にはあらで、文格の中に入るべきにや

或は文の類碑の類など古文後集には題したれど、文とは詩賦の總名にて、既に陸機も文の賦を書きて、詩銘說論は其の中にあり。烏の文花の文など一字はなれたる題名はあるまじ。北山移文は檄書の類なれば古戰場の文も弔文の類なり。されど文選の策文を文の類と題したるは、如何なる故にや知らず。或は碑の類も如何ならん。碑とは木石の一名なれば、碑の銘とか碑の文とかあるべし。此等は選者の錬不錬あれば、爰に古文の竇骨をも云へるなり。誠に古人の詞にも悉く書を信ぜずとは、錯を以て錯に著く故なるべし。

提　綱

一　呂氏が文章を見る法に七ヶ條あり。第一ニ見ル主張ヲ。第二ニ見ル規模ヲ。第三ニ見ル綱目關鍵ヲ。第四ニ

見二其意ノ首尾相應一ヲ。第五ニ見二其序ノ次第一ヲ。第六ニ見二抑揚褒貶一ヲ。第七ニ見二其篇章句法一ヲと云へり。さるは此の選の五ヶ條に擬ふるに、呂氏が第一は趣意のことにして、第二は文法句格ならん。然れば第四には起結を云ひ、第六には虚實を云へる、其の餘の三條は前を合はせて重ねて委細に云へるならん。誠に虚實より起結長短までの三條は、和漢通用の文式にして、假名眞名の配りは倭文の式と云ふべく、誹諧の筆格は我が門の式と云ふべし。此の故に和漢の文法を合はせて、提綱の始めには云へり。

一此の書の部立に歌の類を首めとするは、本朝文鑑と云へる大意にして、詩は其の歌に對せるより和漢の通用を顯はせり。然れば第三に賦の類は和漢の文集の先とする物にて、賦は文章の全體にして其の餘は皮毛骨肉ならん。或は吟行曲引の類は大かた詩の類に加ふべければ、暫く賦類を隔つと雖も、本より詩騷の類と知るべし。或は其の次に辭の類は所謂詩騷の變より出でて、風雅と俗談との間なるものとは、爰に文鑑の一格をたつればなり。其の餘は十八題の名を交へて、大概は文選の部立に效へり。

一此の書は古今の文集なから、誹諧の作者を主として、歌人連歌師を容たらんには、句篇に我が家の二字も此の理にして、文鑑の二字にも此の理あらんか。しかるに我が門の文章のみ此の選に數

多なるは、所謂二十七題を擧ぐるに、題ごとにそれが法格を出せば、他の文章の足らざる所には強ひて數篇の名を出せる、誠に難ずべく、誠に恐るべし。まして作者の尊卑を分けざるは、題の並びに次第あればば唐の文選も此の故ならん。

一本朝の文章に軍事物語などは、文法句格もありながら句讀の長短に拘はらず、偏に其の事の埒を明くるものなれば、文集の筆格とは違ひあり。譬へば源氏、狭衣などは、曹大家が筆法にも效ひて、史記漢書を意となせる、物語と文集とは此等の差別に知るべきなり。

一此の書に源氏、枕草紙の類より文章を裁ち入れて、私に題名を加へたるは、楚辭の漁父の篇を採りて辭の一字を加へたる例なり。但し誹諧の筆格に近きものを選みて、此の文集の飾りとはなせり。

一文章に韵を用ゐる事は、第一に四聲七音を知るべし。四聲は平上去入なり。七音は脣舌牙歯喉に半歯半舌を加ふ。或は沈氏が四聲韵譜に、平聲者哀シテ而安、上聲者厲シテ而擧、去聲者清シテ而遠、入聲者直而促ルと云へり。或は説文には、韵は和也韻なりとも、單ニ出ヅルヲ爲レ聲、成レ文ヲ爲レ音ト、音ノ與ニ爲レ韵トとも、總て此等の註を合はせて聲音韵の差別は明らかなれど、倭國の人の漢文に用ゐる時は字面の道理のみを知りて、語路の音律に通ぜざる程は、縦令本朝に菅三品江帥の如き人も、漢土の叶韵には覺束なし。さるを漢家の文章の韵も、或は有り、或は有らずして兎角に漢語の呂律に通ぜ

されば、漢文の沙汰は推量なり。然るに本朝の和歌の中に或は韵字を用ゐたるに、倭國のおかさたは分明にして、今の文鑑にも叶韵の法あり。されば本朝の韵法に、譬へば月と云ひ雪と云ひ次に面白きと云ひ、悲しきと云ふ時は、きの字は同字別吟にして同韵に用ゐるべきにや。古歌の韵法にも此の格の見ゆれば、漢に龜と龜との兩用の類ならん。然らざれば假名の叶韵は、アイウエオの五音ながら纔かに十字にして不自由ならん。されど春のゆきと平假名には書くべけれど、秋のつきとは書き離し。其等は作者の心得にあるべし。凡そ月と云ひ、人と云ふ字は、歌書にも假名は稀なれど或はたびびとゆふづきと假名に續けては用捨もあらんか。本より假名の韵法とても、四聲七音の通韵を知れば一韵十字とも究まらず。韵鏡通明の人に尋ぬべし。通韵の事は爰に盡し難し。或は長篇の詩も歌行の類も、換韵の體と云ふ時は、同韵に同字を用ゐるべし。古人の文法にも其の格あり。但し韵を隔つべし。或は首尾の韵と云ふ時は、漢文とは違ひあり。譬へば二句に韵を用ゐ、四句に韵を用ゐんに、二句四句に情を盡し難きには、其の間に四句にも六句にも韵を用ゐる。然れば中間の句は云ひ捨てなる故なり。總て此の段は學不學の論にあらず、通不通の詮義なり。或は假名に平仄の論も、委しく詩類の序詞に見合はすべし。

一文章に助語の事は人間第一の要文にて、漢に之乎者也の四助あれば倭に手爾遠波の四響あり。然れ

ば和漢に此の四字を以て、貴賤老少の品をも分てる。倭に手爾遠波は明らかなれども漢に之乎者也は明らかならず。さるは些兮焉矣などの助字の音律に通ぜざる故なり。此の故に漢文を讀む時は、有るより無きが讀み易し。若しや倭文に手爾波なからんは、孩兒のもの云ふに異ならじ。縦令漢人の漢文を書きて助字尚字を用ゐたるも、唐人の言語に通ぜざる人は、如何に博學の文者とても、これは決して信用し難し。漢に盧允武が助語辭あるも、其の字の訓解は明らかなれども、外に向つて用ゐる時は、一字も自己の用に立たず。是に藤源藏が用字格あるも、博く古人の文格を見覺えて其の字の訓解は明らかなれども、外に向つて用ゐる時は一字も自己の用に立たず。然らば兩書の詮要は唐の音律に通じての後ならん。些兮焉矣の其の外にも二十餘員の助語に通ぜずして、我が朝の漢文は大きに覺束なし。されど隣の蓼好きとか、知れたる倭文は面白からず、知らぬ漢文に骨折るは和漢に人情の常ながら、漢土の人には恥かしき事なり。然らば我が朝の文章にはテニヲハを助語と云ひ、ツムヘルを助尚と云ひて歌を讀むときは何の鎖と云ひ、歌を謠ふ時は、合形とも間の手とも云へり。語路の斷ゆる時の助音なれば、誰か我が朝の助語字を知らざらん。然れば漢土の些兮焉矣も本朝の手爾波にかはらざれば、漢音に通ずれば小童も知り、漢音に通ぜざれば大儒も知らず。知不知は爰に明らかなるをや。されど漢文も書かねばならぬ用あれば、先づは唐人に交りて唐音を覺

ん、次には唐人の文者に逢ひて、夷洛に風俗の詞を習ひ、二十餘員の助字を知りて其の後に漢文を書くべきなり。此等の語音を知らぬ人の、我は漢文を得たりと思ふは文章の道理を知らぬ方に落つべし。先づは本朝の文を知るべきなり。

一文章は假名眞名の配りとは、第一は作者の心得にして、第二は筆者の機轉なり。されば先師の文點にも、五箇條を釋するとて、鶯野藪に啼きてとは鶯野の續き穩かならずと、誠に漢文は上に返りて鶯の啼く野藪にと連續せり。然れば倭文の配りとは、鶯も野藪に啼きぬればと爰に助字の入用を知るべし。たとへ無用の手爾波とても假名と眞名との間には置くべし。此の故に文點には假名と眞名との兩用なり。次に筆者の機轉とは、譬へば月雪面白くとも、花時鳥興ありてとも眞名の響にて續きたるは但し筆者の不機轉なり。昔故翁の幻住庵の記に、魂は吳楚東南に馳せとあるを、魂吳楚と書きて、はの字を落したるは、第三には校者の不學と云ふべし。此等は五箇條の皮毛と云へれど、倭文に云はば骨節ならんか。

一陸士衡が文賦に、文は知ることの難きには非ず、文は能くすることの難しと。然るを我が門の戒めには、世に文章を書く人はあれど、世に文章を知れる人は無しと。爰に此の兩義を辨ぜば、知りて能くせざる者は少なく書きて、知らざる者は多からん。これを提綱の上の要文と見れば、總ては文

章の公論なるべし。

本朝文鑑

第一巻

歌類

本朝詠歌序

紀貫之

大和歌は人のこゝろをたねとして、よろづのことの葉とぞなれりける。世の中にある人、ことわざしげき物なれば、こゝろに思ふ事を見るもの聞くものにつけていひ出せるなり。花に啼くうぐひす、水にすむかはづの聲をきけば、いきとしいけるもののいづれか歌をよまざりける。ちからをもいれずして、あめつちをうごかし、目に見えぬ鬼神をもあはれと思はせ、をとこをんなの中をもやはらげ、たけきものゝふのこゝろをもなぐさむるは歌なり。此の歌あめつちひらけ始まりける時より出できにけり。しかあれども、世につたふる事は久かたのあめにしては、下照姫にはじまり、あらかねのつちにしては、素盞嗚尊よりぞおこれりける。ちはやぶる神代には、歌の文字もさだまらずすなほにして、ことのこゝろわきがたかりけらし。ひとの世となりて、素盞嗚尊よりぞ、三十文字あまり一文字はよ

みける。かくてぞ花をめで、鳥をうらやみ、かすみをあはれび、露をかなしぶ、心詞おほくさま〴〵になりにける。遠きところも出でたつあしもとよりはじまりて、年月をわたり、高き山も麓のちりひぢよりなりて、あまぐもたなびくまでおひのぼれるごとくに、この歌もかくのごとくなるべし。難波津の歌は帝の御始めなり。淺香山のことばは采女のたはぶれよりよみて、此の二歌は歌の父母のやうにてぞ、手ならふ人の初めにもしける。そも／＼歌のさま六つなり。からの歌にもかくぞあるべき。中畧（おほよそ六種にわかれんことは、えあるまじき事になむ。今の世の中、色につき人の心の花になりけるより、あだなる歌、はかなきことのみいでくれば、色このみの家に埋木の、人しれぬ事となりて、まめなる所にははなすゝき、ほに出すべきことにもあらずなりにたり。其のはじめを思へば、かかるべくもなむあらぬ。いにしへの代々のみかど、はるのはなのあした、秋の月の夜ごとに、さぶらふ人々をめして、ことにつけつゝ歌を奉らしめたまふ。あるは花を戀ふとてたよりなき所にまどひ、あるは月を思ふとて、しるべなきやみにたどれる、心々を見たまひて、さかしおろかなりとしろしめしけむ。しかあるのみにあらず。さゞれいしにたとへ、筑波山にかけてきみをねがひ、よろこび身にすぎ、樂しび心にあまり、富士のけぶりによそへて人を戀ひ、まつむしのねに友をしのび、高砂すみの江の松も相生のやうに覺え、をとこ山のむかしを思ひ出でて、をみなへしの一時をくねるにも、歌

をいひてぞなぐさめける。また春のあしたに花のちるを見、秋のゆふべに木葉の落つるを聞き、あるは年ごとに鏡の影に見ゆる、ゆきとなみとをなげき、草のつゆ水のあわを見て、我が身をおどろき、あるはきのふはさかえおごりて、時をうしなひ、世にわび親しかりしも疎くなり、あるは松山の波をかけ、野中の水をくみ、あきはぎの下葉をながめ、曉の鴫の羽がきをかぞへ、あるはくれたけのうきふしを人にいひ、芳野川をひきて、よの中をうらみ來つるに、今は富士のけぶりもたたずなり、長等の橋もつくるなりと聞く人は、歌にのみぞこゝろをなぐさめける。いにしへよりかく傳ふる中にも、奈良の御時よりひろまりけり。かの御代や、歌のこゝろをしろしめしたりけむ、かの御時に正三位柿本人丸なむ、歌のひじりなりける。これはきみもひとも身をあはせたりといふべし。秋のゆふべ龍田川にながるゝ紅葉をば、帝の御目にはにしきと見給ひ、春のあした芳野山のさくらは、人丸が心には雲かとのみなむおぼえける。又山部赤人といふひとありけり。うたにあやしくたへなりけり。人丸は赤人が上にたたむ事かたく、赤人は人丸が下にたたむことかたくなむありける。此の人々をおきて又すぐれたる人も、吳竹のよゝにきこえ、かたいとのより／＼にたえずぞありける。中略それ枕詞は、春の花のにほひすくなくして、むなしき名のみあきの夜のながきをかこてれば、かつは人の耳におそり、かつは歌の心にはぢ思へど、たなびく雲のたちゐる、なくしかのおきふしは、貫之等が此の世にお

なにゝ生まれて、此の事の時にあへるをなむよろこびぬる。人まろなくなりにたれど、歌のことゝゞまれるかな。たとひ時うつり事さり、たのしびかなしびゆきかふとも、この歌の文字あるをや。青柳の絲たえず、松の葉の散りうせずして、まさきのかづらながくつたはり、鳥のあとひさしくとゞまれらば、歌のさまをもしり、事の心をえたらむ人は、おほぞらの月を見るがごとくに、いにしへをあふぎて今を恋ひざらめかも。

鈍云く、此の篇は古今集の序詞にして世に知れる所なるを、文鑑の始めに歌序を置きて、本朝の二字に應ずるよの謂く、此の序の趣を借りて、歌に大和の意を顯はし、一つには目録の序詞あるに寄そり。まして二種の詞を以て和歌の始めに云へることは、此の故に其の文を中畧して、本集に和歌を先とすべき證文には出さるなり。然れば此の序には先達の評ありて、再び其の意を解するに及ばず。されど此の序の中間に、六義に分れし事は、このあるまじき事になしとて、貫之自註の詞なるを、今は六義に中畧ある故に本文の續きとはなせり。然るを富士の煙と長柄の橋とは、二條冷泉の兩家より今古の説を區々なるを、爰に淺抄の辨明を見れば、其の古歌に貞ある富士と長柄も共に僞ある物に變化すべきに、和歌の意の不易にして、人は心を慰むべき事、新意と古意との差別なれば、今は其の煙もたゝず、其の橋もなけれど、歌には何も煙をよみ橋をよむべきとぞ。尤も此の序の兩ミ所に富士の煙によそへては歌に心を慰むとも云ひ、結局に時移り事去るとは、奈良の御時も移りぬれば、富士長柄の事も行き去り、高砂の雙には様々なれど、此の歌の文字あらんにはと、一段の首尾は明らかなり。然らば諸抄の異説ある富士に絶不断の論もあらず、長柄に造不造の義もあらじと、我家の抄には註したれど、但し和歌の家の秘授あら

んには或は古今の序傳と云ふものに、長柄の橋も盡くるなりと聞く、と讀み切りて、人は歌にと下へ續けべしと、尤も聞く人はと讀み下すべからず。其の餘は總て先註に隨ふべし。誠に此の序の稱する所は小流行にたとへ、筑波山にかけて、君臣父子の恩義を重んずるより、夫婦朋友の仁愛を忍び、貴賤老若の哀樂を思へる、本より皆佛の專高にして、本朝に和歌の基本ならざらんや。これを信じてこれを仰ぐに、天地も愛に震動し、鬼神も之に感仰せる、實には序者の筆力と云ふべし。

補古三歌

天文歌　伊弉諾

あなうれし。むましをとめに。あへりし。

地理歌　伊弉冊

あなうれし。むましをとこに。あへり。

人和歌　下照姫

あもなるや。おとたなばたの。うながせる。玉のみすまるの。みすまるに。あなたまはや。みたにふたわたらす。あぢすきたかひこね。

註云く、此の三歌は古今序の趣にして、天地の始めに歌ありと云へるより古註にも此の詞を出せり。但し古註には貫之の自作とぞ。これは二神の詞を以て和歌の始めと云へる事は、上古に[illegible]文の[illegible]て、[illegible]此の

詞の三五七言なるをや。殊には一章三句にて伊滲之知の尚に叶なたる、神道不測の和歌にして誠に本朝の文質と知るべし。然るを二神の御歌は文字に配しては三十六字なりといふ。此等は神家の秘訣ならんに、強ひて註するは恐れあらん。或は羅山の折衷抄には、仄かに其の旨を出せるや。尤も二神の詞には神書の讀方も區々なれば、今は古今集の趣に隨ふ。昔は漢祖大風歌も短詩にして正路なるより、唐にも歌頌の基本と註せり。まして二神の此の詞の短句にして正道なるをや。此の故に天文地理の兩儀より人倫の三題に分れたる聖典の云へる次第にして、此の三を以て萬物の始めなればなり。次に古今の序の詞にも、歌の意の世に傳はる事は、下照姫と素盞嗚尊より云へれば、八雲の御歌は殊に人和の始めなるに世に普く知れる所なれば、今は此の姫の歌を以て人倫の始めとはなせりけり。然るに此の歌の意を註して諸抄に樣々の說あれど、此等は上古の歌なれば事の心もわき難しと、既に貫之も云へりければ、分明ならぬを神祕とすべし。或は清輔か奥儀抄には、此の歌に尚字を用ゐたるが、彼と此とは文句の違ひあり、尚字の事は求韵の下に見るべし。但し此の類の標題に補古三歌とは、文選の詩頌の始めにも補亡ノ六詩とあるに效へば、爰に一章三句なるも、爰に一章七句なるも、神代は歌の文字も定まらねば、此の故に三首と言はずして三歌とは云へるなり。さるは古代の詞を補ひて、今の世の歌を照らすと云ふべき文選に題註の意ならん。總ては日本紀の趣ながら神家の祕說を加ふとぞ。

南朝ノ歌　　　　柿本人麿

やすみしゝ。我がおほ君の。聞しめす。あめがしたに。國はしも。澤にあれども。山川の。清きかうちと。御こゝろを。よし野の國の。花ちらふ。秋津の野邊に。宮ばしら。ふとしきませば。百敷の。

おほみや人は、舟なめて、あさ川わたり、ふなきほひ、夕川わたり。此の川の、たゆる事なく、此の山の、いやたかからし、玉水の、瀧のみやこは、見れどあかぬかも、

狂云く、此の歌は萬葉集に在りて、吉野の宮の祝詞なれば、尤も君臣の和合を讃めり。さるは始めに天文地理より、ついでに人倫の世情あらば、爰に君臣の合體を云ふべきとなり。されは此の歌の全篇は、先は君臣の時を稱し、後は宮造りの祝詞ながら、心を芳野の花に寄せて、其の川の流れの絶えざらんには、遠く萬年の聖化を仰ぐべく、長く百世の風雅を傳ふべきとぞ。但し此の歌の第四句に音路の拍子の調はざれば、一字唱へて見るべきにやと、或抄に此の論あり。

連歌

源頼朝

守山のいちごさかしくなりにけり
むばらがいかにうれしかるらむ

狂云く、此の連歌は力草と云ふ雙紙に、昔頼朝の上洛の時に、近江の守山を過ぎ玉ふに、覆盆子の盛んなるを見て連歌をせんと案じ給へるを、平時政は取りあへず此の前句を申し上げたるとぞ。

誹諧歌

貫之娘

鶯よなどさは啼くぞちやほしき小鍋やほしきはゝやこひしき

狂云く、此の歌は貫之の娘九歳にて詠みたるを、俊頼朝臣は此の歌を吟じて涙を落し給ひけりとぞ。或ひは幼女の

本情より出でて、功者の斧を加へざる所ならん。然るを歌類の第六に置けるは、古代の歌人も數多なる中には、貫之の序あるより、彼が娘の歌を出して、先づは其の父の靈魂を慰め、次に依時の罪なからんとなり。然らば此等の次第を見て、選者三字の私なく、部立の先後は爰に擬へ知るべし。されど誹諧と俳諧との字論は、清輔が抄などにも誹には俳の字を用ゐるべし。古今拾遺などは尤も不審なりと云ひ、芭蕉門の二十五箇條には師資傳印の口訣あれど、今は古今集の故實に任せて誹諧の二字を用ゐたる、先づは文鑑の公道なるべく、次に選者の殊勝と云ふべし。但し誹諧歌の風體は八雲御抄にも論ありて、委しくは誹諧の六一篇に此の沙汰あり。

求韻ノ歌　　高市萬呂卿

しら雲のたなびく山は見れどあかぬかも。たづならばあさとびこえてゆふべこましを。

狂云く、此の歌は清輔が奥儀抄に出して、求韻の下に三四首あり。されど雜韻の體など差別さへ分明ならず。但し通韻の樣も見ゆるなり。或は長歌の韻法には、下照姫の歌あれど、これも換韻に似て同字を用ゐるに其の故を註せず。總て此等の難證にかぎらず、其の書其の人を論ぜんより、自己の工夫を附すべきなり。但し本朝に韻字の沙汰は詩類の下に看合はすべし。

題しらず　　芭蕉庵

網雜魚（あみざこ）を桝にはかりて買ふ人は賣る人よりも哀れなりけり

狂云く、此の歌は祖父師の誹諧にして此の類も數多なる中に爰に此の歌を選べる事は、先に或人の選集に此の歌を出すとて、買ふ人よりも哀れなりけりと書き損じたれば、故翁の魂も爰に惑ひぬらんと、今は賣る人よりも

と改め出せるなり。誠に物を買ふ人の賣る人よりも劣りたらんは、網雜魚に於ての專用ならん。如何にぞ、彼の集の選者の鹿忽なる。さりや故翁の誹諧の歌は、此の外もあまたありながら此の風體には恐るゝ所あれば、今は前寫の誤りを改むるのみ。爰に此の一首を出せるならん。

七種ノ歌　五七言

東華坊

おもしろや。薺七種なに〳〵ぞ。天の岩戸のあけぼのに。神をいさむる御神樂の。すゞなすゞしろこれかとよ。寶に日の本に跡たれて。光やはらぐ春の野の。草木もなべて我が國の。佛の座とはいふならめ。御形のにしきしき島や。歌にもれじと此の草も。君が御粥の數なるか。武士の〳〵。やたけ心もたつかゆゑ。劍もやがてはこべらと。名によばれたる草なれば。蕗も茗荷も數ならじ。さてみちのくの果てしらぬ。あだちの芹も君が爲に。つむてふ春の雪ふりて。花や咲くらん鳥や渡らん。鳥も渡らぬ先なれば。八穗に八石穗にほと〳〵と。うつや御粥のましらけも。一きねに四きねいつの世に。つきもつきせぬよはひぞや。千早振日本の鳥と唐土の鳥と。渡りくらべて波風も。をさまる御代のためしなりしを。

狂云く、此の歌は全編七章にして、其の間に長短の格あり。此の格は盧仝が茶の歌など、畳山が菖蒲の歌に效へり。總ては五十八句にして、章毎に二句換韻なるを、例に首尾の韻を用ゐる。さるは先師の假名韻府に、奇偶の數を用ひさる故なりと。口傳 然れば此の歌にも兩三所の詞あり。面白さは神樂の發端なるごとく、武士は弓矢の

縁語にして、千早振は神國の枕詞なれば例に樂府の云ひ捨てなりし。

されば此の歌に七種の名をあぐるに、始めは薺七種と云ひて蓍藭蕙の六種のみ云へる。鶏毛菜は七種の總名に書きて先づは薺の御弱とは云へり。或は面白の詞業より節と云ふ字を書かせて、背戸の畑は何の實なかれ御代の時節を云へるなり。或は日の本に垂るゝ跡とは、接朝に兩部の神道を云ひて仰の一字を寄せたるか。草木もなくて我が國と悉皆成佛の品を用ゐ、何れか鬼のと讀める歌を含む。これを雙關の法ながら和漢に自格自在ならん。或は御形の錦とは、其の花の紅なるを稱して錦を敷島と云ひかけたる、實にも此の名の歌にて漏れん。ま[illegible]ては御弱の數ならはゝ我が名の不幸を歎きたるなり。或は蘩縷の名に便りて弓を袋に納むを寄と云へる太平の篇ながら、弓に弦と云ふ響を取れり。然るに蕗と茗荷とは琴の手の唱歌なれど、富貴繁加の名あるよりは太平の篇の勝れるを云へり。尤も起語の何なるより、兩所に數字を結語して、單に草の名を疊ねたる章端の故實を見るべきなり。但し武士の詞を疊ねたるは、本朝に歌曲の效ひありて、先づは萬物の拍子ながら、始めには王家の尊敬を云ひ、次には武門の護衞を云へる、爰に文章の虚實をも知るべし。或は芹に陸奥とは、遠國邊土の貢に寄せて果てもらぬ東夷までも笠を重ねし泰平を云へり。但し安達は芹の名所ながら、彼の黒塚に鬼ありとも君が爲にと云はん心なり。扶木集に寂念の歌あり。然るを若菜の歌に云ひかへ、仁和の帝の雪を云へる雪には花の字の移りより、花の一字には前章を結し、鳥の一字には後章を起す。これを結前生後の法にして、兩句の相手の同じき所にて七種の名を結語せり。或は八穂に八石とは農民の諺に八穂に八石穂に穂がさいてと、田植謠の穗の字より、ほと／＼とは七種の囃なり。然れば御弱の精米も供御のみ、祚には過ぎざらんと君の質素を云ひながら、天の羽衣の歌を借りて米に搗くの字の響ならん。或は千早ぶるの詞は神と云ふ字の枕なるを、神國の日本と云ひかなへ、

たる、此等を詩語の筆格と稱すべし。然れば日本と唐土の句を一揃子に並べたるは、只謫李白が歌にもありて、例に變錄の格と知るべし。結句は、和漢の二島より安に詩歌の情を合はせて、兼好が歌の風も静かに、藤忠が詩の波も治まりて、御代萬歳の歌行なるべし。

字訓歌　　秋之坊

寒ければ山より下を飛ぶ鶴に　物うちになふ人ぞこひしき。

狂云く、此の歌は炭字を讀んで歌書には謎語などいへれども、今は両字を用ゐるより本朝文粹の題に效ひて字訓の二字を用ゐる。されば炭の字を造るに山に從ふ。是は字書の常なれば、火の字を人の物荷ひたるとは、字訓の作の奇絶ならん。尤も寒ければ炭こひしと讀みて、金城の萬子へ乞へりとぞ。但し御坊は貧の城外に遁れて、法花一乘の道心なり。

念佛歌　　雲居和尚

松しまや六たとの海は極樂の　智水もおなじのりのみちのく。

今もまた上輪八素の友ならで　盧山のむかしおもはれぞする。

狂云く、此の歌は雲居念佛とて尼入道の明暮に唱へて、一首の間に六字を稱す。すべて一百餘首ありとぞ。然るに此の和尚は、奥の松島に住し、瑞巖大黒と名を並べて、彼は禪門の活計を示され、此は經家の念佛を勸めらる。其に平比の名僧なり。此の故に始めの歌は聖主來迎の雲の色を松島の海の夕日に擬へて、次に盧山の昔とは、蓮社に僧俗の交りを讀みて、後成の歌の寂しさをも思へる、或に殊勝を御ざなく、誠に風雅を感ずべし。

長恨歌ノ返歌

民部權大夫惟冬

むかし唐土に帝おはして、　色を思ふに心たらずとも、
ひとりやなぎの眉にこもれる、　其の人をのみ見るにあかずと、
月も驪山の湯あみする比は、　鴛鴦の霜をいとふゆふぐれ△
花を端樓に髪あらふ日は、　芙蓉の水を出づるしのゝめ△
月日もあだにたつか弓ならで、　春のゆふべのみじかきを恨む。
身をうすものゝ夏にたへねば、　冬はにしきの夜を重ねつ。
さは秋風のふきも吹かずや、　月には雲のかゝるとをしれ△
そよや曠(あら)野の露もおきあへず、　消え歸りつゝ物をこそ思へ△
いつら面影も立ちさらぬ世の、　魂のありかを尋ね侘びにし。
八重の汐路のとへど答へぬ、　こゝしら波の玉の殿もり。
そは日のもとの光増すてふ、　あつ田の神の化粧なりしを△
實(げ)に其の樣も世の類ならで、　譬ふるもよに梨の花ぞも。
さて尋ね來し記念ながらも、　此の簪(かむさし)のさしもいはじな。

名も文月の便りまたばよ、　其の七夕の夜を思へとや。

そもなげきそよ君戀ふるとも、　人ををしふる神の恵みに。

さらばやよもの國も治まりて、　蓬が島の波風もなし。

狂云く、此の歌は四句に韻にして、例に換韻の格なり。全篇は八章にして、毎に四句あり。さらは樂天が長恨歌に對して、倭國よりの返歌なり。然れば世に傳ふ唐の楊貴妃は熱田の神の化相にして、今も其所をば蓬が島とは云へり。其の故は唐の代の太平なるに附きて、日本をも取るべき心あれば、竊かに神の計を以て唐帝に世の變を知らしめ給へりとぞ。或は羅許子の神社考にも、宋景濂が日東曲を引き、楊什伍が詞を舉げて、此の趣を出せるなり。されば此の歌の始めには全く長恨歌の趣を受けて、前には心たらずもと云ひ、後には見るにあかずと云へる、もとの二韻は其の答なり。或は柳の眉と云へるは、樂天が詞を借りながら、爰には楊家の楊の字を云ひて其の母の閨下に妊める故ならん。まして籠るの一字を添へて蠶子の眉に取り成せる、これを棲闇の文法と見るべし。其の次は一篇の對を設けて其の時の遊樂を云ひ、其の人の梳沐を云へる、鴛鴦は二人の湯に入りながら、片時も離れざる形容にして、霜を厭ふは古歌の詞なり。但し驪山は十月に行幸ありて明年の春迄り給へば、驚霜の霜は其の比なるべし。或は端樓は端正樓にして、華清宮の中に在りて、貴妃が化粧の部屋なりと。其の人かくて粧ひ出でたらんには、芙蓉の水を離るゝに似ざらんや。然も夕暮曙明の詩は、韻を用ゐるに奇法にして、仄かに次の句の月日を起せり。但し月花の二字を云へる、其の地に其の人の風情ならん。其の次は樂天が春宵より徒と云ふ字に、唐詩解の譏りを借りて、四時の花香を云ひながら、羅綺に任へずとは長恨の傳の詞なり。但し弓にて

張ると云ひ、錦には夜と云へる、共に和漢の鎖簡と云ふべし。其の次は人間の始終にして、何れか秋にと讀みしより、花には嵐の無常を云ひ、月には雲の變化を云へる、果して馬嵬の露と消えて長き恨みの絶ゆる期もなしとぞ。さるは春宵の鼓びより、次に夏冬の一對を置きて、再び秋の一字を以て四序に轉變の終りとなせる、尤も面雑の法ながら、四季の次第の自由を見るべし。其の次も長恨の趣ながら、八重には十重と云ひかけて、何かは如らず海上に玉樓金闕の有樣を云へり。然るを最守と守の字を云へるは、問ふに答へ良人の樣にして、總ては彼の歌の縹渺を云へり。其の次は世に傳ふ其の地は日本の熱田にて、光座とは彼の歌の玲瓏を云ひ、兼ねては熱の字の縁語ならん。但し化粧は化相ながら、爰にはけはひと讀むべきなり。然れば其の人の容色を思ふに實にも人間の類ならねば、其の餘に喩ふる物なしと云ひて、例に樂天が梨花一枝を合せり。其の次も長恨の趣ながら、此の弃のさしもと云ひかけて、文月の便りと詩文にむすびたるは、和漢に通用の法ながら、此の一章の手爾波を味ふべし。其の次は尤も結章なれば、斯る唐帝の好色を譏むるに似て、實は神國の奇特を答へたる一篇の趣意も此所にして、文章の虚實も此所なるべし。此の故に四方の國と云ふより、蓬が島と舌路を響かせたる和漢の文法に一字の私なく、此等を歌の類の文鑑にして、四海太平の返歌と云ふべし。

但し此の作者は、好事の社司にて、此の歌の趣向を思ひ寄せしに、先師は其の人の位署に代りて、斯の文を作れる由を獅子庵の遺稿には書き置かれしが、思ふに其の人は伊勢の神官なるにや。

詩類

本朝ニ詠ズル詩序

渡部狂

先師かつて武江の芭蕉庵にありて、故翁と白氏文集を見て、和漢の詩歌を論ぜられしに、さは唐土の詩を見るに、大むね五言七言なるは、詩經に三四五の語路あるより、つかねて五言七言ならねや。されど漢音に通ぜさる程は、その詩の拍子はしりがたけれど、爰に大和歌の五七語なるより見れば、そも又その義なからんや。我に本朝の口拍子は、和歌の五七語にかぎらねど、世の風俗諺も躍口説も、すべては五七の句拍子なり。まして本朝の伊呂波とても、七々五の手本ならんに、まして天竺にもその詩あるよし、義淨の寄歸傳の説によらば、五七の語路をもて阿加薩多の韵を用ゐる。しからば、これらの式目より、我が朝にも假名の詩をつくりて、五言七言の詩格なからんやと、故翁はしきりにすゝめ給へるよし、しかれども漢土の五七言は、眞名字の數の拍子なるに、我が朝の假名の一字一言ならば、物の情をつくしがたからんか。爰には十四字を合はせて七言といふべきには、五言の十字ならんも、亦たゞ此の義ならん。さるは和漢の通用にも、一字あるをば一字といひ、二字三字ありても一言なればならし。されども七言の中に八字とも、五言の中に六字とも、一句の伸びたる拍子あらんは、本朝の歌にも字あまりといひて、詞づかひの優美なれば、詩經の關雎の一章四句なれど、八字を一句の意にこもしるべし。ものには八字の拍子なき故に、四字の中間に息をつぎて、爰に句讀の法をも知るべし。されど七言の七々とわかれ、五言の五々とわかるゝにもかぎらず、或は五九とも六八とも、或は七三とも四六とも、其の句々への拍子によるべし。或は假名の韵法に、漢字は上に返りても、下の字を用ゐ、倭字はかへるも返らざるも、すべてその語のとまりを用ゐて、これを和漢の差別とはすべし。まして千蘭遠波の字のみならんや。花のなの字も、鳥のりの字も、倭國は假名の一字ならんをや。或は漢字の平仄は、倭には開合の餘音をあらためて、しかも平仄の論

におよばず。しかれば此等の差別を思ふに、唐の文字には韻ありて、倭には其の訓ばかりなれば、倭字は漢字の韻をあつめて、五字七字をも漢の一字に讀みなせば、平仄の論はなき筈なり。此の故に、我が朝の歌は、唐土の詩を歌によむ意にて、歌をばよむといふなるべし。本より漢家の樂府なども、古詩の體には其の掟なし。或は五言七言の律詩に、字對あり句對あるに、譬へば牡丹に櫻の如き、假名にかきては二字の對なるべく、或は雪に鶴のごとき、一字の長短は手爾波にて合はすべし。されど藤に山吹のごとき、二字とも語路の伸びたらんは、句讀の間に煩ひあらん。或は花のちり鳥もねずなど、返るとも返らずとも、假名にかきては對すべし。或は意對といふ時は、字面の長短に此の論はなからん。されば江淹が詩の序にも、詩は樣々の體ありて、楚謠漢風も一骨ならずとあれば、詩は志なりといへる字義ならんを、さりとて本朝の詩の平仄にかゝはらば、たとへ韻字あるも韻字なきも、皆々古人の先格を見合はせて、それが中に一條の法度あらば、詩はよし千變萬態なるべし。しかれば、故翁の遺誡をもわすれず、これらの法格に古今をはゞかり、詩人歌人の家にたづねて、それより二十ヶ年も過ぎぬらん。今年は誹諧の名をかくして、故郷の獅子庵に跡をくらませば、詩はおのづから古風の體になりて、世の花鳥に老いを感じて、風雅の名利を恐るゝには、詩はそれ一言をもておほふべく、詩ははた學びたりやのいひならん。しかれば和漢に月花の名を稱して、漢には山谷が四體をまなび、倭には源順が三詠にならふ。これ更に製作の次第にして、遠くは和漢の通情をあらはし、近くは人間の始終をいへるならん。あふぐ所は此の詩を階梯にふみて、永く本朝に此の風體をおこさば、千歳さらに詩の君子なからんやと、門人白狂に此の筆をかして、師翁の情を傳ふるなるし。

狂云く、世に假名の詩と云ふは、これを本朝の濫觴にして、これより法格を定むる故に、先づは詩の類の題下

に此の序を置きて、前に歌の類の序あるに效へり。さるは獅子庵の遺稿なればなり。

或は此の序に白氏文集とは、昔白樂天が我が朝に來りて、日本には詩のなきことを嘲りたれば、住吉の神の歌を以て和漢の通情を示し給へるか。我が朝は爭で歌のみならん。詩も此の如くと云はぬばかりに、何となく彼が文集を擧げて、詩歌の論にとは云ひ出せり。

或は天竺の詩格とは、南海寄歸傳の第四に在りて、大學士阿利の自嘆の詩に、由レ染ニ使チ歸レ俗ニ。離レ貪ノ習ヲ服ニ緇ニ。如何ゾ兩種ノ事。牽レ我ヲ若ニシ嬰兒ノ。其の外は龍樹馬鳴など十餘卷の詩賦ありとぞ。

或は詩經の三四五とは、先づは其雷ノ章有梅ノ章など、其の外三四五の句拍子ありて、三字をも一句と云ひ、四字をも一句と云へれど、二句合はせて一句の章なる物多し。此の故に束ねて五七の語路とは云へり。

或は漢音に通ぜずとは、唐人は文字を聲に唱へ、我が朝には文字を訓にすれば、漢文に五七の長短あるも、何の拍子とも知れぬ筈なり。如何に心得て、日本の詩人は八千里のあなたの詩を學ぶぞとなり。或は風俗謡も躍口說も同じ七々五の拍子ながら、これから見れば近江が見ゆるなど、此等は四三の拍子とて、和歌には三四の拍子より、二五とも五二とも用ゐるなり。風雅と俗談との差別など、此の拍子にも知るべきか。縱令平生の夜話雜談にも五七語の拍子を知れらん人を噺上手とも口狀者とも云へば、まして筆をとり紙に向ひて、我は文者なりと思はんをや。

或は二字三字あるなも、一言とは委し、字と言との註解にして、十四字を合はせて七言と云ひ、十字を合はせて五言と云ふべき其の所以の再[illegible]なり。縱令九言に八言も、物の拍子を知らん人は、總て呂律に合はすべきを、五七の語路を定めたるは拍子を知らぬ人の掟ならんと。此の故に和歌の字あまりを引きて、詩經を證文に出せるな

り。されば詩經の卷頭に關々タル雎鳩在リ河ノ之洲ニと云ふ一句の意を一句と云へれば、本朝の詩にも一句は一句、して、二字を一言と云ふときには、十四字を合はせて七言ならんと、根本の詩經を鑑にして一字一點も私なく、これを古人の先格によりて、一條の法度とは云ふなるべし。誠に五七の拍子の詩歌の先達も言はずといふには、之に本朝文鑑の面皮とすべきは此の論なり。或は韻字平仄など、すべて古人の法格を破らず、惟ふ所の異ならんには、ましこ本朝の手柄と云ふべし。次に律詩の法とても、總て作者の才覺を以て永く韻含の詩の風體を思はば、今日の人は明日の師となり、明日の詩は百世の文鑑たらん。

されば、本朝の詩の元祖たらんには、先づは詩門の復古擬古を學びて、古詩の風體に倣へるより、次には和漢の通情をあらはして、漢土の詩人には、東坡山谷が風を慕ひ、本朝の文者には、菅家源順の名を思はざらんや。然も江淹が序詞をも引きながら、古人の法格を見合はせことは、和漢通用の論にして、一時流行の俑とも云ふべし。但し此の序は、先師の遺稿なるを、暫く白狂が名に寄せて、爰に其の言を傳ふれば、結語は當の一字を以て、序者の誠恐誠惶と見るべし。

擬古二詩

四季花鳥　五言

桃花仙

花

昔見よや春と秋と。　花さけば葉おつとよ。

葉はおちばはくべきに、　花になやむ我がこゝろ。

鳥

夏あつく冬さむし。　鳥に似たる我がおもひ。
世は何かうの花の、　ゆきてかへる古巣あり。

狂云く、花の一章は名利の感なり。されば人間の世に在りて、利欲は一世の凡俗なるを知り、名花は千歳の君子なるを見れば、利葉は兎も角も掃きすつべきに、名花には人を惱亂すと、飛花落葉の四季を含めたる語意更に分明なり。然れば其の葉を利に喩へ其の花を名に喩へて、兼ねては酒色の兩欲など花に喩ふるは的面ならん。或は三四の句に至りて花葉の二字を重ねたる、或は疊語の格にも似たれど、これは本註の法にして、古詩の體には此の格あり。或は君看の二字は、歌行の常語にして、世間一統の人を指す詞なり。或は花に惱むとは江上被花惱しなど、杜公が詩の詞より、靜心なく花の散るらんとも、絶えて櫻のなかりせばとも、詩歌の人の情を汲みて、花に狂へる歎息なり。然れば、標題に擬古二詩と云へる、前に歌類の三歎に效ひて、爰にも二詩とは題せるなり。尤も此の詩はをこそとの韵を用ゐる。叶韵は總て爰に效ふべし。但し桃花仙は先師の詩號なり。

狂云く、鳥の一章は、衣食住の感なり。されば、人間の世に在りては寒暑の往來に苦樂ありて、富貴貧賤も其れに隨ふ事なり。然るを我が身に感ずれば、衣は行く先のあるに隨ひ、食は行く先の饗に任せ、住は行く先の留むるに遊ぶ。されど此の三には苦樂まじはりて、野山の鳥にも似ざらんや。然れば假りの世の苦樂を認めて、憂しつらしとは如何に思はんや。我は往き還る古巣あればと、鳥を漂客の身に喩へて、自問自答の詞より應無所

作の心を示したるなり。ましてや卯の花に鳥を云へる、鶯の巣を己が家にして、例に時鳥の往き還る意ならん。本より先師の記にも云へる、天下は幾處の獅子庵ありとて、古巣は時與の田地なり。されば花鳥の詩の四季を云ひながら、夏には卯の花の夏のみ云へるに似て、仄かに往き還ると云ふ詞の鎖に、卯の花の雪と云ひかけたる、夏と冬とを使鬪して、これを隱見の法と云ふなり。此等は我が朝の風流にして唐國の詩人をも欺くべき所なり。誠に奇にして妙なるべく、妙にして神助ありと云はん。正に本朝の詩の卷頭たらんに、此等の教戒に花鳥の情を鎮めて、家三條の道なからんや。近く此の詩を學ぶべくして、遠く其の人を嘲るべからず。

獅子庵ノ三詠　七言　　桃花仙

松

松と遊べば松も寝ざめて。　我を昔の友とこそ思へ。
雪のふる日も月の照る夜も、　竹にあらねど君を忘れね。

茶

梅はたま／＼詩に忘れけむ。　茶は何とてか歌に詠まれぬ。
雨に寂しき誹諧を聞きて、　豆煎る宿に音をのみぞなく。

笠

笠は名にあふ法性寺なれど。　利休の家の数奇もあらじを。

我と風雅の旅に遊ばば、　花の吹雪の吉野見せうぞ。

狂云く、松の一章は朋友の趣向より、藤ノ興風が松を讀みて松を昔の友と云ひ、昔の子猷が竹を愛して竹を此君と云へる和漢の風流を取り合はせて、詩歌の通情をあらはせり。況んや松竹の名を類して、松に公の字の所以あるをや。或は松に寝覺とは、和歌の詞の云ひかけにて、松に根の字の鎖辭ならん。或は雪の日に月の夜とは、松に月雪の形容を附けて、字面は四時を含めたり。誠に死生の友を思はんには、曉の寝覺の寂しさならんに、遊の一字は、莊子が筋骨ありて逍遥の筆力にも敵すべく、風雅の幽情を盡せりと云ふべし。

狂云く、茶の一章は誹諧の趣向より和漢の詩歌を取り合はせて、楚辭は偶なれば梅をも忘れけん。何とて朝夕に翫ぶ歌に讀まれぬは茶の遺恨ならん。されど我が家の誹諧は、詩歌に肩を雙べ難く、点京の會には脊を泣くらんと、例に虚實の文法より、例に誹諧の筆格なり。さるは風雅の上の揖讓を以て、賞茶の佗体を見るべきなり。

狂云く、笠の一章は、數奇者の趣向より風雅人に敵對せり。いはゆる法性寺笠は洛外の名物にして、竹の皮を以て造れるが、多くは茶人の爐次笠に用ゐる。此の故に利休の名を借りて隱者の風流を爭ふ中にも、風雅は旅行のさびあるを云へり。花の芳野とは、庚午紀行に、芳野にて櫻見せうぞ檜の木笠と云へる、先翁の狂句ありて、蕉門の人の常談なれば、本朝の詩を思ひ立ちて、其の祖の遺語を傳へざらんや。爰に此の笠の骨節と見るべし。

總ては誹諧の寂寞を云へる虚實の法を知るべきなり。

和漢賞ㇾ花。　五言律

花はよし花ながら、　見る人おなじからず。

ぼたんには蝶ねむり、　さくらには鳥あそぶ。
たのしさを鼓にさき、　さびしさを鐘にちる。
唐にいざ芳野あらば、　詩をつくり歌よまむ。

和漢賞月、七言律

我が日の本の名月の夜は、　唐土人も皆こなたに向く、
詩には波間の玉を砕きて、　歌に木末の花や散るらむ
雪か山陰の友を思へば、　露も更科の姥ごなくなる
さはれ杜子美が閨に非ずも、　芋とし見ればものも思はず

狂云く、花の詩は和歌の體に效ひて、全く風情をなぞりと云ふべし。されば第一第二の句に、世に人の花を賞する唐土の人は牡丹を云ひ、我が朝の人は櫻を云ひて、其の趣は異なれども、其の意は同じきとなり。次に後對の鼓に咲くとは、唐の玄宗の遊樂にして、時ならねども花の咲きたるとし、羯鼓樓前の詩の意を借り用ゐ、鐘に散るは歌の詞なれば、爰にも和漢の情を對し、殊に哀樂の二相を云へる賈島が鳥宿の一對と云ふとも、花實を盡さざる所あらんか。或は唐に芳野とは、古今集の誹諧歌を借りて、第一には和漢の題名を結し、第二には詩歌の通情を顯はす。こゝに起結の關微を味ふべし。されば五言の詩は、李陵より起りて李攀龍が評にも云へる此等の次第は選者の心得ながら、本朝に詩格を定むべき作者の粹骨を知るべきなり。

狂云く、月の詩は誹諧の體に效ひて、全く虚誕をつくせりと云ふべし。さらば和漢に月花を賞して本朝に詩格を定むべきに、第一は我が朝の和歌の風體に效ひ、第二は我が家に誹諧の筆格を立つべし。彼に五言律と云ひ、此に七言律と云へる迄の次第は此の謂なり。されば第一第二の句は、金ノ源三が禁止の詞を借りて、安仲麿が歸興の吟に寄す。先づは我が朝の詞辭ぞと見るべし。次に前對は詩歌の詞を並べて、微瀾臨二玉塔一、とも委レ波二金不レ定とも、共に古詩の姿を寫し、月の桂の貫やはなる、光を花とちらす許りにと讀みたる古歌の情を合はせたりし。次に後對は、子陵が故事に寄せて、雪に山陰の友を憶ふとは、夜雪初晴、月色淸明、と云へる八字の意を借り用ゐる。而らば露も更科と詞へるも、露を晒すと云ひかけて、共に一天の皎潔を雪と露とに形容せり。本より會稽の山陰を愛にはやまかと訓みて、更け科に對したる和漢に不思議の名所ならんか。まして友の字も妣の字も和漢に月下の風情ながら、二千里外の詩をふくめ、思ひかねつの歌を合はす。此等を託物比興の體と知るべし。然れば結句には、一二の趣を結び、唐の詩人は旅寢の月を見て故郷の妻を思ひ焦れたるに、我朝の名月には芋と諸共に月を詠めて左樣の物思ひもあらずとは、芋と妹との響を云へる、此等を倭語の自在より無心所着の體ながら誹諧の文法も爰なるべく、本朝の詩格も爰なるべし。或はさはれとは任他にして、左樣にはあれの略語なれば、此等も和漢の通詞ならん。或は前には友を憶ひ後には物を思はずと云へる、同字の差別も爰に效ふべし。

逍遙遊　五言

蓮二房

よしあしの葉の中に。寢れば我さむればとり。
鳥さしはさもあれや、かく瘦せて風味なし。

狂云く、此の詩は原に翡翠の眠れる掛物の賛なるを、今は逍遙遊の三字を題して、風雅の是非を掃却す。尤も其の鳥の痩せて幽閑なる、此の詩の意にも見えつべし。然れば人間の好惡の中に、譽ぬれば我爲リ譽ト、毀むれば鳥爲ルト我トと云へる莊子が齊物の意ながら、句法に錯綜の自在を見るべし。或は鳥差(とりさし)とは、世間の人を指して佛家には人の臨刹に任せ、儒門には何遠如何(いかん)の意なれば、我は世情の味ひ盡きて、風雅の褒貶に心なしとなり。但し鳥差(とりさし)は前の鳥を重ねて、これを疊字の格と見るべし。

桃花老仙ノ花鳥ノ詩ニ有ツ感　三五七言　　渡部狂

むかし。此の詩あり。その人むなしく。

今は。花鳥の。名のみのこりぬ。

はなは。散るとても。またさくべきに。

我も。鳥に似て。花に啼くらむ。

狂云く、此の詩は先師の三回忌の靈前の追悼なり。とるは、李白が三五七言に效へり。李白ガ懷レフ友ヲ詩に、秋風清ク。秋月明ナリ。落葉聚ツテ還タ散ル。寒鴉棲ンデ復驚ク。相思ヒ相見ンコト知ンヌ何レノ日ゾ。此日此夜難キ爲情ノとあり。然れば其の詩は六句なれども、秋風の句は落葉を起し、秋月の句は寒鴉を起して、其の詩は六句にして、四句の意なれば、此の詩は十二句にして四句の意ならん。然らば二字を一言と云ひて、十字と十四字を一句なるも、算用は爰に同じからん。されど、其の詩は三々五々七々と並べたるに、假名に三々と並ぶ時は、意あまりて詞たら

ず。これは長短の句法にも似たれど、それは其の句の置き所を定めされは、別に長短の詩格はあるべし。此等の法格は千差萬別ならんに、何かは我が朝の假名を以て漢家の眞名に劣らんやとなり。さるは花鳥の二字に詩格を起し、今は花鳥の感に詩格を結して、漢に李太白はエケセテの韵を用ゐ、倭に渡白狂はウクスツの韵を踏む。一字一點の私ならんには、若しや亡師の遺命を傳へて、世に此の一格もあらんとなり。

秋　思　　　　僧　聞　如

尾上の鹿の秋をしれとよ、　耳さへ疎き老いの身なるを。
客の名殘も明日を待たねば、　木々の紅葉な春の花とも。

狂云く、此の詩は眼前の秋情より我が身の老いを感じたる徒然草の四季の段にも、此の世の絆もたらぬ身も、客の名殘のみ惜しきと云へる、光陰客過の歎息なり。然れば、我が宿の紅葉の色を春の花とも詠むべくは、四季の風雅を妄に樂しまんとなり。況んや明日を待たねばとは、天に風雨の變化を云ひ、人に死生の無常を云へり。或は紅葉を花と云へる杜牧が山行の詩を借りて、此の一章の裝ひとなせり。但し此の老は濃の三輪の山下に閑居す。風雅に支賓の俤ありと云ふべし。

十　月　梅　　　　二　竹　堂

此の花昔太宰府にとびぬ。　何とて神の留守に咲くらむ。
手習子供をゐる事なかれ、　一字の師にも恩は忘れず。

汪云く、此の詩は隱見の法にして、全篇に梅の字を云はず。尤も一二は天神の御詠ながら、咲くや此の花は梅の事にして、腰句は召伯の甘棠を思ひ、落句は菅丞が早梅に寄せて寺子に學問を勸めたる。總ては留守の二字を稱すべし。

假情促織　古詩三章　　宮　六　之

其の一

促織々々たゞに惜まず。　何とて菊の花をそこなふ。

そよ蟷の長刀もあらば、　脚なぎおりてもの思はせむ。

其の二

はたおり／＼我が牀になけ。　鳴く音は菊の夜こそねられね。

寢られぬ儘に燈點して見れば、　萩もすゝきも露に亂れて。

其の三

促織々々何にさもしき。　菊にあそびて花に心なし。

染めて小蝶の袖にはおかや、　夜寒の色の淺黄一重に。

汪云く、此の三章は古詩の體にして、何れも促織を起句とせる、詩經に多く此の格あり。されば促織と云ふ虫

みさして賞むべき事なきに、菊の莟を喙む時は、花も片輪に咲きて好からず。此の故に其の趣にも僕に賞むるには云へりけり。其の一は詩の情を設けて古哥の長刀に思ひ知らせんとは、例に風雅の虚實を辨ずべし。其の二は間交に氣色を演ぶるに、胸句には畳字の格を用ゐ、腰句には疊語の格を用ゐる。尤も和にして漢なるべし。其の三は詩の姿を飾りて、花に心と云へるより小蝶の二字を思ひ寄せたる、況んや從韻の手利ながら、蝶の羽の模様にも劣りたるはと、せめては彼に恥かかせたる、惜むの一字に情餘りて、風雅の情変は此の蔵なるべし。但し作者は宮田氏にして、濃の山麓に素生す。常は菊莊に閑遊して、自ら高臥郎と稱せり。

山中ニ尋レ酒ヲ　　得巴兮

門の杉葉に酒を尋ぬれば　　箒ふり捨てて麥刈りにとや
樽はつれなく店に寝轉びて、　　日引く音の庭にさびしさ

狂云く、此の詩の作者は故ありて美濃の山里を廻れるに、山道の艱難より民家の不自由を云へるなり。されば箒振と云ふ事に、擔賣の小商人を云へる其の國の俗語とぞ。總ては山家の形容にして、旅思の情を盡せりと云ふべし。但し作者は得能氏にして、處の清光に住す。東華坊の古門人なり。

碓坊ノ工夫并序　　石伯亀

われは市中の商人にもあらず、さりとて市中の隠者にもあらねど、三國の市にまじはりて播東胙裏を友とすれば、おのづから世間の理窟を聞かず、猶また閑遊の興もあらばやと、三舞庵の窓に閑

家を買ひとりて、庭にはから臼を横ふるばかり、其の外さらに一物もなし。さるを東華坊は松原の吟を殘し、凉菟は裸麥の狂歌ありて、おのれとその名を碓坊とはいふならし。あるとき此の坊に世界を觀じて、

さは碓臼(からうす)のふまれながらも。　　何うなつきて合點々々と、
我も風雅の寂(さび)を思へば、　　人には葛の松原とこそ。

狂云く、此の詩は工夫の二字を見るべし。さるは風雅の温和より、人我の境を觀ずるに、其の催の如くたらんには、誰かは世のさびを知らざらんとなり。葛の松原は撰集抄に在りて、人には居と數ならぬ身を云へり。尤も序文の松原より其の地の閑寂を云ひながら、暗に六祖の悟り所なるべし。但し伯巷は石川氏にして、先師に遺教の門人なり。國所は辭類に出でたり。

寄レスル雪ニ戀　　石　過　角

笠に越路の雪踏みわけて、　　問はぬ心を君はしらずも。
あだなりし名の風も吹かねば、　　變らぬ色を松にたゞへよ。
人は臂さへたちあかせしに、　　我も船には乘り後れじと。
實に見渡せば月の夜すがら、　　木にも茅にもつもる思ひを。

狂云く、此の詩は歌題に效ひて、逢テ不レル逢ハ戀と云ふべし。然れば前對は思ひやる心を云ひ、後對は恨ひの

同にして其河の昔を云ひ、子猷が船を云ひながら、今宵何とぞ相見んとなり。去れど月影に其の雪を見れば、四望皓然として行くべくもあらずと、實にの一字は子猷が詞を受けたるなり。尤も斷腸を掛けて立ち明すとは、後文の奇絶ならん。作者は越の直江津に住す。石塚氏の風人なり。

所思　　文石

昔は紅葉踏み分けてなきぬ。　今はしら絲の行くへを嘆く。
よしあし曳きの山路ならねど、　人の心の奥もしられず。

狂云く、此の詩は杜陵が題を借りて人間の是非を嘆息せしに、先は墨子が悲絲の一字より、前後は無心所著にして路の區々たるを云へるならん。但し作者は甲陽の武門とぞ。邊角が書に傳へて、姓氏を録せず。

見月戯作　　各東羽

誰か知らむや天津をとめの。　月の都にかくれ忍ぶと。
桂男のそらにかよひて、　今宵は芋の子のめでたさに。

狂云く、此の詩は東郊が月の詩を借りて天津少女は嫦娥が面影を云へり。或は月宮を月の都と云へる詩歌に多く用ひ來れり。然れば世に云ふ桂男のいつしか月宮の少女に通ひて、今宵は芋の子の名に逢へる八月十五夜の月出度さよと豊に鼓の一字を云へる、尤も詩の奇格と云ふべし。但し作者は濃の北野に住す。各務氏の風士なり。

野菊　　江北房

秋の錦のさま〴〵の世や。　野菊はひとり袖の露けさ。
我もかうとは萩も芒も、　秋の錦のさま〴〵の世や。

狂云く、此の詩は首尾の吟にして、和漢に此の格を用ゐ來れり。されば人間の榮華を思へば、秋の花野の色々たる中に、誰も我はと思ひ擧りたらんを、野菊は花の閑素なる誠に風雅のさまにして、作者の喩へは身の上なるべし。但し此の老は濃の加納に産して、稻葉山の麓に寄逍す。或は茶を好み風雅に遊べる熊田氏の老翁なり。

送越左明　三五七言　　渡　吾　仲

今年。柚の花の。杯にあうて。　未だ一さしの。舞もつくさね。
今は。松茸の。まつと云へど。　人ぞ。秋の野に。別れこそすれ。

狂云く、此の詩は字面の儘ながら、柚の花と松茸とに寄せて、夏來て秋歸る意を云へる、尤も別恨の風情を盡せり。但し左明は越の直江津の俳にして、蕉門の風雅に遊べりとぞ。

蝿　　岸　昨　嚢

蝿にはなど蝶には似ざる、　風雅にもにくまれて。
疱顔はたゞぶるとも、　兀頭にはとまらざれ。
香をたづぬ酒のあたり、　花にあそぶ食のうへ。
あき風のたよりあらば、　晝寢せぬ國にゆけ。

狂云く、此の詩は歐公が憎蠅より尤も和漢の情を寫すに、前對は虚にして後對は實なる、又に五言律の風格を知るべし。況んや秋風の便あらばと、和歌の風情を附けながら、些疑に誹諧の筆格ある、誠に假名の詩鑑と云ふべし。

鶯　　伊東恕

誰か鶯をうらやまざらむ。　竹に遊びつ梅に遊びつ。
さは笠ぬひの里に啼くからに、　名もうの花の雨は忘れず。

狂云く、此の詩は鶯の姿情を盡せりと云ふべし。然るに鶯は雨を苦しむ鳥なりとて、和訓も雨苦来乾と云へりとぞ。笠縫は古歌の名所ながら、さはも花笠も鶯の歌なり。但し作者は越の敦賀に住す。伊吹氏の俳士なり。

行路難　　渡右範

年に坂あり闇に越しがたし、　星の光も金におよばぬ。
我は枕にあなもち無けれど、　まのの長者の餅ぞ聞ゆる。
人に坂ある日々に越しやすし、　野くれ山くれ老いの名にたつ。
峠の松に腰かけて見れば、　入日の雲の笠にかたぶく。
君は知らずや死出の坂には、　箱根八里の風もなからむ。

たとひ管絃の輦に乗るも、　只一聲の念佛にはしかじ

狂云く、此の詩は十二句にして三節なり。さるは樂天が行路難より人間に三等の坂を云へる、其の一は師走の坂なれば、月星の光だも金には及ばず。人間の暗路は愛なるに、我は世間の渉法を遁れて、他に分限者の算用を聞くとなり。但し枕の穴は邯鄲の榮華を云ひて、眞野は長者の通稱なり。其の二は人間の四相より作者も此の年は初老の員とぞ。總ては野七里山七里に老いの坂の草臥を見るべし。其の三は人間の一大事にして、冥途の坂を越す時は高車駟馬の力にも及ばず、金印紫綬の位にも寄らず、一念一唱の信を以て速かに往生すべきとなり。さるは白居易が君の一字を借りて、管絃の樂は玄宗の傳より借りてはまして富貴の人を驚かし、紫雲に音樂の章を含める、誠に和漢の法ありて此等を長篇の鑑とすべし。但し作者は渡部氏にして、先師に母方の縁者なり。常は黄山に世を遁れて蓮二房と共に行脚せり。

叶		韻		
ア	イ	ウ	エ	オ
カ	キ	ク	ケ	コ
サ	シ	ス	セ	ソ
タ	チ	ツ	テ	ト
ナ	ニ	ヌ	ネ	ノ
ハ	ヒ	フ	ヘ	ホ
マ	ミ	ム	メ	モ
ヤ	ヰ	ユ	ヱ	ヨ
ラ	リ	ル	レ	ロ
ワ	イ	ウ	エ	オ

第二巻

賦類

硯賦

北季吟

物をもてあそびてその志を失ふは、むかしき人のいましめながら、それも文房のともがきなれば、また求めずしもあるべからず。あら玉の年のあしたより、筆試みる毫のはじめにも、その静かなる物は命ながしと、うち見るもいとのどかならぬや。さみだれのつれ／＼なるそらも、墨すりならすゆふつかたなど、何となく打ちながめつゝ、人しれぬ思ひをものべなまし。文月の頃の手向草にも、星の下葉を重ねて、ふでつむしの夜さむの色に、壁の中をもうつしてむ。さるはひじりの道をおほひ、人の世のつねののりをもしりぬ。雪をあつむる窓の前に、こほりをくだく深き夜など、此の身は文にまつはれて、動かすべくもあらぬに、やつこも起されてはつぶやきなむ。そのことわりもしられてせむかたなきに、誰かかくともにかたらふ、老いのすさめとはなりぬべき。かくておきゐる暁のそらに、獨りおしまづきによりてつら／＼思へば、ひとしき人しまれなる世に、たとへなべての人ならで、か

うやうのともなひぬべき、そのたゞひとまたなる中に、琴は心をすませども、ひく人愁へありといひ、酒は愁へを忘るといへど、心をみだるも亦つゝまし。月をみれば心つくしに、花はかつちりやすし。白氏が風姿をしらざれば、竹もいかでか我が友ならん。王氏が逍遥ならずんば、鳥をも友とたのしみがたし。さらば我が趣のおひよりて、朝な夕なにしたしむべくば、やよいざ石丈人まうるはしみせよ。

狂云く、此の賦は文章の閫奥をつくして、始めには子西が諦をとり、中比は楚辭の文學を云ひ、總ては石丈人の三字を云ひて、今篇に硯の一字を顯はさず。此等を隱見の格にして、倭文に一奇の奇絶と稱すべし。然るに篇の中をもと云へる、前後の通續を辨へず。但し源氏に玉鬘の趣を云へるにや、知らず。されば此の老は北村氏にして、其の世に歌學の名を稱して、始めは洛の新玉津島に住し、後には公儀を得て武城に官仕す。歌書の抄物も數多なりとぞ。

既望(いざよひ)の賦

芭蕉庵

望月の殘興なほやまず、今宵は二三子にいさめられて、船をかた田の浦にはす。其の日もたそかれの程ならん。なにがし成秀といふ人の家の後に漕ぎ入れて、醉翁狂客の月にうかれて來れるありと、船の中より聲々によばふ。あるじは思ひかけずおどろきよろこびて、簾をまきちりをはらふに、その後園に芋ありさゝげありて、鯉鮒の切目たゞさぬにしもあらず。やがて岸上に榻(しぢ)を並べ筵をのべて、おの／＼既望(いざよひ)の宴を催す。月はまつ程もなくさし出でて、湖上はなやかに照りわたれり。かねて聞き

ぬ、仲秋望の日は、月の浮見堂にさしむかふを、鏡山といふなるよし。今宵なほそのあたり遠からじと、かの堂上の欄干によれば、三上水莖は左右にわかれて、その間に十二峯の影をひたす。とかくいふほど月も三竿にして、黒雲のうちにかくれたれば、いづれか鏡山といふ事をわかず。されどあるじの興をそへて、をり／＼雲のかゝることそと、客をもてなせる心ざしいと切なり。やがてその月の雲をはなるゝほど、水面に玉塔の影をくだきて、あらたに千體佛の光をそふ。誠やいざよひのそらな世の中にかけて、かたぶく月のをしさのみかはとは、京極黄門の歎息の詞なるを、我はこよひしも此の堂にあそびて、二たび悪心僧都の衣をうるほす。無常觀相の便ならずやといふに、あるじは興に乘じて來れる客を、などさは興つきて歸さむやと、もとの岸上に杯をあぐれば、月は横川にかたぶきて、姑蘇城の鐘も聞ゆなるべし。

狂云く、此の賦は誠に圓宛にして、全く賦の體を盡せりと云はん。さるは鏡山の一節より、古歌には月の雲を寄せて、此に其の夜の亭主振を云ひ、古詩には玉塔の喩へを借りて千體佛の光を添ふ。尤も故事古語の用ゐ所は此等の摘採に知るべきなり。本より先翁の文章は、獅子庵の遺稿にも數多ながら、或は湖東の文選に入り、或は門下の誹文集に出でて、今や再選するに及はず。假令百篇を見盡すとも、此の一篇の趣意を見て、此の一篇の虚實を知らば、和歌の閑女も爰に明らかに、誹諧の頓挫も爰に明らかならん。さるは黄門の詞にすがりて、歡樂の中の哀情を忘れざるは、例に樂しんで淫せずとや。斯の翁に於て斯の文あらんには。

涼ノ賦　　渡部吾仲

洛陽の東に川ありて、上をかも川といひ、下をしら川といへる、昔がちとせの石川や、蟬の小川ともいふなるべし。されば年毎の六月七日より、十八日の夜もすがら、五條の橋のこなたより三條の橋を限りとして、その川水に牀をならべ、綺すだれの給には愛宕の雪を思ひ、花むしろの花には音羽の嵐をさそふ。まして宵月をむかへ有明を惜しめる、こゝに四時の風景をあつめて、そよ時鳥いづち行くらん。況んや都人の錦繡をかざり、蝶鳥の香も風におふらん。夜は一きはもののはえあるにこそ。さて東西の岸にのぞみて、その家々の提灯をいだし、おのがさまざまの名をしらせる、大和山城は名にこそおふれ、鶴屋龜屋のめでたさも、やほ萬屋の軒につゞきて、扇屋はよし此の折なるべし。風も柳屋の涼しきには、かりのやどりの西行も、宿かしは屋の色にめでけむ。誰かはまつ屋の松を染めかねて、眞葛がはらや祇園のあなたまで、萬燈のひかりに白日をあらそひて、沈香火底の管絃をも聞きつべし。しからばもろこしの歌吹海には、いかなる事の面白かりけむ。愛の錦城のあそびには、雨に神鳴をもしらざりし。さて年々の河原おもてには、餅あり、酒あり、になひ茶屋ありて、櫻皮燒の煙はぶんぶんと、三千坊の比叡にたなびき、石花菜(ところてん)の瀧はさつさつと、八千杯の龍門に漲る。名も安兵衛が地黄煎をよばはれば、味も芳野屋の長命草をうる。辻談義あり、放下師あり。歌祭文には女中を

なかしめ、太平記には浪人をたゝずましむ。あるは水護投に猿猴の手をのばし、あるは濾を的に干餘(かゞ)

の目をふさぐ。辻に總嫁の戀をさへ、橋に乞食の無常をだに、覗(のぞき)からくりの地獄極樂も、都は一錢に善悪を見すれば。一刻千金のあそびの中に、巾着切りはいかに見るらん。むかしは祭のにぎはしきにも、徒(あだ)に法師の眠りたらん、名利の間に心を置かざるや、生死のさかひに身をわすれたるや。されど孔子の三千の弟子にも、かかる夜遊びにあかしけむ、晝寢のさたも聞えたれば、都は京部のなどり歌にまかせて、とかくたはむれあそべるなるべし。

狂云く、此の賦は滑稽無褒にして、始めは王城の古代を記し、中には帝京の華美を顯はして、終りに遊人の哀樂を云へる、誠に長安の名利を盡して、然も長安の名利に遊べり。或は四時の風景に和歌の文法を交へたる、或は家名の提灯に浮世草紙の筆格を用ゐたる、或は河原の賣り物に長短の句の體、體を盡せる、總ては古語の筆格より古昔の風を書き成せりと云ふべし。況んや俳諧の高名を揚げて、それが詰語の輕忽なる、爰に文章の虚實を傳へて、諧謔に此の作者ありと稱すべし。但し此の賦は支部氏にして、別莊を御後園と云ふ。馬才人は標貌なりとぞ。

將棊賦

東華坊

象戯は蛮國のあらそひを表はして、我が朝には將棊といふ。本より張陣の法ありて、盤上に智慧をたゝかはしむ。國に剛士のにあらば、家に忠臣の義なからんや。勝負は時の運によらず、上手と下手

上の意義なるべし。されば、馬組の法といふは、左にこひ右にこひ、頓木片攜など、金銀桂香を八手にわけて、飛車と角行とは軍師の位なるべし。むかしは漢に張良あり、蜀に孔明あるが如き、諸軍はすべてその下知にしたがはずといふものなし。されば銀將以下の諸卒ありて、敵の城中に乘り入る時は、直に一官を得て金將の位となる。これを將棋の勸賞といふなり。此のゆゑに步兵は、槍の羽をならべて先にすゝめば、諸將はその陰に敵陣を窺ふ。飛車いよ〳〵香車をつかひ、角行はよく桂馬をつかふ。此の二騎は彼が調練になれて、その旗下の勇士といふべし。さて飛車に居飛車あり、四間飛車あり。中飛車は古法の軍立なれば、中央に銀角のにらみありて、すゝむ方に一兵の損あり。兵書には愛に逸勞の法ありて、さる事なくば端の步をつけとはいへり。或は中段に飛車の出づる時、かしこに步兵のたゞよひたるを見て、先づは軍の血祭にと、横さまにこれを蹴立つるに、やゝもすれば銀桂に道をさへぎられて、歸らんとするに度を失ふ。これをしきぶの大輔と異名して、敵は槍の羽を扣いて笑へば、味方は大將を討たせじと、馬の足並のしどろなるより、不慮の敗軍に及ぶ事あり。さるをや、千鈞の弓は鼷鼠のために放たずといへる兵書の誡めも變なるべし。さはあれ敵城に乘り入りて、王のかたはらをにらむ時には、かしらより桂馬をはね、しりへより銀をかけ、搦手より金をうち捨て、桂香の陣に攻めよすれば、鐵城岩壁もふせぐにいとまなく、これを龍王の平押といひて、飛車の家の軍

術なり。されど家の子の香車に油斷して、彼がためにさし違されて、あへなき命を失ふ事も、さすがの名將の色にまどひて、小冠者に寢首とられたるためしならん。唯おそるべきは成歩親歩にして、愛に小敵を見てはあなどらざるのいひなり。さて角行は物の陰にひかへて、千里の外の勝を窺ふ。いつれの時よりか石田といへる馬組に、香車道に身をかくし、おほくは金銀と引く組み、飛車のために命をなしまず、死後の勇氣をふるふより、かの仲達も遙かにおそれつべし。或は飛龍王に我が城をやぶられ、かの駒手より落ち行く時に、敵はその道をさへぎらんと、王城の備への歩をつきて、銀をあぐり桂をはぬれば、おのづから鶴翼の透間を得て、思ひもよらぬ王手飛車手をかけて、ふしぎの勝ちを得る事は、全く角の家の秘法にして、千死を出でて一生に逢ふといふべし。さるは軍のならひにて、勝ちに乘りたるあやまちなるをや。その比京童の口占にも、王手飛車手にかゝる角行と謠ひたれば、自他の手爾波のいかゞならんにと、連歌誹諧の異論に及びたるはかゝる陣中の風流にして、漢楚の戰ひにもさるためしは侍りき。ある時陣中にをこの者ありて、いかに角行といへる名の山伏に似たれは、さばかりの軍師にしからぬとさゝやくに、やがて官名の時は龍馬となのりて、四方八面に威風をふるへども、人のお手はと問ふ時に、角助々々といはるゝもはいなし。さて金將は王城をはなれず、常にそのかたはらに侍りて、諸卒の賞罰をさたするものなり。たまたま、飛角の防ぎがたき事あれば、

銀將のために後陣をさゝふれども、香より官たかく禄おもければ、みづから組み討ちの勝負をこのまず。居ながら銀桂の下知をなして、それ〳〵といふうちに、おほくは桂馬前の木戸をやぶられ、はぐるに、すら飛ぶ事あたはず。或は桂馬におびかれて、中段にもよび出でたるに、乗替の馬にもはぐれたる時は、かち立ちの歩兵にたぶられて、生きながら敵の手にわたる。これたゞよのつねの業體にほこりて、その身のおもき故なればなり。しかるに銀將は歩兵をよくつかひて、常に先陣の名をかうぶる。あつぱれ侍大將といふべし。彼はふしぎの尻にちからを持ちて、敵を後ざまに押出すに、香車道の木戸を破らずといふ時なし。むかし朝夷奈が首引きも、箕尾野が錣引きも、此の尻のさたには及ばざらん。さてこそ金飛車の小股をくゞりて、きつとしりがどをさゝへたるに、いづれか組んで名乗らすといふ事なし。さるは韓信がまたぐらをくゞりて、大將の名をあげたるにあらざらんや。これを俗には足駄の法といひて、銀將の家の軍器なれば、彼が襲撃のちゑよりも、手間のとらざる働きなるべし。されど敵土に出でむかひ、爰を防ぎかしこを遮るに、敵はその腹をくゞり、しりへにぬけたる時は、四枚一所にありながら、金將一枚にも及ばざるは、我々が官位のひくければと、今さら身のほどをかこつに似たれど、しかし金將の悠々然として、此の時の無益をいかれるなるべし。爰に桂馬こそをかしき者なれ。進む時は物の陰より飛び出でて、危きにのぞみて退くことあたはず。さるは鼯の

勇氣に似て、鼻のきかざるは殊になをかし。いにしへ張儀楚秦がやからは、掉舌をもて敵國を詰り、物のひまを窺ひて不意を討たんとす。これらは仁勇の沙汰をはなれて、だますに手なしといふ法なり。ある時王城の夜軍に、高塀を越えんとさし覗きたるを、銀將はひそかに歩兵衞にさゝやきて、彼が鼻をつらぬかせたれば、見ぐるしき痛手をおひながら、後悔する事たび／＼なり。これをば桂馬の高あがりといひて、世智に賢き人をいふなり。されど桂馬のつり詰めといひ、又は桂馬のはなし詰めといふは、彼が家の奥の手にして、敵の油斷を窺へば、先は手見禁の軍を好めることなり。香車は角髮の小姓立なるが、さる事侍りて外ざまにはありながら、此の度の軍に一手補して、家の面目をすゝがんと思へる、そのいきはひ一筋にあらはれて、素槍は彼が家の一流なるべし。しかるを一陣に進む時、歩兵の算用をしちがへて、ひしと槍先をとめられたれば、こなたよりひかへてすべかりし物をと、此の後悔は若氣のいたりともいふべし。かくて兩陣兩王に對して、始めは金歩の一手より、進むにも先あれば、しりぞくにも先ありて、中比は二手透三手透をあらそひ、終りは一手透に勝負を決す。皆ただ先進先退の兵法にして、上手といつは心おだやかに、下手といつは目見えず。詮する所は取合はせの前後をしりて、命を捨つると捨てざるとは、その時の損得を見るべし。しかれば唐にも日本にも、これらの道理を說きつくして、諸葛が門には八陣の圖をはりて、神機妙算の謀をめぐらし、宗桂の家

には將棊經をつくりて、奇戰擒將の法をあらはし、畢竟は油斷大敵の四字より、臨濟莊老と說きひろげて、四十八手の兵法ともなり、八十一目の將棊ともなれば、孔子も博奕を戒めて、象戲でもさせよとはしかり給へり。況んや盤上の遊びを見て、その身の貴賤をも計るべく、その心の利鈍をもしるべければ、ともかくにその道の師をえらびて、先づは戰盤の法をしるべき事なり。

讀二將棊一賦　村野航

我が家に一軸の卷物あり。舒ぶれば萬里の天にひるがへりて、龍王の鬚に雲おこり、縮むれば一尺の盤にをどりて、龍馬の蹄に風かをるし。誠に縱橫自在なる、誠に神變ふしぎなる、實は三寸の舌を動かして、和漢の情を盡せるなり。されば莊子が蠻觸は、蝸牛の角に國をあらそひて、かりに敵となり味方となるより、大將の剛臆には保元の軍をおもひ、軍師の仁勇には章武の詔をうつす。さるは戰國のならひながらも、かならず下として上をそしるに、飛車の歩をひきて中段に出づれば、あれやしきぶの大輔はと笑ひ、角行のひゞきの山伏かとさゝやきて、漢楚の風流は張良が謀なるべし。次に金將銀將は、關羽張飛が意見にもあらず、武綱公平が力味にもあらず。金に宗盛の臆病をおもへば、雜兵の手に榮耀の花もちり、銀に韓信が勇氣をたとふれば、諸卒の頭に武衞の名をいたゞく。これらは官祿にほこりぬる人の、今もその人のいましめならずや。さて桂香は外樣なからに、桂馬は張楚が藉

ありて、堺を越ゆるは此の駒にかぎりたるを、軍に手見禁は此の賦の名言ならん。或は逸勞の物々しき、以テ逸ヲ待ツ勝ツとは、兵書には人の退屈をいへるに、將棊の戲言にとりなしたる、或は首引の若輩なるを、蟻砂の二字に文章をしつめたる、或は我をしりて身の程をかこち、人をあごむきて鼻の先をつらぬかれたる、すべては今日の世情を寫して、儒門の四書を手ににぎり、佛家の八教を指にひるがへす。誰かは將棊に此の喩へありて、和漢の情をはこべりとしらん。さては盤上の遊びを見て、人の貴賤をもしるべきには、堯帝は我が子にこれを教へ、孔子は世の人にこれをせよとぞ。さしも金殿に刻膝の人は、勝つに山寺を諷はざれば、まして藪寺に腹這ひの族は、負くるに念佛を申さざらんや。はさみ將棊には治郎をながさぬ、將棊だふしには寺子をそゝなかす。世はいさ歩三兵のはじめより、名人號の曉まで、駒に四十枚の情をのぶれば、佛に五千卷の理をつくせる、遠く大般若の其の經をたづねんより、近く小將棊の此の賦をよむべし。

註云く、此の篇は前賦の註ながら、委しく故事古語を借するに、文には句對あり意對ありて順る賦ノ體を書き成せり。誠に應用自在と云ふべし。さるは荊公が傳の頃より、爰にも賦の一字を題せり。然れば此の篇の趣は、始めに卷舒の二字を以て和漢に萬般の情を喩へ、儒佛に一貫の理を慮るに、或は雲起り風捲しとは、孟父が臥龍の貴を摘し、杜陵が胡馬の詩を採れり。或は保元章武とは、和に信頼の敗軍を云ひ、漢に孔明が出師を云へる、但し先帝崩御の年號ならし。或は關羽の一對には、和漢の智勇の兩士を云ひながら、意見と方味とは互見の法にし

に、定も影界を兼ねたるなり。まして宗盛に俊信とは、金銀の情を看盡して、文章の風情は愛に知るべし。或は孔孔の一對にそれを教へとは、其を云ひてこれを寫よとは、將棊を云へるも隱見の法ながら、それこれの二字に云ひかたへて、此等は奇絶と稱すべし。然るに結句の大般若は、小將棊中將棊と云ふより、摩訶大の三字に書をしれる、此等當意即妙とも云はん。但し野航は加々美氏なるが、別姓は村瀬にして、濃の山縣に住す。蓮二房と從弟なり。

日和山賦　　岸　暉　嚢

湊に日和山といふ名は、四序に風雨の變を見て、眼界はるかならんとなり。しかれば此の津の日和山は、前に三國川を帶とし、後に左反田を襟として、蒼壁千仞のさかしきにはあらで、白雲萬里の遠きを見る。見れば絵山のかたちありて、誠に愛すべく誠にあそぶべし。麓は松の木の間より、市店の白壁につらなりて、南は金剛寺に開靜の聲をひゞかし、北は月窗寺に入相の鐘をきく。平野の藥師も瀧谷の觀音も、多少の樓臺をこゝにあつめて、杜牧が江南の詩も思ひやるべし。況んや東北に山たかく、西南に海はるかなる、白根の雪は一夜におどろき、新羅の月は千里にしづむ。これたゞ眼界のおよぶ所ならじ。むかし東花坊は此の山にあそびて、鵯の日和を雲に定め、そののち涼菟子は其の景をほめて、鵙の松風を秋に吟ず。誰かは詩をつくり歌をよまざらん。山は風雅の人をまつに似たり。ある時は入りふねの夕日にかゞやき、ある夜は出船の朝嵐にさそふ。岩に飢渇の名はありながら、濱

に米脇の俵をかさね、かたのゝ崎の出張がましきには、たのしの山の引きこみたるもをかし。安島の海膽も、梶浦の榮螺も、長橋の蟹は上戸の目をおどろかし、高屋の鮭は下戸の口にいらず。さて瀧頂寺の松原は、昔の軍の名に殘り、加左衛門島の辨天は、今の世の福をあたふ。稻荷のふもと、橋守のさくら、雄島は神のわたらせ給ひて、船に梶とりは秋田の日和をいのり、筏に歌よみは松島の風景を思ふ。まして市倉のさらし網に夕陽を見おくれば、三里濱の煙は須磨の浦にも似かよひて、風光さらに書きつくすべからず。されば此の津の遊女どもの、胡蝶の香をたきしめ、男鹿の笛によりて、をり〳〵は此の山にあそぶに、出ふねの人を見送りて、佐夜姫が涙をしのび、入りふねの客を待ちとりては、衣通姫の歌にたぐへきな。誰かしらん、此の山に朝雲暮雨の情あらんとは、ころは貴となく賤となく、老いたるにも若きにも、江のなにがしの歎息をわすれて、樽に毛氈の遊樂をつくせば、扉に茶瓶の風情をつれて、いつしか歌舞の地となせる、いはば此の山の風雲も、それらの人をいきどほるならん。されど船頭のちゑをもて、爰に風雨の變化をはからひ、春秋の日和をさだむべくは、天地は人の和にしかずといへる、先賢の詞もいつはらずやと、爰に日和山の賦つくりて、永く此の名をさだむるなるべし。

任云く、此の篇は全く賦の體にして文法殊に闊達なり。結句は王勃が滕閣の二字より金貝月宮の閑字なる、自

根に新羅の一對は天地を籠むと云ふべし。或は山海の名物を賦して、上戸に下繭は句格の自在にして、梶とりに歌よみは文法の風流ならん。或は遊女の一段に、胡蝶に男鹿は奇妙にして、佐夜姫に衣通姫は時を得たりと言ふべし。しかるに朝雲暮雨の四字は、宋玉が賦の神女を借りて、雲雨は山の寄せなるを、長恨歌の情の字を合はせたる、まことに博達自在と云ふべし。これを江以言が歎息に寄せて、殊に一首の骨骼となせる本朝文粹の序題に見合はすべし。總て此の賦の趣は、山は風雅の人を待つと云ふより、北山の移文も山靈に寄せて、此山、風雲一帶の撰と云へる鍾山の英靈も、巫山の神女も、共に文章の骨髓にして、一首の首尾を見るべし。但し作者は越の三國に住す。岸名氏の風士なり。

悠然賦　　露　乙　丁

雪のおもしろうふりて、やがて晴れたる日、此竹庵に集まりて、例のあそぶ事ありき。茶にせんといふ佳人あれば、酒にせんといふ狂夫あり。亭のあるじは人をあそばせて、唯みづから悠然たるのみ。誰かは此の心になつかざらんや。その亭は竹のためにかすかに、その竹は人のためにまことやかなり。誰かは此の雪をほめざらんや。此君はその竹をいひ、その人をいふならし。さて茶は人をよはす事あたはず、酒は人をさます事あたはず。此の故に盧仝と李白とは、遊ぶ所の行きちがひて、かかる悠然の沙汰も聞えねば、先づは酒ありて茶あらんには、誰かは此の亭に遊ばざらんといふに、亭のあるじは人をあそばせて、唯みづから悠然たるのみ。

評云く、此の賦は疊語の格にして、然も文ノ賦の瀏亮を盡せり。さるは三個の悠然より或は六字の清茶を用ゐ、或は八字の其此を用ゐて、總て其の詞を疊ぬるに、一字も其の用を妨げず。此等は漢文の盡さざる所にして、爰に和文の風格を知るべし。但し此君庵は賀の金城に在りて、駒萬子の竹莊なり。尤も水竹の幽居にぞ。しかるに此の名を穠乙子とは、例に我が師の謎號ながら、其に莊子を讀める時の問題とぞ。

好色ノ賦　　兼好法師

萬にいみじくとも色好まざらむをのこは、いとさうぐしく、玉の杯のそこなきこゝちぞすべき。露霜にしほたれて所さだめずまどひありき、親のいさめ世のそしりをつゝむに心のいとまなく、あふさきるさに思ひみだれ、さるはひとり寝がちにまどろむ夜なきこそをかしけれ。さりとてひたすらたはれたるかたにはあらで、女にたやすからず思はれむこそ、あらまほしかるべきわざなれ。

評云く、此の篇は世に知れる徒然艸の三段目なり。然るを宋玉が賦に效ひて、今の三字を題するに、其の趣は異なれども其の意は同じきなり。尤も此の段は其の書の關門にて、古今の抄者も爰に七顛八倒す。さるは學文者の習ひにて、色は好むまじき經書を覺えて色を好むべき道理を知らず。まして好の字を解せずして徒然の言にこ此の論あり。或は好の字を擇の字と見れば、假令三千の宮女を擇ぶとも、姿も情も倶に勝れ、一生添ふとも飽きずと云ふ、天下無雙の美人はなき故に、兼好は獨寢の二字をほめて、畢竟は無妻の道理を云へり。此の故に登大夫は齞脣の妻を愛して五人の子を産み、宋玉は[illegible]の婦を擇みて獨寢の男なるには、兼好の云へる好色は宋玉が云へる好色にて、爰を趣は異なれども意は同じと註せるなり。疑ひもなく兼好は文選に此の賦を寫せるならん。

誠に此の段の畢竟を知らば、二百餘段の第三に置ける草紙の趣意も明らかに、兼好の一生も明らかに、儒佛二萬教も明らかなるべし。

行類

水波行 并序

岸昨嚢

三國の北一里ばかり、大崎山の麓に海曲あり。其所を東尋坊といふ。世に傳ふ、此の法師は天正の頃の人にて、爰の平泉寺の衆徒なりと。其の性よろづ暴悪にして、その師をあざむき、その徒を苦めて、常に酒狂を業とせり。法師等こと〴〵くこれを憎みて、ひそかに殺さん事を謀るに、ある日爰の岩窟にいざなひ、大きに酒によはしめて、終に岸より突き落し侍りぬと。しかれば彼が怨魂は、此の海曲に止まりて、年々の四月五日には、風あらく波たちて、西海北湊の間には、此の日を東尋坊の荒れといひて、海に芥をも置く事なし。試に此の淵は數百丈にして、千尋の井戸を覗くがごとく、岩穴七曲に渦まきて、見おろせば脚の酸きこゝちすなり。そのゝちいつの時ならんか、なにがし和尚の頌をつくりて、此の淵をなだめ給ひしかば、風波のいかりもおだやかになりぬと。しからば詩歌の風流にもならひて、我が家の風雅にあそぶべしやと、此の一篇に御坊をなぐさめ侍る。

青僧あり爰にしづみて。　卯月の空のひた曇るらむ。
一念の風は何處より吹きて。　岩にみるめの波や立つらむ。
蛸の法師の壺にかくれて。　蛤の夢の幾夜醒めざらむ。
海老の赤髭を見るに習ひて。　蟹の逆めに人を恨むらむ。
水に迷へば水に波荒れて。　波を悟れば水もなからむ。
今卯の花におねの雲晴れて。　山郭公いづち行くらむ。

狂云く、此の行は十二句にして、詩には十二韻一轍の格ながら、總てうへすゑの一韻に六句めての字より六句のむの字を用ゐる、爰には一韻一叶の格と云ひて、倭文に一韻の鐵ならん。況んや此の行の前語にして、卯の花の雲に時鳥の古歌を寄せ、こゝに文章を讃めたる、本より溫飩の名を以て怨魂の二字を云へるをや。然れば此の行は、水波の二字に迷故悟故の隔たりあれば、爰に此の行の名とはなせり、誠に禪門の面授ありて、這箇の御坊を轉却せりと云ふべし。

萬歳行　五七言　　華表人

(同音)德若に五萬歳とよ。御代はめでたきしだり尾の。よしあし曳きの大和なる。君も榮えてましましこ。照りそふ影は草木だに。風に靡きてしなひどり。世にあふ阪もとざさねば。うやむやの關はうそならし。我等如きの萬歳さへ。富かし鳥の暮まちて。(集若詞)鼓にふくろ扇にゑぼし、(太夫詞)(同音)素袍ぬけとの鳥のこゑ。か

しの京のなにはぶり、酒かひどりの鳴くたべには、我等もひとつ給べふひて、萬歳樂の腹鼓は、中比にはならうちは、柄長どりとらいはばや、仰ぐもおろか君が代を、百千鳥とはやされた、今の京はたひらかに、菊桐菊桐をきくきり、桐に鳳凰前に砂糖、ありがたかりける御ふるまひ、實に我が國は松につる、千歳樂に命を延ぶ。君見ずや。毎年ふるる鶴たた、門に門松立て置きぬ。さて千年の御いはひ、民によろこぶ植かうべり。そなたもおれもいひきどり、民のかまどのやらたのし。

珪云く、此の行は全篇八章にて、章毎に八句なるを八句に三韻ある事は、前はたゞ四句二韻にて後の四句には一韻あり。例に首尾の韻法にして、本より換韻の一體なり。さるを第七章には九句あれども、君不ㇾ見とは樂府の常語にして、歌行の類の發語なれば、和歌の韻法にも衣文字を除くにて知るべし。尤も第三第六章にも、諸路の拍子の違ひたるは、杜甫が麗人行など、李白が襄陽の歌にも此の長短の句拍子ありて、これを雙章の曲節と云へり。此の故に此の行にも短語の變格を詞となせり。然れば此の行にしてわき在りて、節と詞との差別ある、文に急緩の拍子を亂れとなり。但し詞に何所より君見ずやと云ふあたりは、兩人左右に開き合ひて、此の曲を萬歳の大事と云へり。尤も顔と顔とを見合はする時の形容なるべし。總ては漢文の韻語に效ひて、江戸萬歳と云へ御所萬歳と云へる、此等は小鳥萬歳と云はん。

或は尻垂尾の詞より永の一字を云ひ合ぬて、大和に君が八千代を祝し、或は呉に照の字は、照鷽の倒裝なり。或は逢坂に鷽鳥は鷄の虚音を含ませて、うやむやの関は憂の字の縁なり。或は怪鳥には西行の歌を借り、素袍には東坡が時を寄せて、例に和漢の適用なり。されば東坡が布穀の詩に謂ゆる我脱ぬ布袴とは鳥の鳴く音なれ

さはややもめのそゞろ事には、 虎狼よりも漏るぞ怖ろしと、
伊勢も家貧しく淵瀬思へば、 流れ渡りの浮世なりしを、
春は春雨の面白き日も、 漏りて我のみ物思ふらむ、
花待つ嫁は笠ひぼをくけ、 野に遊ぶ人はうと六日といふ。
扨卯の花の散りも盡さで、 やよ五月雨の漏るも漏るにぞ。
まして夕立のあわたゞしさは、 桶も盥も取り敢へずしも。
秋は秋とて椎[illegible]の實の、 それかあらぬか夜社寢られね。
我は戀すと人や咎めむ、 雲のゆききの空眺めして△
されど時雨のいたく漏らねば、 雪は茅屋と人も讀みにし。
さたに朝日の差し回る程は、 空に知られぬもりみもらずみ。
なぞや聖の世を捨ててさへ、 樹下石上と詩に作りけむ△
まして千年を松の木陰に、 君がたもとのぬれずやはある△
我は月夜も子を思ふ闇に、 寢もし起きもし不破の關もり。
晝は降るともとありかからむ、 烏玉の夜の漏るぞ怖ろし。

狂云く、此の吟は九章十八句にして、章毎に四句換韵なり。さるは杜陵が破屋の歌より、衣食住の三の中に、住居に四季の襲替を云へり、然れば春秋の二字を以て夏冬の二名を互照せる、尤も四季に四聯を分けて春秋の詞を蒐めたる、此等は隔句の意對にして、爰に此の篇の奇法を得すべし。但し茅屋に雪を責むる古人の詩歌を言ぬべし。爰に吟の一聯は、裂の隙に喩へて自己の沈思を云ふなれば、杜陵は我が子の寢ね悪しきを歎き、唐文は我が子の行末をおもへる、門守は起き臥しの安からぬ喩へなるべし。しかるに不破の月を以て闇の一字を云ひなせる結語は、題名の夜の字なくて、沈吟の情を爰に盡して、烏玉の無用を知らんには、但し作者は佐野氏にして、美濃の里に遁放す　遁門の古老なり、

曲類

都曲　二章　　作者不知

よしや今宵は曇らばくもれ　とても涙に見る月を。
軒のしのぶのあけぼのかなし。　たやかが軒端のとりの聲。

狂云く、此の二章は古き唱歌なから、歌曲の文體に出せるなり。されば前章は古今集の實ありて月をかこつは文章の花なるに、後章は新古今の花のみなれど、漢には杜牧が詩情ありて、ゆかしき思ひやりたるは、此の一章の器め所にして、茅店の鶏の寢覺めならんか。

田舍(ゐなか)曲(ぶり)　作者不知

市兵衛かしらに、弟がふたり、餅の米がな、さてあくきがな。山に手杵を、見ておいた。

ことし祭の、あかふんどしを、あまりほしさに、思ひにこがれ、伯母の所に、見ておいた。

狂云く、此の二章は能登の國曲(くにぶり)にて、總て三越路の間に諷誦す。漢に下里巴人の類ならん。然れば樂府の古風に似て、山に手杵の風情を添へ、赤褌(あかふんどし)に思ひ焦るゝ等、俚調の中の風雅にして質に文ありとも云ふべきなり。然らば都曲は幽玄の法にして、田舍曲は頓挫の格ならん。李白が三五七言など、此等にも五七の拍子を知るべし。

東(あづま)曲(ぶり)　生佛坊

かさやたゞびやはどもかうもせうに、へゝふの二俵がちんばかな。

狂云く、此の曲は奥の田植歌にして、へゝふとは肥付を云ひ、ちんばとは不均を云へる。總て笠蹈皮(たび)の字體は兎もあれ、二俵の年貢が氣の毒となり。但し生佛は東國の座頭にて、此の類の樂府を語れりと、徒然(つれづれ)の篇鑄抄に此の事あり。

舞子曲　東花坊

たらちねの、親の心ぞ子はしらぬ。くらぶの山の山猿も、人にかはれて小袖きて、なに故郷へはかへらぬぞ。にしきを闇の紅葉川、ふねこぎ捨ててうはのそらに、日和見る手も笠の端や、杖つくんへ

としらぬひの、つくしにも行きあづまにも、行くへのものや思ふらん。おもはぬ人をくものいの、綱手にわたりくらべても、我が身のうきはしらざるや。世をあかさるの舞の袖、それをかざしに世をしのぶかなし。汝も聞かずや我が子をだきて、青葉山しげき思ひは親猿の、はらわたたゆるとこそきけ、桃李の花の都とても、我がふるさとの栗柿に、何かまさるの色にめでて、此の世をあだに舞の手の、いつく手もつらき猿引に、何うらむらん三つ四つと、いつ思出のあるべきや。及ばぬそらの月を戀ひて水をかゞみの影うとき、身を老猿の音をや鳴くらん。

評云く、此の曲は比興にして全篇五十八句なり。さるは行方もなき卑賤の者の娘を、舞子と云ふ者にかしづき立て、大名公家の寵愛を待つに、如何に定めなき世の業ならずやと、暫く其の子のあだなるを云ふに似て、實は其の親の情なり。及ばぬ空の月を望むに、多くは鏡の老いに泣きて、果てはあやしき尼ともなりなん。さるは昔の舞子をさへに、今は都の歴々も、我が子を其の業に仕立つるに、何某が娘は其の師を取りてなど、指櫛も花やかに舞扇を腰にさゝせたる、京師の時世粧を歎息せるなり。されば舟こそ日和見るなど、浮きて杖に道行きの様も、綱手に渡りくらべてとは、皆々猿の所作なるを、舞子の藝に喩へたるなり。或は袖に世を忍べとは、如何なる貧家にも立歸りて、父母を孝養し、此の世を竊かに過ぎよとなり。或は汝も聞かずやとは、一篇の中の短語にして、君見ずや君聞かずやの例に古樂府の常語なり。然るに我が子をだきてとは、猿抱レ子ノ歸ル青嶂ノ後ニと云へる古時の意を聞かずやと、舞子のあどなきを諫めしなり。但し世を忍べ以下は、爰に拍子の間を拔きて、例に變格の曲と見るべし。況んや桃李に栗柿を對して、佳肴の危きに居らんより、疎菜のやすきに眠らんにはと、先賢

の詞を取り合はせて、朝々暮門の世の様を云へる、此等は和歌の文章を傳へて、世の衰落に教を忘れざる、或は天地の情を動かし、鬼神をも泣かしむべし。

第十三卷

引類

富士ノ引并歌

山部赤人

あめつちの。わかれし時に。神さびて。高くかしこき。駿河なる。ふじの高ねを。あまの原。ふりさけ見れば。わたる日の。影もかくろひ。てる月の。光も見えず。しら雲も。いゆきはゞかり。時じくぞ。雪はふりける。かたりつぎ。いひつぎゆかむ。不盡のたかねは

田子の浦にうち出でて見れば眞白にぞふじの高ねに雪はふりける

私云く、引は諸抄に分明ならず。されど、詩騷に似たるものを序引と並べて註したれば、引は決して歌を後にすと云へる題註の字義の意ならん。此の故に詩人古昔に、古本を統べたるを引と云ひて、彼には詩引と並べて註せり。然れば萬葉の題名にも、山部赤人望不盡山歌一首並短歌とある時は、前を本として後を用とせり。されども長短の違ひありとて、同じ歌を二首つらねて並歌とは如何ならん。短歌には長短の歌二首とは云ふべし、並には長歌を引と見て、短歌を後になせる時は、誠に本朝にも引の類ありて、これを古今の文體となさば、選者にも其の眼力ありと稱すべし。況んや結文の詞を見るに、云ひつぎ行かむ富士の山はと、次の短歌におひかけたる、

不思議に序引の兩格を兼ねて、和漢實合の引と云ふべし。

手習引 幷發句　　東花坊

父は名にしあふ曠草の一字に名をしられ、風雅にたへなるをのこなりしが、その葉枯れてその根たえずも、その親なくなりて、その子花へうつる。誹諧にふりし家の面目にして、手習はよしその身の藝ならん。まなばば花にあそぶとも、ならはば鳥に狂ふとも、此の子に此の蘭の名をあたへて、三つ葉四つ葉のおひさきや、家に一葉のにほひたえざらん。

誇習て咲きたる蘭のにほひかな

評云く、此の引は名の說ながら語路に長短の拍子あれば、杜が桃竹杖の引にも似たらん。これをも倭文に引の一體と立つべし。然れば曠草の一字を以て、始めは其の父の遺名を稱し、中比は其の子の教訓を加へ、終りには祝詞を用ゐて、或は序詞の短事にして、一篇の情を盡せりと云ふべし。まして花鳥に品を寄せて、引には文法の風流より童部をもてなすに虛實あり。或は其の句に誇とは、蘭には藤袴の緒ありて、其の子の行儀を云へるならん。但し此の蘭は春氏の子にして、其の比は少年なりとぞ。越の高田に産す。曠草は父の俳名なり。

謠類

雨乞謠　　盤珪和尚

うれしやめでたや老いせぬ昔にて、あやかり道うたと我ひしより、わきまへぞなかりしがいにしへとへば、なにとも思はぬ我がこゝろ。

狂云々、此の言は揺籃の人の宵く謡を傳へて南乞羅の唱歌なりと。さるは其の世の國民まで、此の和尚の道德を慕ひて、南乞の奇特を願ひたらんに、心外無法の禪話をも示さず、此等の俚語を童蒙に教へ給へる、誠に狂言綺語なれども、佛乘の緣を結ぶべくは、天もなどか納受なからん。其の一は本來の面目にして、其の二は例の不生なりと、其の家の人は披譯すべけれど、實はをどりの笠に附して、遊戯自在の法と見て、深く信じ高く仰ぐべし。但し爾あには揺の龍門に住し、後には天下に横行して、佛法東漸の禪師とは云へり。

石搗謠 并序

坊主仁平

むかし伏羲神農の御時に、家といふ物もなければなしとて、柱は皮つきのまゝながら、屋根はそこら萱葺きにして、大工の作兵衛が鉇一丁にて埒明きたり。その後虞舜の御時に、おもひ人を住ませんとて、庭のやり水に心をよせ、手水鉢の蛛手みたくなれしより、夏殷周秦の世々をへて、人の心はなやかに、扨こそ咸陽宮の美をつくせり。されど殿守の無沙汰にや、そこの金殿玉樓も、一夜の灰となりしより、世間の火事に沙汰おこりて、世にすむ人の心がゝりとはなりぬ。愛の金城にも見物の人ありて、その先の大變には、花の後の吟詠にうそぶき、今の時の小變には、まして梅が香の風雅を忘れ

ず、世はかくこそありけれと思へど、雨のふる夜は心ぼそく、客のある日は物わびしとて、卯月の十日許りなりけん、手斧はじめの日をえらびて、鑿彫(のみとり)の音も幾日ならぬに、さみだれの隙の朝日うれしく、今日は石搗のざゝめきに、そこらの子どもをぞいさめ侍る。

有りきに雨のふることそめでたけれど、餅もふれかし米もふれ。ふらねば花もさかぬなりけり。

狂云、此の篇は一章七句にして、或は古楽府の体とも云はん。されば其の序は専らなれど、有世の変相を云へなせる、文章にしてかつ可笑し。況んや其の詞も俚語ながら、花の一字に風雅を添へて、此等を和漢の文鑑と見るべし。但し此の篇の趣は、賀の金城に両度の回祿ありて、牧童北枝が風雅を発せる其の句法、其の世に吟行せりとぞ。或は山下の坊主に至ては、例に我が師の狂名なり。

辭類

風俗ノ辭并序

渡部狂

木の葉ちりて寂しき日なりけり。我が師と楚辭をよむに、さは此の書にはおほく些兮の二字あれども、我ごときは助語の音律をしらず。恐らくはこゝの物しりとても、唐の音韵には通ぜざらむ。漢文の辭類には、武帝の秋風を始めといひて、六朝一叶のあらそひの中にも、詩變じて騷となり、騷變じて辭となれる、騷の變は知りもしつ、辭の變はなぞ心得侍らん。我が師のいへるあるべし、物とし一

たび變ずるには、情はいにしへながら、姿に聊かのたがひあらん。二たび變じておのが一格あらば、そふ五七の法もあらず、叶韻の式もなからめと、たま〳〵花鳥の風情を忘れねば、詩より出でたる體なればならし。漢の帝の秋風も詞ありて、長短を調へ給はねば、何の格ともさだめがたきを、詩にして楚辭にも似たればなど、かの船に侍ふ羣臣のあつかひて、楚辭の辭の字をおほせたるなるべし。さにや文章の題名には、その字〳〵の訓解あれども、辭類ばかりは、その體を註して、いづれに字訓のさたなし。我思ふ、說文には楚辭を引きて兮は詞なりといへれば、辭はその事の微情を盡せるなり。或は古句の外なりともいへるぞ、或は古文矜式に、辭は情深くして語緩しとは、緩の一字をとがむべくや。文章の外の半話をいふべくとも、法格の外の風雅をしれとならん。さして三變の道理にも叶ひて、辭の字の訓もしるきぞよ。我が朝の辭には、土佐日記など、伊勢物語の詞遣ひもまじへて、先づは百番の謠のそこ〳〵、能狂言のはやし物、これらやそこにてあらん。しかあらば三たび變じたる道理にしも、詩賦歌行の外にもあるゝ文法もなからん。さはれど本朝の詩とて作り、本朝の辭とてあらためれは、人の國の註者をもおそれつ、我が朝の文者にもたゞねよ。さこそしりなば、東家の丘あらんにと、我が師は我が詞をさいし給へど、すでに此の朝の中書王にも、毳落つる詞の一格あれば、皮にも風俗の辭一章作りて、これらの風體ならんやと、後の君子を待ちて、ねゝ、此の辭をさきだし侍る。

遠く之乎者也の詞をたづねて、近く手爾遠波の辭を知らんには、

傾城ノ詞

わしがたもとはこなんゆゑ、ひるは人めもしのすゝき、かりまくらるゝ身のつとめ、あゝしんき、しのに思へばうさもつらさも筆にはのべの紙もつきせぬ。

馬士ノ詞

坂はてる／＼鈴鹿はくもる、間の土山に酒はあれど、宵にまゝあの晴へいふに、まへの小川に日が暮れて、やみに歸るぞほつこしもない。

評云く、此の一句は辭の類の正解と見るべし。然るに定者と云ふ時は、他國の人の語音を寫せる、是は關東にはべいと云ひ、こんだと云ひ、都にはさんせとも、あんすとも、助語は國々の風俗なり。されば此の序も此の辭も句讀の長短を詞へざるは、詩賦歌行のみならず、二十七題の外に此の格をも立て、書く文法を漏らさじとなり。去れば傾城の詞には、わしもこなんも彼が平語ながら、袂にひるゝと云ひかけ、詩にかゝると云へる、例に風雅の忘れざるなり。次に馬士の詞には、鐘の異名を、彼が風俗にして十文を雀と云ひ、三十を川と云へる、皆の一字は例の風雅なり。或はほこしも無い事とは、さのみならぬと云ふ事を、ほつとつ延たるは助語にして、是分も遠波も爰に知るべし。

山姥ノ辭　一休和尚

そも〳〵山姥は生所もしらず宿もなし。たゞ雲水をたよりにて、いたらぬ山の奥もなし。しかれば人間にあらずして、へだつる雲の身をかへ、かりに自性を變化して、一念化生の鬼女となりて、目前に來れども、邪正一如と見る時は、色卽是空その儘に、佛法あれば世法あり、煩惱あれば菩提あり、佛あれば衆生あり、衆生あれば山姥もあり、柳はみどり花はくれなゐの色々、さて人間にあそぶ事、ある時は山賤の　樵路に通ふ花のかげ、やすむ重荷に肩をかし、月もろともに山を出でて、里までおくる時もあり、又ある時は織姫の、いほはた立てる窗に入りて、枝のうぐひす絲くり紡績の宿に身をおき、人をたすくるわざをのみ、賤の目に見えぬ鬼とや人のいふらん。世をうつ蟬のから衣、はらはぬ袖に置く霜は、夜寒の月に埋もれ、うちすさむ人のたえまにも、千聲萬聲の砧に聲のして、うつはたゞ山姥がわざなれや。都に歸りて世がたりにせさせ給へと、思ふはなほも妄執か。唯うち捨てよ何事も、よしあし曳きの山姥が、山めぐりするぞくるしき。

往云、此の段は世に知れる曲ながら、例に我が師の論に任せて、妄に曲の一字を加ふ。これも百寿の[illegible]を拈して曲の曲と云ふにあらず。曲の中には此の類ありたなり。されば山姥の一册は、一体有情の作とみて、世に言ふ、云ひ傳へて、古今に希有の文法なりと。誠に忽然念起より諸法皆空の道を示し、凡佛一如の理を顯はして、柳はみどり花は紅と、目前の境を云ひ盡したるに、色と云ふ字は、結前生後の働きありて、其人間と文を繋ぎたる、神妙に通ぜざれば一体にあるまじく、文學に達せずんば一体にあらざらん。況んや花の体は月に埋もれな、

は、磐石を以て押すが如く、源氏も立かね給へるは筆力不思議の妙所にして、此の書に志深の情を酌むべし。

戲レル佛ニ辭

烏丸光廣

善福寺の御本尊は、一揆手半にして、閻浮檀金の鑄像なりと。多田新發意滿仲の持佛とかや。さるもそも愚癡のわれらが思ふやうは、南無あみだ佛は、十劫以前に正覺をとり給ふならば、さてそのまゝにありもせで、安養世界に淨土をまうけ、極重惡人にくみし給ふは、御佛事かたふときか。しかりみならず有馬山の夕霧わけて、これまでの來迎こそありがたけれ。

瓢簞にいると見えたる山がらの出でて胡桃をなどまはすらむ

もしは綺語の結縁ともなしからずは、決定往生をとげしめ給ふべし。なまいだ／＼と。

狂云く、此の篇は光廣卿の有馬に入湯の時の筆占とぞ。さるは行李に書き持てる見聞の誤りもあるべきか。然るに此の篇の題名は、古文に綺語の二字を見て、此の三字を以て題としたるが、中間の一首を辭と見れば、もも古文の漁父の辭に似て、前後に序詞の文勢あれば、此等は漢家の辭と云ふべし。但し此の辭は自然の突なるべし、此等の筆格にも進み給へて、實に文法の餘力より虚實自在とは稱すべし。

憐ム捨子ヲ辭

芭蕉翁

駿河の國ふじ川のほとりに、三つばかりなる捨子のあはれげに泣くあり。いかで此の川の早瀬にか

けて、浮世の波をしのぶにたへず、露ばかりの命まつ間と、爰に捨て置きけむ。小萩が本の秋風も、今宵やちるらん、あすやしをれんと、袂より喰ひ物なげて通るに、

猿を聞く人捨子に秋の風いかに

いかにぞや、汝は父ににくまれたるか、汝は母に疎まれたるか、父は汝をにくむにあらず、母は汝をうとむにあらず。唯これ天にして、汝が性のつたなきをなけよ。

狂云く、此の辭も漁父の文勢ながら、捨子に秋の風いかにと問ひかけて、如何にぞやと序詞につゞけたる、但し辭の類の一體にして、倭文に辭を立つる時は、千般の法格あるべし。或は富士川の瀬をはなれ、浮世の波に云ひかけたる、此の川ならでは更に知るまじ。小萩が露は源氏の歌を借り、父母の憎愛は莊子が天性を云へる、例に和漢の博註にして、これをも漢家の辭より倭文の助品を用ゐ得たりと云ふべし。

夕暮ノ辭并序

東花坊

むかし翁あり。湖東の人を送るとて、武江に柴門の別れをなしぬれば、東花坊に此の人ありて、此の別れを送るに異ならんや。誠にその人は此の人に似て、その翁は我が師なり。されば其の昔より、遙かにむかしなる唐土にも翁ありて、詞をもて送る人をよろこび、財をもて送る人をいやしむ。その翁はいざ我かたう人なるや。さりとてその詞のやすきにはあらず。財はある人のあまりのすさみなれ

ばならし。むかしより旅にあそぶ人は、一鉢の僧をうらやみて、工商の族は妻子をかこち、官祿の人は家名をほだしとす。世にありて誰か旅にあらざらん。あるひは寢ねてあるひはさむるのみ。春秋しばらくもとゞむべからず。然るを武士の旅に行く時は、さりとも今歸り來む、軍に立つ時は逢ふ事かたしと、ふたつの命も持つまじきには、おのれが門を出づるより、皆旅にして旅を忘れざらんにや。

爰に梅流閣のあるじは、おほやけの事にあづかりて、武陵萬里の旅に赴けり。其の別れいづれによろこびざらん。此の別れさらにをしまざるにもあらず。人々此の名殘にと、三秋に三夜の月を題せんには、三千里の外の故人の心も、かの三笠山の月も思ひ出づらん。まして越路の關をへだつとも、故人なからんやの心なりとぞ。此の人はかつて梅の一字を得て、東花坊が門人たらんとちぎるに、これに支梅の說かきて、梅の花の白き所をぞいへる。いざや其の梅の江南に色づきなば、風雅に寒酸の味ひをしりて、馬祖老倒の器量をも見つべし。今年此の日の別れをして、明年誰か健やかならんと、梅流閣上に杯をあげて、たゞ此の夕暮を惜しむのみ。

鴫立つや、その夕暮の旅人は、　世をすてがての身なりしを。
それにはあらでかあら磯の、　花ももみぢもあらばこそ。
越いうらわりの駒かへし、　此のゆふ暮を忘れずやそも。

閑居ノ箴

芭蕉庵

あらものぐさの翁や。日比は人のとひ來るもうるさく、人にもまみえじ人をもまねかじと、あまたたび心にちかふなれど、月の夜雪のあしたのみ、友のしたはるゝもわりなしや。ものをもいはず、ひとり酒のみて心にとひ心にかたる。庵の戸おしあけて、雪をながめ、又は盃をとりて、筆をそめ筆をすつ。あらものぐるほしの翁や。

酒のめばいとゞ寐られぬ夜の雪

狂云く、此の題は大學の語を借りて、閑は閑なり小人の獨處なりと、朱氏が註にも云へりとぞ。されば、此の篇は隱者の常情にして、或時は世を疎(うと)み或日は人を懷かしむ。本より心神不定ならんは、頓阿も風月の情に過ぎたりし、兼好法師の箴めたる像ならん。誠に此の篇は前後に翁字を用ゐて、自己の散亂を箴めたる首尾の文法を見るべきなり。但し此の句は切字の發句とも云ふべきやと、故翁も語り給へりとぞ、常に我が師は此の事を云へり。

猫戀ノ箴

太巴靜

猫よ〳〵、むかしは女三の宮の懷にそだち、その後は清少納言が草紙にもほめられて、命婦(みやうぶ)の名さへありがたきに、いつしか羅綾の膝にもあきけん、行方なき男猫を思ひ初めて、みかきが原の露霜にそぼち、おぼろ月夜の垣ねにも戀ひわたるらん。さるは人目をもつゝみかねて、今はたいゝうちにかう

かれ出でけん。果ては野等猫のうき名にもたちぬ。扨こそ今やうの短羽織にいでたち、ある夜は赤手拭の色に出でて、稲荷の山の紅葉ならでも、よその殿にさへ思ひこみて、世にいたづらの父といふ名もあやにし。さるから昔ね夜あるきの身につもりて、圍爐裏のはたに老い果てぬらん。いとゞ寒やみの痩猫となりて、民間の腰の女にさへさたなまれつ。そはたゞ身の程の行方を思はざるらん。されど有情の色にまどへる猫は一夜にも思ひやみぬべく、人は二世までとかこつらんは、いはゞ人をもて猫にだにしかざらんを、我はた汝をいましむるに、汝が我を怪しむらんもしらず。我はいま汝にとはん。

色はよしあそぶべし、色にうかるゝ事なからんには。

狂云く、此の篇は自利利他にして、詞を寄するに演暢なり。さるは源氏の風流より、枕草紙の寓言を合はせ、或は徒然草の古語を借りて稲荷の山の古歌を採れる、狐と猫との交はりを云ひて、父と云ふ字の徒名(あだな)を重ねたる文章の自在は、此の間に見るべし。然るを孔子の一語より、人の色慾の猫よりも淺ましきは、遠く巖めて近く慎まざらんや。然り色には遊ぶべくして色に溺ふべからずとは、開闢の意も此の事なるべし。但し巴[illegible]は太田氏にして、巴の城下に假居す。素生は濃の竹が鼻の產なりとぞ。

ばかり書きて、作者に何とも聞せざれば、或は奉納の序とも云はんか。されど首尾ともに神慮を兼ねたれば、結語に作者の詞を加へて、爰には奏表類に入れたり。此等の沙汰は道場の法ならんか。但し難波の梅翁とは、宗因門下の稱號なれば、爰にも梅の一字を稱せり。

花起請　　小むらさき

あからしき花おくらせ、御佛たちも見まゐらせ候。さてしあふ坂の關にはあらで、はゞかりの御事にこもらせのよし、よろづ我が身の上がたらではと、これよりさしまゐらせ候へば、つゐのほどのたまはせ給はぬにも、いとゞ心苦しうこそおはしまし候へ。世には藥守の神とやらん、此の花の神もおはしまさば、かはらぬ心のくまはかよはさせ給ひなんかと、人づてならぬたよりかりのみまゐらせ候。

評云く、此の文は武城の人の持ち傳へて世に千金の翫物となせりとぞ。然れば此の文の趣を見るに、先づは高家の歴々ながら、公表に逆鱗の咎めありて、暫く籠居の様に見えたり。こゝを逢坂の關の難に關され、憚りの關の名に寄せたる筆を留めて疑ふべきにもあらぬに、實に大賢の文者にして、藥守の二字は時を得たりと云ふべし。本より小野は芳聞に隱れありて、今も天下に三筆女の名を殘せり。但し此の文を下界して、これが筆者の詞より首文の頭に出せるは、これをも道場の標榜と見るべし。

報恩ノ表　　東花坊

東花坊こゝに稽首して申す、先師死後十とせあまりにして、誹諧のひかり世にあまねく、しらぬ筑紫の國々も、東路のはてを遠からで、名をしたひ俤を戀ふるの門人、すべて孔門の三千にも過ぎたるべし。まして洛陽の花に遊び　武江の月にうそぶける文學言語の門人も、唯十哲の名のみならんや。誹諧はいま此の時よりといふべし。弟子かつて先師の門に入る日より、風雅は理あり理あらずといふ事をさとせられて、萬物おのづから變化の理ある事をしれり。これ更に師恩の第一なるべし。江東湖南の春にあそび、海北山西の秋をおくれども、一日もかつて鹽虀をかかさず。これさらに師恩の第二なるべし。ことし此の日の魂を招きて、風聲水音の手向をなし、飛花落葉の感を催すに、門人すべてその志をはこびて、爰に百々の詞をえらぶ。いかでや弟子が筆頭のちからならん。これさらに師恩の第三なるべし。世に人に三つの恩ある時は、おのれが命をもてむくゆべからずと。師ははた三世のちぎりありとも、永く此の恩はむくいがたからん。況んやその門に名を列べて、武城に其角、嵐雪あり。洛陽に去來、丈艸あり。杉風、嵐蘭は其の門のおもし人にして、武門に許六あり、曲翠あり。その友には萬子、素堂など、鎮西に卯七は落柿舍の旗に靡き、坂東に不玉は惟然坊の文にしたがふ。尾張に露川あり。美濃に盧文あり。杜國、落梧はむかしの名に聞え、北枝、吾仲は今の世にひゞく。千那、尚白の古老なる、松本の正秀も、難波の諷竹も、智月、乙州は氏族の情をむすべり。其の餘は尾城の

古門人をさへに、伊賀の人々はましておそるべし。いづれも龍門に名を題して、風雅の先達とあふがざらんや。およそは七十二弟子の門に、師の光のおよばざるはなけれど、照らし見る所おの／＼異なれば、或はしたしきありうときあり、或はその名の人に越えたるをねたみ、或はその言の過當なりとにくむ。さるは人の世のならひにして、ありのすさみにもいふらんかし。その人もおほくはなき名のみ。神靈は爰に明らかなるべし。さればや東花坊は、むかし佛法の師をはなれて、佛門の人のそしりを顧みず。此の誹諧にあそぶ日より、高く師德をかゝげん事を思ふ。これたゞ報恩の其の一にもあらんか。弟子かつて雙親を失ひて後は、師を木曾寺に送り置きて、苔の露に泣きし日より、その日／＼に香華を忘れず、父母の敬禮にも先だてるは、これたゞ臨終をわするまじき、報恩の其の二にもあらんか。弟子かつて七年の魂を祭りて、木曾寺に千百の卷をそなへ、ことしは雙林寺に百々の句をついで、三日夜の法樂をなさんとするに、身貧にしてその志をとげざらんとす。伊勢が家貲あふらせにはあらねど、宗祇の質といふもの置き給へる風雅の例もありときけば、寧・山の自畫自賛など、其の外に五品の物をしろなして、爰の供養のあるじとはなれり。これたゞ報恩の其の三にもあらんか。されば我が世の過分を思ふに、今年は年も四十二にして、師恩は露の身の程に置きあまり、功名は雲の東西にあまねし。然らば我が年のをしむべくもあらず。まして此の命をもてその恩に報いんや。今はし

三つの恩を見て、纔かに三つの報いありとも、人もし百千の恩あらば、何にか百千の報いあらん。これより願はくは假名の碑を製して、生前の契りにもれたまふまじくは、碑面の文字の百千にわたりて、一字一淚の報恩にもあらんか。神靈こゝに見にあらはれ給はずは、それもその德のひかりをまたらんやと、これを長くのおこなひにして、東花坊こゝに稽首して申す。

狂云、此の表は我が師の肝膽より出で、一字半言も端の嘆息をなさず、我が師の眞實は存すべし。然ればこ三恩に三報の眞實なる、まして碑面の文字の數に百千の恩を配分せる、起句の文字は此等に依ふべし、或は蕉門に二十餘輩の名を擧げて、先達の二字は此の表の肝要にして、石碑の眞字は此の表の趣意なり。或は師弟に功名の一對は、路通の二字の奇絶を見て、文に文あり、は猶…し。但し下の淚と眞淚とは、自然に…の淚を…ひて、一字一淚は盧仝が詞なり。

敎令類

雙林寺に修する石碑の敎　　渡部狂

有司うけ給はりぬ。世に父母ありて子あり、師ありて弟子ある時は、子として父母の恩を忘れず、弟子として師の德にむくいざらんや。爰に誹諧の家ありて、その師は東武の芭蕉庵に、一花萬葉の德をかくし、その弟子は北濃の東花坊に、萬虛一實の法を傳ふ。世はさる其の師の德をひろめて、此の

落柿舍ノ制札

誹諧奉行　向井　去來

一　我が家の誹諧にあそぶべし、　世の理窟をいふべからず。

一　雜魚寢には心得あるべし、　大鼾をかくべからず。

一　朝夕堅く精進と思ふべし、　魚鳥を忌むにはあらず。

一　速かに灰吹をすつべし、　たばこを嫌ふにはあらず。

一　隣から居膳(すゑぜん)をまつべし、　火の用心に及ばず。

右條々

狂云く、此の令は四虛一實と見るべし。されば蕉門に此の人ありて、其の性は殊に篤實にして常には言語の虛に遊べる、此の故に始めの一條を云ふべくして、後の四條を興するのみ。されば此の時は、嵯峨の落柿舍に在し

華の門へ來りて、故翁と同じく遊べるか、其の人との嫌を去へりとぞ。尤も公表の制とは見るべからず。誠に洛陽に去來ありて、鎭西に時者奉行なりと、故翁も得し給へれば、爰にも奉行の二字を用ゐる。或は我が門の友目記にも、去來に聖堂の掃退の事あり。煙草嫌ひの人とは見えたり。或は篤の居膳とは、屋敷守の與平が方より朝夕の膳を贈れりとぞ。但し去來は向井氏にして、洛陽に三奇の浪人とぞ。

書狀類

答蒲冠者狀

源　頼　朝

十二月十四日の御文正月六日に到來、今日從是脚力立てむとし候へる程に、此の脚力到來仰せ遣はされたる旨委しく承り候ひ畢んぬ。筑紫の事なども從はざらむとこそ思ふ事にて候へ。物騷がしからずして、能く國に沙汰し給ふべし。構へて〳〵國の者共に憎まれずしておはすべし。中略 當時は國の者の心を破らぬ樣なることこそ、吉事にてあらむずれ。又八島におはしますおほやけ、並びに二位殿女房達など、少しもあしざまなる事なくて、迎へとり申させ給ふべし。かくとだにも披露せられば、二位殿などは大やけをなしまゐらせて、先ざまにおはする事もあらむ。大方は帝王の御事、今に初めぬ事なれども、木曾は山の宮、鳥羽の四宮討ちまゐらせて、冥加つきて失せにき。平家又三條高倉の宮

は鬼七兵衛、その名も高田の上戸に選ばれて、旗には水村山郭の四字を、城南の風に吹きなびかせ、今日の福王寺を目にかけて、風乙岐雫にわたりあふ、夕陽すでに貝鐘にかゞやきて、池をめぐり閣を隔てたに、そなたはむさし野うき島が原、こなたは熊谷織部など、名乗りかけさしちがふる中にも、入道はいと口をしく、心の矢たけに弓の腰をれて、病後の胎息に立ちあがれば、飯椀の太郎に肝をけし、膝栗毛に打乗りてその夜は桂花楼に遁げかへりしが、それより直江津の人々に、明日の歌仙をぞ牒し合はせける。

狂云、此の移文は虚誕なれど、所々に文章を錯みて、軍書に異なる筆格を見るべし。されば武蔵野以下は、杯の名に對して飯椀の太郎と云へるより、汁椀以下の次郎三郎を察すべし。又福王寺八作と云へるは、當國の高田に名を知られて、実紀は四十なりとか。然るに此の作者を作波人道と云へるは、倒に我が師の狂名なれば、其の鄰國なればならん。但し我が師は橋の庶流なり。

贈左栗老人書　　東花坊

雲鈴御坊に承りぬ。老人はむかし我が翁の行脚をとゞめて、時に左栗の二字を得たりとぞ。その子に陸夜あり、汶東あり。過角は竹風が猶子なればと、其の家の誹諧をつけるよし。家に三子の風雅を出せる事、世にありて誰か羨まざらん。金王ははじめにうらやみて、後にいやしといふ詞あり。我こゝ

ひさると、總ては其の時の宜しきに隨へれば、それを虚實の虚實とは云ふなり。然らば此の書の所用を見て、虚實は水波の隔てなるを知らば、始めて文章自在の人と云はれん。誠に此の書は人間の進退を云ひて、自己の言語に明らかなりと見るべし。但し左栗は越の今町に住す。此の地は古の直江津なり。

落書　　　　今川了俊

一歌の同類事よく心得わくる事は、至極の大事かと存ずるなり。隨分の人々も分明にはなきやらんと存ずるなり。

大事のはれの歌合に頼政卿が歌に、

　　都にはまだ青葉にて見しかども紅葉ちりしく白河の關

といふ歌をとゝのへて俊惠法師に見せ合ひけるに、此の歌かの秋風ぞ吹く白河の關の歌に似て侍れども、一定出しばえすべき歌なりといひけるを信じて、此の歌出しける日、俊惠がもとへ車さしよせて、貴殿の仰せらるゝを信じ奉りて、此の歌を出し侍るが、もし負けにて侍らばかこち奉るべしといひければ、俊惠も祈請などして念じけるとかや。案の如く勝ちけるとなり。作者も同類とは不レ存、俊惠も不レ存、又判者も同類に非ずとてこそ勝たせけめども、我等やうの不堪の心には、能因法師が歌の霞を紅葉にかへたるばかりにてこそ侍れ。心も詞も何がゝりも同じものかとぞおぼえ侍る。されば此の

かひを知りわくる程にならずして、おのれすでに至りたりと身をかゞやかす、勿體なくや侍るべき。近日歌よみ連歌師の中に、此の獨歩の心あまた見え侍り。人と是非せらるゝまでもなく、如レ此ノ事は我が心に問うてうたがはしからんほどは、身ほめははづかしかりぬべき事かと存ずるなり。

狂云く、落書の二字は漢文にも在りて、本朝文粹にも出せるが、何れも聊かの違ひあり。是れは此の書は、歌人連歌師の當時に過分の働きあるを評して、始めは落書記と題せるを、其の後に冷泉家の披露に及びたれば、落書露顯とは云へるとぞ。しかれば此の歌の事は、諸家の異說區々なるを、我が家には秘抄ありて、偶に此の歌を評せるなり。其の抄に曰く、先に能因は春秋の程を經て萬里に遙かなる情を讀み、後に賴政は其の歌の詞を借つて、青紅白の三字を以て歌の姿を詠じたれば、假令都と白河の間は一寸ありても遠近の論に非ず。然らば能因は風情を讀み、賴政は風姿を詠じて、聊かも混ぜる所あらんと。故に能因は出の字を以て歌に遠近の情を知り、賴政は見の字を以て歌に青白の姿を見る。本より詩歌連俳は、姿情の二を齊しくて、ことに風姿の先なるを旨とせし。但しは伊與入道も其等の秘抄をも知りながら、和歌の奥義を含めたるか。不等類の論は委に明らかならん。

申白　狂狀　　蓮二房

佐七便にうけ給はりぬ。武の桃鄰より故翁の文稿をおくられ候よし。定めて芳野の紀行は草菴の儘にて、岩菊丸と直りたるにて可レ有ル候。芭蕉を移す辭と三日月日記とは、これより小鍛冶かたへ申し遣はし候。別して此の二篇は故翁に一格の文法なるよし、何とぞ此の度ほしく候。紀行は急ぎ此の便

に可ㇾ給ヮ候。日外申し遣はし候啼鴉集の跋の事は、右範かたの書翰より先師の加筆のを捜し出し、我と我が文に驚き候。其の故いかんとたづねれば、其の跋の秋をいひ盡して、鹿も紅葉もおりおりに、冬は初時雨と續けたるを見て、秋にはなどや老いをいはざる。殊に此所の拍子過ぎたればとて、此の世の樣のかかれとてしも、我が身の老いを忘れやはすると、此の段には老いを忘れず、衰老の觀を秋にいへる、誠に其の時もさはと驚きしが、今なき跡のたふとさには似ざらん、本より我が師の文法に明らかなる、譬へば法善が鏡にてらして、人の病のあり所をしれる如く、今もし此の跋に此の二句なからんには、人の骨節なきに似たらん。人の骨節なからんには、かの傀儡といふものに綾にしきを飾り、紅粉をよそほひて、目前の人をたぶらかすにあらざらんや。いはゆる我が門の虚實とは、此等の死活をもいふならん。蓮二も居士もその醫師を失ひて、此の道場にもいかなるあやまちをか仕出し候にんと、返すがへすおそれ入り候。そこの文者達へも此の沙汰候て、右の二句には死活ありて、文章の拍子をもしりあたる、一篇の要をしらんには、その文法の幽遠など學びても猶學び給ふべし。穴賢

狂云く、此の狀は尾城に便を求めて武陵へ書通の添狀なり。尤も此の書の趣は後の序の類の下に通曉すべし。されば法善が鏡とは、此の人は常に鐵鏡を以て人の五臟六腑を照らして、其の病の在所を知れりしぞ。但し桃隣は故翁の從弟にして、小鍛冶は百里が雌氏なりし。何れも先師の舊識なり。

第五卷

論類

博學論　東華坊

我おもふに、學問に損益の二あり。博く學べどもその所以をしらざれば、これを論語よみの論語よまずとはいふなり。爰にある人は物の表をよく覺えて、儒佛老莊の書籍より和漢の詩歌にいたるまでも、問ふに答へずといふ事なく、鐘の響にしたがふがごとくなれど、皆たゞ文字言語の末を覺えて、一字も古人の心を傳へず。しかはその書をあきらめざるにはあらで、唯その所以をしらぬ人といふべし。其の經其の書は何事にさは說きたるや、此の詩此の歌は何故にかく詠ぜしやと、經書になづまず詩歌をとがめず、むかしの作者の情を汲まざれば、たゞに物いふ五車兩端などいふべし。爰にある人は物の裏を指しりて、儒書は纔かに和論語を覗き、佛經は暫く辻談義を聞きて、釋迦の拈華は何故にさは笑ひ給へる。孔子の喪狗は何事にかく歎き給へる。老莊の寓言は物の形容なればと、三聖の腸を看破すれば、その釋迦の經ならんには、その孔子の書ならんには、問ふに答へずといふ事なく、鐘の

譬にしたがふがごとし。しかれば前の或人は、儒書佛經に金銀をつぶして、一字の所以をしらざらんに、後の或人は手味噌手油にて螢雪のほまれをあげたらんは、損得のさかひも爰に明らかならずや。しかもさばかり博學の人は、詩歌文章の席につらなりて、その故事は何の書に見えたるぞ、その古語は何の經に出でたるぞと、後のある人に支配せられて、書物のある限り取りちらし、それは蘭陀寺の經藏に侍り、これは龍宮城の文庫にさふらふなど、終日に日の日傭ひとなりて、我が詩我が歌の媚びはこびぬらん。鬼神を感ぜしむる餘情をしらねば、人間はまして面白がらぬ筈なり。もとより古の詩歌文章は、文字の外の通情なるをや。しかればその人は今世の損のみにあらで、來世はかならず四國の猿と生まれて、家に用ゐれば人間の諸藝をつくし、野山におけば何もしら猿なるべし。されど學者の此の論を見て、我は諸學に達し、諸藝にあそべども、誠にその所以をしらざればと、爰に教ふる門人だに思はざらんには、遙かに世の人はよみて過ぎぬべし。我はかく此の論にあそぶも、我をしる人によみ聞かせて、我をしらぬ人にはいは猿なるべし。

博知論　　西華坊

我思ふに、學文に表裏の二あり。文字言語もさる事ながら、深く古人の腸をしるにはしかざらん。いづれの年か武陵の芭蕉庵にありて、阿翁と杜律を見侍りしに、など鸚鵡粒と鳳凰枝の平仄も更に

あしからぬに、何故にかくは作れるぞと、そこに弼君が註を見るに、語倒シテ競レ奇ヲといへれど、爭で此の巻のたゞに奇怪を好むべき。これらは倒語の所以あらんと、諸抄を捜し詩人に尋ぬるに、それは錯綜顛倒の法とて、上を下へ置きかへたる、名人の句法とのみ答へて、轉倒の所以をあかす人なし。しかるに阿翁の滅後ならん、百人一首に朝康が歌を見れば、秋野の白露を倒装せり。さはや和漢に此の法あればと、諸抄を捜し歌人に尋ぬるに、ある家の祕抄に妥を註して、これも白露と秋の野を上下へ置きかへたる、名人のしわざとのみいひ捨て、倒語の所以をあかす人なし。つら／＼和漢の通情を思ふに、杜陵は粒の字の死活と見て、慥かに錯綜の所以をしるべく、朝康は白露の多少をいひて、按は倒装の所以をしるべし。妥を博學は金銀をつぶして、錯綜倒語の理窟をおぼえ、博知は例の下油をたほして、死活多少の所以をしらんとなり。されば詩歌にかゝはらず、古人の情をしるといふは、たとへば赤人のふじの歌は、白妙の二字のよみこぼしからんに、西行法師のふじの煙は、風になびくの五文字を恨むならんよ。實にも赤人の眞白にぞとは、富士の雪白くして其の外はさならず、白妙の二字には白漫々として、皎潔さらにいふばかりなし。さて西行の駿河なるは、天下無雙の富士に對して、五文字の大へいを嫌むべきに、風になびくとは模樣過ぎたらん。されど西行の歌の中にも、いざしら雲の山ざくらは、模樣なき所の模樣をほむべし。誠に西行の歌ならば、風情その儘にいひ出でしなり

けり。好きとは人も覺ゆらん。殊には富士に駿河なると、無用の五もじを白讀たらんに、鼠になせて、と味をつけられて、魂魄さらにその煙にかけるひ、そこの裾野にはさまよひぬらん。赤人は新古今に判者をよろこび、西行は新古今に判者をうらむるには、此の三仙は上手下手の論にはあらで、三人よればその中に師ありといへる、孔子に學文のをしへかならん。すべては儒佛老莊より、詩歌連俳を學ばんにも、昔の楊子雲が腸をしりて、今の楊子雲が眼をひらかば、萬卷の表を尋ね廻らんよりは、一字の裏に針ほどの穴ありて、三皇五帝もそこより見すかし、五神七佛もそこよりしりつくして、儒佛の家の心根をさぐり、詩歌の人の顏觧をも見つべし。しかれば此の論は目の前に古人をならべて、博く學ぶと博くしるとの、物に損得の詮議なれば、二論は學問の商ひかと笑ふべし。

狂云く、此の二論は本より一篇の趣意なるを、張子厚が東西の銘に效ひて、東西二筆の號を出せり。されば前言には、唐天竺の博學を擧げて拈華乘桴も其の意を知らば、儒佛の言語は何か暗からんと。但し蘭陀寺と云ひ龍宮城と云へるは、博學を嘲ける狂語ながら、江師の希有をも取り合はせたり。然れば其の人をば白猿と云ひ、其の我をば岩猿と云へる、例に誹語の筆格より虛實の所を見るべきなり。後言は和漢の風流を合はせて古人の心腸を知りたると、古人の言語を學びたるとの損益の關を云へるなり。されば杜律に秋興の詩は、鸚鵡啄餘の香稻粒、鳳凰棲老の碧梧枝と其の語を直に云ふ時は、枝字は支脂の韻字なれば働きなくとも堪忍すべし。前に香稻の粒と云ふ時は、決して粒字を死字と云ふべし。次に朝康が白露も秋の野に風の吹きしく白露はと、上を下に置く時は、

白露は纔かに一粒二粒ならん。然るを上下に顛倒して風の吹きしく秋の野はと、白露を上に遊ばせたれば、其の野は露の置き亂れて、萩も薄も見るやうならん。然れば死活多少の四字を以て、無盡の詩歌を註し出せる筆力の神には驚くべし。況んや西行と赤人の詠は、撰集も同じく判者も同じきに、兩人の喜怒の各別なる、爰に三仙の本情に違ふまじくば、拈華乘桴の意とても、千歳を今に見透さざらんや。二論は總て所以の二字を註して、儒佛兩道の至論なるに、商の一字に文章を散らして、見る人の理窟をほどきたる、虚實の文鑑とは爰の事なり。

解類

念佛解　法然上人

世に一念十念にて往生すといへばとて、念佛を麁相に申すは、信が行をさまたぐるなり。念々捨てざるものといへばとて、一念十念を不定とおもふは、行が信をさまたぐるなり。信ぜば一念に生となりて、行をば一かたはげむべし。一念を不定と思ふは、念々の念佛ごとに不信の念佛になるなり。其の故は阿彌陀佛は、一念に一度の往生をあておき給へば、念々に往生の業となるなり。

狂云く、此の文は一言芳談にも在りて、これとは少し相違あり。されば此の段は決定の二字を解せんとて、信行一致の念佛を示し給へるが、誠に一念に一度の往生とは淨土宗門の專要にして、十念一念の直說なるべし。

九品ノ解竝序　是佛房

越に直江津の過角は、其の父の業をつぎて、風雅に深切のをのこなるが、ことしは亡父の遠忌をつとむるに、供佛施僧の善をつみ、詩歌誹諧の手向をなす。中にも誹諧宗門の人は、九品の位に四季の題をわけて、その日の佛をなぐさめ奉るに、是佛房を釋文の師とはなせり。

上位

花　　時鳥

月　　雪

釋に曰く、佛説蓮華經の趣には、極樂に九品の差別ありて、先づは娑婆界の座敷論にも似たらん。譬へば上品には無念無想の人を置き、下品には分別理窟の者を置きて、中品は有無の境目なりと知るべし。然れば月雪花時鳥は四季の無念想よりそなはりて、佛菩薩は花鳥の園林に遊び、聲聞緣覺に飛花落葉の觀念をこらす。此の故に佛家の法に任せて極樂の上品には置きたれど、誹諧の家には乞食の箱椀と名づけて、喰はず飲まずの至りくらべと云ふべし。

中品

比丘　　比丘尼

優婆塞　　優婆夷

釋に曰く、世に四衆の供養とは、一家一門も袴を著して箱佛の光に蠟燭を耀かし、手作の初瓜初茄子も今日の佛にと奉りたるは世界の人心の中分と云ふべし。爾の時に比丘比丘尼優婆塞優婆

夷は、朱椀朱折敷に居並びて蒟蒻の白和に目を悦ばしめ、燒豆腐の芥子に涙を零して勸むる功德は共に成佛と譽むるなるべし。されど釋迦佛は有相の追善と說き給へば、達磨は一向に無功德ともこなされしが、誹諧宗には此等の献立を御齋料理と名づけて、如何にも中分の振舞なるべし。

下品

團子　新茶

蓮飯　餅搗

釋に曰く、十王の勸めも喰はうが爲とは賤男の諺ながら、佛の五千餘卷とても此の道理には過ぎざらん。されば極樂々々と云へど喰はずば何を極樂にせん。喰うて極樂と寢て極樂となり、春は花よりも團子と說かせられ、夏は時鳥の一聲も新茶の寐覺こそ可笑しけれ。然も魂祭には心安き佛達なれば、三日は喰うたり飲うだりにて、指して寐樂とは願はずかし。殊に蓮飯は其の匂ひをほめて、末々の佛は箸にも及ばず、手凹するも亦極樂なり。餅搗の比は亡き人の來る夜とて魂祭る業も都にはなきを、越後のかには猶する事とて、三日目の好き所を小豆と云ふ物附けたらんは、彼の赤鬼も心やはらぎて聖靈の爲あしかれとは思ふまじ。然るを佛家の法に任せて極樂の下品には置きたれど、誹諧の家には上品の馳走と云ひて、願はくは此の四題の中に酒と煮染もあらばと思ふは、釋文の御房の僻事ならんか。

狂云く、此の篇は今々虚無ながら、十二題の註釋は、有の目と云ふべきなり。されば九品の次第を分つて、或は上品と下品とを云ひて、中品は有無の二字に互照せる、或は朱椀朱折敷を經文の品勢に書かせたる、或は下品の四題をば逐一に註釋して、一々に樂の字を寄せたる、或は歳暮の靈祭に徒然師の詞を借つて越後の方と取りなしたる、況んや結品の狂言なる、皆々誹諧の筆法より出でて、虚實は水上の胡盧を轉ずるに似てん。但し是佛坊は先師の別號なり。

養生主ノ解

東　華　坊

むかしより我が朝に三世相といふ物ありて、人に魂なしといふ人なし。されど月夜の提灯に行きあたり、鼎の蔓摺る音を神鳴かと思へる、それは魂のあらずといふにはあらず、あれどもなきが如くなれば、これをどこでか生きて居る人といふなり。あるは人ありて和漢の才に達し、絲竹の遊びはまたいふべからず、扇てんがう枕まはふなど、あの器用には及ばずとほむれど、身さらに酒色の間に狎れて、終に天命をたもつことなし。あるは醉寐の枕をはづして、冷水の夢に苦しみ、あるは屆勞の腐にむかひて、冬の蠅の行くへを觀ず。世ははた利くて短からんにか、人はいさ鈍くて長からんにか。されどこれらのこゝろひをば、聖人も遠慮して論ぜず。しかるを本朝の長者經には、人の利鈍をもて富の金にたとふ。つかへば巾著の腹をくだし、つかはねば解毒の光にも及ばずと。爰につかふとつかはざるとのさかひをば聖人も遠慮して論ぜず。誠に論ぜざるにはあらずして、金銀の味はしらざらん

もしらず。我はた試みにこれを論ぜば、つかふべく〳〵してつかはざらんには、鬼神もそれが臺所につくばひ、つかはずしてよくつかふには、昔王もそれが千代を祈らん。まして聖人君子の名に遊ぶ人は、その推人の仰せにしたがはざらんや。さも〳〵人間世界にあそびて、これらの鹽梅をしらざれば、釋迦も須達が疝氣をさすり、孔子も季孫の髭の塵を拂ふべし。此の名を我が朝には急度馬鹿といへる、さるは秦書の故事ながら、爰には萬葉假名なるべし。されば曾我家の遺訓には、四百四病の苦しさより、貧ほどつらきものもなしとは、金をつかうて見ぬ人のいへるにして、つかうて後の苦しさをばしらざらん。兎角に人間の病根を論ずれば、金をつかふとつかはぬとの二なり。おかしも叡山の東坂に、猿を飼ふ翁ありて、年あり、彼が嗜好物を記し、彼が病根を論じて、猿書三卷をあらはせり。其の書の見脈の下にいへる、凡そ人には左性ありて、猿には心臟の火なければ、日日の忙がしく、手足の隙なきをもて、これをもて彼が火となせり。世にいふ彼が毛の三筋たらざるより、人にはえならずといふ說は、其のいふ人の醫道に暗ければならし。彼たゞ物に愁へ物に感じて、木陰岩端に休らひて、つくづくとかしこまる時は、彼が病のおこる時なりとしるべし。愚翁かつて此の病をかうがひ侍るに、藥はその香をかぎて喰らはず、灸はその疵をやみて害あり。ある時粟の穗をとりて、ちよつ〳〵と彼がつらを撫づるに、怒れる色ありて、その面にあらはる。その病の立ち所にいゆる事あり。それより

朝三のいかりに狂はしめ、暮四のよろこびにあそばしめて、彼を自在につかふ事は、掌の弾子を愛するに異ならず。そはよし彼が本情をしればなり。しかるを許己が十六種の、伯仁が十四經のと、むつかしき書案を書き並べ、儒書には浩然の氣を養ふの、天命をまつのとまはり遠なるは、これを日本の詞には、猿の星まぶるといふなりと。猿書は誠に我が朝の神秘なるべし。さらば世の人の生を養ふことも、此の書の大概によらざらんや。人のよろこぶも氣の藥ならば、人のいかるも氣の藥にして、喜怒はその時のよろしきにしたがへば、世はよし親の子をしかるに似て、親の心はたゞいさゝかならんや。さるを儒佛の補藥をねぶりて、我はいからずよろこばずなどいはば、あゝ殆いかな。あほうの部に入らん事を。

狂云、此の解に曰く、莊子にして、莊子よりも可笑しき處あり。さるは世間の童ならしき、長者經の作調なしき遺詞には、金銀の無用をあかし、猿書は喜怒の二字を解す。或は何所でか生きて居る人と云ひ、或は急度馬鹿に自註を下せる、或は猿の星守など、總ては莊子が文法より出で、其の情は齊諧志と云ひ、通天の別とも常の懸解とも、皆々我が言を以て古語となせり。況んや聖人君子を嘲りて、推人の二字を形容せる、推は通なり明らかなりと、我が家の字訓を加ふべし。或は唐宋に蟲勞の對は、此の篇の中の風流なから、鬼神に背きは詩語の常語にして、釋迦孔子の對は莊子が適當なり。しかるを解毒に消置きて、壺步の光に喩へたる、文章の上の奇絕にして、棗の聽の作意は神護と云ふべし。但し此の篇は莊子が養生主をもどきて、我が朝の文章の鼓舞をなせる、和

漢の通用を見咎むべし。此の故に荘子が、殆の字を以て人間第一の結語となせる、此等に先師の文筆を備して、此等に先師の虚實を知るべし。但し此等の筆格より虚實を謬る人も亦有るべし。

地黄煎解　闇　左　角

いにしへの捜神書に、地黄煎といふ物ありて、その形は混沌の始めに反り、その味は醍醐の中におどろく。佛はこれをねりて一切衆生にねぶらしめ、神はこれをやはらげてあきつ島山をつくり給ふ。されど其の性は麥のもやしにして、百錬千鍛の錯となれるよし、本は帝釋の秘方なりとぞ。それより藥師は瑠璃の壺にとゝのへ、こゝにも神農は脾胃の藏にたくはふ。しかれば其の功は本草を始めとして、和漢の諸抄に論あれども、あつたに此の物のあまみをほめて、喰はする人の心をばしらざらん。おもふに片岡山の乞食の歌も、飯ならず飯にしもあらざれば、彼のもろこしの三藏の、人の國にやせおとろへ、故郷の食を願ひ給へるも、實は地黄煎の事ならんを、これらに作者の不機轉はしらるべし。さてこそ雍州の石門に張れば、公侯の位にものぼらせ、疱瘡の神をなだむれば、湯の尾の孫嫡子もいらず。まして鳥羽院のをさな事に、ふれ〳〵粉雪のたはぶれも、御片手(おほんかたて)には飴の嬉しさならんか。さるを此の比の人の覺えたがひて、覗きからくりのあしらひと思ひ、古鐵貫ひの煙管(きせる)の鴈首にかふるも、本より富貴にほこらざれば、今はた貧賤をうらむる色なし。つら〳〵榮辱のさかひを思ふに、春はさ

くら餡の名によばれ、秋は紅葉の色にめでしら、千織萬繡のしとねを出でて、竹の皮一枚に包まれ、五味八珍の膳をはなれて、おこし米の相手となる。されど世界の分別くさき、赤髭のおやぢにはきらはれて、無念無想の童部とあそぶならん。たまたま老菓子がみやげとなりしも、子として親をたのまばしめんには、たとへ大江山の鬼神も、師走の果ての掛乞も、これをなだむるにしくはなからん。

狂云く、此の書は和漢の諸抄を引きて儒佛の教へを前に喩へたる、殊には解の體と云ふべし。さるに混沌の二字に形容して幾多の故事古語を用ゐたる、實に其の書に其の事ありとと驚くべし。されば冬好の狂詩より或は花紅葉の風流なる、或は鬼神に掛乞を對して結語は世上の混和を云へる、誠に誹諧の筆格を傳へ、識に文法の虚實を知りて、蕉門に作者ありと云ふべし。但し左角は相場(あひば)氏にして佐渡の國に往返す。素生は江東の人なりとぞ。

傳類

正直房ノ傳　西行上人

みのの國と聞きしやらん、中比その國に、あやしの僧の甲をあぐりて、人にそれぞれいふ侍りけり。いみじく心ばへわりなくて、何事にも心得たりければ、人々我も〳〵とあらそひやとひ侍りけり。二三日づゝなむつかへけり。わざとひとつ所にはひさしく居ずと侍りける。こゝろだてのいふべきかた

たくすなほに侍りければ、正直房と名付けてよぶ人もあり。直心坊とたわいふ人も侍るとかや。其の里にめぐりつかふるわざ五とせばかりをへて、かきけち見えずなりにければ、誰々もあやしみしのびあひて、たまねく尋ねけるに、ある山の麓に、西にむかひてうるはしく坐して、手をあはせていきたえ侍りぬ。そばなる木にかく書きたり。保延二年十月十五日、もゝすおりゆがみ房、まがれるながら往生しぬと、めでたき手にて書きたり。あまりにかなしくたふとくて、其の國の人々、皆ちからを合はせて、いささかもたがはず、形體をうつし寫しとどめて置き奉り侍り。その姿は髪など長くして、帷子といふに檜笠といふ物をし著給へるなりと、かたり侍りしを聞くに、隨喜の涙せきかねて侍りき。

評曰、此の傳は撰集抄に依りて、殊に世の人の見覺えたれど、先づは我が國の隱逸を稱すべく、次に藤六坊の傳を合はすべきなり。されば和漢の往生傳を思ふに、紫雲天華は經者の模樣にして、坐脱立忘は禪家の寛濶ならん。偶(たまたま)此の集にこの御房ありて曲れるながら往生すとは、誠に我が家の祖師とも仰ぐべく、誠に誹諧の風格とも讃すべし。されば西行上人は、和歌には眞俗の風情を盡し、文章には虚實の自在を得て、最も我が黨の稱すべきは歌人に此の僧一人ならんか。

藤六坊傳

谷　馬　岐

みのの國に岩佐(いはさ)といへる山里あり。そこに住みける法師ありて、その名を藤六坊といふ。そのかた

ちは狂人に似て、破れたる衣ひとへを纏ひ、ある時は傀儡をまはし、ある時は鉢の子をたづさへて、さのみ家々門々をありきて、その日の糧を求むるにもあらず。五錢七錢の價あれば、酒はやしの門にゑひふして、一休のよめる極樂も、愛の事とは思ふなるべし。しかれば西行の人日をも思はず、淵明がかへり見る家もなくて、さむれば野にもあそび山にも狂ふ。ある時は彼が侍をかさねて、螺貝の眞似を吹きならせば、近里遠鄕にひゞきわたりて、そよや藤六坊が吹きて來たと、市の子どもらにはやされて、生涯さらに一藝の名とはなりぬ。ある日は祭のねり物に先だちて、杖のさきに鉢の子をさしあげ、おのが十德をそれに著せて、はゞかる色もなくねりあるけば、增賀ひじりのかの鮭よりも、名聞の外の一興ならん。ある人此の坊に宿かして、此の世のはかなきなどいひ出づるついでに、我もさばかりは狂ひありけども、その人を教誨せし詞をきけば、ひたすら酒狂の法師にもあらで、ありがた心をもつゝむらんと、今さら此の名をぞ傳へ侍る。

狂云く、此の傳の法師は、凡骨を離れて世の眼力にはおよばざらん。されば唐の傳燈錄にも、本朝の隱逸傳にも、此の如き狂僧ありて、或は賢人とも狂人とも傳寫の襃貶に依るべきなり。誠に孔子の春秋は百世に恐るべき筆法なるをや。或は淵明と西行とは、和漢の風人を取り合はせ、或は一休と增賀とは爰に狂僧の類ならん。然るを敎導の二字に依らば、尤も市中の大隱とも稱すべし。但し作者は各務氏にして、美濃の山縣の產なり。

白狂傳　東華坊

白狂は生處たしかならず。世に或は狐の子なりともいふなり。今は十とせにも過ぎぬらん、安の山寺の物寂しく、紅葉ちりしく秋の末にか、年のほど六つ許りなる童部の、夕日に蜻蛉をおひあるき、鐘樓のほとりの木がくれに、何心なくてあそび居けるを、そこの和尚もあやしとは見給ひながら、物のよくせのあればこそあれ、よろづに見すてがたくあはれがりて、かくはおほしたて給へりとぞ。年へて物よみ手ならふに、おのづから十知の才ありて、殊に聯句にたくみなる事、玉をくだき錦をさきて、さらに韓愈が風骨を得たり。亦その餘力ある時は、東華坊が誹諧をまなびて、その口質の似たる事は、我よく彼が誹諧に似て、彼は我よりも無分別の所あり。さるは日々の變化ありて、變化は人をまたざる故なり。今年は獅子庵に誹諧の籍をさだむるに、年いまだ馬岐東羽にも及ばざれど、右軸六之が下にたたん事かたく、野航が才能にもやゝ爭ふべし。今はた我が道の門人たらんか、汝に白狂の二字を與へん。今はた我が家の兄弟たらんか、汝に渡部の二字をつたへん。これは我が家の別姓ながら、汝が角髪の時におひて、その骨柄にも似たらんといふに、さはや誇れる色ありて、今より渡部の狂とぞ名乘りける。汝よし渡部の二字をしりて、家名は世々に傳ふべくとも、汝におこる狂の一字をしらざらんには。さりや釋尊は佛法に狂ひ、孔子は儒法に狂ひ給へど、遊戯自在にして歸る道を忘れ

す。荘周はちと狂ひ過して、その世の人にはにくまれたるよし。されど狂ふ事を得ざる人は、その狂ふ人をにくめるなるべし。詩人は詩に狂ひ、歌人は歌に狂ふ。李白も酒には狂ひ過ぎて、水におぼれたるをも亦見るべし。誠や我に狂ふ者は名利の欲なるべく、人に狂ふものは淫酒の惑ひならんに、世はたゞ此の二つをしるにはしかず。匏土革木の八門の中にも、尺八に吹かれては虚無僧となり、三線に乗せられては傾城買ひとなる。これらは天人の音楽にたとへて、人間最上のあそびとはいへど、五褒の道理をしらざるには、十錢の辻にも狂ふべからず。扨こそ過ぐるものは、宮古の太鼓とよばれ、及ばざるものは田舎の野父といはる。世はたゞ過不及をしるにはしかず。我はよ人間の是非に狂ふ事すでに三十餘年にして、今は老狂すともいふべし。ことしは老の名をかくして、此の山里にむとくの入道とならば、かならず人ありて我が名を尋ぬべし。汝よく風雅の門人たらんには、そもや我が名をはづかしむる事なかれ。我さらば汝に文章をゆるすべし。誹諧は未だ半ばならずといはん。さるは文章の古今に通用すべく、誹諧は日々の機變なればなり。狂よその理はこゝに通ずべくとも、その事はつとめてしるにしかざらん。そもそも誹諧は狂字にはじまりて、しかも狂字にをはれども、遊びて忘れず狂うてこぼさずとは、阿翁の遺せる金言にして、正に芭蕉門の一脈なり。汝こゝに此の心を傳へて、蕉門に三世の正統ならば、釋門に三世の阿難ありて、佛法の式の定まりたるをもしるべし。そは

よし狂の不狂なからんをや。況んや白の一字をもしめて、狂ふに七化の裝束を求めず、飾るに一言の輕箔を置かざらんには、爰に黄山の白狂ありてと、天下の人にしらるべくは、汝は我が家の眞褒を失はず、我は汝達が面目を思はざらんや。さて此の傳の一字を下して、直指の傳といふべきには、斷の文においては汝がむべなるべし。

狂云く、此の傳は班固が論贊にも似たらん。されば此の讃に名利と淫酒を分けて、我に狂ふと人に狂ふとは、儒佛にも論ぜざる所にして、誠に我が家の方言と云ふべし。或は人間の哀樂を對して、虚なれば忽ちに實を云ひ、實なれば却つて虚を云へる、何對字對の自在を得すべし。但し尺八に三線とは、本よりゑみむかの適的にて、頓と頓との和品を知るべし。或は文章の法格を免せども、誹諧の機轉を亡さざるは、古今に誹諧の要言にして、前にも變化の人を待たずと云へる、首尾の文法を見るべきなり。まして俳諧の事理を云へる、爰に師恩の澤を忒ふべし。或は釋門に同業とは、此の傳の中の骨節にして、白狂の二字も狂の一字も、急に眉毛を拂つて看破すべし。但し黄山は先師の別莊にして、白狂が學文所なり。

記類

枕ノ記　貞室

敷妙の枕は牀蓑の臥具にして、老少男女のいをを安からしめ、勞をたすけ閑をそふる寶器なれど、人

つねに目なれて、此の德の本意を知らず。もろこしの人もこれをいみじと思へるにや、香木をもてけだものの形を刻み、玉を磨き珠璫をのべて、あしき夢をもさけ侍る。此の國の歌人のよみ置き侍りしも猶こあたし。中器されば我が枕はこれらの品にはあらで、みづから老いの末に二つの枕を求めて、座の左右にして愛する事あり。一つは桑の木の圓枕なれば、その形によせてお玉と名づけ、今一つは滑らかなる石なれば、やがてお岩といふ。昔近くありしまつは世し少女の、それが名をかれるものなり。玉といひしはむつ／＼と肥えて、情のよべらかなりしかば、をさなき比より傍にふさせ侍りし新手枕も忘れ難し。岩はよな／＼あとさきせつるに、踵のあらえしくて、あかゞりのむつかしかりければ、思ひなぞらへていふなるべし。宋司馬文公が圓枕は學窗にまろばし、長き眠りのさめ易くして、讀書にたゆみなからしめんが爲に、孫楚が流れを枕せしは、耳を洗はんが爲とかや。下官が愛するはさるゆゑにあらで、桑は中風を防ぎ、石は頭熱をさまさんとなり。唯よく生を養ふ便りなれば、あに、たゞらぶしといはんや。或日ひとりの友來りて、此の二枕をあやしみて、猿のいぶりやもたりけんと笑ふに、此の記をかきてその人に答ふるのみ。

矩云、此の記は世々に傳寫して烏馬の誤りも有るべきか。されど此の老人は詩譜の中興にして、芳野山に花を詠じ、隅田川に鳥を吟ず。當時正風の祖といふべし。然るに二女の名に寄せて、方圓の枕を形容せる老いの寐

悲の辛苦なれ、猿のつぶりの結晶に到りて、虚實自在と稱すべし。但し此の卷は晩年に是非を知れるか、自己の舊冊をば燒き捨てけるとぞ。

白鷗堂記

森　百丸

一堂あり。白鷗をもて名となせるは、四方しら壁にあらざれども、そのすまひおのづから清潔にして、世を忘れて閑かに眠り、心を養はん事を思へばなり。いでやそのあらため築くに、竹をたのまず木をやとはず　まして軒端に瓦石のおほふ便りなければ、垣ねに荊棘の恐るゝ事あらず。爰に惜先生の惠みを得て、四十八枚の願ひにみち、一丈四方の樂しみをしる。然れば他人の助力をもまたず、自身の分別をもつひやさずといふべし。これを卷く時は尺寸にをさまり、これを舒ぶる時は乾坤にわたる。されど團扇の風を得てなれぬ。しかも樂窓がまつ心にはあらざらん。さりとてあながちに隱れのがれて、山谿の幽棲を求むるにはあらで、市聲を遠ざけ紅塵を隔つるに、晝もまた夜の心に似て、暮山の雨のむかしぞ思はるゝ。朝には西行上人の、汲みほすほどもなきすまひと聞きし、よしのの奥もなつかしく、夕には寂蓮法師の、身の程隱す夕顔の宿とよめる、旅寢なればと思ひあはすべし。折ふし寂しくあぢきなき時は、孤燈に書をあつめて古人にともなふ。夜座ひさしくして眠り來れば、おのおの紙魚のすみかにかへらしむ。その來れるをよろこべども、その別るゝをうらむる事なし。さるを人

ありて此のすまひを難じて、老狂さらに何をかなせるや。そも月雪は見るに榮えありて、戸をとざせる人の爲によそほはずと。誠に花上に褌をさらし、清泉に足を洗ふ、殺風景のたぐひならでも、かくいへば永く花鳥にそむきて、世をさみする人と見ゆらん。春は鶯の朝ごとに、朝寢をかこつらんもゆかしく、時鳥の初音は夢ながらも待つべし。さて初秋の凉しげなる比は、荻すゝきのおとづれも愛にかよひて、冬はあらし木枯の寒さをも防ぐ。いかに世にある人の、錦繡に風をにくみて此の一帳のたのしみをしらざるや。況んや夏の夜の蚊を凌ぐ便りならば、阿房の三百里に鐵網をはるとも、此の方丈に入りて身をかくすにはしかざらん。これたゞ白鷗堂の結構なるなり。庭は時を得て梅さくらにはじまり、藤山吹に春の夕日を殘し、卯の花月夜にもてなされては、更に無垢世界の清凉をうらやまず。花橘は名にこそたてれ、誰もむかしの戀しからぬかは。いへば佛のたちそひて、心まどひもしつべきや。我はあからさまに在岡をたちはなれて、影を洛陽の片ほとりによせしも、おほやけにはあまりぬらん。誰かいふ歡情は年々に薄く、閑思は日々に添ひぬと。誠や人に交はれば、酒盛の辭義にこまり、戲笑に倦みては、早く歸らん事を思ふ。何のつもりにてか老いとはなるらん。穩かになぶり安く坐して、一堂の外に求むる事なからんは、これを人間の極樂城とは知りぬ。或は軒近きあたりに、秋海棠を植ゑて、徐熙が畫帖を思ひやり、籬に菊を移しては、陶潛が高臥をなつかしむ。花もその名

の秀でたるは、世にひとしくともなふに似たれば、たゞおのがまゝなるぞ、目やすくにはひも深からん。つら／＼浮世の變化を思ふに、翼を比ぶべき人も思ひの外になり行く、心の友とする人も、多くはなき人となりて、殘れるもやをらふたりみたりには過ぎざらん。きのふ鳥部山の煙を餘所に見て、けふは飛鳥川に老いの波たちぬ。いでそよ我もその數にいらんとすらん。世に朝顏のなどやはかなからん、人去りてふたたび榮を見ず。生涯さらに寸陰をなしまざらんや。やゝ神無月の定めなきそらには、野山の色も露霜にあせて、詠めはわづか蕗石山茶花に殘れり。こゝに水仙は誰が魂を吹き出づらん。一たび花の笑ひを買ふ人は、かならず城をもかたぶけてん。老夫も誠に帳中にまねきて、花の爲に心をなやまさずしもあらず。その夜は埋火に炭さしそへ、雪を煮て茶をあまなひ、紙をたゝいて鷄卵を醸す。屢年の過ぐる事をしらねば、別に天地の春を迎ふるかとあやし。時にその醉ひを枕として榮華の夢にあそぶに、一人の桑門來りて曰く、汝が此の記の述ぶる所は、何ぞ長明が俤をぬすめるや。其の世遙かに、其の事は異なりといへども、その趣は等しくして、その詞はつたなしといはむ。されば其の恥は汝に留まりて、その譽れは長明にのこらんと。老夫笑ひて答ふ。欺くべからず。我はた此の記のいふ所は、七堂伽藍に似たれども、畢竟は一張の紙帳なり。長明が思案は誠に輕けれど、大工木挽の指圖をまぬかれず。我はその糊を袖にし、その篦を腰にさせば、嵯峨野の露を拂ひては、

乞食とも薦(こも)をかたしき、大内山の月にあそびては、宮女とも枕をならぶべし。彼は方丈の記をはあられて、持ちありく時の自由ならざらんよりは、われは白鷗の名を笑はれて、引畳む所の自在ならんには、むかしは宋玉が賦に巫山の神女を感ぜしめ、今は老夫が記に水仙の魂を動かすべきに、御坊はなどか爰に来れるやと、夢中の桑門を詭破して、慥かに我(が)ををらせたりとおぼゆ。

狂云く、此の記は殊に虚實を得て、誠に和歌の閑儀より、真に誹諧の鼓舞あり。されば白鷗の二字を以て一篇の紙帳を形容せる、始めは楷先生の三字に仄(ほの)かし、終りは紙帳の二字に顕はる。此等を蔵頭の格とや云ふべき。或は一篇の文章に、兩所に四季の花鳥を云へる、前は閨戸の二字を陳ずるより紙帳に四季の風流を寄せて、況んや夏の夜と夏を畳ねたる文に文中の文ありと云ふべし。後は空の一字より樓閣の四季を云へる、總ては堂中と堂外とに兩様の花鳥を書き分けて、前には四季の情を云ひ、後には四季の姿を云へる、兩處の用を見るべきなり。殊には四季の結語として春を迎ふると書き捨て、四季の次第の行き詰らざる、但し文章の一體ならん。或は禁宮が待心とは、莊子の逍遙に、待の一字を借りて團扇(うちは)の具を書きなせるより、和漢に古詩を摘み古歌を探りて、上下餘員の故事を用ゐたる、讀人は容易に看過すべからず。然れば此の記の結文は、黄老が水仙の魂を招きて美色の戯れを書きなせるに、前に翼を比ぶべきとも、それが傍の立ち添ひたるとも、愛別の情を含めたる、作者に一節の意ありて昔を思はざる人ならんや。此の故に其の夜と云ふより楚王の遊びに美酒佳肴を設けて水仙の来臨を待つ趣に、思ひも寄らぬ法師を出して、方丈記の筆陣を顕はし、高唐賦の虚實に效ふ。愛を時節の筆格として、詩歌の文法を盡せりと稱すべし。但し作者は攝の伊丹に産して、森氏の隠者なり。前の有岡も伊丹の別號とぞ。

獅子庵記　　東華坊

獅子庵の三字は、いづれの意ありて、いづれの所にありといふ事をしらず。しからば莊周が世をすみしたる何有の郷のほとりにやあらん。或は栴檀の林に隱れて、勇猛の位をふるはんとにもあらず。或は牡丹の花にあそびて、風流の名をかざらんとにもあらず。本より三界を家として、雨の日風の夜の心をよするのみならん。むかしはいせの國にありて、かの草庵の夜の雨に、山田がはらの時鳥を聞き捨てしが、吾妻にさまよひては、葛の松原の跡をたづね、筑紫にやみては、生の松原の陰を頼む。越路は十とせの春秋になれて、そこの獅子庵と人はいふなり。されど都は年々に行きかへりて、心に住むべくも覺えずや。實には水草の流れも遠く、塵の交らひならんをや。まして武城のいそがしさ、竹に雀のねぐらもさだめざれば、獅子に牡丹のすみかも求めがたし。佛もこれを世の火宅なれば、心とすなとは說き給へど、雪のふる夜は寒くこそと、圓位法師はやはらげ給へり。さはや古里にも一把の獅子庵ありて、人間の是非に飽く時は、此の世の外の遁げ所ならん。庭には十五株の松を植ゑて、一琴一鶴の所帶より、世にぬすむ人のほしがる物もおぼえず。往く日は淵明が戸をささず、還る時は陳蕃が帚をとらず。爰も旅ねの心地ならば、かしこも古郷の心地ならん。されど父母の名殘とて、そなたにおとなしき甥もあれば、こなたにいわけなき姪もありて、正月の鏡に老いを祝はれたるも、節供

の物著て見せに來る日も、さながら餘所の國にありて、餘所の子をほむるには似ざらん。それもその親はあの嫁をにくみて、此の母はその子のわづらひてなど、聞きすて見やりがたきなりふしは、亦ただ餘所の國にありて、餘所の人をとふには似ざらん。しかれば一所不住にして、身はやすからぬものとならば、世はあに心をやるにしかざらん。むかし維摩は方丈の住居ながら、客のある日は八萬の獅子座を置けるよし。そは勝立のかすもむつかしからん。我は天下にいくつの獅子庵かありて、ある日は客となり、ある日は亭主となる。たとへば無數の國土ありて、無數の蓮花を生ずれば、無數の佛を見るがごとく、一庵さらに一東花なるべし。こゝにも日野山の長明は、方丈の記に我が身を置きて、そこを極樂と思ひなせる。いはばその庵にその長明のみならん。さりとて天を屋ねと高ぶり、地を板敷とふみなせる、莊老の家のそら言にもあらで、天下に獅子庵の名を定めたるは、實に四所か五所はあるべし。

狂云、此の記に故事古語を用ゐる事總ては二十四五員ありて、種々の文格はありながら、先づは頓挫の法と云ふべし。本より一篇の句對字對は例の先師の筆格なれど、竹に雀の潤文に至りて、見る者は愛に絶倒すべし。然れば佛の火宅を云ひなぶる、心とむなとは、西行の詞に寄せて其の次の二句を云ひなせる、これを優閑の法と見るべし。或は栴檀の獅子に禪錄を用ゐ、或は無數の蓮花に佛經を出せる、但し一東花は、東坡が詞より天地一東坡の嘗ならん。されば此の篇の骨節は、中間に古郷の獅子庵を記して、哀樂の二情を書きなせる、此等を虚實

の文鑑と云ひて、誠に千視萬聽に飽かざらん。

往來ノ松ノ記

江　北　房

みのゝ國加納の城の西に一本の松ありて、その里を本庄といひ、そこの宮を月戸といふ。その木は一株數幹にして、龍蛇の屈曲をなさざれば、千歳さらにわかやかなるべし。しかるに此の名を往來の松といへるは、故城主光永公の風流にあひて、文官武將の吟詠をとゞめ、歌人詩僧の口號をあつむるに、今はた八ちよの名をさだめて、武洛に往來の松とはいふなり。さて春の日艶なるそらには、名におふ桃さくらも咲きあひて、夕日の影は遙かなれど、こなたに桃李のこゝろもありて、宗祇の梅のかゞ島や、その香はこゝにもちかかるべし。まして秋の夜の月を待てば、鮎田の川も中に流れて、東は稲葉の峯におふる松も相生のちぎりなるや。西は伊吹の山につゞく高根々々をつたひ來て、さよ初雪も爰に見つべし。北は江口の川浪や、乙津のわたりの夜をこめて、かの時鳥も啼き渡れば、顧況が庭の松にはあらで、これは往來の松の陰に、いく旅人の思ひをかとゞむらん。しからば此の松に四季の風情をあつめて、昔がたりとせのためしより、あまの羽衣まれにきて、かかる風雅の名を得たれば、その數ならぬみのゝ御山の、松も此の松をうらやむなるべし。

狂云く、此の記は賦にして記の體なり。されば數箇の名所の中にも、宗祇の梅は鏡島の乙津寺に發句ありて、

智通の社稷は西の京の立政寺に名を殘せり。或は江口乙津などは天文の比の古戰場にして、伊吹稻葉は當國の名勝なり。然るに遠寺の櫻花を桃李の錢に云ひ寄せたる、定家卿の白雲を曼の初雪に紛へたる、殊に賈島が子規の詩より往來の貴人の情を述べたる、總ては和漢の故事古語を用ゐるに運用自在の文筆と稱すべし。然るを結語は我が國の名松を借りて當面の松を讃めなせる、此等を不具の詩論とは云ふべし。

六花亭ノ記

西華坊

此の亭の名を六花といふ事は、島田に雪のけしきをほめて、時雨の亭に對したる名ならん。されば黄門の眞似なれば、おそれおほき事ならんと、亭のあるじはいふなれど、などや誹諧をまて和歌をあさむかざらん。譬へば、禪法の佛經より出でて、念佛を笑ふものは禪法なれば、誹諧もその和歌より出でて、連歌を笑ふものは誹諧なり。此の故に青は藍より出でて青く、冰は水より出でてすさまじ。しからば雪の時雨より出でて、時雨よりも面白からんやと、例に誹諧の無分別を出して、六花の趣を定むるに、亭のあるじも愛に心とけぬ。さて此のあるじは盡古にして、年いまだ若かりければ、その分別は西華坊より出でて、彼は西華坊よりも中々富貴なるものなり。

評云く、此の記は例の筆格なから、無心所著の體とも云はんか。但し六花は雪の異名なりとぞ。されば六花の二字より起りて、時雨の二字に對したる、教訓はそれが次へにして、連歌と誹諧を爭ふに似たれど、畢竟は雪の

雨に勝れりと稱して、貧富の勝劣は文章の虛實なり。但し此の亭は備前の下津井に在りて、藍吉は其の主の山名なり

第六卷

序跋類

其袋序　　嵐雪

なにくれとして天の袋あり。あらゆるこれが入れ物なり。人にお袋といふは母の稱なるが、筆とらず物見ずとて、父に追はれておそろしき、こらし袋のからきめ見しも、いつに忘れて底なし袋の、口も結ばずぞなりすたれにたる。論袋は清輔の名たゝるにはあらず、我ぞつきありきぬ。武士に番袋あり。有職に火袋あり。首にかけたる袋には、いかなるものを入れたるぞ。詩の嚢とかや、春由暮月も李賀が嚢に重し。歌の袋は光廣のひきずり袋、それも荷重かりけむ。篤憲が袋を被らんとすれば、息くずもりてむつかし。爰に其の袋や、花の凋みたる、月の缺けたる、かつ／＼拾ひ集めて、我が家の秘藏袋とす。蘭にもきせず、猫にも被らせず、元祿三年かのえ午のみな月日に、嵐雪自ら序す。

狂云く、此の序は比にして賦の體なり。されば御袋の二字を以て誹諧の筆格をなせるより、和漢に是非の袋を云へる、試みに詩歌連誹のみならんや。結語は秘藏の二字を置きて蘭と猫との虛在なる、例に文章の虛實を傳へて、武城に其角嵐雪在りとは、蕉門人の常語なるをと。

東山萬句ノ序

山　素　堂

ことしは芭蕉翁の十三回忌にあたりて、歸花をきゝけんより、時の花になみだを注がんとにや。神無月の彌生にちゞめて、洛の雙林寺にて萬句供養のよし、其のもよほしは東華法師とかや。予も父ふる世の友なれば、此の事の序詞もあらばやといへるに、春にとりこされたるよし。おそく聞き傳へて、中の二日におくれじと、此の便りに心急ぎて、前の年ならん、かの墓所にたむけし句を、ふたゝび此の序に備ふるならし。

志賀の花水海の水それながらと、遍昭僧正の心にしたがひ、一休和尚のこと葉をとりて、かくいふものは誰ぞや、武城の散人老素堂なり。

狂云く、此の序は獅子庵の文庫の書類の中に、封紙ながら遺されしが、今は讀みて序の一字を加ふ。それは故翁の忌日は十月十二日なるを、我が師は總て三月に供養せり。但し東西の門跡に遠忌を勉めらるゝ例なりとぞ。此の時は天下の門葉を催し、洛陽の宗匠を請じて、三日の法會をなせるに、卷頭には遊行上人の句をこひ、卷軸は武陵の嵐雪にして、其の序は今の素堂なり。此の老は但し山口氏にして、故翁と文章の交友とぞ。

卜居ノ序

白　駒　居　士

家は近衞の御門、二條一條もよし。さて蝸牛は家を引きありて、どこへなりともと遊びあるき、海螺

は鈍な者ながらも、おのが家の内に隱る。これらは自己の智能を待たで、火急の時に手つかひあしか
らし。然るを日本修行とかいひて、おのが寢所を負ひながら、飯鍋をたくはへ、油筒を持ちありく、
隱逸の中の罪人(つみびと)にして、沙汰のかぎりとはいふべきなり。山雀はひさごの中に明暮をわすれ、蓑の人
道は壺の内に乾坤をたのしむ。彼は他人に造作せられて、その苦を樂とは思ふならん。爰に浮雲流水
の客あり、湖南江北に漂流して、東花西花の名によばれ、野に寢る時は野盤子といひ、家にある時は
獅子庵といふ。しらずその身の智能をたのまざらんか、世の人の造作にこびざらんか。その獅子や今
はたをいぬ。人に尾を見する事なかれと、今年は金城に草庵をむすびて、爰の獅子庵とはいはるゝな
るべし。此の日は、孺子が冬牡丹の一章を題して、机右に此の心を序する事しかなり。

狂云く、此の序は筆頭に力ありて抑揚自在の文章と稱すべし。然れば自己の智能を失ひ他人の造作を賴み、
中間に理窟の修行者を形容せる、隱者の身を置くに所なからしむ。此等を鍼線の指示と云ふべし。誠に此の序は、
牧翁の風雅を慕ひて千里の顏蓋に朋友の契りをなせるに、爰にも我が師の荷擔人(かたうど)なるべし。其は生駒氏にして自
ら白髮居士と稱す。但し其の頃の名は萬子とも云へり。

觀音遷座序　　東華坊

そもそも三十三所の觀世音は、むかし花山院の詣でさせ給ひしより、世々にその名を呼び傳へて、

これを西國巡禮ともいふなり。始めは那智の瀧に顚本無明の夢をさまし、終りは谷汲の水に妙覺果滿の月をすましむ。その間に三十一身を現じ給ふれど、一は卽ち三なるべく、三は卽ち一にして、感すればこゝに應じ、應ずればかしこに現ず。これを萬水一月にたとへて、此の薩埵のおはします所をば、水月道場ともいふなるべし。或は千手におほひの綱をさゝげ、或は千眼に法のともし火をかゞやかす。或は三面十一面など、馬頭羂索は異相を現じて、魔界に念彼のちからをしめし、如意輪の像の頰杖には、何をかおぼしわづらはせ給ふや。衆生濟度の思惟とならば、かくいふわれらをも見はなち給ふな。世に正觀音と聞えさせ給ふは、さして邪正のさかひにはあらで、空假中のその中に立たせ給ふや、權實のその間にあらはれ給ふや。人ははばかるまじき一字にこそ。或は聖と聞えさせ給ふも、ましては凡ては百千のかたちを現じて、百千の衆生をみちびかせ給へば、觀自在菩薩とも、圓通大士とも申し奉るならし。本より此の娑婆界は、此の大士の領させ給ひて、世にいふ奉行頭人よりも、不信不敬の人を見透かさせ給へ、さらでも恐るべきは、大士の靈驗なり。されば越の中州に、石動の觀音寺は、本より大悲の靈場なるが、新たに三十三尊を造立して、本堂の四面にかゞやかせ給ふ。さるはそ人婦女の、遠境の勞をたすけんが爲に、鰥寡孤獨の貧窮の悔みなからんがために、諸國の光を一堂にかゞやかせば、一念さらに三十三念の掌を合はせて、誠に去此不遠の極樂城とはいふべし。

狂云く、此の序は文章の實地なれば、其の名を配るに奇法ありといふべし。されば觀音の淡婆を領し給ふは、尤も楞嚴の所說にして、其の餘の詞も諸經を摘採せり。爰に石動の觀音寺は、現在の僧の風雅より、三十三歌仙を奉納して、それに此の序を乞ひけるとぞ。但し今の石動は倶利迦羅の山の麓なり。

菊合序　　蓮二坊

むかし晋の淵明が後は、菊を愛する人世にまれにして、東籬むなしく霜にたふれ、南山おのづから雲にかくる。これより人間の花麗につのりて、牡丹を愛し芍藥を愛して、常に紅白の美をあらそふ、和漢に人情のつねなるべし。さて我が朝の萬葉集には、菊をえらばれずと聞きたれど、屈原が楚辭に梅をわすれたる心にはあらで、歌人は菊のちよをことぶき、詩人は花の隱逸にともなふ。もとより此の物は野山に咲きて、おのがまゝなるべき花のすがたなるをや。しかるを寶永のはじめより、京洛に此の花をもてあそびて、玉籬金墻の霜を賦ひ、翠簾細篠の日を掩ふ。その價は牡丹にあらそひて、一とせの榮枯をかへり見されば、爰に此の價のまされりともいふべし。第一には淡濃の色をたくらべ、第二には毫釐の寸をあらそふ。大なる時は尺にも及びて、菊にして菊にあらざる物もおほし。むかしは初霜薄雪の名より、金續銀續はその品をほめて、小倉のぬきの似過ぎたらん、濡れ鷺のあはれに寂しかりしを、今はたその花のその色ながら、青幡峯といひ、釜山海といひ、金鷲銀鳳の名に驚きて、

おかしのあかつきはかへしたらん。誰のこなたよりさし覗きて、中々なれもてあそぶべきさまにあらず。御法村雨は寶永の末にひいて、小手卷、李將軍は正德のはじめに名あり。すべては漢家の名の品には、その名を見ざる物もまたなからんか。神風やいせの國には、飛鳥川といふ菊ありて、橘の家の祕花なるよし。尾張に黄小鳥あり、美濃に白臥龍あり。ましてや都にちかきほとりは、その名をかぞふるにいとまあらず。大津に月下門の名もゆかしく、宇治、伏見、山崎など、難波の有明は名に殘りて、伊丹の花麒麟の世に出でたる、序者も此の所に筆をたつべし。さて百菊のかたちをならぶに、或は匙咲ともく管咲ともいひ、或は請咲といひ、抱咲といふ。透咲は花のきよらなる物から、大小ともに其のかたちをほめたるに、疑半咲は菊のよのつねなればや、花の大ならんをかおとすなり。まして筒花などのなよやかならぬ、すべては花形のかたからんには、故その花の辻をさしては、幣といひ丁子といふ。そのかたちも百にわかれたれど、ゆきてまばらにたてる物をよしとす。しかし此の外の名たかきも、花はむかしの佛たから、紅錦をよそほひ、羅綺にまつはれて、今さら花影の欄干にかゞやけば、朱家のにしきに驚きたる心地なるべし。正德のことしは都の菊合に、百代無雙の花を爭ふ。中にも左に金翅鳥あり、右に紫金龍あり、朱雀門といふ菊の、ゆふ日に光をそへたるなど、いはば鼎の三つに立ちて、左右はしひてその日の置所ぞいふならん。或は婆羅門、阿蘭海など、右將左將の名を列べたる、

好まざるかたの言種なれど、何かまた世の中それならざらんや。本より連歌に露かはらざる大事ならんか。さるを紫栽のこのみにて、心ものび他念なきとて、長座にはかならず催し、庭鳥がうつぼになると夢をみせ、むこ入りにはしをわたり、宗碩は文かよはしの白讀に、入相の鐘を腰にさし、宗鑑よりたび／＼發句などくだし侍り、近くは宗牧の一座もわすれがたく、それらをたよりにて思ひよる事しかなり。

狂云く、此の跋は伊勢の人々の書き傳へて、爰に烏焉の誤りも多かるべし。今は宿老の文藻を刈りて中間に誹諧の規範たる物を出せり。紫栽以下の奇言怪語は總て其の代の誹諧の詞と知るべし。然るを誹諧の濫りならで花實を具へ、一句たゞしく然も可笑しくあらんやうにとは、誹諧に百世の掟にして、なにかくそれならざらんには、儒佛の道をも壓倒せん、神家の人の活話ならん。但し作者は荒木田の長官にして、其の比には守武守一など世の誹諧の先祖たらん。

啼鴉集跋　　蓮二房

此の一卷は閑如老人の老いをなぐさむる草稿にして、その序には鳴鴉の心をいひ、此の跋には四序の養老をいへる、すべてはその題のその名なるべし。春は若葉の雪もきえて、鶯の聲の嬉しさより、梅、柳、ふぢ、山吹、櫻は花のいふべくもあらで、牡丹に春の咲きつゞきたる、今年の老いは爰に忘

るべし。夏は更衣の身輕くして、うの花のかきねおもしろく、時鳥の初音を思ひ出づるより、花たちばなの香にめでゝ、昔の老いをも忘れぬべし。秋は初秋の心さわやかに、三日月のゆふべぞたゞならぬ。七夕まつり魂まつり、二夜のあはれは又さらなり。菊に鴈がねの啼きて來るころ、壁にきり〴〵すの聲すでにさむし。鹿も紅葉も秋のちり〴〵に、此の世の樣のかかれとても、我が身の老いを忘れやはする。冬は初時雨の華やかに、爐びらきの心もあらたまりぬるを、小春の名にし長閑なるや。ままゝのはな梨のはな、梅は十月の梅さきて、水仙の花の人にまたるゝなど、またれてさかぬも又をかし。霜月の霜の朝日を樂しみては、雪の夜の燒火に老いをわすれ、煤掃の比の遁げ所あれば、餅搗の日の呼ばるゝ家もありて、しら髪を人にめでたがらるゝより、花鳥の春をもまつ心となりて、誠に年々の老いは忘るべし。

狂云く、此の跋の專用は、四季の名目を配るに妙あり。誠に四季の文法は此の選にも數多ながら、何れも一趣の差別ありて、其等を文鑑の文鑑と見るべし。さればや四季に年忘の二字を置きて、春には今年の老いと云ひ、夏には昔の老いと云ひて、秋には老いを忘れずと云へる、衰老の觀は此の所にして、前の書類にも愛を云へり。冬には燒火の更なるに、水仙の句の妙絕なる煤掃の對の深切なる、況んや春待の二字を以て年々の老いと云ひなせる、七縱八横の自在を稱すべし。但し此の老は濃の三輪山に住す。先師と所緣の桑門なり。

對問類

花鳥對　東華坊

渡部狂問ふ。世に天地あり、陰陽あり、男あり、女あり。君臣は義のおもきにより、父子は恩のあつきにより、夫婦は情のふかきによりて、春は花とさき、鳥と囀る、皆たゞ相依り相思ふのいひならん。しからば我が家の花鳥も、花は鳥をしも待ちて咲くにや、鳥は花をしも見て鳴くらん。花もさかりのすくなきには、鳥にその日をにぎはしく、鳥のねぐらのさびしきには、花を今宵のあるじなるや。されども四季の花鳥には、梅に鶯の春をまちて、卯の花に時鳥の夏をしりぬ。秋の花には何か鳴くらん。冬の鳥には何か咲くらん。菊に鳴なく秋はあれど、なべての人はしらぬなるべし。冬は菊の花に斥鷃の來て我が家の花鳥にはいふなれど、詩人は早咲きの梅を詠じて、雪には鳥も啼かずとや。歌人は麻姑の術をよみて、閑には花もさかぬなめり。しかるを詩歌連誹に、花鳥の二字をいふなれば、四季にはなどやその名をさだめざる。硯の海に風月の色をたゝへ、筆の林に花鳥の情を寫して、我が輩の管窺をさとし給へ。

東華坊對ふ。されば陰陽の兩儀より、五倫といふ名を呼びつたへて、それが名字のかたければ、詩歌

にはこれをやはらげて、君父は心の花鳥にあそび、夫婦は姿の花鳥によそほふ。それも姿の花鳥のみかは、姿は心の花ならんをや。されば唐土の　鳩は、詩經の周南にほめられて、心の花鳥にたとふれば、我が朝の鶺鴒は、八雲の御抄にえらばれて、姿の花鳥になぞらふとや。かしこには詩のはなやぎさて、こゝには歌の鳥も鳴くらん。まして昆弟（はらから）の居ならびて、姉に花ともいふべくば、妹に鳥ともいはざらんや。朋友はいとゞ一樹の陰より、容の外の花鳥ならんには、心の友ともいふならし。さらば花鳥は四季の情にありて、四季の姿にはかぎらざらん。そもそも梅に鶯か、芳野の里は有明の月もさむく、相坂の關は明けぼのの雪にとざして、容のけしきも春たつといふばかりなれ。谷の戸にも梅の花ならで、鶯を待たざらんや。鶯の音ならで、梅を尋ねざらんや、そは卯の花の蜀魂（ほとゝぎす）は、我が朝の人の見そめたれど、春も寂寞と暮れ行きなば、螢はその魂（たま）の螢ならんよ。しかれば我が國に此の花の咲きて、唐土の鳥を宴にまつらん。獅子に牡丹は三國の名なかなり、唐國の人は詩につくりて、三月の色をもてはやし、我が朝の人は錦にかざりて、四季の心をなぐさめつ。況んや伽陵の花を捧げて、佛も笑はせ給へるをや。蓮に翡翠は和漢の情にかなひ、桐に鳳凰は唐虞の德にあそぶ。されど花鳥に往古の姿ありて、櫻に繫馬（つなぎうま）は又兵衞が浮世繪にいさみ、鹿に紅葉は古法眼の極彩色にかゞやく。これより唐樣の彫物師は、竹に虎と思ひよれば、京風の茶染屋は、蟲に鳥とも詠めやる。さらさら、あはれ

か思ひ入るより、それも心の花鳥ならずや。さるを花にだも鳥にだも、物に好惡の論ありて、棠の葉に蝶は連歌の附合とさだめ、根深に鴨は誹諧の鹽梅(あんばい)と思ふ。柹に鴉も、豆に鳩も、粟に鶉のよき心ならんより、竹に雀のあそび顔ならんには、さてその竹に雪の花咲きて、鳥のこゝろもおもしろからねば、千鳥も波の花にむれて、松に蒔繪の花鳥ならぬや。しかれば冬の花鳥には、その名をさだむるのみならで、暮れ行く宿の煤もはきて、棚の火影の齒朶にそよげば、鼠の餅花にわたるらんも、其の夜は花嫁(よめ)の名によばれて、昔が八ちよの春を待たばや。土路の山姥もかたちつくり、和歌の浦人も心やはらぎて、四季に花鳥の名のみならんや。人は心の花鳥なるべし。

狂云く、此の類は宋玉が對問より、倭には理平廣業などの鳥獸松竹の對にならひて、先づは花鳥の二字を題せる、本朝の風雅の的面にして先づ向ふ先づ對ふべき物なるをや。但し對問の文法は、理論を後にし文章を先にせる、委曲は首卷の題註に在りて、尤も議論の虛實を知るべし。

されば、問者は天地陰陽より君臣父子の五倫を云ひ、それより詩歌連誹に花鳥の姿情を論じたるか、或は花も盛りとは例に物語の詞を借つて、花を今宵は古歌の意を取れり。或は秋の花鳥に冬の花鳥と云ふべきを啼くと咲くとに影略して、互見の法の自在を見るべし。或は菊に鶯啼くとは住吉の歌の詞ながら世の耳なれぬ花鳥と云ひなし、殊には秋冬を錯綜して爰に句讀の用をも知るべし。或は詩人に早咲きとは江南一枝の梅を借つて、鳥不鳴雪滿山と云へる古詩の詞を取り合はせたるは、花と鳥とを拾ひ寄せてこれを一時の働きと云ふべし。但し我

が家の花鳥とは、斥鷃を冬季となせる蕉門に新式の一條なり。或は歌人に寐覺めとは貧昌が歌に寄せて千鳥には花のなき事を云へり。或は硯海筆林とは、對者の胸の博達に喩へて問者の心の小知を諷せよとなり。

されば對者は君父の二字より昆弟朋友の五倫までに、強ひて姿の花鳥を論ぜず。先づは情の花鳥を表はす、本より詩歌連誹には姿情の先後を知れとなり。或は雎鳩鶺鴒は和漢に詩歌の證文なるに、八雲御抄を詩經周南に對して、鶺鴒の故事とは別々なり。

されど、八雲の御歌は夫婦同居の根本なれば、鶺鴒の事に取り合はせたる文章の自在を稱すべく、文章の博達に驚くべし。或は詩花に歌鳥とは、漢文には詩義花滿地と云ひ、倭歌には初陽毎朝來と啼きて和漢の花鳥に和漢の詩歌を合はす。詩經と八雲との結交なるを見るべし。或は兄弟の花鳥は虛誕に誹諧の筆格を用ゐ、或は朋友の花鳥は實地に方言の語脈をなす。尤も一樹の働きより例に虛實の兩用を知るべし。或は梅に鶯かとは乎の字は對者の詞なれば、此の字を濁りては讀むべからず。或は芳野も相坂もすべて古歌の詞ながら、芳野は花の一字を云ひ、逢坂は鳥の一字を云へる、これを隱見の法と云ふべし。

次に春立つの二字は、忠岑が歌より杜詩の春寒氷雪を合めて、鶯花の二字の時節を云へる、例に和漢の博聞なり。或は春も寂寞とは、寒食の詩の蜀魄より、和漢の節の違ひを云ひて、魂の異るは卯の花の云ひかけながら兼ては蜀帝の怨魂を云へり。或は獅子に牡丹の續きは、牡丹も春夏の違ひ目あれば、和漢の論の序を借りて天竺の花鳥をも云ひなせり。但し時と云ひ鐘と云ひて、一年一月の意を對せる、牡丹の上の名語にして、況んや花實の筆法をや。然るを蓮に翡翠と云ひ、伽陵の花の蓮に續けて翡翠踏雙の詩を合める、總ては花鳥の縁語より、總ては其の名を文章に配れる　すべては語路の斷續ある、一字一言の粉骨を稱すべし。或は櫻に繋馬と鹿に紅葉の一

對は、先づは側對の信なから全く意對の奇絶にして、景瀬も再び日本を出でて、唐文に此等の法格ありと信ずべし。然れば浮世の文兵衛は大津繪の元祖にして、狩野古法眼は彩色繪の先達と云ひなせり。或は唐樣に京風とは、僅かに和漢の間を取して、中間に心の花鳥を結語せる、此等に文章の埒を知るべし。或は物に好惡とは、嶮なて一篇の論を設けて、内には連歌の名寄を云ひ、外には古語の活計を云ひける、柿に蟲と實に鳥と、例に古語の筆格なれば、一篇の模樣の短語を見るべし。

或は粟に鶏とは食を求むる祖より、花には鳥の用あらんより、竹に雀の無爲ならんにはと、こゝに世法の力を添へたる、誠に文章の虚實なからんには、或は竹に雪の花より、松に蒔繪と云ひなせる、何れも詩歌の詞を借つて、冬の花鳥の風情を附けたる、此等は無心所著と云ふべし。

或は鼠に餅花とは、暮れ行く宿に春を待つと云へる、結前生後の花鳥なれば、本より正月の祝詞を添へて、鼠を娵が君と云ふより、花の一字は折節の風流ならん。されば對問の結語には、古人も多く祝語を用ゐて、當代の萬歲を云へりければ、こゝに山姥も浦人も總には君が惠みになついて、心の花鳥に和ぎたる、花實自在の結文と云ふべし。但し此の篇は假名と眞名とに書き竝べて、獅子庵の遺稿に留められしが、今は眞名字を加ふるに及ばず。讀者は尤も通用を語んずべし。

影法師ノ對　　櫻木因

老いの暮　鏡の中に　又ひとり

誰何や忽然と佇めり。予曰く、白髮を清めて元日を待つ所に、汝何人なれば我が白櫻下に來り、我

と對して坐せるや。彼曰く、白髪を請めて元日を待つ所に、汝何人なれば、我が白櫻下に來り、我と對して坐せるや。予曰く、庭前の江の七度まで、蘆原となりし昔より、われは白櫻下の主たり。何ぞ我が白櫻下とはいへるや。彼曰く、庭前の江の七度まで蘆原となりし昔より、我は白櫻下の主たり。何ぞ我が白櫻下とはいへるやと。我怒れば彼怒り、我笑へば彼笑ふ。此の公事は漢の棠陰比事にも見えず、倭の板倉殿の捌きにも聞えず。爰に我ひとつの發明あり。實に我が紋は左巴なり。汝が著せしは右巴なりといはれて、終に此の論はてたり。我また我が心を責めて曰く、一論に勝ちほこりて、これを智なりと思へるや。その所詮を見るに、たゞ皆に骨をいたさせ、意識をあがらせたるまでなり。いでや隱士の境界は世間の理窟を外に置きて、内に無盡の寶あり、その寶といふは、

元日や[illegible]の祕藏の無分別

狂云く、此の篇は白櫻下に試卷の模様にして、始めに車尾の句を出し、終りに元日の句あるより、作者はこれを回文格と題せる、誠に倭文の一格なるを、今は選んで自門類に加ふ。されば白髪の對論より、無窮の言語を争ひて巴の左右に決斷せる、鏡の影の差別は分明なり。これは漢文の設論にも勝れて、一篇に十七八箇の彼我の二字を疊む。尤も曲折深遠の所なるべし。況んや泡影の論を離れて結文は我と我が心を責めたる、急に笑中の刀を用ゐて、文に虚實の自在ありと稱すべし。但し作者は濃西の大垣に産して、谷氏の隱士なり。白櫻下の三字は門下の稱號なりとぞ。

第七卷

辯類

居眠辯　　趙北枝

世にいふ翠臺の北枝は、萬事ねむるにたへたりと。花にそむきて眠るにもあらず、月に對して覺たるにもあらず。唯よくどこでも眠るものなり。經には寐た内を佛と說かれ、俗には眠るも奉公といへり。鳥の林にねぶり、獸の岡にねぶるも、さむるに用あれば、眠るにも用あらん。牡丹に猫のねむる時は、蝶に用ありて花にあらずとぞ。まして無情の草木だに、おのがさまざまねぶらぬかは。海棠のねぶりてあてやかに、藤のおぼろにねむけなるを、山吹はなどさめて淸げなる。それも眠ればや、さめてとはいふならん。椛は寐すぎて名にたてられしを、萩も薄も皆ねぶるなりけり。莊周が蝶は有無の外にあそびて、山谷が鷗は榮辱の中にしづかなり。されど眠りては君王を驚かし、さめては俗民をないがしろにす。これらはねむるに用あれば、さむるにも用ありとしるべし。我は我が性のにぶきより、飯喰へばねぶく、酒飲めばねむし　さりとて横に寢る事をもこのまず、壁にもたれては鼾をちか

くなるべし。此のほど山寺の兒と酒のみて、雪隱に寐わすれたるを、漢の子陵が帝の膝に寐たるより
も、無念無想は百倍ならんと、金城の人にほめられて、我と居眠の辯かきて、唐へもつたふべきとな
り。

徂云く、此の辯は俳諧にして、然も方折明白なり。さるは絶俗の對に俳諧の詞を盡し、蘇鴨の對に儒老の情を
捜せる。一篇の趣意は此の間に知るべし。況んや兒と云ひ雪隱と云ひ、帝と云ひ子陵と云へる、此等に文章の趣
錯にして、唐にも此の辯を傳へんとは、倒に虚實の文鑑と云はん。誠に此の人は俳諧に達して文には和漢の両を
あり。傳ふべし。但し翠堂は別莊にして、遊子は彼が[illegible]なり。

桃化ノ辯　　　　蓮　一　房

いにしへより物に名づくる事、その名の出づる所ありて、その名にその容をしるとこそ。其の故に
禾を得ては其の書の名とし、鯉を得てはその子の名とす。これたゞ其の時を忘れざらのいひならん。
我今年井波に來りて、此の君の謂號をきだなるに、おまへつくだちりに桃をつまれたるに、此の物
を得て此の名あらばこれを古文の瑞相ならんか。むかし西王母が桃は千年にみのり、今の蓮一房が辯
は一日に花さきて、桃の字はよし、先翁のいみ名をつたへ、化の字はこゝに故院のおもかげを思ふ。
しからば師父の恩に感じて、永く此の時を忘れざらんとぞ。

狂六く、此の歸は其の日の實情を演べて、尤も歸の情を盡せり。されば此の公は、處の瑞泉寺に住して、岳陵
浪化公の風流を續ぎ、芭蕉門の風雅を貴び給へば、爰に桃青の桃の字を摘みて、浪化の化の字を探れるにぞ。然
れば玉杖は桃の實に蓮に示すの花を對せる、誠に一箇の奇號にして、不忘の二字は街衢と見るべし。但し井波は
其の郷の名なり。

伯兎辯　　東華房

越の天下(てが)といふ所に、石川のなにがしありて、東華房が門人たらんといへるは、三國の昨嚢に交通
せられて、その道の便りを得たるならん。いさや其の人の虛實は定むまじきか、今の心さしの見捨て
難ければ、これに伯兎の名をよびて、そこにその人ありといふべし。我はことし假名の碑をつくり、
洛の雙林に供養をとげて、世の名望に心なければ、いかなる山にもあとをかくし、誹諧の名をもて人
に對せじと思ふに、今はた此の人に此のちぎりあるは、風雅の因縁もあさからぬなめり。むかし釋迦
ほとけの最後の說法に、須跋陀羅をゆるし給ひしに、先の世に鹿兎のちぎりありとこそ。然らば我に
も此の人ありて、最後の門人たらんには、いかなる二世のちかひにやと、爰に兎の一字を得て、此の
名のゐしとはなせりけり。さて伯の字は通稱にして、今は兎の字の辯なるに、彼はのぼる事をよろこ
びて、くだる事を好まずとや。誠に風雅の上達も、智鈍の間に道ありて、日々に我が名を忘れざらん

は、青雲の望みもとぐべきとなり。

狂云く、此の辯は捷蹊にして、人を譬ふるに文ありと云ふべし。されば龐翁の因緣は、道教經の趣向にして、其の人を此の人に喩へたる、最後の二字には好辭ならんと、記んで竜の字を說明して、彼が上下に云ひ寄せたる、例に誹諧の筆格より、虛實は一篇の趣意なり。但し天下村は福居の西にあり。

自得辯

北七甲

つくづく世界の得失を思ふに、河豚に毒あれば喰ひたがる者おほく、海月に骨なきも買ふ人あれなり。さればもし河豚に毒なくば、龍宮の御札にのせられて、此の界へはわたるまじく、もとより海月に骨あらば、野等猫もかぎて手にとらじ。物は天道の盛加減にて、得失當分とは見ゆるなり。さてこそ角あれば牙なく、丸顏なれば鼻ひくし。月のあたりの雲をいとひ、花の前の風をうらむ。世はたゞ其の間にあそぶべきを、緞子の夜著も輕からず、木綿の布子も重からずとは、美惡になれて美惡をしらぬ者の、己を捨てて人に求むる故なるべし。されども物はよふからんより、あしきがまされりといはんには、隱逸の人の瘦我慢なりとて、世にある人は笑ふべきに、世はいさ番持の如く、貧乏果報の鬮に まかせて、得にもあそび失にもあそばんには、我は鰒汁に海月をそへ、丸顏の君に酌とらせて、一杯一醉の腹加減に、木枕の夢のさめたらん時は、月に村雲もおもしろく、花に嵐もおもしろく、雨に時

鳥もおもしろく、雪にみの笠もおもしろく、春のあけぼのも秋の夕ぐれも、夏もおもしろく、冬もおもしろく、夜もおもしろく、晝もおもしろく、得も自得のおもしろさあらば、失も自得のおもしろさあるべし。

狂云、此の篇は莊子が意地ながら、今人誹諧の筆法なり。さるは雨魚の喩へより、自得の趣意を書きなせる篇中に十二箇の面白を用ゐて、春秋の間に二箇の面白を畧す。文に互照の法ありと云はん。然るに四季の詞を重ねて前には四季の姿を云ひ、後には四季の意を云へる。此等は文の一體と見るべし。まして龍宮の制札は、誹諧の人の常語ながら、此の篇の間の奇絶と稱すべし。但し作者は越の新潟に住す。北村氏の眞人にして、先師も此の郎を稱名せり。

梅長者辭

井　童　平

岐阜に梅長者とひゞきては、四鄰に梅を植ゑて梅を愛し、梅の花ながめて鶴をも飼ふべきに、まさしく梅の木は一本もなし。此の名はある人の思ひよりて、庭に紅白の梅を植ゑてなど、世界の模樣に日の暮れるをまちて、やがて盗みて、我が名とはなせり。いざや梅を買うて隱者とならんか。但しは梅を賣つて長者とならんか。此の分別は梅の咲く時なるべし。さて我が家には二つの井戸ありて、其の一は朝夕の井戸にして、其の一は酒造る車井なり。今一は緣より釣瓶を下し、覗いて運ぶ井筒な

れば、水鉢に月をたゝへ、岩にきつきのあしらひも涼し。籬のあなたには蓮をはなして、誠に愛すべき池はありて、蓮の花はいまだ植ゑず。こなたは四五枚の畑に茄子あり、ごゝけありなど、かの有宗が意見にしたがふ。そこより東北の森の中に、稲荷の御やしろをあがめ置きて、實にも鳥居のかうがうしき、こゝに鹿もなき木菟も鳴きて、稲葉の松風もその音にかよふらし。さりとて市中に閑をぬすまば、又やぬす人の名にたたん。とかくは此の神のめぐみをまちて、隱者とやならん、長者とやならん。此の分別は梅の咲く時なるべし。

狂云、此の篇は虚誕なるに似て、家居を讃ずるに飾らざる所あり。まして壯年の分別ならば、隱長の間に心を留めて其の家の神慮に任せんとは、誠に虚實の自在なるか。されば和靖が倚よりは、漢には茂叔が愛蓮を云ひ、倭には有宗が植樹を云へる、倫閑の二字は首尾の文法にして、文章を裁つに刀を用ゐずと云ふべし。但し作者は濃の岐阜に産す。姓は井上にして、梅長者は標號とぞ。

巴分與レ杖辭　東華房

此の杖は越後の高田なりし鈴木氏の人の我にあたへて、我に病後のちからをそへしに、我また此の杖を巴分にあたへて、越後の名殘を爰にとゞむ。さるは此の國に此のゆかりありて、風雅の心ざし淺からねばなり。そも杖は老いを扶けて、水雲萬里の人にもともなひ、月雪花の吟行にも、一日も此の

惜なからんやなり。殊に此の杖は我がたましひをこめて、愛の福光川のほとりにとゞむ。かの雨風の夜ならんには、龍と化しさらん事を恐るべし。さて此の杖の長さ四尺ばかり、草屋の時によろしく、木履の時に短し。其のかたちは紫寒の色をまじへて、其の性は殊にすこやかなり。彼たゞ門々に我を待ちならひし、かりにも横に寝る事を好まず。彼よく前後をつとめたりといふべし。ことしは此の宿に冬ごもりして、春は花の時をまつべし。その一節のあふよあらんといふに、さらに此の杖のつくづくと、今宵の名残をぞをしみけり。

狂云く、此の詩は比體にして杜甫が桃杖の意を含む。尤も文章の實地なり。然れば根の一字より、此の君は王子猷が愛惜を云ひ、化龍は費長房が仙術を云へる。紫寒の色とは紫竹寒竹なり。されば巴公は先師の門人にして、北越に風雅の名を知らる。今も其の杖を袋にして其の家の記録に殘せりとぞ。彼れが山中集にも見えたり。

招魂ノ辯　　　相　左　角

人に魂三あり。其の一は昭々靈々として、鏡の影にしたがふがごとく、善をも照らし惡をもてらすなるべし。其の二は名利の間にまじはり、其の三は酒色の中にあそぶ。いかゞ此の三つを君臣にたとへて、それぞれの家をば治むる事なり。しかるに二臣の放埒より、終に其の君をかすむれば、昔は本より何の分別もなく、國を奪はれ家を失ひて、今は行方なくなりにたれば、例の二臣の世となりて、

名利の岐に人をあらそひ、酒色の市に我をわすれて、終に宗門帳を出でて勘當帳に入る。此の時一門の評議として、何とぞ其の君の魂をまねきて、父母生來の家を相續せむと、佛家には目連の通力をならひ、儒門には宰我が辯舌をつたへて、其の魂のありかを尋ぬるに、潁川の水も一たび濁りて、今は酒屋の波に來き、首陽のわらびも燒きつくして、さやうの賢君も見えずとや。しかれば學文の理窟をもはなれて、高く乾坤の外にあそぶらん。潯陽が菊も日すでに暮れわたり、大君の桑も月やゝかたぶきぬ。何もあら野の花薄ならば、扇ならでも招くべかりけりと、武陵の翁にをしへを聞きしより、愛の壺中國に別の世界ありて、入るにも此の口ひとつにして、出づるにも此の口ひとつなれば、費長房が千歳のあそびとても、劉玄石が一醉の夢さめて、風雅はよし波へだての水の風味なるべし。

狂云く、此の篇は宋玉が題を借りて、其の詞は虛無なるに似たれど、儒佛の言語文字より、人界の分別理窟を離れて自己を求むる實情なり。誠に性の昭々たる、物の善惡にかたよらず、王臣のなき所に隨ふと云、孟子も性き發せる所にして、詩書の實の筆力なり。殊に此の篇の君臣は莊子が齊物の詞より出でて、自我の中の君臣ならん。されば潁川首陽とは、起句に賢君の隱れ所を云へ、潯陽大君は結句に題の招の字を云へる、よく文章の反照を知りて、博達自在の文法と云ふべし。但し壺中國は佐伯が別墅なりと。

說　類

匏上人ノ説　東山長嘯

匏の題れるものありけり。人々見て昔ありしひじりこそ、ふくべあれとわらひけるを、下官聞きて、されはおのれゑぼし親になりなむと、すなはち心戒といふ名をつけたり。おりおりゑつぼに入るのあまりに、かたはらなる世すて人の腰折を一首になひ出でたり。

々顔となりこそさがれ上人は佛のたねやまきそんじけむ

狂云く、此の徒は擧白集に在りて、爰に三字の題を加ふ。誠に此の名は其の世に名ありて、大名の隱者の先賢と仰げり。尤も詩歌の達人にして、此等の虛實にも遊べりとぞ。

名クル小坊主ニ説　應浪化

汝は滿足なり。汝が性のにぶき事は、飴を礪ぎて小刀にして、瓜の皮をむくが如し。されどあまき物をもて、あまき物をむされば、自然にむける道理もあらんかし。此のゆゑに、汝をつかふ事は狙公が猿を養ふにことならず。茶を汲ますれば冬の夜を汲みあかし、帚をとれば春の日を掃きくらす。よしは竹田が人形ならんにも、上計のかぎりはあるにこそ。さりや、汝が顏の漫々として、湯とも粥ともわかれざれば、その鈍きを體となし、その靜かなるを用とせる、唐子西も爰において、生を養ふとはいふなるべし。ことしは東花坊に讃せられて、自慢の慢の鼻やたかき、饅頭の饅の光やはなてる。但しは

滿足の二字をもて、汝が顏の萬福を稱せば、汝が心はこれを滿足なるべし。

狂云く、此の說は滿足の二字を以て、小坊主の名となせる。去るは滿足かと呼びかけて、蘇老が說の汝の字より一篇に六字の汝を用ゐるに、文章の意地は各別にして、此等を換骨の法と云はん。誠に節瓜の喩へより、狙公が猿は朝暮を云ひ、唐氏が說は利鈍を云へる、竹田は誹諧の鎮格なり。但し此の公は越の瑞泉に住して、鹿山人は標號なりとぞ。

櫻商人ノ說　　禾　宇中

年は元祿の辛巳ならん。東西夜話の選場に、我が鄕の名のもれたるを悔みて、つとめての年こゝの夜話つくるに、我は北華坊の名をかりて、安宅(あたか)の關を越えんとせしが、俄に勸進帳の詞をつゞる　其の詞に、

此の字中といふをのこは、當國小松の風雅人にして、蕉門の心ざしあさからず。去々年東西夜話の部にはもれて、其の時の無念を東花坊になげくに、櫻山伏の笈をかして、櫻商人の旦那めぐりを始む。笈を捨つれば字中といひ、筆をとれば北花坊といふ。その文章の慮外どもは、役(えん)の行者の高下駄にもめいじて、關の人々もゆるし給へ。頭巾(ときん)ながかけの俄山伏に　齋料々々、

其の時關守は、佛法ふしぎの腰立て直し、世にいふ櫻山伏は、彥根の五老井に繪讚別ありて、櫻の

木陰に笈の旅立ちより、その名を人も呼びつたへたるとぞ。今の櫻商人とは、商ひに寄する櫻人なるや、櫻をあきなふ商人なるや。御坊の髭にはとかくにけなしといふに、されよ、櫻には作花の縁あれば、そこの山伏もこゝの商人も、作の一字に看破すべしと、誹諧の謎をかけられて、闇の人々は頭をかたぶけける。

狂云く、此の記は謎の的面にして、虚直に人を論破すと云ふべし。されば九老井の餞別には、先師北國の首途に許六亭の模樣とて、野店山橋の旅姿を繪がき、一軸の巻物となせる、櫻山伏とはそれが題號なり。然るを此の題の名に寄せて、行者の木履には誹ノ格を顯はし、作の一字には謎の關を盡せる、誠に文章の機骨を得て、北陸に此の作者ありと稱すべし。但し其の姓は木氏にして、北花坊は其の選の假名とぞ。

名ノ説　渡部狂

昔はさる武士に九名あり。今はある隠者に十名ありて、東にあそぶ時は東華坊といひ、西にあそぶ時は西華坊といふ。華ノ字は光也榮也と、誹諧の字訓をなせる由。そよ、鶯の笠にぬひ、時鳥の雪とちる、歌人の花にはあらざめり。或は萬寸とも饅丁とも、羅乙はその跡をかくせりとぞ。ある書を見れば華表人など、ある所にきけば是佛房など、花にたはぶれ月にうそぶきて、野に寝る時は野盤子といひ、家に歸る時は獅子庵といふ。實は黄山の一支考にして、其の餘の狂名に數をしらざるも、その日

その時の用ありて、其の名を實地にとゞめざるならん。そもく、其の名の其の物にしたがふ、孔子といへば面長に、釋迦ときけば、丸顔なるを、李白が顔はそはつほにして、遍昭僧正はさい槌ならん。されど定家に疱ありて、雪芹（ゆきのり）の色も黒ければ、さゝげの花も栗の花も、物は一概にもいひがたし。しかるに我が師の十名は、十を十色の顔ならんに、十九應身はいさしらず、化物の沙汰にはちかかるべし。

程云く、此の説は頗稚にして、彼に范蠡が九名より此の二十名とは云ひがちならんか。然るに誹諧の字訓とは、指して華と花との字論にもあらで、和歌と誹諧との剛柔を云へる、菅の笠に時鳥の雪も、共に歌の家の花に寄せて、倒に我が家の文法なから倒に我が家の意地ならんか。尤も此の名の數多なる中にも、華表人は丁令が再生を合み、獲乙は彼が跡を隠せる、乙とは背に掛けて寢る其の角の形容なり。其の餘の數あるも數ならずも、總ては其の時の應用ならん。さるは儒佛の二老より和漢に詩歌の人を云ひて、萬物萬像を此の間に置けば、文の簡約を得すべし。但し定家は色黒く顔に疱の跡ありとは、歌人に續けたる一説にして、雪芹（ゆきのり）は能登の産物なり。然れば一箇の結語として化物の沙汰に近しとは、此等を説の文鑑と見て、虚實は道の裏に合取すべし。

名二子説　　木　鷺　助

むかし嵐雪がふたりの子を、帆といひ輸といふ。その一生をしれる事は、窺ふもたがはざる。卑を聞きて、我もふたりの子に名をつけて、病牀の心をなぐさむなるし。先づはその兄を篤虎といふは

本より風前の猛氣をふるひて、百獸のおそれを思ふにあらず。彼が性のおろかにして、世のまじはりも心よわければ、鼠に虎の威をかすといへる、世俗の諺になぞらふならん。しからば虎の爲の我にはあらず、我が爲の虎にして、用ゐる時は虎となり、用ゐざる時は鼠とならんに、親として其の子に威勢を殘さざらんや。これは富貴ともなり、貧賤ともなり、智者ともなり、愚者ともなる。親の子に教ふる遺金なればなり。さてその弟を寸松といふは、此の子はいまだいわけなくて、蝶鳥の外の愛欲をしらねば、たゞ千歲のことぶきを、松のみさをにたぐへたらん、梅櫻の色香にもほだざらんかと、彼がおひさきを思ふのみ。誠や子を見る事は父にしかずと。我はよ長病に眼くらみて、子を見る目鏡(めがね)もなければや、たゞにたはぶれ、たゞに名づけて、かれらが行くすゑの機變をしらんとなり。

狂云、此は說の蘇父が趣意を借つて、別に誹諧の筆格をなせり。然るに虎の威を假る事は、史記には狐の事なるを、東方朔が客難の詞を合はせて、虎鼠の二字に用ゐなせる、尤も雙關の法にして、古事を用ゐるの文鑑ならん。況んや爲字の倭文なるをや。或は遺金の二字を云へる、我が子に萬兩の金を遺さんよりも、一卷の書を教へんにはと、昔も韋丞相の庭訓なり。然れば一篇の結語には、子を見る眼鏡の虛誕を以て、題の意を盡せりと云ふべし。但し作者は木村氏にして、攝の伊丹に住す。當時に滑稽の風人なり。

論ズニ師ノ說ヲ一　西華房

今の誹諧に師なしといふ人は、韓愈が師あり師あらずにはあらず。誹諧はたゞいひがちにて、師を求むるに及ばずと。さるは五七の誹諧を覺えて、誹諧の道をしらぬ人なり。そも誹諧の道といふは、遠く世界の理窟をはなれて、近く誹諧の道理にあそぶ。本より滑稽の家風にして、師の弟子に傳ふる一脈なり。されど韓愈が師説は、道に先進の論あれど、我が師は弟子に道ををしへて、その道をあとへもどれとなり。今の誹諧師はかしこきより、しかもかしこきにみちびきて、弟子はた其の師にまされりといへど、我はおろかならんことを教ふ。更にかしこからんとにはあらず。世に藪醫者の弟子とても、針經をならひ灸穴を覺えて、二十年にして乘物を見るに、今の誹諧の眼よりは、耆婆扁鵲が垣の外を見すかし、見宜道三の大根おろしの妙をまなぶ。しかは其の師の鵜の眞似より、弟子の鴉もうかるゝなるべし。その醫者はしも學は廣からん。終に疫氣をも直したる沙汰なし。況んや大工木挽の弟子も、手斧に足を切りやむ時なし。むかし韓愈が恥の一字も、今論ずれば行過の二字なり。かたらず誹諧の行くさきをたづねそ。我が道は唯かくの如きのみ。さるは野田氏の子に根邑といふ者あり。これに此の説の心を傳へて、誹諧の師は求むべく、求むべからずの道理をしらしむ。

鉅云、此の篇は退之が師説を論ずるに、全篇に彼が道具を以て用ゐる所の各別なる、彼は事情を引きて儒法より歸しめ、此の事情に喩へて誹諧より導む。爰に倭文の一體ありて、爰に論字の題意を盡せり。誠に世界の理

窟を離れて、誹諧の道理に遊ぶとは、蕉門の以心傳心にして、史記の滑稽も此の語に含蓄すべし。然らば此の説に尿腸を洗ひて、理窟は如何、道理は如何、物に道理の無からんやと、讀者は爰に往返すべし。全く誹諧の關鍵なり。但し根邑は備の倉敷に産して、露堂子が嫡男なり。

夜話ノ説　　　曾呂利

太閤秀吉公、ある夜の御物語に、天下におそろしきものは、何かあるやと仰せられしに、上樣ほどおそろしき物はなしと、おの〳〵申し上げたるに、我等申し上げたるは、上樣ほどお心やすき物はあらじ。唯おそろしきは無分別者なり。いかにとなれば、上樣は正直正路にて、惡事さへ仕らねば、御憎みなさるゝ事なし。手前のあやまちだになければ少しも氣遣ひなし、無分別人と申すものは物の聞きわけもなく、用捨もなく、我がまゝをはたらき、理非をわきまへざる故に、何か氣にあたり、いか樣の事をか申し聞え候か、思はざるに災難にもあひ、身をほろぼし家をも失ひ候はんと申せば、太閤も笑はせ給ひ、おの〳〵も感ぜられし。

狂云く、此の夜話は或人の書き傳へして爰に説の一字を加ふ。されば太閤の一問は、天下に我一人ならでは人の恐るべき者なしと、諸人に云はすべき謀計なるを、輕薄の佞臣共の案に落ちたるは口惜し。これは曾呂利が答話にて一座の心を轉換せる、禪家に問答の活法と云ふべし。誠に史記の滑稽傳に、東方朔牧皇など武帝に答へたる夜話にして、爰に誹諧の道を論ずれば、國君を恐るゝは世界の理窟にして、國君を心安しとは誹諧の道理なり。

總ては噺のみならず、文鑑一部の道理とても此等の風雅を味ふべし。

辻談義ノ説　　露五郎兵衛

つらつら阿彌陀經を考ふるに、如來は五劫の間思惟なされ、上は一人より、下は婆々嬶々まで、殘らず救ひとらんとの御誓願は、おのおのや我等まで何ほう有り難き事ならずや。故に彌陀如來は、寢ころぶ事はさておきて、ろくに居給ふ事もなく、十萬里あなたの西方より、こなたの方へ伸びあがりて、諸人の地獄をつくるを見ては、はあはあとばかり思召すよし。それよりは持國多聞などいへる、一騎當千の四天王に仰せ付けられ、地獄をつぶす分別はないかとて、高座をたゝいて申しければ、芝居一度に鳴動して、感ぜぬものはなかりけり。

狂云く、此の者は京洛に名を知られて、洛陽の佛事祭禮に彼が芝居を張らざる事なし。世に云ふ辻噺の元祖なりし。昔軋翁は此の者を尊して、噺の一字には新古の捌きあらんと可笑しがり給へりとや。然れば曾呂利が夜話の道は、噺の家風を興はし、侫臣の笑策ならんに、此の一篇は無益に似たれど、祖翁の一言に縁を結べるは、此五郎が名の花に殘りて、古今の文者の列に入りたる、故に狂言綺語ながら、一藝に名ある德なるべし。

頌類

蕎麥切頌

竹　堂

むかしは蕎麥の花の解つくりて、先づはその名のいさぎよかり、そばにさく蓼の花もさきぬれば、色少し黒かりけるにもと、あだなる言葉の色にめでしも、今はこの花の實をほめて、切といふ字をそへたまひたれには、あつぱれ武士の喰ひ物にして、あま茶の男はかく事も得ざらん。さてこそ先祖ばせをの翁も、我が家の誹諧の都にうつらるゝには、そば切の汁のあまさにもしるべし、出姿のいふみのへつらへるにやとは、誹諧の為にもあらず、蕎麥切の為にもあらず、儒佛一貫の風味をいへるならん。しかも文道の類をいへば、白氏が文集にはその花を詠じ、李公が本草にはその實を稱す。それと我が朝の歌人達、おほかた都そだちなれば、蕎麥切の歌はなきとやらん。さるを西行の心には、秀衡が馳走のそばの歌を、其の世の撰集にえらばれずして、うらみて道より歸られしとや。これらは莊子などの寓言に似たれど、今の風雅のへつらへるをいふらん。さらば蕎麥切の旗下には、一將を得て萬夫の勇ありとや。鎧の袖も櫻さくはな鰹を始めとして、陳皮の六郎も唐辛の入道も、栗薑(くりはじかみ)を二手にわけ、本より大根の下知をまつに、木曾は雪吹の顔をそむくよりも烈しく、伊吹は山おろしの鼻をもがくに異ならず。しかるを海苔(のり)といふ物の、能登の國には黒のりといひ、伊勢の國には青のりといひ、其の外國々の海苔はあれど、すはといふ時の間にあはねば、ある時もあり、なき時もあるべし。爰に葷(ひともじ)といふ物は、

源氏の品定めにも出でながら、梵網の戒經にはきらはれて、あれのこれのと名にたちしより、春はあさつきともかつぎとも、冬はねぎともねぶかとも、四季をり〳〵の名をかふれども、表むきには名をだによばず、かの物はなどいひあへれば、久米の皿山に一城を構へて、懇望の人にはその香を發す。いはゞ孔明が草廬の名をかくしてその字を草冠に寓とはかけり。誠にさばかりの羣臣をしたがへて、漢の高祖の文武にもおとらねば、我も陸機が頌にならひて、今は蕎麥切の德をほむるなり。

狂云く、此の頌は北磵なり　さるは文武の兩道を云ひて、風雅の剛柔に比せるならん。然るに此の作者は、花鳥六景と云へる集に、蕎麥の花の贊を作り、今爰に此の頌ありて切の一字を添ふると云ふより、武門に文道の趣を書きなせり。或は西行の蕎麥の歌とは、此の僧の和歌の詔はざるを云ひて、鴫立つ歌の撰まれざる僻なり。或は草の字は五幹の總名ながら、草冠の字訓は名言にして、源氏に梵網は和漢の奇對ならん。或は陸機が功臣頌にも文武の二字を云へるより、爰にも蕎麥の花實を稱す。此等を託物比興と云ひて、虚實の文鑑に在るべきなり。但し作者は武門の名を隱して、濃北の山陰に嘉遁す。一竹は此の老の堂號とぞ。

不徵亦頌

森　百丸

遙かにつたふ、唐土の鸜鵒杓、鸚鵡杯は、その貌をとりその物に對するの名なるよし。丸尾のなにがしがもてるこりずまは、心をもて名となせるより、貌の方圓にはよらざるべし。かの蓬萊舞仙にならふとも、風情なほ高からん。いくばくの月をかし、いくばくの花をや浮ぶ。其の名のにほひ美

ならずや。そも／＼酒の徳は、大人先生の頌をあらはし、盧山の翁の燕つくせり。今はた我か國の風流をいはば、酒に損益の友ありて、其のうつはものもまち／＼ならんか。まづ觶酒は荷蓮華なれど、その源は臙脂坡を出でて、あまねく世に流れたる名ならずや。その下流を汲んで紅裙に醉へる人を、蛟のごとく蛸のごとくいひ誹り、皓齒蛾眉は性を伐る斧とも惜めり。これらはおのれを愛し人をさへ（？）して、或は過ぐると及ばぬとの、さかひに判らざる人ならん。たとへ身を忘れ家を失ふたぐひありとも、其の罪はみづから天性にあつて、何ぞ酒色の科にやはあらん。寝酒はその名の古ければ、酒もりすける人の心には似ず、その樂しむ事、おのれにあつて人にあらず。老いをやしなひ勞を安んじて、玉の枕をいらずして、おのづから十洲三島にあそぶ。しからば朝酒の風流にして、その人を損ぜんよりは、しかじ寝酒の愚癡にして、その己を益せんには。世に恨めしきは茶椀酒の、さしも卑しき名にたちぬるぞ。旅にしあれば椎の葉にもるといへる、萬葉集のならひをしらば、一擧萬里の心をもなぐさめつべし。されど時世は、金襴雲鶴に夏をもてはやして、夕暮東雲の涼しき名にほこりたるも、いはば榮耀のうへのこのりずまともいふべし。一樣下は名もなからめきて、そのさま狂するに似たれど、歌をひさぐ妓童も、舞を賣る倡女も、葉山しげ山のいひよるべきよすがなければ、木曾路のはしのかかる戲れもと見て置くべし。本より罰杯の捉とならば、金谷園の例も亦をかしからし。すべてその功を

いひ、その德をいはんに、その酒を海にし、その糟を丘にして、高きに登りては仙遊觀のことぶきを
なし、深きにいりては龍宮城のよろこびをのぶるとも、爰に此の杯のこりずまならんには、關雎の間
に哀樂をしりてその名のつきざる故なるべし。

狂云く、此の頌は不根の持論に似て、全篇に酒色の中庸を說きたる、誠に滑稽に調解ならん。但し此の名は和歌より出でて、物に懲りぬと云ふ事なり。然れば此の詞の讃美に流れて、誹諧の家には好むまじきに、杯の名に附けたれば屈龍に水をそゝげるが如く、杯に其の影を移して、文章の死活も物名の好悪も、此等を文鑑に見るべきなり。總て一篇の故事古語は字面に漸く察すべし。委曲に解するに暇を盡さず。

醋德頌　　高九[illegible]

醋はむかし誰がつくりそめけん。酒には城をもかたぶけて、それを恨むる人もあらんに、醋はよし
德の香のはなはだしからずや。春の始めの櫻鯛には、そよやからし醋の目をさまし、冬の生海鼠のほ
そかきには、煎酒の猪口とも肩をならぶるならん。さるを其の性の温なるより、深く女に思はれて、
遊女の肥えたるには中原の便りをまちかね、花嫁のつはりには梅津の里を戀ひわたる。ましてその事
のたひらかなるには、產屋の炭の火にそのにほひをはじきて、人參附子とも其の德をあらそふ。紅ぞ
めの盥に色をあつめ、醋貝の皿に身をうかせるも、蚫の貝の片おもひにはあらで、すべて女の相性な

らぬかは。たま／＼男の用といへば、草先草桔の寸白をおとして、その香に慮外の音をなかしむ。されど蜘舞の骨をやはらげて、都に輕業の鷲之助は、女とも見えつ、男なりけり。しかるを過去のちぎりにや、煎豆とは中あしく、大根おろしとは明暮に親しむ。その煎豆の事は佛もしろしめさじ。さばかり徳ある醋の看板には、齋の底のぬけたるをぶらさげ、叉六が門の酒帘には、往來の人の唾をひくらん。世に酒盛の名はあれど、醋盛の沙汰なきこそ口をしけれ。

狂云く、此の篇は劉伶が酒德頌に對して、題に醋德と假名を附けたるは、德字は本より和訓なくて、德の音を訓に用ゐればなり。此等は倭文の働きにして、歌書の大德も此の意ならん。或は中原は醋の名所より、梅津は梅の一字を云へる、櫻鯛の長句も紅染の短句も、慮外の音とは臆見の法にして、總て誹諧の筆格なるをや。さるを女とも見えつ、男とは歌書の詞を借りながら、鷲之助を女とも見損じたる、尤も一篇の名言と云ふべし。但し作者は越の糸魚川に住す。高野氏の誹士なり。

松茸頌　　川豈羨

世には花實のふたつありて、麥米はその實を稱し、梅櫻はその花を愛す。されど實をほめ花をほむるは、和漢に詩歌のふたつなれど、ふたつをひとつの風雅ならんには、人のつくりえぬもむべなるべし。爰に松茸といふ物は、草にあらねば木にもあらず。その花もなくその實もなきに、小萩がもとの

露にはごくまれ、菌朶の葉陰に雨をいとひて、深山のはてにおひ出つれど、その名は和漢の草紙にのせられ、中宮のおまへにも出でぬるよし。すくせいかなる種をまきてや、秋風ふかばとちぎり來しけむ。しかは浮世の嵯峨を出でつゝ、柳さくらの錦にも賣るなれ。その香は風の仄めきて、兵部卿ノ宮の膚にそひ、その色は雪の白ければ、久米ノ仙人の脛を思ふ。これより人のあこがれて、物いはざるに車をとゞめ、笑はざるに駕をかたむくよし。さは天の生質なるべし。さるから下﨟の口にかなはず。すましの汁のすめる世に出でて、みそ汁の濁れる世には居らず。子ノ曰くはじかみも、蒸松茸をもてなして、魯の哀公の饗應にも、しらけの飯に鱠はありとも、これを捨てずしてとはいふなるべし。ある日は鳳闕の千疊敷にかしこまり、ある時は魚町の八百屋に寢ころべば、今は西島の遊君ともあそび、東國の岐童にもまじはりて、吸物の花柚に色めける、いはば實もあり花もありて、其の名は風雅のひとつなるべし。

評云く、此の頌は賦體ながら、始めは美人の寵辱に寄せて、清濁の二字に轉換せしより、終りは聖人の行藏に喩ふ。況んや草木の花實より、花實に風雅の一様を起して、一様の花實に姿情を結したる、此等を首尾の文法にして、常山の蛇の働きありと云ふべし。されば和漢の草紙とは、漢に本草の菌譜を云ひ、倭に徒然の鯉の段を云へる、小萩が露も秋風も柳櫻の三詞共に、總ては古歌の俤ならん。或は其の香に其の色は、句對の中の絶妙にし

て、論語の薑(はじかみ)は好辭と云ふべし。尤も文章は置合(おきあはせ)なりと見て、清濁の詞の續きを務すべし。誠に此の名の風雅なる岩苔(こけ)針茸の堅みもなく、紅茸占治(べにたけしめぢ)の奴めりもなきを、爰には松茸の名を類して、花實の當用を知れとなり。

但し作者は越の新潟に住す。吉川氏の文土なり。

第八卷

贊類

淨土和讚　親鸞聖人

彌陀の名號唱へつゝ、信心まことに得る人は、憶念の心常にして、佛恩報ずる思ひあり。誓願不思議を疑ひて、御名を稱する往生は、宮殿の中に五百歲、むなしく過ぐとぞ說き給ふ。

狂云く、此の讚は建長六年に聖人八十二歲の御作なるが、和讚三帖の中の要文にして、一部の大意を知らしめ給へりとぞ。但し憶念の心と云へるは、佛の他力を忘れざるとなり。誠に文章博達の家を出でて、愚禿の二字に一宗を建て給へる、本より安心の法門にして、王侯貴人も自己の智能を愧づべく、張三李四も他力の恩德を忘れんや。佛法は總て不思議の三字を疑はず。深く信じ高く稱せよとなり。

卒堵婆小町ノ贊　芭蕉庵

あなたふとく、、蓑もたふとし、笠もたふとし。いづれの人か語りつたへ、いかなる人か寫しとゞめて、千歲のまぼろし今こゝに現ず。そのかたちある時は、たましひまた愛にあらん。蓑もたふとし、笠もたふとし。

たふとさや雪ふらぬ日もみのと笠

狂云く、此の一篇は短篇ながら、六箇の尊字を用ゐ、六個の蓑笠を用ゐて、然も其の句に云ひつゞけたる、さるは畢字ともいひ、疊語とも、古樂府の體にも似たらしめか。但し此の讃は湖南の才陀亭に在りて、其の畫は三井の定光坊に在りとぞ。

六玉川ノ前贊

僧　丈　草

唐の秦太虛が心地なやみける折ふし、王摩詰がゑがける輞川の圖をおくるものあり。やがてかたへの人なして、枕もとよりさらさらとひらきいだせるけしき、山深く里ほのかに、松青み水さゝやかにて、さしむかへる心地、えもいはれず。其のまゝ王維が手をたづさへて、たゞちにその風水に遊ぶがごとく、病もまた洗ふがごとくなり侍るとかや。爰に洛下の風士百丸の家に、六玉川の圖ありて、古の歌人よりはじめ、近き世の立ちめぐれる官士幽人の麗詞をも、一軸にあつめて書きつらねぬ。其のもてあそび泉石の思ひを磨きて、煙霞の眸を高うするなるべし。さりし比、草庵にこれをおくりて、我を此の書中にあそばしめ、かの風景に一句を諷はん事をすゝむ。野僧は常に物ぐさの病がちにて、遊方行脚の杖をひかざれば、六つの川瀬の其の一をだに、終に汲み見たる事なし。何いふべしとも覺えねども、竹窗のさびしさに一卷をおし開けば、その山吹の黄玉をくだくしら波、卯の花のおしかゞ

みたる一里、さらし臼の杵なげ捨てし寂しさ、秋に照りそふ月影の幽なる、汐風に啼きからしたる千鳥の聲々も、高野の奥の谷陰まで、きらゝかに思ひやらるゝけしき、とこそかくこそと興じぬれば、一擧萬里の志をすゑ立て、そゞろに見ぬ國のためしまで、思ひ續けたるいとゆかし。それが中にも野路の玉川は、我があたりちかき境なれば、まめやかに思ひとりて、これらの逸人に事とひぬれば、此の流れかつてさだかならず。その海道に狼川といふめるあり。其の西に流れたるをこそ、玉川とは聞き傳へたれど、十とせあまりの先か、膳所の住人に本間氏日端といへる翁あり。その所の名にたち寄りて、萩をおほく植ゑ置き侍るとかや。實にも朝變暮化の世に、山かたぶき谷埋もれる、その所々も少なからず。境はたゞ風致の人によりて、いさぎよき水雲の跡をもまきかへしたらん。今は一卷の玉川の水に、幾人の吟腸をか養ひてん。かの名にしあふ菊水にもおとらじかし。

六玉川ノ後贊

向　去　來

田中の山本といへる所おほく、松村四日市の名もすくなからねば、玉川の數も六つには限るまじきを、唯もてはやす人のめでたければ、その名の共に聞ゆならん。されば人は所によりてなつかしく、所は人をまちて顯はるべし。しかるを玉とよべる名の故あり、我公百丸子は、これを知り給ふや。先づよ井手の玉川は、殊に山吹の咲きみだれて、花には黄玉、葉には青玉と、置きそふ露の玉川なり。

次は卯の花垣の白妙に見えて、小夜ふけがたの時鳥の、蜀の國より津の國まで、鳴きて飛び來れるたま川なり。三にむさし野の玉川は、さらす調布のさら／＼と、流れあへる砂玉川なり。野路の玉川は外のけしきにひきかへ、萩のにしきに波越えて、色ある月の玉川なり。その五は川の淺瀨も見えず、夕汐の千鳥も、ともに吹きあげられて、風にさわげる水玉川なり。終りは名にし高野の奥にて、旅人のもし忘れても汲みや侍らんかと、大師のあはれみ給ひける、衣のうらの玉川なり。もしや人ありて我が言のたしかならずといはば、玉に卞和が足をきられて、跛ひきたるためしとも見るべし。

狂云く、此の賛は蘇子が赤壁に效ひて、前後の二字を玆に題せるは、但し道場の潤色と見るべし。されば前後の雨賛は、洛の白鷗堂に在りて、前篇は幽玄の法なるべく、後篇は頓挫の格なるべし。誠や蕉門に去來丈草ありとは、此等の文法に頓漸の二教を傳へたる、隨類得解も爰の事ならんか。前は仄かに六川の趣を演べて六趣一贊の菊水に語を結び、後は速かに六玉の意を起して、跛の一字に卑下の詞を殘せる、二篇の趣意は分明にして、前篇は以て起結を見るべく、後篇は以て虚實を知るべし。但し丈草は尾の犬山の武士なり。壯年に祿を辭して僧となる。尤も堅固の道心とぞ。

我枕ノ贊　　佐　菊伍

我はまだき老いの寐覺にもあらず、さりとて若氣の習はしにもあらで、春の夜も秋の曉かけて、寐られぬ儘に酒を思へば、情は幽寂の雨をかこつに似て、實は多病の友なるや。さはいへ寢酒朝酒の、

德利を枕とすべきにもあらねど、制すればひたすらにいもねず、伏すれば又燄火にくるしむ。むかしは唐の太宗の、雨ノ夜不レ安レ枕ッとのたまへる、あり難きためしをも思はず。かの鶯のいぎたなしといへる、枕草紙にはほめられぬべし。されば枕の寐心をえらぶに、天鵝絨の枕は油しまず、くゝり枕の最上なればと、ありし大名の隱者の仰せられしよし。我は楊弓の堋をまくりて、やがて此の物を調ぜさせたるに、をさなき妹なりけるものの、くらぶの山の人氣なき所ならねど、ねやのくらがりに手まさぐりて、女三の宮の猫ならぬにと、うつし心なく驚きたるは、夕顔の昔の化物にやとをかし。さてしも東路のはてしなき旅にも、寐なれし枕の忘られぬ物から、一夜泊りの月見花見にも、此のえせ物をともなへば、慧遠が遊山の木履よりも、李白が瀧見の瓢簞よりも、菊伍が枕の名にあふなるべし。つら〳〵枕の名をあげて、それが好惡を定むるに、あるは夢想まくらとかや。いかなる神の告げ給ひけむ、佛は寐釋迦の名に聞ゆなれど、三輪の御神はしろしめさじ。盧生が夢の枕ならば、穴の世界に五十年の樂しみを見て、爰を人間の榮華と思へる、我はそれらの榮辱をはなれて、病をたすくる便りなるをや。あるは市中の十露盤まくらに、夢の算用のあはざらんも、かけ硯の蓋のかり枕に、師走の坂を越えかねたらんも、哀樂のかぎりはあるべけれど、廬山の雨に土竈の火を燒きながら、火吹きだけに頭をこゝへたるは、此の世をかりの枕ともいふべき。さるから三味線の胴にまくらし、脇ざしの

韓に手をそへたらん、人の心のあだ枕なるや。さて下枕は世にしられて、歌よむ人の佗びをつくし、戀するものの心をなぐさむるに同じ。肱枕のかた過ぎて、論語とやらにほめられたるもあやし。されど我が朝の膝枕は、源氏物語にやはらけて、紫の上の色にこふけむ。あるは松がね岩がねなど、烏玉のよるの枕詞は、みそじ一もじのたらずまへなれば、なべての人の用にはたたねど、今も頬杖のなき乞食と、連歌師などは用ゐるなるべし。さらばあまたの枕はありながら、その世その時の用ありて、多病の人のためならぬには、我はよし此の枕とちかひて、聖衆來迎の雲の上にも、一蓮托生のちぎりをこむべきとなり。

狂云く、此の詩は全く誹諧にして、先づは我が枕の二字に題の意を盡せり。されば春の夜も秋の晩かけてと長短の情を二句に縮めたる筆力の自在を稱すべし。次に天鵝絨の枕より大名の隱者とは、名言にして、妹の段は一篇の筆占なり。然れば幽齋の雨の詩より我が朝の膝枕までに、十三筒の故事古歌を用ゐるに、腹に創なしと云へる古人の文章にも過ぎたらん。果して松がね岩がねの詞に連歌の滑を含めたる、爰を誹諧の筆格にして、一蓮托生は文の虚實と知るべし。但し作者は大野木氏にして、別姓は佐藤なるが、加納の城下に住りながら、壯年にして隱放の志ありとぞ。

黄帝ノ賛　　鈍碧川

世に神農の像をゑがきて、醫者の家にかくる事は、そのかたちの野叟ならんにも、百草をなむるに

風情ありて、文質彬々たればならし。されど病のみなもとを論じて、人を治するに便あらんは、黃帝の內經を始めとすべきには、かの登天の圖をゑがきて、我が家には傳ふべきや。先づはその模樣のけにけにしく、衣冠もありがたければなり。さてしも畫師の筆に任せて、試みにその圖を寫せるに、龍の鬚に六臣の取りつきたる樣は、世にいふ木やり石ひきたらでも、牛につられて寺まゐりなどいふべし。此の圖は岐伯をさしむかへ、其の臣はかしこにしたがひ、此の臣は爰にあるべしと、おほくは雲に半身をかきなせるに、此のたびはいとめでたかりき。ある人あり。これを難じて曰く、その事は迂濶にして、本より信ずるにたらず。人よく天年を終つて死すべきに、藥は寒暑の變を治すべしと。ある人あり。これを陳じて曰く、此の帝さばかりの醫術ありながら、その壽もつきぬといはば、醫療の術も深からず、修養の德も詮なからんと。ある人あり。二論を評して曰く、昔もある人ありて、鰻をとらふるに、此の物ぬめりて容ざまに出づるを、左をそらにし右をそらにして、ひたすりつまだて伸びあがるほどに、我が足のやがて地をはなれて、おぼえず天上せしためしもあれば、爰には此の論のつきすまじきに、いづれも天にのぼりて見給はば、黃帝の有無は一決すべしといふに、これを論贊の題となして、陳思が家にも書き傳へ侍る。

　評云、此の贊は一體ありて、古文の所謂畫贊なり。此の故に醫家の掛物に對して、暫く三皇の德を讚ずるに

似て、實は模様の新古を云へるなり。然れば登天の實有なる、牛鱸の虚無なる、例に虚實の法ありと稱すべし。況んや三箇の或人に、古來無據の或人を重ねて、誠に文武の論字より曲折深遠の體を盡せり。されば作者は山田氏なるが、別姓は蛇尾(おだか)にして、濃の上有知に住す。世以て誹を業とせり。陳思は其の家の領子たればならん。但し上有知は順が和名に云へる有知(うち)の里の上邑(かみむら)なり。

貧賛　烏落人

古より富めるものは、世のわざもおほしとやらん。老夫は爰の安櫻山にかくれて、喰はず貧樂の諺にあそぶに、地は本より山畑にして、茄子によろしく、夕顔によろし。今は十とせも先ならん。芭蕉の翁の美濃行脚に、見せばやな茄子をちぎる軒の畑と、松隱のこゝろを申しつかはしたるに、その葉を笠におらん夕顔と、その文の回答ながら、それを繪にかきてたびけるが、今さら草庵の記念となして、猶はた茄子夕顔につちかひて、その貧樂に遊ぶなりけり。さて我が山の東西は、木曾伊吹をいただきて、郡上川その間に横ふ。ある日は晴好雨奇の吟にあそび、ある夜は輕風淡月の情をつくして、狐たぬきとも枕をならべてん。いはずや道を學ぶ人は、先づたゞ貧を學ぶべしと。世にまた貧を學ぶ人あらば、早く我が會下に來りて、手鍋の功をつむべし。さらば日用を消せんに、經行靜坐もきらひならば、薪を拾ひ水を汲めとなん。

貧賛，賛　　　　　　東華坊

世にいふ曾我十郎が詞とかや、貧は諸道のさまたげなりと。さるは世にある心より、世にある人をうらやめるならん。誰かしらん、道を學ぶ人の、先づたゞ貧を學ばんとは。されど孔子は世の中を教へて、一簞一瓢の顔回を稱し、釋迦はまた世の外を教へて、乞食三昧の迦葉を賞す。貧はいさ世にありて學ぶべきや。亦唯世を出でて學ぶべきや。これらの經説にあやかされては、西に向ひ東にたゞよふならん。爰においては儒佛の根をおせば、世にある人も世を出づる人も、富を學ぶ時は富にあかず、貧には貧のかぎりあればならん。人もし此の理をしりつくさば、貧を學ぶとはいふなるべし。況んや富に居て貧に逢ふはくるしく、貧に居て富に逢ふはたのし。苦樂は誰も明らかにしるべければ、先づそのくるしからんより、先づそのたのしからんにはと。されば此の作者は蕉門に名ありて、そのはじめには素牛といひ、その後は惟然といふ。鳥落人は彼が標號なりとぞ。むかしは千金の家にそだちて、始めは文學の窗に頭をかたぶけ、後には禪法の室に眼をさらす。さして妻子をたづさへながらも、希有のをのこにはありけらし。かかれば酒色のあそびにもすさまず、博奕のつひえをもなさずして、千金の所帶は何になり行きぬらん。さりとて龐居士が船につみて、西の海へ捨てたる沙汰も聞えずと、その比の人のふしぎがる中に、ある夜木曾寺の雜魚寢(ざこね)するとて、木枕を帶にてくるくるとまきたるを

見て、さなん鉢びらきの境界ながら、天窗に榮耀の殘りたれば、さてはかの千兩の金は、あのあたまにこそつひえけめと、故翁もたはぶれ申されしが、其の後はます〳〵貧の名を得て、心つくしの浦々をへめぐり、思ひこし路の山々をかけ廻りて、夷がちしまの果てまでに、藜の杖に小角の衣をひるがへせば、草の枕に王孫の袂をしぼりて、奈古曾の關守もかの素牛なるをしり、富士川の船頭も、その惟然なるをしる。しかしながら、此の御坊ありて、蕉門のみちはふみわけたりといふべし。さるを故翁の滅後より、誹諧は唯無分別の物なり、意にしたがひ口にまかすべしと、我が門の句格にもかゝはらず、理知明了の人をあざむけば、人は誹諧に老狂せりともいふなり。誠にその人の體相をとらば、滅明和尚と名にまぎれ、誠にその人の文學をいはば、宰我先生も跣ならんに、さるをば無依の道心者とやいふべき。但しは不覺の風顚漢とやいふべき。釋迦も孔子も此の人においては、褒貶の口をおほはるべし。然るを粟津の丈草は、其の比の惟然を見とゞけて、御坊は貧に高ぶりの附きたりとは、千疑一決の名言にして、佛者は佛家の法をたのみ、儒者は儒門の理にほこれば、隱者は隱者の功をすつべく、貧者は貧者の贊を忘るべし。されど丈草の名言は、世情をしれば學びやすく、惟然の貧は永く學びがたからんよ。世に惟然ありて丈草なく、丈草ありて惟然なからんには、いさや貧福の論贊は、聞きまがふ人もあらんにを。

狂云く、此の崗賞は學貧の二字より、前篇は我が會下の詞を稱し、後篇は丈草の名言を賛す。されば此の賛の後端に、曾我の詞の若輩なるより高く儒佛の至論をなせる、例に誹諧の筆格より、例に虚實の自在を見るべし。或は關守に暗頭の一對は西行に天龍の佛と知るべし。或は減明和尚とは孔子も此の人の貌を見ては鉢坊の如く思はれんに、和尚の二字は勿體を云へる、これを雙關の文法にして、他の及ばざる筆力なり。宰我も減明も家語に此の事あり。然れば此の篇に抑揚の法あれば、結語に聞きまがふ人あらんとは、世情の贊談には及ばざる謂ならん。尤も此の讃の奥書を見れば、先師亡名の夏なれば、惟然と同年の作なるべし。但し惟然は美濃の素生なり。

蚊柱自贊

其角

蚊ばしらに夢のうきはしかゝるなり

むかし定家卿の浮橋は、過去よりも現在にかゝれり。此の未來をとりて夢鄕に入る。これ又おのづから無窮のさかひをしるなるべし。

狂云く、此の一章は濃の東羽亭に在りて、屏風に自筆の色紙なり。然るを四字の題名を加へて、例に道場の潤色となせり。されば定家卿の歌に、春の夜の夢の浮橋とだえして峯に別るゝ横雲のそらとは、無心所著の所にして、此の卿の風格は千吟萬詠も此の體なるを、晉子も一生愛を學べり。此の故に彼が誹諧には世の耳に落ちざるも數多ありて、果して辭世の句に至りて、鶯の曉近しきりなゝすと云へるは、春の曉に秋を思ひ寄せたる、或に命終の哀れにして、未來とはこれを云ふべし。但し其角は武陵に逝放す。晉子は彼が畫名なり。

贊ニス徒然ノ贊ヲ

江北房

世につれ〴〵草といへるは、關白良基公の吹噓より、その後は伊豫の入道にもてはやされ、當時は壽命院の抄にしられて、二百四十四段にわかち、一だん〳〵に註せられしより、今はた詩歌連誹はしも、儒佛老莊の說にわかれて、儒佛の家には爲人ごと註し、莊老の門には無我かとおもへば、抄者は抄者の意を註して、作者の情はその中にかくるゝなるべし。さるを黄山の東華房ありて、藤關白の爲辨抄を傳へ、武陵翁の師說をまじへて、つれ〴〵の贊九卷を作れり。首卷は凡例大綱より、別錄は園公賢の、園太曆の趣をつみて、或は兼好の艶書の論を定め、或は兼好の終焉の地をあかす。これらは古來の十五抄にも、七章八貨の事ながら、其の餘の二百四十餘段も、爲辨太曆の趣を見ざらんには、總ては抄者の推量といふべし。扨こそ此の贊は、大意を括りて、大段は四十九段にして、それが一段に四字の名を題し、小段は二百三十七章なり。さるは序文の狂の字より、跋語の笑の字を贊するに、畢竟は涅槃の一字不說にして、つれ〴〵一部は和歌の語法とぞいへる。さればや初段に法師の一節より、諸抄の人のまどひそめたるは、例に兼好の本情の、抑揚褒貶をさとらざれば、字面のまゝに註し出せるに、文理不到の所には、爲人無我の四字をもて、自己の道理をいへるなるべし。そも〳〵我が贊の贊する所は、はじめに好色の段を贊して、色は誠にこのむべし。このまざる人は荒淫すとは、至

極は無極の道理ながら、爰を兼好の家法にして、或は酒には下戸ならぬとも、或は月花を見ぬものとも、或は是非に喜怒のわかれも、或は財力に儒佛のたぐひも、終りは長者の一段に、人に大欲をすゝめたるは、何かは好色の二字にかはらん。一部の趣意は一串につらぬきて、詞は花鳥の風流にあそべども、心は儒佛の理外にかけりたる、究竟理卽の四字を見て、狂笑の二字に賛者を讃すべしや。

狂云、此の賛は徒然草の大意にして、文章の鼓舞を用ゐず。賛に其の賛を賛すと云ふべし。されば關白良基公とは觀應の比の攝相にして、伊豫入道とは今川了俊なり。次に爲辨抄は、故禪閤の聞書きとや。兼冬公の奥書にて天文二十一年とあり。さるは後花園の御時なるべし。尤も此の抄は書本にて世に普く傳へずと見えたり。或は公賢(きんかた)の園太暦は、全部百卷の史書なりとぞ。其の世に故ありて減板なりと。其の間に兼好の事跡を載するに、延慶の始めより文安の末までに、總ては四十餘段はありとぞ。然れば此の賛の趣は、徒然の賛の本文を見て、其の段の下に通明せざらんには。

銘類

花桶ノ銘　　雛　立　甫

花といへばよし野の山を思ひ出でられ、芳野といへば花の吹雪の思ひ出でらるゝより、いづれか此の名の本すゑならん。

むかし誰かかゝる櫻のたねを植ゑてよし野を春の山となしけんとあり。其のいはれしれがたし。

往云く、此の一篇は花桶ノ記なりと、或人の書き傳へたるが、其の桶の名を芳野山など云へるにや。然るを中間に一首の古歌を置きて、前後は序詞の筆格あるより、爰には銘の一字を題せり。但し此の作者は、中比の誹士にして、雛とは此の人の家名とぞ。

摺小木ノ銘 幷序

藤　如行

数ならぬみのゝお山の松の木は、君がやちよのためしにもひかれず、谷の坊にこじとられて、すげなき法師にせられ、名をさへ摺小木とよばれぬる。すくせの果報も無念ならずや。そもそも七種のゆふべより、御忌御影供の寺々をかけめぐり、唐辛の爲に目をおどろかし、芥子（からし）のために鼻をはじかれて、蓼にはいかり、胡麻にはよろこぶ。その心さらに定まる時なし。かくて靈まつる比のいそがしさ。たまたま稚の壁にかゝりて、蛍の音にねぶらんとすれば、俄に碓の槌にやとはれ、或は悋氣の鐵丁にふりまはされて、果ては臺所の轉寝もわびし。ある日は大根おろしに心せかれ、ある夜は貝杓子の音に起きてさまよふ。まして時雨に雪のちる比は、其の汁此の汁にいとまを得ず。春の始めの雜煮より、大年の果ての夕飯まで、生涯さらに五十年とは知りながら、かく摺り暮すこそ口をしけれ。かかる婆婆界をへめぐりて、賤男賤女の麵棒とならんより、今年は永平寺の會下に行きて、江湖の僧を供養せ

ば、おのづから三十棒の結縁にあひて、豁然大悟の曉にいたらざらんやと、おのが片腹を押しけり
て、此の心をぞ銘し侍る。

さもあれ所帶の夢さめて
松風の音ぞ峯に聞ゆる

狂云く、此の銘は北嶺なり。本より如行は美濃の産にして、其の姓は近藤なりとかや。武名を辭して漂流せしより、爰に發端の詞を知るべし。然れば此の篇は其の身を觀じて、世に住らば誰か此の是非を遁れんとなり。されば世間の諺に、或は南禪寺よりも永平寺とも大摺小木の枕詞なるを、今は三十棒の起語となせる、例に誹諧の筆格を得て、蕉門に此の作者ありと云ふべし。況んや其の銘の洒落なる、漢に寒山の詩風を傳へて、爰に豁然の曉を云へるなるべし。

箸箱銘并序　　西華坊

蓑里にふたりの師あり。其の師は茶の湯と誹諧となり。されば茶人の風流は、本より山林に情をよせて、市中に閑を求むときけば、世に危からぬ遊びならんに、誹諧は老いの白髮をも染めて、酒肆淫房の交はりにも疎からず、花鳥の世情に遊ばんことを思ふ。さらば此の二つには中庸の掟もあれど、若き時は茶に閑なるべく、老いては花鳥に其の情を放つべし。我聞きぬ。蓑里は箸箱に銘して、西華

門人と書きぬるよし。かつは虛にして、かつは實ならんか。されども今の若からんには、明暮の茶の湯に心しづめて、先づはそのかたの師をあがむべしと、その箸箱のうらに此の銘をとゞむ。

箸箱のふたりよばれてたまに逢ふ、その師も竹の若からで、我より松の老いぬらん。酒には蘇もし茶にはさめつ。茶に醉ふ人のためしやはある。しからばその師たふとかるべし。

狂云く、此の銘は禹錫が陋室に效ひて、尤も八句にして四韵なり。但し箸箱の五文字は、蓋と云ふべき枕なれば、例に發語の云ひ捨てならん。次に其の師以下の句は、尤も四句にして二句の意なれば、これも禹錫が山水の四句を以て、二句の意なるに效へり。次に然らばと返辭を置きて、これを韵外の跋語となせるは、これも禹錫が七字の結語にして、總ては長短の句法を用ゐたる、和漢に通用の文鑑にして一字の私なきを見るべし。されば其の銘の二人とは、外面は箸箱の事に寄せて、饗應(ふるまひ)に呼ばるゝ緣語ながら、兩師は同時の名に呼ばれて、其の日の崇敬を云へるならん。まして松竹の一對など茶人と遊べる風流ながら、老若の心は分明にして、これを錯綜の奇法と稱すべし。誠に一篇の揖讓より師弟の實訓を感ずべきや。但し蓑里は大島氏にして備の倉敷の產なりとぞ。

旅硯ノ銘

桐　左　角

墨に飛龍の影を驪して、　花に吟ずれば雲おこり。
筆に猛虎の勢ひを寫して、　月に嘯けば風はげし。
其の銘、　蓋とれば箱よりすゞし雲のなみ。

狂云く、此の銘も但し一體なり。筆墨の二字より龍虎の容に寄せて、月花の一對は旅の風情と見るべし。然るに序詞の四句二韵なるを、後の銘語に云ひつゞけたる、これをも首尾の韵にして、法格は千變萬態ならんか。

古硯ノ銘 并序

東　華　坊

此の家に硯あり。その硯は大石内藏が所持にして、播磨の人の持ち傳へて、爰の播東に得させたるよし。其の硯のぬしの武功をいへば、今の世の鑑にもてはやされて、君としてをしむべく、臣としてもうらやむべし。彼たゞ武にして文なからんや。花の木陰には鎧の袖をかたしき、馬の上には槊をよこたへて、その日の風流を見すごさず。況んや麾下の四十餘人も、おほくは武の其角が風雅を傳へて、おの／＼文武ならずといふ者なし。さるは其の比の草紙にも書きつたへて、今さら其のほまれをいふべくもあらず。誠や硯の命のにぶくて長からんに、つはものゝ心のとくて短からんには。今はたゞその人のその硯も、世の功名に身をしりぞけて、三國の浦の風月にあそべる、いはば范蠡が俤にもかよひて、此の名を西湖ともいはましや。

硯は花鳥のうつはものならんに、風雅のたよりなからんは卑しく、硯は黒きもの先づたふとし、紫の華やかならんにはしらず。あるは人しれぬ戀の中ぞらに、蜑のをぶねのこがれあひて、硯の海の深き思ひをもよせつ。あるは故鄕の戀しきには、鴈に越路の便りを得て、忠義の人の譬へにも引く

なる。臣は此の水のつきざらんにて、君は八ちよの舟うかぶらむと

狂云く、此の銘も長短の句法ならば、五章にして十二句なるは、中の二章は六句にして二韵なり。これを首尾の韵の定法と立つべし。前には書箱銘に古法を守り、爰には古硯銘に新格を用ゐたる、此等に文鑑の公論を知るべし。但し此の題は唐子西が銘に效へる、彼が銘目の六句にも、尤も六韵の論はありながら、例に漢韵の沙汰は覺束なし。されば君舟臣水は貞觀政要の詞より、總ては文武の兩用を云へるに、花の木陰は忠度の歌を含み、馬上の槊(ほこ)は曹操の詩を寄せて、和漢の文武に和漢の詩歌を對せる、誠に文筆の神にして、博知の自在に驚くべし。然るに大石が忠節は、文苑武林に名を稱して、古今未聞の武士なれば、或は生前の文書を尋ね、或は死後の調度を求めて、心ある人は祕藏せりとぞ。但し搢東は三國に住す。素生は播州の人なりとぞ。

杯ノ銘　　僧　丈　草

花はさかりに月はくまなきをのみ見る物かはと。酒は晝十夜八ならんをや。

狂云く、此の銘は短簡にして韵を用ゐるに奇法あり。さるは古人の詞を借つて、今人の諺に取合はせたれば、たゞ一章三句なるに似て、二句二韵なる所を見るべし。況んや月花に晝夜を對せる、著述に自在の人なるをや。爰に晝十夜八とは、世に杯の諺に、晝は十分酒を盛るべく、夜は八分にと云へばなり。但し此の餘の銘類も、倭朝に菅三品紀納言など、種々の體格を見合はすべし。

第九卷

日記類

芭蕉翁終焉記

晋　其角

そもく此の翁は、その身貧窮なりと雖も、その德の風雅にとゞめるや、二千餘人の門葉ありて、夷洛ひとへに合信する、因と緣とのふかしぎなる、いかにとも勘破しがたし。されば天和のころならんか、武江の草庵に急火の難にかこまれ、潮にひたる苦をかづきて、煙の中に生ひのびけん。これぞ玉の緒のはかなきはじめなるや。爰に猶如火宅の變をさとり、應無所住の心をはなちて、其の次のとしは、甲斐の山里に身をかくし、富士の雪のみつれなければや、三更月下入無何といひけん、むかしの跡もなつかしければ、そこの人々は嬉しくて、燒原の舊草に庵を結び、しばし心をとゞむべき便りにと、一株の芭蕉を植ゑ置きて。たらひに雨を聞く夜とは、その世にその時の吟なれば、人はおのづから芭蕉の翁とも呼びならし、其の比に圓覺寺の大顚和尚とかや、易にくはしくおはしけるに、ある時此の翁の本卦を見て、萃といふ卦に當れるよし。これは一もとの薄の、風に吹かれ雨にしをれて、

うき事の數のみしけれど、命つれなくからうじて、世にあるさまにたとへたり。されども其の字をあつまるとよみて、其の身はひそかならんとすれども、かなたこなたに事つどひて、心をやすんずる時なしとぞ。誠や聖典の語に感じて、かの草庵に入り來る人々の、道をしたひ風をまなびずといふものなし　かくて貞享のはじめの秋は、大和路や、よし野の奧までも、たづね行く心のくまを殘さず、とく／＼の水に袂をしぼりて、これより人の見ふれたる、茶の十德に嵯峨の木笠、いかめしきあられに風狂し、身を行脚の風に吟行して、その名の東西にひゞくより、永く正風の師とぞ仰ぎける。禪は本より佛頂和尙に嗣法して、ひとり開禪の法師といはれ、一氣鐵鑄生といへるいきほひながら、色身もやゝくつをるゝまゝ、何ごとのからびたる姿まで、自然と山家集の骨髓をえられたる、誠は我が道の杜子美にして、貧交やゝ人にあつく、宗鑑が洒落も敎への一かたならん。むかしは象潟に能因あり、木曾路に兼好あり、二見に西行も、高野に寂蓮も、越の便りは宗祇宗長、しら川には兼載の草庵ありて、いづれも此の道の故人ながら、我が翁のまぼろしにつきて、いざや／＼とさそはれけん、行方のそらもたのもしくや。慈鎭和尙の旅の世にまた旅ねしてとよみ給へるも、これらの境界に思ひあはせて、四たびむすびて四たび住みすてし、深川の名殘も此の限りなるや。ことしは伊賀の古里にかくれて、しばしの閑素をうかゞひ給ふに、さは心ある人に見せばやと、津の國なる人にまねかれて、そこ

にも冬籠りの便りあらばと、せちに思ひ立ち給へるも、例に道祖神の勸めなるべし。さるは長月の晦日のほどより、泄痢の勞にたふれふして、物いふちからもなく、手足もこほりぬるまゝに、あはやとあつまる人々の中にも、去來、丈艸は洛より來り、乙州、木節は大津より來る。膳所の正秀も、平田の李由も、支考惟然は本よりそこにありて、おの／＼針藥の供給をつくし、父につかふるはその子にもまさり、手になをしふるはその父にもすぐれたらん。かくても木節が藥になん、死期まで皆をうるほしてんと、その後は人にもあはずなりぬ。されば其角はある人にさそはれて、和泉の淡の輪といふ所より、吹井のふねの浦づたひして、十一日のゆふべ難波につきて、先づは翁の行方たづね侍るに、かく惱みふしおはすといへば、思ひかけず胸つぶれて、その病牀にうかゞひよりて、此のほどの覺束なさをのぶるに、力なき聲の詞をかはすのみなり。今は年比の心ざしもかよひ、住吉の神のひき立て給ふにやと、かつ嬉しく、かつかなし。さて十二日の申の時ばかり、死顏うるはしく眠れるを期として、此の世のいきもたえはてぬらん。人々あきれたるばかりにこそ。其の夜ひそかに長櫃に納め、商人の用意にまぎらはして、川船にかき乘するに、ぐしつるもの十人あまり、苦もる苫に袖さむみ、旅寢こそあれ／＼と、ためしなき奇縁をつぶやき、稱名も觀法も、ひとり／＼の心にして、年ごろ日ごろの頼もしき言の葉、むつましき教へをかたみにて、誹諧のひかりをもうしなひ、なき人の名のみしたふ

べき、きのふをけふのむかし物がたりとはなりぬ。もしや松島のまつ便りも遠く、越のしらねのしらぬはてしにて、かくあぢきなき事あらば、聞きておどろく計りならんに、一夜もそひてなきからの風をいとふは、此の人々のほいならぬかは。此の期にあはぬ門人のなげき、これより思ひやるもいくばくぞや。さてしも鳥にさめ鐘をかぞへて、伏見はあけぼのの霧のまぎれより、湖南の義仲寺に棺を移して、近里遠境の名を傳ふる人は、まねかざるにはせ來りて、およそ三百餘人なるべし。墓は木曾殿の塚にとなりて、おのづから古びたる柳もあれば、かねては終焉のちぎりなるやと、そこに野面の無縫塔をまねび、あら垣をしわたし、冬枯の芭蕉を植ゑて、その名の記念とはなせりけり。實にも所はながら山や、音羽の峯も近ければ、鳰のさゝ波も爰によせて、漕ぎ行くふねも觀念の便りならずや。樵路の鹿、田家の鶴、すべて湖上の月に映じて、此の廟前の風景となれば、遺骨も永く此の地に清からん。さらば其のさかひもはるかに、其のほども遠く、風の便りに我が翁をしたはん人は、爰に此の記をもて、廻向の便りとすべし。

狂云く、此の記は枯尾花と云ふ集に在りて、今の文とは増減の所あり。さるは獅子庵の遺稿を見るに、元祿乙亥の春か武江に我が師と對論ありて、其の後は書通りに増減せしや。贈答の書に此の事あり。尤も花實の評論と見えたり。

されば、天和の急火より故翁の生涯を書き盡せるに、本より大巓の易に泥まず。況んや佃頂の禪に撓まざる風雅の閑寂を身に行ひ、俳諧の洒落を意に樂しめる、其の師の本懐を盡さずと云ふ事なく、其の師の遺命を傳へずと云ふ事なし。誠に此の道に其の翁ありて、其の翁に此の弟子あるをや。或は能因、猿丸などいざさそへと幻に誘ひぬらん。終焉の文の奇絶にして、眠れるを期として息たえぬとは、終焉の詞の文鑑と云ふべし。まして舟の夜の哀れなる、落月の霜も其の夜の明け方ならんか。然るを此の記の胸次を云はば、湖上の風景を眉前に寄せて寂室和尚の風流より骨も清からんと結語せる筆陣に、風雅の暇ありて古來の終焉にも記せざる所ならんは。爰に晉子が筆力を知りて、我が門に此の作者ありと感ずべし。但し此の記は元祿甲戌の冬なり。

庚午紀行　　　風羅坊

百骸九竅の中に物あり。かりになづけて風羅坊といふ。誠にうすものの風に破れやすき、榮辱のさかひをいふにやあらん。彼は狂句をこのめる事ひさし。終に生涯のはかり事となして、ある時は倦んで放擲せん事を思ひ、ある時はすゝんで人にかたん事を思ふ。その是非や胸中にたゝかひて、これが爲に身やすからず。しばらく身を立てん事をねがへども是れが爲にさへられ、學んでその愚をさとらん事を思へども、これが爲にたゞよふ。されば西行の和歌における、宗祇の連歌における、雪舟の繪における、利休の茶における、その貫通する物は一なり。しかも風雅におけるものは、造化にしたがひて四時を友とす。見る所花にあらずといふ事なく、思ふ所月にあらずといふ事なし。その像の花に

あらざる時は、夷狄に等しく、その心の花にあらざる時は、鳥獸にも類すと。夷狄を出でて鳥獸をはなれ、造化にしたがひて、造化にかへれとなり。さて此は神無月の、そらのけしきも定めなき、身は風葉の行方なき心地して、

旅人と我が名よばれん初しぐれ

ある人は詩歌、文章にはなむけし、ある人は草鞋の料をつゝみて、かの三月の糧をあつむるに、一芥のちからをいれず、紙衣綿小などいふもの、帽子したうづやうの物まで、心々におくりつどひて、雪霜の寒苦をいとふ。あるは小船に棹さして、別墅にまうけし草庵に、酒を携へ來りて行方を祝し、名殘ををしむ。さるは故ある人の首途するに似て、いと物めかしく覺え侍る。そも／＼道ノ記といふものは、貫之、長明など、阿佛の尼の筆をふるひ、情をつくしてより、餘はみな其の俤に似かよひて、その糟粕をあらたむる事あたはず。まして淺智短才の筆には盡すべくもあらず。その日は雨ふり晝より晴れて、そこに松あり、かしこに川ありなど、誰も／＼いふべくおほえ侍れど、黃歌蘇新のたぐひにあらずは、更にいふ事なかれとぞ。されどもその所々の風景は、その時の心に殘り、山館野亭のくるしさも、かつははなしの種となり、風雲の便りとも思ひなして、忘れぬ所々は書きあつめ侍るに、猶ゑへる者の猛語にひとしく、いねる人の譫言にたぐへて、人もまた亡聽せよ。かくて武藏野の冬枯

に、箱根足柄は雪もふりつゝ、さて遠江より三河をわたり、いらこ崎といふ所に、杜國が幽棲をとぶらひて、ことしも美濃尾張の間に暮れなんとす。

旅ねして見しや浮世の煤はらひ

みのより十里の川ふねに乘りて、むかしも桑名よりくはでとよめる、日永の里に馬かりて、杖つき坂のぼるほど、荷鞍うちかへりて馬より落ちぬ。

歩行ならば杖つき坂を落馬かな

物うさのあまりかくいひ侍れど、終に季の詞いらず。今より名所は雜の句もしからんか。それより伊賀の古里に草鞋をときて、

舊里や臍の緒に泣くとしの暮

爰にきさらぎも半ば過ぐる程は、そゞろにうきたつ心の花の、我をみちびく枝折となりて、芳野の花に思ひ立たんとするに、かのいらこ崎に契り置きし人の、共に旅寢の哀れを見つゝ、かつは我がための童子となりて、道のたよりともなりなんと、みづから萬菊丸と名をいふ。誠にわらべらしき名のいと興あり。いでや首途のたはぶれ事せんと、其の笠のうらに狂筆す。

乾坤無住同行二人

よし野にて櫻見せうぞ檜木笠　風羅坊

芳野にておれも見せうぞ檜木笠　岩菊丸

世にいふ藏頭の格とやらん。岩菊が句法はさにやあらん。これも欒書のたはぶれなればならし。さして旅の具のおほからんは、道のほどのさはりなればと、物みなはらひ捨てたれど、夜の料にと紙衣ひとつ、硯筆薬など、晝笥やうの物も、あるにまかせて後にせおひ出でたるに、いとゞすねよわく力なき身の、跡ざまにひかるゝやうにて、道さらにすゝみえず、たゞ物うき事のみおほし。

くたびれて宿かる頃やふぢの花　葛城山

尙見たし花に明け行く神の顏　臍峠

雲雀よりそらにやすらふ峠かな

芳野の花には三日とゞまりて、あけぼの誰かれのけしきにむかひ、有明の月の哀れなるさまなど、心にせまり胸にみちて、あるは攝章公の眺めにうばはれ、あるは西行の枝折にまよひ、かの貞室がこれはこれはとなぐり捨てたるに、今はたいはん言葉もなくて、いたづらに口をとぢたるいと口をし。

思ひたてる風流いかめしく侍れど、爰にいたりては無興の事なり。

高野山

ちゝはゝのしきりに戀し雉子の聲

和歌浦

行く春を和歌の浦にて追ひつきたり

それよりは和歌の浦づたひに、津の國をも行き過ぎて、須磨明石の間にたゞよふ。卯月中頃の空もおぼろに、はかなきみじか夜の月もいとゞ艶なるに、山は若葉に黒みかゝりて、時鳥も啼き出づべきしのゝめの色は海のかたよりしらみ、上野とおぼしき所には、麥の穗あからみあひて、漁人の軒ちかきけしの花も、たえ〴〵に見わたさる。かの平川を書きつくしたる人も、かかる名所のゆかしさにやあらん。

蜑の顔先づ見らるゝやけしの花

されば東須磨、西須磨など、濱須磨とかいひて、此のさかひ三品にわかれて、あながち何わざするとも見えず。藻汐たれつゝなど歌にはよめれど、今はかかるわざするなども見えず。濱にきすごといふ魚をあみして、眞砂の上にほしちらしけるを、鴉の飛びちりてつかみさる、これをにくみて弓をも

ておどすぞ、蜑のしわざとも覺えず。もしや古戰場の名殘をとゞめて、かかる事をもなすにやと、いとゞつみふかく、むかしぞ思はるゝ。誠に須磨あかしのそのさかひは、はひわたる程といへりける、源氏のありさまも思ひやるにぞ。今はまぼろしの中に夢をかさねて、人の世の榮華もはかなしや。

かたつぶり角ふりわけよ須磨あかし

狂云く、此の記は元祿の庚午ならんか。世に傳ふるも多ければ、或は乙丑紀行とも云へる、其の紀は貞享の秋なるべし。さるを武江の芭蕉庵にて、紀行を取捨し給へるは、元祿の辛未と見えたれば、兩紀の文法を取合はせて此の篇をなせりと見ゆ。尤も故翁の書き捨てし文章の反故には、幻住庵の賦と記とに三通の違ひある如く、幾度も取捨し給へるを、人は祕藏して書き傳ふる故なり。見る人は尤も點檢すべし。されば此の紀行の婉麗なる、これを詩歌の人も稱し、これを連誹の家に學びん。さるは芳野の花に至りて一唱一字の作をなさず。無興の二字に筆を絕ちたる、これを文章の虛實にして、これを文章の起結と云はずや。尤も我が師の碑文にも、此等の奧義を云へるならん。或は名所に雜の句の事は、蕉門の式目に證句ありて、蝸牛の句は雜ノ體とも云へる、或は猿ノ面の類ならん。口傳 但し此の記に用ゐる所の故事古語など數多なる中に、芳野に攝章の二字は誰にかあらん知らず。或は章と書きたるもあり。尤も詩か歌の作者ならん。然れば此の記の結文は、蝸牛の一句に書き捨てゝ、其の終りを調へざるも、先づは紀行の模樣ながら、莊子が蝸牛の爭ひを寄せて、源氏六十帖の榮落より人間一世の夢幻を觀じたる、例に一篇の骨節にして、近く紀行の文鑑と見るべし。されば杜國は故翁の愛弟なるに不幸短命の歎ありと、故翁の笈文子に書き給へり。素生は尾城の人なりとぞ。但し此の篇に風羅坊とは、故翁に三箇の狂名な

ぶら、其の後も此の號あり。

自造ル終焉ノ記ヲ　　　　東　華　坊

今年は寶永辛卯の秋なりけり。東華坊みづから終焉の記をつくりて、筆を捨て往生す。此の日は八月十六日なり。世に容あり名ありてより、名ありて容なきものをば、鬼ともいひ佛ともいへど、さるは繪にかきても見るらんに、容ありて名なきものは、世さらに傳へても聞かざるべし。むかし達磨は少林寺に跡をかくして、葱嶺に片足の履をたづさへ、片岡に一首の歌をよめるか、死してその魂のかよへるや、生きてその名のかはれるや。これを佛者の意生身とも、權者の不思議ともいふなるよし。されど隱峯の坐脱立忘をあざむきて、さかさまに立ちて往生せられしも、生死に自在の過ぎたれば、臨終のあはれもさめたらんに、普化はさながら棺の中よりぬけて、雲に鈴ふり遊べるなど、いはば世の人をあやかして、法をもてあそぶ輩ならん。さりとて筆歌の雲に聞え、香花の雪とちりぬらん世なに、往生の名を傳へたるも、滅後に人のもてはやして、生前に一字のほまれを聞かぬは、さはいへ聖賢もほいなからんに、よくもあしくも此の世ながらの、岩のはざまにかくれ居て、水の蛙の我をやとも、聞くらん時はなぐさみぬべし。さてやはもろこしの范蠡も、功名の間に時をしりて、西施と五湖にあそべるが、名は九たびかはれるよし。周に老聃ともいふべければ、魯に孔丘ともいふべきにや。

但しは西施が色にめでゝ、老いのにげなきさまならんにも、范蠡の二字は古今にかゞやきて、好色のたのことといふ沙汰も聞えず。しからば人には終る所ありて、名は善惡の鑑なることをしるべし。さるをや我が朝の人は、やはらげてよそぢにたらで死なんをといへるは、心の花のちりがてに、世はたゞ色のかぎりをぞいふなる。そも／＼東華坊は、芭蕉門に入りて、誹諧に其の理窟なき事をしりて、誹諧に此の道理ある事を知らざりしに、蔦の葉の句評に、阿翁の論を聞き得て、誹諧はかく理窟なし。物に不盡の情をとぞしれる。さるは元祿の始めなれば、年まだ二十四五なるべし。東は松島象潟より東がちしまに波のよるべをたづね、西は松浦箱崎より、唐ぶねの便りあらばと思ふ。まして三越路は鴈の行きかへりて、南はすみよしの春をしも、和歌の浦波に風骨を洗ふに、身は花鳥の風情ある中に遊び、心は雲水の行方なきかたを樂しみて、終に芳野山の一句に口をとぢたるが、其の年は寶永の庚寅にして、齢は老いの四十六なるなり。されば先翁は誹諧の姿をしりて、初めて和歌の情をほどきながら、百世の光を方寸につゝみて、終に誹諧をもて人に說かざるに、我は一理に萬理をくだきて、風姿風情の二論より、新古の差別をあかしたるは、佛に經ありて經に論あるが如き、其の論は自他の好惡をあばきて、その世の宗匠にも口をひらき、その頃の學者をも咳破せる、これたゞ弟子の名に苦しめる所にして、且は師の光をかゝぐるの時ならん。阿翁ははやく無爲の樂しみにかへり、弟子はなほ

有爲の名にはこゐも、物には先後の序（ついで）ありて、古今に道のしからしむる故なるをや。しかるに去年の
春三月十二日か、洛の雙林寺に假名の碑を立て、阿翁の遠忌のとひはてたるを思へば、爰に功名の二
字も、我が身ざまにおふせたらん。今は終焉の一大事をこそと、故國の黄山に跡をくらまし、門人白
狂がために六一經を説きて、滅後の變化をもさとして、後は東西の書音に風雅の交はりをたちて、支
考の二字を傾れるより、東華坊もなく、西華坊もなく、獅子庵もなく、野盤子もなく、誹諧はよけれ
とのほまれもなく、隱者には似あはずのそしりもなし。さらば是もなく非もなきには、風姿もあらず
風情もあらぬに、萩の下枝の色やなからん。荻の上葉の音やなからん。いざ宵の影のほの〴〵と、今
宵の月ぞ此の世の見はてなりける。

　狂云、此の記は莊周が齊物を趣として、題名は但し篇中の詞なり。さるは起文に容名の二字より、容ありて
名なき物とは、これを終焉の意として、在る人は愛を勘破すべし。されば一篇の故事古語には、側に和漢の自在
ながら、葱嶺の對の新奇ならんより、花鳥に雲水の一對は、誠に此の篇の骨節にして、我が師の本情は、此の二
句に見徹すべし。或は水の蛙とは、在中將の歌ありて立ち聞きの事なるを、西行の歌と取り合はせたる、これも
變關の法とや云はん。ましてや眞に住吉の古歌を讀け、住吉に和歌の名目を續けたる、全く變關の文法と知るべ
し。或は蔦ノ葉の句評とは、我が師に發悟の故ありて、湖南に曲翠亭の夜話なる由、先に陳情ノ表に此の事あり。
或に芳野山の一句とは、庚寅紀行の芳野の部に、歌書よりも軍書に悲し芳野山と云へる我が師の雄の句に、隱士

梁門と難陣の詞ありて、故翁に芳野の發句なき故を明せり。或は風姿風情の論とは、先には葛の松原を撰して後には續五論の拾遺あり。總ては俳諧の理論なり。或は今の六一緒とは、我が門の三十五條を註して、一句に六句の姿情を附け分けて、六卷を一歌仙に綯り合はせたる八度の變化を云へるなり。但し獅子庵の遺稿に在りて、書肆に出さず。然れば一篇の結文には、諸法皆空の所より眼に萩の色をとゞめ、耳には荻の音を殘せる、これを佛教の生滅自在と云ひて、これを文道の死活自在と云ふべし。但し結語は人丸の歌ながら、辭世の詞を借れるなるべし。

碑文類

芭蕉翁石碑ノ銘 幷序

東華坊

我が師か伊賀の國に生まれて、承應の頃より藤堂の家に事ふ。その先は桃地の黨とかや。今の氏は松尾なりけり。年まだ四十の老いをまたず、武陵の深川に世を遁れて、世に芭蕉庵の翁とは、人のもてはやしたる名なるべし。道はつとめて今日の變化をしり、俳諧はあそびて行脚の便りを求むといふべし。されば松島は明ぼのの花に笑ひ、象潟はゆふべの雨に泣くとこそ、富士よし野の名に對して、吾に一字の作なしとは、古をはゞかり今を教ふるの詞にぞ。漂泊すでに二十とせの秋くれて、難波の浦に世を見はてけん其の頃は、神無月の中の二日なりけり。さるを湖水のほとりに、その魂をとゞめ

て、かの木曾寺の苔の下に千歳の名は朽ちざらまし。東華坊こゝに此の碑をつくることは、頓阿西行に法縁をむすびて、道に七字の心を傳ふべきとなり。

其の銘

あづさ弓　武さしの國の　名にしあふ　世に墨染の　さきにたつ。
人にあらずに　ありし世の　昔の葉はみな　跡ありて　・その玉川の
みなかみの　水のこゝろぞ　くみてしる　六すぢ五すぢ　たてよこに
流れてするは　ふか川や　此の世を露の　おきてねて　その陰たのむ
その葉だに　いつ秋風の　やぶりけん　其の名ばかりに　とざしおきぬ。
春をかざみの　人も見ぬこ　身を難波津の　花とさく。　花のかざみの
夢ぞさめぬる。

碑陰

維石不言
謎文以傳

狂云く、此の碑は洛東の雙林寺に在りて、頓阿西行の墓に並べり。但し本朝に假名の碑の始めならんか。其の年は寶永庚寅の春なり。されば此の銘は三十一句ありて、起結に假名の韵を用ゐるに、中間の二十二句は七字の

咄にして、其の一句にも首尾の言あり。然れば序詞の故事古語より或は故翁の行状も、或は石碑に誌文の格も、或は其の銘の助語餘情も、此等に一軸の趣旨を加へて、後の手の内揮に不納して、是も百世の義文にして、定に註するに恐れあらんか。但し發端は我が師の碑を讀むべし。言語に參予の古流きと云ふ、人を呼びかけたる語勢なりとぞ。

圖司某ノ墓ノ誌并序　　　野盤子

出羽の國羽黒の麓に、圖司なにがしといふもの、都のかたをゆかしがりて、葉月の中頃より旅立ちて、野邊の月由橋の雷、かねて思ひおゐ儘に催ひつくし、武の芭蕉庵にたびれしては、しば／＼秋の名殘ををしみ、洛の桃花坊にかりゐしては、春のやがて來らん事をまつ。その春もいまだ半ばならん程は、大和路の花にうかれあるき、芳野の奥も見殘さじと、今よりさゝめき思ひけるに、む月の末よりやみつき侍りて、何のあつかふ程もあらで、春もきさらぎの十日あまりに、終に身まかり侍りしなり。されば此の郞は、門にまつべき子さへありて、妻はいと若くて侍り。その夢にあへぬつま子なども、此の便りきかせたらんは、先づや人をなんうらみぬべし。さてや浮雲流水の身に思ふ人もつまじきなめりと、今は誰々も思はぬかは。その頃これを聞き傳ふる人は、あはれなる手向もおほかりしが、我は浪子となりて、ひとへに客をあはれむといへる、まして此の文の哀情ならん。此の日は阿翁に其

せられて、彼が廟前の香華をさゝげゝるに、おの〳〵短尺に名を題して、草誌の情をこたふ。

當歸よりあはれは塚のすれみ草　芭蕉庵

鴈一羽いなでみやこの土の下　酒落堂

死にに來てそのきさらぎの花のかげ　野盤子

狂云く、草誌は文選にも見あり。死生年月のみを記して、銘文の類とは異なりと見えたれど、今は任昉が草誌に效へるか、序詞の外に本文を出せり。先と後對あるべきなり。されば本文の一章は、當歸には蓬萊が詩を含み、花ノ陰には西行の歌を摘みて、酒落堂が鴈は須磨の句と云ふべし。何れも切字の用捨ありて、故翁の筆文字に此の論あり。但し鴈句は其の雄にして、名は呂丸とか云へる出羽國の舞侍なりとぞ。

弔文類

生身魂ノ祭文　北七里

むかし難波の蘆をよみて、いせの濱荻と聞えしが、いまはその浦の江端をよびて、一見の蘆走とはいふなる由。それを世の人はなにしともいへば、宇治山田には唐名をつけて名吉なをともいふなるべし。これより美濃尾張にはほらともいひ、加賀越中にはしれなともいふ。さるは一物を名のかはり、其

の所にきけば其の名は分明なり。さるを今年はいせ鯉の名に寄せて、萬寸の龍と化したるなど、その時見たる人の噺に聞きぬ。さてや我にも一字の師ありて、其の名を求むるに其の所さだかならず。此の文月にはその魂のありかをたづねて、一椀の茶に志を通ぜば、かしこに一字の恩をしりて、こゝに千金の光をそふべし、されど生身魂の刺鯖(さしさば)によせて、難波に江鮒の名をや祭らん。伊勢に養老の名をや祭らん。鯨の爲の卒塔婆はありながら、龍を祭るに供物をしらざれば、世にありふれたる鼠尾草(みそはぎ)の枝を折りて、一滴の水をそゝぐより、西南に一筋の雲起りて、彌彦(やひこ)の峯にたなびきしが、神風ふしぎの風あれて、麻木の箸もかはらけも、虛空に吹きちりたるこそありがたけれ。

狂六云、此の祭文は比ノ體にして、中に兩個の隱名あり。畢竟は伊勢國に龍の一字を留めたるの謂なり。されば其の魚の多名なる蘆荻の二字に語を起して、古歌を用ゐるに自在の所ならん。或は鯨の卒塔婆とは、越後路の濱に數多ありて、寄鯨の弔ひとぞ。或は彌彦(やひこ)も越後の高山なり。然るに一字の師と云へるは先に彼が鐵亭にて我が師と云吟の歌仙に同作の花一本ありて、一句同意の秘授ありしよし、其の花を指して一字とは云へるならん。尤も此の篇は虛誕なるに似たれど、爰に一字の恩を忘れず、刺鯖に寄せては生身魂の意を結び、鯨の卒塔婆には、祭文の趣を顯はす。誠に七縱八横の體なり。但し此の段は我が師の本名を説破すべし。

弔(ニル)許六(ヲ)文　　渡部狂

江東の許六は、風雅に大剛の男にして、管城に誹諧の旗をひるがへし、詞林に文章の斧をよこたへ

て、天下の誹士を說破するに、誹諧境土にその印をかけて、鐵心石肝の大將といふべし。さるを此の人に此の病ありて、公務にたたざる事十とせあまり、ことしの秋八月下旬に、終に身まかり申されしが、誠に我が門の鼎ををりて、殊にをしむべき才能なるなり。昔は武陵の芭蕉庵にあそびて、柴門の別れにのぞむ時は、誹諧はをしへて弟子たるも、繪の事は學びて師たらんと、故翁の稱名にもあへるよし。さりや畫をよくし書をよくし、文藝をよくし、武藝をよくして、多能にはおすとは此の人なるべし。常は孟耶觀の李由を友とし、汶村、木導を兩翼にはさみて、數篇の誹書をあらはせるに、武城に其角が作をよみし、洛陽に去來が實をくじきて、誹諧往來といへる祕書ありとぞ。さるは我が門の作不作をいへるならん。しかるに我が師東華坊は本より方外の友にして、我が師は作意の流行ならんには、作はつくる日の道理をいひ、其の人は作意の無盡なれば、これを故翁の直旨なりとあらそふ。たとへば黄梅の即心即佛とさとれるを、馬祖は非心非佛とあらそへるごとく、我が師はその人のこのむ所を破するのみ、何かは言語の作不作をあらそはん。誠や五老井に誹書をつくり、文集をえらびては、天下の人の見聞をまたんに、纔かに三四人に過ぎざらんとは、我が師もその中の一人と思へるなるべし。しからば面友の世情をはなれて、これを方外の友といはざらんや。されば寶永の末ならん、選文選の異論ありて筆陣の贈答に異趣をへだてしも、我が師はその秋の草の露にかくれ、その人は此

の秋の木の葉とちりて、咄嗟の論は一世の骨皮にくちぬれど、文章の名は百代の面門にとゞまる。其の人にして我が師に敵せざらんや。我が師にして其の人ををしまざらんや。これを中文の趣意にしてこれを選場の結文と見るべし。

狂云く、此の篇を一部の結文とは、先師かつて選文選を思ひ立ちて終に其の事の成らずして、爰に文鑑を選する時は、物に其の人の名に預るべきを、今や此の選の半端に到りて其の人を失へる事は、惜しみても何惜しむべき故にぞ。然れば一篇の趣は、始めには韓信が將棋の勇に喩へ、次には陶潜が胡牀の情を歎く。總ては文武の才能を稱してこれを一篇の趣意となせる、非心非佛は此の文の骨節と知るべし。されば文選の異論とは、第一に文章の虚實より、或は假名眞名の配りを云ひ、或は句讀の長短を云ひ、或は和漢の法格を云ひ、或は四字の竪横を云ひ、或は辭類の差ひを云ひ、或は文題の誤りを云ひ、或は列傳に人の褒貶を云へる、すべては書面の贈答にして、本より我が家の道をあらそへる、其の爭ひの風雅ならんには、人は蚊虻の聞きをなして、百世に文章の法格を知らば、却つて用ゐざる時の師範たらんか。但し其の人は森川氏にして、標號を百中と云ひ、別莊を五老井と云ふ。菊阿佛は法名なりと云。

本朝文鑑　終

後序

渡　吾仲

右はかくの如しとなん。さて文鑑といふ心は、始めに二十七題をあげて、其の名の物にまぎれざるは、今の學者の便のみにあらで、古今の文章の大綱をしらんには、爰を和漢の文鑑ともいふべし。さて文法あり句格ありて、其の名は漢文によせながら、その故事をのみ、その古語をとりて、今はた假名の用をなせれば、爰を我が朝の文鑑といふべし。さて五箇條の式目は文章の家の古法ながら、假名と眞名との配りには、歌人連歌の用をはなれて、軍書傳記の便なる、爰を我が門の文鑑ともいふべし。さて本朝の詩をつくり、本朝の辭をあらたむるに、詩は文類のかくまじき題にて、和漢に文集の飾りとなせれば、文章の人の皮毛といふべく、辭は人倫の尊卑をわかちて、手爾遠波に聲のあやをなせば、文章の人の骨節ならんには、詩は文鑑の趣にして辭は文鑑の意といふべし。さらば本朝の文章とて、源氏狹衣は物語にして枕草紙は夜話（よばなし）とぞ。まして菅相江師など、文粹はいさ漢文なるをや。たまたま文集の名あらんにも、拾玉集は歌書にかたぶき、拾葉集は題名をはたさず。しからば本朝の文鑑とは、たゞ此の本朝文鑑なるべし。さるを我が朝の古文字もあれば、これより眞名の文格もあらん

と、先づは萬葉の假名遣より、神書の助語字など、或は東鑑など、其の外は軍記の牒狀にも、和語の文法をえらびあつめて、其の名を和漢文藻と題し、亦かつこれが後集たらんとす、さるは和漢に姿情の差別あれば、趣は和にして意は漢ならんも、意は和にして趣は漢ならんも、すべては作者の働きならんに、猶はた文章に心ざしあらん人は、假名文はまして眞名文をしも、京師の書林にまつべきに、我にはその事を序せよとなり。

享保戊戌夏六月上浣

鶉衣

横井也有

いにし安永のはじめ、すみだ川のほとり、長樂精舍にあそびて、也有翁の借物の辯を見侍りしが、あまりに面白ければ、うつしかへり侍りき。それより、山鳥の尾張の國の人にあふごとに、この事うち出でて問ひ侍りければ、金森桂五、うさぎの裘（かはごろも）にはあらぬ鶉衣といへるもの、二卷をもてきて見せ給へり。翁なくなりぬと聞きて、かほ馬相如が書き殘せる文もやあるとゆかしかりしに、細井春幹天野布川に託して、その門人紀六林の寫しおける全本をおくれり。まきかへし見侍るに、唐にしきたゝまくをしく、とみに梓のたくみに命じてこれを世上にはれぎぬとす。翁の文における、錦を著てうはおそひし、けたなる袖をまどかになして、よく人の心をうつし、よく方の外に遊べり。鶉ごろもの百むすびとは、みづからいへる言の葉にして、くつねのかはのちゞのこがねにあたらざらめや。右のたもとのみじかき筆は、なえたるも恥かしけれど、たゞにやはと、褻にもはれにもかいつけ侍りぬ。

四方山人

あやしく榮えもなききれぐゝをあつめ綴りたるを、うづら衣とはいふなり。げに、その鶉ならば、たゞふか草のふかくかくろへて、かりにだも人にはしらるまじきものにこそ。

也有

鶉衣 前篇上

奈良團賛

青丹よし奈良の帝の御時、いかなる叡慮にあづかりてか、此の地の名產とはなれりけん。世はたゞ其の道の藝くはしからば、多能はなくてもあらまし。かれよ、かしこくも風を生ずるの外は、絶えて無能にして、一曲一かなでの間にもあはざれば、腰にたゝまれて、公界にへつらふねぢけ心もなし。たゞ木の端と思ひ捨てたる雲水の生涯ならん。さるは、桐の箱の家をも求めず、ひさごがもとの夕すずみ、昔ねの枕に宿直して、人の心に秋風たてば、また來る夏をたのむとも見えず、物置の片隅に紙屑籠と相住して、鼠の足にけがさるれども、地紙をまくられて野ざらしとなる扇にはまさりなん。我汝に心をゆるす。汝我に馴れて、はだか身の寐姿を、あなかしこ、人にかたる事なかれ。

袴著る日はやすまする團扇かな

蓼花巷ノ記

「もとの芭蕉、五株の柳の、其の人の德に照らされて枯れぬ名をとゞめしもあるに、不仕合なる榎

木は、ある僧正の號に呼ばれて、つひに斧の怒りをかうぶり、なほ切杭、堀池の名をさへ流しけん。われ劒冠の仕途に身を置きながら、一つの隱れ家あり、これを蓼花巷と名づく。蓼花におかしき心はなけれど、夕日朝露の氣色心ゆくばかり、そのもとのゆかりなきにもあらず。松茸きふの聲きけばと、俊成卿の庭もなつかしく、世にわびたる樣のをかしければ、自らこれが名とせり。そも此の幽栖無何有の郷にとなりて、山に向ひ、海にそひ、河あり、野あり、月雪花鳥は四時の詠めを供し、時わかぬ松の夕風、竹の夜雨の音までも、聽くにいとはず見るに乏しきもあらず。城市を出でゝ遠からねど、人たゞ杖草鞋をもてとはんとせば、たとへ方士が肉刺はふみ出すとも、三輪の山もと杉立てる門にまよひて、ふせやのはゝき木の晝狐に化かされ、うつの山邊の道とふべき人にもあはで、ふたゝび桃源に棹さすごとくならん。たゞ梅の色も香もしりて、思ふ事いふべき人ならば、今も壺入にたづねあたらん、茅門とは知るべしとなり。

物すきの蟲はきてなけ蓼の花

長短ノ解

大は能く小を兼ね、短は長に養かるゝためし、世にその類多かり。たゞ君を賀し人を壽ぐにぞ、齢を長濱の鶴にたぐへ、あるは龜の尾山の尾を引きて、五百八十七曲と祝ひものするには、あくかたあ

らじかし。その餘はひたぶるに十八さゝげのゆたけきにならへば、獨活の大木の誹りをのがれず。嫁鷄の足は短きを愛し、禿が返辭は長きにのどけし。出る杭頭うたれてつひの益なく、下手の談義のとまり兼ねては、軒の柳もねむり顔なり。たゞ女の髪こそめでたくてあらましを、手長き人は一門にも遠ざけられ、鼻の下ののび過ぎたるは大事の相談にもらされて、其の夜の饂飩のながきをしらず。されば、必ず長き短きが上にも立ちがたし。物はたゞ秋の夜のながくてよからんは長く、難波潟短き蘆の長からずしてよきは、短くてあらなん、さるを聖人も右の袂の自由を物しけり。世に式法をこまかに定めて、かね合ひ極まるものあれど、そのむつかしき境は人の製作なり。天地もと窮屈ならず、長短は自然にそなへて寸分の詮議はなし。摺粉木は兩手に握るを程とし、杓子さい槌は片手に足れり。下ざまの物ながら、天理のまゝなるこそ尊けれ。我が友田氏、過ぎし頃かりそめの旅のつとに煙管を贈れり。その短き事、掌に隠すべし。我この秋西郊に遊ぶ事ありて、重寶はなはだ長きにまされり。これをくはへて手をからず、久しくして歯を勞せず、行く／＼野山に雲を吹き、飽く時は、袖に納む。張子が馬を懐にするがごとし。こゝにおいて感あり、つひに長短の辭をつくりて、これを酬ふの詞にかふ。其の辭の長過ぎたるは、ふたすの短き故ならし

木履ノ説

木履々々、笠は東坡が春の野がけの尻にしかるゝ折もあるべきに、なんぞや汝は夏の日の、宰予が枕にも雇はれざる。日和つゞきて隙なる時は縁の下に寢ころび、蛩の霜夜にともなひ、又は座頭の杖にさされて、日待ちの壁にふらつきては、かたぶくまでの月をも見るらん。たまたま輕業の綱わたりにはかれて、高みに人を見おろす事もあれど、常は沓ぬぎにひざまづき、洗濯の日の腰掛となりて、それより上の交はりは知らず。かく下樣のものながら、狩人の笛となりては、日にふかるゝ例もありとや。その鹿の命を斷てるは、罪深き身の果てなれど、佛も下駄も同じ木のきれと、例の一休のしめしに逢ひて、はじめて輪廻の絆は切れてん。抑足高きものを木履足駄と號し、たけ低きを下駄といへるは、いづれ一體分身にして、こゝに尊卑の差別はあらねど、誹諧のうへに二つの姿を論ずべくば、ほくほくと靜かなるは、雪降りの朝にして、はたはたといそがしきは、村雨の夕なるべし。

鳥羽繪ノ贊

蝦蟆の息に虹を起し、蛤はよく樓臺を吐く。腹中の蟲氣を吹いて聲を出すも、さらに怪しきわざにはあるべからず。くさめもあくびもおなじものならんに、かれが出所のいやしければ、貴賤これをつゝしみて、かたく公界の嗜みとす。されば退之が鳴物づくしにも此の沙汰なきは、もしとりはづしにてもやあるらん。その鳴ること不平にも限らず、たゞ盛親僧都の芋の腹味、あるは麥飯おなら茶の

過食にきそはれ、勢ひことに甚し。昔太平記の無禮講に、始めてこれをゆるし初めたるより、つひに鎌倉に嗅ぎつけられて、七日の說法屁一つに破れぬれば、はては資朝俊基の肩負ひ比丘尼となられける。または雜混寢のくらがりに、ぬししらぬ香こそ匂へれと歌人は詠みも置きしか。思ふに鳥羽の僧正の筆蹟も、ひとへにたはぶれのみにあらず、かの音あれども目にみえず、物にあとなくあだなる事は、更に電光石火にまされるをもて、人につねなき世の理をも知らしめんとなるべし。

摺鉢ノ傳

備前の國に一人の少女あり。あまさかる鄙の生まれながら、姿は名高き富士の俤にかよひて、片山里に朽ちはてん身を憂きものにや思ひそみけん、馬舟の便りにつけて遠く都の市中に出で、しるよしある店先に、しばしたつきをもとめけるに、師走の客いそがしく、木の葉を風のさそひ盡す頃は、世も煤掃きの古きをすて、物みな新器をもとむるにつれて、ある臺所によき口ありて、宮仕の極めかてら摺木と聞えしもとに、うち合はせの夫婦とはなりける。かれは柏木の右衛門にも似ず、松木の荒くましき男ぶりながら、少しも飾りなき氣だてのまめやかなれば、女も心に蓋もなく、明けくれ忙かしきつとめも、同じ心に働きて、とろゝ白あへの擂いたゞくまで、糊米のはなれぬ中をねがひ、水もらさじとは契りけるに、その比せつかひといひし男は、檜の木目細やかに、その姿優しきから、昔は

御所にうぐひすの名にも呼ばれしが、同じつとめの夜ふくる時は、走水の下にころび寢がちなるを、よそのいかきの目にもれしより、さらでも住みうき傍輩の中に、はしたなき燗鍋の口さし出し、杓子の曲り心よりうき名は立ち初め、炮烙さへ仲間破れして、あけ暮れ茶釜にふすべられ、奈良茶やわさびおろしの面、とにもかくにもたゞすわり方なく、身をあへ物の顔よごれぬれば、賢臣か妻の鼎をいだき、手ならひの君の昔を思ひ、つひには土にかへるべき無常をや観じけん、ある夜鼠のあるゝ紛れに、棚の端より身を投げけるにぞ、顔かたちかけ損じ、見にくきまでの姿にはなりける。かくては食物のつとめかなはじとて、あるじの怒り甚しく、石漆の妙藥にも及ばず、妹背の中を引きわかれ、内庭まで下げられたれども、猶五月雨の折々は、雨もりの役につらなれば、いとゞ長門の涙かわく隙なく、こゝにもすわり悪しくなりて、井戸端にころがり出で、蓼葎に埋もれて、後は誰哀れとふ人もなかりしに、程なく露霜も置きうつり、壁の蟲の音もかれ行く頃ならん、間近き寺の門番に拾はれ、ふたゝび部屋にかくまはれながら、ならはぬ火鉢に樣をかへ、酒をあたゝめ茶を煎じて、今年はこゝにうさを忍びしに、やゝ春雨に梅も散りて、如月の灸もすめば、また灰をさへ打ちあけられ、唐辛子といへるものを植ゑられしが、からき目ながらさてあらばあるべきを、それさへ秋のいろ見過ぎつゝ、つひに橋づめの塵塚によごれふし、果てはさがなき童のまゝごとに碎かれ、行方もしらぬ闇の夜の

礫とはなりにけるとぞ。

武陽官邸ノ記

百里の海山かぎりなく越え來たる目には、こゝに一年のおきふしはと、顔に物のふたがるやうに覺えしが、けふよあすよと、すめば都の月もさし入りて、寢心よき夢も結ぶばかりにはなりける。四疊ばかりの所に、手ぢかき調度どもかたづけて、常の居所にさだめつ。庭は二三間に穴藏なかばの場をふさぎて、殘れる所わづかなるに、誰か植ゑ捨てし一木の石菜、二もとの躑躅、花は時過ぎて青葉つややかに、我たのみ顔なるを、そここゝと植ゑかへなどして、朝夕の水そゝぐも、うき身わするゝたつきとはなれりける。軒の風鈴に夏山のすゞしさを招き、壁のやぶれに色紙をおし、障子のたらぬにあやしき簾をかけて、月の夕暮なかば卷きたるは、かの行平の須磨の住居もかくやと思ひ出でらるゝに、うしろの松風とう／＼と吹きならせば、二波こゝもとに立などぞひとりごたるれ。西あかりの二階は南御土居間ちかく、梢さしおほひて遠望をさへぎれども、富士は木の間にくまなく、甍屋根はるかに見こして、時しらぬ雪をあらそふ。常に華やかなるゆききはまれに、音なふもの、念佛題目代待代參り、あるは木魚のひゞき幽に、箔置きの佛に效ひて建立奉加のかねさわがしく、比丘尼は赤坂に晝の情を賣りて、夕暮のかへるさ雪踏を引きつれ、辻君は日過ぎたる顔、明けはなれて手拭によしばれ

たれど、心の動くべくもあらず。鄰は一重の壁をへだてて、朝の火打の音ひゞくより、擂鉢に客待つ日も、煙草きる日のつれ/\なるも、紙帳に團扇の寢しづまるまで、こなたに物のかくれなければ、かしこにも又隱なく知りかはすなるべし。日數ふるまゝに、從者どもも所得がほに、貧乏樽に唐辛子を植ゑて紅の秋を待ち、隣垣に刀豆を這はせ、塵塚に蓼をそだてて鮓賣の聲をねぶるなど、かく不自由のくらしを、商人はかしこく、餅を衣の底に忍ばせ、酒に味噌桶の似せ銘を書き付け、御門の咎めを免れて范蠡が忠をもどき、煮豆和物に朝々の飯時をかんがへ、雨のあがりは傘賣るなど、なか/\をかしき住居のさまなりける。されば阿房の雲なしといへども、煤はきのやかましからんに、かたつぶりの戸一枚もたでも、うき世はぬありわたりなるをや。足るもたらぬも住む人の心にして、我は故郷の外とも思はずと、此の心を額に題して、とひ來る人にも興じさせける。

餅ノ辭

君見ずや、餅は例のをかしみありて、しかも四時の流行あり。まづは一年の初空、松も竹もあらたまるあしたに、飯に素より常住にして、なら茶、麵類もしどけなければ、雜煮と趣向を定めたるぞ、神代の骨折のところなるべし。それより具足かゞみ開き、餅に睦月の寒さもくれて、二月は彼岸の團子など、花よりとよみし人もありしを、草餅の節句に桃もちりて、つゝじ山吹とふけ行くまゝに、饅頭

賣の聲もねぶたく、客は蛙に曇りを呼ばれて、春雨つれ〴〵とふり出づるころは、かき餅のいじり燒きにぞ、かの右馬頭が夜噺もしみつべけれ。卯月は例の卯の花ぐもりに、蚊屋の香も珍らしく、數も軒にもちつく頃は、牡丹餅の花いとむまく、千團子ときくもたふとしや。粽はそのまゝに見るいと涼しく、解きたるほど葭の匂ひ又をかし。水無月の朔日は氷餅とて、やごとなき上つ方にもてはやしたまふに、草葉もよらるゝ土用の比、水餅の鍋鉢にうかび出でたるぞ、上戸の知らぬ涼しさなりけり。風も文月の音づれして、七夕のあふ夜は御酒のみ奉りて、子のこの餅もまゐらせぬは、葛餅のうらみながら、その鵲のはしとよみしも、やかもちときけばゆかし。魂祭も團子におくりすて、お萩の花に秋もたけて、こちちもち月の團子より、栗の子餅の節句も過ぐれば、十月はもとより亥の子の餅に荒れ初めて、時雨こがらしの寒さまとゐるに、火鉢のもとのやき餅も、おもしろき時節なるべし。やゝ御佛事のもちひ始まる頃、つもる粉雪ももち雨も、あられも酒の名のみにあらず。おとごの餅朔日にいはひて、師走はなべて餅の世界なれば、あげてもいふべからず。されば、いかなれば詩人は酒のみ友にかぞへ入れて、李杜が筆にも餅の沙汰はなけれど、兩部習合の誹諧には、劉伯倫がのみぬけも、輕盧亭の餅ずきなるも、ともに誹諧の趣向なれば、我が門には上戸もめでたく、下戸も猶めでたし

鬼傳

むかしは佛の國に住みしが、舍利をぬすみし科によりて、天竺浪人の部になりて、唐土へ渡りしが、四十八のあだし心より、楊貴妃の枕にしのびて、鍾馗といへる髭男に追はれ、かくれ蓑の身も住みうしとや、十郎姫にも引きわかれ、赤裸に身代たゝみて、初めて日本へ親に似ぬ子と生まれ出でけるとかや。其の頃はまだ涙もふくやありけん、朝雄が歌の理窟につまりて、一先分散しけるまでは、さすがに横道なしと、役の行者の情深く、大峯かづらきの荷持にも雇はれしに、次第に身持あしくなりて、煎餅もあつらしからずと、芥川のくらまぎれに、鬼一口のあばれ喰ひにむかし男を泣かせ、それのみならず、鈴鹿山の好色、大江山の醉狂、戸隠山にて稚茂をなぶりし取沙汰より、洗濯も鬼の留守にと、世上物躁になりけるにぞ、神々のいかりつよく、[illegible]柊の黄道具にかり出され、終に煎豆の追放にあうて、娑婆にもたゝずむ方なくて、冥途の出代りに赴き、しばし佛のしめしに發起せしも、衣の似合はぬ生まれつきなれば、是非なく業の秤目をならひ、釜の火のたき加減を覺え、呵責のあら仕事に獄卒とよばれ、地獄の六尺とはなりける。扨こそ瘤とられたる天下となりて、萬民泰平を謳ひ、丹後丹波の境なる城跡も松風さびしく、安達が原の黒塚も草茫々として、とふ人なければ、今はたゞ棟瓦に俤をのこし、大津繪にわらはれて、下戸と鬼とはなき世とぞなりける。

朝寝ノ辭

神儒佛の教へさま〴〵なる中に、上はかしこき朝政より、下は十露盤のせはしき世渡り、市の出買ひのその日過ぎまで、朝寝せよとの教へこそなけれ。まして鷄はじめて鳴きてより、忠臣は蚊にせせられて、たばこに明けゆく鐘をかぞふとや。げにも唐帝の上妃に腰うたせて、飯時も忘れたまひたらん。又は若息子の酒色にあそび過して、胸ふくれ頭重くて、いつも朝顔の花をしらず、萬事は手代まかせならんは、身代破滅のはじまりなるべし。さはれ世にする事なき姑の、佛なぶりの朝起に、おも屋の家うちに誘られたらんより、これらは火燵に火を起す間を、うち寝がへりてもあれかし。されば用をかきても寝よとにはあらねど、三四五月の短夜に、枕加減のよき頃は、朝寝こそ又をかしけれ。必ず目のさめぬにもあらねど、うつら〳〵と夢見夢みる花に朝日の匂ひたるも、松に有明の残りたらんも、かの間ながら思へるは、起きてみるにも勝るべけれ。いつもの豆腐賣の聲行き過ぎて、車井の走るおと、雀の餌はみにあつまり鳴くなど、幽閑の情にたへぬ折しも、けうとき物申の聲に胸つぶれて、雨戸一本おしあけたれば、空は四つ頃にもたけ過ぎて、さし心得たる童のくみ置きたる手水盥は、名残なくさめきりて、その春公の水になるもかはゆし。されば かしこげに朝起して、一日目のさめがたく、昼寝に光陰を盗まんより、枕ついでに朝寝たるこそましならめと悟りて、此の睡工夫

をなす事になんありける。さはいへ秋の夜長になりて、又朝起の面白き時は、たちまち朝起の男と呼ばるべければ、釋迦も孔子もしばし氣長に見ゆるし給ふべし。

鶯を夜にして聞くあさ寢かな

炮烙ノ賛

一生をつくろひなく、その日ぐらしに覺えたる炮烙といふものは、圍爐裏のもとにいやしまるれども、その徳を論ずればいとたふとし。鍋釜は眷族も多くわかれて、藥鍋などと號するは、銀に毛彫の繪様にほこり、數寄の茶釜は天明蘆屋の作にたふとまれ、探幽が下繪にあたへを高ぶれば、臺所の太郎二郎も、おのづから氏族の榮えに心傲りはするなるべし。炮烙は一類もなく、世にかゝづらふほだしも持たず、盧仝が夜なべに茶をはうじて、雨夜のさびに伴ひ、斎饗の豆のから／＼となる時は、鄰のやもめの耳を悦ばす。いでやこれを荷ふ商人は、程朱の説をきかざれども、常に身を愼みて、細道假橋を大足にはこばず、市中に股をくゞれども、深くいさかひをたしなめば、馬士船頭の氣隨には似ざらん。なげくべきは本間の狂言に、鞨鼓と威勢をあらそひ、または歐陽公が工夫より鷄といふものを尻にぬられて、蠅をとる道具となれるは、己が心にもあらで似氣なきわざながら、かの足鼎の醉狂人の鼻をかかし、石川五右衛門が釜いりより論ずれば、罪は至つて輕かるべし。しかるに和田殿の

大儀がよひに、頭巾の名に物ずかれてより、今に老人の寵愛にあひて、常にきんか頭にいたゞかるれば、かれは藥鑵の下に立たん事かたくなんありける。

はうろくや棚から下りる秋の暮

隅田川涼ノ賦

水無月のあつさの、今日ことにさめがたければ、いざ隅田の川風に扇やすめばやと、牛込といへる所より舟出して、「まづ涼しおし出す舟に鹽の音」などたはぶれつゝ竿を廻らすに、舟は素より一葉のことなへしからず、破子も場とらぬ趣向ながら、けふの乘合に手なみしれる曲者もあればと、樽一つはいかめしくつきすゑたり。數々の橋こえ過ぎ、兩國の河づらに漕ぎ出づれば、風はかたびらの袖突きまで吹きかへすは、秋もたゞこの水上より立ち初むるなるべし。椎の木の蟬目ぐらし、けふも暮れぬと啼きすさみ、岸の茶屋々々火影を爭ふほど、今戸あたりのかけ船も纜を解き、絲竹をならして己が樣々にうかべ出でぬ。京に四條の昧をならぶるより、こゝに百艘のふなばたを連ねたるは、誠に都鳥の目にも恥ぢざるべし。舟として颯はざるはなく、人として狂せざるなし。高雄丸の屋形の前には花火の光もて、おを散らし、吉野屋が行燈の影には蒲燒のけぶり花よりも薫し。舳の内の囃子は[illegible]聞くにゆかしく、舳先の生醉は衛足るにあぶなし。伽羅薫物のかをり心ときめきて、吸物かよふ振

袖は、燭臺の透影いとわかく、大名の次の間には、踦著たる物眞似あり。女中の酒の座には、頭巾かぶりし醫者坊あり。かしこにどよむ大笑ひは、いかなる興にかあらん。こゝに船頭のいさかふは、何の理窟もなき事なり。隱人の茶會は仙家のかげをうつし、役者の聲色は芝居もこゝに浮ぶかとうたがふ。卵子々々、田樂々々、瓜西瓜、三味の長絲賣る聲、西南にかしがましく東北に漕ぎめぐる。風呂をたく船、酒をうる船、菓子にあらぬ饅頭あり、鼓にあはぬ曲舞あり。あるは三圍深川にうかれ、あるは兩國の橋にとゞまる。遊ぶ湊ことなれども、樂しむ心二つならず。それが中にも、猶淺草の淺からぬ契りたがへじ、待乳山の待ちやかねぶらんと、更け行く空に漕ぎわかれて、里にひかるゝ人もあるべし。さるはいかならん遊びも、同じ心に面をならべて見もし聞かばと、こゝにだに物のかなしく、事たらぬ心地せらるも、はた憎からずや。銀河の水東西にながれ、生憎のやもめ烏、ひよ白き松に啼きかはせば、さしも所せき船も、みないづち行きけん、霧わたるそなたに漕ぎきえて、瓜の皮のみたゞよふ曉の名殘こそ、見しには引きかへてまた哀れなれ。

謝スル無馳走ヲ辭

こよひのあるじ野有、人々に謝して申す。ことごとしく招きまゐらせて、汁に園殿の鯉も料らず、皿に張翰が鱠も盛らず、夜食は例の奈良茶に濁らして、豆腐に鰹の花の名はちらせど、何をよし野の

色香とはめでん。さばれ旅路の椎の葉にもる、ものの寂しき山家にもあらず、肴は宮の夕あかりを荷ひつれ、八百屋に二月の瓜をならぶれば、自由はこゝも都ながら、もとより曾我の内證にして、いとなみとゝなふに侘しければなり。人々誹諧に信ましまさば、いざこれをしもにくみ給ふな。いでやかの土器の味噌をおぼし棄て給はずば、風雅に喰ひ寄りの他人むきを離れ、けふを饗宴の矢合として、雨の夕雪のあした、鍋摺粉木はさわがせずとも、いざと心のむかふに任せて、折々の廻状をはじむべし。さるも貧富は等しからず。我をそなたへ招き給はむに、膏粱珍味の嬉びならねば、よき魚よき肴はかへても給はらん。まして茶ばかり給はるとも、吾が門の遊びならば、はたかこちまゐらせじ。けふの無馳走は紫隱甲の掟にして、菜根咬み得ば百事なすべしを、貧の風雅の方人とはし侍るなり。

魚うりの聲よそにふけ青嵐

鍋蓋額ノ贊

武藏にかりの旅居せし頃、あやしの店に求め出せるものあり。さるは薪やほしからん小鍋の蓋なりけり。算は落ちて釘の跡のこり、月もる許りの節穴ありて、いと古うすゝけたる色のわざとならず。その侘しさのほどを思ふに、獨坊主の佛供をや調じけん、借屋の婆の娵をやふすべけん、これをたゞきの代なしける哀れは、あみざこ賣る人にもまさりて思はるゝに、今はたこれを買ひ取りし我を、あ

るじのいかに見なしぬらん。世に摺鉢に蓋なきと諷はるゝを、かれは蓋のみありて、みはいづこにか引きわかれし。今更に異鍋にうちきせたらんは、小夜衣の名に立つもうしと、あはれに見しまゝに、物よくかく人語らひて、これを閑居の額となしぬ。

たれ雜炊に落葉たきぬる
すゝけし昔とへどこたへず
われ破鍋の世をのがれなば
よし綴蓋の汝とあそばん

閉菊辭

植ゑすてし菊の自らに痩せ自らにひらきて、赤きはたゞあかく、白きはたゞ白菊なり。今や世上の富家にかしづかれて、箱に戸ざされ曲尺にあてられ、花は年々にあらたなる、其の全盛を人にたとへば、傾城といへるものゝ、うき節の里に賣られ、高雄奥州と時めき立ちて、心にあらぬ人にめでられ、あだなる枕に起きふす類、かかれとてしもたらちねは育てじ、かかれとてや雨露は惠まん。むかし彭祖が杯にくめば、八百歳の齢をたもち、正成が旗にゑがけば、十萬騎の敵をなびかす。癡人はこのために頼み、愚將はかの功をうらやむとも、それだに花の心にや高ぶらん。菊よ、こゝろみに

物とはん。その肥えたるや慕はしき、この痩せたるやうれしき。よしさらば答へずとも、汝が心われよく知りぬとさゝやけば、秋風の物いはぬ花をぞうなづかせける。

我が菊や尺とりむしの手もからず

誹席之掟

一　飯は三石の掟を守るべし。

茶の花の比をなら茶も盛りかな

一　汁一つ菜一つ、酒の肴も一つに限りて、鰹に精進の咎をのがるべし。夏は必ず茄子を用ゐ、豆腐は三季にわたるべし。香の物は論ずるにたらず。

音も香もせぬや豆腐の冬籠り

一　酒は膳の前後をすべて、三杯を過ぐべからず。さるから、杯は得道具をゆるすべし。

いかさまに四たびはくどし村しぐれ

連衆に酒好きありて、此の箇條の掟にはなはだ苦しむ。よつて料簡の一句をしめす。

狐さへ五こんとどもる霜夜かな

一　菓子は其の日のあるに任す。まづは煎り豆に定むべし。

り豆に音こきまぜてあられかな

一燈は行燈にて事たりぬべし。

蠟燭はたつといふ名の寒さかな

右之條々、今日よりかたく守るべし。亭主に卑下の辭なければ、客に輕薄の挨拶も古し。此の約束を空になして、厚味を求むる輩あらば、後の世蠅と生まれて、風雅に不信第一の人とすべし。

元文元年

誓文はたてぬ筈なり神無月

藏人ノ傳

天に信天翁あり、地にはあすならうといふ木あれば、人にも此の男ありて、かの世にむかしよりいひわたれる、

世の中にねたほど樂はなきものを知らで阿呆が起きてはたらく

とよめる歌の、これが返しとはなくて、

はたらかで起きて居る身の氣樂さよ寢てもあはうは物思ふ世に

とよめりけるを、何がしの大將は大きに此の歌におどろきて、物ぐさの藏人と召されけるより、世に

はたまかはの藏人ともよぶ事になれり。されば此の歌の心は、その藏人ならで知りがたし。たゞ藏人もしらずしてや詠みけむ。

寢てや樂起きてや安き雪の竹

夢ノ辨

節分の夜の寶舟に一年の幸を待つより、一富士二鷹の品定めも、これらは和朝のならはしにて、唐人の耳には日本人の寐言なるべし。されば夢の得失を思ふに、かの邯鄲の枕は餘り古ければ、更に言はず。蝶となりて漆園にたはぶれ、蟻にひかれて槐國にあそぶ。かしこき雲の上人は、うばたまの夜の衣をかへしては、銀いらずの纏をも巧むらん。あるは葛城の神にも限らず、晝は見しらぬ神々も、七日滿ずるあけがたの枕上には、まみえさせ給ふなる。かかるたつとき夢の告げを、佛はいかなれば例の世をはかなみて、夢幻泡影のたとへごとより、人は現も夢の部に入れて、世の中を厭ふまでこそうたてけれ。とても夢現のおなじものならば、夢を現にかぞへ入れて、起きて樂しみ寢て樂しまば、五十年の月日をわたるも、百年の算用にはあふべきをや。鬼神に横道なし、傾城にまことなし、聖人に夢なしとは、いつの世に誰が定めたるぞ。鬼神は聞いて喜び、傾城は聞いて腹立つらんも、聖人ばかりは何とも思召さず。さるは冷にも熱にもならねば、どちらでもよしとの御心こそ世に有り難けれ。

鶉衣前篇下

鼻箴

しのぶの浦の見る目はもとより、耳とも口ともつゞけたらむ、歌にもさのみけやけからず。如何なれば鼻といふ名の、ひとへに誹諧にはとゞまりぬらん。末摘花のわる口も、あからさまには詠みなし給はず、そのをかしみこそ誹諧には嬉しけれ。さりとて臍の尻のとて、いやしむ類の物にもあらず、杉そも猿田彦の御鼻は、神代一番の見事さにて、愛宕高雄の天狗達も、自慢は鼻にあらはれながら、杉の木の間に露霜のおきどころなくていかに寒からん。見よや、人の老いゆけば、目は遠山の霞棚引き耳には鳥蟲の聲もうとく、口は冬がれの歯も落ちて、盛衰まのあたり悲しみを催す。たとへ百年のつくも髪だに、鼻ばかりはかけもやらず、つぶれて用をかく事もなし。ひとり常盤の操を守りて、時しらぬ山とも稱すべけん。されば恐るべき人心、むかし聖賢のをしへにも、視聴言動の四つばかりをあげて、鼻に警めのゆるがせなるより、世に傲りのきざし起りて、寵にほこる妾小娃の、おほくは主を鼻にかけて、心にあはぬ傍輩をも鼻にあしらふ高ぶりより、すでに鼻つくあやまちも仕出でぬる。え

ならぬかなりにひかれ寄る、色のいましめは猶更にして、女のよれる髪筋には、鼻の高き大象もつながれ、あはうの延せる鼻毛には、蜻蛉もつらるゝ例、わざはひ蕭牆より起るときけば、つゝしむべきは鼻のさきなるべし。

手水鉢ノ銘

いでや此の手水鉢に、若水汲みるあしたより、怠らず立ちなれて、歯みがく楊の枝を映し、軒端の梅のひと入に清かれと、時に日すゝぎ時に手洗ひて、洗はゞ心の塵もなどかは去らざらん　さるに此の亭に愛せる鉢は、石なるや、銅なるや、もしは陶なるや、我更に知らねども、水はもとより方圓の鉢にしたがひ、鉢は唯おなじの物好きによるべし。見ずや、此の水の四時に絶えずして、しかも朝ごとにもとの水にあらず。萬理のこれに籠れるが中にも、風雅のことに水に似て世々に盡きず、水に似て時々にあらたなるも、汲みて知らばこゝに明らかなるべきなり。されば頃日人に傳へて予に此の銘を求めらる。我きく湯の盤に銘して、日々に新たなりとは、もとの汚れを濯ひ去りて、心も日々に清かれとや。ましてや此の物は、飯くひ酒のむすさびにも、常に柄杓を手に觸るれば、しばらく清潔のをかしみを離れて、これに時々新の三字を銘せんに、かの盤の銘にもふさひて、先聖もたしかにうなづき給ふべし。世はよし五月雨のはれみ曇りみ、滄浪の水は濁るとも、ひとつ此の水の底清からましか

ば、纓を洗ひ耳をすゝぎて、長く閑居の契りをもむすべしとぞ。

汲みかへてもとの月あり手水鉢

名ニツク徳利説

つくねんと靜かなる時、泥塑人のごとしとは、賢德の姿をほめて、此の物にはあらざれども、昵しめば一團の和氣あたゝかに、雪の夜嵐も身にしまざるは、これが爲の喩へにもいふべかりける。まして備前の名產にして、六升ばかりを入るゝと聞けば、たとへ八仙の客には乏しくとも、虎溪の禁足は忘るゝに足りぬべし。なほ此の物の德を思ふに、斗樽は座敷に場をとれば、これが類にはいふべからず。あるはちろりといひ、燗鍋といひ、前後左右のむつかしみありて、弦によそほひ袴をかけて、實は心の解けざる方もあるべきに、たゞ此の物の口を空樣になして、並み居る人の中に出ても、いづれに向ふともなく、誰にそむくともなき、すがたをも備ふなるべし。此の主これに名を呼ばむことを求む。むかし子猷が竹は見ぬ日ありとも、さてやみぬべし。此の主のこの物における、一日も無くてはあらざるべく、つねに膝下に召しまつはさるれば、かの此の君の名の古きを尋ねて、此童と呼ばんにいかゞあるべき。されば世の近侍の童は、立ち居の尻の輕きを譽むれども、此童の奉公振は、たゞ何時までも何時まで草の、根づよく尻の重からんこそ、主人の心には叶ふなるべけれ。

月に雪に花に德利の四方面

樂老記

鷄肋堂にめでたき德利あり。もとより其の名を此童と呼びて、あけくれの愛をかうぶりしに、今年また一つを求め出でて、樂老となほし著せけるとぞ。されば昔男ありけり。井筒の女の底意なくかたらひける後に、高安の郡に行きかよふ所いで來にけるは、げには心の花のうつろひて、ます方に引かるゝあだし心ならんにや。これはその類にはあらで、主人の腹の量りなきに、此童も折々の宵寢にこりて、唯これをもて彼をたすけ、彼をもて此れがたすけとなせれば、棚に兩雄の爭ひもなく、此童は膝に月をむかへては、此の樂老に月ををしむ。肴核すでに狼藉して、水雜炊のやゝしらむ比、此童は膝にねころべば、樂老は枕とこけて、主人の鼾の響きわたり、そこの柳もねぶり添へたらんは、おもしろき四睡の圖なるべし。

旅賦

春は乘りかけの鈴なりて、浴衣染の華やかなるは、參宮の都道者か。夏は五月雨のかきたれて、金谷島田に大名の市をなし、秋は木曾路の木々も紅葉して、猿三聲の涙ひとり行脚の頭陀をうるほし、冬は鈴鹿の吹雪に飛脚の足を定めかねたる、いづれもとりどりの哀れなるべし。五十三次の紀行は、

あまねく人の言ひ古せど、多くは歌よみ連歌師のぬめりに、小夜の中山に旅寢の詞をつゞけ、宇津の山邊の蔦にまとはりて、十團子のさびしさは知らず。さらねば寺社舊跡の由來書、道のり方角の詮議に落ちて、猶誹諧に拾ふべきものは殘れり。許六が賦に、馬方の境界を盡し、木導が説に、出女の盛衰を述べたり。強ひてそのまねびせんとにはあらねど、例の腹ふくるゝわざなればなるらし。旅の哀れといへば西行の笠しるつけ、宗祇の草鞋の跡を思へど、大名の往來とても、たとへ煙草盆の銀金物はかゞやけど、竟日の駕籠に足を痛め、緞子の夜着に雨もりを聞くも、旅ならずしてはいかでかは。いでや本陣の夕暮は、たて砂に幕をひるがへし、すそする馬の尻をならべ、亭主が髪をそゝけながら、上下に泥足をすゝぎこし、塗臺に小鯛のはね廻りたるは、さすがに草枕とは言ひがたかるべし。下宿のさまはひき劣りて、見せ先に居風呂ふすほり、小ぐらき行燈の陰とりまはして、ねころぶものは、木枕に虱をつぶし、まだ寢ぬ者は取りかへ錢の勘定にのゝしる。人よぶ手拍子のならぬこそことに侘しけれ。月おち馬いなゝき、草鞋うり燒酎うり、按摩けんびきの聲もをさまりてのち、拍子木丁々として、これらはいかめしき旅の一體なり。凡て旅籠屋の庭の氣色は、蘇鐵つくり、松を植ゑぬはなし。畑畔には山水をしかけ、大磯小田原には小石をまきちらす。堺にしのびがへしはありながら、大戸のかけがねはひずみてかゝらず。湯殿は無性に廣くて寒風を迷はし、雪隱の疊は座敷よりつらなりて、

張り付けの裏梅もあらぬ匂ひに破れかゝり、蛩の啼くこそあはれなれ。膳にはいなだの鱠に、鱸の燒物、大根葉のあへ物、壺皿の豆腐にきざみ昆布の味も覺束なく、客のふときはいく度もけぶり直さんとにや、いとうるさし。出女を赤前垂とは、都にちかき名のみなるべし。宵は返辭の尻棒にたち廻り、鼻歌に雨戸はしらかすも、今宵いかなるさゝやきの橋をかけたる契りもとこそいふしけれ。沓草鞋笠の頭巾は、ゆく先々の店につるし、あやしのはなれ屋には、竹につけて道ばたにも出せり。赤表紙の道中記、おもりに鐵鐔をさげ、欄のほた餅にはすゝ黑き雜巾を覆ふ。箱根の赤腹は溪さわらにさし、梅澤の鮟鱇は鍵にかけて軒につるす。されば日よりは天道次第ながら、さしも大井川は膝たけにこして、思はぬ酒匂に二日留められたる、荒井の茶屋に鰻のあたらしき日は親の精進にあたりて、ひしげたる小家に日越の燒餅をくふなど、昨日は絹賣に道づれして、大濱に饂飩をふるまはれ、今日はぬけ參りの介抱して、天龍の川風に新しき笠をとられたる、哀樂日々に移りかはりて、幸と不幸は首途の吉日にもよらぬなるべし。旅にあはれを知るとは、その行客の身の上のみにあらず、駕籠かる人はかく人の達者を羨めども、駕籠かく人はかかる人の錢を羨む。小揚の合言葉はいつの世よりの洒落なるらん、やるけんことは三十五文にして、またと坂東とは、二十八文なるべし。朝は鳥羽の早追ひにはしり、晩は姫路の夜中をつりて、身は定めなきならしばゝれ、雲助のゆく末もいとこゝろもとなし。

神氣陰靈の川越の首に髭奴のまたがりて、及ばぬ富士をながめたるも、片目の馬かたの、座頭のせてくらがり峠こすも、いづれ世わたりの悲しからぬかは。それが中にも、目の過ぎたる船頭は大阪番にたゝかれ、鼻の落ちたる餅屋は六十六部にさへきたなまれぬ。誠に一生涯のありさま、觀ずればみな旅にして、世を旅の宿にたとへたるは、假の住居といふのみにあらず。樂しみも苦しみも行く先に見盡して、たとへ女院の六道の沙汰とても、これに漏れざるべし。たゞ、誹諧師のなる果てのみぞ、棄恩入無爲のしめしもまたず、ふつゝかにあたまもまるめて、吉野初瀨の春をゆかしみ、松島象潟の浪にうかれまはり、三文ねぎりて戻り馬にはゞかれ、乘合なくてわたし舟も出さず、誰がためならぬ雨にもぬれ、月にも道程をつもりちがへて、氣の毒の山かげに、一夜は一つ家の情をかりて、すゝき折りたく圍爐裏ばたに膝さらあぶりながら、蟲齒やむ子にまじなひ敎へて、稗團子のもてなしにあふ。あるはしるべの古寺を尋ぬれば、和尚は漢和もすこしなりて、足のぬけたる碁盤に慰み、五六日の名殘ををしまれて、松茸に喰ひあきたるなど、水雲萬里をうかれありきて、ほだしなき身の安さながら、そこの下人を孫平とは、我が伯母聟の名なるものをと、ふと故鄕の戀しき折もあるべし。われ仕官十年の間、木曾路東海道の繰言ながら、のぼれば行程千四十里ばかり、なほながらへていかばかりの旅行もしらねど、ことしは齡も四十の老いちかく、しきりに懷舊感慨の情に忍びず。旅の賦一章を書きて寓

居の筆をつひやすも、誠はあぢきなきすさびなるべし。

借物ノ辯

久かたの月だに日の光をかりて照れば、露また月の光をかりて、貫きとめぬ玉とも散るなり。むかし何某の尊の、兄の釣針をかり給ひしより、まして人代に及んで一切の道具を借るに、かすものも互なれど、砥の挽臼のといへるたぐひは、かすたびに背ひきく、鰹ぶしはかりられて痩せて戻るこそ哀れなれ。金銀ばかりは徳つきて戻れば、もとかる事の難きにはあらぬを、かへす事のかたきより、今は借る事だにたやすからず。むかし男ありて、身代もならの京春日の里にかす人ありて、かりにいにけるより、やごとなき雲の上人も、かりにだにやは君は來ざらんと、露ふか草の深入りし給へば、鬼のやうなる武夫も、霜月比よりは地藏顏して、人にたのむのかりがねは、尾羽うちからして、春來ても越路にかへらず、かりの宿りに心とむなと、人をだにいさむる出家達も、借らでは現世の立ちがたきにや、二季の臺所には掛乞の衆生來りて、色衣の長老これが爲にをがみ給へば、又ある寺には有德の智識ありて、これはこちから貸しつけて、きりの算用滯れば、貧なる檀方を呵責し給ふ。かれもこれも、ともに佛の御心にはたがふらんとぞ覺ゆる。そも顏子は陋巷にありて、いかきの飯瓢簞酒に貧の樂しみありとかや。さるを今の世の人々、借金の山なして、これを苦にすれば限りなし。

百までいきぬ身を持ちて、さのみは心をかなしめんや。一寸さきは闇の世ごと、放言に腹うちたゝきて、我は貧に安んじたりなど、おなじ貧樂の引きごとにいふは、やるせなき心のはらへならめど、實は雲水の間違ひなり。なべて世にある人の、衣服調度を始めて、人なみならねば恥かしとて、その爲に金をかりて、世上の恥はつくろふらめど、人の物をかりてかへさぬを恥と思はざるは、たゞ傾城の客に向ひて、飯くふ口もとを恥かしがれど、うそつく口は恥ぢざるにおなじ。かくいへる我も借らぬにてはなし。かす人だにあらば、誰とてもかりのうき世に、金銀道具はいふに及ばず、かり親から養子も勝手次第にて、女房ばかりはかりひきのならぬ、世の掟こそありがたき例なれ。

かる人の手によごれけり金銀花

訪ニ剃髪ノ辭

丘々剃髪して桐の坊といへりとぞ。まづは殊勝の法師ぶり、名を聞くよりやがて俤の推しはからるれ。されども十徳はきるやきぬや、鱠汁はくふやらん、悉しき便りはいまだ聞かず。

襟垢の世をぬぎ捨てて紙衣かな

猫ノ自畫贊

此の小襖の白くてさうざうしきに、物かきてえさせよとあるに、更に何かくべしとも覺えず。され

ど辭しても許さるまじきかたを早く知りて、よしさらば、此の棚に鼠のあれぬまじなひせんと、をこがましく筆とりてかきたるは何ぞ。我は猫なりと思へども、大宮人はいかにいふらん。むかし金岡がかきたる萩の戸の馬は、よる／＼萩を喰ひあらしたるとか。もしはさる能書の筆して、四條のすゞみ、清水の花見などゝ、賑はしき繪の屏風襖にもあらば、あまたの人の夜毎に出でて、扶持方もつゞき難かるべし。我が袋戸の猫は、たとへすはけて千年ふるとも、赤手拭の踊もしらず、まして肴の棚さがしもせねば、主の爲は中々心やすき方ならんを、朧月夜にうかれぬのみぞ、玉の卮の底なしとやそしられぬべき。世につたなき筆の虎をゑがきては、必ず猫なりと笑はるれば、われ又猫をうつさば虎にも似るべきを、杓子には小さく耳かきには大きなりと、かの梻の木の昔話ならん。かくいへば、鼠の爲とてもよしなし事に似たれども、いでや鼠にも白黑の賢愚ありて、子祭の白鼠はあるじもいざ憎むまじければ、かしこく知りて避けぬもよし。心の鬼の惡鼠のみ、これだにも氣つかふべきは、落武者の薄の穗を人なりと見る類にて、少しはそれよりも近かるべし。さらば牡丹花下に蝶を驚かさんよりは、此の棚にねぶりてかのわる鼠を警むべしと、かれに示しの一句にいはく、

ゆだんすな鼠の名にも二十日草

戀説

かはゆき子も旅はさせよといひ、戀は道ならぬ道もあれば、ふみ迷ふ佐野の舟ばし親もさけて、あだし心は、いれ神とてもいさめずやはあらん。さてしも世に絶えぬすさびにて、身にこそ人の戒むべけれ。そのくまぐゝは尋ねわけてぞ、物の哀れも知る端なるべきを、歌にはもとより專らにして、荻の上葉にとはぬを恨み、有明の月に別れをかこつより、沖の石に涙をかけ、衛士のたく火に思ひをよそへて、たとへ雲かゝる高間の山も、浪よする高師の濱も、てにはの詞に品は飾れども、逢ふの別るるの忍ぶぞ恨むぞと、たゞ一筋の情のみをいひて、女の男を思ふやらん、男の女を慕ふやらん、姿に千變の品はわかれず。誹諧は萬化にくだけて、老若貴賤を別つより、姿に自由の働きあれば、井筒がもとのうなゐ子の、手鞠貰うたる情わすれず、源内侍の十夜參りは、紅裏に名をたてて、逢ふの待つのと詞にはもたれず、其の句の姿に戀を見すれば、戀を一句で捨つる事かと、他門の初心の迷ふも要ならん。しかればかの法師の筆にもかける、まこと男女の情は、雛の夫婦に立ちならびたる中をのみいふ物かは。逢はでやめりし娘を思ひわぶとき、乳母をかこち、長廊下にまどひ明し、向ひの女房を詠めやり、淺茅が宿に後家忍ぶこそ、色このむとはいはめ。ことに都のおそるべき所々に、遊里の軒をきしれば、しばしこそ親の關守もかたけれ、物よみ諸のつれに囁かれ、東は朝日の陰なる遊びもつのれば、西にかたむき易く、もらひのなりし夜は面白く、口說にあけし曉はをかしく、うそは誠にか

くれ、恨みは情に負けてより、人のいさめ世の譏りも、行き過ぎの古みに見下し、宿はお留守の夢の浮橋、程なくとだえして、奢るものなど久しからんや。秋風內證に吹きわたり、出口の柳見すほけに散り初むるより、丹波口の茶屋も見ぬ顏して、身をこりずまの浦ならずも、後に山の借金負ひとなれば、今出川の家も質にながれ、姉が小路の妹婿よりよすが求めて、今ぞ落ち目の境に下り、わづか二三年の夢茫然とさめて、思へば千束の文は何の爲になりけるぞや。昔の孔子も今の伯父坊も、意見はこゝの事なるべし。新町乳守の夕暮、木辻鳴川の曙、唐土ちかき丸山とても、おなじ戀風は吹き通へど、猶とり〴〵にかはる佛は、色をも香をもしる人やしるらん。まして江戶櫻の華やかに、人の心の張りも強く、上野淺草の花ぐもりより、箕の輪の雨の名にぬれて、土手の露ふむ戶なし駕籠より、今戶の舟のこがれ寄ることそ、遊びに幅の廣がり易きは、さしも武藏野の深入りする人も少なからじ。波にうかるゝうかれめ、草に音をなく辻君、白人、比丘尼、野郎、影間、それとて賣りかふものは更なり、御油赤坂の留め女さへ、をかしからぬ事もよく笑ひて、ねよげにみゆる旅人に、なじみの文よみて貰ひ、さし足袋賣りたるえにしより、七日つゝしみし始末もやぶれて、一夜の露に落ちやすきは、いざ此の道の習ひならぬかは。それよりの世の樣、人しれぬ事のみ多き中に、お比丘尼のかたみわけに、似げなき文の簞笥から出でたるも、若旦那の鼻毛ぬきを、物縫ひの部屋に見付けたるも、みなみ

な跡の祭なれど、物いひさがなき世にしあれば、浮名は千里に立ち易きを、蚊をやく紙燭にいれわるき蚊屋をすかし、小角豆つむ垣根に鄰の行水をのぞくなど、わづかに蟻穴のあやまりなきから、身をはふらかす端ともなるべしや。さればこそ呉服屋の手代は、思はぬ濡衣著て稲荷の前に紙屑をひろへば、四條河原へ賣りたる子の大名に抱へられ、親までゆたかなる扶持方を得て、長がたなの銀こじりは、ひとへに我が子の光ながら、むかしの念佛講中は、傘もどさぬ謗りも殘るべし。これらや一生浮沈なれど、其の源は唯かりそめの檜原が露の契りに始まりけん。しかるに色白なる聲さしありて、屋敷がたにて煙草入をもらひ、琴の指南の撿校が、月見の夜から出入りとめられたるなど、あるはお寺から手を廻して、山歸來買はるゝも、飯のくはるゝ痞へに、折々針立の泊りて行くも、わけを糺すの神にとはば、表八句につかはれぬ事もあるべし。又は風俗にいにしへ今の違ひもありて、律義なる漢帝は、反魂香をたきて夜すがら夫人の面影をしたひ、榮耀なる隠居は地黄丸をのみて、季時に飯炊きの器量をえらむ。猫にひかれて見そめし夕は、玉だれの隔てをかこち、蚤にくはれて待ちわびし夜は、古夜著の恨み明すなど、自ら貴賤のけじめなきにもあるべからず。慈鎮和尚の眞葛が原も、破戒の罪の謗りもなければ、其の身に戀をせよとにはあらず、戀に心の發東なかりせば、前句に對して趣向はありても、句作も道具も取りつくかたなく、思ふにも手の屆かぬは、具足著て灸を搔くより、

猶不自由のくるしみあるべし。いでや戀といひ旅といふ、旅はかたちを勞して情は後なるべく、戀は情を先にして哀れは姿に品を分てば、内外いさゝか先後のたがひもあらんか。さらば句案の上にも、其の心あらざらんや、恐るべし。かかる說は、饒舌の罪おふべくして、只後の君子をも待つべきを、忍びもはでずして筆とり侍る。これもまた戀の闇に迷ふたぐひかも。

閑居ノ記

忘るまじ、此の一室は、古き世のゆかりなりけり。もとは城西の閑居にして、我が曾祖母のいまそかりし、今は四十年の昔ならん。その人おはせずなりて、鴉の軒をあらし、鼠の壁を穿ちしほどもやゝ年あり。そののち母の住みたまへるかたに、ふたゝび營みしつらひつれば、旦暮の定省に寒暄をとひ馴れしは、十年あまり三年ばかり、千代もと祈りしそのかひもなく、むなしく風木のかなしみを抱き、桃李物いはぬ昔とはなりぬ。しかれば毀つに忍びず、今官邸に閑地あるにまかせ、暫しこゝに引移し、猶菅原や伏見の里もと契り置きて、平生座臥の一間となせるよりは、馴れ來つる眞木柱も我を忘れじを、我はましてて馴れこし方の花もなつかしく風も忍ばしく、窗に冴ゆるゆふべに、早梅色養の笑みをふくみ、軒に月もる曉は、鷄聲盥漱の期を告げて、猶孝情の盡きざりし事を惜しむ。されば一室は八疊の南をうけて、牀も押込ももと見しまゝの名殘とゞめつ。北に三疊の奥まりたる所、夏

はあけ渡して風を通はす便りあり。中はよしして冬籠りによろし。爰に燻さし焚火を掛けて、讀書靜坐のかくれ所とす。その傍に子猷が竹あり。陰を愛して杖にもきらず。その軒に弘景が松あり。聲を樂しみて蚊遣りにも手折らず。背戸には淵明が西疇ありて、雪間の若菜つみそなふるより、荳も酢味噌にとぼしからず。茄子はもとより世に久しくて、明暮のあつものにはやしあかるゝもつれなしや。牛蒡ははそくとも大根は太きをいとはず。まして芋は地に叶ひて、いかめしきまでそよぎたち、豆も賓人りの折すぐさねば、せみの小川の影ならずとも、月も此の軒をたづねずやはあらん。十日驪馳の騷がしきも、一日の閑にとりかへして、これだに治世の住みよきを知るにも、おはさぬ人のいかでかと、あかずたゞ口をしく、忍ぶ草の忘られず、隔ちゆくあとのみ惜しまるれば、額に無詩の二字を書きしも、たゞこの心に思ひよれるを、いざほとゝぎす我な疎みそとぞ。

斷ツ酒ヲ辯

もとより李杜が酒腸もなければ、上戸の目には下戸なりといへども、下戸なる人には上戸ともいはれて、酒に剛臆の座を分てば、自ら飲む人の方にかずまへられて、南郭が竽をふきける程も、思へば四十の年にもちかし。されば衆人みな酒臭しと世に鼻覆ひたる心はしらず。まして五十にして非を知りしとか、賢き例には類も似ず。近きころいたましう酒のあたりけるまゝに、藻にすむ蟲と思ひた

つ事ありて、こゝろみに一月の飲をたてば、身はなら柴の木下戸となりて、花のあした月のゆふべ、かくてもあられけるものをと、はじめて夢のさめし心ぞする。けふより春の蝶の醉ひごゝろを忘れ、秋のもみぢも茶の下にたきて、ながく下戸の樂しみに老いを待つべし。さもあれ此の誓ひ、みたらし川に御祓もせねば、たとへ八仙の一座なりとも、まねかば柳の靑眼にまじはり、吸物さかなは人よりもあらして、おなじ醉郷にあそぶべくば、いざ松の尾の山がらすも、月にはもとのうかれ仲間とおも思ふべし。

花あらば花の留守せん下戸ひとり

物忘ノ翁ノ傳

わすれ草生ふる住吉のあたりに住みわびたる、物忘れの翁あり。さるは健忘などいへる病の筋にはあらで、只身の愚かに生まれつきて、物覺えの疎かなるにぞありける。昔は經學の道をもとひ聞き、作文和歌の席などにも、誘ふ人あれば交らひけれど、きく事習ふ事のさすがに面白しと思ふ物から、夕に覺えしことゝいへども、朝ぼらけには漕ぎ行く舟の跡なくて、身にも心にものこる事すくなし。さればこれを書き付け置かんと、しひて硯ならし机によれば、春の日は蝶鳥に心うかれて過ぎ、秋の夜は蟲なきていとねぶたし。かくてぞ老曾の森の草、かりそめの人の約束も、小指を結び下のひもにしる

しても、行く水の數かくはかなさ、人も笑ひても罪ゆるしつべし。されば其の翁のいへりける、身のとり所なきを思ふに、若きに數まへられし程は、人やりならず恥かしかりしが、つんぼうの雷に騒がず、座頭の蛇におどろかざる、こぼれ幸ひなきにもあらず。よのつね聞きわたる茶のみがたりをはじめ、聞きける事の耳にのこらねば、世に板がへしといふ話ありて、又かの例の大阪陣かと、若き人々はつきじろひて小便にも立つが中にも、我は何がし僧正の時鳥ならねど、きく度にめづらしければ、げにと聞くかひある翁かなと、語る人は心ゆきても思ふべし。ましてつねづね手馴れ古せし文章物語の雙紙も、去年見しことはことし覺えず、春よみし書は秋たどたどしく、又もくりかへし見る時は、只新たなる文にむかふ心地して、あかず幾度も面白ければ、わづかに兩三帙の書籍ありて、心の樂しみさらに盡くる事なし。むかし炎天に腹をさらしたる男は、人にも折々物をとはれて、とりまがはじ言ひたがへじと、いかにかしましき心かしけん。今は中々うれしき物わすれかなとぞ言ひける。猶かの翁が家の栞に、何の本歌をか取りけるならん。

わすれてはうちなげかるゝ夕かなと物おぼえよきひとはよみしか

妖物論

世に妖物といふ物ありて、おほくは女となり兒とあらはれ、大坊主の取り沙汰はきけど、月代そり

たるはつひに聞かず。夜ばかり出づるはいかなる故ぞと、或人の問ひたるに、晝は例の子供のたかりて煩はしさにと答へたるぞ、さしあたりての名言なるべき。臆病者を相手にとれば、その異殊に出來榮えして、武功の人に出であはすれば、思ひの外のあやまちをかうむる。鬼は伯母に化けて腕をとりかへし、狐は叔父にばけて翁の意見をいふ。誠に鬼が伯藏主になり、狐が伯母に化けたらんは、その姿をかしからじ。これらや正風自然の本姿なるべきをや。まづは狐狸のなすわざに落ちて、猫また河童はたゞ／＼の沙汰なれども、その正體の穿鑿は、樂屋の見えておもしろからず。たゞ理窟なき妖物といふものこそ、殊にゆかしけれ。そも／＼神は湯立にもうつらせ給ひ、佛は稱名に來迎なるを、此の妖物は百物語に感應して、何とさだまれる姿なければ、三才圖會にものせられず、訓蒙圖彙の筆にも及ばず、たゞ赤表紙の小雙紙にはづかしき姿はとゞめられける。さるに、昔今の美婦國色すら、身の終りはみぐるしく、關守におちぶれ、檜垣にさまよひ、又は猿澤の池の藻屑にまとはれ、馬嵬が原の草葉にさらされて、果ては東坡が九相の見たてもうるさきに、たゞこの物の終りばかり、引幕の陰をもたのまず、あとに帚も雜巾もいらず、かきけすやうに失せにけるこそ、いふばかりなくめでたけれ。

右の文章享保の初めより寛保の比まで、半掃庵著述の遺稿なり。

張藩六林校

題鶉衣後

也有翁は風雅の隱君子なり。予に莫逆の交はりを許され、常に教をうくる事あつし。玆にまた東都の四方先生あり。予はるかにその芳名を慕ふ事久し。然るに此のうづら衣は、翁少壯より老に至るまで、生涯四時の不斷著なりき。簞笥にをさめて隱し置き、むざと人には與へられざりしを、東都の先生いかにしてか聞きつけられけん、ある人にことづてて、その地合染色をも見ばやの望みあり。翁、生前傾蓋はあらざれども、高山流水の音しる人また外にやはあると、前津(まへつ)の舊庵へかけ込みて、そこを守れる文樵なる男に、さびたる鍵とらせて、押しいれの引出しを搜し、文匣の底ふるひて、あまたの中にえり垢のつかぬをかれこれと選り出し、速かにこれを贈れり。日あらずして梓に上せられ、遠近の好士に一襲(かさね)づゝ、衣配(きぬくばり)せばやとの沙汰あり。誠に翁に於て隔世の知音といふべし。さぞな泉下にも雀躍して歡喜あらん。そも四方先生の高誼は、海內みなしる所なり。也有翁の上は、さきは發句集のはしにつたなき筆をそへぬれば、かた〴〵玆に贅せず。たゞ四方先生の此の一擧をふかく感じて、聊かそのあらましを附するのみ。

天明五年乙巳師走の下旬　　　護花關　六林識

鶉衣 前篇續

煙草ノ說

夜道の旅のねぶたきとて、腰に茶瓶も提げられず、枕の寢覺の寂しきとて、棚の餅にも手の屆かねば、只この煙草の友となることそ、琴、詩、酒の三つにもまさるべけれ。竈のもえ杭をさかしたるは、宰予が晝寢の目ざましにて、行燈に首延したるは、小侍從が待つ宵ならん。達磨は九年の壁にむかひて炭團の重寶を悟り、西行は柳陰にしばし火打の光を樂しむ。されば出女の長ぎせるは、夕暮の辻にもたれて口紅兀がさじと吸ひたる、少しは心遣ひすらんを、船頭の短ぎせるは舳先に胡坐ひて、有明の月を詠めながら、大海へ吸ひ殼投げたるよ、いかに心の晴れやかならん。やごとなき座敷に、綟子張の煙草盆をあまた數に引きわたしたるより、路次の待合に吸口包みたるは、憎からぬ風流なれど、さすがに辭義合ひに手間も取るべし。只木枯の松陰に駕籠立てて、繼ぎ煙管取り廻せば、茶屋の嚊のさし心得て、蚫がらに藁火もりてさし出したる、一瓢千金の譬へも此の時をいふにや。または雲雀なく空のどかに、行く先の渡場問ひながら、畑打のきせるに雁首さしあはせて、一服吸ひ付けたる心こ

そ、漂母が飯の情よりうれしさはまさらめ。そも煙草の徳もむかしより人のかぞへ古して、今更いふもくどければ、かの愛蓮にならひて、たゞ此の類の品定めせんに、酒は富貴なるものなり、茶は隱逸なるものなり。煙草はさしづめ君子の番にあたりて、用ゐる時は一座に雲を起し、退く時は袖のうちに隱る。こゝに神龍の働きありともいふべし。下戸と妖物は世にすたれて、下戸は稀少からず。今や稀なるは煙草ぎらひにして、野にも吸ひ山にも吸へば、煙草入の風流日々に盛んに、煙管の物すき年年にあたらしくて、若輩の目を迷はせども、楠が金剛山の壁書を見て思ふに、たばこはさかぬを專らとし、きせるはよく通り、灰吹はころばぬを最上とこそ。さらば色見えでうつろふ花の人心にも、畢竟そのものゝ本情實儀を失はざれとなり。

薦野ノ記

つのもじや、伊勢の薦野なる山に溫泉あり。年頃なやめる痾疾に試みんとて思ひたつ。比は七月の二十日あまり、尾城を舟出して桑名にいたる。あさけ川といへるより道わかれて、かの山へむかふ。

鴫たてば　夕　は　い　か　に　あ　さ　け　川

その末は人家もまばらに、薄はまねけど酒屋もなく、餅は萩の花の名のみにして、秋草のやさしく咲きみだれたる、こゝを繪野とはいふなるよし。

誰すてて扇の繪野の花づくし

山口といへる一つ家ありて、菓子などうる店に尻かけて、

こだまより外鄰なき砧かな

それよりは嶮しき道、細くあやふき岩をつたひ谷を渡りて、雲より雲にわけ入れば、世の外遠くへだたる心地して、さては靜けき山の中にこそと思ひやりしには似もやらず。湯本の家はわづか二十にたらねど、二階づくりの家居つぎ〳〵しく、古市などいへるあたりより、たはれ女多く來り居りて、絲竹に客をなぐさむれば、小歌淨瑠璃山どよむばかり、峯の松風も三線に音をうばはれ、淸き谷水も脂水のけがれに濁るべきぞ、思ひの外の山里にはありける。今年はことに湯入りの多くて、伊豫の湯桁もよみ盡すまじく、近き比にすぐれたりと所の人もいふめり。若々しきかたは心にもとまらず、あたら山里の秋の夕をと、本意たがひたる心地するが、もと見しことどものさすがに思ひ出でらるゝ折もありて、むかし忍ぶの家の名も橘屋といへるに、しばしの宿もとめて居れり。襖一重へだてて、ことに賑はしく諷ひさわぐに、

色鳥のねぐら鄰や山がらす

日々の口號、

湯の山やにしきに交る染めゆかた

暮は湯にゆづりて秋の櫻かな

山の上に藥師堂あり。三岳寺と名のみことごとしく、囘祿ありける後はかたばかりに營みて、すめる僧もなく、あけくれ鐘つくは堂守の男にて、法師にはあらざりけり。

鐘つきや剃らぬあたまに散る柳

六日ばかりの月、山の端にかゝりて、風も湯あがりの身にしむばかり、端居の夕をかしきに、鹿の聲遠く聞きつけぬ。

笛にせぬ湯下駄にもよるか鹿の聲

つれ／＼紛るゝかたなき日は、そこら見めぐり侍るに、大石と名に立てるあり。

友寢して猿と月みん石の上

青瀧といへる、うしろの山をへだてて西より落つる。

青瀧や壁に音きく初あらし

この山下にあやしき野火あり、人の亡き魂とかいひ傳ふ。

たが魂ぞほたるともならで秋の風

我が名もつゝみ人の名も問はねど、おのづから見なれ物言ひかはして、いざたまへ今日は花火あげてながさまん、あまごといへる魚捕りになどさそふ人々もあるが中に、ことにあけくれとひ來りし覺樹といへる若き僧あり。下手なる象戲などさして、寂しさまぎるゝたづきともなれり。過ぐる日數も二廻りばかり、今はとてかへる日は雨にふられて、

湯にぬれし袂の果てや秋の雨

かばかりの事も、後の思出にもやと書きつけ侍る。此は乙亥の年になんありける。

樂老庵主像ノ贊

滄浪の月すめらば酒に惜しむべし、くもらば茶に遊ぶべしと、一つの間にながゞさむは、樂老庵のあるじなり。これを爲がきこれに贊して、

酒に待ち茶に待ちかへて月一夜

といへるは、その友、紫隱里の某がもとめに應ずるなり。

贈ル奧州株人ニ辭

未見の來由を記して、株人雅伯に謝する辭に代ふ。

世には葦垣の間ちかき軒をならべてだに、心あはぬどちは音づれもせぬ習ひなるを、遠き陸奥の見

もしらぬ許より、一句を添へて、かの地の產なる山、小やかなる硯を贈り給はりぬ。あやし、しのぶ文字摺り誰ならん、我ならなくに人たがへもやと、その便りせし風水翁にとへば、その國に名だたる騷客島庵主の何がしとや、かの翁の旅寢にいかなる序か我が名もらし給へるより、そは誹門の友なりとて寄せ給へりとぞ。されば我及ばぬ此の道に心入れてより、蕉門の人としきけば、皆十年の舊相知の如く思へるが、さては我ならでもかかる心の習ひにやと、うれしき傳のいひ盡すまじう、硯は袖にかくすばかりなるも、遠き惠みの荷恩を思へば、千引の石の心地こそすれ。

ためしなき鳫に重荷やすゞり石

いでや、この情のかき消すまじくば、松の煙の黑からんよりと、これを文房の朱硯には定めぬ。世をもてかぞふ壽によらば、長く風雅の契りも絕えざれとぞ。

朱硯にまづ手染めせん寄の蔦

そもや、芭蕉翁は、生涯を雲水に終り、杖を引かざる國々もなきが中に、奧羽は行脚の始めにて、奧の細道の紀行をあらはし、その句は人の耳口に殘れば、ことにゆかしき隈々も多し。さるを仕官にほだされて、雄島の苫やまたも來てみんと、欲なる願ひは思ひもかけず、たゞ一度の見るめも及ばぬその千賀のうらみは、千島も數ならず千尋の海も淺からん。されば能因の一首を思ひて、一句はその

人にゆかしさを告ぐるならし。

しら川や夢にこす夜も秋の風

一色亭ノ記

豆州熱海に寓居の時、渡邊彦左衛門といふものゝ求めによりて記す。

沂に浴し詠じてかへらんとねがひし、彌生の客にはあらで、秋も綿入の羽織きる比、此の熱海の湯本に一月ばかりのやどりする事あり。さるは我が國君の母公に從ひまゐらせて、身の爲ならぬ旅寢ながら、舊痾幸ひの折を得て、疝氣の腰を温泉に浴し、浮世の耳を澗水に洗ふ。されば此の里の地理、うしろに山かこみ、海はもとより波こゝ許によせて、月の寢覺めに枕を支ふれば、鹿の妻とひ巴峽の猿にまさり、雨のつれ／＼に杯をとれば、鰹の刺身松江の鱸に恥ぢず。伊豆のお山、眞鶴が崎、久かたの日金山、朝もよひ紀の僧正の宮眺めて吟魂をなぐさめ、歩して舊跡をたづぬ。沖の小島は朝夕にみればこそあれ、大島はやゝ波路へだたり、雲晴れてあらはれ、霧わたりてかくすも、げに限なきをのみ見るものかはと、えならぬ眺望いひ盡すべからず。然れば家ごとに東面をひらき、湯入りの客の目をよろこばすが中に、渡邊氏某が亭にぞ、わきて便りよき樓は構へり。むかし佐文山こゝに來けるついで、三字の額に筆をぬらせしより、一色亭の名によべるは、滕王閣の趣なりとや、落霞孤鶩と齊

しく飛ぶ、その長天と共なる海づらの、秋も今にして、浦のみるめ軒端にさはる方なく、心あるあまの腕のわざと荒して、と詠みけんには事かはりて、家居もことにつき〴〵しければ、立ち寄る人もここをせに、先づやどりとる事にぞありける。

心ありてあらさぬ軒に浦の月

乞食畫贊

もとより小町が身の果てにもあらず、豫讓が忠のやつしにもあらず。君よくこれを忘れずば、厨に肥肉を遠ざけて、仁政野邊の草葉に及ぶべく、臣よくこれを忘れずば、つねに飽濕の恩澤を省みて、報國の志もいかでか爰に起らざらん。ちかく治世の明暮とても、これを見かれを思ひ知らば、花に一杯の望みは足り易く、雪に鰒汁の奢りはやむべきをや。あはれ世の人心、蟹の目の上にのみつきて、猿の手の及ばぬ方に延すらんを、あが佛を香華にまほりて、その黄金の肌を羨むよりは、たゞよしこれを起居に詠みて、薦一枚を忘れざらんにはと、みづから座右に畫贊す。

十六夜賦

十六夜の月みんと、勢田潟に舟よそひするに、何がしがあるじ設けしけして、世帯道具も乏しからず、巨口細鱗も網に翻れば、斗酒はもとより坡翁が妻の才覺もからず、海老煮る鬪も漕ぎはなれて、

限なき月の海面にのぼれば、こよひや星崎の千鳥も月見んとは啼くならん。いでや其の翁も、湖水に今日のかけをめでて、成秀が門敲き給ひしとか。昔鏡の山こそなけれ、呼續の濱、松風の里、浪のみるめも迷ふばかり、西湖江湖の秋風も、今宵はこゝに吹かざらんやと、酒に賑はし茶にさはして、やゝ清興を高ぶれば、ふして鳴海潟、夜寒、寢覺の里の名に、歌よむ人は衣かたしき物思ひ顏なるを、いざや宮蒟蒻の寂しみこそと、例の唐辛子のいらひどきに、戀ならぬ袂をぬらして、又一杯をあらたむれば、白鳥山の鐘の聲、おどろくばかりにぞ更けわたりける。

呼びつぎの名にいざよひの月見かな

螻翁ノ傳

螻といふ蟲は、よく飛べども家を過ぐる事あたはず、よく登れども木を窮むる事あたはず、よく泳げども谷を渡る事あたはず、よく穴ほれども身を掩ふ事あたはず、よく走れども人を免るゝ事あたはず。これを、彼が五能ありて、一つをもなさずとはいへりとぞ。こゝに翁あり。詩つくれども詩ならず、歌よめども歌に似ず、物かけどもよからず、繪かけどもつたなく、誹諧すれども下手なり。我かの蟲に劣らめやとて、みづから螻翁とぞ名のりける。やゝ老いたり。今はかかる身のほどを知りて、他にほめられん事をねがはず、人の謗りをいとはず。さらば何にかも腹たてて、かのつぐみといふ鳥には

喜ばるべき。よし、たゞかれは腹立つべくとも、我は笑はんと思へるなりけり。

三日月堂ノ記

摩天曾根成就院需

そもや故人の手にならせし調度、筆に殘せる跡は、もとよりめでたき形見なれど、世に露霜もおきかはれば、あるは失せあるは損ねて、にせか眞かの疑ひもむつかしく、只よし人の言の葉ばかりこそ、代々にむしばまぬ寶とはいふべけれ。されば翁の一生の吟、いづくはあれど、此の府下にしては、何がし院のかへるさにとぞして、其の寺の銘しるさるは、たゞ愛に此の一句のみならん。猶その詠ぜし物の上にいはゞ、かの武隈の松もあとなく、井出の款冬、六浦のもみぢも、今はむなしき名ばかりなるを、たふとくも、此の寺に古の月そのまゝにありて、眺望もまた世にこえたれば、昔をしたひ跡しのぶ人の、誰かは愛に來て仰がざるべき。さるを五條坊のぬし、朽ちせぬ印をたて、院主もまた堂に名づけて、此の句の光いやましに掲げしより、雲上の雁も水底の魚も、時と驚かす鐘とうたがはず、ましてまた人も驚くとも、一度たとへて二度目に告ければ、たゞ三日月の三日月なるその影は、世々にかはらずして、いつも此の寺に隈なからんとぞ。

猿の手に摩づともつきじ三日の月

翁像ノ讚

道は古池の吟にひらけつゝ　吟は枯野の夢にをはりぬ。
檜の木は月の笠ならねども、　影を風雅の世にあふがらむ。

音曲ノ説

今様朗詠といへる、むかしは遊びの最上にてやありけん。かの催馬樂などいふものは、我つひに聞ける事もなし。たま〳〵幸若が家に、舞といふ事の幽に残れるもめづらしとて、一度は人の聞きもすべし、二度と聞くべしとも覺えず。今は謠といふもの、上中のもてあそびとなりて、はなはだ下へは至らず。法制そなはり、老若のさかひなく、古今に變なし。さればこれを玩ぶは、人品よろしき方に定まりて、たとへ商人のよき衣著たらんほどの際は、高砂東北をも知らぬは、主ならでも杯の底なき心地ぞする。世にさるべき饗應の席へは、その職なる人召し出されて、小袖と上下の紋は定まらねども、時ならぬ足袋はきたるは、ひとさしも心得たるなるべし。一座のさし合ひ折柄の文句には心遣ひして、いかで杯の間をぬかさじと眼を配りたるなど、扇は膝の上に斜なり。あるは亂酒の打ちやはらぎて、やごとなき方よりも上調子に聲打ちいで給へるに、やがて一座聲をあはせて、中にも手鼓の心得たるなど、蟬のごとく蛙に似たり。かかる中に、たま〳〵その道心得ぬ人は、炙物にせゝり箸して

うち背きたるは、口をしとや思ふらん。然るに晴れがましき舞臺の面に、眞貌に足拍子ふんで、辨財天とはわが事なりとは、まことに仁體にも似あはず、あまりなる事と思へば、少しかたはらいたく覺ゆる折もありけり。

されば、世うつり、人の耳も心もたゞ向上にはしりて、淨瑠璃といふものは、洒落のはじまりにてやありけん。夫れだに五十年の昔は、さてもその後弓取一人おはしましてと、一部を發端に名のり、御臺姫君の道行も、たゞこゝにあはれをとゞめしに、今世は年々月々に新奇をあらそひ、義理に虚實の入り組みて、二重どきの謎よりはむづかしく、不飲込なる老人の耳には、善も惡もおぼろ／＼として、三段目の愁へには、あたりの顔を詠めわたして、たゞ泣くより外の事ぞなき。これを崇ぶ人の、外の音曲とはふりかはりて、本ひかへたるは上手めき、空に語るは心劣りぞする。日待庚申に專らにして、燭臺の陰に衣紋かきつくろひ、翠簾あるかたを側目にかけて、聲つくりたるよそほひ、やゝ三重の間に息つぎて、氣色ばかり汗のごひ、湯をのみたる樣よかりけりなど、人のつきじろひたるけはひ、世にある思出かくこそなど、若きは羨む心もあらんに、よく其の人の上をきけば、多くは見に見かぎられ、親の勘當も少なからず、養子縁組の相談には、すこしさゝはる方もありぬべし。極めて工商の間にありて、年も三十ばかりまでのわざなるべし。歌とは總べたる名目なるべけれど、今自ら

節わかれして、其の品また貴賤の異なるあり。古今に一様ならず。琴の組などは上代のまゝにして不易の曲なり。三味線にあやつる類は、流行しばらくもとゞまらず、文句も百端に音節さだまりなし。本調子は、たとへば女の下髪にうちかけしたるごとく、二上りは髪當流にとりあげ、姿も一つ前に頽れたり。三下りは静まりたるに似たれど、かくし化粧にしごき帯したるよそほひ、物思ふ人はこゝに涙をも落として、中々淫奔の媒とはなりぬべし。すこしも品ありたる人は、耳にこれを慰めども、心うから口には誦しがたし。やゝさだ過ぎたる身の上には、猶にげなくてうたふべくもあらず。かの牛の角を敲きて田の畦にうたひ、蕢荷ひの一節は、今も月夜の門過ぎがてには、さる類もあるべきか。鋏を弾じてうたひしなどは、大人げなくもなかりしにや。いさ唐土の事はしらぬ風俗なり。たゞ鄙によるいならなくに、賤の男賤の女のうへにこそ、歌はすべて難き哀れぞ多かる。舟歌は、めでたく祝ひて勇ましきものから、漁歌の棹歌と古人のいへるは、波間蘆間のさびしさにて、これにてはあらざるべし。山さらに幽なるに、樵の歌のきこえたるは、伐木の丁々たるよりもまさり、あけ野が原に菫咲きて、比丘尼の歌のなめけなるより、小夜の中山夜ふかき霧わけて、馬かたの欠まじりにうち出でたる一節ぞ、楚客の魂たゞこゝに碎けぬべし。田植歌、麥歌、臼挽きうた、水汲みうた、いさゝか折々にしたがひありて所々に品ことなり。いづれも哀れならざるべき。和歌にはさして稱せざれども、詩客

誹人多くはこれに情を託せり。

平家といふものありて、まづは琵琶法師の家にのみ傳はれども、はやり歌の華やかなるにも似ず、說經の哀れなるにも似ず、舞のすたれたるにも似ず、淨瑠璃の新たなるにも似ず、すかぬ人は甚だすかず、すく人は殊にすけり。我に友あり。其の人のいへる、稍老いになんなんとして、かの音曲の品品、一つも身の上に唱へがたし。されば此の平家は、ことごとく信ずべからねども、和朝の記錄にして、懷舊覽古の情ふかく、謠のねからつくり事なるにはまされり。老いては人の交はりうとく、獨り居がちにかき籠りたらんには、これこそ三つの友の一つには足りぬべけれとて、かの無絃にあらぬ一面の琵琶を抱いて、雨の日、月の夜、宮務の隙に搔きならせば、人は唯平家を習ふとや見るらん。我はひそかに老隱の稽古をするなりといへり。さればかの琵琶も、母かたの祖父より傳へたれば、絕ゆまじき絲筋なめり。撥面に三日ばかりの月さし出でて、桐の一葉の散りたれば、新涼とはよぶことぞ。これに寂しからん句ひとつと乞ふまゝに、

膝やせて琵琶のなづきや秋の暮

知雨亭記

市中はなはだ遠からねば、杖頭に錢をかけて酒を賒る足を勞せず、市中また近からねば、窗底に枕

を支へて夢を求むる耳靜かなり。こゝに少しの地を求めて、聊か膝を容るゝの幽居を營む。よし、かの鬼はわらひもすらん、我が世のあらまし違ふまじくば、花とならびの岡ならずも、ありとだに知られでぞ、老いの春をも過さばやと、人知れず思へるなりけり。かの山雀の身のほど隱して、門壁たゞ風を防ぎ、三徑わづかに草を拂ふ。爰に汲むべき山の井なければ、井戸ひとつこそ過分の貯へなれ。あたりは夕顏の小家がちなれば、枕に鷄の曉を告げ、夜はとがむる犬も聲して、ひたすら遠き程にもあらず。門を出でて東北の方しばらく十歩の杖を曳けば、指頭萬疊の山横をれ、眼下千町の田つらなり、村落畫圖の中に入る。南は高倉の森高く、鳴海の浦風も通へばや、勢田潟も名のみして、夏は夏しらぬ日も多かり。やゝ賤が屋の蚊やりも細りて、衣うつ聲蟲の音もよそよりは早き心地するは、夜寒の里も近ければならし。年くれ年かへり、垣根の梅は遲からねども、萬歳鳥追などいふものの浮世の春にはたゞ一日二日も立ち遲れたるなど、さすがに片里めきたり。されば名づけて知雨亭とよぶ事、かの蘇氏が喜雨にも習はず、何かし黄門の時雨をも追はず、只これ穴居に似たればなり。やゝ多病の老いにともなひ、繁きことわざに物ぐさなるには、哀れ思ひし儘なるをと、我は心ゆきて覺ゆるを、こゝもまた府城の辰巳なれば、世をうぢ山と人はいふらんかも。

百魚譜

人は武士、柱は檜の木、魚は鯛とよみ置ける、世の人の口におけるも、己がさま〴〵なる物すきはあれども、此の魚をもて調味の最上とせんに咎あるべからず。絲かけて臺にすゑたる男振さへ、外に似るべくもなし。然るを唐土には、いかにしてか殊に賞翫の沙汰も聞えず、これに乗りける仙人もなし。されば夷三郎殿も、他の葉武者には目もかけず、たゞこれにこそ釣もたれ給へ。龍を鱗の司といふは、食味はなれたる理窟にして、さはこれを料理せんと學びたる人は、昔愚かなる名をもこそとどめたる。

龍門の瀧に登らんとする魚ありて、おふけなくも大聖の御子にも、此の名をからせ給へる。されば世の名聲はかの鯛にもならばんとす。かれは如何なる幸にかあらん。味ひ美なりと雖も、鯛の料理の品々なるには似るべくもなし。乾物炙物にせず、鱠清汁によろしからず、くづし蒲鉾に用る難く、鹽にも鮨にも調ぜず。只刺身あつ物にとゞまるは、多能を恥づといひけんを、中々譽れと思へるにや。昔平家に悪七兵衛景清と名乗りて、今民間には泣く子をも威すべく、朝比奈辨慶にも肩をならべんとす。しかるに記録の上にしては、錏曳の外はさせる働きなくて、只二郎兵衛も五郎兵衛も同じ列なる侍なり。いかに世に名の事々しきぞと、ある人評したるものあり。彼たゞ七兵衛が類なるべし

松江の名産、我が朝にも品くだらず。張氏はこれを秋風に思ひて仕途を辭し、平家はこれを船中に

得て官路に進む。進退いづれをか羨むべき。

鯰は近江に洞庭の名をくらべたる、鯉に似て位階おとれり。名には紅葉をかざしたれど、鱠は春の賞翫となれり。

鰤は節饗の比もてはやされ、梅咲くころを世に匂ふ。

鯖は初秋に祝はれて、空也の蓮の葉に登るは、後生善處の契りもたのもし。

鰹は芥子鮓の風味、上戸は千金にかへんとも思ふらんを、鎌倉の海の素性を兼好に言ひさがされたる、いと口をし。鰹節となりては、木の端のやうにも思はれず、その梢とも見えずして、花の名をさへ世に散らしぬる

鮟鱇の唐めきて仔細らしきに、つるし切りとはいぶせくして、鮭紂が料理めきたり。かれは本汁にえらまれ、鱈はかならず二の汁の大將にて、搦手をご承りぬ。

もしは文字の理窟によらば、紫の上には鯵をめでさせ給ひ、中宮の御膳にはことに鰍をや召させ給ひけん。

鮭は越路に名ありて、其の國の雪にも似ず、色は入日の雲を染めて、うるはしく照りたるこそいみじけれ。たまたま鱒といふものも、その色は負けじとや挑むらんを。

狹夜姬は石となり、山のいもは鰻となる。かれは有情の非情となり、これは非情の有情となれり。石となりて世に益なく、鰻となりて重寶多し。

牡丹は花の一輪にて賞せられ、梅櫻は千枝萬葩を束ねて愛せらる。それが勝れりとも劣れりとも、更に衆寡の論には及ばず。白魚といふものの世にもてはやさるゝは、かの鯛鱸の大魚に比すれば、今いふ梅櫻の類と等し。しかるに、國俗のとなへ異にして、しろ魚ともしら魚ともいへり。これいづれならんといふに、されば しろ菊ともしろ鷺ともいはねば、しら魚といふこそよからめといへば、かたへの童のさし出でて、否とよ、世にしら猫ともしら鼠ともいふにこそと打ち込まれて、爰に物定めの博士暫く默然たり。

鮎は鵜川の篝火に責められ、鯰は濁り江の瓢簞におさへらる。比目魚は黑白に裏表をあらはし、海鼠は後も先もなし。

齒にもたまらぬ鯖の骨は、何の爲に持ちたるや、それも海月のなきには勝れるか。

こゝに蛸の入道は、壺に入りてとらるゝこそ愚かなれ。那智の瀧壺ならば、文覺が行力をも傳ふべきを、一休の口にはほめられながら、まさなの法師の身の果てかな。

かながしらといふ名のめでたくてぞ、産屋の祝儀にはつかはれ侍る。さるを石持といふものの、銀

持ともいはば、世に如何ばかりもてなされんを、益なき名をもちて口をしとや思ふらん。

鱚、細魚はをさなき心地ぞする。大男の髭口そらして食ふべきとも覺えず。

鯊は、たゞ釣る比の面白きなり。里は砧に蚊屋しまひて、木曾に便りよき人は、またき新蕎麥喰うたりなど、ほのめかされて、羨ましき比ならん。

泥鰌は、酒の上に赤味噌ほどよく調じて、唐辛子くはへたるこそよけれ。白味噌がちなる大みや人は、いかに喰ふらんとさへ覺束なし。

鰒とは先づ名のふつゝかなり。いかで無比の美味を具へて、あやしき毒を持ちたりけん。その味ひと毒の世にすぐれたれば、くふ人を無分別ともいひ、くはぬ人を無分別ともいへり。

鰯といふものの味ひことに勝れたれども、崑山のもとに玉を礫にするとか、多きが故に賤しまる。たとへ骸は田畠のこやしとなるとも、頭は門を守りて天下の鬼を防ぐ。其の功鰐鯨も及ぶべからず。

されば歌人は鳥蟲に四季をわかちて、魚に四時の題詠はなし。俳人兼て魚を品題とするは、もつはら味ひの賞翫を捨てざる故なり。しかれば歌よみは、耳目の愛にとゞまりて、食は野卑なりとて取らざるに似たれど、かの喰ふべき若菜をもつはらによみて、菜の花のうつくしきを歌の沙汰に及ばぬは、喰はれぬ故によまざるにや、無下に口惜しと人の言ひたる、さがなき詞ながらをかしかりけり。

案山子ノ辭

守るとせしおくての稻葉刈りはてゝ、山田の畔にひとり立てる案山子あり。羣れ渡る稻雀の落穗ひろひけるが、例の口さがなくて笑ひけるは、養由は百步に柳の葉をはづさず、義家は鳴弦を雲の上に響かせ、賴政は鵺を射る。その外武將名士の弓箭に功ある、みなその藝を發して世に名をふるへり。何ぞや、あしの竹に纒はりて、射る事しらぬ弓の形をいつはり、我が輩を欺かんとするや。案山子これにこたへていふ。ひかぬ弓放さぬ矢にて射る時は中らずしかも外れざりけりと、よみける歌の心を知らずや。その奧州の鳴弦も、矢を放さずして德をあらはせり。麟は角を備へたれども、肉ありて物をやぶらず。むかし忠盛の闇討も、木太刀に身の難をのがれてこそ、賢しと人にはほめられつれ。しひて物をやぶり損ひて後その功をなさんとするは、愚將のなす所なり。いでやかの鵬といふ鳥を聞けるや。九萬里に羽うつて翼垂天の雲のごとし。をどりはねて穗ひろふ汝らが、よくその心を知る所にあらず。いかで我をみゝづくに類して、みだりに笑はんとするや。雀なほも口々にいふ、されどその大鵬の雲に羽うつは、莊子の例の大譃にして、斥鷃の蓬生に飛ぶは、今見る所の實なり。只その實を以ていはん。世に鶴といへるものだに、千年の齡に壽かるれど、今はこれを取りて、大饗に屠られ、羽は矢にはがれ、殼は黑燒にして何かれの藥とて爭ひ求めらる。鷹はこれらをも組み敷きて、其の功

上に出づるに似たれども、その藝のすぐれたる故に、朝三暮四の囿をあこがはれ、足を繋がれ架にほだされて、雲を慕ふの愁へをまぬがれず。しかじ世の中の人には、葛の松原に一枝のねぐら求めて、淺茅が露にかくれやすからんには。そもや汝が身にあきはてゝ、稲葉已に霜寒し。などや石湖に棹さして蓑笠の塵を拂はざるや。他をそしり我を知らざるは共にいふべからず。昔鶯は歌をよみたれども、それは花に啼きぬめりなりとて、

捨て時をしらぬ案山子の弓矢かな

と、嘲りて去らんとす。案山子猶よびとゞめて、汝賢きに似て又わが心を知らず。そも笠を譏るや蓑をそしるや。其の句の返しにはあらず、たゞ此の歌をきけとてよみける。

これは笠これは蓑とてのけたればあとには何が案山子なるらん

絲瓜辭

むくつけきふくべも、ひさごといへば伏猪の優しみあり。花はましてゆふ顔の、人めきて裝へるを、此のものの諂はず、うき世をへちまと名のりけるより、源氏の御目もとゞまらず。まして歌よみは此の名にもてあつかひて、こちの料理にはつかはれずとて、ほからかし捨てたるを、やがて誹諧師のひろひ取りて、おのが垣根には這はせたるなり。その味ひの美ならねば、鴉もぬすまず蟻もせゝらず、

鉢坊主も見かへらねば、鄰の人だも疑はず。

草刈のそしるをきけば絲瓜かな

蕉又いみじき疝氣の藥なりとて、ことに此の翁の愛するにこそありける。音水の流れに光さして、楊柳觀音のおわす所は知られ、栗栖野の柑子にはきたなきあるじの心をさへ知られつ、白壁の樂書には清者の家なる事も知らるべし、されば色をも香をも知らざれば知らず、しる人は知りぬるなし。

垣にへちまさてはあるじも疝氣持ち

百蟲譜

蝶の花に飛びかひたる、やさしきものの限りなるべし。それも啼く音の愛なければ、籠にくるしむ身ならぬこそ猶めでたけれ。扨こそ莊周が夢も此の物には託しけめ。只蜻蛉のみこそ、かれにはやゝ並ぶらめど、絲につながれ黐にさされて、童のもてあそびとなるだに苦しきを、阿呆の鼻毛につながるゝとは、いと口をしき謗なる。美人の眉にたとへたる蛾といふ虫もあるものを。

子を持てるものは、その恩愛にひかれてこそ苦勞はすれ。蜂の他の蟲をとりて我が子となす、老いの行方をいかならんとにもあらず、何を讓らんとてかくは骨折るや。我に似よ〳〵とは、いかに己が身を思ひあがれるにかあらん。花に狂するとは詩人の辭にして、歌にはさしも詠まず。蜜をこぼして世

のたぬとするはよし。只人目稀なる薬師堂に、大きなる巣作りて、掃除坊主をおびやかさんとす。それも針なくば人には憎まれじを。

蛙は古今の序にかかれてより、歌よみの部に思はれたるこそ幸ひなれ。朧月夜の風靜まりて遠く聞ゆるはよし。古池に飛んで、翁の目さましたれば、此の物の事更にも謗りがたし。

蟬はたゞ五月晴に聞きそめたる程がよきなり。やゝ日ざかりに啼きさかる比は、人の汗しぼる心地す。されば初蝶とも初蛙ともいふ事をきかず、此の物ばかり初蟬といはるゝこそ、大きなる手がらなれ。やがて死ぬ氣色は見えずと、此のもの〻上は翁の一句に盡きたりといふべし。

螢はたゞふべき物もなく、景物の最上なるべし。水に飛びかひ草にすだく、五月の闇は唯この物の爲にやとまでご覺ゆる　しかるに貧の學者に取られて、油火の代にせられたるは、此のもの〻本意にはあらざるべし。歌に螢火とよませざるは、殊の外の不自由なり　誹諧にはその眞似すべからず

日ゞらしは多きもやかましからず。暑さは晝の梢に過ぎて、夕は草に露おく比ならん

つくゞゝ法師といふ蟬は、つくし戀しともいふなり。筑紫の人の旅に死して此の物になりたりと、世の諺にいへりけり。哀れは蜀魂の雲に叫ぶにもおとるべからず。

蜘蛛はたくみに網をむすんで、ひそまつて物を害せんとす。待つくれの歌によまれ、又は退隱の媒

ともなりたれど、ひとへに奸賊の心ありていとにくし。古代朝敵の始めとして、賴光をさへおびやかしたる、いと恐ろし。さはいへ、廢宅の荒れたる軒に、蟬の羽などかけて捨てたるは、いさゝか哀れそふ折もあらんか。彼はかひ〴〵しく巢つくりてこそあれ、東海道にちりぼひたる宿なし者をば、蜘とはいかでいふやらん。

芋蟲は腹たつものに譬へ、毛蟲はむつかしき親仁の號とす。背蟲客蟲は名のみにして蟲ならず。油むしといふは、蟲にありて憎まれず、人にありて嫌はる。

蠶の生涯は世の爲に終り、火取蟲は誰がために身をこがすや。蜉蝣ははかなき例にひかれ、蓑くふ蟲は不物ずきの誇りとなれり。さは誹諧するものを、誹諧せぬ人のかくいふ折もあるべし。

おなじ寶の名によばれて、玉蟲はやさしく、黄金蟲はいやし。

蟻は明けくれにいそがしく、世のいとなみに隙なき人には似たり。東西に聚散し、餌を求めてやまず。いつか槐安の都を遁れて、その身のやすき事を得ん。さるも便りあしき方に穴をいとなみて、千丈の堤を崩すべからず。

蠅は歐陽氏に憎まれ、紙魚は長嘯子にあはれまる。

狗の齒に嚙まるゝ、蚤はたま〳〵にして、猿の手にさゞらるゝ虱は、のがるゝ事難かるべし。

蚿は千手観音と呼ぶに、蜈蚣は毘沙門といへり。さるは毘沙門が異名なりや、いづれ〳〵が異名なりや。先後今は知りがたし。

蝸牛は只水にあるべきものゝ、いかで草葉に遊ぶらん。家は持ちたれども、ゆく〳〵先を身に負ひあるくは、水雲の安きにも似ず。

蛇、蚯蚓の足なくてもあるくべくは、百足蟲の数多きは不用の事なり。

蟷螂の痩せたるも、斧を持ちたる誇りに、その心いかつなり。人の上にも此の類はあるべし。

蟹の歩みに譬ふべきものこそなけれ。たゞ原吉原を、駕籠にのりて富士を詠めゆく人には似たり。

促織、鈴蟲、くつわむしは、その音の似たるを以て名によべる。松蟲のその木にもよらで、いかでかく名を付けたるならん。毛生ひむくつけき蟲にも、同じ名ありて、松を枯らして人にうとまる。在所に二人の八兵衛ありて、ひとりは後生をねがひ、ひとりは殺生を事とす。これ松蟲の類なるべし。きりぎりすのつゞりさせとは、人のために夜寒ををしへ、藻にすむ蟲は我からと、只身の上をなげくらんを、蓑蟲の父よと呼ぶは、守宮の妻を思ふには似ず。されど父のみ戀ひて、などかは母を慕はざるらん。

蚊は憎むべき限りながら、さすが卯月の比端居めづらしきゆふべ、初めて仄かに聞きたらん、又は

長月の比力なく殘りたるは、寂しきかたもあり。蚊屋釣りたる家のさま、蚊やり燒く里の煙など、かつは風雅の道具ともなれり。蔌蚊はことにはけしきを、かの七賢の夜話には、いかに團扇の隙なかりけん。

むかし銀に執心のこせし住持は、蛇となりて錢箱をまとひ、花に愛著せし佐國は、蝶となりて園に遊ぶ。そも誹諧に心とめし後の身、いかなる蟲にかなるらん。花に狂ひ月にうかれて、更け行く行燈の影をしたひ、なら茶の匂ひに、音を啼くらんこそ哀れなるべけれ。

この續篇は、也有翁寬保のすゑより寶曆のはじめの比までの遺稿をもて抄出す。

末　僚　六　林

鶉衣後篇上

歎老辭

芭蕉翁は五十一にて世を去り給ひ、作文に名を得し難波の西鶴も五十二にて一期を終り、見過しにけり末二年の辭世を殘せり。わが虚弱多病なる、それらの年もかぞへて越し、今年は五十三の秋も立ちぬ。爲頼の中納言の、若き人々の逃げ隱れければ、いづくにか身をばよせましとよみて歎かれけんも、稍思ひ知る身とはなれりけり。されば浮世に立ち交はらんとすれば、なきが多くもなりゆきて、松も昔の友にはあらず。たま／＼一座につらなりて、若き人々にも厭がられじと、心輕くうちふるまへども、耳うとくなれば話も聞違ひ、たとへ聞ゆるさゝやきも、當時のはやり詞を知らねば、それは何ごと何ゆゑぞと、根問ひ葉問ひをむつかしがりて、枕相撲も拳酒も、騷ぎは次へ遠ざかれば、奥の間に只一人、火燵蒲團の島守となりて、お迎ひがまゐりましたと、問はぬに告ぐる人にも、忝しと禮はいへども、何のかたじけなき事かあらん。六十の髭を墨にそめて、北國の軍に向ひ、五十の顔に白粉して、三ヶの津の舞臺にまじはるも、何れか老いを歎かずやある。歌も淨瑠璃もおとし話も、昔

は今のに勝りし物をと、老人ごとに覺えたるは、おのが心の愚かなり。物は次第に面白けれども、今のは我が面白からぬにて、昔は我が面白かりしなり。然れば人にも疎まれず、我も心の樂しむべき、身のおき所もやと思ひめぐらすに、わが身の老いを忘れざれば、暫くも心樂しまず。わが身の老いを忘るれば、例の人にに厭がられて、あるは似氣なき酒色の上にあやまちをも取り出でん。されば老いは忘るべし、又老いは忘るべからず。二つの境まことに得難しや。今しも蓬萊の店を捜さんに、不老の藥は賣り切れたり、不死の藥許りありといはば、たとへ一錢に十袋賣るとも、不老を離れて何かせん。不死はなくとも不老あらば、十日なりとも足りぬべし。神仙不死何事をかなさず、たゞ秋風に向つて感慨多からんと、薊子訓をそしりしも然る事ぞかし。願はくは人はよきほどの仕舞ひあらばや。兼好がいひし四十たらずの物好は、なべての上には早過ぎたり。かの稀なりといひし七十まではいかゞあるべき。爰にいさゝかわが物好をいはば、あたり鄰の耳にやかゝらん。とても願ひの屆くまじきには、不用の長談議いはぬは言ふにまさらんをと、此の論こゝに筆を拭ひぬ。

四　藝賦

琴棊書畫は異國の沙汰なるべく、こゝにあはぬ評ながら、しばらく名を假りて論ぜんに、琴は殊さら品の異なるやらん、彼處にはもつぱら隱者閑人の弄びにして、十三絃だに所せきに、二十五絃の

いそがしきも、いかなる嶺の松風にやかよひけん。さるも無絃の琴を撫でゝ意ありと樂しみけんは、こゝにも上戸の樽のせんを嗅ぎて月見たる話には似たりけり。其にすける人ほど羨ましきはなし。差向ひたる内の無念想なる、士は金門に腰を折りし今朝のつかれを忘るれば、貧僧は明日の米櫃のあてなきことを思はず。夏は入日の西に迫りて、膝の上までさし入れども、たゞ地を造りはゝ巻き盡してぞ、始めて蚊の口のかゆさを覺え、菓子盆に蟻の付きたるを驚く。冬は水涕の露落ちて無常を死石の上に觀じ、火燵蒲團に吸物は、いつの間にかはこぼれけん。たゞかの蟬といふものの、おのれなく音にのみ心を入れ、それをねらふものは後に鳥の窺ふを知らぬに似たり。その蟷螂の斧朽ちて、七世の孫にあひし時、久しき年月の別れながら、話すべき事のひとつも無かりけんは、大きなる損といふべし。我もとより不機根にて、此の樂しみを知らざるは深き恨みなり。扨手跡の拙からぬは、殊にあらまほしきわざなり　それも上品の人は、詩歌文章にのみ筆を染め、書翰も卑しからぬ文體に、萬世の後も名はとゞむべし。品下りたる人は、日用の事々にも用ゐれば、或は文庫の覺書に何匁何分何厘、此の錢何百何十文と定家様の筆法もいと口をしく、又は此の暮利分許りに御料簡偏に賴み奉ると、文徵明が跡を殘すも似氣なきわざにして、心の外なる事ながら、世渡る習ひいかゞはせん。悪筆兵衛が出るまゝ口に、手は只よめ易きこそ要なるべけれ。たとへ能筆が書きたりとて、一字が二字の用もせ

ずといひたるは、理に似て無下に覺えしか。そも又畫ばかり位の品々なるはなし。能畫の上は更にもいはず、鳥羽繪の男は痩せてさびしく、大津繪の若衆は肥えて哀れなり。浮世繪は又平に始まり菱川に定まり、今西川に盡きたるといふべし。旅籠屋の屏風には罌粟か牡丹かしれぬ花咲きて、人より大きなる鷄の、屋の棟にとまりたるこそ目さむるわざなれ。又は藪寺の襖には、遠水に波高く、遠人の目鼻あざやかに、帆かけ舟に乘りて跡へ走る。これも繪にあらずとはいはざるべし。誹諧師の繪は上手下手の沙汰なしとて、翁も跡をのこしたまへば、我も我流の筆ぬらしそめて、破鍋の畫贊をかけば、綴蓋の望みてありて、こゝかしこに散りぼふ。あはれ恥知らぬわざながら、憚らず書きちらすはよしと、吉田の法師を無理なる荷擔人にして、此の年比硯の海にも遊ぶ事にぞありける。

隱居辯

箕山の月は高うして望むべからず、五湖の水も深うして窺ひがたし。垣は紫陌に鄰れども、大隱の市にもへだたり、庵は黄稻の陰にまじはれども、小隱の陵藪よりも淺し。されば昔の隱者を思ふに、德ある人の世に慕ふをなつかしがり、仇ある人の敵を恐れて、さてこそ名をもかへ、かたちをも忍びけめ。德もなく仇もなき人の、たとへ四條五條に金の看板を出したりとも、訪ふべき由の人こそ訪はめ。さもなき人は見むきもせざらん。幼遊びのかくれんぼも、尋ぬる鬼のあればこそあれ。さるを浮

世にかくれ顔なるぞ、中々恥かしき心地ぞする。いでや世に隱居の二字なからんと、みそかにちかき有明の月さしこめて、門は葎に閉ぢさせ、假にも人にあはじ／＼とひそまりたらん、さは見事なる隱居ぶりかな　これをこそ見習へと、出擂こ木なる隱居を恥ぢしめて、人もよしとは譽むるならん。されは後世にもかたぶきたる人の、吾が佛をこしらへ力にして、たま／＼堪へても遂げぬべし。さもなくて命つれなき人は、朝寢晝寢の隙かづくしにも飽けば、次第に寂しくくらし侘びて、彼はかくいふものから、これは久しき友なればと、おとづれ交すほどに、野中の清水にことよせて、そろ／＼昔をとりかへし、始めには似ぬ人もあるべし　花山の上皇も、かかるうき名には立たせ給ひたりとか。さるは北山の神靈にも怒られ、俗の諺にはよりがもどけたともいふなりけり。されば物のはじめにぞ、行末はよく思ひはかるべき事にこそ。そもや我が身の上をいはば、かしこき陰を賴み奉り、官路に立ちしも久しけれども、もとより畫にも藥にもならねば、人にあかれし身とも覺えず。雨露のめぐみ深くして、すなほなる國に鬼もなければ、世に人に我もあかず、只病になやまされ、今は弓も引きかたく馬にも乘りがたく、さても武士の名に數まへられんは、南郭が竽を吹きけん、此の身の上のはづかしければ、老いと病を一荷にして、うき世の關は逃れ出でたるなり。しかれば誰を恐れ何を恥ぢて、さのみは逃げも隱れもすべき。さりとて又貴顯の門松をくゞり、桃に菖蒲に袖ふりはへて、こゝの嫁

入りかしこの法事にも列ならんは、いと見苦しう、官事をさへ辭したればいかでかは。こゝに浮世の店をしまへば、まことはたゞ遁世者とこそいふべけれ。さるを押し付けて隱居々々とは痛み入つたる名目ながら、是非なき世の通稱となりて、行燈提灯の取り違へも、多勢に無勢叶はねば、益なき事はあらためぬをよしとこそ。過ぎし比いづくの程にか、市中の門柱に隱居某と書ける家札をみて、これはとしばらく目さむる心地はしけるが、今や身の上になりぬれば、隱居したる悦びとて、親しき限りはいふに及ばず、疎き人々にまでとはれて、門前しばらく市めけば、昨日の浮世よりやかましく、それ又謝せずばあるべからずとて、家を尋ね門敲かせて、物申に人を驚かし、隱居の禮に忙がしきは、をかしかりける世の樣かな。炙餈に食傷して煩ふ人の類なるべし。

四角なる浮世の蚊屋はしまひけり

剃髪ノ辯

すべて天地の開その理ありて姿あるべく、姿ありて後名はあるべし。いでや世を遁れて浮世の名を改めんには、その姿まづあらざらんや。今や月代の世間をやめては、神儒の束髪にや似せん、釋氏の剃髪にやならはんと、模稜の手に思へるも、かりそめながら生涯の仕上げなれば、一大事の分別にはありけり。さるも心にまなぶ事なく、かの三教の善惡もわかたねば、只あけくれの自由を思ふに、

かれは夏あつくこれは冬寒しつ。げに楊州の鶴は頭にだになかりけり。これを吉田の法師にとへば、冬は如何なる所にもすまる、暑き頃わろき住居は堪へがたしとぞ。これこそ此の篇の師なりけれ。誠に頭巾といふものあらざらんや、手水行水にさはるものなく、襟に垢しみず枕に油つかさらんは、心も共に清かるべし。夏をむねとこそ思ひ定めて、つひに剃るには極まりぬ。されば遍照がよみけんたらちねも、今は世におはさねども、宦路の険難をしのぎ盡し、功こそ成らね、名こそ遂げね、譽れなきは恥なきにかへて、今此の老いの身しりぞき、浮世の塵を剃りすつべきは、いかで嬉しと覺さざらんや。かかれとてこそ撫で給ひけめと、こゝに疑ふ心もなし。されども儒者の顔付をうかゞへば、餘り機嫌のよからぬは、父母の遺體をとの咎めなるべし。さるは一朝の怒りに喧嘩を起し、二世の契りに心中をくはだて、我とわが身を愛せざる、無分別をするなとの、道理に諭す教へなるべし。これを理窟の十露盤にかけて、分厘までもはじき詰むれば、爪も剪りがたく、髭もぬきがたく、鼻毛も蜻蛉のうき名をつなぎて、かへつて親をも恥めぬべし。その上わが雙親世にましませし時、老後は共に剃髪の望みもおはせしかども、その世にいさゝか障る事ありて、いまだ心に任せ給はざりし事、我よくこれを知る。故にかつはかの遺體を以て寸志を繼ぐともいはばいふべし。そもまた釋門に此の姿の始まる事、深き心はいさ知らねども、先づは浮世の飾りともなれば、これも煩惱の端ぞと拂ひすてて、

専ら色の防ぎにもやあらん。されども今は醫者も連歌師も剃りこぼして、妻帯は頭にしもよらず。まして妻こもれる武藏野の八貫町には、四部の御弟子の比丘尼をあつめて、比丘も優婆塞も入り交はれば、頭巾は紫の色ならねど、吉原の朱をも奪はんとす。しかれば佛も頭ばかりの日利にて、御弟子帳には書きのせ給ふまじ。ましてわがあたま、道にいらねば、入道もいひがたく、人を教へねば法師にもあらず、禪門でもなし、坊主にてもなし。さはいへ世の習ひにて字義にはかゝはらず、湯茶ばかりを沸せども、その名は藥罐とよばれ、藥ばかりに用ゐるも、茶椀は茶わんの名をのがれず。されば容のおなじき故に、妖物の見越しも、あだ書きのへゝふシも、蛸も入道の號あれば、我を坊主とも法師とも、よばばよぶ人に隨ふべし。

剃りてこそ月にまことの影法師

自ら名づくる説

遁世の姿すでに定まりぬ。扨は浮世の名にもあらじ。さるべき二字に改めばやと、名を思ひ字をえらむに、今は父母も世にまさず、官路もいとひ離れたれば、忠孝の字義を取らんも、後のまつりとやいふべからん。よし又四書古文の拔書もあまねく人の取り盡し、まして歸去來の辭など、あらゆる騷者のなじみ取りて、骨ばかりに喰ひちらしたる。さらば博識の門に乞はば、意味深長の二字もなどあ

らさるべき、されども夫は耳遠ければ、名はいかにと問ひ聞かん人の、とみに心得ぬ顔の口をしく、骨折りの詮なき心地すれば、これは其の書の誰が言なりなど、一人々々に講釋せんは、いとむつかしかりぬべし。菩提の道も疎ければ、西念淨蓮にてもあるべからず。されば世の人の上をみるに、金藏といふも貧に責められ、萬吉も不幸は免れず。玉といふ下女光りもなく、輕とつけても尻重し。名はその人によらぬものかも。よしさらばたゞ調市走女もおぼえよく、娵も娘もかきやすからんをと、此の日人のもとへ消息の筆にまかせて、たゞ暮水とは書きはじめける。それだに人の味ひて、これは何の心にて、それは此の語によるならんと、蛇に足をそへ摺小木に耳をもはやして、自然とふかき字義にも叶はゞ、それも又をかしかりぬべし。

へちまとはへちまに似たで絲瓜かな

鍾馗畫賛

豆をうたぬ家もなし　いづこに鬼をたづぬらん
素人繪の幟にかかれて　あやめふく軒にひらめく
疫神除の板に押されて　ひいらぎの門をまもる
其の劍と摺小木と　つひにいまだ鞘を見ず

雪請ノ序

ことし前津の里に世をのがれて、秋の月は心ゆくばかり詠めすごしぬ。山野の眺望くまなきには、雪のけしきの殊によからんと、我も思ひ人もおもへるにや、雪の朝は必ずとひ来んといひし人々もあれども、その日の火燵のはなれがたくば、林下なんぞかつて一人を見んと、いひし詩の類ならんと、かねてまたるゝ思ひもなし。木の葉も時雨も降り盡して、霜ふりの月の半ばすぐれども、氣色ばかりにのみうち散りて、蓑笠に見んまでの雪は猶つれなし。されば昔より雨を請ふ例はありて、神泉苑の四ケ度の祈りは、貴僧高僧の法力をあらそひ、小町が歌は兒女の諺にのみつたへて、天が下の理窟にとがめ、能因の天の河は、古書にも記してその事さだかなり。雨は五穀の爲ながら、雪も豐年の瑞とこそきけ。そもや雨を降らす神あらば、雪ふらす神などかなからん。歌に感應あらば誹諧にも感なからんや。いでやおふけなくも鳥羽院のをさなくおはして、ふれ／＼粉雪の御祈りをためしにたのみ奉り、名におふ富士の頂も一望の内にあれば、半掃庵に雪乞ひをせばや。年比の誹諧もか樣の寺の爲にこそあれ。かた〴〵も力をそへて給はり候へと、ことには不元庵の老和尚を先達として、好事の連衆をかたらひ、丹誠を抽んでて一夜火燵の壇をかざり、雪請の一卷をぞ催しける。

雪の願ひ水にはなしそ夕あらし

臍ノ説

世を捨てたる法師の、物くるゝ人をよき友に數へたるは、にけなき心地するに、げに思へば其の庵に一鉢のまうけも咳氣にさへられ、あつものの藜も冬がれては、物くるゝ友のことに嬉しき日もありけるか。もしは又くるゝ物をよろこばねども、くるゝ心の慾なきを喜ぶや。われはかく世を捨てたれど、かしこき惠みの祿を世々にして、その陰に養はるれば、もとより凍餒の患へはいはず。たゞ蟲干も煤はきも世話なからん事を思ふには、無用のものを貯へず、うちある調度も事足るを限りとして、只、用に物の多からんを厭ひ、一物にして多用ならんをおもふに、杓子は定規にならざれども、煙草箱は枕となるべく、頭巾に酒は漉さずとも、火燵のやぐらは足代に足りぬべし。そも一物にして多用の名器は、天地開闢よりその沙汰あり。今見よ鼻は呼吸を通はし、物嗅ぐ用を兼ね、口は飲食をなしながら言語の用をかねたり。天もし人を尊からしめんとて、二つの鼻を與へ口を三つ四つも付けたらば、因果物語にのせられて、開帳芝居の見せ物となるべし。これ天の長物をとらざる所なり。又は鼻ばしらを眼鏡の臺とし、耳を笠紐のたよりとする類は、天の理に則つて聖人これを教ふるものか。その中に臍といふものの、蓬生のかげにかくれて、表の飾りともならず、何の益なき道具にして、久しく不審の晴れざりしが、今此の身にしてはじめてしりぬ。慥かに天地開闢の時、餘儀なきかたよりの貰

い物なるべし。その理いかにと言はんに、我かく物の不用をいとふに、飲んでしまひ喰うてしまひ、又は遣ひてのこらぬ料紙やうのものは、嬉しき折もあらんが、さもなき調度の類、これは仕出しの風流なり、これは細工の面白しなどいひて、人のくるゝ物あるにのぞみて、取らざれば心を破る。流石にうれしき顔してもらへば、一つ二つと物のつもる、いと本意ならず思へども、いかゞはせん。こゝに世のためしを思へば、むかし西行の鎌倉に留められて、銀の猫を賜はりしを、やがて門前の童にうちくれて去りしとぞ。されば其の人の身を思ふに、何ぞ王侯にも將軍にもへつらふ心あらんや。しかるを猫はいらぬとも言ひ難くて、其の座は取りていたゞきければこそ、門前までは携へ出でけめ。これをもつて彼を思ふに、我はまして斗擻の身にもあらず、わが子の祿に命をかくれば、さすがに人の心をも破りがたし。これたゞかの臍と思へるなりけり。臍豈此の理にあらざらんや。

弔二不幸一文　贈二六林一

昔きけや、鳥にあらざれば鳥の心を知らず、魚ならざれば魚の心をしらず。昔愛女を失ひて、貫之が涙袖を浸し、長嘯のいたみ襟に滿つ。定めて知る、とぶらふ人々の、少し物わきまへたる限りは、例の天命を說き、哀んでやぶらずなど、しひて忘憂の物をすゝめ、たゞあきらめよ忘れよと、昔がもとより知りたる事をくり言して、浮世の義理の蒸籠を贈り、あるは樹木の菓子籠に長口上をもつらね

添ふらん。いかで饅頭に涙乾かん。何ぞ栗柿に悲しみを紛れん。果ては出入りのうばかゝが懐を高うして、貰ひ泣きとは、これをしもいふにや。これたゞ鳥にして魚を弔ふなり。我も近き頃十九の愛女を先だてり。されば昔が心我よく知りぬ。昔又はじめて我を祭すべし。我かの魚にして魚を諫む。只なげき給へ〳〵。けふも歎き明日もなげき、歎き〳〵てゆくまゝに、なげきの森に秋ふけては、椎の色のうすきをも覚らん。七々の日の法事には、萬行の涙千行に減じ、百ヶ日の墓参には、百行や、十行にしてやむ。まして一週忌のかい餅は、その日の空の腸は断てども、砂糖つけて最一つといひふべし。されども節の膳をならべ、桃に雛の祝ひ日には、あらましかばのうらみは盡きず、盆の踊の手拍子は、人知れぬ胸にこたへて、此のかなしみは一生の病なりと知り給へ。されば子の親を失ひてこそ、手ふれし調度目にめでし草木までも、長くとゞめて損はず、これを見かれにつけて、慕ふ心を忘れじとはするなれ、今昔が歎くたぐひ世の例の別れなれば、書きのこせし筆の跡も、鬼となりて引きやり捨て、手なれし物も火にうちくべて、兒女の態をなし給ひそ。かくして早く住吉の岸なる草を求めんには如かず。噫我今先達の顔して昔をいさむ。昔また先達の顔して、誰があすの身の上をか諫むべき。只あだし野の草のもと末、さだめなき露こそかなしけれ。

跡の鴈先へとはたが秋のそら

賛補破茶椀辭

大極の氣二つに破れて陰陽となる。その陰陽の又あふからに、夫婦いもせの契りともなれり。おもしろし、此の茶椀のまどかに望月の限なきのみかはと、一たびわれて有明の盈虚を示し、會者定離を打ちかへして、離れたるものゝ、又あうたるぞ、佛も我を折り給ふべき。爰に此の事に文あらん事を我に求む。我が田先生が言にきけり、驥は壯なるとき、一日に千里を走る、老いては駑馬も先だつとかや。まして駑馬の老いたるもの、何のいふ事をか知らん。抑これより北にあたつて護花關あり。そこに一人の好事あり。かしこにをひて求むべし。あなかしこ、疑ふ事なかれ。只たのめ／＼とあらたに告げて、我は火燵の山に隱れぬ。かくてかしこに其の文成れり。始めの茶椀のあやまちに懲りて、いかにもそつと敲いて見るに、果して金玉の響あり。噫此の茶椀のわれずば此の文あらじを、あざ丸の太刀蟬折の笛も、その瑕ありて瑕ならず、繼目をいたむ事なかるべし。嫦娥が天上の藥はいざしらず、人間に有うるしといふもののなからんや。

はなれたら繼げはなれたらつげ幾度も破れ世の中にあらんかぎりは

贈分半庵文

半月を以てわが分とす。誰かこれを願はざらん。もと此の庵、只にはなれ家にして、呼びて餘杯をの

くさしむべき、垣越の翁もなかりしが、あるじの徳の孤ならぬにや、鄰めく軒のこゝかしこに建ちならびたるは、よしとや見るらん、なうかしとや思ふ。いさあるじの心は知らず。されど東面はもとの儘にして、わが庵とても月まつ嶺は同じ方ながら、廣寒宮への道のりは、一町ばかりも近かるべし。こゝに一句をとゞめよとこはるゝに、四時の多景何れをかわきていふべき。されど庵近きよしみもあれば、つれなく否びがたく、只眼前の姿をいふ。

繪の中にうごくもののあり

として、下五文字に掛け外しの自由あり　春は田にし取りとすべし。夏は早苗取り、秋は木綿取り、冬は大根引きとおきかへて見よ。一物四用にはたらきあれば、句のつたなきをいふべからずと、傳授の一語にまぎらかして、おくり物とはなせりけり。

臍頌

臍を不用の物なりとは、我もそしりし人の數なり。されば他の一寸は見えて、わが一尺は見えずとか、世に役なき物較べせんには、まづ我こそは先なるべけれ。抑かの臍は物やは食ふ、素餐の誹りもなし。さらば物やはいふ、三緘の警めにも及ばず。わが世にありて物を費すには似るべからず。人の支體に不用を論ぜば、男の乳許りこそ、如何なる益のあるとも見えねど、今更これらをとり拂はば、

腹は渾沌王の面影して、世にすげなきものなるべし。いでかの臍は頓死急症のせんかたなきにも、先づとてこれに灸する時は、泉下の首途を留むるためしも多し。扨こそ腹のさしも草、只頼めともよみ給ひけん。たとへ項羽が山を抜く力も、此の垢を取れば忽ちに落つとぞ、痛悔臍をかむとは、漢文の古語にして、我が朝に人を嘲りては、臍が笑ふともいへりけり。しかるにつましき隠居ありて、臍金といふを溜められしより、天津空の雷神も好もしがりて、いかでこれ摘まんとし給ふより、女小童の気づかふ事は、麝香の狩人を恐るゝにもこえたり。むかし祖翁の古郷にかへりて、臍の緒に泣く年の暮と、懐旧の袖をぬらさせしは、耳も及ばじ鼻も及ばず。かれはかく風雅にも大功あれば、今は我が身を何にたとへん。されば臍はわが下に立たん事かたくとも、われも又臍の下といはんは、何とやらん場所よからず。かれに倣はんとするに、天に二つの日なく、腹に二つの臍なきためし、しかれば上下の品定めはやめて、けふより只彼をそしるまじとぞ。

友とせん　臍もの　いはば　秋の暮

望嶽樓ノ記

樓成れり。成りて望嶽とよぶ事はいかに、名高き富士にむかへばならし。そも此の樓の眺望東南北にひらけたれば、かの望嶽の一つならず。千里眸の内、田あり野あり村落あり。神社佛閣のこるも

のなく、濤に似て潜には及ぶべからず。龍興寺に龍吟じて花より雨を催し、鎮投山の森の下に雲なき月を賞ぐ。下戸は餅にもつく名ありて、蓬が島に頭をめぐらさば、上戸は酒の泉の湧かんを思ひて、菊が淵に涎を流すべし。もとより主翁文章に富めれば、こゝに来り遊ぶ客、皆一時の英才にして、新詩百篇瞬くうちになり、雅談一日欠かしらず。扨や好文の花もこゝに向ひて色香を増し、天津宮の徳もここを會所とは定むるならん。玉も錦も事かくまじきを、あるじ詩歌の道に飽きて、猶たに書品の文を請へり。其の心いかにぞや。さては知んぬ、砥石を拾ひて玉を磨き、灰汁をもとめて錦を洗はんの爲か。それだにも不才なる、何を以て砥にあて、何を洗ひてか灰汁に代へん。されども我罷りある事なり。世に祭の樓鋪の幕毛氈に倦れども、纔かに槿花一日の栄をなすは、其の見るものゝ動いて過ぐればなり。此の理によれば、此の樓はたしかに松樹千年の久しきを期すべし。さるは其の見るものの動かずして、しかも時しらぬ名山なればなり。しかれば主も老いをしらず、共に幾代の齢を保ち、常には此の樓に笙を吹きて、鳳に駕して登仙せんとにや。我が居も幸ひに之に近し。もし長壽の契りあらば、木の葉衣の著替を負ひて、其の日の供にははづるべからずとぞ。

月花に配れ富士見る日の餘り

鶉衣後編下

編笠讃

遮ぎ深山の雲にくらまし、身を蓬生の陰に隱しても、浮世より通ふ道あれば、顏しる人にも逢はでやあらん。蓬莱の島なる鬼の持ちたる寶にしもあらず、昔晴明が隱形の祕術を傳へて、世に編笠といふものあり。これを戴いて出づる時は、車馬紛々たる市中を歩けども、人我をしらず。まして朱雀の夕ぐれ日本堤の暁、いかなるやごとなき人かもしらず。鳥追節季候の世わたり、謠うたひ念佛賣りも、其の人の果てとも見知られねば、貴賤通用の寶にして、今泰平の世の中には、妙珍きたひの兜よりも、其の徳遙かに優れりとせん。然れども女はかぶらず、出家には似合はず、ゑさぶらひゑかさとよみしは此の物ならずや。笠がよく似たと謠はれし清十郎が俤も、これにてはあらざりけり。もとより旅の具ならねば、順禮ぬけ參りの輩にもよごされざるを、茶屋の燒巾は平大納言のしわざか。そもや印籠巾著腰差のたぐひは、世にある時に愛せられて、翠帳紅閨の内までも、腰を離れぬ寵あれども、金銀の盡くるに隨ひて、つれなく主を見放して、いづれか漂泊の落ち目に見つぎたるや。只此の物ばかり、

頼もしくも恩を忘れず、手拍編笠と諺にもいはれて、破れ紙衣の先途を見屆くるにぞ、疾風勁草をしり、松の凋むにおくるゝ操も、此の時にいちじるし。されども異國には此の寶をもたざる故に、豫讓は顔を隠しかねて、漆をさして癩となり、伯休は薬を賣れども、女わらべに見付けられたり。たふとしや、我が朝には此のものの一蓋あらば、大隠の徳あらずとも、安く朝市に隠るべしとぞ。

編笠の俄隱者や年の市

幽靈ノ説

鬼一口のいきほひもなく、妖物のやつしも叶はず、幽靈はそもいかなる者ぞ。其の姿を寫し繪にみれば、三角なる紙をいたゞき、廣袖のゆかたに竹杖をつき、膝より下はあるもありないもあり。あゝら閻浮戀しやと、仔細らしきは雄幽靈なり。まうし／＼とよびかけたるは雌幽靈としるべし。多くは行脚の僧に近よりて、布施なしの經を頼み、或は闇なる侍を見かけて、無心をいふもたま／＼なり。何の用もなきにあらはれて、女童をおどしたがるは、木の葉幽靈のわざなるべし。そもや人死して幽靈の自由あらば、佛果を得ぬ亡者どもは、我も／＼と立ちかへり來て、訪ひ弔ひのあつらへは勿論にして、言ひ殘したる巾著のこまがね、鄰の親仁の無沙汰して居る取りかへ錢のことまでを告げて、妄執の雲は拂ふべきを、あだし野の露消えぬ日もなき世の中に、幽靈の至つて稀なるは、むざとはおこ

さぬあの世の法度なるか。されば初秋の盆會には、みそ萩燈籠に座敷を飾り、かはらけ麻木の膳だてに、紫蘇團子の獻立を設けて、家々に招請すれば、表門より手を引きつれてはれやかに來らんも、何の遠慮があるべきに、其の俤も見及ばぬは、迎ひ火の馳走過ぎてかゞはゆしと思へるにや、踊浴衣の伊達染の中へ、經かたびらを恥づるにや。そも／＼舟岡鳥邊野は、幽靈の名所なれども、いづくに住居の穴もみえず、はひり所を見た者もなし。しかれば幽靈を出る／＼といふは、世俗のとなへ誤りなり。出るといふは芝居の幽靈に限る事なりと、ある故實者の申しき。

笠もたで幽靈消ゆるしぐれかな

杉の門ノ序

季貞は金の龜を解き、祐乘は銅の猿を彫りて酒手に宛てし風流は傳ふれども、酒屋はいづこの誰にてかありけん、いさしら雲の跡だになきを、ひとりかしこき聖の歌に、又六が名を知られたる、酒屋冥加こそ有り難けれ。さるから其の名を慕ひ繼ぎて、爰に酒屋の新見世あり。いでかの五文字のたふときには、惜しあるじの高ぶりて、極樂の出店とも思へるならん、姿も木の端の法師にぞありける。世に此の得意を附けんとて、撰集一部を思ひ立つ事あり。只是れ酒腸の有り無しを問はず、月花の方人を求むるとぞ。さればこそ此の庵の、夕顔に鄰れども碓のおとも響かず、酒桶の一つもあらず、

爐に文吉が色も飾らず、お菊と呼ぶ娘もなし。人見よや、悟れる目には七寶の莊りもかゞやかず、菩薩の音樂も聞かざれども、杉立てる門の極樂となれば、杖頭に錢をかけて、迷ふ人は迷ひもすらん、貝己身の彌陀、唯心の上戸と悟らば、賣らぬ酒屋の酒にも醉ふべしとぞ。

月　花　の　下　戸　に　案　山　子　や　酒　ば　や　し

與時節庵文

尾城の西南に把栄の一區あり。そこに住みける八龜法師、此の頃思ひ立てる事ありて、みづから其の意を說いて曰く、今世のさまをみるに、菩提に心ある程の人、家あれば必ず佛あり。我も其の道を賴まざるにはあらねど、咫尺に淨刹の多くて、朝夕數十歩を勞せずして佛に向ひまゐらせん事いと安ければ、十萬億土の遠きをしらず。まして己身の佛と聞けば、庵に佛像はなくてもあらなん。されば此のならはしの古ければ、只芭蕉翁の像一軀を刻みて新たに庵の本尊とす。これも我が生涯あけくれ遊ぶ所たふとむ所、偏に蕉門の俳諧なればなり。狂言綺語もおのづから讚佛乘の因とならば、わけのぼる道はかはるとも、同じ高ねの月も見ざらめや。我ももと商家に產まれて、昔は十月二十日毎に三郎殿を祭り進らせしが、今其の家を出で、世を遁れたる身に、かの御神には申すべき事なし。同じ時雨の十二日は、殊に忘るまじき祥忌なれば、ありし世の鯛の奢りをなら茶田樂の寂にかへて、これを一

年の會日と定め、同志の友を語らひて、一卷の祭をなさんとなり。願はくは尾坡下に此の道の光いやましにかゝげそへて、祭奠たえず取り傳ふべくば、わが此の報謝の志も長く後の世に殘すべしとぞ。かの庵主がいふ所かくの如く我聞き、同調の志げにとうたつきあふまゝに、それを筆にうつしてよと、庵主が請ふに任せて、記して贈る事しかり。

盆石ノ記

盆石あり、江の島と名づく。我もと聞ける事あり。虎の怖ろしき物語し出でたるに、其の座になかし虎に遇ひける人ありて、實に其の人のみ色を變じたりとぞ。我此の石に對し此の名を聞くに、ことに戀々としてなつかしきは、少壯の比かの島に遊ぶ事二度ありて、今も絶境の忘れがたき故ならし。そもや此の石の容をみるに、わづか尺ばかりにして峯聳え谷邃りて、麓にことさら一つの巖穴あり、これもつぱら此の名のよる所なり。主人一語の記を請はる。あるは巨靈が手に鑿き持ち來れるか、壺公が術に地を縮めたりなどいはんも、今は文人のいひふるしたる糟粕なり。思ふに此の地は勝概の名あるのみならず、妙音天の迹たれませし靈場なれば、かの島の繪にかくとも筆にえも及ばじとて、十五童子の手を勞して、かくは俤を石に削りなし、風騷の人の手に傳ふるならん。主人もとより風雅に好けり。これを文房の座右に愛すべくば、詩に和歌に俳諧に、只知んぬ、神助自らむなしからざる

事なし。

波すゞし江の島うかぶ青嵐

悼㆓子禮㆒文

若くて十人の友を失ひたらんも、たとへば髪のぬけたるごとく、日あらば又生ひ揃ひぬべし。かなしきかな、老いて一人の友の闕けたるは、歯の落ちたるが如く、再び生ひ出づるたのしみなし。今かく歎くは何故ぞ。久しく知れる子禮翁、此の睦月の二十日あまり身まかりぬ。此の老一たび仕官のほだしを遁れてより、殘生を風雅に寄せ、其の道の友に交はれるにも、聊か世の是非を論ぜず、かりにも人の長短をいはず、よく知る事も知らざるが如く、知らざる事に下問を恥ぢず、あり難き隠者の鑑なりと、知るとし知る人に稱歎せられしかば、今や世の惜しめるも尋常に過ぎたり。ましで同じ老いの身の恨み、一句はわづかに其のかたはしをいふのみ

魂ばかり秋來ん鴨のうきわかれ

六十ノ齡ノ說

上壽は百歲、中壽は八十、下壽は六十とかや。蒲柳多病の身の、いかで六十の齡に至り、かの壽の數には列なりけん、けふは長月の四日、我が生まれたる日なりけり。世の人の賀とてもて騒ぐは此の

目なり。妹あり妻あり男女の子供あり。かれらが心には嬉しともめでたしとも思はば思ひもすらめ、只犬馬の年老いたることこそあれ。もしは彼方此方に詩をこひ和歌もとめなどして、世に知られ顔なる、我に於てはいと恥かし。必ず音なせそと、かねていましめてさる事せず。げにや古人の壽多しといひけん、我は愚かに知らずとも、人はかぞへても笑ふらんを。

六十てふ身やそれだけのはぢ紅葉

夜著ノ頌

よくらといへる和訓は、いかなる故ならん。蒲團とは字義いとむつかし。よる著る故に夜著といふは、五尺の童子も義解に及ばず、爰を求めぬ自然の名にして、誹諧の正風とても、これを鑑とはいふべかりける。此の物下ざまに在りては蚊屋と矛盾の中にて、鴈と燕の行きかふ如く、多くは質屋へゆき返ることこそ佗しき業なれ。昔孫晨はこれをうき瀬に流してより、藁一束ねに冬を送り、我が國の聖主は、寒夜にぬがせ給へる有り難き例もあるを、空蟬のもぬけを恨みしは、以ての外の不埒といはん。鶯宿の語らひにはとめ木をくゆらせ、旅のかりねには順禮の虱をのこす。なべては此の物冬の用にして、夏は必ず遠ざけらるゝに、我は多病の枕低きをきらへば、夏も疊みてよりかゝりとす。殊に此の物なくてはと、四時にかはらず愛する中より、聊か發明する事あり。そも世に不用の用といふ事あり

て、人に其の心のさとしがたく、莊子が喩へていへるにも、地に入用は足二本をいるゝ所なれど、其の餘を不用として地を掘りうがちなば、二本の足も運ぶ用なからん。其の空地を今うするが不用といふものなりと、それも喩へのさる事ながら、閑がなく此の理を知らんとせば、今此の夜著の袖といふものを見るべし。手を通すべき用はなけれども、今不用としてこれを除きなば、德利子のいはなきに似るのみならず、これを左右に覆ふが故に、手を働き寢がへるにも、自由のくつろぎとなり、[illegible]の[illegible]しとなりて、寒を防ぐの便りとなる事、鳥に翅のなくて叶はぬが如し。されど人も常に用ゐしこれに心のつかざるべし。さればこよひも此の夜著を引きかぶりて、蒲團よりの暖かならば、不用の用をさとるべしと、そこの童子にをしへ侍る。

夢をのせて飛ぶ翅あり夜著の袖

與舍螯子文

酒よく人を浮べ酒又人を覆す。是非庵の主がもと酒に耽るや、雪月花の興にもよらず、友あるにも飲み友なきにも飲み、志學の始めより四十の此の比に至るまで、腸は只沖の石の乾く間もなき生涯なれば、昔の人に思ひなぞらへて、ある時左蟹の二字を戲れ與へしが、辛巳の秋重くなやみてより後、いかなる時か來りけん、飲まぬは飲むに勝り、醉はざるは醉ふよりも面白き物なりと、三十餘年の

夢忽然とさめて、さしも世のそしりも人の諫めも蚊虻に聞き捨てし男の、壺を破り盃を砕きて、果は願ふ下戸となりけるこそ目さむる業なりけれ。此の人の痛飲せし程、下戸は更なり、上戸仲間さへつぶやきて、かくては命も続くまじく、錢はた傾て盡きたんと、うたてき事に思ひし人々、かつ驚きかつ賞して、これを賀してやまず。されば藍の青きより霜を經て染め出せるは、二月の花よりも紅に、枝柿の澀きより甘きに變れる味は蜜砂糖に勝れるを思へば、生まれながらの下戸に彌増して、もとの青きに戻るまじう、始めの澀に返るべからず。さらば其の名の薫をも捨てて、今より左に餅を持し、右に麁茶を甘なひて、再び昔の醉郷には頭をめぐらすべからずと、含蓄の二字に改めて贈る事しかり。

贈二不及法師一文

でゝむしのなまじひに家持ちて、蛞蝓には羨まれ顔なるも、行く先々を負ひありく苦しさは、中々なかなかまさるべし。不及法師が求めえたる方丈の庵は、もとより樹下石上の身にはなほこれまさる、借屋といふ物なりけり。落ちたる壁も雨もる軒も、只家主のあつかへば、我が下に勞する事なしらず、夕顔のゆふべにあけば、朝顔の朝は捨つるに安し。況んや涅槃の大志あらば、しばし只神龍の雲待つほどの宿りにして、常に地中の物にあらず。我知りぬ我知りぬ。

心とめぬ安きはしらじ蝸牛

灌老井ノ賦

瓜畠に分ち得て早き二月の初物を献すといひしは、華清の温泉なり。我に事たるとよみしは、鏡たに山水の滴るならん。それは至尊の遊びに愛し、これは隱者の貧閑を助く。それにもあらずこれにもあらず、其の二つの間に湧出せる灌老井なるものあり。これ布袋庵の名水にして、あるじはもつぱら蕉門の誹諧に遊ぶ人なり。昔孝行の德によりて養老の水流れ出づ。其はた風雅を感じて殊に此の井の生ずるにかあらん。あるじの爰に樂しむや、もとより其の名に負へる、年立ちかへる若水は更にして、夏は蔦に汲みて河朔の飲の渇を消し、秋はさやけき月を浮べ、雪の夜の茶を煮るにも、氷を敲く手を勞せず、四時の幽趣、老いのまさに至るをしらず。誠に知んぬ、灌老の名の空しからざる事を。されば我聞く、一たび貪泉を飲む時は、昔千金を懷ふとぞ。しからば此の井の水を甘なふ人は、假令無風雅の腸なりとも、忽ち三石のなら茶を思ふべし。

岐岨ノ賦　木曾 岐岨 吉蘇 共通用

信濃は吾が尾藩に鄰り、朝もよひ岐岨の山は、即ち封疆の内に入れり。そこに好事の巴笑なるをのこありて、予が草廬に來るごとに、其の地の山川勝概を語る。語り〳〵て後に請ふ事あり、其の所々をつらねて、賦を作れとぞ。されば木曾は、文武帝大寶二年始めて此の道を開きしより、今や西東兩

都の通路にして、予も三度の往來せしかば、いさまだふみも見ずとはいふべからず。馬籠より妻籠の宿、三留野は本陣家の舊居にて、元は御殿と書けるとぞ。野尻、須原、上松、福島は山中の一都會、則ち巴笑も爰にすめり。宮の越、藪原、風そよぐ奈良井の里、贄川の宿まで十餘の驛亭、各家居つぎつぎしく、大名の旅館には本陣の幕をも飾し、荷馬の鈴の聲よる山過ぎて、今は誰の業にもる不自由もなし。然れども此の山中に覺束なくも呼子鳥の、出女の色を置かざるは、是の聊かの傳授事にして、淫靡の風を恐れ給へる、我が邦昔よりの法令なり。されども宿の閒々は深山幽谷の難所なれば、詩人は偏に蜀道の險に比し、斷腸三聲の猿を憐み、和歌には兼好法師が世を遁れしはじめ、麻ぎぬの色の淺くてはやまじとよみしも、先づ此の山中をこそ慕ひしか。誹諧猶此の地をゆかしみ、玉味噌の木曾路とは、吾が翁の置き初めし枕詞なるをや。元より朝日將軍の興りし所、今のこるもの城山あり。福島の興禪寺、宮の越の德恩寺に各その影像を留む。元服の松、矢筈竹、硯水、兼遠の故宅、御料の森は、光盛が陣迹、樋口が谷は兼光が舊蹤、楯の小彌太は野上に生まれ、今井が城址は野尻に遺る。山中の藥師は行基の作、臨川寺の寢覺の牀は仙客の釣垂れし所、奇石怪巖人よく知れり。されども歌人の慕ふものは、掛橋、其原、御阪、風越の峯、小野の瀧はすぐれたる飛泉なるを、日離瀧、布引にも名を爭はざるは、都に遠き恨みならん。男瀧女瀧の契りは變らずも、連理の松は今名のみなり。名に

たり。彼の淺間山は、こゝに境の一へだたれども、御嶽駒が嶽に不消の雪を見せて、富士にも肩を並ぶべし。三歸りの翁の命は死嫌ひの人に羨まれ、巴女が勇力は男勝りの高名なれども、良材昔より伐れども盡きず、尾城に運びて萬家の用とす。山を出して澗川の激る岩間を下すには、筏士の術に馴れて、曲乘の踏をかへしの自在を働く、他鄕のおよぶ所にあらず。神風や伊勢の宮木は湯舟澤より奉る例とぞ。扇島には關門ありて、治まる世にも備へ固く、鷄の空音も許さざれば、代々山村氏の預れる守りなり。南宮諏訪明神、鎭めの明神、八幡宮、禪刹には定勝寺、長福寺、兜の觀音、岩戸の觀音、鐘の峯は相圖の古迹、根の井の峯は火ともしといへり。彌生の浮石、明星が岩、釜が橋、伊奈川橋、滑川橋、櫻澤の橋はこれ岐岨と松本を分てる境なり。かかる佳境に居て風雅に遊び、三國の奈良茶をしる十石峠の名に積らば、誹諧骨張の古狐となりて、鳥居峠を越すも難からじ。正月のことぶきは木曾雜煮の風俗あり、盆の遊びには木曾踊の風流あり。牧はなけれども馬市を賑はし、巣鷹は年々尾府より尋ねて東都に獻ぜらる。橡欅の類多きが故に、器に製して近國に販ぎ、行客必ずこれを求む。産する所、干瓢、岩茸、蕎麥は殊更佳名ありて、名月前の走りを賞す。末川の蕪、風味又世に超えたり。凡ては雪深き故、春の花遲く、霜又早ければ、秋の紅葉は里に先だつ。そも〳〵信濃は十郡、此の賦貢一國の半ばをも盡さんや。只これ木曾に屬する事を纔かに拙き筆につらぬ。

四州亭記

尾府の西に一亭あり、四州亭と名づく。さるは濃江勢の三つを兼ねて一望の内に入ればなり。其の一望に入る事は、つらなれる山々のこれを見すればなり。むかし妓を携へし東山は慕はしからず、北山はましてかの移文の浮名もよしなしや。主人は今猶仕官の身にしあれば、悠然として見し南山も倶ならず。おのづから此の亭のむかふ所、立ちつゞく西の山々にして、高低の容淡濃の色、よく眼を悦ばしむ。されば山を愛するに品々あり、仁者の樂しむといひけんは理窟なれば玆に論ぜず。深く吉野の奥を尋ねて、身の隱れ家を求むる者は、偏に山の世に遠き寂寞を愛する者なり。笏を拄へ簾を掲げて、亭の朝雲の夕を憐むは、山の風景を愛するものにして、必ずしも靈運が屐に煙霞を攀ぢて、山の寂寞を問ふに非ず。然れば何れの賞心か勝らん。思ふに夫の三國一の名山とても、扇に畫へ煙を詠めて、只眺望の上にこそめでつれ、鹿の子まだらの雪踏みわけて、富士詣とて登るなどは、必ず無風雅の人のなす事なり。山に入る人山にても猶うき時はいづち行くらんと、よみて隱りし人もあるをや。此の亭の愛する山は、かの風景を愛するにして、寂寞を愛する山に非ず。飽きて枕に倚る時は山なく、起きて檻に倚る時は山あり。自由は名畫を卷舒するに似たり。高きかな其の趣、須彌の四州も下視すべし。已に能書の手に求めて三字を題して楣に掲ぐ、其の餘狂語を予に請はる。いでや其のあるじは、

知己の舊きといふのみならず、固より同じ瓜の蔓に、茄子ならでも紫のゆかりあればや、我も其の地は能く知るよしあり、鄙詞は愧づるに堪へたるも、辭すまじき故ありて、筆に信せて記して贈れり。

六林文集ノ序

誹諧の世に行はる事や、今は縉紳の品高きより、あやしの柴ふる人までも、此の道に遊ぶ事宜なるかな。ことしの春三韓の客東都に使する道すがら、我が蓬左に宿りせしを、出會ひける人々扇をさし出し一筆を請ひけるに、韓人笑つて芭蕉の發句書きて與へける。そもいづこにて學びしやらん、ふりにし王仁が難波津のためし、ふたゝび誹諧に立ちかへりて、今見ける珍らしさよ。かかれば花に啼く鶯も、なら茶たく小鍋やほしからん、水にすむ蛙も誹諧々々とは鳴くなるべし。しかるに世の誹人、ともかうも五七五はいふべし、只誹諧の文章は難し。風俗文選世に行はれて後、其の體を學ぶ者の間間あるも、よくいふものは甚だ稀なり。古人の文とても其の風體一ならず。祖翁の筆を評するはいとこちたきわざなれど、潛かにこれをいふべくば、蕉翁の文は正しくして俗中に雅を失はず、譬へばやごとなき人の編笠羽織にやつして、花のもとの牀几によりたれど、田樂團子に手をふれず、茶ばかり飲みてやすらひたるが如し。其の位に至らぬ人の及ぶ事やかたからん。東花坊支考が文は、はたらきて通らず、おもしろくいひなぐりて情を深く含ませたり。たとへば諸藝に勝れたる當世男の、一座の

與に三絃とりて、相の手ばかり引き捨てたるが如し。彦根の許六は、物の姿情をよくいひて、詞をかざるにおくれたれば、やゝ卑きに似たれども、さりとて雅趣のなきにあらず。たとへば何がしの忠右衛門など、人に顔よく見しられて、駒下駄に尺八吹きて、大道に肩いからし、あはれ傍に人なきが若しといはんか。其の餘碌々たるは論に及ばず。只和漢の故事古語をしり、俗の諺にも入りわたり、其の影を用ゐてあらはならず、長きを縮め堅きをこなして、俗ならず、雅に過ぎず、主意よく本末を貫きたるをこそ、調ひたる文章とはいはめ、誠に難からざらめやは。我が友護花閣の六林子が文章、章毎に玉をつらね錦を綴れり。我常に目を驚かして三の舎を避くるに至る。他はいざ知るべからず、本州誰か其の右に出でん。されども音を知る人は稀に、巍々洋々もいたづらに、猫に小判の耳なければとて、包みて光を世にあらはさず、只獨りの樂しみとす。頃日自ら輯錄して予に小序を求めらる。久しく金蘭の契りありて、辭すまじき故ながら、不才の腸何を探りてかこれに當らん。されども又思へる事あり、世に呉服を商ふ家の、繻子、緞子、紗綾、縮緬は、店に庫に滿ち／＼たれども、入口の暖簾には必ず木綿をこそ用ゐれ。其の店を尋ぬる人の、まづこれに目を留むれども、暖簾地相のよしあしはいはず。されば、我が木綿の才を以て、始めに一重の暖簾を掛けんには、などか店物の價を妨げんやと、つひに憚らず序書きて贈りぬ。

贈號説　與紺屋巴兵

和歌には神とも世にしたはるゝ、昔男の昔をきけば、芥川のかけおちにあだ名の髪を切られ、詩賦に秀でしもろこし人は、酒屋に掛けのたゝまりて、朝三暮門の轆轤さへ乏しかりし例なし。こゝに知れや、風雅必ずしも身を修むるたすけとならず、道は外に學ぶべし。文章もとより富を求めず、家業に思ひかふべからず。人の噺にきける事あり、そのかみ藥種を商ふあるじの連歌に好けるありて、たまたま宗祇を招き請ひ、一座の興行に及びけるが、我が句の順に當りて案じ入りける時、表に人の音なひして、僅かに一二錢の胡椒を求むる者あり。折しも外に應對の人なきを見て、我が句を惜しからず他に讓りて其の座を立ち、胡椒を商ひ遣はしけるを、宗祇見て深く感じ、世わたる人の連歌にすけるは、かくこそあるべき事なれと、殊更に稱美ありけるとぞ。吾子が俳諧に耽るとも、此の本心忘るべからず。産を破り家を沽りて、頭陀草鞋の先蹤をよき事としてこれなしたらば、傾城買も博奕打も同じつらなる俳諧なるべし。或はまた身持よく、家富まば、見る者ごとに必ずいはん、俳諧はめでたき物なり、販ぶに妨げなしと。さらば俳諧に第一の奉公となりて、三神の冥慮に叶ひ、恵比寿大黒も風雅を助けて、つひに俳諧の妙處にも至るべし。今や其の居に號を乞はれて、其の家の業を兼てす、藍葛舎と書きて贈るも此の意あるによる。今我が贈る藍より出でて藍よりも濃き趣を得ば、世に俳諧の名も

高くあらはれて、光の一字も客しからじとぞ。

聯句 并引

晝寢に槐安へ到りしは、夢にも足のあゆみなる男なればならし。我が夏の葛の門をも鎖して戸出もせぬ物ぐさを知ればにや、あちらからこちらへ見しらぬ老僧の訪ひ来て、半日の閑談をなす。いづこにすむ人ぞと問へば、近きあたりの穴にすむとしらばけいへば、根問ひに及ばず聯句せんと筆とりて挨拶の發句を唱ふれば、妖僧會釋の對を吟ず。やゝ短歌の二巻に至れば、退屈の尾を見られじとや、末は又の夕と歸るを送れば夢さめぬ。跡に黍團子の土産も見えず、只たばこの火の僅かに殘れり。

挨拶

雖没求無葛　可凉風在簾　庭宜松氣色　山惡月邪魔

長嘯夜方冷　大跳盆亦過　酒醒懸嫁々　茶沸聲漫々

擇日四火後　憐存萬葉歌　遅櫻留記念　歸鴈惜餘波

借宿疑弘法　換題試頓阿　耳言塞袖笑　口說入膝和

截指女郎誓　澇艘祖父蔣　移敷殘著褥　脫履有明甍

濱市初鮭貴　辻能油蟲多　花開雜寺院　柳動緩溪河

後のうづら衣、寳暦より明和の末まで、半掃庵の遺稿をもてこれをうつす。

六林校

鶉衣後篇　鏡裏梅　うづら衣拾遺

節分ノ賦

こよひは鬼のすだく夜なりとて、家々に鰯の頭柊さし渡す。我が大君の國のならはし、いつくか鬼のすみかなるべき。昔の聖は衣冠して殊に此の夜をつゝしみ給ふとこそ。世をのがれたる翁の火燵に足さしわたし、年を惜しむの外に何の辨へたる事もなきこそ、中々安かりけれ。今は捨てたる世ににげなきわざながら、家に老いたる男の、かゞめる腰にしほたれ袴かけて、けしきばかり豆うちちらし、聲わなゝきて鬼やらひたるも、昔覺えてをかし。年の數を豆に拾ひて厄拂ふ者にとらするものとて、己がさま／＼する事なるに、昔は膝のあたりかい探りても其の數は得たりしが、今は八疊の一間にもあまるばかりに成りにたるぞ侘しきや。厄拂ふ男の、宵は町々をあさりて後、夜更くるほど聲呼びからして此のわたりへも音なふ事にぞありける。行く年波のしげく打ちよせて、かたち見にくう心頑に、今は世にいとはるゝ身の、老いは外へと打出されざるこそ、せめての幸ひなれ。

一えだの梅はそへずや老うり

雪はらふ垣ねや梅の匪おとし

梅やつく帽と巣とのへだて垣

八百坊記

二十五箇條といふものに、蕉翁の詞として、詩歌連誹は上手にうそをつく事なりとぞ。翁は誹諧の祖師なり。詩歌連歌の人はいさ知らず、誹諧師はこれを守りて我劣らじと虚をつけども、それも翁の虚かもしらず。あるは門人の謔にもやあらん。實に乾坤に滿ち／＼たれば、我が耳に虚はつかねども、うそつく人耳にはうそを聞かぬ日もなし。さもやつれ／＼草に、うそ聞く人の品々を云ひたれども、うそつく人の品はいはず。うそに大うそあり小うそあり。佛のうそは人を救ひ、莊子のうそは人を教へ、傾城のうそは人を迷はす。只誹諧のうそばかり、人の爲にいはず身の爲にせず、跡なき雲の鄭公、名のりかけてつくうそは、人をあやまる罪なしとて、うそ八百坊の額うちて誹諧に遊ぶ人あり。實にも鼻のほどおごめきて世路にうそつく人は、我はうそならずと偽り、自らうそなりといひて誹諧する人は、それ則ちまことなれば、交はりを結ばんには頼むべき友の一つなるべし。されども麁忽の昔ありて、坊と屋の字を心得違うて、茄子を大根をと求めに來らんに、これは青物賣る店にあらずと、あるじの答へに不興して、さては家名にうそつきたりとつぶやかん無風雅人は、論ずるに足らざるべし。八百坊

の記を請はる。我八百の意を問はねども、そのよる所を推量して、此の一語を書きて贈る。あるじの
心ふことあらば、よもや此の記を捨つべからず。

自在鍵ノ頌

世に自在鍵と呼ぶ物あり。それは爐上に下げて茶釜藥罐をつるすに、延び縮みを心に任するものと
ぞ。わが方に一用をなして、何ぞ其の名のみことゝしきや。予別に自在鍵を得たり。これは路分の
ぬし、我が老後の立居むつかしきを見て、居ながらの用をなせとて、特に工夫して、つくり出
し、我に贈れる物にして、もとより手の巧みなる事左甚五郎が右に出づともいふべし。しかのみなら
ず一章の文を書きて添ふ、仙才文妙にして愛すべし。予も此の頌を書かんと思ふに、義經の逆落し儀
装の手の喩へを、彼の文章に取られたれば、外に文華を飾るべき言のはもなし。抑も此の物の多能な
る、座右に入用の網度を掻き寄するは更なり、杖として老いを助け、棚の鼠を驚し出し、簷にすがく
蜘の巣を拂ふ。暫して石公が橋下の履を取り、仰いで伯鸞が松の羽衣を盗むに便りあり。花は折りた
し梢は高しと、心づくしの木の下に、これをもつて曳き撓めて、ほしき枝をもたやすく得べければ、
まして雨を落し柚子をちぎるに、心の欲する所に隨ふ。採蓮の舟に借さば、西施が袖もぬらすに及ば
ず。洗濯の翁のもとには、淵明が酒臭き頭巾も懸けて干しつべし。さればたとへ八重二郎が手には短

しとて捨つるとも、物臭太郎が膝もとには、此の君なくてはとも愛しぬべし。もし此の物の世に出まりて、彼の爐上の自在鍵、我か名を奪ひたると爭論を起し訴へに及ぶとも、對決の場に臨んで能の多少をくらべんには、板倉殿の捌きにもあやまたず勝を取るべし。自在鍵々々々、世に己が名を揮る事なかれ。

發句塚ノ序

聞くならく時節庵の社中、庵主に告げて云ふ、足下百年の後には生前得意の句を石に彫り、不朽の發句塚を築くべし、此の約必ずしもたがへじと。庵主云ふ、誠に厚情謝するに堪へたり。しかるに、たとへ劉伶が墳に酒を灑ぐとも、只徒らに蟻の穴を驚かし、徐君の塚に掛けし劍も、其の意しらぬ人は鴉威しとも見てや止みなん。汝達その志あらば、同じくば生前に其の事あれかし。さらばまのあたり見て悅び、一言の謝禮も述べなんをと。社中皆云ふ、これ只忌々しきの憚りあり、庵主其の望みあらば、もとより我が曹の願ふ所なり。さてぞ言を食まぬ寸志も見えんと、頻りに此の事を營みて、時しも春の鶯なく寶生院の傍に、さるべき地をもとめ、一基の石を建て一堆の塚成んぬとぞ。頃日庵主來り、予に此の事を語りて一句を請へり。質にかの北斗をさゝふ黄金も、南都をほむる諸白も、身の後には何かせん。そもや生まれぬ前の襁褓定めとは、早計を譏る諺にいひて、花見にと催す興は

嵐に吹きさまされ、月みんとたくむ空は三五の十八にくの雨に妨けられて、世にあて事の違ふは多きならひなるに、只此の終焉のまうけばかり、萬に一つもたがはねば、明日の事笑ふ鬼も眞顔になりてうなづくべし。風雅に心ある人の誰か羨まざらん。年々春の草生すと白氏が歎きには事かはりて、これはめでたき例なるをと、とみに手向の一句を寄す。

我 と わ が 塚 の 掃 除 や 春 の 草

節分庵記

もろこしには鍾馗といふ者ありて、能く鬼を逐ふとぞ。其の容を見るに、眼を怒らし臂を攘けて、長劍をふり廻せば、實に鬼は恐れつべし。されども騷がしき其の中へは、用心ぶかき福の神は、怪我を氣づかひあぶながりて、あたりへは寄りつき給ふまじ。かしこき我が國のならはし、年々の節分にはひよわき親仁も年男と名のりて、二句の文を唱へ、豆をつかんで蒔きちらせば、鬼は外へと逃げちり、福の神は呼ぶに隨ひ煎豆の香にめでて入りかはり給ふこそめでたけれ。されば爰に節分庵あり。これ常住の節分にして、來る福は日々に親しく、去る鬼は日々に疎し。されども主人は殊に酒を好みて、酒豪の名をとれば、酒の一座にては鬼とや人のいふらん、鬼とな思しそよ、赤きは酒の咎なるものを。只これ常に訪ひよりて、友とする者こと〳〵く上戸なるべければ、古く諺にいひ來る、下戸

と鬼とはなき世なりとは、この節分庵の事なるべしと、請はれて以てこれを記す。

與晉路辭

晉路は竹内某が男兒、十歳なる春の初めに、正月が來たうよ〳〵をおれ〳〵はうといふを、よんで見れば發句なりと、甚感じて晉路と名付けて、戲れに門人とす

不佞少年の頃より誹諧を好み、今老境にも此の一癖はやまず、これを幽居の友とすれば、何知り得たる事もなけれども、さすがに年久しきに迷ひて、人はゆかしくも思ふやらん、推敲を問ひ寄るもあれど、師弟に似たるを慙お厭へば、身の薄劣を告げて固く辭し來れり。さるを燕年六十六歳、始めて一人の門人を約することありて、名をも晉路と授く、此の弟子年十歳、火燵に背をくらべ、乳を明暮にして、いまだ奈良茶を甘なはず、もてあそぶ物は何ぞや、風車の花につらきも、起上り小法師は月に寢ぬ夜の心あるかも、さるから師に對していまだ一字の問ひをなさず、我が物べきを勞せざる事、深切最上の門弟、いづれの人かこれにしかん。我辭せずして約をなすは此の故なり、然れども我生先に示す事あり、故人いはずや、和歌に師なしと、況んや誹諧に於てをや。只法式はよく習ふべし、されども其の道に交はれば、法式はおのづからにも知りぬべし。法といへば理非の穿鑿なし、天下の公道にして、隨分人のしる事を專らとす。祕する法はあるべからず。しかれば世に祕事口訣とするは何

ぞや。物に用捨の心得あり、或はてにをはの習ひあり、それは皆當然の理にして、我が智明らかなる時は、己と知りて無理はいはず。習ひて知るものは、只其の一事にとゞまりて他に働かず、我と一理を知る時は、萬端にわたりて物みな明らかなり。師は只しばらく東西を指すのみ。たとへば詩文章を學ぶ人の、祕事口訣といふ事は一つもなし。しかれども上手あり下手あり、只我が才のなす所にして、何ぞ別に祕事を貴まむ。世に祕事傳授といふものは、渡世の者の術なり。予は渡世の爲にせねば祕事口訣はならはず、習はねば何をか祕せん。五倫五常は外に師あり、狐狸の輩に迷はされて邪路に走すべからず。明和四年閏月冬至、半掃庵隱士示之

寄二未足齋一歌

未足齋々々、未足齋のあるじこゝろみに物問はん、そも〳〵花にめでて春の日の足らざるか、傾く月ををしみて秋の夜の足らざるか。目に物のたらざるか、心に物のたらざるか。世にいふ長者富にあかず、蟻の如くにいそがしく、蠅のごとくにあつまるは、あるじの常に笑ふ所、茶漬に菜のたらぬ日も、酒に肴の足らぬ夜も、人に未足の名は示して、未足をもとむる心なし。君が心我しりぬ、未足は知足なる事を。未足齋のあるじなるらむ。

足 し て 見 ぬ 心 や 月 の 十 三 夜

青衣後高鏡裏傳

夢二客賦

秋の蟬猗猗の聲をのこし、暮待つ翁の肱を曲げたる假寢の夢に、怪しき二客の爭ひを見ける。一人は色黒くして肆たる髮針の如く、みづから崑崙先生と名のる。一人は面長に頤すこし窪かなるが、眞桑居士と稱す、共に酒臭きはいたく醉ひたるならん。先生まづ進んで云ふ、我こそ居士の下に立つべくもあらぬを、今一桶の内に在りて、何ぞ我より上つ方に横はれるやと。居士云ふ、我もまたいかでか先生の下とは定まらん。予はさたぶる賤しき農夫の手にのみもなれず、昔邵平が東門に作り、殊に驪山の温湯を分ちて、二月中旬の走りをも獻ぜしものを「いな唐土の事はしらず、山時鳥里馴るゝ頃は、駿河のはつなり價千の如く、籠に盛り馬にのぼりて、東都に下る勢ひを見ずや。たま／＼白瓜といふものありて、纔かに其の咸を借れども、我が目には驥尾の蠅とこそ見れ「抑も官人の他郷の役に倦みて、故國へ還る悦びの時を、瓜期とて殊に待たるゝものを「さらば一富士二鷹に並びて、夢の吉兆とするには何れ「我聞く昔禪僧にふみ躪られて、夢裏の蝦蟆となりて命を請ひし妖怪はいかに。「いざ我も亦聞けり。一條帝の御時に、怪しき毒を含み、晴明に占はれ行尊に祈られて、踊り狂ひし不祥こそ増りぬべけれ。「山城のこまのわたりの瓜作りと、故人の詞にも連ねしぞかし。「扨はかのわさきの糟につけ置きてと、讀みける歌はしらざりけるよ「うたてやそれは秋茄子の、嫁に立ちける浮名

たゞすや三大原や田中の村の瓜作り、秋は果つともかりもりたはぶれごと、示しける歌もありしを、見苦しく世にすさめられ、名をさへかりもりとは、平家の公達を似せけるやらん。たゞ己が身を省るべし。味噌に油に味ひをかざりて、寺に鴫焼の仮名こそ惜むべきを。かくいひ〱て果てしなければ、今は翁も杖をもたげて、あなよしなし〱、彼はかれ、これはこれ、瓜の蔓に茄子はならず、只己がさま〲にて、何ぞ餅菓の品あらんや。不用の争ひをして、なれそこなひ味變じなば、人に疎まれ捨てられて、畠のこやしと成りや果てなん。やみね〱と、扇を把つて席をうつこと三下。ふたつの姿たちまち消えて、夢も亦さむれば、只青丹よし奈良漬桶のみ、依然として机上に殘れり。

祭嘯花文

この秋は毛利嘯花子が三十三回の忌に當りて、いさゝか其の魂を祭る。我少壯の日、明暮の友なりし昔を思へば、まづ身の老いぞ驚かれぬる。そも文場に交はりし其の世の人を指に折れば、それも失せこれも去つて、殘る者今日こゝに打ちかたらふ只三人ばかり。未見翁は七十を越えて猶健やかに、大布は六十に臨みてもとの姿さしもかはらず。只我のみ六七十の間にながらへて、其の數に入りながら、病み衰へさまもかへて、ありしにも似ねば、魂もし歸り來るとも、胸中の清水も影違うて、知らぬ翁とおぼめきやすらん。よし只かはらぬ心の手向を、冀はくは饗けよとぞ。

露は袖萩の名にあるゝやど主とせ

送曉臺辭

此の秋名にしおふ更科(さらしな)の月みん、それより武藏野(むさしの)の露をも分けばやと、思ひ立てる曉臺を送る。其の行く先の信濃路には、我が知れる千丈、友梅なる男(をとこ)あり。武藏に布袋庵の主(あるじ)は、殊に年來の交はりあれば、我が一言を傳へて立寄らんには、假の宿りをよも惜しむまじ。行きくればふし此の陰によりて、心の花のあるじとせよと、陽關の一句を筆して、別るゝ餞(はなむけ)にさしいれぬ。

清らな宿をしへん月の旅ながら

懷舊辭

風月堂を訪ひて、むかし翁の此の家に書き殘されし一軸を見て、感ある餘り、紙筆(しひつ)を請ひて一句をとゞむ。

手の跡や雫の足あと見ぬ世まで

六林いはく、風月堂は尾府本町書林なり。此の家に芭蕉翁行脚の頃立ちよられて、一句を殘されし眞蹟あり。今こゝに摸寫す。

竪九寸五分許り横一尺四寸五分許りあり、今横物の一軸とす、

是れ貞享四年丁卯冬の事なり、今天明八年戊申に至つて百二年なり

夕道は今の風月堂孫助が曾祖父にて、あら野集の作者なり

印

書林風月と聞きしは名もやさしく覺えてしばし立寄てやすらふ程に雪の降出ければ

はせを印

いざ出む
　ゆきみに
　　ころぶ所まで

丁卯臘月初
　夕道何がしに送る

題像文

人の見よとて携へ來たる一軸をひらけば、上に我が句の書き添へてあり。扨は此の翁は我が姿を寫せるにこそありけれ。老いの手に鏡も捨てて久しければ、我が面かげは我忘れにたり。今は此の繪よりも劣りぬらんものをと、淺ましく且懷しく、暫見とれぬる内に、傍の童の口さがなくてよみける、

金岡が馬にならば、夜は出でて其の戸棚の餅や捜されん。いと惜けれどいかゞはせん。

更幽亭記

から衣内津の山里に、代々薬を鬻ぐ家あり。所は少陵がたづねし張氏が隠栖に似て、貧富に同じからず。夜金銀の氣は只此の家より立ちのぼりて、上福童子常にはたらけば、物の不自由なる山中ならず。今のあるじ風雅にふけりて客を愛する中に、實に山間の閑寂を求むる時は、簾に風塵を隔てて名におふ手枕の茶を煮て、一室に幽趣をたのしめば、もとより深山幽谷に近くして、伐木の丁々たる耳さらに清かるべし。此の亭に號を呼ぶに、更幽の二字を以てす。我は老いと病にほだされて、神飛べども訪ふ事あたはず。訪ふ人あらば、此の名の虚ならざるを知るべし。

つのもじ序

むかし／＼蒙恬といへる人、始めて筆を造りけるより、和漢に能書の人こゝら／＼出でて、我が朝の高野大師は、五筆の名をふるひ給ふ。されば五筆のほまれは、蒙恬かつて知る所にあらず。かつその大師又四十七のいろはを造りて、和國に自由の働きをなす。しかるに今また六体出でて、その四十七字を配りて、文を綴り歌をつらぬるに自在を得て、人の目を驚かし、積りて一卷の小冊子なんぬ。こ

れまた假名を始めし大師のしろしめさざる所なり。聞くならく、昔世に文字てふ物の始まりし時、かく人の智さかしくなりて、己等がかくろへて住む方なからんと、鬼の目に涙して泣きけるとぞ。それもかばかりの事とは思はざりけん。思ふにむくつけき姿は似もよらねど、もろこしの鍾馗と我が朝の六條を、鬼一口にいひて畏るべし。さらば此の一卷をたくはふ家には、鰯の頭も何かせん、柊もたのむべからず。奇なる假名妙なるかな。舞津の老隱感嘆の餘り、戲れて此の端に筆とる事しかり。

釜ノ賦

舞津の老農が忘年の一知己あり、俳諧に遊ぶ日はみづから名を釜月と稱す。もとより大邦に祿を得て、さばかり物のやつ／＼しからぬを、獨りここに富めるよりも清くて貧しからんこそと、高きを慕ふ心より、史雲が釜の魚を生ずるに至らざれども、鰥居の夜間まばらに荒れて、月もまに／＼竈に漏るの心なるか。あるは又巷の世話にいふ、日夜に釜のをかしみによるにや。さるに近き頃、市中に時雨のやどりならん、ある店先によりて郭巨が釜ならず、あやしくさゝやかなる釜ひとつ掘り出せり。これを得て大きに歡ぶ。そのさま茶人の樂しめる物ともみえず、又塵俗の世帶じみたる物にもあらず。すべて夕顏の地紋心ありけに、其の容つぶ／＼といふに及ばず、ゆかしむ人に尋ねてみるべし。もと此の人久しく茶道に遊びて、其の奧儀熟して後の今は、必ずしも茶に專らならず。さりとて思ひ捨て

たるにもあらず。うべなり、此の釜の心に叶ひて愛するや、冬籠りの爐に懸けて湯を沸し茶を煮るの外、あるは霜夜の雑炊を焚き、雪の朝に粥を煮るに、六七合の用をなせり。其の大きさこれを以て知るべし。然るに奇妙に驚くべきは、かつて釜月の名を定むる事年ありて、果して此の釜を得たるはいかに。其の名や釜を呼び出しけん、かれや此の名を兼て呼ばせけん。われが釜が我か。されば世の物語に、昔俵藤太なる者龍宮に頼まれて、其の禮として取れども盡きぬ俵を得たり。されより俵藤太とは號せしとぞ。これを思ふに、蜈蚣を射ざりし始めの姓を何と云ひけん、世に傳へず。只もとより俵藤太にして、後に俵を得たるなるべし。しからば此の釜と同じ日の談にして、釜月も釜を得て後の名なりと、世にまた誤り傳ふべし。よしそれにともあれ、此の釜のかまはぬことをつらつら思ふに、名にのみ聞けるぶんぶく茶釜とは如何なる物ぞ。字は分福とも書くやらん。或はこれらの事をもいふか。もし年を經て毛がはえたらば、茶筅で剃つて事なかるべしと、かの老の求めにあうて、筆に任せて漫りに記す。

與脇息文

濃州内津東圃亭三丘之

机には狭し脇息には長過ぎたり、これは我が庭の長物といはむ。用ゐることもなく側に捨て置きた

るを、世にすたるものはなかりけり、三世なる男これを得させよといふ。もとよりおしまつきの惜しまずして讓り與ふ。小庵の塲を狹め、煤拂の厄介なりしを、我は内津山の鬼に瘤とられたる心地ぞする。其の事を書きて添へよといふ。筆に任せてかくのごとし。

漢和手引草ノ序

俳諧の漢和、昔今きくもの多からず。さるはもとより俗語ながら、一向に守る闘らぬ人はしにくき業にて、假令志ある人も、法式も覺束なく、かたらふ人も稀なれば、興なきが故ならし。爰に未足齋の主人此の道に遊ぶ。其斯文を助けしにや、はからずも壁の中より古き一箱を得たりとぞ。猶これに筆を加へ、こまかに詳證して、歯のなき口にも味ひ易き一卷を著して、手引草と題して初心の講上の便とす。我はもとより一つ穴の狐、快なるかな〳〵と、撰者の求めに任せて、序者と化けて一語を贅す。

香木ノ記

むかし龍の繪を好ける人には、眞の龍頭はれて姿見せけるとぞ。好むに信あれば、物に感應ある事なきにあらず。我が府下に花井某、深く香の道を好みて常に樂しむ事久し。然るに其の家に古く傳へたる臼あり。いたく年經るまゝに、疵なども破れにたれば、今は所せき不用の物なりとて、くだきて

釜木に打交せけるに、ある日いみじき妙なる香の、家に満ちわたりけるを、あやしみて求むるに、かの竈に焼ける臼の木なりけり。心いれて見るに、實に木のさまもよのつねならず。驚きて香の師のがりたづさへ行きてこれを問ふに、うたがはず赤栴檀に定まりぬ。名はそのまゝに花井臼と呼ぶとぞ。柯亭竹の笛、焦尾の琴を得たるためしにも通ひ、邇日こゝらあつかひ草にして、めで讃む事にぞありける。されば臼といふものは、賤の手にならして、その品下れるに似たれど、君見ずや、ひさかたの月の中にも薬を搗くときけば、もしや其の臼も此の木の類にやあらん。

臼の香や月の兎は聞き知らん

百話亭辭

金人の口を緘し、物いへば脣寒しのいましめも、只いふ人の上にして、聞く者にはあづからず。さればにや耳を緘せるためしもなく、耳たぶ寒しとの句も聞かず。非禮聽く事なかれの教へは、たとへば客人の來りて非禮を語ればとて、庚申堂の猿の如く、耳をふたぎても向はるべきかは。只これ聞きは聞きながら、其のよきはとゞめあしきは捨てて、心に選びのあらんのみ。ましてよしあしの理窟を離れ、誹諧の一時の談笑に、客を愛せる百話亭には、さぞな主人の徒然もなからん。そも〳〵世に百物語といふ事を傳へて、燈火の下にまとゐして、奇怪の談をかたみに言ひもてゆき、其の數百に満つ

る時は、かならず妖物の出づるとぞ。人もし百話亭の名を聞きて、扨はかの百物語の會所かとも訝らん。されば こそ誹諧の夜會ありて、其の句數百に滿つる頃ほひ、勝手口の屛風の上より、女の首ばかり忽然と見えて失せたるは、夜食の時分を窺ふならん。やがて臺所に擂小木踊り、組板動き出し、膳棚のあたりがわら／＼として、しばらく家鳴りのけはひするは、妖物の出づるにはあらで、奈良茶の出づるなりけりと、見し人の語りしなり。此の亭に一章の文を請はれて、例の戲言を筆に任す。これも亦世のよしあしにわたらざる、百話の内のひとつに宛てんには、饒舌の咎もあらざるべし。

贈二佐屋洗耳一序

をしめども限りあるものは命なりけり。佐屋の里に世にしられたる水鷄塚あり。されば四方に蕉翁を慕ふが故に、其の句を殘せし地をしたひ、地をしたふが故に此の塚をしたひ、塚を慕ふがゆゑに築きし人をしたふ。其の慕はるゝ人は誰ぞや。此の里に久しき騷士吟山なり。むかし月空庵に其の道を學びて、生涯風雅に遊びしが、惜しむべし、丙申の冬、享年古稀に四つを添へて、卒に夜臺の客となれぬ。孝子洗耳、哀傷のあまり、遠近親疎の挽詞をつらねて、世に一帖を遺さんとす。予に小序を請はる。噫乎我もとより不才の枯株、今は猶老い朽ちて、花もなく葉も落ちて、聊かのことのはも綴るにたへず。たま／＼かかる求めあるも、固く辭して筆をたつ事已に年あり。今更に何をかいはん。わ

づかに一句を寄せて、且いたみ且弔ひ、且は求めに答ふる事しかり。其の蒿里の歌に曰く、

清女が筆の跡も、たゞよのつねのさまをこそいへれ。

かなしきものことし師走の月夜かな

知雨亭ノ後ノ記

城北の市中におそろしき男ありけり。世々薬を鬻ぎて業とす。表には兒玉屋の暖簾を浮世の風になびかせて、世わたる塵の紛々と見ゆれど、内には孤松軒の額を閑適の月に照らして筆硯に遊び、詩を賦し文章を綴りて、見ぬ世の人を友とす。此の樂しみ世の俗客は夢しらず。吏隱祿隱の類にして、市隱とこそいふべかりけり。昔伯休は身も名も隱して薬を賣らんとして、かへつて易く見知られ給ひ、今此の男は隱れずして賣る故に、其の心をよく隱る。一日我が幽栖を敲いて後、はじめて其の高致をしれり。そもそも我は隱遁の容をこそまねびたれども、猶世に繋るが故に、舊識遊人に撩されて、風志の閑を得る日少なし。かれは中々世路に立ちて、人しれず閑を得る。鷺と烏のうへを見るに、夏木立のしげみによれば、烏よく隱れて鷺はあらはなり。雪のあしたに見渡せば、鷺よく隱れて烏は紛れず。黑白の隱見いづれをか得たりとせん。されば我が亭のもとより知雨と號する、其の意を汲みたりとし、頃日例の金玉の文を列ねて我に試み問ふ。文意誠に面白く、くり返して擊節に堪へず。されども此の

二字を取る事、聊か別に寓意あり。巣居知レ風、穴居知レ雨の語あり。つら／＼我が身の上を思ふに、幸ひに上國世臣の家に生まれて、不肖の身のおふけなくも父祖の祿を傳へ、剰へこわたき官に承乏して南郭が竽を吹きしも二十とせ餘り。たとへば狐狸の人らしく化けて、よく尾を藏したるが如し。畏ふるまゝに、しかすがに青松葉の燻あるを恐れて、みづから妖の皮を脱ぎ、狩鎗の正體を顯はし、幸に蓬蒿のもとに穴を營み、かゝる世の外に餘齡を守るなり。何事の因緣かくの如し。今は燒野にも逢はじとこそ思へるに、人や、穴を嗅ぎつけて、侘びたる樵も面白きやらん、今や叢に遁ふゑひふけて、膝つゞみの鬮を媒けらるゝ事屢なり。されどもしか祇ふは傳容の事、孤松のあるじは同調相應すれ人、世にいふ一つ穴の狐なれば、來ん〳〵といはれには、昆布に山椒の還著をまうけて、我も亦快なとかたらふべし。

方十園ノ記

おなじ名づけて方十園といふ。十は十里の十にあらず、町にあらず段にもあらず、只わづかの園地なり。實に山をも穿かず泉をも引かず、膝だにこもりのまねびして、朝暮獨むつまとはなせり。世の人はとまれ、有宗入道として此の園を見ましめば、かくこそあるべけれど、手を拍つて稱讃すべし。時も今安永四年四月、若葉のむべき春日にながき日、七十四翁半掃庵筆とる。

指峯堂ノ記

年頃相知れる好事の漢あり、あらたに世わたる業をいとなむとて、書坊の主となりけり。けに世に商估のさまぐ\なる中に、これぞ淸ましきなりはひなるらし。店靜かにして[illegible]もまぎれず、常に文人雅士になつきひて、我が智のまさるたつきとなるべく、諺にさがなきものにかぞへたる、お乳の人はいさしらず、船頭馬かたのえせたるかぎりは、たちよるべき店にはあらず。おかし畜母の借尾を選んで、衒賣とていやがられしは、三錢五錢の利を爭ひ、手をうち付る商家のうへにして、かかる類にはさしもあらじ。いでや市中に廬を求むとならば、此の郷こそ子を育つる最上の所なるべけれ。然るに、あるじ曾てある先生の門に乞ひて、號を指峯と定めけるとぞ。其の意いかならん、主もおぼろおぼろとして、予に此の記を書きてと求む。されば思ふに、高きを望む丈夫の志を長ぜるものか。猶も心の奥の海のふかき心やあらん、又は山の井の淺きやらん、いさ汲みしらぬ予にもとむる事や。かの天に張りゆみといひ出でけん、安らかなるためしにもあらで、いとむつかしきなぞくを造りて、予に解けといふに似たり。老懶の手に及ばずと、むつかりて固辭すれども、うけひかず。とまれかくまれ筆染めてと、ひたぶるに責められて、聊か取次のすゞろごとを書きちらして、これを記とはせよとて贈ることしかり。

送月堂ノ記

西濃成戸の里に世々栖める人の號を求めけるまゝ、送月堂の三字を與へぬ。猶其の記をとこふに、只ふかく思ひ入りたる謂れもなけれど、其の事しば〳〵にして止む事を得ず。そも〳〵此の地景、東は朝もよひ岐岨の大河淸く流れて、雨に著る美濃と尾張を分てり。西は角もじや伊勢より近江の山々まで、嶺をつらねて甚だ遠からず又近からず、只よき程に屏風をひける如し。もとより城下へだたれば、風塵の喧しきなく、常に農業の日を惡むるあり。四時の佳觀いひつくすまじく、何を揚げてか此の名とはせん。されば蛙なく朧夜、時鳥に殘る有明、秋は稻葉の露に宿し、冬は霜雪に冴ゆる詠め、只それ月にのみこそ遺るまじけれ。且又一字を添ふに、物みな入るといへば出づるはこもり、歸るといへば來るを兼ね、送るといはば迎ふは兼ねつべし。これを以て此の三字に定む。限なき影を惜しむ心なり。所謂東坡が亭とは、裏合はその韻ならんも亦をかしからずやと、筆に任せて記とす。

歳旦の口號

舞津に久しくかくろへて棲む翁あり。年明けていくつぞと人の問ひしかば、もとより絳縣の老人のむつかしきなど〳〵は知るべくもあらず。かたはらいたき歌よみて答へける。

たらで死ねといひし四十もふたり前つれ〴〵草に面目もなし

松歌并引

金森氏桂五子の庭に、一株の松あり、此の松によりて我に一語を求めらる。さる此の木あはいかにといふに、慈母のいとけなくて始めて移置きける年、すなはちにうゑし小松の、其の人と共につゝがなく、霜雪にたへてねびて、梢に露も漸くふべく、影は雨も凌ぐべく、今はなりにたりとぞ。我知りぬ。桂子の意必ずしも此の松にはあらず。只たらちめのことぶき祈りなり、其の愛松に及べるならし。されば少女の琴を習ふに、かならずまづ松といふ曲よりす。此のはじめの唱歌を圓句にして、假名の部をふあり、自然に叶へるものか。いと興ありて覺ゆるまゝ、これに習ひて琴曲のうたひとも作りて、かの求めに答ふ。松に琴の緣もあればなり。

かりそめにうゑし小松も　人と共に年ふりぬ。
たとへ松はふるくとも、　人は千代をたもたむ。

六　林　枝

補遺

布袋庵風客句集序

風雅を帯びて西東するもの、布袋庵(ほていあん)を訪はざるはなし。訪へば何のあらざるなし。何あれば記せざるはなし。その記するもの三百餘吟、あつて一軸に滿てり。さるを過ぎしその年の夏、情なき青あらし、丙丁を延(ひ)きて池魚(ちぎよ)の災(わざはひ)、此の冊子に及び、年来のすさび端(はし)なく、一時の烏有(ういう)となりぬ。惜しむべし〳〵。あるじ深く悔みて、なほ幸ひに心に記するを思ひ出で〳〵、再び連ねてこの一帖を起せり。さるも其のもとありしものゝ十にして、それが一つにも及ばず。されどもあるじの年未だ甚だ老いず、徳いやましに隣(となり)ありて、これより書きつゞけば、ほどなく文櫃(ふみびつ)にも充ちぬべし。序を請はれてたはぶれていふ、君見(み)ずや、青山の草一たび焼けば、後に生ふ蕨(わらび)必ず茂し。されば祝融(しゆくゆう)心ありて、これより句を多からしめんとて、初めの草を焼くものならん。何か悔いん。かの塞翁(さいをう)が馬のためしも、今十年の書積みて後、さてこそとは知らるべしとぞ。

花のやどり音をのこす鳥の跡たえじ

明和庚寅に集むるこ古稀前一年の翁也有、東の隠家に筆をとる。

鶉衣續篇序

山鳥の尾張の國年魚市(あゆち)の郡なる前津の里に、一老翁おはしき。半掃庵也有の翁とぞ申し。さるは尾張の君に世々つかまへたてまつり、中比はやごとなき司(つかさ)にものして、君の御おぼえも淺からずぞありける。若きより月花に心をしめ、雪の朝(あした)をたのしみ、郭公の一聲を慕ひつるが、身に病多きを常に憂へ、はやく仕へをかへし聞(き)えて、前津の里に世をのがれ、誹諧滑稽の文(ふみ)どもに心をやりつゝ、常のすさみにこゝらものせられつれど、深く篋にかくして秘めおかれつれば、をさ／＼世に知るもの少なかりき。おのれが生みの父なる文臺翁は、此の翁と交はりて誹諧滑稽の文(ふみ)に心をよせられける。おのれがおほぢなる楚巾翁と也有翁とは、うるはしき友なりければ、いよ／＼行きかひもしげく、つねにむつましくうち語らはれける。おのれも稚き比、父の消息(せうそこ)持ちたるをきのせにまたがりて、半掃庵に行き通ひぬ。翁天明の始めみまかられし後、くさ／＼の文(ふみ)ども半掃庵および護花關六林翁のもとに殘りありしが、月を經、年を經るまゝ、彼の文ども世にちりぼひ出づ。さるを天明の比、大江戸なる南畝のぬし護花關にたより求めて、翁の遺稿鶉衣の前後篇は、木にゑりて世にひろめられける。されど殘りの文ども猶こゝら多かりけるを、護花關みまかりて後はあともなくちりうせぬ。垂穗幼より父の

志を繼ぎて、翁の文ども殘りなく見る儘に寫し、聞くまゝにかい集めおきつるが、おのれも亦老いの坂路のたのもしげなければ、おのれがみまかりし後は、さながらすたれ失せなんと思ひて、こたび木にゑりて世にひろめつ。さるは、鶉衣にもれたるくさぐさの文ども、或は紀行の類なりけり。これを鶉衣の三かさね四かさねとして、木にゑらせつ。また翁の文に、管見草、短綆錄、古革籠、美南無壽比、野夫談、永代藏、撫夜食談あり。詩集を蘿隱篇、和歌の集を蘿窗集、狂歌の集を行々子と云ふ。また誹諧の集に千句集、五百句集、蘿葉集、蟻塚集、もり補あり。漢和聯句集一卷あり。皆翁の遺稿にして、みなおのれなからん後のかたみにもとて、たくはへおける物になん。

をはり人　たりほ

文政未の歳

鶉衣續篇上

みづから文章をかき集めて、或日頃を試しけうていはく、賞にやをしといひし、夜のにしきのそれならで、これはまたきれぐの、はかなきうづら衣なるは、いとゞ深草の、ふかくつゝむにしくはなし。

これを聞ける人やがて此の名とせし。

百六歳なる大下甚助がけづりたる箸を人の贈りければ

食はこれ、とことはに命をたもつもとにして、四時其の元氣を養ふの主、箸は又食をすゝむる役者にして、常につかへ怠らず。されば此こそ壽を延ぶ。こゝに或所に百六歳に成れる翁ありて、これが削りたる箸、たつとふうるはしく、珍らしくめでたき物なればとておくれる人あり。これをよろこび、又百膳命長きを食ぶは人の品によらざれば、彼の翁を賀してたはむれの言葉に、

ちゝしゝものゝぶる箸はきくの露はらふ千とせのしるき老樂

獻立に百六歳のはしとりてこれはめでたき世の茶めしくふ

田子庵ノ記

こゝに田子庵と號するいはれは、此の家に愛翫せる蚫貝(あはび)の杯ありて、それを田子(たご)の浦(うら)と呼ぶ故なりとぞ。そはさらば難波にきこえたる浮瀬屋(うかむせや)の出店(でみせ)かといふ人もありぬべし。そもや浦の名をとりて杯の名とし、又杯の名をとりて庵の名とす。かくまで物を用ゐたらんに、器財衣服の類ならば手數(てかず)の入りて古びぬべきに、用ゐる度に新たなる、田子の名こそめでたけれ。思ふにそれ坡翁(はそう)が亭の名も、其の時はさもありつらん、欄(らん)によりて散る花を惜しみ、簾をかゝげて月待つ夕、よろこばぬ雨もあるべきに、此の庵の名のそれには似ず、いふ度聞く度に名におふ佳境俤(おもかげ)にうかびて、常に雪月花の風情を添ふ。さてこそあるじ深く愛して、年立ちかへる屠蘇(とそ)よりも、まづ此の物を手にふるれば、醉ひ來る初夢にも、其の名のえにしあれば、などか一富士の嘉兆(かてう)をも見ずやはあるべき。あるじ一語を予に求む(もと)。其の物、其の名の來由は、かねてあるじの筆に盡せり。我が才の藻屑(もくづ)なる、何をか其の汀(みぎは)にかきよすべき。只予に酒腸(しゆちやう)の乏しくて、八仙のなかまにも入らず、これに對しても蚫のいひがひなき、これのみ田子のうらみなるものなり。

贈二或人一書

吾子(こし)今講武(かうぶ)を以て軒號とし、何にも誹諧にも用ゐて名とす。あら面白からずや。吾子はもとより武

門の人なり。紙賣る者の暖簾に紙屋としるし、油賣る家の看板に油屋と名のるは、買ひよる人のまがふまじき爲なれば、其の謂れあり。吾子たゞ風雅の贔屓なるより、武道も一つに混ぜんとす。私心のまよひといふべし。槊を横へて詩を賦するも、扇を敷きて歌よみけるも、それはそれ、これはこれにして、しかもこれを以てそれをあやまらず、それを以てこれを害せず。文武二道と稱するは、其の事跡を見て、後人これを嘆美せるなり。我と名のることは甚だ臭し。五老井が射御の辯すら、或人これを評して曰く、其の文の始めには、武士の武士臭きは鼻を掩ふと書きて、人の謗りに釘をさし、武藝をあてにすべからずといひて、他の嘲りに蓋をして、さて其の末に書きたる一篇、臭きこと糞土のごとく、藝の自慢は傍若無人なり。律を知りたる僧の破戒無慚と、經學にわたりたる人の不行跡なるは、あしきを知りつゝあしきをなせば、世にいふ三寶の捨物にして、意見も療治も施す所なし。白藏主も口を閉ぢ扁鵲も手を袖にして、只つくさせて見るより外なし。新當流も正法念流も、もとより武士の常にして、それがこゝへ出づる事にはあらず。誰か武門に生まれて、これをたしなまざるべき二流三流の印可免許も、此の邊にては珍らしからず。天下の名人はおのづから人も知り、世に顯はれて各別のさたなり。世に馬を見ると云ふ人あれど、山上入道の名をだにしらずとは、入道が身にとりては迷惑なる披露なるべし。昔或人歌を自讃して、この歌の心の奥はよもしらじ、定家家隆も釋迦も

達磨もと詠みたる返しに、釋迦達磨定家家隆もしらぬ顔、糞の役にもたゝぬなりけりとはよみしが、其のためしも思ひ出でらる。師匠が下手ならば、弟子は師匠を越すもあるべし。たゞ我のみにほこるは遼東の豕なり。珍らしきやうにかきたるにて、のこりの葉の思ひやられてと云ふ、或狂歌の下の句やつくべからん。佐々木梶原が先陣を評して、搦手數萬の油斷人、一騎も殘らずわたしたれば、鎌倉にての荒言も、少しはこれにて兎のけりとは、餘りに不案内なる心得違ひなり。二騎より外渡されぬ川ならば、何しに不急の先陣して、死なばすべき、後陣の續く川と見たればこそ、先登の功はたてたれ、抑武藝十萬人に勝れたりとも、用ゐる所不義ならば、明智が謀せし土民の竹槍にも劣るべし。しかるに、功なき名とりて餘力あらば、仁義五常の道を學びもすべしとは、碁象戲も蹴鞠も、同じ物と蔑まれたるなり。そもや五常の規矩にははづれて、何を以て其の功をなし、何を以て其の名をとげん。家を建てゝ後に地築せよといふが如し。功なり名遂ぐるとは、我が行ひの仕上げを云ふなり。老子は身退けといひたる、已に幕合なるぞかし。それから仁義の學問は、隱居してからいへるは間ふに異ならず。仁義五常と云ふ詞も、重言にしてくどし。外に鼓三線にのせる五常もあるかはしらねど、先づは五常のうちに仁義はありて、仁義五常といふに及ばず。願人坊主がかのえ庚申〳〵とよびありくとおなじ事なり。我はさとも誹諧は知らねど、釋迦の鼻をせゝりたる蠅が、金色の光もさゝず、孔子の肌著

を違ひたる蚤に道德備はる物にもあらず、勸學院の雀が蒙求を囀れども、だみたる聲を啼かぬなりけりと、鄙生立をほめたる鶯には及ぶべからず。されば其の世に生まれ合はせて、碩德の直弟とても、必ず上手とも極めがたし。しかるに滑稽傳直指の傳を見れば、祖翁の血脈をうけて、誹諧文章の名人は我一人なりとは、すゝどし。そも又翁の方からも此の一人に渡したりとの賣上げ證文のさたを聞かねば、心もとなき樣なれど、誹諧は定めて上手にてやありけん。武士道は只臭くして馥しくはおぼえず。泰平の代に手ぐすね引いて、楠村上が上に立たんと大言いふ人も、其の場に臨み其の事に與らざれば、ほか〳〵とは受取られず。さるを聖賢もこり給ひて、言を以て人を擧げずとは宣へり。これを我が里にては陰辨慶とはいふなりけり。文選は誹諧の文集とこそきけ、此の一篇にやさしき言葉もをかしき語もなし。我が子への意見ならば、部屋の壁にはり置くにはしかじ　何故に此の辯はありやと潛かに誇りたる人もありしぞかし。是の臭きが故に蠅のたかるが如く、人も其の非をいひたがる物なり　されば武を講ずるも兵を鍛ふも、武士には勿論と云ふ附合なれば、誹諧においていとうるさし、早々此の號を改め給ふべし。我も武門に生まれたれば、第一に先づ鼻を掩ふ。たゞしかくいふも則ち臭きやらん。さればこそ臭きもの身しらずといへば、少しの匂ひは罪し給ふべからず。

誹席掟

一　衿を取るに辭儀あるまじき事。

一　夜更けて時を問ふべからざる事。

但し勝手の鼾におどろくべからず。

一　世間ばなしにわやつく人は、たとひ王衍が麈尾を揮ふとも、澁團扇の居眠りには劣るべし。

右先達ての定めにもれたるを拾うて、庵の新制とす。飲食もとより亭主の料簡なれば、客の心得に及ぶべからず。且は言譯に似たらんも口をし。そも奈良茶にも限るべからず。なら茶の奈良茶なる心を守らば、菜めしも麥飯も則ち三石の内と知るべし。

贈レ人誹席ノ定

一　飯はなら茶専用なるべし。汁なきは勿論にして、奈良茶ならずば汁あるべし。

一　菜は一つとして魚鳥は有るに任せ、珍奇を必ず求むべからず。なき時は豆腐茄子に、精進ならぬ言譯は、鰹といふもののあらざらんや。

一　香の物は論ずるに及ばず。

一　もしは麵類の好みありとも、定規は右に准ふべし。

一　酒は杯に大小あれば、上戸とても二獻に限るべし。

酒に肴といふ物は、すゝまぬ酒をすゝむる助けにして、もとより宴會ならねば、しひてすゝむる道理はなし。然れば肴は不用なれども、膳に一菜の乏しければ、若しは到來殺生の物あらば、肴と名づけて一種もあらんは、亭主の心に任すべし。或は雪霜の夜風に歸路の寒さを防がんには、膳後の銚子を殘し置きて、一座滿尾の上において一酌をめぐらすも、亦其の時の模樣によるべし。それとても、一種二杯の掟を堅く背くべからず。相撲芝居の果ては必ず喧嘩に成りやすく、誹諧の集會の飲食に流れたがるは、今世のならはしにて、其の道の歎きなるをや。されば翁のなら茶三石は、皆人の口實としながら、其のしめしを思ふ人少なし。なら茶といへば、汁一つをだに省く教へなれば、まして菜數を奢らんや。さしみの膾の壺の平のと、奈良茶の膳に並べんは、たとへば行脚の僧の頭陀をすてて、荷馬荷持をつれたるがごとく、本姿本情にあらざることをしるべし。極一なるをのこ、此のことを恐れて、予に講席の掟を請ふ。道に信ある志を賞して、饌具の定をしるして贈るものなり。

硯部ノ文

動靜壽夭の論をなして、硯の壽は世々を計ふといへり。石の性は硬くして、もとより筆墨の類にあらず、その筈ともいふべけれど、たゞつかはるゝ身の幸によるものか。たとへば燧石となりては鐵にもまれてうち碎かれ、其の齡は月を以てかぞふべし。あるはまた挽磨と用あられては、おどろ〳〵し

く換き廻され、目きりの親仁に渡されては、これも齢はたゞ年を計へ数へしつ。これらは皆下ざまし嬉嫁につかはれて、貴介勝らとの勤めにあらず。されば此の硯は昵近のつとめにして、さてや世を貝て計ふべき、己が詩をも述ぶるたるべきをや。こゝに山田生は、致仕大夫鐘徴君の近侍にして、多年の奉公他にことに、寵遇のあまり一面の硯を賜ふ。常に拜してこれを秘藏す。予に此の記を求むるに、此のむかしの勤むるところ、硯のつとめに似たらんには、ともに幾代の奉公をつかへ奉るべき行末を賀して、筆にまかせ書きおくりぬ。

仍葉が求作序

其の人のために此の人の此の集編あることいかにぞや。紫の露のゆかりあるにあらず、只風月の席に交はること年あり。さるも其の齢をたくらぶるに、かれは八十宇治川もわたり過ぎ、これはこゆるぎのいそにもいまだ至らねば、いざ月見ん、いざ雪見んと、さそふも誘ふも、おのづから物好きのたがふふしんもあらざらんや、かれは此の爲にねぶたき月をも詠め、これは彼の爲に惜しき雪をも見捨て、さてや莫逆の遊びをなしけんは、杞輿梨來が交はりにも、厚きは勝る方にやあらん。そもや彼の老は、風雅に遊び客を愛し、緇素の友に信ありて、萬にたのみ思へる人多ければ、此の別れを惜しむ涙、菓柿も色のかはる許りになん。さるを思へば、それらも只口にいひ、心にこそいため、今此の

時に此の集を編みて、其の人の跡とふは誰ぞ。獨り此の人に止まりけること、手向の山の郭公も、雲のそなたに呼びつれて、此の信いかで其の魂に屆かするべき。

傍睨亭記　應賓居氏書

こゝに新たに此の居いとなむと聞きしは、遠に久しからねど、いざ又限なき軒端に鳥もなじまずと思ひやりしには樣かはりて、木立ものふり竹も陰ふかめて、且此の頃の樣にもなきは、いかにあるじの心つくせるにかあらん。あるじは弱年官うして、身は世路に立ちながら、こゝに半日の閑を得る時は、窓に高嶺の月を招き、池に潁川のながれを引きて、官殿塵埃の耳を洗ふ。そこに水鳥の馴れておどろかざるは、かの鷗の侶ならでも、人の心をよく知るならん。されば昔蜀山兀として阿房出で、今田を埋んで傍睨なんぬ。百尺の樓閣八疊の座敷、足れる心の二つやはある。それは天下に猛威をふるへば、やがて楚人の手に毀たれ、これは僻地に閑寂を樂しめば、老いの行くへを養ふのみにあらず、千代まつ君に苔を敷きてかの青氈のおもひをなさば、長く子孫を守り傳へて、こや色かへぬ幽居なるべし。たま／＼安の門敲きける日、あるじ一筆の記を求む。されば最勝寺の額書きて後悔いけん人もありしか、我既に老いにむかへり、よし名を思ふ人ならばこそと、東籬のもとの醉ひに乘じて、つひに狂詩一篇をとゞむ。中々勝景をけがすわざにして、あはれ此の句なからましかばと、惜みおもはん

人もありぬべし。

蘭をとりてゐる山の端は西にあり

一徳ノ辯

何をすかぬ人は九損ありとそしれり、好く人は一徳ありと尊ぶ。あらゆる遊藝、九損はこれに限るべからず、もしは十損も知りがたし。さはいへ、いかなる不用の事にも、しひて求むれば、一徳もなきといふ事なし。つらつら思ふに、人のもとめてなす業の外、天よりしからしめ、身に備はりたる業は何ぞといふに、只飲食と二便にとゞまる。然るに飲食の重きことゝ、聖主の國を養ひ民をめぐむといへるも、畢竟は只飲食なり。さるから奢れば法にすぎて、三條中納言の大食には醫師もあきれて逃げ、何曾が萬錢には料理人の手も廻らず。されど二便はこれが類にてもなし。雪隠に高麗緣の疊を敷き、きんかくしに蒔繪を雜ひ、たとひおかはを梨子地にするとても、いくばくの費えをかなさん。道具好きの茶人とても、南京青磁の溲瓶はたてねず。しかれば出入りの違ひありて、飲食とは各別のさたなり。そも又大小の二つが中に、大は人の平生に長雪隠の時をうつすも、纔かに一晝夜に一兩度に過ぎず。只小便のわづらはしき、さのみ隙はとらねども、しきりにこれを催す時は、いかなる公卿僧正も輿車にたまりかね、武者の戰場に急なる場にても、草摺をたゝみ上げて、おもはぬ敵に後をもみすべ

し。ました談義芝居の中に、こらへ袋の切れかゝる時は、羣集の膝をおし分け出でて、往生の要文を聞きもらし、大事の狂言の所作を見殘す。あるは下馬先に供をはづす鎗持、長舟にもみ尻する女中など、これが爲に慊まさるゝ事世に多し。されど馬方小揚の身の上のみ、あるきながらもやり放し、清水を汚し雪にも跡をつけて、人目を恥ぢぬは論ずるにたらず。かくとりえなき物なれども、猶其の徳を尋ぬるに、地藏の開眼に一休の法力は、茶のみ噺の眞僞をしらず。昔鴻門の會に、高祖はこれにかこつけて危き座敷をはづし給ひ、越王はこれをなめて會稽の恥をすゝぐ。今も世上の途中にて、いやなる人に行きあうたる時は、立ち宿るべき家もなく、逃ぐる方なき道芝の、露とこたへて消えたき時には、件の用をとゝのふふりにて、やがて溝端に後をむけて、時宜にもおよばずやり過したる。その事なくてはいかで此の難を遁れん。これを小便にも一徳ありといふべし。幼子の居びたれば、乳母の油斷と叱られて、其の子の科にはならざるを、老人の取りはづしは、子にもはづかしく嫁にうとまれて、老いて再び兒とはいへど、昔の兒より大きにきたなし。さらでも老いの身の苦しき、霜冴ゆる夜もすがら、深草の少將の九十九夜を一夜の心地して、見る人もなきといひけん師走の月を、あかぬ顔に詠めて折々かよふ寒さは、御衣をぬがせ給ひけん有り難き御心にも、これまでの事はおぼしも寄らざるべし。あはれ今宵も風さわがし、幾度の行き交ひかせんと、寢よとの鐘に寢所整へて、例の溲ば

咄々房挽歌并序

咄々房委道は、一たび天台の教へに入り、豆腐蒟蒻の精僧なりしを、いかに思へるならん、只頭のみ其の儘にて、俄は浮世の色にそみかへり、或は和歌を學び茶に樂しみ、殊には誹諧に遊ぶ狂客とはなれりけり。かくて其の身の年もつもりて後、我が隱家の蓬生おもく、一庵を結びてよゐりければ、明暮にことゝひかはせしが、七年ばかりのさきならん、信濃へ行脚し、それより北越に渡り、奥羽の隈々までも見んとて、庵はあたりの人に預け置きて、杖笠に浮れ出でしが、本意の如く打巡りて、頃日は武藏に情ある宿かり求めて、暫し尻のあたゝまりぬる由聞えかはしぬ。さるに信濃路や、木曾の旅寢に夜を重ねしほど、そこの人々を語らひて、名におふ棧のもとに一基の塚をいとなみ、翁の句を表はして往來の好士の跡慕ふたつきとはなせりとぞ。猶それよりの行く先々に、此の句をとひすゝめて、やゝ一軸をなすばかりなれば、棧塚の撰集して、世に行はんの志ありとて、過ぎし夏の比、予に小序の求めもせしが、其の事半ばにして病に罹り、此の長月の二十日あまり、卒に夜臺の客とはなりぬ。悲しむべし惜しむべし。只年々になき數をそへて、老いの心を傷ましむるよ。齡又われと同じかりければ、過ぎし行李の頃は、殊に羨みて、我はかく病みおとろへたるに、猶四方の志ある勇ましさよ。さるにてもかくまで人の強弱はたがへるものか、これや世の定むまじき定めならんと、思ひも

し言ひもせしが、我が身の露はかく殘りて、其の人の爲に袖ぬらすや、これ又定（さだ）むまじき世の定めにはありけり。驢鳴（ろめい）の挽歌（ばんか）を裁して曰く、

木曾路に假の旅とて別れしが、武藏野に長きうらみとはなりぬる雷。

呼べばこたふ松の風　消えてもろうし水の泡（あわ）。

わすれめや　茶に語りし月雪の夜（よる）。

おもはずよ　茶に悲しむ露霜の秋。

庭は鼠の巢にあれて　蝙蝠（かつもり）群れて遊（あそぶ）。

垣は犬の道ありて　蟋蟀（こほろぎ）鳴きて愁（うれふ）。

昔の文だに殘り　老の涙まづ流（ながれ）。

よしかけ橋の雲にかゝらば　招くに魂もかへらんや不（いなや）。

悼楚山子文

卯月末の四日に消息あり　使の男（をのこ）の外へまかりて、返事は後に取りに侍らんとて、さし置きて出でける。其の文をひらけば、尋常の無事を問ひ終りて、此の頃かし得させたる雙紙のおもしろくて、永き日をまぎれぬ。猶これが末々の卷取りかへて貸してよなど、其の事ならぬ明暮（あけくれ）のすさびも、例の筆ま

めにこまやかに見えたるに、こゝろ／＼に返事とゝのへ、使いさゝかも倦んじたまはず、いと久しかりき、其の家の従者のもとよりあわたゝしき便りして、此の老人俄かに終り給へりと告げこしたるぞ、誠にあきれたる世の様なりける。齢は八十に猶一つを添へて、さこそは天年の終りなりけめど、かゝまであだならんとは誰かは思ひかけし。朝につく杖にとりながら、耳目もなほ衰へず、浮世の是非を渡りつゝ、して、古きためしもよく知れる上、人の為に事をはかるもまめやかに物し給へば、萬にたのもしき人にして、若き人々も遠ざけず、常に出で入る人、文を通はし音信して、門には昔のみどりも見ず、朝にとひ夕にたゞされて、語らふ友の乏しからねば、九人はなしと歎きつる白氏が簡和の恨みも薄かりけん。すべては老いのにげなくも身の醜かたちの数なるとて、あさましく人もあるべけれど、すべて老いは、むつかしとて、世に疎まれ勝ちなるには、かかる老いの生涯は、すべての人のまねびがたき業に、羨む者はた少なからざらん。我にも忘年の交はり久しかりければ、これより後の明暮には、あらましかばと思ふ悔いあらでやはあるべき。よはひは恨みなき齢ともいへ、別れはうらめしき別れなりけり。

弓張の梓にもよれほとゝぎす

方笠庵ノ記　魚松原氏需

方笠庵のぬし、方笠庵をいとなみて方笠庵の記をもとむ。けだし此の庵に此の名をよぶ事、いかな

うつもれありしを見出でて、面白き容なりとて、其の片面に漆して、かく風流なる物とはなれり。さればにや、渠がむかしをおもふに、至つて危き所にかゝり、若水の懸より大晦日の風呂の夕まで、一日も休することなし。其の古びたるさまを見るに、それも轉しの程にはあらじ。影うつせしうなる子の振分髪より、樽垣の嫗なつはゞなきまでも見果てしならん。さてや其の危きを經つくし、いそがしきを仕果して、今の身の安く靜かなること、釣瓶の露ばかりも昔に似たることなし。さも忙はしかりし程は、あやしの五助六助にまはされ、飯たきの玉や竹が手にのみひかれつらん。物換り星うつりて、玉も六助も今何くにかある。思ひきや、ひとり此の物の身を全うして、今は輕に金り花紋を負ひて、大賓貴客のためにも聊かも牀を下らず、かかる貴き行末ならんとは。昔の菜刀今の劍ともいふべからん。かく安く靜かにしてこそ、千世の壽も持ちぬべし。そもまた擂鉢の缺けて犬の食器に下げられ、磨臼の引きわけられて踏石となるなど、靜かなりとも何の面目かあらん。只此の物の宿世こそありがたけれ。人も少壯の比は世につれことに與る習ひ、危き所にも身をおき、いそがしき勉めも遁るべからず。其の灘をつゝがなく越えすまして、かく安靜の境に至らんは、誠にあやかりものなるをや。それも只ひとへにかく用ゐる人にあひける幸ひぞかし。もと此の主のつかへたてまつる老若の、これを物好みて久しく座右にもてあそび給ひしを、新居をトせし歡びとて賜はりけるとなり。愛藏すること

宜なるかな。予に一語の記を求むるまゝ、思ひよれる趣を漫に筆して贈ることになりぬ。

鶉衣續篇中

贈二交花堂一　住柳町

所の名にふる遍昭が、見わたせばの歌を思ひよりて、かくの如く書きて贈りし。時も今春の半ばなれば、東坡が亭に名づけたる前蹤にも似たらんにや。此の心を一句にいはば、

さく花や交ぜてにしきの柳町

續後朗詠集跋

むかふの町に匕の廻らぬ醫師ありて、三年に三度名をかふるに、かの梟のおなじ音を嘆きて他の里へうつる喩へにして、はやらぬは元のはやらぬなり。夜話亭に三度の撰集ありて、題號は同じ朗詠なり。かの醫師を見てこれを知りぬ、よく世の人のもてはやすことを。賀すべし〳〵。

爲二或人一書序

五十にして親を慕ふは、世にありがたき例とは、昔大賢も宣ひし。七十にして慕ふ人、今参陽の貧山翁か。此の秋先考の五十回の忌に、佛事作善のいとなみはさらなり、其の生前にすける道とて、四

方の誹士に手向の句をもとむ。されば心の水の淺からぬより、かけ見ぬ人までも寄せおくり、やごとなき方にも聞えあげて、かたじけなく賜はりし句どももありとか。誠に人を動かす事、詐りにはあらざりけり。そもかの先人烈志子は、貞享元祿の比にありて、其角嵐雪が輩を友として、深く風雅に遊べりとぞ。其の世の詠句は古集にも見えたり。其の子孫までも、猶風月の才に富めること、ためしはた世に多からんや。昔曾子が羊棗を食はざるは、父の嗜みしことを忘れざればなり。今此の箕山子の誹諧を翫べるも、又父の嗜めるを慕へばなり。それは孝よりして捨て、これは孝よりして捨てず。捨つると捨てぬと表裏ながら、追慕孝情の重さを荷はば、只釣がねとつり鐘にして、提灯のさたに及ばず。もとより提灯何ぞたのまん。孝子の追福よく冥闇は照らすべしとぞ。

新古庵ノ記

數寄者ありて、其の閑居に名あらんことを予に請ふ。請へば辭し、辭すれば請ふ。請ふと辭すると織るがごとし。つひに辭しまけて止むことをえず。されば予が辭するは、茶道に疎ければなり。知らざれども、はたこれを思ふに、此の道はそも古式ありて、一事一盞の矩をはづさず、はづせば放埓の誇りあり。茶杓のあつかひ、ふくささばきも、さすてひくての舞曲ならねば、さして上手のけぢめもわかれじ。しかれば古き二の舞して、何の面白きことかあらん。それを面白がるは其の故あり。同じ

ことのかはらざれども、昨日の古きも今日すればあたらしく、今日の新しきはあすの古きにして、まして道具も古きを賞すれども、用ゐる心は日々にあたらし。新しき物の古くなるは、天地自然のことにして、古き物のあたらしくなるは、人の才覺智のはたらきなるをや。さればこそ、目に見えぬ鬼神も我を折り、武きものゝふも丸腰の交はりをなせば、一椀のつけざしに男女の中立ともなるべきを、傾城の客なき宵を御茶ひくとはいかにぞや。予が此の論もし偶中ならば、あるじの取る事あるべし。そこを天道まかせにして、新古庵の記と題して贈りぬ。誠はせめを免れんための御茶濁らすといふ物か。もし早合點の人聞きて、しんことは團子のことかといはば、よしそれも茶受のさびとなるべし。

贈二或法師一辭

衣を墨に染めねども、世を遁れたる法師あり　むかしは城下に富める家、誰彼とかぞふるには、指一本のあるじなりしか、利欲に心のうときより、畢竟は無分別の三字に、家居も藏も、盧生が夢となして、蒔ける種の菜の花と咲く日は、身を蝶々の袖輕くうかれありきて、今は寢覺樂也とぞいへりける。さるにかの祖翁の幻住庵も、人の住み捨てける跡なりとぞ。其の椎の木の陰を慕へば、おのづから似ることありて、こゝに一廬の主とはなりけり。もとすみし主は茶に遊ぶ人なりとぞ。げに窗も垣根もよしあるさまなり。されば境によりて心は轉ずとか、聊かあるじの爲にいはん。昔の數寄者今の

誹諧、其の風流は通ひもすらん、心はおのづからけぢめや分るべき。そもや茶道はすべての調度も、古き物など愛づるが中にも、長月比の水仙をたづね、雪間の嫁菜をさがし、三月の筍も孝行のこたにはあらず。なべてはしりの初物を争へば、二月の梅、秋の茄子は捨つる心も早からん。これらを風雅の上に思へば、年の内の梅のみこそ、花なき時の賞翫なれ。其の餘ははしりの物を問はず、只のこる雪、殘る花、螢、菊、名殘を慕ひ、おくれし物を四季に憐みて、行く物はかなしめども、來るは物の時節に任す。さらでも隙行く駒の足に、心の鞭は加ふる事なし。これは茶人を謗るにはあらず、其の道々のよる所にして、こゝに風雅の本意をしるべしとぞ。

紙袋 序　其考句集、其子洞同が求めに應ず

紙袋を披けば、金玉有り。錦幾重に包みたる宋人の燕石もあるを、これかの絅を尚にすといへる、かしこき教へにして叶ふ物か。されば其の玉も、價をもとめて賣られんにはあらず。只これ父を慕ふ孝子の手にふれるなり。そもや吉野の春にあはざりし人も、青葉の木末しげきを見ては、さこそと花は思ひしりぬべし。今此の集に序を請はれし、生前の至孝問はずして、一著して、人其の誠を感ぜざらんや。我が辭せずして筆をとるも、此のことのかくあればなり。

九日寄肥先生辭

我を生むものは父母なり。我を蘇する者は先生なり。僕が今年の秋いたく病めるや、此の六十こそ我が世の限りなりけれと、我からも思ひ人もさ思へるにや、さし向ひては言はざれども、つきしろふ樣いかゞなりしを、さるを先生の良劑日をかさね、再び九死の地を出でゝ、世は今草木黄ばみ落ち蟲の音弱り行く程、我は引きたがへて心地頼もしう、菊祝ふけふは聊か杯をさへ手にふるれば、親しき者どもの、たゞ此の翁を拾ひたるもののごとく笑ひのゝしる樣、いと嬉しげなり。さながら例の一癖は止まず、つたなき狂句して、けふの歡びを先生に告ぐることとしかり。

菊の日やまつ初立の東籬まで

二子挽歌

只年々の上をおもふにも、あるはなく無きは數そふと、歎くは老いの常なるを、今年いかなる春なれば、かくまで古き友を失ふらん。睦月も若菜つむ比、有齋子世を去りぬ。

十くだりにたらでたき身や初霞

と袖の涙もかわかぬに、其の二十日餘り、百根身まかりぬ。かれはおなじ世を捨人、殊に住む庵も呼びかはすばかりなれば、明暮にかたらひしを、立ち登る無常の煙も見るかたにたなびけば、猶思ひ出づるふしぐ\も多し

摘菜せし友を其の野の煙とは

これだにさしつどふ悲しみなるを、きさらぎの初め、再兒子江戸にて亡せける由、嗚呼今年はいかなる春なれば、かくまで古き友を失ふらん。

なきかずに指をる蕨はる寒し

爾佳庵ノ説

こゝにしか住みける法師の、妻もち魚喰ひて尊きことはなけれども、只世を遁れ風雅に遊ぶことの、聊か喜撰に似たらんと、筆にまかせてかく書き贈れるなり。よし今は世にたたぬ身を、たつみとは人も言はじとぞ。

示二先以一辭

横須賀の先以は、桶を結ふを以て業とす。深く蕉門の風雅に耽り、手は世渡りの隙なきも、心は向上の月花に遊ぶこ知多の浦浪かへすがへすも、予逢ふ時はかれにしめす。風雅を以て家業を妨ぐべからず、家業を以て風雅は妨ぐべし。せぬも其の日の誹諧にして、障るも其の夜の誹諧なり」此のことを論によくいへり。あはでやみにし憂さをおもひ、仇なる契りをかこつこそ色好まんとはいはめと、高く論ずれば、戀すらかくのごとし。まして誹諧においてをや。月更けては、十市の里の哀れにも通ふ

らんと、丁東舍と書きて與へぬ。只其の響きの家にたえず、いとゞしも浪の音さへうち添へて、長く風雅の冥加もあれとなり。

如是庵ノ挽詞

かりそめの旅とて立ち別れしが、はかなくも遠きあふみの土となりし、南客坊が魂に告ぐ。むかし祖翁は浪華の露と消え、嵐雪は鎌倉の月に身を終ふ。もとより誹諧行脚の調ぶる所かくの如しと知れば、如是庵何ぞ怨みん、何ぞ驚くべき。さはいへ、齢は一つの兄にして、交はりし我が年月も久し。嗚呼哀れなるかな。此の度は不二庵におくれ、今亦此の漢を悼む。老いの身のいづれか人の上には見聞くならん。

呼ぶかひもなし蔦鷹の雲陰れ

與二有功子一書

愛して其の惡しきを知り、憎みて其のよきを知れとかや。人を以て言を捨てずとも聞けり。花に囀る鶯も、夜なかぬはわるし。畠ほる烏も月に啼くはよしと、世に公の眼こそあらまほしけれ。そもや我若き時君を知らず。一度見て肝膽をかたぶく。君はもとより和漢の才に富みて、詩を以て府下に鳴る。かつ誹諧に遊びては貴賤の情を知ること敏く、口を開けば玉を吐き、筆をとれば錦を綴る。我が

鳰の羣にはあらず。思ふにいかなる夙縁にや、君がいふこと我が心に違はず、我が云ふこと君に叶ふ。あはれ老いの身の容をてらす鏡は、今あるとても何かせん。我が誹諧の好惡をてらすに、君をますみの鏡とせんに、五十餘年の非をもしるべしと、今や老後の力を得たり。つら〳〵君が誹諧を見るに、もと露川が藍に出づるが如しといへども、其の藍の藍ならざるを知りて其の色を慕はず。今たゞ濃きみどりは獨り染め出せる物なり。このごろひそかに論ずる所、文藻十論の上に於て、誠に我が多年睥睨するところ、涓埃もたがはず。不思議や、しらず我が魂もし君が懐をかるかと、一度は驚き一度は嘆ず。こゝに論ぜん。抑東花坊は蕉門の逸物なり。昔葛の松原より續五論を著す。姿情花實附合の論、實に誹諧の骨髓を顯はす。其の後東西夜話、夏衣、所々に云ふ物、金言妙說少なからざるを惜しむべし。みづから終焉の記を書きて、支考の名をなき物に擬してより、すべての咎を蓮二に謂はせて、文鑑を選して自誌をはゞからず、文藻を編みて眞名の新製に及ぶ。十論を著しては虛實を論じ、名に誹諧の二字を假れども、長助李助が耳に入らず、酒ばやしして餅賣るが如し。徒然草の賛は、誹學のさたに及ばず。毀譽は見る人の心にあるべし。かの君がいふ所、確論にして殘さず。今はたこれに何をか加へん。しかるに先にいふ如く、我君を鏡とせんには、我又清き光なくとも、只濁水の淺きを恥ぢず、聊か君をてらさんとす。其のいふ所他にあらず。昔蓮二を謗るをきけども、未だ

支考を稱するを見ず。儒士は釋氏を防けども、其の說のよろしきあれば、潛かにとりて身の益とし、佛徒は儒道をいやしめども、其の事の理に叶へば、聊か用ゐて今日の法とす。內證皆かくのごとし。況んや支考は蕉門の俊良なり。舊說もとより規矩とすべし。其の文藻・論の說においても、猶誹諧にとるべき物少なからず。君誹諧の益をもとむるに、必ずこれを誤ることなかれ。そも我は君が愛するものなり。君もし憎みてよきを忘れんは、其の損只君にあり。君もし愛して惡しきを知らずば、其の損我にありて、くもれる鏡に向ふが如くならん。歎く所こゝにあり、呵々。いま書をよせて寸志をいふ。多言まことに恐るべし。但し我君にかくすことなし。君はた我をいかなる者ならんや。知雨亭の秋日に深く、川崎屋が酒日々に厚し。訪はれんことといづれの日ぞ。又一飲に相笑ひて、三秋の悶えを解かんのみ。多罪々々。

秋の日の序

蕉翁生前の七部集とて、世にあがむるが中に、冬の日の集は、尾張五歌仙ともいふなりけり。しかるに、暮雨庵の門人翫六なる者の家に、つたへとゞむる一卷の歌仙あり。これは往昔竹葉軒のあるじの、翁を招きて其の日になれるものにして、其の座の荷兮が筆したるまゝに遺せるものなり。いづれの集に出でたりとも見えず。されば暮雨庵曉臺子、これををしみこれを尊みて、社中を語らひて四卷

の歌仙をつらね、再び尾張な歌仙を纏かんとす。稿なりて閲するに、誰かは狗の尾をもつて貂を續ぎたりといふべき。祖翁の魂もしかへりきたるとも、青眼にして賞したまはん。今人なしといふべからず。實に本州の面起すともいふべし。淨寫に臨みて、予に一語をそへよと請はる。嘻乎これまた蕉門の盛事なり。何ぞ口を噤まんやと、年は明和の五つばかり龍證方に集まる比もあひに逢ふ冬の日の、短き筆さし濡して、聊か責めをふさぐことしかり。

郭公ノ文臺ノ記

郭公の文臺は、名におふ二見瀉の浪にたち並ばんとにはあらず。昔持ちける文臺は、世を遁れかくれ入りける比、今は蓬がもとに客をかぞへて、奈良茶たくべき身にもあらず。さらば不用の物はなきこそよからめと、ほしがる人に打ちくれて過ぎける程も十年に近し。邇日蔓哉なる男訪ひきて物語りける序に、此の庵に此の物なきは、寺に鉦なき心地ぞする。かばかりの物一つ、何の所せきことかあらん。かかる事よく心得たる者あれば、翁の爲に造らせんと、強ひてすゝむ。げに思へば、必ず懐紙を置くのみにあらず、座右にあらば萬に便りよきこともあるべし。長明が車につみて、建てつ崩しつ事そぎたる方丈にだにも、折琴繼琵琶を貯へたるためしを思ふに、あらばさてありなん。さるにても、今世に此の道の行はるゝことや。凡そ心なき窓内杢兵が徒まで、家に一脚の二見なきは稀なり。

さるから裏書々々の望みたえず、老いの手もたゆきばかり、夢にも見え幻にも立つかごとく、いとむつかし。只書も裏書もなき物あらばやと、この一脚を新製して、草廬の藏物とはなせるなり。身の後に財のこるは吉田の法師も憎みしが、心とめけんと云ふべき程にもあらず、よからぬ物をとの誹りもあらじ。且此の名をかくよぶは、もし見る人あらば見てしるべきのみ。

一聲や二見にかよふほとゝぎす

白藏主ノ贊

醫者の若死少なからず、出家の地獄さぞあるべし。人の口ばたの飯粒を笑はんより、まづ我が鼻毛をかへり見るべし。

意見いふ尻に尾花や白藏主

櫻の句小序

松井氏壽庵の主の、こゝに千本の櫻を植うる心や、只遊人の興を誘ふのみにあらず。おのづから精舍にたよりて、佛緣をも結ばしめんとするにあり。剩へ四方に櫻の句を請ひ集めて、永く寶前にとゞめんとす。其の志成るに及んで、予に小序の需めあり。我きく後京極攝政殿の歌に、むかし誰かかる櫻のたねをうゑてよしのを春の山となしけんと。これを以て知る、萬世の後も花見ん人の植ゑにし

もとの主を慕ふことを。吉野には其の人をしらず、こゝには其の人いちじるし。されば不朽の名を植うるといふべし。我が短才なる、他のいふべき事をしらず、只此の一句を擧げて、顛末の勞の後の世に傳へて空しからざることを賀す。これをも小序といはばいふべし。

今植ゑし櫻や世々のはるの雲

八橋集ノ序

はる〳〵きぬるあとの年月にはあらず、昨日は今日のむかし男ありけり。參河に序草とよばれて、風雅に耽るあまり、此の國に迹ふる名によりて八橋集選ばんと思ひわたりしが、賴むまじき世の、はかなくも、水行く川の泡と消えて、かけはてざりし恨みの捨て難しとて、二三の門人遺志をつぎたして、かく一部の功なりぬ。されば名をかりて容はからず。必ずしも蜘手にかけし姿にかゝはらで、只四季の表をならべて、これを八つわたせるなり。これかつ選者の洒落なるべし。我は其の澤にさく花の、紫のゆかりにもあらねど、ありし世には物いひかはし、此の集のあらましをも語り、ものせし言の葉のつましあればと小序を請はる。老いのまさなごと、何の榮かあらんと、辭するも辭し得ず、漫言を書きて贈るに、猶謝していふことあり。駟馬の車にのらずばと、青雲をのぞみし賢き人のしわざには似ず。かの顛禮といふ者の、行き過ぎがてには憚らず筆とりて、かくあらたなる八橋にも、はし

たなく物かきつく。我只かれが類ならし。もし見苦しと人の憎まば、橋守の心にまかせて削り去らん
もよしや安かるべし。

拾扇說

人の手より得るを賜はるといひ、交易して得るを賒ると云ふ。もらへば謝するの禮あり、買へば價に高下の論あり。二つの世話をはなれて、ひろふといふ幸あり。住吉の濱の小貝も、秋の山路の落栗も、ひろふは拾ふ物ながら、それはあるべき所にあれば、幸のさたには及ばず。思ひがけざる所に得るを、天の與へともいひて、人の喜ぶ事なるをや。されば慾に爪長き男は、天も與へぬ物を望みて、くらがりに狗子をつかみ、牛の糞に手を汙す。求めては得がたきならひ、かかる愚人は論ずるに足らず。金銀を拾ふはことに幸の甚しきに似たれど、それは落したる人に穴があきて、身上破滅に及ぶもあれば、心ある人は其の主を尋ねて戻し、又は心のねぢけ人は、かくして戻さぬ不埒もあれば、其の主の怨みをおひ、世話を拾ふ筋ともなり、災ひを拾ふ端とも成りぬべし。この比知樂舍の主人、途に一柄の扇を拾へり。これ人の落したる物ながら、其の主はたゞ腰を撫でてこれはと言ひたるばかりにして、さして惜しとも妬しとも思ふべからず。世に澤山なる拾ひ物ながら、其の畫は松竹草花にもあらず、鯉の龍門に登れる畫とぞ。されば此の人の心に、つねに願望のかゝれるありて、天にも神にも

祈る中に、此の登龍門の吉兆を得たることを、たのもしき物にして、歡ぶことゝ、方ならず。宜なりや其の知樂舍の號も、もとは其の住めるあたりの靑木川の鯉によりて名づけたる謂れあればならし。さるや怪しみを見ても怪しまざれば、其のあやしみ破るとぞ。よろこびを見て喜ばば、其の悅びはた空しからじ。此は雲解けに梅咲く折なれば、戲れてかくいひ贈る。

鯉はさぞな烏賊さへのぼる春の雲

戲八龜

五十やら六十やら、七寺のうらに八龜と名のれども、はつきと年の知れざれば、厄年もいつなりしや、有卦に入るやらむけたやら、泥田に棒の土性か、膝皿から出る火性か、金性にては非ざるべし。かくては年の賀も祝はれず、先生にはあるまじき事なり。いざや年を定めんと、連中いひ合はせて日利講をもよほし、さすの佛の如く、先生をすゑて各入札をするに、其のさま年の吉びやう、所詮料簡をやめて、くる年を生まれ年とし、六十一歲本卦のかへり、みつのとの丑、もう〳〵これにうつておけ、しやん〳〵と埒あけぬ。世はこのごろ、年忘れの最中に、わすれた年を定むるも、定めなき世の中やと、觀念して笑ひける人の、

今まではつきとしれぬ生まれ年けふ定まるも又時節庵

三鴉集ノ序

信濃なる駒が嶽は、名におふ富士の俤して、四時の雪たえず。花の名所と呼ばるる吉野も卯月のあらしに吹きちらされ、淀のわたりの郭公も聲とゞまらず、須磨更科の月といへど、山に隱れてあとの闇は、よのつねに變ることなし。よそにはなき雪をとゞめてこそ、誠に雪の名所ともいふべけれ。されども歌人の目にいらず、淺間の煙にだに立ちおとれる詠めを惜しみて、此の國に好事の三士、集作りて世に掲げんとす。集成りて題號を三鴉とはいかに。されば古今集に三鳥の傳ありて、それは易からぬ習ひなるよし。今又こゝに三鴉の傳あり。そも此の撰者三人の、各羽の字を以て名とせる、未だ其の羽はいづれの鳥とも定まらざりしが、いでや今定めんとするに、もとより異國の事はとはず、我が朝にても、春ぞ秋ぞと季節あるものはむづかし。あるは山にかたより水にのみ住めるは不自由なり。さらば片よらぬ常住の物をえらぶに、鶴の羽は仙人くさく、鷹は猛くて寂しみなし。まして鳶のむくつけなる、鶏は山野にわたらず、鳩は不精に、雀はいそがし。たゞ月にうかれて夜もすがらいも寐ず、雪の寒きにも朝起きする鴉の羽こそ、誹諧に借るべき物にありけれと、終に此の羽は此の鳥に定まりぬ。さてこそ烏羽玉のひかりさして、此の集も世にはかゞやくならん。これ此の三鳥の傳にして、我はた幸ひにきく事を得たり。歌學者の三鳥は、我のみ知りて、意地わろく人に教へぬがうる

さければ、此の序にこれをあらはして、撰者のもとめに代ふるとしかいふ。

笠の次手ノ序

東羽の花雲師は、予と時をおなじうし、好む所も同じうして、只其の國のおなじからざる故に、つひに半面の識ともならず、わづかに紙筆に風雅を通ずれども、それさへ幾重の山を隔て海を渉れば、あるは洪喬が不埒にあふこともなきにあらず。されども蘆垣のまぢかくて心の疎からんよりは、荻の葉の稀なる音信も、心の親しきは老いを慰む友なるべし。一日假初に晝ねの肱を曲げたる漆園に、胡蝶にもあらで人もすさめぬ身は、似合はしき蠅となりて戯れしが、そこにも一顆の玉の上に卒然として立ちとまりたるを、我ながらおふけなく物汗したる心地して夢さめぬ。蠅や我ならん我や蠅ならんと、分別未だ定まらざる所に、花雲師の消息到りぬ。緘を披けば、さればこそ書中にいへる事あり。師曾て掛錫の所々、或は其の地に問訊の句どもを輯めて、笠の次手といへる一集梓行の志あり。予に其の小序をそへよとぞ。先づ名を聞いてより其の集の玉なるべき俤こそおしはかるれ。さるに其の地は、文人の輻輳する東都にもいと近し。金聲の序文に得るも易かりぬべきを、雲水遠き僻邑の老拙に請はるゝことや。譬へば崑山の下に居ながら、遥かの鞍馬に便りして燧石を求むるが如し。實に不才のあたらざるを以て辭せんとするに、彼の思ひ合はする夢あり、天已にこれを定め、物已に知り

て、通るまじきを諭すにこそと、只此の物語を述べて其の責に代ふ。思ふにまた其の蠅の、かかる驥の次手を得て、驥尾につき千里に蹤を遺さんは、李漢が韓文に序かきて、世に知らるゝためしにも似たりと、厚顔に筆とりて、鶉の翅を勞することとしかり。

法樂誹諧ノ序

聞說、むかし頓阿法師みづから百體の人丸の聖像を刻みて殘されしが、今も世にありほひて、たまたま和歌者流の家に求め得たれば、こよなうかしづきてはやしける事とぞ。邇日黑田氏釜月子の手にかの一體を求め出せり。黑田氏嘗て城南前津の里に別莊あり。此の地は、名におふ富士の高根を二つ山の間よりわづかに望めば、かねて富士見原ともいへり。釜月子の嚴父、過ぎし寛延の比ほひ、韓使の朝にきたりける時、異客の手に請ひて第一樓の三字を書かしめ、則ち此の別莊の號とす。此の樓の向ふ所、富士はさらなり。其の餘參州の猿投、信州の御嶽、駒が嶽まで、皆一望のうちにいる。南に指をうつせば、熱田鳴海潟より、すべて當國の歌枕なるもの、十にして七八を計ふ。實に府下の第一樓なるかな。されはかの聖像をこゝに安置し、あけくれの富士にむかはしめ、石見潟高津の松に見果てし月も、ふたゝびこゝにてらさんとや。然るに主人常に誹諧の連歌に遊びて、和歌は專らとせず。そも誹諧は連歌に出で、連歌はもとより和歌の流れにして、皆伯仲の風雅なれば、枝こそ分れたれ、

根はおなじ柿の本の、何ぞ白眼し給はんやと、いま一巻の誹諧をつらねて、法楽に供へんとす。連衆已に定まりて、予が老いたるをもつて小序の求めあり。薄劣のあたらざるを慙ぢて辭せんとするに、またおもへらく、實に世の諺に、年役といひ若役といへる、手足を勞し働くわざは、若役の請取にして、居ながらなす業は多く老年の課役となれり。今や一座に頭をめぐらすに、あながちなきかな、齢は吾が右に出づる人なし。よしや鬢髭を染めて若殿原と競はんは、たとへ病衰の思ふとも叶はじ。眼鏡にしばし筆をとらんは、難きより見れば易かりぬべしと、鄙陋はみづから年に許して、こちたくも此の日の序者となんぬ。

舎螯ヵ挽歌 并序

今年寶暦甲申の五月、是非庵舎螯身まかりぬ。舊知各追悼の句を賦し、惜しみ歎くも宜なるかな。年比夜話亭に風雅を學び、其の志厚きより、文會必ず此の人を缺かず。予もまた親しく草廬を訪はれて、何あればともに支吾を定め、吟ずればお互に敲推を論ぜし。今更に往事を思へば、老涙しばしば白鬚をうるほす。聊か挽詞を諷ひて曰く、

句ノ中所謂蕌子ハ者。生前所レ嗜ム。勸ムルレ酒ヲ必爲ニ下物ト。且石榴一株嘗テ與フレ予ニ今猶存ス庭畔ニ。

其の齢なほわかし　　此のわかれなんぞはからん

面影を慕へば　曉の月枕にのこり
音信をまてば　夕の嵐簷にたえぬ
　忍ぶ涙を添ふさゝつきあめ
　歸らぬ魂を喚ぶほとゝぎす
手向の菖子　酒むなしくあり
記念の石榴　露自らうるほふ
仇なりやさて
恐むべしあゝ
　短夜やうそと見なほす夢もなき

　巴雀木兒三吟十二表長歌行の奥書

我が祖父野雙翁、其の世に季吟老人の門に學びて、吟老人及び湖春と兩吟三吟の二百韻をとゞめて家にあり。さるは延寶八年野雙の齡四十四歲、今七十年の後これを見るに、其のたのしむ心一つながらも、風體まことに今と同じからず。我又此の道に遊ぶが故に、當時尾城の兩宗匠をかたらひて、席を過ぎて一卷の三吟をとゞむ。嗟呼又七十年の後に至らば、今のつるぎ菜刀とやならん。さらば今の菜刀

のひかりあらたまりて、紫氣の斗邊を射るべきもいさしるべからず。されば子孫の古きを慕はば、こ
れぞ風雅の變遷をしれと、あはせて青氈の櫃に納めおくことになん。
寛延三年庚午にあり。紫隱里野有四十九齡の秋八月、知雨亭に筆をとる。

鶉衣續篇下

燒蚊辭

おのが身ひとつはたゞ塵泥の幽かなるものながら、類を引き羣をなし、夕のまゞに柱を立て、軒端に雷の聲をなし、貴賤の肌をなやますより、世に蚊帳といふ物を以て汝を防ぎ、種々の品に至るまで、誰か一釣の紙帳をもたざるべき。積りて世の費えいくばくぞや。されば虻の利嘴蜂の毒尾も、しひて人を害せんともせず。既に他の通る時、これをもて防がんとするは、人の刀劍を帶するにひとし。汝が針は只人の油斷をうかゞひ、ひとり口腹のために貪らんとす。たまたま蜘の巣につゝまれ、人の手に握られて其の針を出すことあたはず。然れば巾著切りのはさみには劣れり。今宵一把の杉の葉をたいて、端居をこゝろよくせんとすれど、猶も透間をうかゞふ憎さに、大人氣なきわざながら、紙燭さして汝を驅る。ひとへに汝が業火なれば、他をうらむ事あるべからず。さるにても淺ましき汝が身を觀ずれば、

火をとりに来ぬ蚊は人に燒かれけり

送其常辭

浮藻の花の逢うつ別れつ、さるは仕官の常ながら、きのふまで待たれし身の、まだ笠紐のあともうせぬに、けふは見送りの席につらなりて、杯をあげて驪歌をとなふ。各餞別は、今年竹に祝詞をよせてこれより無事の便りをのみこ

まつといふ名はそひものぞことし竹

蟬ノ別

三伏の日ざかりの暑さに堪へがたくて、

蟬あつし松きらばやとおもふまで

と口ずさびし日數も程なく立ちかはりて、やゝ秋風に其の聲のへり行くほど、さすが哀れに思ひかへして、

死に殘れ一つばかりは秋の蟬

賀某ノ剃髮文

漁父が曰く、柳は物に凝滯せず、よく春秋の風にしたがふと。さるも官路にある中は、身を清からんとては、世にさからひて人に憎まれ、身を安からんとしては、世にへつらひて、心に恥かし。今や浮

世の髻たはらひて、二つの間に住み易き人あり。

滄浪の水すめらば頭巾あらふべし

星ノ夕ノ賦

今宵は星の逢ふ夜なりとて、小娘どもの暮待ちかねて、帶帷子も常ならず裝束き連れて、硯洗ひ梶の葉求め、笹に短冊し竿に綵懸くるなど、此の節句ばかり殊にをかしきを、いかで淸少納言は菖蒲にしかすとは定めけん。人間の囁きは、天の聞く事雷の如しとかや星の睦言は二階の耳へも洩らさぬ、天上下界のたがひめこそ殊に妬ましけれど今年はまだき秋の名の、水無月の半ばにたちそめて、けふくれ行く月も影さやかに、端居の袖もすゞしきに、一人の客西瓜によりそひて、我はた星に向ひて、何の願ひかあらん、哀れ此の西瓜の赤くてあれかしと思ふこそ、さしあたりての願ひなれといふ。かたへの翁打笑ひて、おもへばかの樂天が、海底の魚も天上の鳥も、高くとも射つべく、深くとも釣るべし　たゞあひむかひて、咫尺の間もはかりがたしと言ひしは、たゞ此の西瓜の事にこそありけれ。されど織女にいのらんは門違へにもやあらんとて、

赤かれと西瓜いのらん龍田姫

と、思ひかけぬ山姫をおどろかして、星の手向はなくてぞ歇みにける。

七景記

知雨亭とは、謝に其の譯たゝはへるが如く、務觀が詩によせて靜かなる心をいへり。今又半掃庵とは、我が物ぐさの明暮、掃く日よりは掃かぬ日多く、牀は塵、庭は落葉に任せがちなる、庵のだゝくさをいふなりけり。名は二つにて物二つならず。さればこれに七景を選ぶ。

東嶺孤月　路傍古松　蓬丘煙樹　海天歸鵰　龍興寺鐘　市門曉鷄　鄰舍春歌

東嶺孤月とは、嶺は三河の猿投山なり。遠き山々のそれより北につらなりて、此の山の間より、十月ばかりのよく晴れたるには、士峯の巓もみゆる事あり。それかあらぬかと昔は人の疑ひしが、寶永の比かの山の燒けける時、それとは定まりしとか、古き人のいへりけり。さればさなげ山とは、名いをかしくて歌などにも詠むべきを、文字を猿投と書けるは少しくちをし。只萬葉にぞ書かまほしけれ。されど目には猿の名もよそならず、ほとゝぎすも蜀魂と書き、朝顏も牽牛とかけばむくつけき類にや。清氏の女も畫にかきて劣るものといひしが、字に書きて劣るさたはなし。月は夜の長短によりて、此の山の南北より出でゝ、清光ことにさはる物なし。此の府下に月の名所を選まば、此の地をこそいふべかりける。

路傍古松とは、世に七本松とよべり。あるは相生めきて立てるもあり、又程へだたりて見ゆるもあ

り、染めぬ時雨のゆふべ、積る雪の朝、ながめことに勝れたり。草薙の御劍の昔語を思ひて、もしは此の七つを以て辛崎の一つにかへんといふ人ありとも、我は更におもひかへじ。

蓬丘蓮樹は、則ち熱田の御社なり。高藏の杜は猶ちかくて、春の霞、秋の嵐、此の亭の南の觀、只此の景にとゞまる。しばらく杖を曳けば、赤の華表も木の間にみゆめり。鳴海は熱田につらなりて、松風の里、夜寒の里、呼續の濱、星崎など、我が國の歌枕は皆此のあたりにあつめたり。すべてこれ熱田の浦邊なれば、海づらもやゝ見ゆべき程なれども、家居にさはり森にへだちて、一望のうちにいらず。されば、消天歸鴈も此のあたりをいへるなりけり。

龍興寺鐘は、庵の東よき程に隔ちたる木立、一村の禪林なり。或日客ありて、物語しける折しも、此の鐘のつく〴〵と雲より傳ふを聞きて問ひて曰く、けふ此の聲の殊に身にしめる、何ぞ然るやと。我これに答へて曰く、客もかの三十年の昔を知るなるらん。此のあたりはしばし歌舞の遊里となりて、明暮絲竹の艷をあらそひ、月雪花もたゞ少年醉客の遊びに奪はれしが、其の世は此の鐘の曉ごとに別れを告げて、幾衣々の腸を斷ちけん。世かはり事あらたまりて、今は其の形だになく、蛾眉蟬鬢も今いづくんかあるや。さればつく人に心なくとも、聞く人の耳にのこりて、遺響を悲風に託せるならんと、客も實にと聞きて、且いたみ且笑ひにき。さてや。

市門ノ曉鷄は、此の西の方あやしの小借屋といふもの軒をならべ、己がさま〴〵の世渡り侘しげなれば、かかればおのづから遠里小野のかばかりの聲も事かかぬほどに音づれ、はか〴〵しき商人は來らねども、海老、鰯、小貝やうの物名のりて過ぐる事も明暮なり。さればたま〴〵訪ふ人ありて、御肴に何よけんなど、一杯をすゝむるには、こゆるぎのいそぎありかねども、居ながら求め得る日もあるべし。家居はこれより市門へつらなれば、曉の鳥も枕に傳へて、老いの寢覺の力とはなれるなり。

鄰舍ノ春歌は、もとよりの農家の閒なればいふにも及ばず。かのからうすのごほ〴〵となりし、夕顔の鄰どのは、なほゆたかなる家居にてもやありけん。こゝらはたゞ手杵の業わびしく、麥の秋、稻の秋、あはれは砧の丁東にも讓らず。これをまじへて七景とはなせりけり。さるはいとをこがましく、遼東の家にも似たれど、賞心は必ずしも山水の奇絶にもよらじ。名にしあふみの人の見るとも、おのが八所の厚味にあかば、かかる淡薄のけしきも、又珍らしきにめでて、一度の目をとゞめざらめや。

不羨庵ノ記

經がたくみゆる世も、わびてはすむらん月を羨み、過ぎにし方の戀しさには、伊勢や尾張の波をもうらやみけん。月も浪もおのれ人に羨まれんとは思はぬを、心に物の叶はざるには、無情の物だにうらやむ、世の人心なりけらし。されば身に富あまり、幸ひ心のまゝにしては、只事毎につきて、他に

羨まれんとのみ思ふこそ、苦しきならひなれ。我が此の草の庵の事ときたる、更に羨む人なければ、我また爰に事足りて、他をうらやめる心なし。人此の庵を思ふにも、我他のうへを思ふにも、ともに不羨の庵にして、自他の境をわくべからず。若し此の羨まざるを羨む人ありとも、我はたゞ羨まれんとの心にはあらず。

鯉虎名二文

鯉とは魚の名なり。大聖取りて御子の名とし給へり。虎は獸なり。名を大磯の妓女にとらるゝ。鯉の意よろこぶにあらず、虎はたこれを怒らんや。不羨庵とは、我昔しばしつき捨てつる號なるを、はたして羨む人ありて、請うて其の居に呼ばれんとす。我かの鯉と虎とにならひて、喜ぶにあらず惜しみもせず、たはぶれてこれに答ふ。

さかばさけつきすてし名を手鞠花

水音舍ノ記

鈴木氏某が居、みづから名づけて水音舍とよぶ。其のよぶこと他にあらず。家に久しく傳へたる翁の自畫贊あり。かの古池の蛙をかけるなり、あるじの秘藏なるかな。そもや雷霆の百里に轟くも、過ぐれば人の耳にも殘らず。此の古池の水の音は、翁の耳に入りて口にいづ。其の音また人の耳にひ

びきて、正風大悟の一句なりとぞ、傳へて口にいふことなり。まづ耳に入り口にいひ、又耳に入り口にはいへども、目にかの昔を見んとする者、今深川の陳迹はたづねても、世うつり人すみかはりて、いつこかそれと知る人もなし。たとへば今寫さんとするも、絶えてその池なければ、いかに能畫の巧みをなせりとも、皆他の池にして此の池にはあらず。されば只これを見ん物、ひとり自畫の一軸にあるべし。あゝ此の家の風雅を守りて、高く雲居に虹を吐くは遠し。此の風を望まん者、誰か此の水音舍を知らざるべき。

青白舍記

疊は常に青かるべし。障子行燈は白きをいとはず、清きことその内にあり。其の居清ければ住む人の心すなはち清し。あるじもとより風月に遊べり。口に風雅をいふとても、清からざれば佳句を得がたし。昔阮籍が我儘にして、好く友と好かぬ人に二色の眼をつかひたるは、頰癖わるき名に立ちて、人亦かれに白眼せざらんや。青白さらに此の名によらず。今壯年の官路にたたんには、友に善惡はえらぬとも、只よく衆に交はりて禮を忘れず、心に忠を存すべくば、かの霜雪のしろきを得て、松はいよいよ青かるべし。道なんぞ風雅をたゆまん、風雅なんぞ道をそこなはん。あけては金城に登つて青雲の志たゆまず、暮れては閑居に休んで白露のさびをたのしみ、ながく青白舍の主ならんには、青白

舍の名空しからじとぞ。

七不思議ノ後序

和歌に西行あり、連歌に宗祇あり、誹諧に芭蕉翁ありて、三筋に道はわかれども、皆雲水に境界をよす。文人騷士其の跡はゆかしながらも、殊に誹諧する人の、杖草鞋にさびをしたひ、門々の志を專らとするより、今や松島象潟をも未だ見ずといふ誹諧師は、世に開眼せぬ佛の如く、疱せざる娘のごとし。されども家業に手をひかれて、仕官に脚をほだされて、其意をとげぬもの一つなり。布袋庵の主人は世に素封の名をしられ、もとより風雅に富めれば、身健やかに年壯んにして、何ぞ雌伏をなすべきやと、年々東西の旅に慰み、今年又此の七不思議見んと思ひたてるも、此の人にして此の病、さらに不思議にはあらざりけり。さればめでたき御代に誹諧の行はるることや。西行に宿惜しみし江口の君のつれなさもなく、宗祇に瓢を忘れし盗賊の恐れもなし。行く先行く先に同志の徒ありて、鷄黍の約をなさざれども、草履を倒にはき、鉢の木をも較還にたきて、まめやかにもてなし、手より手へおくらるゝ事、紀行を見て知んぬべし。主人紀行の稿を示すに、末に二三葉の白を餘したるは、予に物書きそへよとの設けなりとぞ。されど染むべき一言の葉もつやつや思ひよらず。たゞおもふに、主人の遠遊に耽る、歸郷の今日も、猶越の旅寢のこしかや惜しむならん

と、句一つ書きて贈る。

捨てかねん扇もこしの馴染より

贈二曉吾一辭

曉吾子は、我きく公の悲歡丁度五十年、盧生が夢の斷定さらりと濟まして、老いを告げ致仕をこふに、勞務むなしからず、其の子に職祿をうつし給はりて、けふや衣食住の求めもいらぬありがたき隱居とはなりぬ。同じ穴の狐これをよろこびていひ贈る。

梅雨晴れや世を卯の花に跡の事

庵ノ記　應二曉吾ノ需一

綿蠻たる黄鳥の丘隅に止まるは其の栖なり。世に雲水を追ふ僧侶の、一所不住を事とするは、假の宿にも心留むまじとにや。夫れだにも年老い足弱らば、止まる栖なくてやはあるべき。栖の栖なき時は恆の心靜かならず。宜なり、此の翁のこの庵むすべることとや。子あり姉ありて朝々の餐を饋れば、維摩の三萬二千はしらず、安置する物佛一體、行燈一つ、帚一本、茶瓶は火燵にかゝぐべく、硯は机に座すべし。臥具を納むる櫃あり。書籍をあぐる架あり、膝を容るゝにいと安し。風雨の防ぎ、座臥の設け、いくばくの錢をか費すべき。これたゞ姑く支體の爲にして、心は無邊の天地に遊べば、世人は

これを狹しといふとも、あるじは猶ひろしとぞいふなりける、

蚊屋つりてなほあまりあり草の庵

蝸牛齋ノ頌

背による物は風のおそれあり、土にかくるゝ物は雨の患へあり。かの蓮胤が車二つにつむといひしも、猶此のものの安きには如かず。あるじはこれにならふものか。

巣でもなく穴にもあらず蝸牛

黄岡亭ノ記

世の求むる所、衣食住の三つありて、一口もなくては叶はず。されど心をして淸からしめ、心をして靜かならしむるは、只棲む所によれる事、かの江南の橘の類にあらざらんや。我聞けり、此の亭は西南に望みをひらき、其のまゝに月もたのまじと翁の吟を殘されける、伊吹の嶽は殊にしるし。南宮の山つらなり、養老の瀧一眸に入る。眼下は千町田限りなく、村落よき程に隔たれば、春は雲雀の雲に啼き、秋は砧の月に音なふ。螢飛ぶ夜は欄によりて班女が扇をわすれ、雪つもる朝は爐に坐して淸女が簾を挑げて、四時の農業目をたのしましむる外、岐山の街道もこゝによれば、通ふ市人の負ふ者うたひ行く者、己が樣々なり。かれはせはしき世渡りならんも、餘所にみる日は忙がしからず。東に

は岐岨川ながれて、とわたる舟の櫓の音も夜半の枕にひゞくとぞ。されば歌人の題する物、詩客の吟に入る所、こゝにとりてあまりあり。此の比人ありて此の亭に名を求めかつ記をもとむ　辭する事度度なれば、請ふこと又度々なり。然れば我猶きける事あり。此の居の北にめぐりて竹の林しげれり。大なる物様のごとしと。これぞ此の家のときはを守りて、あるじの千代の友ならんには、かの地にこれをなぞらへて宰相に黄岡亭とよぶ。只我聞いて目には見ず、心に察して筆に寫す。もし此の言のかなふべくば、取りて此の亭の記とすべし。もし此の言のあたらずんば、よし辭譲に蓋してやみなん。やみね／＼、重ねてわれを煩はす事なかれ。

名二茶杓一辭

茶杓に名を付けて得させよといふ人あり。其のいふ人は、わが此の道によらざるを知りていふなれば、おもしろく覺えて、雪の夜と書きて贈る。君知るや、雪はしろく夜は寒し。

茶にたわむ竹や雪より猶寒し

飛鳥山ノ賦

今日はこの事かの事にさはる事あり、明日は飛鳥山の花見ん／＼と、心に過ぐる日數も、やゝ彌生の二十日あまり、尋ねし花は名殘なくちりて、染めかはる若葉の其の色としもなきを、春を惜しむ遊

人は我のみにもあらず。爰に酒飲み、かしこに歌ひて、此の夕暮に歸るさわするゝも、中々心ふかき方におもひなさる。

ちり殘る茶屋はまだあり花のもと

山下千里のまなじりさはる物なく、うら／＼と霞みわたれる田野村落の詠めえならず。きせるなくゆらすこと惜し時あり。

雲雀より田打ちへ遠し山の上

贈所訪不遇人文

安達が原の閨ならずも、さしもしのびし蓬生の隱家を、留守のすき間に見顯はされたる、ねたき業なれ。庵守りける男の思ひがけなくて、顏は目ばかりになりて、驚きまどひぬらん樣も、思ひやるにをかしかりけり。さるもあるじの居たらましかば、椎の葉にもるもてなしもすべきをと、今更いひたらんは、かの千切木といふ猿樂狂言の心地やせん。秋もやゝくれぬ、時雨のやどりは更にして、友おもはるゝ雪もあらざらんや。かさねて夜討の油斷すべからずと、茶椀とゝのへ煙管求めて、これよりひそかに人待つ心はならひ侍り。猶菊によせて何を殘し給へる、楚巾子へいひつかはす。

犬蓼のはなやとがめし留守の門

芭蕉によせて何を殘し給ひし廬丈子へ贈る

いかにとひし立枝も見えぬ梅もどき

望鯱亭ノ記　應ニ永田氏ノ需ニ

目に視る所にして思ひこれに從ふとは古人の言なりかし。されば世の人の住する所、或は山林にむかひ江湖に望むを以て其の居に誇れども、官士の上に於て此の望みにこゝろをとめば、いでや印を解き冠をかけばやと、世を遁兒の心も誘ふべし。孟母の折々借屋替もたゞそれなり。永田氏の居宅は城樓を望みて、金鯱常に軒に輝き、朝日夕日の詠めことなりとて、主人これを愛し、則ち望鯱の號を掲ぐ。愛すること誠にむべなり。官路に立ち青雲の志ある限に、常にかしこき御座所を仰げば、世祿の高恩忘るゝ事なく、報國の忠情日々に撓むべからず。かくて功なり名とげて後こそ、子孫に長く傳へゆづりて、かの山林江湖に望みをうつしかへ、殘生をも安く養はめ、今は此の望み何かはこれにしかん。主人此の記を求めてゆるさず。筆にまかせて其の責をふさぐ。人鳴呼なりと笑はんも、よしや讀はるゝよりも、笑はるゝは身に安ければなり。

訪ニ以文ニ辭

以文子、君にしたがひたてまつりて、木曾路の夏げしき、名におふ棧橋寢覺の詠めをつくして、歸

國の折しも、かねてあらたに家居をまうけ、此の新宅に馬をとゞむ。我も釣りそめし蚊屋の匂ひに、猶旅寢の心やせん。今ことに夏をむねとする物ずきに叶ひて、あるじの風流いかに心にくき住居ならんと、おもへばゆかしく、見ねばいよ〳〵なつかし。

生壁にまた旅の香やほとゝぎす

嘯花ノ誄

絃を斷ち劍をかけしむかしの淚袖にしたゝりて、今年ぞ身一つの秋とは歎かれぬる。さるは梅軒の嘯花子、未だ二十に三つを一期とし、此の中秋の月をも待たで、故鄕の露と消えぬと告げこすにぞ、目に見えぬ風の音におどろくは、たゞよのつねにして、ひとへに鳥の翅をかゝれたる悲しみ、譬へて言はんかたなし。誰か惜しまざらん。此の花子は武門の藝能他に勝れ、百事百成の器用のみか、深く蕉門の跡を慕ひ、過ぎしころは一日に千句の獨吟を試み、または夏中百題の日發句をつらね、明暮風雲霜露に魂をなやまし、一たび此の道の大悟せんとは、常の譚なりしぞかし。我はた如何なる宿世なりけん、斷金の交はり久しく、月の夜ばなし雪の朝會、其の人もれて我をかしからず、我かけて花子樂しまず。さるを一座の口ぐせに、花子は天象時節のけしきを好み、我は人事の上かちて、常に其の事を戲れにくみ、たま〳〵取りかへたる句振あれば、これは我ながらそこの句をいひたり、それは我

が何をそこの言はれたりなど、さるかひ興じけるも、はかなく一夜の夢とはなりけるよと思ふにかなし。ある年はそこの別墅に誘はれて、夜をかさねたる清談をなし、あるは其の山かしこの寺に、すべての行樂杖をあひ合はせ吸筒を荷ひて、露も違ふ事なかりし中らひの、此の春の御惠みによりて、我はおもはぬ官にうつり、暇なきに打紛れて、風雅の會もひまありしが、卯月は旅の衣にぬぎかへて、百里の東に別るゝ名殘、たゞにやは止まんと、梅軒に半日の閑をぬすみて、かの山に花あり雪の郭公と我を見立てしに、四月にはじむ菅笠の旅といひつゝ、猶我も又、一しげり陰をへて待て今年竹と、取りあへぬ辭に互の無事を祝しける中にも、世のあだなる習ひもあればとかなしく、顏のうち守られつるも、それは我が身の上をこそ思ひつれ、花守はすくやかなれば、かゝる歎きを我聞かんとは思ひもかけざりしに、かくぞ定めなきとは、始めて思ひ合はされぬる。されば此の別れのかく怪しきまでに覺ゆるも、我には理とへも思ひゆるすべし。若し靈魂物しることあらば、梁月の夢にも見えて、此の手向の敲推を定めよ。嗚呼それ富士の雪は時ありて消ゆべし。此の恨み綿々として盡くる期あるべからず。

供花　そちむけて魂まねかせん花すゝき

拜禮　社齋に泣く袖もなき夜寒かな

草風ノ誄

をとゞしの秋は此の武藏野にありて、嘯花子か訃音に魂をけづり、今年も同じ吾妻に下りて、祈るかひなき神無月に、草風子がはかなき便りを聞きけるは、如何なる事にや。其の文披き見しには、餘りなる驚きにや涙さへ落ちず、たゞ空をのみうち詠められしを、猶さだかに夢ならざりけりと思ひ知るにぞ、ほろ／＼と袖は濡れそめぬる。過ぎし秋の比、けにいつの日なりけん、いまだ旅立つほども定まらざりし比、勞りをとひ侍りけるに、其の折は頼もしく見なして、露落つる萩が枝の頭も輕げにもたげて、いでよこのころは、心地も死ぬべく覺えたれば、辭世の句など思ひよせたるを、かかることもむだ骨折りとなりぬべきなど、うち笑みきこえしを、あなゆゝし、かばかりの惱みにいかでさることのあらん。今は日にそへてぞ力つき給ふべからん。誰彼などかたらひて、やがて一夜の伽をし侍らんなど、さしむかひたる俤の、今更に目の前をさらず、猶ものに感じたる氣色なれば、又こそといひて立ちつるが、それこそ長き別れとはなれりける。我嘯花子が誄かきしほどは、互に袖をぬらして、さるにても世に不思議なる人の終りかなと、有るまじき習ひの樣に、愚かなるまで惜しみあひけるを、間もなく又其の人をおなじ昔に見なしける、此の恨みいかゞはせん。起きて思ひ臥してかなしみ、空しく鄰笛に腸を斷ちて、一句を手向くるもものうけれど、

識とはまだ思はれず初しぐれ

悼鶴此文

今年の秋にあはじとは、誰に誓ひし命なりけん。此の水無月の晦日に、櫻井氏鶴此身まかりぬ。かく短夜の短かるべき端なるにや、いまだ年も二十四ばかり、月花の哀れも身にしむべきほどにもあらねど、深く風雅に心を入れて、其の才の勝れたるのみか、只明暮のふるまひもまめやかに、人にもてはやされて、たゞ此の人を見ならへと、若き子持ちたりける親々は、意見の度の言草には引き出されつるが、あはれ世にあらば蕉門にも一旗の大將とは、たしかに秀づべき器を、かかる夏野の露と見なせし恨み、けふ御誠をぬ人の袖も、誰か涙の川浪にし濡らざるべき。今は詮なきたまよばひして、牌前に一句を手向け侍る。

こぬわかれあすは文月も片だより

悼八重辭

時節庵のぬし身まかりぬ。馴れむつみし年月を思へば、老涙そゞろに禁じがたし。我が庵の疊にあたって、其のあだし野も遠からねば、夕の霧かと立ちのぼる、はかなき空を詠めやりて、

蚊やりにも泣いて見る野の煙かな

悼二五條坊一文

六々庵に別れ、反喬舍世を去りし其の折々の傷みは、ある事ながら、猶此の五條坊の健やかなる、忍山がひなき其の世の事どもをも互にいひ出でて、老いを慰むつまともなりしを、名に呼ばれし翁のはかなき秋をだに待たず、此の水無月の露と消えし、惜しむべし悲しむべし。松竹つひに齢を讓らず、桃李もとより言はず。そも我今日よりして、誰とともにか昔を語らん。

なき友に泣くや心の羽ぬけ鳥

贈二信州松本射山一

姑山といふは、さきに宗匠某に受け得たる名なりとぞ。しかるに此のとなへの差合ごと出で來て、改名の字を予にもとむ。されば此の名を思ふに、めでたき姑射山の字を摘みてかくは言ひしならん。しからば上の一字を置きかへて射山とやいはん、下の一字をあらためて姑峯とやいはん。いづれももとの意は失はじ。二つに一つを定めんは、主の選にあるべしと、筆の序にかくいふ。

おなじ山たゞ名をかへて呼子鳥

與二某一文

好みて豪飲に耽る人あり、いかに思ひよることかありけん、忽ち八仙の仲間を遁れて、今よりはい

たく醉はじと固く誓ひけるが、猶行末の亂れ、我ながらうしろめたし。座右に守るべき語を書きて得させよと請ふ。我はもとより下戸なり、醉ひて面白きやらん止めてよきやらん、其の心に關らず。されども其の責のいと切なれば、否びがたくてすゞろなる一句を筆す。

神もうけよ酒すごさじとせし御祓

一老翁ノ畫賛

此の畫は誰をうつせるならん、強ひて名をつけてとのごまる。容貌うたがふらくは、陶氏に髣髴たり。されども例の菊なきはいかに。嗚呼我これをしれり。東籬すでに霜白うして、五株の柳も骨ばかりなる比かこれを更に冬淵明とはいふなるべし。

菊とりし手もふところや霜の朝

定ニ茶ノ名ニ文

茶をあらたに製して、名をいかゞ定めんと我にかたらふに、とりあへず雜の一句を筆に任せて、

茶の下をあふぐ片手は枕かな

されば手枕ともいはばや。

醉鶴亭ノ記

こゝに吳竹の世々經たる酒旗あり。さるは臨邛にかけむかひのわびしき店には似るべくもあらず、又六が杉葉常磐の色深く、碓のこたま花紅葉をうながせ、土藏の白璧雪を奪ふ。其のあるじ又風雅にさへ富めば、騒人ことにこゝにたよるに、酒債尋常行處にありといひしは、つまる行への覺束なくも、毎日杖に百錢をかけて、現金買ひのをのここそ、二季の帳をも騒がせず、たのもしき得意ならめ。されば暖簾には名におふ淺野屋の風を傳ふれど、猶一室に扁すべき號あらんことを予に求む。卒爾に醉鶴の二字を與ふ。其の意いかにと問ふに、かの鷫鸘の裘を脱ぎ、金龜を解いて價にあてしためしあれば、仙鶴を日々百杯に醉はしめて、もとよりかれが持ち合はせの千年の齡を、酒手にこちへとる合點なりと、且戲れ且祝して、あるじが爲に漫に筆を採る。

秋千居ノ記

居所に號を定めてと請ふ人あり。其の人もとより名を楓夜とよぶ。楓は紅葉にて、夜の錦にかよへるにや。實にそれ錦をきて夜行くが如しとは、富貴にして人に知られぬををしむ辭とぞ。されども其の葉を他に羨ませ誇る心のある人ならばこそ、白晝に面をさゝげてこれ見よかしの振舞もすべけれ。身に德あり家富まば、いかに隱るゝたらんとも、世に自らかくれなかるべし。さてこそ錦着て絅を尙ぶとの、かしこき教へもあるものを、我は只其の夜の錦こそゆかしけれ。物必ず尤けからぬは長

久の端なるをや。されば夜の楓の限りなき世々を祝して、千秋の二字に定めんとするに、其の唱古くて珍らしからず。此の字を上下と置きかふるにも、心おなじくして呼ぶ所聊かあたらし。終に秋千居の三字を題して、此の主の求めにかふることしかり。

也有翁の著述の文、鶉衣につきぬとおもひつるに、猶かかるめでたき錦繡のかゞやける衣ぞのこりたりける。いでや、倒に著し朝服より葛巾山服の老いの末まで、さる斑爛の色にほこらず、てゝらふたののいやしきをすてず、常談俗語に心をやりて、常のすさみとせられしは、はづきにさらすほしぎぬの、すぐれて尙き心とぞ知られたる。あはれ六德備へし君子にて裝しけるを、十德きたる誹諧子とのみ思ふめるは、ばくものをのみめにふれし、ふるぎの市のふみちがへなりけり。そもそもこの文は、なごやなる垂穗ぬしの篋笥の底にかくしおかれしさいでなるを、袖おほくびととりならべて、終に丈ある衣とはなしつとぞ。かかるみけしにおのれが器つくべくも覺えざれど、古きとくいの請はるる儘に、此のはた袖をかいけがすも、じちにかり著のまへしりへ、身にあひがたき事になん。

六樹園主人

鶉衣拾遺上

壽亭ノ記

むべなり、此の亭にことぶきの名ある事。門に萬里の湖を通じて千艘の出で入るあした、一葉の行きかふ夕、枕によりて閑を求むれば、軒端になれて伴ふ鶴あり。酒を調へて客を呼べば、俎板に生きてはたらく鱸あり。さるは所の仙境に似て、漁村に近き自由なるべし。ましてやごとなき君の楫の棹もこゝにうかぶ日は、枝も榮ゆるとうたひつれたる松風の里の松風も、濱の名にしおふ君が千年を呼び續ぎぬらん。もとより熱田潟蓬が島も這ひわたるばかり、かしこき神のめぐみは更にして、塵外の佳觀にあそべば、世にありふれたる饂飩蕎麥切も、爰に不老の藥となりて、ことさらに壽の一字の僞りならぬことわりを知るべしとなり。

松に鶴さて新そばに鴈の聲

須磨ノ硯ノ記 應二加賀島氏之需一

連城の珠は其の德を名とし、小烏の劍は來るいはれをしらせ、蟬折の笛はそのかたちの似たるをい

ふならん。それが中に、此の硯をあるじの須磨とよべるには、此の海の際に櫻の花を彫りなせるが、名におふ若木の佛ありとなり。げにおもしろし。此の浦はむかし平家の陣をとりては武士の譽をあらそひ、又は源氏のかりのうつろひに艶なる物語のあはれも添ひて、武にたつかしく文にゆかしきを、まして其の六十帖も、此の卷より筆はたてそめて、本末もとゝのほりぬとか。其の人の名の紫なるに此の石の紫なる、それも捨てがたきゆかりなるべし。さればあるじの徒然のすさびに、みづから妙硯が刀をもてこれに覆へる物つくり、猶我に一語をそへよといふに、そのいふ人もいはるゝ我も、今年は吾嬬の旅客となりて、ともに故郷戀しきすさびに、羨ましくもかへる波かなと、此の須磨の海の名にひかれて、つひに此の記のむしろに成りぬ。いでや浦のみるめも賑かしけれど、よし蜑の子のはかなきしわざと、其の關守もとがめざるべし。

する墨や明けくれ須磨の花ぐもり

鴉　箴

孝は百行のもとゝこそ聞くに、かれは反哺の孝心はありながら、いかで啼聲をさへ不祥の物に憎まれけん。それも夕ぐれの端居に、泊りがらすの三つ四つつれたるは、清少納言も哀れとは見しを、まだ曉の鐘もならぬに、月夜あるきに起きさわぎて常に郭の夢をやぶり、かの楓橋の楫枕に、唐人の寢

声をも驚かしぬ。これらは人にかこたれながら、かへつて風雅の種となりて、烏丸殿の歌にもよまれべきか。田畑にむらがりては、麥をほぜり大根をつゝき、曾晳が隱居屋のなつめも、栗栖野の祕藏の柑子も、などいたづらにあらしけん。然るに古きためしには、かの烏羽玉も汝が寶にて、名劍に小烏あり。おふけなくも日輪に三足の烏もおはしませば、さのみさがなきものとも思ひくたされず。さればば一たび己を顧みて、鵜の眞似をする僭上をやめ、鷺を烏の無理をたしなみ、烏麥烏瓜の備はりたる食もあれば、身を墨染の善心に發起して、今かくいへる示しをも、よくあゝ／＼と打頷かば、あんかうがらす野良烏、うかれがらすの浮名も消えて、長くお烏大明神の惠みかうむるべし。さらば鳴子の枝もならさず、案山子も弓を袋の世となりてん。ア、人の爲に恐るべし、身の爲に愼むべし。

送疫氣ノ神ヲ表　于時在二武州一

今年秋の初風身にしみ渡るより、老いとなく若きとなく疫氣になやみて、淸涕の露草薬を爭ひ、穗薄のかしらふらつきて、喰ひ物の味をもいさしら河のそれならずも、とめがたきせきに苦しみぬ。上は玉だれのひまより煎藥のかをりほのもるゝより、下はあやしの柴ふる人までも、頭をからげずといふ事なし。芝居入りなうして盆狂言の櫓幕いたづらに絞り上げ、色里客たえて夜見世の行燈かゝぐるによしなし。葛西の瓜畑も下冷えに守る人なければ、隅田川の渡守も發熱にこがれ／＼て、水馴竿の

細元手を流す。祈禱の法印も長髪に忍辱の姿を失ひ、宜禰も祝詞の聲うらがれたり。醫者賣藥の門のみ賑はひて、きのふ潮の舌先も、正氣散にやすむひまなく、かれらは時を得たるに似たれど、さして手柄の療治たらねば、はかばかしき藥代もえあたらじ。噫此の秋、いかなればかかる災ひを下して、吏民に苦しみをかけ給ふぞ。願はくは天神地祇愛憫の眸をめぐらして、咳氣の邪神を速かに西の海へ送り給へ。さらば臣等も幣帛のむつかしき業は知らずとも、篠の葉にして切りかけ太鼓をならして、及ばずながら力を合はせ奉るべしと、丹誠を抽んでて告げ奉る微志を、それゑさなはし給へ。

菊合ノ賦　與成田某

此のあるじの菊作るに好ける、好かずば誠にかくあらましや。されば作るべき花もこれならで何ならん。白は吉野の雲をなびかせ、黄は玉川の露をあらそふ。あるは二月の紅にまさり、あるは八橋の紫をうばひて、詩客の車も停むべし。昔をとこの袖もぬれなん。淺深濃淡の色はさらなり、花形は百種の新奇を咲きて年々に其の目をおどろかし、國々に其の名を聞ゆ。むかし陶氏が菊に名立てるは、只ありのまゝの色香にとゞまりて、主の爲にはいふべくもあらず。春の雨に鍬を入れては、栽うるに橐駝が手をくだき、秋の霜に帚をあてて、凋むに佐國が心をなやます。むくつけき土大根だに恩をしる心あれば、まして年月の愛をかさねて、いかでか此の宿の千年を守らざらん。いでや世に此の花あ

りとも、此の人あらずばこの色にさかじ。さらば此の人ありとも、此の花ならずば此の色にさかじ。あるじや此のあるじならん、菊や此のあるじならんといふに、あるじは其の譽れを菊に讓り、菊は其の功を主に讓りて、この挨拶の果てしなくば、世にいふ水懸論にして、秋や空しく暮れぬらん。いざ我判者せんといふに、物定めの博士にはあらねど、貝賦つくりて其の日の笑ひとはなせりけり。

蝶々も土ふまぬ日やきく合はせ

雪見賦

月花は其の隔てなきを、雪見はひたぶるに下戸ならぬ物好きならん。さるは香爐峯に簾を捲き、火燵に目ばかり出したる、それも雪見といはばいふべけれど、我が門にはこれをとらず。いざ轉ぶまでと詠めし草鞋の跡を尋ねて、白妙なる夜の目もをかしからんと、誰彼の無差別なれ、いづこはあれど例の新地にぞ人は起き居たらんと、南頭にあゆませ出づるに、町はねぶかの所々かをりて、酒屋饂飩の行燈にこそ、まづ目とゞまる夜のさまなれ。郭の門にさしかゝれば、おなじ心のうかれ人も見えず。月は師走の空すさまじく冴え渡りて、はえあひたる雪も流石によそよりは身にしむ心地して、過ぎし年武陽の其の里にて、誰が送られし下駄の跡と、朝霜を詠み捨てしふることも、今我ながらなつかしく、ふと打誦じたるに、見も知らぬをのこの頭巾まぶかく、あたゝかげに木綿羽織にふくだみたる

が、行き過ぎがてに耳とくも聞き留めて、げに此の心ばへの淺からず面白くさふらふと、打ちかへし吟じて、昔伊勢の富倉屋とかいへるに住みける女の、馴染の客の別れを見送りて、雪のあしたに立ちつくして、初雪やわがふところのさむるまでと、口ずさびしをぞ思ひ出で侍る、今こゝらにも、さる情しれるおなこそ候はね、口をしくこそと、なれ〳〵しげに語りて、やがて立ち別れぬ。いかなる者なりけん名も問はず。さては今宵いづ方にてか酒一つ酌まんといふに、秦皇の雨ならずも、雪に立ちよらば松屋の名もをかしと、つひに此の門に下駄の歯をたゝきて、

面白の雪の蹴あげや小提灯

旅ノ論

誹諧は人々笠草鞋の情を專らにして、旅情をしらぬ人は風雅もいと乏しくや。かはゆき子に旅をさせよとは、風雅に魂入れよとの金言にぞ覺え侍る。誠に花鳥月雪は、うちある樣にもありぬべし。戀と旅とに深き哀れは知るならひを、我十六の春やらん、始めて伊勢に詣でて、わづかに六日ばかりの旅行をなせり。其のころ風雅もかつて知らず、今の思出とするにたらず。これより十とせの今にいたり、たゞ官路にのみ往來して、さらに旅だつ事なし。しかるに川風寒み千鳥なくなりの歌を唱ふれば、六月の晝中も寒く覺ゆると古人もいへりける。げにや妙句を吟ずれば其の境の思はれ、其の境を

思へば新句を得る。干瓜や汐のひがたの捨小舟とは、いともかしこき御製なり。此の捨小舟、玉敷の庭にある事をきかず、たゞあやしの犢といふものにいれて、葭垣の南うけ、又は井戸屋形の端にさし置きたるをこそみれ。さるを、

御製のめでたきをおもへば、目にみると心に知るの二つならざるいはれならずや。其の雲の上にこちたくも比ふるにあらねど、わが旅情の十が一つもくみしるは、風雅の門を覗くによれり。抑明日の足をたばひて草臥れぬさきに馬にたより、闇けんこの相詞をもて行き過ぎがてに駕籠の直をなし、物を落さず草鞋をぬがさず、茶屋の嫁を泊りの下女にもしこなして物いひたる樣、初心の者のうらやましと思へるばかり、旅になれたるわざならん。旅を家とし千里を跨にかけたる者は、晝休みの店に腹飼うても寢ていびきはかくなれ。只年わかき初旅こそ、其のきはは物も手につかず、無用の繕ぎぎせるに物すきをつくし、笠草鞋も十日以前より鼻の先に掛け置きて、船川の說法きかじと、伯父の見舞に出ちがひてそはつきあへるは、駒の朝はやりなり。さるを故鄕の旅とおもへば、さすがに節分の豆、早船の守とさわがれて、少しは心の覺束なき方もあらん。出で立ちは茶漬にはしらかし、菅笠の緒の取りいそぎたるも、さすがに堺川越ゆる時心細く見かへるは、父母の國をはなるゝ誠なり。案のごとく歩みつかれては泊りを待ちかね、わらぢの緒は解きたれど、あがりはなに雨戸をつき、やゝ膝

頭にて這ひあがり、居風呂に呼びたてらるゝも、中々物うきばかりにて、楯に手をかけぬれども、縁のいと高くおぼえて、横ざまにまろび込みたれば、四方はせばくて肩はすぼまりて、折釘にまりのさけみなと、つれの男に氣を付けられ、財布の置き所に迷ふ。おなじ名物の小刀、往出しの煙草入買ひ、ねぶたき耳にかしかましくて、木枕に横はりてぞ一日のたのしみはおぼえぬ。心よき夢は七つの鐘にゆすられ、起き出づる牀のうさは、戀の別れにもまさりぬべし。鷄の聲も鳴きわたり馬の鈴音などして、馬士のあくびに横雲はわかるれど、目は猶さめかねて追分の立松にだきつき、出はなれの橋につまづく。道端の家に松葉はら／＼と打ちくべて茶の匂ひかうばしきは、羨ましく心とまるわざなるべし。安倍川の餅は山吹の面影ありて清らかに、岩淵の小豆餅は藤の疊束なきに似よらでいとおくつけなり。大根漬は喰ひ次第として、すべて五錢の定めなるべし。茶屋の田樂は串の數をあらため、酒の肴は茶椀に極め置きて、目のかけたるを置くはいとさもしきを、其の缺け目に親指をあてるは、ともにぬからぬ覺なりけり。出女の上は木導が説につくしぬ。御油赤坂ははでにて名高く、吉田濱松は地味にして艶し。足袋鼻紙の商ひは譯の相紋とするべし。赤前垂紺前だれは所の風にもよらん。片輪車の染め入れも、引くには廻るならひにて、旅客のうさを慰さむ便りとはなれり。假の契りもなほさりならず、草鞋のふしに心をつけ、酌み茶に情をはこぶなど、さすがに涙もよほす人もありなん。五

十三次はさらなり、邊土の旅に猶うき事はありとしるべし。木賃の宿いといぶせくて、行水の湯は鍋にてわかす、片破月の蓋をしたれば、藁火の灰飯にまじはりて、喰ふべくもおぼえず。さらでも蚊屋の破れたるを、赤子せわりて夢も結ばず。向ひの土臼の歌はをさまりて、鄰の女夫いさかひを聞く。ふすまはひき立てたれど、おくび形にあきたるなど、足疲れては褌かかぬ男に駕籠かかれ、戻り馬にまたがれば新鞍に腰骨をいためつ。うき目つらき目即ち風雅の種にして、言ふにつきず思ふに限りなかるべし。あるはいかつの乗り合ひに興をうしなひ、馬やろの聲は魂を消すべし。雨の夕は殊に悲しく、月の曉はいつもねぶたし。我かく知りて一座旅情の附け合ひに及ぶ時、眼を塞ぎて爰に來往すれば、箇のうち新規無量の事あり。たとへば今世の軍者としるべし。つひに軍はせざれど、かけ引き備へ立ての師となりて人をも教ふるは、あつはれ軍者なり。我又門を出でずといへども、心をこゝに用ゐる時は、即ち千里の旅客としるべし。此の一段はわれ二十七歳にて書きつけぬ。行く末いかなる案をして猶奥深き隈はしるとも、此の論は一字をかへじ。蓋し風雅の居ながら物情に亙るの謂を、後見ん人にしらせんとなり。

馬かたの寢たあともありつくぐし

月ひとつほしやくとたび乞食

我が紋の餘着にかうたる旅寝かな

出女の口に蚊のよるくもりかな

賀二小女一辭

婦に三從の道あるや、其の家に在りて親にしたがふも、父母ともにして揃へばなり。嫁して夫に從ふも、中の睦まじければなり。老いて子に從ふも、よき子をもてばなり。物の三つ揃ふは稀にしてありがたし。鼎の脚も三つ揃へばこそかたぶかね。宮地氏の家に娘を持てり、子の年子の月子の日に生まれたりとぞ。願うてなり難く、求めても得まじき不思議なるをや。子はそも十二の始めにありて、而も大黒天のつかはしめ、打出の小槌おもふまゝなる行末の幸を賀して、宮地氏に贈る。これ其の求めなればならし。

花も何みねにみどりの姫小松　字は三子の目出たり

鉏ノ花生ノ箴

見ぬ國の上戸が、我が飲み死にたらん所に埋めよと、其の具を常に荷はせてありきたるとか。今日もわするな明日も忘るなと、調市にさゝやきて、祝言ぶるまひの門々へも持ちて立たせたらん、物忌する人はさぞ惡み嫌ふらん。これらは鉏の赤烏帽子ながら、わる物ずきとはいふべからん。我がせど

に古き錐あり。久しく久三が手にも捨てられては、今は下が歯黒壺にも沈むべき身の果てなるを、取り上げて閑居の花生となしぬ。錐よ〳〵、示して云く、

幾春庭の土をかへして。　もえ出づる草の根は斷つらめ。

今より過ぎし罪を悔まば、　いけおく花のよはひを守れ。

杓子ノ銘

或人杓子を味の飾物に物ずきして此の銘をもとむ

爰に千早振お多賀杓子ありて、用ゐざれば鼠と遊びて味噌桶の陰にかくれ、用ゐられては虎の勢ひありて牀の上にものぼらんとす。さるを杵も擂小木も同じ幸を眞似んと思へる、これを世のたとへにして杓子定規とはいふなりけり。

千竿亭ノ記　應下條氏之需

亭に名づくるに千竿を以てする、若嫌ふことなかれ。竹は古人のとりだゝに愛して、友には今更ふるあかしきも、物は年々にふりゆき、姿は日々にあたらしからんに、まして蕉門の風雅にいはば、何は此の昔の容心にもとむべく、てにはは、ふしん〳〵の程よからんをそふ。不易は時雨の色もかはらず、流行は折々の風になびきて、爰に東坡も七賢も、いさしらぬ趣ありといふべし。身はよし劍冠の仕

途におきて、理窟の塵に交はるとも、纔かに半日の閑を得る時は、これを五湖の舟棹とも詠め、富春の釣竿ともなし、あるひは竹馬の稚心に戯れ、鳩の杖の老いをもまねびて、誹諧自在の遊びをしれるよりぞ、千竿の名の空しからずは、よもつきじ／＼、萬代までの竹の宿りと名におふ鳥も此の枝をたのみて、ゆかしき軒端なるべし、なほ思ふに、此の亭の朝風さやさやに春も有るべく、雪にをかしきをもあるべけれど、我はたゞ郭公の告ぐるを待ちて、筍のさかりをこそ訪ふべけれと、たはぶれて筆をとゞめぬ。

野遊集序　鷹川合氏需

仁者の山をも遂はず、智者の水をもしたはずして、今年野遊をおもひ立てるは、宜なり武藏野の騷客なればならし。そも歌よむ人のいへるは、其の道を濱の眞砂とは、盡きぬ喩へはさもありぬべし。おなじものゝいつも白からんは、目あきるしきかのいなゞはあるべき。そこを正風の誹諧にいはば、同じ野の草ながら、みどりにもえ錦にそめて、古き物は古き儘にして、其の日其の時に新しき、此の野に心を遊ばしめば、たねはよし武藏野の、これもつきしなき言の葉なるべし。

兼物語後序　應安田氏之需

灞橋に扈を擧げて陽關の曲を諷ひ、八橋に餉をひらきてから衣の歌よみしも、同じ旅の露けき

ながら、それはみぬ國の花鳥をなかしからず、これは倭詞にさへられて、にはかなきわざは言ひもらすふしんども多かるべし。昔我が翁、川ばたの捨子に物なげくにせ、芋あらふ女をも詠みすてきりしより、世に其の風を學ぶ人、多くは杖笠の姿情をしたひ、紀行まことに牛に汗すべし。それが中にも此の一軸の殊に縱橫自在をえて、あるは猿渡の舟に無常を觀じ、志津ケ嶽に忠義をしたふ。小谷の城の跡をとへば、物覺えよき男出で來りて、昔語に竹杖も朽しつべく、今庄の驛に宿をかれば、笑ひ上手の女ありて、酒あひに草鞋の疲れをわする。たのしみかなしみ見るうちに行きかふ中に、かの金津の里には、いとなまめいたる女はらから住みて、そこの旅ねの枕にぞ、常磐の山の岩つゝじ、忘れがたきかくれごとも思ひやるに涙かりぬべし。されば此の作者は、蕉門の誹士とこそ聞くに、千萬言のうちに、なぞや一句の吟もなし。これや無絃の琴を撫したる、誠に琴道の尋常ならず、音たつる調べにも勝れる事を、ひそかに此の寐物語に聞き侍る。

贈五條房遺贊

小松殿の教訓は琵琶法師の曲に殘りて聞く人感を起し、白藏主が意見は大藏和泉が家に傳へて、見る者笑ひを催す。誠のあるとあらざるとなるべし。我が筆すさびの讚甚だかりも、やう過ぎたらんは正風にや違ふべきと、深切の一棒に始めて目悟めて思ふに、誠にこれより幾ばくの譏りをか遁るべき。

我か爲には千金にもかふまじき賜なるをや。これを贈りてこれを謝す。願はくは五條坊に納めて、昨非を改むるしるしと見給へとなり。

こゝろある人の垣ゆふ野菊かな

蛙ノ歌

かはづ〳〵、住吉の浦のゐるめのかりならぬ、古今の序にのこされて其の德のたかきや。

かはづ〳〵、廬山の雨のつれ〴〵に、詩人も鼓吹とほめおきて、その聲のたへなるや。

かはづ〳〵、木曾路の橋のそれならで、幽谷に虹を吐きて、そのわざのあやしきや。

かはづ〳〵、玉川の水にすだき、歌人のことばにめでられて、その名の世々に聞えたるや。

かはづ〳〵、朱雀の小田に啼きつれて、逢ふ夜別れの曉に、嬉し悲しと歌はるゝ、其の哀れのわりなきや。

かはづ〳〵、深川の古池にさびしき音をきかせて、翁のゆめをさましたる、其の功のつへなきや。

夢人ノ記

旅の住ひは殊にすきまがちなる木枯の窗さし固めて、今宵に世務の妨げなければ、ありし猪の子の餘波とて、人のえさせたる餠煮させなど、其の間のすさびに大根引の發句せんと、例の集ども取りち

らすに、猿蓑の時雨も折からの軒に音なふ。まして炭俵の其の夜の切火桶もこの比にやとゆかしければ、これらを枕として思ひ寝の夢なりけり。忽然と人ありて、世々の誹諧の變化などかたる、其の辯懸河の如し。さて我曰く、今案ずる所の大根引は、始めて祖翁の季を定めて古人のしらぬ題なれば、こゝろみにこれを以て問はん。季吟老人世にありて、其の時此の句を求めんとせばいかに。夢人言下に吟じていはく、

暮るゝまでやすまずひくや大根機

増山井綴連珠の趣もこれなり。根機つよきといふ秀句を思ひよりて、あとはそれに叶はせたるまでなり。其の後宗因に變化してはいかに、

大根引きあと黒波とぞなりにける

黒の一字をあたらしみにして、諸の詞を用ゐたる、これらや談林にあらずといはざるべし。いでや元祿の此の正風世にひらけて、其の門人三千の徒、すべてこれに德化せられたれど、なほおのがじゝ好む所にひかれて風體の轍はわかるべし。昔其角は作にひかれて、其の枝其の葉に至りては、墨子が歎きし白絲も、木の色なく結ぼれて、解けがたきなぞ／＼なるべし。強ひてそのかたはしを求めば、

今ぞ小春見よ大ぬきの大根畑

かくもいふべくや。引手あまたの詞とかへして、其の餘は風流ふかゝらん　きこしや十六がこのむ所はいかに、

　手の中で鼻ぬぐひけり大根引き

惟然坊が手筋はいかに、

　大根引きおから出いても哀れなぞ

露川が身のなる果てはいかに、

　繼母やたぶさつかんで大根引き

さまざまの風格は得てききぬ。さらに我をたすけて正風不偏の一句を得させよとこふに、笑ひてこたへず。いざやいざやとせむる内に、無下にゆり起され驚きしうち寝がへれば、例の折敷をつきすゑたり。誠や五十年の變化を見しも、思へば粟餅の煮ゆる間にてぞありける。

悼反齋舎文

無常の風のおどろかすは、目に見えぬ秋をしも待たざりけり。此の水無月の十八日に、便りの人につけて、過ぎし比より痰のなやましく、打籠り侍れば、久しく訪ひ侍らず、いぶかしとや思ふらんときこえしに、筆の跡も例の細やかに、物うげにも見えねば、たゞ此の若さの故にやあらん。庭に秋草

の秋またかねて咲き出づるもあれば、これ折りて便りせんと、さしも急がぬ心に、其の日又の日と暮し侍るを、あくるあしたの露と消ゆべしとは、いかに思ひかくべき。世は唯夢と知りながら、かかる夢もならはざりけり。吉田法師がいひけん、繼子立の石も一つうせ二つうせて、今は尾城に蕉門の一老となれば、名望四方に高かりしが、年も古稀には猶三つばかりも足らずや。吟行いまだ杖にもよらず、机に眼鏡も忘れがちなれば、行く末遠くたのみし人々の、いかに翅もがれたる嘆きすらんと、我にてよそも思ひしられぬ。夜話てうくたすばかりの袖いかにと、かの庭の草どもを季札がむかしに手折りて、あすの七日をぞとひ侍りける。

蟲はまだ人になかせて夏の草

贈二巴水一辭

三十五年の勤勞めでたく功なりて、今や耳目肺腸我が物にもらひかへして、みづからの世帶をいとなむ。かかる身において、はじめにその心あらざる者なく、巴水がごとく終りをよくするは世に多からず。

鶯や籠をいでて竹に巣ごしらへ

某別野ノ記

あしたに劍を佩いて營中にひざを屈し、夕にはゆふつけ鳥のそら音にははからねば、理窟の關の戸を脫れて、此の閑居に耳をあらふ。そのあるじは茶をこのめども、茶人ならねば利休が寸法にもほだされず。下戸なれども酒をにくまず、しかも淵明が風流をしたふ。さてこそ所も柳町の、その五株のゆかりなるべきにや。みよしのの山のあなたに宿もがなとは、何を思ひの捨言葉ぞや。靜かなる望みはさもあるべきが、雪の朝に豆腐賣りもこず、月の夕は酒をも佗ぶらんを、たゞ此の幽栖の、あやしくも市の中にありて更に車馬の喧をきかず、鹽も油も求むるにやすく、饂飩も蕎麥切にも自由をえたり。庭は僅かの閑地ながら北に一重の窓を開けば、千町の田づら軒よりつゞきて、田がへす春は蛙の聲近く、詩家の鼓吹も木枕に聞き、早苗とる比は螢のとびちがひて、車胤が夜なべに乏しからず。まして稻葉の雲も色づけば、鴈渡り蟲啼きて、ひとりご月はみるべかりけると、寂し好きのかの法師も心とむべき住居なるを、冬はことさらに山々の雪を剡溪に棹をもささず、佐野のわたりに袖もはらはず、火燵に目ばかり出せる詠めは、昔王維が輞川の別墅もこの物好きはいさ知らざるべし。比は長月なりけり。うらなき舊友みたりよたり、爰に招かれて酒のみ茶呑む事ありしが、折しも十五夜の月いとよく晴れたるに、此の興は忘れ難しなどうかれ騷ぎ、裏なる柴折戸開けて稻葉の露にそほち遊びし序、あるじ此の記を記してよと求む。莫逆の間に辭する事をわすれて、かたはらいたき筆とる事にはなり

ぬこあなかしこ、知己ならぬ世の人にになもらし給ひそ。

またとはん菊より後の根ぶか畑

吾樂庵ノ記　應₂桑雨ノ需₁

獨樂園のぬしは、みづから其の記を書きて人に其の樂しみをしらしめ、吾樂庵のあるじは、我に其の記を求めて其の樂しみを語らず。我こちたくも君に諭さん。世に樂しみのおのが樣々ながら、樂しみを求めて樂しみとするものは、哀情これが爲に先だつ。まだき秋風のはやうより言ひしろひて、今年は珍らしき月見せんと催せば、巫山の雲心なく立ち騷ぎて、夕の雨吟魂をなやまし、其の日彼の日は興ある花見せんとさわげば、祈らぬ山おろしはげしく吹きて、賞心徒にへだち易し。況んや娼樓舞莚の樂しみにおける、まして世務仕官の上においてをや。蘆分船のさはりがちにて、難波に恨みのはれま無からん。さるは樂しみを求めて悲しみを求むともいふべし。さればこゝの境にありて、世に平生のたのしみを知らぬ人は、夕にたのしみて朝にたのしまず、よく樂しみを知る人は何か心のたのしまざらん。もし此の樂しみに乏しからずば、誠に吾樂庵のあるじなるべし。

月花の富や心の藏のかず

桃花石ノ記

一日木同きたり告げて曰く、或人の家の藪に色異なる石の埋もれてある事久し、或は人これを怪しめども、わづかに半面をあらはして出す事いとたやすからねば、さてやみぬとぞ。さるを頃日、其の友鳥貢なる者ふかく望みて、あるじに受け得、とかくして掘り出せり。これを石工に見するに驚いて曰く、此の名を桃花石とよぶ。むかし津の國の御影村勝原村より出し、其の性至つて硬し、物に用るに最上とす。然るに今其のもとより絶えて出ずことなし、世に稀にして人知らず、最も珍とすべしと。其の主よろこびてこれを彫らしめ、手水を湛ふる具となせり。翁これがために記を書かん事をとふ。予曰く、誠に既に盡せり、其の外に何をいひてか記を作らん、只其の人にかく傳へよと。木同猶こうてやまず。予重ねて曰く、昔三人の僧あり、共に不言の行を約す、既にして一人の僧誤ちて言を發す。一僧驚きあわてて云ふ、何ぞ誓ひを敗りて物いひしやと。殘りの僧かへりみて曰く、二人は既に行をやぶる。今守る者は我一人なりと。卒に三僧の行ともに破れりとぞ。此の僧の例を思へば、いはずといふもの卽ちいふなる時は、我記を作らずといふも亦卽ち記を作るといふものならんをや。これを以てかの石に問へ、名にしおふ桃花ものいはぬも、蹊をなすはいふに似たり。石も又うなづきたる例あるをと、笑つて卒にこれを記とす。

定齋號序

大井氏瓦光子は、武門に生まれて其の家の技に拙からず。されど脚に惱める所ありて、驅走に健ならず。かくては弓箭も取り離しとて、すつべき物はとよみけん藥師寺が心をしりて、五十の米の望みをたち、三石の奈良茶を甘なひ、常に蕉門の月花に遊ぶ。さりとて熊谷が無常を觀じ、瀧口が戀にも懲りねば、髪をもそらず法衣もまとはず、なほ長羽織に大脇差、野中の清水の昔を殘せば、心知らぬ人にこそはがらるゝもをかし。靜かなる事に好きならひたることありて、つれづれの手ずさびがてら、今のたつきともなるから、市中に藥をうらず、一頃の田に足らぬをなげかず、朝三暮四に餘りあれば、かの塞翁が馬のためし、幸や不幸ならん、不幸や幸ならん、世に謗る人はいさ、羨む人の多きをみるべし。此のごろ茶話の餘、我に齋號をさだめてよとこはる。口にまかせて自全齋と名づく。其の心あるにあらず、なきかといはば無きにしもあらじ。

名亭說

青木川の辭にすむ人の、其の居に號あらんことを望む。かの川はもとより鯉の多くすむ所とこそきけ。爰に此の人の逍遙せば、魚の樂しみをよく知るなるべし。されば魚ならずして魚の樂しみをいかでかしらんと難ぜし人は、はた其の知る人の知ることをも、其の人ならねば知らじとぞ。今此の人の知る事を知るも、我ならずして何ぞしらんやと、笑つて終に知樂舍と書きて贈る。

見えすくや魚のこゝろも水の月

宜白亭記　應山村氏之需

見てこれをいはんとする時は、詞の及ばざる事を苦しみ、見ずしていはんとする者は、心の及ばざらん事を恐る。我聞く、此の亭は領主の閑に既る所にして、謝氏が屐を勞する事一町許り、脩竹深樹の閑を開きて、登臨亦類なしとかや。げに兼好も此の麻衣の木曾にとまらんとて、静かなる方は求めしをや。されば領主反喬舍に囁き合ひて、いざや此の亭にさせる名なし、試に予に記をこひて、これが名もそれによらんとたくむ事あり。名を聞きてこそ俤もおしはからるれ。名はこれが後ならんぞ、殊に難きわざなりとおもへど、此の頃そゝのかさるゝ事いと切なり。こゝに風雅の天眼通なからんやと、潛かに此の亭をはかるに、嶺の尾の上の花に宜しく、月に宜しきより夏に宜しく、名におふ駒ケ嶽にむかつて、雪に又よろしからざらんや。眼下一條の谷川流れて、岩にくだけてちる浪も、心の塵を洗ふによろしく、持ちて贈るにたへずといひし、雲心なくて吟魂を助くるによろし　かれといひこれといひ、此の亭に宜しからんと、宜白の二字を名として贈る。もし宜しからずといはば、白は物の下地にして、染むればそまる色なるからに、他の宜しきに染めかふべしと、爰に云ひ抜けの詞をまうけて、責めをのがるゝ物ならし。

岐岨路紀行　延享二年

乙丑のことし、君にしたがひ奉りて、卯月六日江戸を出でゝ尾陽にのぼる。一年を恙なく歸國のけふを待ちえたるよろこび、人々も賀しあへるに、

卯の花の中にうかれぬ首途かな

年々になじみし武府の人々には、淺からぬ名殘をしまるゝもありて、流行に心ひかるゝ別れとはなりたり。

麥の穂の腱もぬれてわかれかな

今年は木曾の山路を分くるなりけり。仕官の身のならはし、心ならず馬槍のいかめしくてゞあきれたる、野老村童に事問はまほしきも、物言ひ交さんはにげなき樣なれば、店の餅酒は見ぬ顏して過ぎ侍る。まことに風雅の本意ならぬも、いかゞはせん。こゝの山はとありて、かしこの川はかゝありてと書き付けたらん、その所見ぬ人はつゆも覺えぬ物にて、殊に筆の及ぶまじう、何の榮えかあらん。唯

思ひよれる句ども少し筆にとむるのみ。

蕨といへる所に、とばかり譬喩とゝのへて出つ。

　われとおる手もなき夏の蕨かな

此の夜上尾に泊る。

　七日

熊谷寺に直實が像などあるよし、路のあわたゞしくて立ちよらず。

　熊谷もはてては坊主やけしの花

今夜本庄に泊る。

　八日

かくいへる所にて、

　くらが野ときけばや里も木下闇

けふは過ぐる道すがら、家々の軒に藤をさし侍り、花をもさし葉をもさせり。所の人にきけば佛生會の手向なりといふ。故郷にて見馴れぬ事なり。陸奥國に花かつみふく類にやとおもふらし。

　灌佛もやがてはへとて藤の花

此の夜板鼻にとまる。

九日

碓氷峠を越え侍る。般若石といへる嶮岨をすぎてよりは、さのみ嶮しからねば歩行にて行く。山谷の桃櫻は夏としもなく、木の芽などうち煙りたるやうなるもあり。けふ御前に出でたるに、いかにや山はいまだ衣かふべき時節ともなし。花なども春の心地するに、例の口すさぶ事もあるべし。此の心思ひよれるやと宣はするに、いさ道の苦しう候ひて、なげに申し出づる事も候はずと御いらへ申すに、さりともこゝにはあるべき物をとて、笑はせ給ふ。

綿入を木曾路の夏や花の旅

雛の見ぬ山路の桃は四月かな

などきこえんにも何をつくり見るに、よくもあらねば、御前に啓する事もなくてやみぬ。

追分にとまる。

宿の軒端に浅間山まぢかく見えて、けふは晴れたる空に、ことに煙のまがふ方なく立ち登る樣、いとゞし。此のあたりはいまだ蚊も出でねば、

蚊にはまだたかぬ煙を浅間山

十日

此の夜和田にとまる。

あるじが子とて惣太郎といへる、十二三なる童の、茶など運びてかしこけなるに、見えわたりたる山を問へば、かれは大田澤これは檳榔山となんいふ。名にしあふ黑髮山にもよらねして、いかで此の名を呼びけんとゆかし。つれづれなるに、おもしろき草紙やある、見せよといへば、主のいかにたくはへ置きけるにか、運氣論といへる醫書を取り出でたり。これはむつかしくてよみ難しといへば、義經記を持ち來れり。こゝかしこ讀みてつかれを紛るゝほど、童はそこに畏まりをれり。

やがてみん幟もちかし武藏坊

十一日

和田峠を徒歩にて越す。こゝはすぐれて高き嶺にて、今すこし上の方に鳩の峯といへるは、日本にならぶ方なく高きよし。されど此の國は地高き故、人はさしも覺えぬとなり。けに雪の多く殘りてあり。けふはことに雲深き中をわけ行くに、咫尺もわかぬほどなり。

雲ふみてなほゆかし山郭公

行尊僧正の、花より外にとよみ給ひし、谷の鶯のみけぢかき心地ぞする。かしこへも山里に春は告

ぐると、歌にもよみし雪のうちの夏は知らでやあらん、歌よむ人などは、此の心もて言ひつゞくる節もあるべし。

本山にとまる。

十二日

けふは福島にて、山村氏が亭に入らせたまふ。家居つき〴〵しく、のじめ上下にもてさわぎて、何くれともてなしたてまつる。鱈鰤などの膳にひゐごりたる、けふは山家めきたる心地もせず。

俎板のなる日はきゝかずかんこ鳥

十三日

けふは名におふかけ橋をわたる。

眠るなと馬士はしかれど百合の花

臨川寺にいらせ給ひて、寝覚の牀御覧ず。爰に筏士のさま〴〵自由をえたるを、めづらしき物にめでさせ給ふ。いかばかり吹くととふべき折にもあらず。

たゝる物はなくて筏に青あらし

此のあたりを見かへりの里といふなりと、人の指さして教ふ。

又いつか木曾の麻衣あさからぬなごりやあとにみかへりの里

これはもとより歌枕にもあらねど、句のなかりければ、歌よむ人のまねしてかく口ずさむ、いとかたはらいたし。ここにあやしき翁のこと、世俗にいひつたへて、誠に翁歸りの里とかけり。

野尻にとまる。

十四日

大井にとまる。

山中はたえて竹のなき所にて、桶の箍などいふ物も、木にて營めり。ここの宿にて初めて竹の子を調じて出せるを、いとめづらしくて、

竹の子にあうて家路もほどちかし

十五日

上田にとまる

あくる日家につき侍る。此の間句もなし。

熱海紀行

府君の御母公、浴（ゆあみ）せさせ給はんとて、延享のことし江戸より豆州の熱海（あたみ）といへる所へわたらせ給ふ

師とも仕うまつり、葉月の二十九日江戸を出でて、熱海にいたれるは長月二日なり。

草 の 葉 に 月 の た び ね も 二 日 か ら

此の里のさま、後に山めぐり、前に海近くして、いさ見ぬ須磨のけしきもかくやあらんと、折から秋の寝覺も心すむ旅寝にはありける。湯本はことに我がやどりの後に近ければ、日夜に六度ばかり、おどろ／＼しくわき出づる音高く、出水浦波にひゞきあひてかしましきものから、世の中と渡りくらべて、いかにとかいふべき。網引き釣する業もあれどおり立ちて己が世のたつきとする者は少なし。耳なれぬ魚の名ども、うつは、ひらこ、はまち、そうだなど、後にはおのづから見おぼえて皆いふ。山田色づく比にて、鹿追ふ小屋に引板ひきならすなど、珍らしう哀れなり。鹿の聲は夜もすがら聞えて、夕霧の巻などよむこゝちす。

夜 は 湯 に ぬ れ さ す 袖 を 鹿 の 聲

月は殊に海より出でて山に入る、宵々の詠めえならず、浪よする浦の景色、我がやどりの東面はあらくまなく見えわたれば、あけくれ欄干に打ちもたれて、烏帽子著たらましかば、我も屏風の繪に書くべきをと笑ふ。

ほ し 棹 の こ れ に も 月 や 濡 れ 浴 衣

尾花ちるかたはへりけり浦の波

打ちよせて浪にまけたる舘かな

つり舟や案山子のり行く波の上

あるじの手彦助といふ年十四ばかり、常に來なれて、あまの囀りめきて、所のことなど聞きおぼえて語る。かれに案内させてあたりの宮寺など見めぐり、漁家に茶をこひ、樵夫にたばこの火かりて、吟步機を忘るゝ程いひ捨てたる句ども、例の知る人のもとに書きつけてつかはす、登步一里ばかり、日金山にのぼれば地藏堂あり。駿豆の海山眼下に連なり、景色いふばかりなし。富士は西に隈なく、こと山の秋にわかれて雫しるき姿、衣錦尚絅とかいへる、此の山の德に比すべきにぞ。

四方山のにしきや富士にはづかしき

都松といへるは、染殿の后の跡のしるしなりと、野老のいひ傳へたりと語る。いづれの時にか、柿本紀僧正、染殿の后と密通の事ありとて、さらぬ疑ひの科にてこゝに流されて後失せ給ふ。后は八幡といはひ、紀僧正も宮といはひしが、其の仇名のうきを厭ひて、二つの祠むかしはたがひに相背きてありし。今は八幡は外にうつして、其の謂れも殘り侍らず。常に后のみやこを戀ひ給ひしが、あとのしるしの松も都の方へ枝葉さしむかひければ、これを都松といひける。僧正の社のきはに大きなる櫻

のありし。中比此のうしろに御殿作りけるが、障りなりとて此の木を伐りしかば、かの松も程なく枯れにけりとぞ。其の木のともに枯れたるちぎりならば、ぬれ衣の名もいかなりけんと覺束なし。

　松かれてどの木へ蔦や所がへ

僧正の祠は、ことに大きなる椎の木二本のはざまにあり。

　御所柿の色にこりてや椎が本

湯前權現に我が疾をいのる。

　新蕎麥や疝氣に利生みせたまへ

伊豆權現奉納

　海と山兩部に月のくまもなし

業平井は里中にあり。爰の男女の常に水汲みかけうつして、自ら妹背の媒ともなれば、いひならはしたりとぞ。

　豆ひきの影や井筒にまめをとこ

平左衛門湯といふあり、平左衛門かひなしとよばれば湧き出づるとて、里の子どもの呼びて旅客に錢などもらふ。

子どもいさよばれ紅葉に立田姫
重陽にあふ。
選り出して菊をいはゞはんくさ枕
後の月
山の湯も塩酢にわくか後の月
木の宮
木の宮も草からさきへ秋くれぬ
暮秋
行く秋の千魚に残る鳴子かな
天神
飛石や梅にふけじと霜の花
真鶴ヶ崎
まな鶴もみじかき冬の日あしかな
大島は遠くかすかなり、

大しまや片目しぐるゝ遠目鏡

はつ島はいとちひさき島の向ひに近く浮べり。沖の小島はこれなりといふ。または大島をいへりとも、里人の傳へもまち／＼なり。

木がらしや片手に撫でる島ひとつ

十月十三日熱海をたたせ給ひて、江府へかへらせ給ふ。道すがら鎌倉に三夜ばかりおはして、寺社古跡ども御覽ず。したがひ奉りて、殘りなく見めぐるほど、何などいふべき所も多かりけれど、事にまぎれて皆もらしつ。道をまもりの神に申す。

守り給へ神もおたびの道すがら

榎の島

此の神の御手にやにほふびはの花

白菊が淵

十月やげにしら菊の名もむかし

龍ノ穴

此の洞をおもへば神も冬ごもり

鎌倉にて

鎌倉のかまの名さびて枯野かな

梶原が矢筈もふゆのかゝしかな

何がしの寺にて、重衡の杯をみる。

さかづきに銚子もそへず寒さかな

盛久が首の座

盛久が命や濱のかへり花

鶴ヶ岡八幡

御供して鶴も留守なり神の松

十九日金澤の方にまはらせ給ふ。能見堂といへるより八景を見わたす。奇絶の勝景ことばに述べがたし。折からうちしぐれしに、

八景のうちふたつみつしぐれけり

二十一日武府にかへらせ給ふ。

武藏野紀行

庚申のことし、霜月の初めなりけり。江戸を出でて、清戸といふ所に、旅より旅のかりねも十日あまり、母やある子やもてると、あるじに話もやをらなじみそめて、此のあたりの事など尋ねきくに、昔はこゝもとも月の名におふ武藏野なりし由。今は家つらなり田畑と變じて、露おく草の名にもあらぬ、大根牛蒡のことにめでたき里なりと語る。

武藏野や今は茶にたく枯尾花

今とても猶端々には、其の廣き野の迹のこれりと聞きて、見にまかりける。案内するをとこの塼なるも、時鳥聞くしるべならねばと、其の口の輿にして、龜ヶ谷下富などいへる村々を過ぎて、かの野には出でぬ。まことに四方に木竹もなく、草さへも今は霜がれはてて、あはれにものすごき原のさまなり。

武藏野やいづこを草のかげひなた

そこら見めぐりて、

枯野にもすゝきばかりは薄かな

くれ行く空もおもひやりて、

武藏野に露ひとつなし冬の月

又の日、野火留といふ所を尋ね侍り。こゝは伊勢物語に、けふはな燒きそとよみし跡なれば、中の名もかくよび侍るとか。業平塚とて寂しきしるしども殘れり。歌のこゝろを知らば、枯草に喫ひがらな捨てそとたはむれて、

こもるかと問へば枯野のきりぎりす

内津草

内津の里に住める更幽居三止なるをのこ、予が庵に來る每に、いかでかの山里にも尋ね來よかし、あるじせんとそゝのかす事年あり。されど、今はたゞ老いの鴉の月に浮るゝ心さへものうくて眠りがちなれば、杖をのぶる事もなくて打過ぎしが、此の秋いかなりけん、しきりに山里の景色ゆかしく、ゆくりなく思ひ立ちて彼のがり訪はんと、葉月中の八日廿三の過ぐる比庵を出でたつ。月くまなくすみ渡りて晝のごとし。也陪なるをのこは、三止にも予にも常にうらなく睦まじければ、よべより庵に來りて此の行に伴へり。櫛次の市中長く過ぎ行くに、千家いねしづまりて物音もなく、往來の人影もたえてなし。今宵は居待月なれど、まつ名のみにてかたぶく影は惜しまずや、いと口をしと思へど、さはれ我も亦かからましかば、かかる清光もいぎたなく知らでぞあらまし。大曾根といへるわたりに至れば、家居どももさま劣りて、鷄の聲戸々にきこえたり。

おもひいづる詩あり鶏なく里の月

かくいはばそは何の詩ぞと、おほめく人もあらんかし。

片耳にかたかは町のむしの聲

やゝ人家をはなれて、野山のけしき月の光に見渡す、いとあはれなり。山田川かち川をわたるほど夜猶ふかし。此の川々はかちわたりなり。

八月のかさゝぎの橋もなし

從者ども、あなつめたなど笑ひのゝしる聲に、我は駕籠よりこしのぞきて、

かち人の蹴あげや駕籠に露時雨

ゆく〳〵月もかたぶき過ぎて、夜も明けなんとす。

雞からしらむ夜あけや蕎麥畠

鳥居松といふ所にて、割籠やうのもの取う出てよとていこふ。

夜と晝の目は色かへて鳥居松

これより杖曳きてかちより行く。大泉寺といふ所にいたる。僅かに一里ばかりを歩むで、老いの足まだき困じにたり、又駕籠にのる。

山がらの出て又籠にもどりけり

道の側に尻ひやし地藏といへるあり。靈驗あるとて人の信仰することぞ。

尻ひやし地藏はこゝにいつまでもしりやけ猿のこゝろではなし

坂下、明智、西尾などいふ里々を經つゝ行く。

駕籠たてるところ〴〵や蓼の花

むかうより來れる人の、うちそばみて笠ぬぎたるを見れば、内津にすめる試夕なりけり。かれは彼の里に茶をひさぐ者にて、庵へも疎からず訪ひて年頃相知れり。兼てけふ我がとふべきあらまし聞えて、三止が語らひて出せるならし。とばかり行きて、三止も出むかへり。こゝの名をとへば鞍骨といふ由、むくつけき名のいかなる故ならん。

けふ爰へたづね來んとはくらほねやくらけの背にあふ心地する

と戯れて打ちつれゆく。此のわたりより山路やゝさかしく、峯々左右に近くそびえ、大きなる岩ども道も狭にそばだち横はりて、決々たる溪泉いたる處にきく。

名もにたり蔦の細道うつゝ山

晝ばかり内津につく。此の所のさま、妙見宮の山うちかこみ、杉の木立物すごくしげりて、麓につ

きづきしき家居つらなれり。

山は杉さとも新酒に一つかね

あるじ懇にもてなし、湯あみ物くひて心落ちゐたり。

夢もみじ鹿きくまでは臂まくら

あるじ、

ふつ名もはての十九夜の月

と脇してその末々もありつ。美濃なる虎溪といへる所ながめよしと、早うより聞きわたりつれば、行かばやのこゝろありけれど、其のあくる日は先づとゞまりて、何くれと語りなぐさむ。亭のまへとばかり庭ありて、いと間近く山さし覆へり。其の間に細谷川ながれて、水の音昔にたえず。此の上にさしわたして造れる小亭あり。枕流亭と額を掲げたり。此の名は孫楚が意ならんと、

目すゝぐ石もあたりにきり〴〵す

此の日妙見宮に詣づ。舎よりはいと近し。猶奥の院へ參らんといふに、こよなう嶮しき道なめり。老いの歩みの及ぶまじければ、只やみねと人々いふ。されど阮籍が窮途にこそとゞまらめと笑ひて登る。左右大きなる杉どもの枝さしかはして日の影ももれず、細き道の苔なめらかに石高し。右の方に

天狗岩(てんぐいは)といへる、世にしらぬ大きなる巖そばだてり。只一つの山ところを見知らるれ。かかる怪しき岩は他の國にもをさをさなしとぞ。

道ひのぼる蔦もなやむや天狗岩

次第に道さかしく、岩を攀(よ)ぢ木の根にすがりて、七町ばかり登りて、少し足とゞまる所に休らふ。こゝにあふげばかうかうしき拜殿みえたり。夫れまでは十間ばかり、ことに危き坂あり。社は猶奥まりてましますなり。これまで登りしだにも、我にはこちたきわざなり。今はふようなりとて、爰にぬかづきて歸る。

杉ふかしかたじけなさに袖の露

けに本州にかかる宮居(みやゐ)ありと知らざりけり。若き人々はふりはへてもまうでぬべき靈地(れいち)ならし。其のあくる日より雨ふり出でて、二十四日まで晴(は)れやらず。其の程の事ども筆にまかせて書きあつめたり。

一日枕流臺にて誹諧す。餘興に戯れて、

こゝに住みて善正(ぜんしやう)日夜さゝ、水はひんがしならで西にながるゝ

あるじが常の名長谷川善正といへばかくいへるならし。明智にすむ醫師羽白なるもの尋ね來りて初めてあふ。

掘つて來て草に藥の名をとはん

と書きてあたふ。此の人も誹諧を好めり。

試夕が家は更幽居にさし向へり。一日こゝにも遊ぶに、あるじ一句を請へり。なりはひいと豐かなる男なれば、

あたゝかな家あり山は秋ながら

こゝはひたぶるの片山里とこそ思ひしか、更幽居は更にもいはず、試夕があるじまうけの樣すら、すべてよういきて、調度などもいと淸らに、心つかひたる振舞どもけしうはあらず、よろづ目やすかりけり。

府下萬松寺に、前にいまそかりし綱國和尚退隱して、此の里見性寺といへるに假に住み給へり。久しくしれる中らひなれば、雨の隙に訪ひて、とばかり語りて歸りし後に寄せらる。

深山客稀有孤猿　豈謂高軒過遠村

煨芋無收寒澀力　肯令玉帶鎭空門

前を賡いで謝す。

滿耳溪泉又斷猿　頓忘塵想宿山村

逢昔猶憶重遊約　嶺上雲多恐鎖門

あるゝあるじ酒すゝむとて、こゆるぎのいそぎありくまゝに、鉢に杜若をつくりて水をもり、香調じて出せり。見れば茗荷の子をもて巧みに花の形をまねびたり。

八月のはたに咲いたるかきつばたさてはみやうがに物わすれ花

若き男の、酔ひのあまりに、かうやうの細工に思ひ附きけるにや。庖丁にて猿を造らんとて、手をあやまち血流れたり。人々騒ぎてやみたりと聞きて戯る。

こりはててもう此の趣向手がきれたいらざる柿のへたの細工に

といふに、例のどよみになりぬ。

あるじ墨竹の一幅をとう出て賛を求む。唐ざまの筆なれば、さればみたる發句はいかゞならんと、一絶をつくりて、

不与梅柳交　心似厭塵累
露深夜雨余　何借二妃涙

と書きてあたふ。

雨にたれこめて日をふるまゝに、試夕がもとに信濃なる新蕎麥をえたり。これ一種にてもてなさん

と招くに任せて二度此の家に遊ぶ。其の日はしばし雨小止みて、後の山近く、猿の聲しば〳〵聞ゆ。過ぎし日枕流臺のうへの山遙かなる梢に、猿の餌を求めて木づたふを、端居ながらめづらしとて見たりしが、けふは雲樹ふかくかくれて姿はみえず。

新 蕎 麥 に 燒 き く 山 の 夕 か な

と書きてあるじにとゞむ。

二十五日からうじて雨晴れぬ。けふは虎溪見んとて出でたつ。這ひわたるほどと思ひしも、二里ばかり隔てりとぞ。道の具ども、例のあるじの心いれて、こまやかにまうけぬ。猶案内かてらとて伴ひ行く。里の數越えて、ゆく〳〵いと苦しき坂一つ登り下りて、やがら到り著きぬ。彼の境は、兼て聞きわたりしにも似ず、寺のけはひいたう古りたるとは見ゆるものから、住みなせる僧の心からにや、哀れにたふときかたえてなし。桂格子など、順禮といへるもののならひに、あさましきまで物書きけがしたり。庭のさま、人の手してつくりなせるものの荒れたるなめり。ときさかうざまに裝へるも大どかならず、いみじう心劣りして、人はともあれ我は目もとまらず。門の前小川清く流れ、岩そばだち木立ものふりたる隈々、されど見所あり。庭なども、たゞかく自らにてあらまほし。庭のかたはらに座禪石とよべる高き岩あり。これにのぼれば遠近の望みよし。

座禪にも目はまよふ山の秋の色

歸るさの道すがらもいふべき事なし。すべて此の頃の明けくれに、雁の聲は聞かざりけり。我が耳のうとき故かとうたがふに、いまだ時早くして啼かずとぞ。されど若かりし昔、所々の旅寢に聞き馴れつれば、このたび聞きもらしぬるも本意なき事ともおもはず。

主はもとより年頃なつかしひて、共に心をも知りかはしぬ。伴なるものも、過ぎし年、目のいたはりありて醫をもとめにとて、府下にいでしよすがに相知れり。家刀自さへに、此の程の日かずにうちなれて、萬まめやかに、あかなきさまにもてなさるれば、老いの心慰みて、あやにくの長雨にふりこめられぬれど、つれ〴〵わぶる事もなく、あからさまと思ひしも、かゞなべて七日の假寢をぞ重ねぬる。故鄕に待つ人もたる身にしもあらねど、かからば斧の柄も朽しぬべし、明日は歸らんといふに、あるじ猶楔を投ぐるの意ありて、今一日はと切にとゞむ。

　も一りんみよと木槿の岸かな

いな船のいなにもあらず、心弱くて又とゞまりつ。

　追はれねばたつ事しらず秋の蠅

これにて一卷の名殘をつらぬ。すべてしづけき日ぐらしには、誹諧して遊びつる卷々もつもりぬ。

いでや身の一たび病つきてより、つや／＼世をはかなみ、たゞかげろふの夕をまつ心地しつれば、たまはりし祿をも返し奉り、蓬がもとに隱れしは、二十年の昔なりけり。其の爲ならぬ物から、とみに仕への途をのがれ、おのづから名利にかゝづらふ心の疎くなりもてゆくや、中々命つれなきたづきとはなりけん。稀てふ齡もかぞへ過ぎて、此の秋かかる山ぶみをさへ思ひたちし、我が身よくしれる我が心のあやしきまでになん。さるにても、ふたゝび來べき境ならねば、しかすがに名殘おぼえて、跡の山々かへりみがちなり。

鷹に似ず跡にこゝろの山わかれ

左を右に眺めはかはれども、かへさはみなもと見し野山なり。ゆき／＼てかち川にいたる　こたみは水かさまさりたれば、駕いでて此のまゝ渡りがたしとておりたちぬ　從者どもの負はんといふに、否、そは中々危からん、けふはいたうも寒からざれば、たゞ手を扶けよ、かちわたりせん。老いたれども猶かばかりは難からじと、細脛いと高くかゝげたり。若えたるふるまひの我ながらをかし。老いの浪そふ影もはづかし、淺くとも渡らずとこそ丈山翁はよまれしを。

紙衣きぬ秋なればこそ河渡り

それより大曾根にしばしやすらひて、夕日うすづくほど、わが桑梓にはかへり著きぬ。

思ひいづるきのふはけふの夢なれやしばしうつゝの山のかりねも

歸りて後さう〴〵しきすさびに、いひ捨て書きすてたる事ども集めつゞりて更幽居に贈る。字のたがひ、假名の書き誤れる物も少なからじ。かたはらいたき詩歌のまねびし、さるがひ歌のはしたなき反古どものかたほなるなど、物狂ひして書いまじへたる老いのまさな事、珷玞とだにいふべからず。只これ搏黍の一帖なり。愛屋上の烏に及ぶとか、我をいつくしむ心にあやまちて、燕石を十襲せし宋人の愚にゆめ倣ふことなかれ。もとより人の知るものならねど、四知ありといへば、天わらひ神笑はん。見果てなばとみにひき破りて、我がため恥をとゞむべからず。

安永二年巳九月　　七十二翁狂夫也有

鶉衣拾遺下

記餘白俚歌

相知る人のがり、梅雨晴の客もとめて問ふこと侍り。そのあるじ、誹諧も少し聞きし、されどことふくいふ者なり。ここなる机のもとに引きちらしたる反古あり。何ぞととへば、此の孫あそびに、例の子供の踊るべきうたの唱歌作れと、人にたのまれて書きたるなめり。されど文心におもふこともありて、世にいだすべきならぬ。只やがて引きやり捨つるものなりといふ。とりて見れば、實に聞きしらぬ樣のこともあり。中にをかしくもつゞけたるかなと覺ゆるふしゞもあり。われ誹諧して彼に負くべきと思はぬを、かかる物つくれといはんに、いかでこれほどに言ひ出づべき。世はさまざまのおある物かなと、をしき樣に思へるまゝ、只こなたにて引きやり捨てん。我に得させよといひて取りかへりつ。此の端の餘白あるに任せて、潛かにかきとめおきぬ。題號をいはば、さと茶の湯などこそいはめと、其の人いへりけり。

世の中に勝れて花はよしのの山、紅葉は龍田茶は宇治の、都の辰巳それならで、ことは都の未申、

数寄とは誰か名に立てて、濃茶の色の深みどり、松の位にくらべては、圍ひといふは低けれど、
情はおなじ躰かざり、かざらぬ誠あかし合ふ、間夫や人目の中くぐり、なかだちいらぬ口切の、
後は浮名の下地窗、影もる月のさしつけて、それといはねど世の人の、目に猿戸も立てられぬ、
あうて立つ名か立つ名の内か、逢はでこがるゝ池田炭、炭を雪かというたが無理か、其の白炭の
雪と見て、雪にはあらぬあられ灰、くだけて物をおもふ夜は、夢さへろくにみずこぼし、水さす
人にふかくと、のるは三つ羽のかるはずみ、輕いはいやと飛石の、すわらぬ胸のうら表、ふく
ささばけぬ心から、きけば思はくちがひだな、逢うてとうしてかう箱の、柄杓の竹は直なれど、
そちは茶杓のゆがみ文字、口舌にとけし茶せんがみ、にくいあたまの鉢たゝき、へうたんならぬ
炭とりの、ふくべも花は夕顔の、それはなつめのたそがれに、五條わたりや四疊半、よしや氣長
に待合はせ、茶うすのめぐる月と日も、あらば花咲く花生に、離れぬ火ばしよりそひて、憂さも
はなしのはつむかし、昔ばなしのぢいばゝと、なるまで釜の中さふす、縁はくさりの末長く、千
代萬代もへこ

是れを近世女てまへとなづけ、もてはやす。猶後にいたりて、翁は女手前にもとつき書かれしなど、人の思
はくも煩はしければ、そのことわりを書い付ておく

辻君　ウクの韻

月にうかるゝ鳥も多きに　いかで夜鷹(よたか)と浮名にはたつ。
袖はやなぎの人を招ぎて　枕(まくら)の草にむしやとびかふ。
待ちて相圖のうたはうたへど　あうて別(わか)れの文はおくらず。
曉かへるそでのしろさは　馬場(はば)の夜寒(よさむ)の霜やおくらむ。

茄子　エケの韻

むらさきの名にめでて　まづちぎるせどのはたけ。
梂にへたはまなぶとも　瓜のつるにはならざれ。
つけものの夏のあした　鴫燒(しぎやき)の秋のゆふべ。
獻(こん)だてのしなぐは　豆腐にも恥ぢざらめ。

風鈴　ヲコの韻

はるは山寺ならでも。　ちとつらし此のかねよ。
なる日はおのづから　花も風のふくものを。

翁像贊

富貴誠に浮雲　滑稽極めて正風
道のほとりの木槿を吟じて　ひそかに人の教へあり
窓のまへに芭蕉を栽ゑて　永くおのれが名とす
此の翁たれか甚く　梅痩せて笑ひ松老いて高し
笠を携へて旅の情やまず　筆をとりて贊する辭なし

又　ウクの韻

誹諧に故人なしといひける。　いひける翁故人となりぬ。
それより故人幾故人、　只此の故人を慕ふことやまず。

又　イキの韻

詩家に李白うして謫仙とよび。　誹門に桃青うして祖翁と稱べり。
かれも三石の奈良茶を味はば、　さらに百杯の酒にかふべし。

翁ノ題ス笠ノ圖ニ贊

題ス笠ニ旅装ノ吟　尋ヌル花ヲ狂客ノ心
可シ識ル不言ノ深ヲ　豈無カラン芳野ノ句

人日　ウクの韻

畑も雪間に若がへりつゝ　去年の案山子も老いや忘れむ。
なゝな七草七日つみては、　はなのなの字の猶ぞ待たるゝ。

蛤　アカの韻

もとの身の雀ならば。　竹の枝にもなれじや。
今は桑名に燒かれて、　松かさのおもしろさ。

寄團扇戀　ウクの韻

えにしも夏の手には觸れつゝ。　いかに言葉の甚そらごとなる。
一夜あふぎの名にあやからば、　とけて心のうちはかたらむ。

手習ひの師に書きてあたへし聯句

硯の海は明けくれに湛へて　桃の日の汐干もなく
筆の林は夜日に茂りて　霜の後に落葉も見ず

大砲銘

賢人の耳に鳴らねば　風の吹く日もすてられじ

鉢扣も手に餘れば　雪の降る夜も靜かなり

鯉の贊

及ばぬ瀧に思ひをかけて。　戀をすればや鯉と呼ぶらめ。
のぼれば落つる悔みある世に　淵に住む身を安きとはしれ。

布袋ノ贊

飾る錦の世はうらやまず。　布の袋の名ともなりぬる。
梅は肥えたと我を笑はば　我は痩せたと梅を笑はむ。

廻文

さくみつゝつまで待てまつつゞみ草

誹諧歌幷辯

煤はきの日とて立てたる居風呂によごれぬ旦那先へ入りけり

娑婆にては善知鳥安方と見えしも、冥途にては怪鳥となり、よのつねの米屋味噌屋も節季には懸乞となりて罪人を責めはたる、世の有樣を詠めて、あら拾ひ坊主の口ずさびける。

たつた今乞食しかりし門口へ直にむくいて懸乞がくる

里の戸もとざさぬ君のかかる世にあふみはうきをきかで老ひせん

鳥の名十

うかりつる世はをしからすそなきしも都こひしきときは有りけり

獸の名十

こりずに夜いも寐すみしかきみ來ざるうしやくまなき月のかねごと

草の名十

道さへもなく住む君が山遠き世のよしあしもうとくきくらん

庚寅六十九歲元日試筆

東風回暖入蘭阿　老對鶯花樂若何
六十餘齡今得九　人生誰道古來多

惜しむとも急ぐともなき年暮れて待たぬ厭はぬ春はきにけり

初日の外面を見渡せば、けさは農夫も鋤鍬を休めて、恵慶の葎の宿とよまれし秋ならねども、春はきにけり。

田畠に人こそ見えね年の市

夜半まで空にまどひし足も皆かしこまりてや雜煮喰ふらん

八體ノ付方

聞耳たつる門の人音

其人　ふぐ汁の鍋を片手に提げながら

其場　片側はくら屋も交る與力町

時分　夜なかかと思へば星の明けかゝり

時節　延び〱た祭の客も五月晴

天相　一しきり雨やら松の嵐やら

觀相　勘當の跡にまよひの親ごゝろ

俤　木曾もまたのがれて見れば浮世なり

丈草ノ文ノ跋

傘と剃刀をさへもたぬ身の上かなと、よしなき貧乏自慢がかうじて、明日ある人のもとへ齋によばれ候に、鬚は汁をすゝる邪魔になり、雨は衣の袖しぼらんことを思ふに、ひしと困りはて申候まゝ、御無心申入候。よく〱とぎすまして一丁、たとへ破れかゝりても一本、御かし可レ被レ下候。委しく

は落合候て可申述候。御内々御息女御心得可被下候。と申候て存出候。先々はかる〳〵と語候て滿悅申候以上。

正月八日　丈草

堀彦左衛門樣

此の文體に日附を見れば

話の邪魔いかにきのふの薺粥　　華隱也書

寫海洲子ガ文

このごろ反古を引破る中に、海洲子が文一章あり。此の人柳川氏、文才ありて詩を能くし書を能くす。誹諧又幽趣を得たり。惜しむべし、五十のころ世をさりぬ。遺文いづれにか散りうせけん。今わづかに此の一章を見て捨つるに忍びず、又殘すべき方もなし。しばらく我が文草の中にとゞめて、追慕を慰む助けとす。

壽光先生ガ傳　壽光は鏡也

壽光先生もと山中を出で人間に交はり、つねに一人臺上に坐して默爾たり。人來て笑へば笑ひ、

怒れば怒れり、只人に順へり、これを莫逆とやいはん。しかれども美人に愛せられ、醜き人ににくまれ、やゝもすれば地に拋たるゝのことあるこそはいぶかしけれ。予久しく先生を拜せず、早に起き往きて拜す。げに先生や綽娜たる美少年なりし。秋の霜一度下り、蘭艾ともにくだけ、しら髮雨鬢に垂れ、笑へる齒あばらとなれり。かく零悴せる事の須臾なるはいかんぞや。先生默爾たり。それ人は一世にありて名こそ遂ぐべきに、一臺の上に逼々としてかかる姿となりたり。たとへ鶴書のいたる事ありとも、今はた用には立たじ。素餐の責はいかんぞや。先生默爾たり。予、涙を含んでつらつら先生を見れば、先生も涙を含んでつらつら我を臨めり。長物語に朝餉の時過ぎて去らんとすれば、去らんとせり。立ち歸れば立ち歸り、しばし別れをなしみ、ともに默爾としてわかれぬ。其の後古かね店を見れば、先生猶默爾として居れり。また其の後神路山に登りて見れば、先生猶また默爾として居れり。先生のことは測るべからず。

これは歌物語の言葉をかりて、詞文にあらずといふべからず。されど只これも筆に任せし一體のすさびなり。

悼伯母辭

こはそもはかなき世なりけり。過ぎしはわづかに二十日あまり、武藏に旅だちする御いとま申さん

とて訪ひまゐらせしに、例のまめやかにもてなさせ給ひ、のどやかに御物語ありしが、おまへなる瓶に花ども多くささせ置き給ひしにつけて、過ぎし冬さくらのさし木といふこと人にならひて、庭にさせ侍りしに、まことにあやまたずなんと啓し侍りつれば、嬉しきことと聞きつる物かな。ことしの冬必ずささせてん。其のすべきやう教へてとのたまはせしほどに、かかる御別れあるべしとはおぼしかくべきや。なほ何くれと語りつゞけさせ給ふついでに、此の頃おぼしよれることあり。下にあやしの耕す男かきて、上つかたに雲雀の高く上りたるさま畫きて、それに發句してえさせよとありしに、いとこちたくこそ、すゞろなる筆のいかゞ及びがたくや侍らん。今は旅のいそぎにしづ心なく侍れば、さるべき發句も、とみには思ひよりがたくなん、さるにても、吾妻に下り侍りて、いかで念じてまほならずとも書きとゝのへて奉りてんと、うけがひまゐらせし、其のいとまもなくて、今はた悔しき數とはなりぬ。我が母上を始めて、女の御はらから九所までおはしつ。皆にげなからぬよすが定まらせ給ひながら、うち續きて世を早う去り給ひ、今は二方ばかりぞ殘りとゞまり給へば、母上うせさせ給ひし後は、いとゞ御かたみとも見奉れば、なほざりに過ぎこしほどもとりかへさまほしう、今は身のおほやけに暇なきものから、いかで疎からずつかへ奉る折もがなと、行末遠くおもひてしを、かかるはかなき便りききける心の、いくたびも只夢かとぞたどられ侍る。彼ののたまはせし空の雲雀も、雲

がくれ給ふべきにかなきさとしにやとさへ、のこるかたなく思ひつゞくるまゝに、

なき魂やたづねて雲になく雲雀

鳥獸魚蟲の掟

世上困窮につき、今般鳥獸並に蟲のともがらへ一統の簡畧申付候。其の外行作悪しき品相改め申渡し候。左の條々急度相守るべき事。

一蟬すゞしの羽織を著候事、過分の至りに候　向後は横麻一羽ぬきに仕替へ申すべき事。

一松蟲鈴蟲のともがら、籠のうちにて砂糖水を好み、奢りのさたに候。向後は野山の通り、露ばかりにて精出しなき申すべき事。

一蟻塔を組み候事、自身の功を以て建立いたし候儀はくるしからず候。寄進奉加等頼み候儀は一切いたすまじく候。且又熊野へまゐり候に、大勢連にて無益の事候　已後は二三人づゝひま次第に參り申すべき事。

一螢夜中火を燈し飛行の事、町々家込みの所は火のもと氣遣はしく候へば、遠慮いたすべく候。池川田地等の水邊はくるしからず候事。

一蜘蛛御領地の内においてみだりに網をはり、諸蟲を捕る事不屆の至りに候。以後は其の場所相應の

運上(うんじやう)さし上げ申すべき事。

但し蠅とりの蜘は運上に不及事。

一蜜蜂の小便高直(かうぢき)に賣り候まゝ、諸方の痛みにもなり候ものなり候、向後は世間一統に只其六升にせの積りを以て相はらひ申すべき事。

一蟷螂己が短慮の我慢にまかせ、斧を以て諸蟲を殺害いたし不屆千萬に候、向後はむね打たりとも一切いたすまじき事。

一金魚のともがら近年ことに華美に相なり候、向後金銀の飾り一切いたすまじく候。

但し赤塗に砂箔等まではくるしからず候。

一蛤春暖のころ己が快晴にほこり、樓閣を建て候事甚だ奢りのいたりに相きこえ候、向後は有德(うとく)の普請(ふしん)一切無用に候。もし居宅の柱損じ候とも根つぎいたし用ゐ申すべき事。

一蝙蝠晝は橋下(けうか)にかくれ居、夜々(よよ)人里村里へ徘徊いたし候こと其の意を得ず候。鳥獸のあらそひあるこれある節は、何方へも申しぬけ役義(やくぎ)等相つとめず候よし、不屆の至りに候、向後は立合ひの支配をうけ兩役屹度つとめ申すべき事。

一音喚(いんこ)鳥(どり)猥りに五色の錦繡を著いたし候事甚だ奢りに候。向後は何色にても一色に相改め、勿論首筋

等一切いたすまじき事。

一白烏白雀等此の間は相見え候。先年は頭ばかり白きさへ稀なる事に候ところ、近年猥りに相成り宜しからず候。以後皆て異相の體いたすまじき事。

一鼠嫁入の體ことぐしく相聞え候。二十日鼠に五升樽もたせ候こと過分の至りに候。以後は提錫にて相濟まし申すべく候。振舞の上、天井にて躍など催し騒がしく候。人々妨げに相ならず候樣、あき二階、緣の下等にても、盆の中躍り候ことくるしからず候。

一狸々つねに大酒を好み、亂舞の樂奢りの事に候。潯陽の江邊にて持出しぶるまひ向後一切無用たるべく候。據なき義にて會合これあり候とも、一種一獻に限るべく候。其の酒は其の最寄りうけ酒屋にて小買いたし申すべき事。

一狸ふぐりを四疊半にのばし、茶を立て人を迷はし、諸道具に金銀を費さしむる事よろしからず候。右の業相止め申すべく候。自分の樂しみとして、はら鼓打ち候事はくるしからず候。

一馬の太鼓の儀、往還問屋前を憚らず不禮の至りに候。畢竟これも榮耀の事に候へば、以後は相止め申すべく候。

但し厩にては苦しからず候へども、火の見時の太鼓にさし合ひ申さざる樣相愼み申すべき事。

一靑鬼赤鬼の襷、虎の皮の褌致すまじく候。當時病犬の皮澤山に候へば、早速仕替へ申すべく候。但し右は家持頭分の鬼の事に候。借屋住居仕の鬼どもは、古き桐油合羽の切れを腰に卷き用ゐ申すべき事。

右の條々かたく相守り申すべく候。忽に心得違ひこれあるやからこれあるにおいては、急度咎め申し付くべく候。品により蟻の町代組頭まで越度たるべく候。

寶曆九卯七月

玉壺軒記　應二蓑原楚巾老人之需一

何ぞ必ずしも深山の中蒿廬の下のみならんやと、むかし朝廷に俗を避けたるも、耳目はおのづから世につかはれもしつらん。こゝの市中に一つの隱家ありて、豆腐賣はよく知れども、とりあげ婆々はさらにしらず。つきぐしき住居のほか、九尺にたらぬ別室ことにおもしろう設け、前に泉石の目を娛しましむるも、今の主翁のたくみなせるにはあらず。もと住みし人の殘し置ける、月と花とは今も閑かにして、今は猶ふるびたり。人の多きを深山木にしてよみしも此の邊にや。伐木丁々たるは桶屋のたゝくなり。鳴子のからくとなるは菓子屋の背戶か。田家山莊の風流こゝに備はるのみならず、四方は城下の豐かなれば、朧夜の笛も雨の日の三味線も、近からぬ方に音なひて、我が身はよそに聞

き流せば、樵歌牧笛にもさびしさは劣るまじや。そもや主翁の身のうへ安きこと、仕官は若きに盡したれば、北山移文の悪口にもあふべからず。色は老いをしりて遠ざけ、酒は淵明が腸もなけれど、こればかりは誹諧師のをり／＼來りて戸棚をさがすは、積りの外なるべし。されば此の軒に玉壺の二字を題せられたるは、一大事のはんじ物にして、町代宿老も分別の頭を傾け、老功の道具屋もこの壺の目利は及ばずとや。實にも酒にあらず茶にあらず、まして鹽辛砂糖づけにもあらず。さては仙術に天地をちゞめし市中の壺かと、潛かに内證を聞き合はすれば、これはむつかしき古みにはあらで、たゞ此の亭の入口ははなはだ窄けれども、内に閑地の廣きかたち、尋常の壺に似たればいふなりとぞ。さてこそ所々の入札も、彼の上人の狛犬はまりとなりて、まことに分別は一生の損なりと、世にほださるる理窟人は、此の壺の底ぬけて、此の曉にも夢はさむべきにぞ。

松操庵記

かくいへる閑居は、塵境にありながら庭に千章の松陰ふかく、寂寞山中に彷彿たり。あるじはその閑にふけりて、もつはら煎茶に遊べりとぞ。そこに安置せる大悲閣あり。さぞな靈驗もあらたならめど、まづたゞ此の庭の景色を添ふるぞ尊かりける。さればしめぢが原の御うたも、こゝに五文字を吟ずれば、たゞ茶のめとこそ聞ゆなれ。あるじこゝに餘白を設けて、一句を請うてやまず。君見ずや、

かの御製に、枯れたる木にも花さかせんとは、もとよりの木々は歳寒の操に其の用なきに似たれども、よし一鼎の煎茶とても、その光にもれざらめやと、半掃庵の狂夫、筆にまかせて求めをふさぐ。

落葉にもたかば花香の誓ひあり

瓢長者傳

巴陵舍に一つの瓢あり、其のかたちをかしく曲れり。曲る物は全きとかや。久しく叟に仕へて許由が憎みをかうぶらず、鉢扣にも奪はれず、あるじも中流に舟を失はねど、常に愛して千金の價に思へりとぞ。むかし不之庵の翁は、これを褒稱して長者瓢の三字を銘せしより、頓て此の名を打ちかへしてみづから瓢長者とは名乘りけるなり。長者の自稱必ずしも其の故のみにもあらず。此の瓢に不思議ありて、酒を出す事綿々として止まらず。これ仙術にも幻術にもあらず、たゞ一婢に阮宣が杖を持たせて、一度市中に往來すれば、朝に尻の輕しとみえしも、忽然と夕に滿てり。かかれば宇治の物語にいへる、姥が米は盡くる期ありとも、此の酒は盡くる日あるべからず。むべなり長者の號ある事。あるじ我に一語を求む。卒爾に記して贈ることしかり。

名ゝ亭說

前に洋々たる長良川流れて、向ひには巍々たる稻葉山たてり。まことにあるじの素絃子なるかな。

亭に名付くるに魏洋の二字を贈る。山間の月、江上の風、取れども禁ぜず、用ゐて盡きざらんには、何ぞ必ずしも知音をとはん。

悼六々庵辭

桃は盛りに梅は散り過ぐる此の曉を世の見果てにして、六々庵のぬし身まかりぬ。當時蕉門に倭良の才、世こぞりて惜しむはさらなり。我には殊に二十年の推敲を問ひし親しみのみならず、かの又貞靜は季吟老人に道を學びて、其の世のすき人は名もよく知れりとぞ。我が祖父の野雙といひし、又同じ門下にかずまへられ、互に顏知れるほどはしらず。多く撰集には名をならべたれば、いでそよ笹の一よならぬ契りと、つねに其のことを言ひかはしつれば、猶一人の袖はぬらしけるなり。西行法師の願ひ足れる、其のきさらぎの花のかげに、望月の頃は過しぬれど、春は追手も西にふきて、彼の岸の船路も便りあしからじと、いざ見ぬ世のたのみに、今は此の別れを慰むばかりなり。

蝶鳥もいざ涅槃會の啼きついで

與自若庵文

ものの足る日も自若たり、物たらぬ日も自若たり。顏子が一瓢の花垣根に白くさきて、其のたのしみをあらためず。善哉馬山子、予に庵號もとむるに、自若の二字をおくりて、清貧の生涯を稱す。も

し千兩のこがねを拾はば、それもまた自若たらん。

夕がほにあすの米あり袋あり

名ノ亭辭

いざさらば、此の居をさして三富亭と呼ばん。とは何をかさすや。貝物のよき程なればなり。人或は三つの心を深めて衣食住と判ぜんにそれもよし。雪月花と數へんにも將羨まるべき住居なるべし。

花と見せ綿とも見せて雪の宿

長榮寺ノ碑

何にかも人は忍ばんなき跡の石にはかなき名はとゞむとも

辭世

病來辭世路　久ク隱ルニ舞津ノ農ニ　八十餘年ノ夢　驚ア回ス曉寺ノ鐘

きのふけふと思ひつゝ經し身の程ぞ中々ながき世はかぞへぬる

短夜やわれにはながきゆめ覺めぬ

鶉衣終

小革籠

横井也有

小革籠

下手談義の迹を追うて、單朴翁が書き集めたる、雜長持の落ち零れを、一つ拾ひ入れたる小革籠。これ鵜の眞似する鴉にはあらず。鴉は鴉の生質、ふつゝかなる聲に夜明けを啼いて、若しも目をさます一婦もあらば、心中の繪雙紙、盆おどりには似ざらんと

明和二年酉の春、尾州逢北の愛老對梅窓の下に自序す。

小革籠

五重の天守、雲に聳え、金の鯱、日に輝きて、朝鮮人さへ馬をとゞめ、日本一よか〳〵とゆびさして通りたる事、譃でない本國の繁昌、枇杷橋より宮まで、三里の間、市町軒をつらね、行程三箇の津に續きたる大都會、外にあらば、いうて見給へ。都といへど海なくして、生きた魚は見馴れず。江戸は水あしくして酒造らず。それらをも一つに兼ねたる自由、尤も外より取り集めて、京も江戸も、事は缺かねども、直に其の地に産するは風味格別、色をも香をも知る人はしるべし。第一米穀天下に勝れ、薪は堀川に入船を爭ひ、木曾の材木白鳥に山なし、鹽は南野に燒き出し、陶は瀬戸より運ぶ。川魚は西より集まり、山の物は東北より入る。かゝる目出たき城下に遊女町のなきは、玉に疵と浮氣人の殘念がれど、それ又有り難き國制、百何十年、終にそれなくて外に曠しきそれもなし。もとより押出して惡所と號すれば、佛なぶりの祖父婆々も後世善處とこそ願へ、惡處は願ふ所にあらず、また言ひたき自慢もあれど、さのみはと口をしめたる袋町筋に、大黑屋二俵衛とて、商賣は搗米や、一に俵積みかさねて、こゝに賑やかな見せ付き、三人の娘を持ちて、世渡りに賢く、明暮の碓ふむ足に、

味噌とやら、次第に内證も暖かになり、客は彌生の節句過ぎ、近き頃開けば、いかなる好事か、手も
との櫻を移し植ゑて、八事を春の山となしけるとかや。それ終に見ぬも殘人一年の氣進しにと、娘共
いざなひて、たま／＼の花見の趣向、これは米櫃から駒が出たと、供の調市も我を折るばかり、朝は
とうから出たれども、めづらしき道艸に時をうつし、山へ著いたは晝の時、こゝかしこと情を訪ぬれ
ば、まだ咲かぬもあり、散るもあり、盛りは前なる娘共ながら、往來の醉人の惡口聞くもおもしろし。
辨當はいかにも靜かなる所もやと、人の往かぬ脇道へ傳ひ入れば、竹一村の奥、世にすねたらしき庵
あり。門の明きたるを幸ひに内に入つて、樣子を見れば、主は五十餘り、こゝに凡けたる天窗のき、
僧でもなく、俗でもなく、夢借舍と額を懸けたる世を遁れし男とは見えたり。下女も調市もなき自炊
の暮端、きれいなる住居、一段の所と立入りて、こゝしばらく借りて休みたき由をいへば、こゝろよ
く挨拶して隨分靜かなる庵、そこに一間もあれば、ゆるりと辨當でもお使ひなされ、茶を焚き付けて
進らすべしとの言葉嬉しく、一間に上れば、床かけて八疊ばかり。床には白隱の達磨の自畫贊、巴靜
巴陵が評點の古卷ども、襖張に張り交ぜたるは、しやつも古き俳諧すきと見えたり。佛らしき物もな
ければ、海老かまぼこの辨當も遠慮なくひらきて、さゝえの酒、主にもすゝむればくつろぎて飲みか
はし、いかにも氣さくなる老人、娘どもをも愛想らしく、舉めなぐり、今名古屋はござ賑はしく、開

帳芝居も候はんに我等も一昨年ごろ藤塚町に、紫の由縁たづねて、ひさ〴〵にて城下の逗留、大須の芝居めづらしく見物いたせしに、山本京四郎が忠臣藏、夥しき大入り。げに人の性は善なりとや、忠臣義人の思ひ入れ、斯くまで人の悦ぶからは、見る者の心も改まり、己等が今まで主人への心入れ、頰々も眉もあといはれさうなる機を見て、小便にはづしたるが、かうではなかつたものをとて、奉公ぶりの變りたる者もあるべきに、其の氣付のなささうなるは淺ましき人情。しからば心にうつらぬかと思へば、おさん茂兵衞や、お染久松などの狂言見ては、おのが心に好きたることとて、其の眞似がしたうなり、主の内儀に鞘當てし、若い手代に寄り付きたがる、たゞ勸惡の端のみなれば、娘子達は芝居などは見ぬがよささうなものでござると、今世にはやらぬ料簡ないへば、中々二儀衞はこんな理窟いき、されば〳〵我等も御覽の通り、澤山な娘共もござれば、彼等がゆく末の行跡も親心の案じ過し、常々教訓らしき事は申せど、口重くして言ひ取り難く、喩へに引くべき故事故語もしらねば、心に思うた許りに、けふは幸ひの御教訓、娘共もおもしろさうに聞いてゐれば、猶も話して聞かせたまへとのぞめば、庵主も興に乘じ、そも〳〵近年は野にも山にも、密夫の沙汰ども聞くにうるさく、聞ふにうたてし。昔はたま〳〵密通して、其の事のあらはるれば、女はことに恥を知りて、或は身を投げ、首縊りたるためしどもありしを、近年は人中で、おならひつたる程にも思はず、頬かい拭うて居る有

様。薄皮な生質も、面の皮は随分厚し。これは世上に澤山なる故、ある書ひとおぼえたるなるべし。密夫の不届は勿論なれど、第一女に教へなく、心に守る性根なき故なり。總じて密夫は其の家へ親しき者のする事なれば、もしいひかけてはねつけられ、亭主にそれを告げられては、もう其の家へは面目なく、不通となる大事なれば、何程の徒者にても容易に他の女房に不義を言ひかくるものには非ず。先づ徐々と其の女の心立てを探りて、或は人の居らぬ時近く居寄り、淫れたる世間話をして見たり、怪我のふりにて手をさはらせ、膝をあたらせて試みるに、心の正しき女房なれば、人のなき時に側へ寄り付かず、たはれた話には眞顔になつて、手がさはれば驚き、膝があたれば逃げ退くやうなれば、こやつ心の正しきこはものぞと氣遣うて、もうそれまでにて止むるものなり。人の妻たる者は、此の身持が鏡でござる。それを自墮落なる女房なれば、たはれた話にけた〳〵とわらひ、手があたりても逃げず、膝がさはりても笑うて居るゆゑ、もうたわいなしのべら作ぞと呑み込んで、文をつけたり、不義を言ひかくるなり。徒男がこれを名付けて、通り者ぢやの、粋とやらのと嬉しがる。それは傾城や茶屋女の上の事、人の妻として通り者の粋のと見立てらるゝは大きなる恥。通り者とは悪性者の唐名と職源抄にもあるとやら、サァ悪性な内儀と見ると、旦那寺の和尚も、方便品をときかけ、出入りの醫者も、通氣散を盛つて見る、師匠の座頭も戀慕ながしを彈きかける、みな此方のそなへに

よるなり。それも又流石に惡事は惡事と知るゆゑ、我が娘をもつては此の子徒者になれとはおもはず、身持よかれと育つれども、何がお袋の杓子內心皇、定規がゆがんで居るから、ろくな娘にはならぬはず。子供々々とおもふうちに、いつか鄰の多葉粉屋とふみの取り遣りが始まりて、親の目をぬすむうちは跡がへらぬで氣はつかねど、銀をぬすんで驅落の段には、損をかけるやら、歎きをかけるやら、世上にあるを御覽なされ。まことに忠臣は孝子の門より出で、心中は斯うした家から出る事と、古人の言葉あたれるかな。我が身一つの事にあらず、一家の亂れとなりまする。世に翫ぶ淨瑠璃本をも御覽なされ、大經師昔曆、槍の權三かさね帷子など、むかしありたる密夫事を作るも、果ては御仕置の咎をあらはし、本の夫に斬られたる顯以此功德の體を見せたるは、見やうに依つては、此の樣なものも愼みになればなるべし。其の外ねから作り事の趣向を立てるには、或は姫君のいひ名づけある人を嫌ひ、外に男をこしらへる色事までは作れども、しかと夫にそうて居る女房の密夫する色事は大かた作らぬ事と見ゆる。狂言とても其の通り、これは作者の心持、末々までも崩れぬ樣にしたし。筑摩祭の鍋の數も、夫を定めぬ女の事、陸奧の錦木も主ある門にたてるではなし。又は男の身の上も、密夫は男の第一の愼みと心得て貰ひたし。ころび合ひの夫婦でも本妻に定めてからは、又他の人ともころび合はんとはゆめ〳〵思ひせらるまじ、その筋に愼みあれば輕き捧手振にても、人品格別に見ゆ

るそかし。又女の髮衣裳付き、何ほど端手にしても、こゝろさへ直しければくるしからずとはいひがたし。人の内心を察するは、第一其の形容から目利する。たとへば芝居を御覽あれ、顏に紅粉をぬり、大格子のひら袖著て、切岸からによつと出ると、これがたきやくの惡人形、わるもののごとは直に見ゆる。又鬘をそゝくらかし、片前下りに著物きて、ぬきれ手して出ると、はや阿房の道外方なりとは、子供もたちまちしる事なり。しかればかたちの端手なるは、徒者さぞあらんと、心ある人に見下されんは、まことに恥かしき事にあらずや。女は男とは違ひて、一度夫を定めてからは、殺されても他の男に通じぬ事は、人たる道の法にして、人と畜生との違ひ目はこれなり。むかし江戸に居て人のはなしに聞いたる事あり、實悔といふ貴き老僧のかたられしは、すべて祈禱といふものは、叶はぬはずのことをいのればしるしはなけれど、其の事、品によりてはなるほど祈禱はきく事なり。それにつきある女の祈禱を頼まれて、慥かにしるしあるべしとおもふに、すこしもきゝめなきをあやしくて、其の女の樣子を聞けば、夫ありながら、をり〳〵密夫の名に立ちし者なりと聞きて、さては人の祈禱をやめ、これを畜生にして祈禱しければ忽ち驗を得たり、淺ましき事と語られしとぞ。しかれば身持の畜生なれば、人の目にこそ人と見ゆれど、佛神の御手前にては、いつかはや畜類にしてありと見えたり。此の世からさへ斷くあれば後の世は猶思ひやるべし。猫は傾城の生まれ替りと、世の諺にもいは

れあり。哀れ今世には人と見えても、佛神の御目からは、また犬が參詣したよ、猫めはにやんの願ひに來たぞと、さぞ澤山に御覽あるべし。あさましともにが／＼しくとも申す許りなし。これほど澤山なる密夫なれども、絶えて久しく御刑罰なきは、みな／＼下にて事を治め、訴へて出る者なければ、上よりの鑿つての御詮議はなきゆゑなり。それゆゑ大罪なる事を知らぬ者も多かるべし。此の事御仕置のだんになつては、土器野に西に向つて、木の上に二人の立ち姿わすれを告ぐると、憎まれし鳥めが意趣がへし、鼈甲の櫛の跡に遠慮なくとまつて、なるかならぬは目元で知れると、まづ一番に目玉からしてやり、情なく露顯すれば、これほどの目にあふことぞといふ罪のおもきを合點したがよし。近年靜觀坊が下手談義、單朴翁が雛長持、輕口のなぐさみ本に仕立て、結構なる教訓あらゆる世間の人情を盡せしが、女子の訓へ未だこまやかならずと、日頃思ふ事いはでふくれし腹、けふはよき相手のましく／＼て、けつそりとへらしました。御聽聞の御腹(おなか)もさぞあらん。長物語に長い日もはや七ツさがり、庵には冷飯の貯へもなければ、せめても一つお茶なりともと立たんとすれば、二俵衞おさへて、あり難いお話、これ何よりの御馳走、娘共も退屈なく聞き入りたる顏付うれし。名古屋へ御出での節はかならず／＼御立ち寄り、女房共へも御逢ひ下され。けふの御禮を申させたし。畜生氣には案じなき生まれ付きを御目にかけう。おさらばさらばと暇をひして立ち出でける。こゝに哀れをとゞめしは

辨當持の調市(でっち)なり。勝手の隅に肘枕、寐入り程やつて起きたれど、まだいつ立たれさうにもなし。窗元見れば彼岸の、する殘りの艾のあるを幸ひに、旦那の草履の裏に、たばこ呑む顏で、一火見しらせたれど、響程もきかぬこそ道理なれ　さめやらぬ目に取り違へ、庵主が草履の裏を焦せし。庵主はなしの内に、もゝ尻して我等常々小便には堅いが、何としてやら、けふはしきりに立ちたうなりますとて、二三度も裏へ立ちしが、この灸穴のまちがひとは、後にぞおもひ知られたり。

小革籠附錄

葉だれ雪竹の寢るほど降つて、此のゆふぐれの寂しさ、友まつは雪の名のみならず、問ふ人もがなと心に祈るしるしありてか、神風や伊勢町にすむ、名も古市といふ、座頭の坊、御見舞と申し上ぐる聲めづらし。此の雪の日に何としてか人戀しきをりから、わたりに船、碇おろして話せとあれば、私もけふは大隙(おほひま)、只今家路へ歸るとて、御門前にて下駄をきらし、三助に鼻緒を頼んで御臺所まで立ち寄りし所、御伽にならば夜とともにおはなし申し上げうと、這奴(こいつ)も大臣の付いた顏付。幸ひ〳〵、さて珍らしい世間の沙汰もなきか。いや無きにしもあらず、まづは譃か眞かはいさ白壁町に黑猫が化けた

はなし。四五日まへに六旬の質屋が、鉢坊主にかたられた物語。造子町にて比丘尼が孕んだの、惠比須町で女を釣つたのと、たいもなき事に尾鰭をつけて、世上の話のうけ賣りは、こと〴〵く終りて、これまでなりや妙惠上人、さて頃日ある御屋敷へ娘御さまの御稽古に參りました。御亭主は江戸の留守、奥樣もお寂しさ、ねぐら鳥のまつ蟲のと、四ッ五ッ後さらへも濟みて、少しは退屈欠伸交りの、うつら〳〵と彈きかける、沖の石の折こそあれ、そのかたさは煮てもやいても、桑名町の伯父御樣御見まひといふより、座敷のおさわぎ、三味線も追つ取り置いて、それ御通り道の手盥とれ、あじろの籠は縁へ出せ、猫は部屋に繋いでおけ、役者評判をそこらへ隱せ、火燵に飯櫃は有つても大事ない物ごと、唯一人の下知に依つて、客ばかりの御客なれども、大きにえかへり、奥樣も自身に白柄の帚取り廻し、長刀ほどの御働き、私も掃き出さるゝ覺悟して、たばこ入れを探り廻し、半疊ばかり覺えずしされば、古市は此の間勝手へ入つて居てゆるりと休息あれとのこと、畏まつて御次へ立ち、蹴つまづいたはさいはひの、火鉢はこゝに須磨の浦、おはしたの明石にきせるを借り出し、鼻の先あぶりながら、近き後のふすまごしに、伯父御のおはなし面白う承りました。二十ばかりと十六七の御子息方並べての話しながらの御教訓。かねの灰吹き、カチン〳〵と三ッ四ッ鳴つたが、御談義の序開き。さて皆丈たにつき揃うて、よい若い者になられた、親父が江戸へ立つまへにわせて、子供も背丈が延

びました、能い方へも惡い方へも人品の定まる頃。留守に我儘が心もとない。隨分行跡に意見して、よい方へ仕入れて下されと、くれ〴〵頼まれた。きけば武藝も精が出る、學問もしやるげな、重疊重疊。若い者はひまながわるい。身が樂なと無分別が出て博奕を打つたり、娘を盜んで走るなどはいふにも及ばぬこと。よもやそれ程の阿房はせられまいが、三味線けいこにかゝつて居るの、淨瑠璃を習ふのと、それがかうじては歌舞伎狂言の眞似。女形に手が荒れては、おかるの役がつとまらぬと、槍や劒術をやめるやうになるはさたの限り。たゞし武藝も隨分上手になるはよいが、其の藝を用ゐる所と、用ゐぬ場を辨へるが肝要。士は義理を體として、業は體から遣ふ事、例へば熊坂の長範が大長刀を振り廻し、十人前の働きしても、其の事が道に叶はねば座頭の八人藝よりは劣り、嗣信が八島で能登殿にはかより手も負はせず、たつた一矢で射落されても、忠義に勇み、矢面をも恐れず、眞先に進んだる心の剛、忠義の守りを貫徹して、今も世に譽めてないか。義に叶ひ手柄もすれば鬼に鐵棒、大工に才槌、いはう樣もなけれど、勝負は時の運にもより、きられて死んでも義に叶はば譽なべし。首尾よう斬つても、不義ならば憎むべし。それをよい歳な衆も惡うすれば喧嘩が有つたの、人が斬られたのといふを聞いては、己が同流ぢやが、大袈裟によう斬つた、關遊信高は見事に斬るのと其の事の理非は棚へ打上げて、ねから吟味せず、理非はどうあれ、斬りさへすれば士のやうに覺えて、評

判ずるは大きに心得違ひ、それを若い衆が羨んでは、どうぞ斬る事がでかして、斬つて見たいと、鐔元くつろげて、斬りよささうな相手を心掛けて歩行くは、病犬よりは怖いもの、其の義か非かを辨へるは學問でおじやる。扠殺生の遊山のとて、つれを誘ふも、大勢はかならず御無用、つれとなるからは、いか樣のことが、其の連衆に出來ても、其の時は見捨てられず、乘りかけてはづすは非義なり、臆病なり。大勢の中には大酒醉狂の人や、一徹無法の仁もあるもの、必ず連れの多いを頼みに、つねよりも氣がさになつて、さしてもない事に人を打擲したり、女中の連れに無禮を仕掛けたりする事かありたがる、それに事が起つては、おもはぬ卷き添へにあうて名をうたはれたりしぬる事も、立退くことも有つて、一生を誤るは歎かはしいことぞ。事に臨みてはづすは臆病、事のできぬうちに、其の連れを逃れるは臆病ではさら／＼なく、愼みといふものぞ。此のさかひを合點めされ。又おの／＼の身分で全體は袴もかけて、供も一人はつれるが、本の格式なれども、常にそれもならぬ、雜服で無僕でも歩行かるゝであらう。その體を他から見ては、陪臣やら足輕やら、同じ者に見ゆる故、人がそれ程に道もよけず、無禮な事もあるもの、さては知行取りの諸士とは、見知らぬ故ぞと料簡し、輕いものにこちからも道を讓り、容に格式をやつした時は、心にも格式を引きさげて歩行けば、ふんだり斬つたりする程の無禮はないかと思はるゝ。其の證據には、陪臣や足輕とても魂のあるものもあれど、

彼等が終に無禮者とて斬つた沙汰も聞き及ばぬ。又供連れたり絹きらの人が、人を斬つたためしも大かたなし。これは其の分限の心であるゆゑ、こちから咎める事もなく、先も諸士と見ゆる人には、無禮もせぬなるべし。又四十も越えたる人も、あまり人を斬らぬものなり。歳のふけたる人とて、人がさはらぬはずもなけれど、りやうけん分別もあるゆゑならん。それとて腰ぬけの名もたたず。然ればやつして歩行く時は、たとへ鐺にあたつても、棒の先がさはつても麁相で當つたものなりと、すこしの事は、其の分にして恥辱にもなるべからず。若しも默つて通られぬ様ならば、たゞ咎めずに叱つて通るがよい、叱るといふは無禮者めとか、麁相な奴めとかいへばそれぎりで事がすむ。似た樣な事で、これやなぜ當つたと聲かけるは咎めるといふもの。わざとあたる道理もなければ、なぜと問はでも知れた事、あてたさに當てはしたと答へる者も有るべからず。そこで侘びて誤れば、一段の首尾なれども、先の奴も問はれては、言ひわけ心に、いやこちらからは當てはせぬといふから、もうむつかし、それならよいとは仕まはれず、とらへて天窗をはるか、蹴倒して踏むか、むねうちを喰はせるか、斬つて退けねば仕まひが付かず。一言の何作りでいかい骨ををらねばならぬ。或はせりふの定まりに、眼ぬけめといふ流もあるが、これらもいらぬ悪對なり。先の奴も麁相はそさうと懸けども、眼は抜けずに、二粒あるから、それが蟲に障つて、得手に口答へもするものぞ。さうなると斬らねばならぬは

士の習ひなり。同じくはそんな事の出來ぬ樣に、するが愼みなり。亂世戰場では、我に意趣もなく、別に過ちもなき者どもも、敵と名が付くと用捨はない、斬つて／＼きりまくる勿論の事なれど、かかる治世の平生には、一旦の怒り、さしてもない事に、ひと一人の命を我が手にかけて取るといふは不仁の至り、むごらしい事、親もあるべし、妻子もあるべし、その歎き、その難儀、それゆゑ乞食になる者もあるべければ、まことに不便の事にあらずや。上からの御目には、蠅一匹程の輕き者が、罪過を犯しても、隨分糺明詮議の上ならでは、死刑にはおこなはれず。されば殺さで叶はぬ道理に適つての上に斬りも殺しもすべし。ことに百姓や町人や中間とても、一本さいたは竹箆やら、赤いわしやら、無刀同然、無刀の者を相手にして、日比稽古に鞘ばなれの手の內、修練をもつて、斬つてすてるは大根切るも同然、いと易き事なれば、手柄にもなるべからず。輕き者は討ち捨て斬りどく、我が腹へは病の來ぬ、高をくゝつて、てんがうにも、斬つたかと下心をうたかはるゝも恥かし。これらをよく合點しやれ。かやうにいへば、若い衆の勇氣をくじくやうなれども、ゆめ／＼左樣にはあらず。勇氣は隨分養ひ立て、何ぞ御用に立たうとおもひ、義に於ては、弓箭八幡一寸もおくれじと、常心掛けるがまことの武士といふものぢやぞ。扨々長い物がたり、皆々退屈であらう。おと宅へも近日おじやれ長いはなしはやめて、饂飩でも振舞はう。皆々さらば／＼とて立たれたる伯父御のおしめし、いかさ

まじもな事らしう、感心が勝をくゞりましたと、あぢな所へ故事を入れて、富樓那にあらぬ古市が不辯舌ながら、聞きはつゐの噺もをかしく、反古のうらに書き留めぬ。理窟詰めに、たけき武士の心をもなぐさめ、目の見えぬ座頭もあはれと思はせたる、伯父はいかなる人にか、彼の白藏主の例もあれば、もしは尾でもなかつたか。おかへりに赤犬めが見送つてほえたは合點がまいらぬと、彌藏があやしみけるとぞ。

小革籠　終

風來六々部集 前篇 後篇

風來山人

風來六々部集序

時に遇はざれば孔子もお茶を引きたまひ、管仲が鞍替へも能い所へ乘り込めば、桓公の揚げ詰めと成つて遂に齊國のおいらんとなる。予が先師風來山人、宿昔青雲の梯を踏みはづして、天竺浪人と成りしより、滄浪の水滲に濁醪の世の醉ひをさまし、吐き散らしたる酒反吐は、醉うた浮世に廻さる丶、醉漬共に目を明かし、太平樂の卷物を、纔かの本に書きつゞめ、世に行はる丶もの六卷あり。頃日書林太平館、其の小冊にして讀み足らず、且およぼくこと數多きは、回覽するの煩はしきを厭ひ、六部を合して一卷となし、これを號けて風來六々部集と題す。全く殘口が無駄書きを六部せんとするには非ず、唯これ會刻の六部に御放施と

干時安永九年五月十八日、下界隱士天竺老人顚るま丶に筆を採る、

放屁論自序

屁てふ物のある故に、への字も何とやらをかしけれど、天に霹靂あり、神に幣帛あり、鷹に經緒有り、船に艗あり、草に女青あり、蟲に屁蟲あり、狐鼬鼠の最後屁は、一生懸命の敵を防ぐ。人として放らずんば、獸にだも如かざるべけんや。放つたり嗅いだり屁たる君子ありといへば、強ちにこれを賤しむべからず。今評判の撒屁漢、論より證據兩國橋に

風　來　山　人　誌

放屁論

人参呑んで縊る痴漢あれば、河豚汁喰うて長寿する男もあり。一度で孕む下女あれば、毎晩夜鷹買うて鼻の無事なる奴あり。大そうなれど嗚呼天歟命歟、又物の流行ると流行らざるも、時の仕合不仕合歟、又は趣向の善悪によるならんか。栢莚が氣どり、慶子が所作事、仲蔵が功者、金作が愛敬、廣治が調子、三五郎がしこなし、梅幸浪花をひしげば、富十東都に名を顕はし、川口の参詣浅草の群集、深川の角力、吉原の俄、沙洲は木挽町に河東節の根本を弘むれば、住太夫は葺屋町に義太夫節の骨髄を語る。或は機関、子供狂言、身ぶり声色辻談義、今にはじめぬお江戸の繁栄、其の品数へ尽しがたき中に、いつ頃より、両国橋の辺に放屁男出でたりとて、評議とりどり、噂々の風説なり。それつらつら惟みれば、人は小天地なれば、天地に雷あり人に屁あり、陰陽相激するの声にして、時に発し時に撒ることそ持ちまへなれ。いかなれば彼の男、昔よりいひ傳へし階子屁・数珠屁はいふもさらなり、曲すががき三番叟、三ツ地七草祇園囃、犬の吠へ声鶏の声、花火の響きは両国を欺き、水車の音は淀川に擬す。道成寺、菊慈童、はうた、めりやす、伊勢音頭、一中半中豊後節、土佐文弥

半太夫、外記河東大薩摩、義太夫節の長きことも、忠臣藏矢口の渡は堂々次第、一段づゝ三絃淨瑠璃に合はせ、比類なき名人出でたりと、聞くよりも見ぬことは噺にならず、いざ行きて見はやとて、二三輩打連れて横山町より兩國橋の廣小路、橋を渡らずして右へ行けば、昔語花咲男と、ことぐしく幟を立て、僧俗男女押し合ひへし合ふ中より、先づ看板を見れば、あやしの男尻おつたてたる後に、薄墨に隈取りて、彼の道成寺三番叟なんど、數多の品を一所に寄せて書きたることは、夢を畫く筆意に似たれば、此の沙汰知らぬ田舍者の、若し來かゝりて見るならば、尻から夢を見るとや疑はんと、つぶやきながら木戸をはひれば、上に紅白の水引ひきわたし、彼の放屁漢は囃方とともに小高き所に坐す。その爲人中肉にして色白く、三ヶ月形の撥鬢奴、縹の單に緋縮緬の襦袢、目元爽かにして怖氣なく、囃に合はせ先づ最初が目出度三番叟、トッパヒョロ〳〵、ピッ〳〵〳〵と拍子よく、次が鷄東天紅をブ、ブゥーブゥと撒り分け、其の跡が水車、ブゥ〳〵〳〵と放りながら、己が體を車返り、さながら車の水勢に逍り、汲んではうつす風情あり。サア入り替り〳〵と、打出しの太鼓と共に立ち出で、朋友の許にたち寄り、放屁男を見たりといへば、一座興つてこれを論ず。或は藥を用ゐて放ると いひ、または仕掛の有るならんと、衆議さらに一決せず。予衆人に告げていはく、諸子いふことなかれ。放屁藥あることは我嘗てこれを知る。大坂千種屋清右衛門といへる者、をかしき藥を賣るが好き

にて、喧嘩下し屁ひり藥等の看板を出す。其の藥方も聞き得たれど、それは只屁の出づるのみにて、斯樣の曲氣を放る事を聞かず。又仕掛ならんとの疑ひ尤もに似たれども、竹田の舞臺に事替り、四方正面のやりばなし、しかも不埓の取りしまり、何れに仕掛の有りとも見えず。數萬の人の目に暴し、仕掛の見えぬ程なれば、たとへ仕掛有りとても、眞にひるも同然なり。衆人眞に放るといはゞ、其の糟を食らひ其の泥を濁らして放ると思うて見るが可し。扨つくゞゝと案ずれば、かく世智辛き世の中に、人の錢をせしめんと、千變萬化に思案して、新しいことを工めども、十が十鮮の形、昨日新しきも今日は古く、固より古きは猶古し。此の放屁男許りは噺には有りと雖も、親り見る事は、我が日本神武天皇元年より此の年安永三年に至りて、二千四百三十六年の星霜を經るといへども、舊記にも見えず、いひ傳へにもなし。我が日本のみならず、唐土朝鮮を始め、天竺阿蘭陀諸の國々にもあるまじ。於戲思ひ付きたり能く放つたりと、譽むれば一座皆感心す。遙か末座より聲を掛け、先生の論甚だ非なり。余申すべきこと有りと出づるを見れば、頃日田舍より來りたる石部金吉郎といへる侍なり。以ての外の顏色にて、扨々苦々しきことを承るものかな。それ芝居見せものの類ひ、公より御免あるは、人を和するの術にして、君臣父子夫婦兄弟朋友の道をあかし、譬へば大星由良介が仕打は忠臣の鑑と成り、梅が枝が無間の鐘は女の操をすゝむるなり。見せものの異樣なるも、親の罪が子に

報ひ、狩人の手は蹄と成り、惡の報ひは針の先、必ず人々油斷すなとの教へなるに、近年はたゞ錢まうけのみに掛り、斯樣の所へ心を用ゐず、剩へ屁ひり男の見せ物、言語道斷のことなり。夫れ屁は人中にて撒るものにあらず。放るまじき座敷にて、若し誤つてとりはづせば、武士は腹を切る程恥とす。傳へ聞く、品川にて何とかいへる女、客の前にてとりはづせしが、其の座に小田原町の李堂、堺町の巳なんど居合はせて笑ひけるに、彼の女忍び兼ね、一間へ入りて自害せんとするを、傍輩の女が見付け、樣々に諫むれども、一座がかの通り者なれば、惡口にいひふらされ、世上の沙汰に成るなれば、どうも活きては居られぬとのせりふ、彼の二人も詞を盡し、此のこと決していふまじとひたすらにたのむれども、イヤ〳〵今こそ左樣にうけがひ給へ、跡にていひ給はんは必定、活きて恥をさらさんよりは、死なせてたび給へとかきくどき、とゞまる氣色あらざれば、二人もすべき方なくて、此の事口外せまじき由證文を書いて、漸う自害をとゞめしとかや。可咲しきことの樣なれど、女が自害と覺悟せしは、情を商ふ身の上にて、恥を知りて命を捨てんといひ、又いき過ぎの通り者も惻隱の心ありて、おほつけなくも證文書いて人の命を助けしは、又艶しき事ならずや。かく人の恥とする事を、大道端に看板を掛け、衆人の目にさらす事、無躾千萬此の上なし。見せるものは錢まうけ、見るが鈍漢なりと思ふに、先生雷同し給ふこと、見限り果てたることなり。盜泉の水勝母の地、皆其の名をさ

へ悪むなり。非禮聞く事なかれ非禮見ることなかれとは聖人の教へなりと、青筋ばつてのいひぶん。予答へて曰く、子が辭甚だ是なり。さりながらいまだ道の大なることを知らず。孔子は童謠をも捨てず、我亦屁ひりを取ること論あり。夫れ天地の間に有るもの、皆自ら貴賤上下の品あり。其の中に至り極まりて下品とするもの、大小便に止まる。賤しき譬喩を漢にては糞土といひ、日本にては屎の如しと。其の糞小便のきたなきも、皆五穀の肥となりて萬民を養ふ。只屁のみ、撒つた者暫時の腹中快き許りにて、無益無能の長物なり。上天の事は音もなく香もなしといふに引替へ、音あれども太鼓鼓の如く聞くべきものにあらず、匂ひあれども伽羅麝香の如く用ゐるべき能なし。却つて人を臭がらせ、韮蒜握り屁と口の端にかゝり、空より出でて空に消え、肥にさへならざれば微塵用に立つ事なし。志道軒が腐儒をさして屁つぴり儒者といひ初めしも、尤も千萬の詞なり。斯くばかり天地の間に無用のものと成り果てて、何の用にも立たざるものを、こやつめが思ひ付きにて、種々に案じさまざまに撒りわけ、評判の大入り、小芝居なんどは續くべき勢ひならず。富三一人が大當りは菊之丞が餘光も有り、屁には固より餘光もなく惚人もなく贔屓もなし。實に生正味むき出しの眞劍勝負、二寸に足らぬ屁眼にて、諸の小芝居を一まくりに撒り潰すことと、皆屁威光とは此のことにて、地口でいへば屁柄者なり。されば諸の音曲者、いふべき筈の口、語るべき筈の咽を以て、師匠に隨ひ口傳を

請け、高給金はほしがれども、聲のよしあしは生まれ付、月夜烏や五位鷺のがあ〳〵と鳴くが如く、古き節の口眞似はすれども、微塵も文句に意なく、序破急開合節はかせの鹽梅を知らざれば、新淨瑠璃の文句を殺し、面々家業の衰微に及ぶ。然るに此の屁ひり男は、自身の工夫許りにて、師匠なければ口傳もなし。物いはぬ屁分るまじき屁にて、開合呼吸の拍子を覺え、五音十二律自ら備はり、其の品々を撒り分ける事、下手淨瑠璃の口よりも、屁の氣取が拔羣よし、奇とやいはん妙とやいはん。誠に屁道開基の祖師なり。但し音曲のみに限らず、近年の下手糞共、學者は唐の反古に縛られ、詩文章を好む人は、韓柳盛唐の鉋屑を拾ひ集めて柱と心得、歌人は居ながら飯粒が足の裏にひばり付き、醫者は古法家後世家と、陰辨慶の議論はすれども、治する病も療し得ず、流行風の皆殺し。誹諧の宗匠顔は芭蕉其角が涎を舐り、茶人の人柄風流めくも、利休宗旦が糞を嘗める。其の餘諸藝皆衰へ、己が工夫才覺なければ、古人のしふるしたることさへも、古人の足本へとゞかざるは、心を用ゐざるが故なり。しかるに此の放屁漢、今まで用ゐぬ臀を以て、古人も撒らぬ曲屁をひり出し、一天下に名を顯はす。陳平が曰く、我をして、天下に宰たらしめば又此の肉の如けんと。我も亦謂へらく、若し賢き人ありて此の屁の如く工夫をこらし、天下の人を救ひ給はば、其の功大いならん。心を用ゐて修行すれば、屁さへも猶かくの如し。嗚呼濟世に志す人、或は諸藝を學ぶ人、一心に務むれば、天下に

鳴らんこと屁よりも亦甚し。我は彼の屁の音を借りて、自暴自棄未熟不出精の人々の睡りを醒さん爲なりといふも又理窟臭し。予が論屁の如しといはばいへ、我も亦屁ともおもはず。

跋

漢(から)にては放屁(はうひ)といひ、上方(かみがた)にては屁をこくといひ、關東(くわんとう)にてはひるといひ、女中は都(すべ)ておならといふ。其の語は異(こと)なれども、鳴ると臭(くさ)きは同じことなり。その音に三等あり、ブッと鳴るもの上品(じやうひん)にして其の形圓(かたちまる)く、ブウと鳴るもの中品にして其の形飯櫃形(いびつなり)なり。スーとすかすもの下品にて細長(ほそなが)くして少(すこ)しひらたし。これ等は皆素人(しろうと)も常に撒(ひ)る所なり。彼の放屁男(ひりをとこ)の如く、奇々妙々に至(いた)りては、放(ひ)らざる音(おと)なく備(そな)はらざる形なし。抑(そもそも)いかなる故ぞと聞(き)けば、彼が母常に芋(いも)を好みけるが、或夜(あるよ)の夢に火吹竹(ふきだけ)を呑むと見て懷胎(くわいたい)し、鳳屁元年(はうひぐわんねん)へのえ鼬鼠(いたち)の歳、今を春邊(はるべ)と梅匂ふ頃誕生(たんじやう)せしが、成人(せいじん)に隨(したが)ひて段々(だんだん)功(こう)を屁ひり男、今江戸中の大評判(おほひやうばん)、屁は身を助(たす)けるとはこれならんか。讃岐の行脚無一坊、神田の寓居に筆を採る。

放屁論後編自序

倭學先生曰く、夜はおよるの上略にて、晝とは諸人目を覺せば小便をたれ屁を撒る故、夜晝の倭訓起れり。或は鯨淺き所に寢入りたる内、潮引きて洲となる時は、大いに困りて無術竄を撒る、故に潮の引くをも干るといふ。此の道を好ませ給ふ御神を、蛭子といひえびすといふ。えびすはへびすの間違ひにて、あいうえおはひふへほの通韻より誤り來れり。又日本武尊東夷征伐の時、夷ども、草に火をかけ、大勢一度に尻を卷りて撒りければ、焰尊の方へ吹き靡き、御身に火掛らんとする時、御劍をぬいて投げ付け給へば、夷の臀をしたゝかに切られ八方へ逃げし故、逃ぐることをへきえきといひ始め、(へきえきとは屁消益なり。屁消えて尊の爲に益あるをいふなり。)十束の御劍を改めて臭薙の寶劍と號けたまふ。臭き物を薙ぎちらせしといふ詞なり。太政入道淸盛は火の病を煩ひ、初めは居風呂桶に水を入れて體を浸せば、卽時に湯となる故、後は大いなる池を掘り、賀茂川の水を堰き入れ這入られけるに、水火激して頻りに屁を撒りしにより、屁池の大將と異名せられ、記せし記錄を屁池物語といふ。後世平家と書くは當字なり。また兵衛佐頼朝卿伊豆の國へ左遷の内、貧乏にて常に芋飯を喰ひ、好んで放屁をされける故、其の所をひるが小島と號けたり。野にて放るを野邊といひ、山に

て撒るを山邊といふ。古今集の歌に、

霞立つ春の山尻は遠けれどふく春風は花の香ぞする

海邊といひ磯邊といひ、澤邊の螢は尻に縁あり。奥州に一の戸二の戸、古戸の字をへと訓ぜしも、家あれば人あり、人あれば撒る故なりと、倭訓の講釋聞取法問、出まかせに放り出して、此の書の序とはなりけらしブッツ。

風來山人誌

世の諺に、剪選するも浪人の習ひと、御所櫻の伊勢の三郎、風俗太平記の日本左衛門なんどと、淨瑠璃本にある時は、さて手強う侍らしく聞ゆれども、それは血臭い時節のことにて、かく治まれる時世に、そんなけびらひが有るや否や、とんだ目にあふ故に、今時の浪人は紙子羽織に破編笠、御子孫も御繁昌、猶いつまでか活き延びるほど恥の上ぬり。但し浪人のみにあらず。春さきの華臍魚と目出たき御代の侍は、段々に直が下り、工農商の三民に養はれる素餐の樣におもはれ、まさかの時は侍でなければ世は治まらず、日本は小國でも、唐高麗から指もささせぬは皆武德なりといふことを、思ひ出す者もなきは、これぞ誠に太平の世の御恩澤、井を鑿りて飲み耕して食らふ、提灯かりた禮はいへども、月日に禮はいはざるに等し。段々太平の化にあまえ、世上一統金銀にのみ目が付く故、先祖はお馬の先に進み、義は金鐵よりも堅く、命は塵芥よりも輕しと、踏み止まつて高名を顯はしたる家柄の子孫でも、又君を諫め萬民を教へ、國家の礎を堅うせんと心を碎く忠臣でも、算盤の桁には合はず、見一無頭早急の金にならねば、二一天作言語道斷、六沈が二進、牢隱が決ちん、穴のせまい仕

送り用人に乘り越されし、さてはお家に由緒ある數代出入の町人でも、不如意になれば安くあしらひ、昨日今日まで手代奉公、年季野郎の成上りでも、金さへ持てば追從輕薄、御堅勝御安全、樣の字までをひねくり廻して六ケしく認むるは、地獄の沙汰も金次第、金が敵の世の中。されば歌にも、

錢敲き金がないゆゑ錢たゝく金があるなら錢はたゝかじ

又それに付けても金のほしさよといへる下の句は、いづれの歌にも連屬すると卑劣千萬に覺え、富士郎が鐘入も金の供養といふ故に、昔し大覺の計策にもと、味な所へ目のつく世の中。此の聞える方にて段々と不如意に付き、一家中鑓の稽古を止めにして、鈴の稽古が初まりしとの噂、よく／＼聞けば、鑓といふ字は金篇に遣ふといふ字、鈴は金篇に令めるといふ字なれば、遣ふ事を止めにして只々金を令めよと、あて字ながらも主命は默止し難し。いかなる名人達人でも、金なき衆生は度しがたしと、佛もあちらむくと見えたり。いつの比にか有りけん、江戸神田の邊に、貧家袋内といへる見る影もなき瘦浪人あり。抑々彼が系圖といッぱ、忝くも天兒屋根命の苗裔、大織冠鎌足公の御子藤原淡海公、讚州志度の浦にて海士人と野合し、かの面向不背の玉を採り得給ふ時、一日を六十四文で人足に傭はれ、浦人喜び引き上げたりけりと謠にも作られ、戲場でしても、名もなきはい／＼使者のする浦人の嫡流なり。母夢に澀團扇を呑むと見て懷胎し、此の者を產みしより、貧乏神を氏神と仰ぎ、七

福神と喧嘩して、故郷を去つて江戸の住居。されば諸藝貳百石。無藝高なしとやいへども、此の男何一ツ覺えたる藝もなく、又無藝にもあらざれば、どちら足らずのちくらが洋、磯にもよらず浪にもつかず、流れ渡りの瓢簞で、鯰の蒲燒鰻鱺魚を欺き、見識は吉原の天水桶よりも高く、智恵は品川の雪隱よりも深しと、こけおどしの駄味噌を、千人に一人は實かと聞き込んで、教化的の報謝米で召抱へうと相談すれば、イヤ／＼、女は美悪となく宮に入つて妬まれ、士は賢不肖となく朝に入つて悪まる。比喩を烏で申さうなら、孔雀錦鷄鸚哥の類ひ、高金出して求べども、外飾のよいばかりで、鳥も捕らず時も司らず、葱、綿牛蒡の相手にもならず、又烏の男ぶりは悪しけれども、朝は早く起きて人をおこし、吉凶を能く知りて豫め告げ知らせば、忝いといふべきを、烏啼きが悪いの、いま／＼しい烏めのと悪まるゝを見るにつけ、良薬は口に苦く、出る杭は打たるゝ習ひ。されども御無理御尤も、君君たらず、臣臣たらず、八幡太郎冠者、寛活の虎見る様に、己が性根は微塵もなく、風次第で首を振つて一生を過ぎさんは、折角親の産み付けた睾丸を無にする道理。浪人の心易さは、一銭のぶつかけ一瓢の小半酒、何の産なきかはりには、主人といふ覊もなく、知行といふ飯粒が足の裏にはつ付かず、行きたき所を驅けめぐり、否な所は茶にして仕舞ふ。せめては一生我が體を自由にするがまうけなり。斯く隙なるを幸ひに、種々の工夫をめぐらして、何卒日本の金銀を唐阿蘭陀へひつたくられぬ

一ツの助けにもなられかしと、思ふもいらざる佐平次にて、せめては持志の國恩を報ずるといふもしやおくごし。其の位にあらざれば其の政を謀らず、身の程知らぬ大呆と、己も知つては居るでござれど、蓼食ふ蟲も好き〳〵と生まれ付きたる不物好き。ある塊にかたまつて、橡の下の力持ち、むだ骨だらけの其の中に、ゑれきてるせゑりていといへる、人の體より火を出し病を治する器を作り出せり。抑此の器は西洋の人、雷の理を以て考へ、一旦工夫は付けれども、其の身の生涯には事成らず、三代を經て成就しけるといへり。阿蘭陀人といへども知る者は至つて少なく、固より朝鮮唐天竺の人は夢にも知らず。況んや日本開闢以來創めて出來たる事なれば、高貴のかた〳〵を初めとして、見ん事を願ふ者夥し。或日さる屋敷の醫官石倉新五左衞門といへる人來りて、觀ること良久しうして曰く、天地人の三才に通達するを儒といふ。我天下の書に眼をさらし、理を以て推す時は、森羅萬象明らかならざる事有るべからずと思ひしが、今これを見て始めて驚く。それ鐵と石、檜柏と檜柏相激するか、又は日輪の水精硝子を照らし、或は鏡に映ずる時は火を生じ、時に臨んでは日からも出で摺からも出で、扨又貧なる家内へは、火の降る事も有りとは聞けども、かかることとは思ひもよらず。いかなる理にて火出づるや、後學の爲承らんと。其の時主人打點頭き、書を讀む許りを學問と思ひ、紙上の空論を以て格物窮理と思ふより間違ひも出で來るなり。さらば火の出る根元をお目にかけんと、

取り出す小冊に、昔語花咲男放屁論と題號せり。主人笑つて申しけるは、抑此の放屁といつは、四年以前兩國橋の邊にて花咲男と號け、見せものにて近年の大當り、諸の小戲場を撒り潰せし趣は、此の放屁論に詳らかなり。今年又采女が原に出て、三國福平と名乘る。扨此の者の身の上を尋ぬるに、父は大和の國吉野の郷の狩人佐次兵衞といへる者なりしが、年來多くの猪猿を殺せし罪亡ぼしとや思ひけん、近所の者兩人といひ合はせ、四國順禮に出でけるに、彼の殺生の報ひにや、伊豫の國に到りて、佐次兵衞生きながら猿と成つて、林の中へ逃げ入りければ、二人の連れは惘れ果て、是非なく國に歸りけり。今童謠に、一つ長屋の佐次兵衞殿、四國をめぐりて猿となるんの、二人の連衆は歸れども、お猿の身なれば置いて來たんのとは此の事因縁なり。さて兩人は國に歸り、倅福平に此の譯を語れば、一方ならぬ歎きなれども、なすべきやうもあらされば、せめては父が現世未來畜生道の苦患を免るゝためにとて、一切經を供養せんとおもひたち、鳥が啼く東路を、錢がなく／＼たどり著き、本錢の入らぬ金まうけを工夫して、いつとなく屁を比類なき、親孝行の奇特にや、兩國橋の屁撒りと江戸中の大評判。夫れよりも浪花津に咲くや此の花咲男、今を春屁と咲くや此の、花の都に匂ひ渡り、再び江戸へ歸り咲き、三國福平と名乘りて、采女が原の春霞、立つ子這ふ子も知らぬ者なし。扨佐次兵衞と連れになり、四國を廻りし兩人も、目前かかる不思議を見、且は福平が志を感じ、佐次

兵衛が追善供養、共に力を合はさんため、空也上人の鉢扣き、采女堂より思ひ付き、歌念佛を趣向して、六字を節になりませ、うまいだ、うまい陀佛うまいだより様々の替へ唱歌。扨當世の立者は、仲藏幸四郎三五郎、また半道のきき者は、時に大谷友右衛門、竈屋市川團十郎は、木場についての親父分、其の癖年は若いだ。若い陀佛若い陀と賣り歩行き、大評判に預りしも、みな福平が孝行のなすところ、古今にまれなる昆柄者と語りければ、新左衛門一圓に呑み込まず、不思議の事を承るものかな、いかにも彼の撒鑽漢、先年兩國にては流行りしかど、此の度采女が原へ出でたれども、其の後は聲もなく臭もなく、今は世間に沙汰もなし。當時諸方にて評判の品々は、飛んだ靈寶珍らしき物、十月の胎内十甲の車、既に兩頭あれば猿に曲馬あり、鐵銀杏が辯說には、蘇秦張儀も跣足で逃げ、友世綱世が力には、巴、坂額千鈞持つて禮に來る。源水が獨樂は魂ありて動くが如く、鶴市が聲色はその人そこに在るが如し。新之助は一身に骨なく、どう突請身は五臟金鐵にや有らん。大魚出づれば大蛇骨出で、硝子細工牽絲傀儡、古きを以て新しく、田舍道者の目を悦ばしめ、鳥娘は名にてくるめ、人魚は人をちやかすなり。子供角觝の取組は、河津股野が俤をうつし、鶉鶏相撲の勝負には、鶉の季布子拳を握る。馬の立合狗の藝、仕込に馴れ教へに順ふ。これを思へば人並に人別帳には付きながら、畜生に劣りたる無藝の者は、心にて己が恥を思ふべし。あるが中にも險竿の大當り、小櫻松江が笑顔

には、弘法大師筆を捨て、韓退之湛を流す。無三飛箭藏が體は、龍骨車のめぐるがごとく、中飛檣之水が一本綱は、五體を天へ釣るかとうたがふ。これ等をして珍らしともいふべけれど、何ぞや古き屁撒りを、ことん〳〵しき長物語、拙者屁の講釋を聞きには參らず。彼のえれきてるより火の出づる道理を聞かんとこそ望みしに、以ての外の屁あしらひ。さては我らを屁の如く思ひたまふやと、眞黑になつて立腹す。其の時錢內詞を和げ、えれきてるより火の出づる道理を聞かんとお尋ねあれども、一天四海引きくるめての大論にて、一朝一夕に論じがたし。能く近く譬へを取つて教へん爲、扨こそ屁論に及びたり。夫れ佛法に地水火風空を五輪といへども、空と風とは體用にて、つまる所は四大なり。此の水火土氣は天地の間に滿ち〳〵たる故、固より人の體中に備へたれば、四の物皆體中より出づるなり。日々の食物糞と成つて五穀の肥となる。これ人間の體より土の出づるにあらずや。また小便となり汗と成るは體中水を出すなり。上に在つては呼吸、下に在つては屁と號く。これ體中氣の出づるなり。あるが中にも、火といへるが萬物造花の座元にて、その本を太陽と號け、その末を火と號く。日と火の倭訓同じきも天地自然の道理なり。されば神に天照大神、佛に大日如來、金剛界とは地上をさし、胎藏界とは地下をさす。十萬億土無量壽佛、反照自己本來空、祕密も悟道も引きくるめて、此の日輪ましまさざれば、土は皆本體の石、水は皆本體の氷なる故、草木を生ずる事なく、魚鼈を育すべ

き道なし。役者あつても座元なければ、芝居の出来ざるに異ならず。かかる道理を知る時は、糞と成るも汗となるも、屁の出づるも火の出づるも、同じ體の小天地、固より怪しむに足らざれども、理にくらき輩は、屁より出づる火は常となる故怪しまず、えれきてるより出づる火は、飯綱幻術の様に心得、又は闇操手つま人形と一ッ事に覺え、慰みに呼んで見る方々も多き中に、天文曆數酸いも甘いも呑み込んだ親玉をはじめ、理に通達せるからは、問ふに替ありて答ふるにはずみあり。人の分量智恵の程を知らざる人は、僅かの藝をいひ立てに日過ぎする浪人者や、日待月待に召さるゝ雜劇の藝者同様に心得たるぞ苦々し。凡そ天地の間に火程尊き物なく、その火の道理を目前に諭す故、えれきてる程尊き器なし。又吾が日本、神武帝より今年まで二千四百三十九年、死んで生まれて入り替る人、其の數かぞへ盡されず。其の大勢の人間の知らざることを拵へんと、産を破り祿を捨て、工夫を凝らし金銀を費し、工み出せるもの、此のえれきてるのみにあらず、これまで倭産になき産物を見出せるも亦少なからず。世間の爲に骨を折れば、世上で山師と譏れども、鼠捕る猫は爪をかくさず、我よりおとなしく、人物臭き面な奴に、却つて山師はいくらもあり。人は藝を以て山の足代とし、我は山に似たるを以て藝の助けとす。顯はるゝと隱るゝとは、譬へばあん餅とあんころ餅の赤小豆の如し。まことと金をほしく思うて、これまでの精力を一圖に金銀許りに凝りて、一生鼹鼠見る様な親父と成り、生爪は

もかれても握つたる金は放さず。徒然草にある通り、假にも無常を觀ずべからず。人は悪しかれ我善かれ、義理も絲瓜も瓢簞も、沈香も焚かず屁も撒らず、上手名人といふは扠置き、下手といはるゝ藝もなく、食うて屎して寢て起きて、死んだ所で殘る物は骨と證文ばかりなりといふ様なわからず知らず、彌出るなら無間の鐘の蛭は扠置き、蝮蛇や龍盤魚を糞でこゝしやうに煮て食はせても食ふ氣になつてためる時は、盲でさへも出來る金、出來ざる事もあるまじく、近い例はえれきてるを兩國か淺草の見せ物に出す時は、押へ付けたる大金、豪猪綿羊なんどの例もありとす、むる者も多けれど、陰陽の理を盡せし物を、勿體なしと合點せず。されば曾子は飴を見て老を養はん事を思ひ、盜跖は錠を明けん事を思ふ。それ相應の料簡、我は綿羊を見て、日本にて羅紗らせいたごろふくれんしよんとろめんへるへとあんさるせ毛氈類の毛織を織らせ、外國の渡りを待たず用に給せんと心を碎き、人は手短に錢をせしめんと計る。いかに物いはぬ畜類ぢやとて、毛を織りて國家の益にもなる物を、らしやめんなんど、あてじまいな名をつけ、繪具で體を塗りちらし、引きずり廻して恥をさらす、綿羊の手前も氣の毒なり。世にある人は錢をほしがり、錢なき者は意地をはり、渇しても盜泉の水を飲まず、道理で南瓜が唐茄にて、いらざる工夫に金銀を費す故に錢内なり。夫れつら／＼惟みれば、骨を折つて織らるゝは酒買うて尻切らるゝ、古今無雙の大だはけ、屁の中落とはこれならん。けふよりえれき

しるをへれきてると名をかへ、我も三國福平が弟子となり、故郷をかたどりて四國猿平と改名し、屁撒藝の仲間へ入り、芋連中と參會して、尻の穴のあらん限り撒り習はばやと存ずるなり。思い者の身知らず、以來御用捨下さるべしと、屁撒つて後の尻すぼめ、まじめになつていひければ、新五左衛門あきれた顔にて、兎角これは古方家に下させずば、此の癇癖はなほるまいと、つぶやきながら歸ると見て、眠らぬ夢は覺めにけり。

放屁論後篇　終

追加

去る申の歳、菅原櫛といへるを工み出し世に行はれける時、好人より狂歌を賜ひしその返歌、並に序を爰にしるす。

用るれば鼠の子も上尖竿をおぼえ、用ゐざれば虎の皮の褌も地獄の古著店に釣るさるとは、との昔の唐人の寐語。眞實で呵らるゝより、座なりに譽めらるゝが快きは人情なれば、虚言と追從輕薄をいはねば、人當世を知らぬといふ。抑此の當世といふもの、今ばかり有るにあらず。祝鮀が佞有つて宋朝が美あらずんば、難いかな今の世に免れん事あれば、昔より有り來りの當世にして、八百藏が助六は栢筵が助六なれども、人今更の樣に心得るも片腹いたし。我も此の當世を知らざるにはあらねども、萬人の盲より一人有眼の人を思うて、假にも追從輕薄をいはざれば、時にあはぬは持前なり。されども人の生まれし冥加の爲、國恩を報ぜん事を思うて心を盡せば、世人稱して山師といふ。予戲れて曰く、智慧ある者、智慧なき者を譏るには、馬鹿といひ、たはけと呼ぶ、あはうといひ、べら坊といへども、智慧なき者智慧あるものを譏るには、其の詞を用ゐる事能はず、只山師々々と譏るより外なし。又造化の理を知らんが爲、産物に心を盡せば、人我を本草者と號け、草澤醫人の下細工

人の様に心得、己れに賢るのもだ書に、淨瑠璃や小說が當れば、近松門左衛門自笑其磧が類と心得、火浣布えれきてるの奇物を工めば、竹田近江や藤助と十把ひとからげの思ひをなして、變化龍の如きことを知らず。我は只及ばずながら日本の益をなさんことを思ふのみ。或は適大諸侯の爲に謀りしことどもも、國家の大益なきにしもあらざれども、狡兎死して良狗烹られ、高鳥盡きて良弓藏る、細工貧乏人買、嗚呼薄いかな我が耳垂珠と悟りを開き、露命をつなぐ營みに、當時賤しき內職にて、其の糟をくらひ其の錢をせしめんと思ひ付きしを、早くも卯雲木室君に尻尾を見出され、おくり賜はる狂歌に、

　醉うて來て小間物見せのお手際は仕出しの櫛もはやる筈なり

實にや己を知らざるに屈して、己を知るに伸びるとなんいへば、此の御答へ申さんとて、我儘八百を書きちらす。固より己を知らざる人に見せるにはあらず。嵐音八が曰く、アヽ氣が違うたさうな。

　かかる時何と千里のこまものや伯樂もなし小づかひもなし

風來山人誌

跋

風來山人放屁論後編をひり出して、予をして尻へに跋せしむ。按ずるに放屁字典に曰く、屁ブブウ、の反し、音ブゥ、去聲に發して音スゥ。論語に所謂、舞雩に風して詠じて歸らんとは、それこれこれをいふか。此の書や、始めには狂言綺語のすかし屁を放り、中は萬物の理を掌に握り屁の極意をこき、末又合うて一ッ屁の尻をすぼむ。讀者その臭きを遂はば、高きにのぼる階梯屁り、助たらんと云爾。

葛西士民姑射杜老糞船の中に書す

自序

それ本覺の佛は形なく、法性の神に姿なしといへる如く、眞の通といふものは、面に通をぶら付かさず、能くない嬌態をもす、いいと讃め、左までなきことにても有り難いと育つる故、人の照れるといふ事なく、立引を専らとする心より、金がなくては娼妓は買はぬがまし、聲花をせぬくらゐなら、大門をば潛らぬが能しと、天の岩戸に閉ぢ籠れば、世は常不變にお先眞暗、わいだめもなき廓に來つて、神や末社の糟吹共、神集ひに寄り合つて魂膽咄の意氣ちよんを、聞いて居るのも無益しく、嬢口翁が口眞似に、勃然としたる悪口は、世上の通を堅と見て、達磨大師のはりこゐを、おきやァがれ小法師といはばいへ、頭を張つて構はぬ而已。

下界隱士　天竺老人　誌

力婦傳

都鳥は吾妻の隅田川に名高く、すみだ川諸白は淺草の名物、眞先の狐は稲荷の社をはなれて、汐入神明の地内にお出で〳〵と呼ばはる。元柳橋に柳ありて、柳橋に柳のなきたぐひ、何とも其の意得ぬ事に存ずると、苦に病んだ所が大の無駄なり。柳の絲の、かかる事は打遣りておくべきことにて、諸事柳の名あり。名にしおふ兩國の涼みも、大橋の新地にけおとされ、千ふね百ふね、皆三ツ叉を臨んで走れば、岡涼みの千萬人は各石垣にそうて進む。銀燈萬樹のはなの穴もふすぶる許りの燈の光、陸は安藝の宮島の本店かと疑ひ、川は天滿祭のふり賣りかと怪しむ。硝子細工は逆さにつるされども美しく、波みたての氷水ぬるけれども涼し。醒ヶ井の雉子燒夜の鶴市、千を思ふ親仁も目に涎を流す。憐むべしお跡眞闇にして、間部河岸鍋より黑く、元矢の倉素より暗し。此の時に當りてされば〳〵は闇に居て唱ふとも、見咎むる者も有るべからず。境萱屋の兩町も、今年は五月雨と共に垂れこめて曾我祭の沙汰もなく、上州休みに引續けていとど寂寞たる樣なり。それが中に樂屋新道の賑はひ、いかなる事かと見れば、大坂下りの女ちからわざ、とにふと染めぬきの大幟、木戸口のやつきもつさ、大入とは云

ふちをたゝき、くる／＼車に楢の曲持、つく／″＼感ずる臼のれんまん、うつゝ、ぬるかな装盤のかねあひ、響める聲は高けれど、安いは木戸錢二十四銅、四人合はせて百さんの雷一度に落つるが如くなり。抑此のともよは、此の度大阪表よりお江戸見物のために罷り下りし相頼み、各々様へお慰みの爲御覽に入れ奉ります、といふは表向きの口上にして、實は大阪の者にあらず、北陸道の北の方、越後の國のかたほとりに、山岡が末葉にもあらず、酒呑童子の親類にもあらず、上杉家の臣下にもあらず、弘智法印の檀家にもあらず、高田近郷の産まれなり。其の容貌美にして膚は狗背の綿の如く、ほちや／＼やは／＼としかも雪國の白きを見せ、皮薄なることのし縮みの如く、湯上りの姿は鹽引の色を帶びたり。越後の國の大坊主も、首のありたけ延ばしつべき風情、更に力者のあらくれたるさまにあらず。故ありて江都に來り、大根畠に住すること又故あり。

凡そ力婦は、日本にては巴板額を親玉として、清水上野が其以下、近江のおかね奴の小萬に至るまで、其の數あまたありといへども、目前の事に非ざれば、くらべ物にはなり難し。男子の力量といへども、昔の上に形容し、狂言綺語にまなびて信しからぬこと多し。故人栢筵、五郎の役にて、せり出しにて、家を片手にさし上げて出でたり。訥子これを諫めて曰く、「時宗もとより大力の上なれども、家をさし上ぐるを片手わざにせんや、重ねては兩手にて指し上げ給へかし。」と。栢筵答へて曰く、「非

なり。時宗いかに大力なりとも、いかんぞ家をさし上ぐる事を得んや。これをさし上ぐるは則ち狂言戯藝の情なり。これ剛強の甚しきを見するのみにて尤も虚なり。されば兩手にてさし上げて強く見せんよりも、片手にてさし上げたらんは殊に強く見ゆべきなり。其の實を正さば、兩手にてもさし上ぐべからず。」と云ひしを、訥子深く感じけるとぞ。況んや唐土の萬八卷の書籍に力婦の沙汰ありとも、それはそれに片付けて置かんものなり。詩鄭風簡兮篇に、有レ力如レ虎とは、大磯の虎が事を言ひて、大磯の虎は漢宮三千第一の美人、夫狹手彦が不老不死の藥を取りに日本へ歸る時、李白王維等と共に明州の津に別れを惜しみ、きこえませぬぞ狹手彦さんと追ひかけしに、股野五郎景久が、山の上より投げかけし重さ三萬三千三百三十三貫目の大石を請け留め、目より高くさし上げたり。深川の三井先生筆を揮つて、三圍の繪馬堂に此の額有り、石はあづまの森の内に有り、則ちとらが石これなり。夫狹手彦此の勢ひに恐れ凝り堅まつて石と成る、今淺草の地内に久米の平内これなりなどと、書いて置かれても、見ぬ事は目が利かれず。されば水滸傳に一丈青扈三娘あれども、ともよが心には豆腐小半挺とも思ふべからず。故に盡く書を信ぜば書なきに如かずとは、諸事杓子定規にするなとの教へ、されば迚て無性やたらにはり込みをくはせて、書物を片つぶしにもなりがたし。傾城に誠なしといへばとて、どうぞ節句に來ておくんなんし、外に賴む所もありいせんと切なるは、詐りのないことなる

べし。詐り多きは見せ物の看板、かんばんにいつはりのないと云ふが則ち詐りなるに、此の女も亦力は實に往古の巴にも賢りつべし。民部省に主税寮あり、仁王様に力紙あり、腕に覺えは力瘤、鷹の爪は力鉀、馬具に力革あれば刑具に萬力あり、祇園に一力、伍長に與力、山伏に強力、苗字に高力、ゴー、リキコ、ヽカリキまでは聞きしが、女にかかる大力ある事を聞かず。奇なるかな妙なるかな。俠たる彼の淫行黨が、大根畠に豆の萌がござると唄ひしは、此の地開闢の比の口調にして、大根ばたけ豆藏を蒔くと武玉川にも見えたり。時なるかな、今此の畠を探して力もちといふ餅を得しは、末代力者の鏡餅、くもらぬ御代のしるしとて、田に出來る餅米を畑へ植ゑても熟しつべく、畑へ作る餅粟を田へ蒔いても實りつべし。此の時に當つて、木に餅の生るといふ譬へも餘り旨過ぎた事とも聞えず、畠の中といへども、田螺をも取り得べく、赤貝をも取りつべし。環を提げて木場に赴き、提籠をかたげて榑河岸を過ぐるも、木に據つて魚を求むるともこじつけてん。孟軻は泰山を挾んで北海を超ゆると、力業にも及ばぬこと錠の下りたたとへに引けば、貫之は力をも入れずして天地を動かすと、敷島の道廣く溫和に說きかけし、此の國のきまりなるべし。さればよみ歌の上には自然と其の姿のあらはるゝものから、小町の歌を評しては、つよからぬは女の歌なればなるべしとも書いて、三十一文字のことくさにも嫋々たる風情は見ゆるを、婦人としてかかる力者に生まれたるは何ぞや。

私かに按ずるに、扶桑武を專らに尊む事、鎌倉の右幕下、總追捕使の職に補せられしより以來、天下盡く武威に伏して今猶かくの如し。治世に亂を忘れざるは專ら武道の本意なるに、今時の息子株、安樂に居て安樂に厭きたらぬ事をいかん。こゝに江都の自由自在なる事、試みに其の一二を擧げば、雁鴨のあてがひ賣り、冬瓜南瓜の切り賣りはまだなことにて、短尺梶の葉の裁ち賣りあれば、鳶凧の詩合賣り有り、鯨うなりのふり賣りあれば、鐘の出來合ひあり。風鈴そば切り夜發そば、田樂師燒やき肴、一ぷく一錢の荷ひ賣り、結納の突きかけ買ひ、葬式の損料貸し、切りぬきの地紙には古骨を世にいだし、張りぬきの似面はむだ骨とも聞えず、よかれあしかれ捨てるものなく、何でもかでも十九文と、何闇からぬお江戸の繁昌、イヨ秀鶴有りがたいと、めつたなしやうに有りがたがるかと思へば、かかる御代に生まれ出でしを有りがたいとは思はず、夏は晝寢して居る座敷まで屋根船が著かぬとの小言を云ひ出し、冬は火燵の前へ芝居があるいて來ればよいとの我がまゝ、たゞいきなことをのみ尊み、欣々通々として、鮫鞘のお太刀は煙管より輕く、嚢の嵌入は七ツ道具を兼ねておもし。弓馬合戰たしなむ事は武士の道めづらしからずと、今川狀の眞中を一寸許り切り拔いて己が行ひとし、只新らしい事好み、象牙の撥の胝は手綱の胝より高く、弓手の爪の絲道は韘の弦道より深し。役者の身振を學ばずんば、いかんぞ奢りの腹をへらさんと、怠懈放侈の心より、親仁の尻は祖父樣より重く、

息子又爺様より弱し。只通を以て義とし口を以て勇とす。弓矢神かかるのら者の多きを歎き給ひ、武士は天が下の神物なり。すべからく静め謐まる事を掌るべし。それに何ぞ今の若きに武芸をも詰止めて、天の岩倉に居つゞけし、伊豆の千別に千話文の手跡さへ拙く、遣手若い者への祝儀は紙撚ひにはらひくさり、わくらの置き蔵にひどい工面をしてには、耳にあるノヽの意見を聞いて心に此の頃の不孝を思はず。こゝに於て八百萬の神たち神議りにはかり給ひ、中にも大力持命、とらよが體にやどり給ひ、世上のなまけ男に見せしめ給ひて、勇気に引き入れ給ふか。何にもせよとらよが力量、ハテいぶかしやナア。

傳に曰く、登毛與越の後州高田城邊の農夫の女なり。父が收むるの田六十畝あり。（六十畝は大畝なり十八百歩をいふ）家極めて貧し。今年黄金十片の爲に、六反の田を失ふに及ぶ。晨昏歎息す。登毛與父が悲歎を見るに忍びず、某家の主を憑んで我が身を十片金にうつて、二月十日東都の新吉原に至り、柳家某が半物となり、六年奉仕の約をなせり。一日登毛與、四斗酒一樽を酒局に納るゝに、一毬を捧ぐるが如く、微歌して常の如し。衆皆驚いて初めて力あることを知りぬ。猶試みるに其の力あげて量るべからず。こゝに於て主人五年の給仕を免し、期年にして故郷に歸らしめんと約し、且其の力を千萬人に見せしめんことを求む。登毛與期にして歸郷するの歡びに堪へず、辱めを千萬人に忍んで遂に此の業を爲

す、其の孝あること見つべし。誰か是れを憐まざるべけんや。

力婦傳終

風來六々部集

跋

先に風來先生、はなござ男の爲に放屁論を戲述して、其の屁海内に響き、其の文は流の川柱に水車の廻るが如し。書林は錢を積み上げて、階下屁の鈍きを知る。此の屁の臭味を忘れ兼ねて、又ところぶが事を著せよと我が門人滑稽浪を責む。彼は屁の可笑しき物をとらへて天下の才子に擬らせ、是れは力業の可笑しからぬ者を以て、井の内の蛙に物眞似せよとは、屁つひり儒者にあらばこそ、肺の力もない者に、さりとは〳〵と云ひながら、其の後に書して書肆浮龍軒に與ふ。　[illegible]

蛇蛻青大通

大通は人の心を種として、萬の言の葉とぞなれりける。花に行く無駄人、月に通ふ遍綖も、いづれか通を知らざりける。夫れ大通といふ文字は唐の俗語にて、大いに人情に通じたるを稱したる字の通りの詞なり。近頃世上一般の通語と成りて、晝三買ひの意氣人より、切店そゝりの俠客にいたるまで、假にも通を唱へざるはなし。彼の通に差別あり、極眞の大通は上方の達衆に等しく、くつきり立ちし水際は、水道の水の名物男、意氣地の立引男氣は、くだ／＼言ふも緒環なり。夫れより次へ落ちて來て、木葉通といふ溝飛びありて、彼の大通の大びらに錢金遣ふを鈍漢と譏り、熱鐵のぐひ飲みに高慢の脂をさげ、我慢己惚の鼻高く、四ッ手の翼の自在を得ざれば、はつち屁端折の情を用ゐる、羽折は長きを厭はず、身幅はひろきを嫌はず、流行物の仕出しに追はれて、正面の兜巾に額を痛め、常に意氣過ぎの梢に架を高くして、江戸節の横噤へをじぶくるを天狗倒しと唱へしが、近頃號けて横倒しといふ、投言語も跡を詰め、笑話の受賣に、稍々口拍子が廻つて來ると、おれは餘程通だわえと、我と我が手に印可を許し、人の話の腰折つてお先眞暗に洒落散らすを、心ある人々はさげすん

で若衆(こわかい)なれば、口はおれが口には嘴(はし)突く者こそ無(な)ッかりけると、仕たり顔する野漢(やかん)共(ども)、智恵は三文番頭(たうとう)の袋より狭く、高慢の高きこと前引(まへびき)の日躍(にちえう)ほどこ退(の)けなり。彼(か)の殘口(ざんこう)箱が小言(こごと)に曰く、未熟者(みじゆくしや)が己(おのれ)熟せりと甘味(うまみ)を付(つ)けれど、根からの美味ならねば、何所(どこ)ぞに否(いや)なる味の出るは腐(くさ)りのついたるなり。腐り付けば萬(よろづ)の物も惡(あ)し。臭味(くさみ)の付く族(たぐひ)に眞物(まもの)はなしと知るべし。味噌は味噌なから味噌臭(く)さきはわるく、粋(すい)も粋くさきは粋ならぬ物ぞとは、誠に古今の通言(つうげん)なり。かたの如き鈍漢(どんかん)から出盡した樂の魂膽(こんたん)ばなしを、得手の道へ引ッかけて、とかく女郎を買(か)ふなら魂膽(こんたん)が第一にて、一文なりとも引きずと出ねば、手に入つたといふではないと、手前勝手な横(よこ)ぞつぽう、馬鹿の上盛(うはもり)、頓聞(のろま)の下値(したね)へ、能(よ)く積(つも)ッても見るがよし。女郎に無心(むしん)を言ふとても、折(をり)と時とがある物なり。それをきよとした通達(つうだつ)でも、遣部(やりて)の金には詰るならひ、遣つた上の金詰(かねづま)り、切(せつ)ッ詰(つま)りしまの角に、膝(ひざ)とも談合(だんかふ)男らしく、頬(つら)を捨ての無心には、女郎の心は知らねども、其の苦は誰(たれ)がさすことぞと、氣の毒餘(あま)ればいとほしく、人の義(さし)りも顧(かへり)ず、髀(はだか)にも成り年(ねん)をも入れ、身を粉に碎く黄金心中(こがねしんぢう)、保人(かうにん)の手前借人(てまへかりにん)の名聞(みやうもん)、氣の切れた女郎ぢやと立つ浮名(うきな)には客が殖(ふ)え、客が殖(ふ)えれば金もでき、首長(くびたけ)はまる借金の、淵(ふち)は瀬となる陰德陽報(いんとくやうほう)、遣ふ丈(だけ)の金も遣はず、何が嫌やら寢(ね)がつてやら、まだ氣も知れぬ傾城(けいせい)に、かう一雙(きんさう)から魂膽(こんたん)とは、穴の翁(おきな)の盆暗共(ぼんくらども)、適(たま/\)登樓(きとう)の後朝(きぬ/\)には、先(ま)づ友達(ともだち)の所(とこ)へ驅(か)け込(こ)み、態(わざ)と睡(ねむ)たい顔付にて、マア聞いてくんなさ

エ、斯ういやァどうか味噌を上ける様だが、つがもねエ有り難てエ句が有りサ。どうしたもんかおへきりと畫が付くよ。ナァ斯うだ、夕ァ少切ッ懸のある傾を張りやした、所で牀が納まると、サァつがもねエ銘句を吐きやす。そかァ又恐ろしい櫻田が狂言に高麗やが魂膽で、二十五點といふ所をヅドンヅドンと當てた所が、先刻承知の山櫻、裏ァ身揚りでゐる筈だが、隙ならお前にもおいばねエか、連れの一人や二人ァ口鉾で働かせる、何んでも強敵に引きやんせんのソレ、ほん突き出しだが、とりたおやねエかえと、繻絆で面をふりながら、脊反らしした自慢貌、結束の夜にいて見れば、女郎の方でもおかりなく、夕ァ貰ふ筈の客人が來いせんから、今夜はどうともしておくんなんし、今度はきつと働きいす、ホンニ滲々お氣の毒でごさんすと、どうしいせうの二ッ三ッもやらかして、明け透けらしく見せかくれば、今度は／＼と思ふより、木乃伊取るとて蜜人己が手に蹈返して、罠に懸る白癡共、さりとては世に多し。これより段々惡業が入り、金のとれぬ腹いせに、無理にせこめて髮を切らせ、墨彫らせて嬉しがり、坊主にも俗にもござれ／＼の起請文、又は盗人請文の當名は誰でもお望み次第、指の先の厚皮でも削がせれば早手の物と悦ぶは、さりとは狭き料簡ならずや。近松翁が傾城請狀に、文には嘘を書きならひ、牀にて人を燒きならひ、ねむたくとも居眠らず、泣きともなくとも後朝の、別れに泣かせ申すべし。起請誓紙に身の内の、血をば惜しませ申すまじと、書きたる如く、思ひこまる

らせぬといふ文もなく、替りませうと書く誓文もなきものにて、臨機應變御緣次第、小股くゞりの書人と見れば、主に苦勞は懸けいせんと、夫れ相應の調子に合はせ、所詮いうても錢にはならず、二度來たなら二度だけ客帳の駄目を差し、賣れの込むのが得なりと、十把ひとからげに見縊られたる心、恥かしきことにあらずや。大通の元〆文魚先生が茶飲み話に曰く、今の浮世の女郎買に、まだしもに見ゆる物は新吾左の遊びなり。買ひ切つた上からは、傾城の五倫五體は我が物と決定し、假令名染の客にもせよ、貰ひ引きを聞き入れず、少と牀が不勤か又は牀廻りが惡いと、忘八を呼べと切刀廻し、あたり構はずがなり出せば、心の内では親の敵のやうに思ひながらも、何でも一夜の檀那なれば、お許しなんしと誤つて小言いはるゝ右流左きに、まんぢりともせず勤めても、商賣冥利かうする筈と、客といふ字を眞向に差翳し、腹一杯に權威をふるへど、定式の入目の外格別の金が入るでもなし。よた聞いた風の通どもが、書人とか魂膽師とか名を付けて、諸事控へ目に立ち廻り、面白くさえて居る最中に、件の如き客が來て、差合ならば貰うて出せと、言譯聞かずだゝけ散らせば、まだ貰ひにも來ぬ先に、爰が通だと氣を通し、ありやァ手前が客人か、つがもねェとんちきだの、したがあんな奴が爲に成る、おりやァえエから勤めたがいい、あんな横倒しやァ座敷をあけろといふだらう、日を明かせねェやうにこけエ入れたがえエと、うぬが方から引けを取り、氣を通す心遣ひ、誠に粹が身を喰ふ

とは、是れらが事を言ふなるべし。此の調子にてばんじけち／＼と立ち廻るを、色仕立と號くる由。どこの仕立やが仕立てるか、去りとはきう屈な仕立様、我等が様な肥滿つた者には、尻がへばつて著悪しと、笑はれしも理なり。斯くの如く引けを取るも、一體の下心は女郎の内股へこび付いて、一度ぶりの勤めなりとも、引きみんたんにせんと欲する、むさき根性より起る事なり。蓼くふ蟲も好き好き故、一概には言はれねど、左程身錢がだしともなくば、たかで遊びに行かぬがよし。一度ぶりの勤めさへ上面の出來ぬごくだうなら、假令氣のある女郎でも、あいそを盡かすは知れた事なり。行き著くまでは遣つて見ぬ不甲斐なき魂にては、傾城は扨置き、何事に寄らず行くものではなし。又席狹き遍鋋か、傾城に誠なしと、四角な卵を引事にて無面目に言ひ破れど、女郎の子が女郎にもならねば、傾城の種ぢやとて禿の黄卷が有るでもなし。我は親兄弟の爲に沈みし戀の淵、一頭の朱唇萬客嘗むと聯ねしごとく、入り替り引き替り來る客か、惚れられまいと思ふもなければ、鍾愛可愛の情を述べ、惚れた惚れぬの臺詞にもげつぷをして居る矢先なれば、かつたに惚れぬも道理なり。其の又惚れぬ傾城を手に入れようと思ふには、誠の一字を以てすべし。鹽冶判官高貞の家士大星由良之介が、嘘から出た誠でなければ末が遂けぬといへるごとく、魂膽狐のすへとの皮、釣り留めんとする狩人は、度々の罠に金銀を費し、果ては直化實の化、實が嘘にて嘘が實、心の誠がまことに顯はれ、身の油の

揚鼠で、眞の甘味を喰はせたら、どの樣な白藏主でも、しん實の尾先を顯はし、手に入る段に成つたなら、懐春の處女や、男ほしい侍女の、都合切つた浮氣より、垢拔のした色事なるべし。併しかやうに申せばとて、親の讓りの家を潰し、居屋敷を打込んで、深はまりはいらぬもの。只女郎は遊び物、遊君遊女の遊の字は、遊ぶといふ文字なれば、一歩ならば一分だけ、二朱ならば南鐐だけ、客といふ字の位を落さず、買といふ字を心に込め、悪穴を言はず、悪洒落を決してせず、見えをいはず嘘をつかず、男氣を專らとして、座敷の數を重ぬる時は、需めずして通となり、態とならざる仕打の中に、おのづと出づる面白みには、傾城も思ひ付き世間でも有り難がるべし。よしやそれは千差萬別、女郎殺しの魂膽にて、お手に入るのも有るべけれど、高が耽嘏ない女郎の若角、拾兩遣つて五兩は引けず、假令五兩引けた所が、心盡しがいくらの事。なれども是れも得手勝手、吉原でかいた恥が、家の瑕瑾に成るでもなく、女郎に不實をしたればとて、一家親類に見放されもせぬものなれば、詰る所が理窟もいらず、何して見るも樂しみなれば、差徒に千年似た目に千年、まつとの皮に千年の、ぬらりくらりの劫を歴て、青大通の殼を脱け、浮世くるめて丸飲みの、蟒蛇となり給へと、叢探しの穴賢穴賢。

序

やまと歌は、たけき心をも和げ、鬼神をも感ぜしむ。男女の中をも和ぐるは歌なり。されば犢鼻褌もて〻らといへば歌にもよまれ、下紐といへば雲の上人の口號ともなりなんかし。ものは言ひ樣言ひ品にて、仇し仇浪寄せては返る波、淺妻船のあさましやといへど、さも麗しく聞ゆとなん。取りもなほさず今の世に船饅頭ともてはやす、此の道の蒼妓、肥滿々々の阿千代てふもの、新飛てふ白拍子に見えて、生活の不祥を說き破り、浮世は不和が替玉となりて、女閭の寓居に目下見し兩瓦三舍の荒唐を口かたましくも言ひたるを、慣熟の奴が供待の聲高に語りしを、予物陰より立聞きしが、言葉のはなはひくしといへども、見識は水道尻の火の見より高く、彼の泥郎が得難にしたる蹈婦傳の趣にも、をさ〳〵劣るまじと、筆にまかせてかいつけ、太平樂の卷物と號す。希はくは四方の諸子、鼻の孔の行き届かざる所は、嫉深い奴が脫漏たることも多からんと、萬事茶にして見給へかしと云爾。

天竺老人戲書

名物の饅頭は皆様御存じのはちや〳〵

川端の昔噺は普賢菩薩の御縁起

柳腰の取形は江都妓女のしやな〳〵

縮緬の法布は尻喰觀音の御戸帳

阿千代之傳

泯江の源に觴を浮ぶべし、楚に入るに及んでは、舟船にあらずんば渡るべからずと、毛唐人の陳紛漢も三十一文字にやはらぐれば、

よし野川その水上をたづぬればこけの岩間の雫なりけり

此の歌の心をやはらぐれば、水のながれと人の身は、よるべ定めぬ川竹の、あるが中にも取り分けて、浮きふししげき浮れ舟、苫もる名代かくれなき、ほちやく\の阿千代といふ船饅頭の品者あり。おちよだアなア、こうふつていきねエ、なアこうとよびかける、鼻聲もどうやらあぢに可愛らしく、これに打込む折介は、心の竹光うち割つて、うつゝをぬかし誠をつくし、そこの手合の俠客は、手ぬぐひのあひそめてより、日和下駄の鼻を落さうと、まゝよてんぽうかは財布、そこを掃つて通ひつめ、永久ばしのこまよせにて、磨墨のまつくろに成つて、いきつきあらき戰ひに、われぞ先陣われ一陣と、梶原が逆櫓にひとしく、舟軍のかけ引にて、喧嘩口論たえざれば、所の番人もし置きがたく、

六尺棒にておつ挑ふ。是れ辻ばんから棒が出たと童謠にいふ所なり。頃しも三伏の夏の夜なりしが、お江戸にその名立花の新飛といふ藝者あり。客人は四季庵から仲町へはしけて仕舞ひ、相仕の小まきと舟にてもどる其のをりから、新飛 ナニト小まきさん、この比名代のおちよとやらいふ船まんぢうがはなしの種に船へ呼んで、なぶつて見ようぢやァあるまいか」といへば、小まき ホンニこれはいい所だねェ」とまはしにたのめば心得て、たれだく／＼と聞くうちに、おちよが舟にたゞねあたり、酒のあひてに此の船へと、のりうつらせて見た所が、むきみしぼりのもめんゆかたに、黑もめんの手拭を、端とはしとでむすび合はせ、帶と見せるは仕似のいでたち、やき付のかんざしで頭をかきながら、おくめんなく座になほれば、新飛取りあへず「おちよさんとはおまへのことかえ」佛と人神と人、世間をちつともひろくするは、わたしらがつとめのならひ、これをえんに心やすくしてくださんせなかういへばどうやら團子らしいが、あつたら器量をもちながら、さりとはいやしいおまへの商賣」とてもつとめを仕なさるなら、せめて女閭の河岸へなりとも出なさつたか、よからうではあるまいか」おしたてならぬめかたち、あつはれお職といつても、たれか點の打手もあるまい。もしまた藝者になる氣なら、わたしが妹分にしてひき廻して上げやんせう。ちつとはなへ聲のぬける所は、新内のふし落しにうつて付けでござんせう。すべてわたしらが商賣は、うはきなくて玉のこしとやら、身はいやし

うても能い業のまへなどへ出られて、面白いことやをかしいことを見るばかりはつとめの一德。又さもしい事ながら、うまいものは年中くひあき、これもみんな藝のおかげ。ナント今から船まんぢうをやめにして、藝者をして見る氣はないかえ。」と、むだ半分にいひければ、千代くつ／＼とふき出し、「ホンニ夏の蟲がこほりをわらふとは、おまへがたのことぢやわいな。ふなまんぢう／＼とおしさげていはんすけれど、ふなまんぢうの尊いこと、あらましつまんではなしやせう。後學のために聞いておきねエなア。こう唐の詩經といふ本に、漢に遊女ありといふことがある、漢とはひろい川の事、遊女といふはうかれめのこと、川中のうかれ女なら、船まんぢうではあるまいか。さうすりやアわしらが商賣は、人のをしへのもととする、五經のなかにも出てゐるぞえ。また朗詠にも、秋の水いまだ遊女の珮を鳴らさずと、四角な字で書いてあれば、きつとしたけいづぢやアあるめえか。定家卿うかれめに寄する御うたにも、

心かよふゆききのふねのながめまでさしてかばかりものは思はじ

これ川中にふねをうかべて、客をまつ風情をよめり。すべて遊女といふ文字をうかれめとよみ、うき川竹のながれといひ、越後の國ではうきみといひ、またひや水となづくるは、ひつふかいといふことなり。大坂の新まちでは、太夫に付くを引舟といひ、はじめて客にあひそめるを〇〇〇〇〇〇〇〇

〇〇、はじめて勤めにいづる者を新造となづくるは、あらたにつくりし舟になぞらへて、〇〇〇〇〇〇〇といふことなり。なじみを深き淺きといひ、ゐつゞけをうつゝをぬかすといひ、心がはりを水息いといふ。なんでも女郎の身のうへは、たいてい水によそへてあれば、ナント遊女のはじまりは、船まんぢうではあるまいか。そのかみはあさづま船といひたりしを、またおうぶねとなづくること、つく〴〵とかんがふるに、むかし西行法師にまみえ給ふ江口の君、三十二相のすがたをあらはし、普賢ぼさつとあらはれ給ひ、のりたる御ふねは白き象となりたるとかや。象はもとよりまんぢうやくもの故、うかれめの乘る舟をまんぢうぶねとぞなづけける。また一切を三十二相にきはめしは、三十二相のそれをとりしものならん。なんおややらお前がたは、いろきとおやのくるわおやのといはんすが、それも燈籠の時分か、にはかの時、お客の供でゆかんして、おもてむきばかり見さんすゆゑ、溫和らしう思はんせうが、ないしようへまはつて見ると、精靈さまのもり物どうぜん、内と外とは大ちがひでござんすぞえ。わたしもたゞ禿になつて、まる三年あかりけられしるゐるうちに、とつくと見て知つてをりやす。昔から替らぬものは、引四ッに大あんどん、もあんかぶろのとりなりは、菱川がゑがきしゑのぬけ出でたるかとうたがはれ、正月の伊達ぞめは、一蝶が名所遊女を眼前に見るがごとし。つるべ鮨麥はほそきをきらはず、やまやが豆腐は白きをいとはず、竹むらが卷煎餅は、齒當りのかたきをしや

うし、なかの街のこぶまきは、歯ごたへのせざるを感ず。甘露梅は下戸くらうて舌うちし、袖の梅は酔潰服してがツプ／＼す。八朔のしろ小そでは、時ならぬに何の雪ぞ。七月のとうろうは、やみなるに何の月ぞ。内へむけての松かざり、あらごものざふに餅、庭の焚火に草市小そで、春の櫻は秋のにはかと替れども、かはらぬものは家々の格式、どうしようはまま屋におさんす、松かは屋にいんすりんすのことばのはしに、昔の風がのこつてはあるけれど、變りはてた娼妓衆の體たらく、いにしへは下八樓の揚屋より、名ざしの女郎の名をしるし、おくに御法度の客に御座なく候といふ文言をしたゝめるを、あげやさしがみと名付けたりとぞ。かかる薄々たる花街の粉頭が、相手かまはずつとめの外の樂しみも、人めをしのぶ間夫ぐるひ、それも昔の高尾に島田、あげまきに助六、小むらさきに權八ともいふやうな、末の世までもうたはれるやうなことではなく、唯わけもなくおわるもあり。又近ごろのはやりもの、爰かしこで見た人や、つき合ひにくる客人の、あたゝからしう見える相手に、惚れ身でかける色じかけ、どうぞ一度なりともつれ申して來てくんなんしと、身上りの二三度もはりこめは、こけはむしやうに嬉しがり、あしか付いたかさいご、ぬしにやなにもかくしいせんと、うちかぶと見せかけて、白化の金太板ごき、下でもぬしに目をつけて、外の客人のじやまになる故、二階をとめると申しいすから、なんぞ主のしてくんなんした分にして、こしらへて見せいせんではならぬやうに

なりいした。じつに主の外はつとあふことがしみん／＼いやでおざんすから、ねつから客衆ははなれて仕舞ひ、どうもしやうもおざんせんが、半金ぐらゐはゐるなかのお客人にどうともして貰ひいすから、どうぞ寝道具をしておくんなんしと、のつぴきさせずくゝり付ければ、身あがりのことはうまひこす、つぱり寝道具のできた時分、貰ふあてがちがひしたと、もらつた金はあたゝまり、どうも顔が合はされいせん。さう／＼如在でない事は、これで許しておくんなんしと、指のさきをすこしそぐか、髪の毛の中でもすかしてやれば、童子格子がたんのうすると、胸の算盤のけたを合はせてはじきこみ、爪のながき心の内のさもしきこと、口にては言はれもせず。さりながらそれも道理、入江町に居さんしたお路様が、（猶結傳の總巻なり）三浦屋の高尾様にいはんした通り、傾城のものとては、錢が一文楊枝が一本すらになし、みな客人のふところをあてにする境界、どうしてこれが正直に情をたつて暮さるべき。心は山瓜どうぜんに、どうかなしてくゝり付かねば、たちまち借金の淵にしづみて、てん／＼舞ひのをどりの拍子、これを來て見よ河岸へさげられ、または女護の島の總雪隱かとあやしまるゝ、伏見のつぼねへおろされ、夜晝わかたぬ鐵砲責めの苦しみ。晝三ッのつけまはしのと、くらゐが付いて全盛するほど、座敷代が月に定まい、しんざうまでに使はせる、みすの紙からおはぐろ代、茶屋の付け金、貰ひぐらひ、さま／＼のもの入りが多くなり、もの入りの多いにしたがつて軍用金におはれて來て、

おつつめは手くだへ落ち、かうすれば客がせきこむ、どういひかければのぼせて來ると、あけてもくれても狂言のすがたをかへ、正月の元日から、しはすの三十日まで、こゝをしきつて、かうせめてと、ゆらの介が夜うちまへといふ氣になつて暮すことゆゑ、なか〳〵優なことや情らしいことに頓著してゐられぬはず、こけおどしの唐樣や歌書のことばをひねくるを、やさしい事と見給ふな。有りていの所を申さうなら、古人の句にいへるごとく、

にしき著てたゝみのうへのこじきかな

これ今の世の傾城の身のうへなり。さてわたしらがつとめのいきかた、心いきのいさぎよきをはなさうから聞きなんし。江戸の君のながれはたえず、三十二斛のすがたを顯じて、此の河岸端のこまよせを、まがきとも格子とも思つて居れば、いろざとのみせつきも、さまで格別のこととも思はず。内なば船でのり出す時、冬ならば炭團一ツにかた炭一升、淺草紙の四ツぎりを、親方から請けとれば、小うかひに追はれる氣ぐらうなく、二階の小用所はくるわばかりと自慢らしくいふけれど、これはお客の小べん所、わしらが船の重寶は、あれ見なさえ、苫のわきの四角に明いたところから、おいどを川へつき出して、しやッ〳〵とはじく氣さんじ。ゆく水の流れはたえず、後は奇麗な潮をくんで、てうず水にも事かかず。また行燈のないうろ〳〵船や、一ぜん二六の舟饅頭が、毎夜こゝをうり步けば、

むかうの人をよばずして、みながら萬事の用がたりる。三十二文とさまりはあれども、五十六十乃至は百、なげ出して行く客もあれば、上端はわしがほまちにて、かひくらひの仕拂ひ　明くるひるまへ間花すれば、もとの前の苦勞もなし。おせきさんの身のうへも、わしらがつとめもどうぜんにて、おもてをはるむだかなければ、紋日物日のとんちやくもなし。錢がほしいともおもはねば、客業をたらさいりはりなく、おとなんの間のこととなれば、いろ男おやとてうれしくもなし、ぶ男おやとていやでもなし。心にまかせこふるといふわがまゝなし。わづか三十二文で情をうれば、くぜつなごぶかくる野暮もなし。いやなれば來ず、客にうきなければ此方に下くだもなし。詐るよりは眞なるはなく、眞なるより正直なるはなし。サァこれでも船まんぢうが卑しいかよ。又これからおめへがたのたなおろしおや、まうおとゞ様のさしてゐさんす、斑なし鼈甲のおたたか櫛に、しのぎの笄、まへかんざしの銀目から、安積りに見たふして、十八九兩が物はある。柳ちやの緞子のおびに、縮緬ひとへのぶつかさね、蝦夷錦のびんぶりがゝるめ、これも十兩からが物はしつかりこ。サァそのかねの出どころをたゞぬれば、おめへがたの晝夜のつとめが、二人しぼつて三歩づゝ、たゞきわけにした所が一歩二朱にしかならねえぞえつ月三十日うりつめて、あぶみふんばり十兩あまり、そのうちを百助が、枸杞の油に下村の瓶鬱香、あぶら元結かみゆひ代、たなちんから飯米から、とゝさまかゝ様まはしの仕著せ、うちを出る

時うちかける、火うちがまにひうち石、こつぼり下駄によせ緒のうらつけ、諸しきくるめて勘定した引きのこり、おめへひとりの身じんまくにも足りようかえ。さうしてみれば定式のほかに貰ふ客が、たんとなくては一日も暮されうか。また金をくれる旦那ぢやとて、むしやうにくれるものでもなし、そこがかのころぶとやら、けつまづくとやら、只は起きぬつかみ金山、寝ずにとる藥とはほつてもゆかず、うはべばかりは娘の命でも、御本地は正はちまん、賣女からつりをとるは、おめへがたの身のうへぢやぞえ。そうじて世間のことわざに、どぢやうのことををどり子といふは、汁がおもぢやと云ふことなれど、いま時のをどり子に、汁氣があつたらそれこそほんにニツとない鼻ツかけぢや。またいゝ衆の前へ出るのを、見えらしう言はんすが、とりも直さず狆ころや猫の子を、お膝のもとへ引き付けて、なぶり物になさるると同じこと。それをよい子のふりをして、ひつかける鼻の高でうし、五分ながのいたじめ繻袢で、座いとの主をきゆつ／＼といはせ、きく間がつぎ三味線に、千枚ばりのつらの皮、さりとはばちあたりのさいじりは、ろくでもない聲じまん。春はさくらの向島、客の羽織をひつかけて、置き手ぬぐひの鼻唄に、裾はばら／＼ばら緒の草履、けまはしの裏模様、もれ出る淺葱のちりめんは、しりくらひ觀音の御戸帳が、羽織のかんばんとおもはれて、このもしけは微塵もなし。夏は納涼のやかた舟に、二度の月見をくゝりつけ、冬は雪見の二軒茶屋、醉潰どののつぐ酒を、新川

の前垂どうぜんに、酒びたしになつた著衿の膝へうけこぼしてざつぶりいはせ、平氣で袖で拭つて見せるは、かはりの小袖をしてやらうと、りつめでいはせる下ごゝろ。ある時はまた座敷もなく、ねッからひまな時分には、御機嫌うかゞひとこしらへて、お得意方へおして參上、御祝儀なしのたゝまりは、打ツちやツてもおかれやるまじと、否なゆすりのあつかましさ。またちつともひけうな息子と見れば、あしだをはいたなまるひの如く、ころぶやうでころばぬやうに、おもしろをかしくだましかけ、そろ／＼ちか内へ來なさえと、ありやすの稽古はおもてむき、仕だし茶屋へいひ付けて、くひたい物をとりよせて、あとの拂ひは息子のふところ。又そのうへに小釣はみんな手前へかきこみ、また用をいひ付けるのを鼻にかけて、茶屋のおかゝ樣に飯の菜をねだつてやる。さすが手びく手がみんな慾づら。その内にもうちつといい鳥がかゝると、さきの息子をとらまへて、けさも湯屋へ行く道で、おまへの來なさるのを近所の若い衆がいろ／＼にどくつきやす。あれでは喧嘩でもしかけやせうから、これからはこつそりと屋根船で出やせうと、あだにもてなし、むすこが足があがつたあとへ引きずりこみ、今度のお客はからあたまから惚れ身で仕かけ、おやぢは用事とおもてへはづせば、おふくろは念佛講、ついそのうちにちよく／＼けまちよけのこんたんで、襷がへをもねだり出し、竹格子がすかし窓のくろ塀とかはれば、そのあと變じておちまのくり石、隅にちよつこり布袋竹、ひかり手合がらつて

來た、不動樣の御えん日にかつた鉢うゑ、藥師さまの御えん日にかつたせきだいなど、むかうの方へずらりとならべ、たけすのえんに擬寶珠のやきもの、はんどうはんざふゑゝだらひ、樂屋鏡臺が立派にでき、手まへ雪隱のふしんもすめば、一夜けんぎやう半日乞食、だん／＼榮耀に實が入つて、とりつけひつつけねだりごとも、顏にしるけがある中ばかり。目元にしわよるちりめんの、三十振袖になつてくると、仕おくり客もはなれて仕舞ふ。又さま／＼な男をくつた上は、一通りなはいやになり、兄分とやら子分とやら、どうやらかうやら亭主にしても、綻び一ッ縫はれねば、こそくり物にも人だのみ、ぬかみそへ手を入るゝがいや、飯をたくも手おもいと、けんどんそばで腹をつくろひ、菜はいつでも取りつけの、ひしほうりがもつてくる座禪豆や菜漬で仕まふ、當座のがれのじだらく世帶、まんまと身のうへ持ち崩して、末はでいしの流れの身。よく／＼運に叶うたところが、よび出し茶屋のむすめとばけ、又はそこここの水茶屋ぐらゐで、貧しい暮しをするもあり、おめへがたもその通り、いつまで若い身ではなし、今からそろ／＼身の納まりを分別しておきなさるのが、よささうなものではないかえ。さういふもお前方が、うそにもわつちが爲を思つて、深切にいつてくださんした御禮ながらのあてこすり、良藥は苦いとやら、なしにさはらば許さんせ。又おめへがたが高尾さんぐらゐな人で、わつちがお蹟さんほどな器量のものなら、まだいふ事もあらうけれど、何をいつても讀まぬど

し皆かぬどし、今夜はとまりの客もある筈、もう　お暇申しやす。」と、おのれが舟へのりうつり、ふなばたをたゝいていはく、「大川の水すめらば髪をあらふべし、濁らば脚布をあらふべし。よしかく〳〵〇〇〇〇」と、鼻聲でうたうて去る。あとに二人は顔見合はせ、「なんだかねつから分らねえの。アハハ、、、。」

後　序

傾城傾國は唐人の付けたる名にして、白拍子ながれの女は我が朝のやはらぎなるべし。昔より品類あまたかぞふるにいとまなからん。國々の名目當世の洒落、柄杓干瓢白人巾著のたぐひ、大むね一種より出でて、位階の高下は金銀の相當るなるべし。たつとからずして敕撰に許され、貴人のかたはらに侍るゆゑにや、ちと子細過ぎて多くはふるみに落ちたり。爰に天竺老人のいへる如く、遊君有つて終に人の魂をとらかすいきはりも見えず、まして歌よむほどの戀にてもなし。たゞ物くひ月落ち烏啼くの吟も、此の君にあはぬうらみをのべ、江口の泊りに宿かさぬ君もなくなりて、今はたゞの所にはなりぬ。伊勢路の綵色はあかあがちにて、大津草津は少しうすかるべし。冬枯れのまばらなる頃はいつとなくよわり果てて、鼻の下の煤氣もさむく、木綿所の小車の音もさびしくくれて、水風呂のほかげに足袋さすわざも侘し。片田舍は法度きびしく、表向きはつとめせず。されど哀れなるかたには心ひかるゝならひ、夜更けてあるじしづまりぬればぬけいで、しのびやかに書院牀の小障子あけて、神のいがきもはゞかりなくて大股に打越し、終に一夜の枕を並ぶ。出替りは年の暮を定め、給分の加增は赤まへだれをこぎる。物皆終りあれば、古筵も鳶にはなりけり、此のものの行方何にかならん。

昔は普賢ぼさつにもなりたる先例もあれど、今は少しの違ひありて、果ては駕籠かきの妻になり、瘦子産み捨て生涯を終る。未來とても覺束なし。八萬地獄あれば素人の地獄あるべきくも、たゞ一生の福ひをいのる。諺にいへる、運は天にあり牡丹餅は棚にあり、まんぢうは船にありといふ。

嵩天坊誌

自序

むかし／＼其の昔、祖父は山へしばかりに、娘は川へ洗濯に、其の娘のほた餅を、萩の花と聞き違へ、美しからうと思ひしやら、久米の仙人目をまはし、すんでんころり山椒味噌、からき命を漸うと息吹き返し、娘も共に雲に打乘り消え失せけり。それ故末世に行方しれぬ道中の竹輿かきを、雲介とは名つけたり。扨祖父は山より立ち歸り、おらが娘が飛んだ／＼と立ち騷ぐを、近在近郷聞き傳へ、飛んだ話をお聞きだか、飛んだ事だ／＼と、だん／＼といひ傳へる、是れ飛んだことの始まり／＼。

戌の九月

風來山人誌

我も亦徒然なる儘に、日ぐらし硯にむかひて、心にうつり行くよしなし事を、そこはかとなく書きつくるとは譃の皮、折角ない智慧の底を叩いて工夫し出した金唐革も、度々の雨天に差閊へ、隙あれども錢なければ、せう事なしの別莊に、風雅でもなく洒落でもなく、浪人の侘び住居、喰はず貧樂のみなれども、主人が欲しけりや飯粒を二百石か三百石に負けてやれば、何時でも出來ると思へば苦にもならず、二朱か一步工面すりや、四海皆女房なりと悟れば寐覺めも寂しからずとはいへ、一人できよろり、關々たる雎鳩は三股の洲にあり、窈窕たる妓女は中洲にも好き逑ありと口ずさみたるをりしも、表の方に人聲して、飛んだ事だ〳〵、市川の團十郎色事の大評判、又彼の後家も後家でござる、惚れるにも程が有る、ほれて惚れてほれぬいた、飛んだことだ〳〵と追ひ〳〵の賣り聲は、例のたはひもなき事ならんと、つぶやき居たる處へ、或人來りて曰く、「世間一枚飛んだ噂は、市川團十郎或後家に喰らひ込み、段々ともめ出して、旣に市川の苗字を削られ、芝居も構はるべき程の事なり。あゝ愼むべきは色事なり。」と吐息ついての話を聞いて、予笑うて問うて曰く、「市川團十郎とは何人なる

や。彼の人腹を立てて曰く、知れたこと役者なり。役者も役者にこそよる物なれ、元祖團十郎一天下に名を揚げてより、初めの栢莚後の海老藏、今の團十郎に至るまで、都鄙遠近三歳の小兒も知り、親玉といへば團十郎と聞えたる、此の道の名家なるを、此の度の不埒故、數代の名家に疵を附け、市川の苗字を穢し、世上の口の端に掛る事、言語道斷の事なり。扨彼の後家といへるも、さのみ美人の聞えもなく、いか物喰ひの噂とりどり、江戸中の物笑ひこと、眞黒に成つての話。予又笑うて曰く、扨々先程飛んだ事の讀賣り、其の譯の分り兼ね、今亦飛んだ事のお物語、初めはほんに飛んだことかと思ひしが、能く／＼話承れば、これ程飛ばぬ事はなし。夫れ役者の身の上は、貴賤上下の贔屓を請け、諸人愛敬を第一とするなり。わけて立役ぬれ事師、女に贔屓せらるれば、棧敷の人りが多いとて、給金も上るなり。或は女の櫛笄手拭浴衣煙草入に、贔屓の紋を付けること、これ等は不屆千萬なれども、付けさせる親や亭主がべら坊といふ物にて、役者の方に科はなし。また奥勤めの女中なんど、傳を求め縁にたよりて、扇楊枝差に役者の手跡歌發句を書いて貰うて、是れを尊ぶこと祖師の御筆定家の色紙よりも勝れりとす。それには千差萬別蓼くふ蟲も好き／＼と、おのれ／＼が贔屓々々、或は西の下棧敷、通りながらの捨詞、それから熱に浮かされては種々樣々の夢を見る。中にも後家の明き重箱、借人の仕合貸人の歡び、されば奴が土手店で買つた鞘には事替り、さりとは能く仕た細工にて、

どれにもしつくり相生の、松茸賣とは是れならん。こちらの後家も素人なれば、よい野鴨の類に成つて、さのみ目にも立たねども、名高い役者の後家ゆゑに、大そうなる評判すれど、若しも彼の團十郎代々の儒者ならば、相手の後家に貞女兩夫にまみえずの女の道を破らせ、其の身も定まれる妻の外に他の女を犯し、江戸中の口の端にかゝる不埒を仕出して、言語道斷ともいふべけれ。相手も役者の後家なれば、たとへ殿御に別れても、又の夫をまうけなよ、主あるなしの不義同然といふ事は、芝居で聞いても耳へは入らず。どうで只は居ぬ者なれば、團十郎がせしめてもせしめいでも亦同じことなり。扨又器量のよし惡しは、天此の人を生ずれば、不男でも惡女でも餘りて打ちやつたためしもなく、それ相應に片付く物にて、人々の物好き次第、鼻のひくいが隱と見え、毛深いが天鵞絨の手ざはりに覺えるに、外より少しも構はぬことなり。不器量な女と色事したを笑ふなら、美人を女房に持つた者へは誤り證文を書かねばならず。此方に一切喰ふ氣がなけりや、人の女房と枯木の枝ぶり、よからうが惡からうが、してやんしてどうしようと、やつきもつきへんへこへえ、いらぬおせわのかば燒なり。扨々飛ばぬことなるを、飛んだ事だ／＼と江戸中の沙汰に成るは、大そう過ぎた比喩なれど、君子の過ちは月日の蝕のごとし。過つ時は人是れをしるのはしくれにて、此の道の名家ゆゑ、少しのことも仰山に、飛んだことといはれるは、江戸生拔きの名代の家柄、當團十郎に至りても株を落さず、江戸

中の贔屓が多き故なりと、我は却つて頼もしく思ふ。」といへば、彼の人大いに腹を立て、「後家と契りて斯く取沙汰に及ぶことを、無體に理を付け取りなしをいふ人は、其の身にも後闇き下心が有る故なり。」と、以ての外の腹立。其の時詞を和げて教へて曰く、「小善なりとて捨つべからず、小惡なりとてなすべからず。是れは一通り知れたことにて、寢ても起きても飯と汁と香の物許り食つて居れば、病氣も出ず勘定にもよけれども、うまい物のほしくなるは、お定まりの人欲にて、百病は口より入り、諸事の災ひ彼所より起る。是れも親父の呼んでくれた、女房ばかりかじつて居れば、黴瘡もかかず錢も入らず、結構なことなれども、我も人もさうはつゞかず、踏みはづしは有る物なれども、同じ樣な踏みはづしでも、することとせぬこと有り。此處が分らねば、必ず災ひに逢ふ物なり。我が門人何某が、古郷へ歸る餞別に送りたる一書有り。」とて、取り出して見せにける。

門人何某に示す

予若年の時漢書を讀み、高祖關中に入つて秦の苛法を去り、法三章を立つ。我も自ら法三章に約して血氣の禁めとす。盜み博奕密夫なり。此の三つの惡しきことは小兒も知りたる事なれども、我知らずおかすこと有るなり。常に心を禁むべし。

大石内藏介も、遊里に在りては面白きこと、世の風流の士とさのみ替ることなし。只敵を討つこと

を忘れざるなり。主親の敵のみ敵と思ふべからず、人々志す處家業藝術皆敵を持ちたり。討たずんば有るべからずと、行住座臥にこれを思へば、あちらの物よりこちらの稱錘が重き故、面白きことになりまず、思ふ敵を討つと知るべし。早く其の本にかへれ。

興に乘じて酒を呑むとも、酒に乘じて興を呑むことなかれ。

友人何某大いに家計を失して、來つて我に談ずること有り。或人傍に在つて問うて曰く「汝が首有りや。」友人曰く「有り。」予が曰く「首あらば何の憂ふる事かあらん」と、大いに笑うて去る。これを聞いて論賛に過ぎたりといふ人有り。予答へて曰く「大丈夫事をなすに、時に臨んで狐疑猶豫すべからず。然れども其の事固より善悪有り、只々遠きを慮つて首の落ちざる用心すべし。幸ひにしてまぬかるゝは道にあらず。人々心に問へば、首のぶらつくこと多かるべし。孟子の國に入つて大禁を問ふと、首の用心と見えたり。」と、謾にしるして禁めの一助とす。

右は善の善たる教へにはあらねども、いかなる柏の上材木でも、初手から鉋は掛けられず。先づ手斧にて荒削り、盜み博奕密夫の朽りさへ入らざれば、いつでも鉋は掛るなり。彼の團十郎が爲人、家業の敵も討ちおほせ、書籍を集め歌誹諧を樂しみとし、是れまであしき沙汰もなく、木場に有つての親父分、其の辯年は若けれども、闇夜に放す鐵砲汁、當ると死ぬる色事ならず。いはばふぐもどき

を食つての食傷、明家で棒を振つた許り、誰に當り障りもなければ、天竺まで持ち出しても彼の首の氣遣ひなし。隱す〳〵と思へども、天道といふ目の玉が、不斷上から見てござれば、首の有る人間と首のない人間は、誰が見ても知れるなり。かういふ心に成つて居れば、與風うまい首尾が有つて、人の女房の手を握る、其の時はモウ首筋に墨打をされたと思へば、こそばく成つて止めるなり。團十郎もいか程に氣丈でも元氣でも、首がなければ沖ころがうんこ踏んだ樣な顏をして、だまつて居ねばならねども、首が有る故舞臺での口上も男らしく、さりとは氣象が面白いと、江戸中の諸見物、益見增の紋所、己も神田の贔屓組、惡くぬかすたうへんぼくは、どいつでも相手になる。あゝつがもねエ。時に安永七の年、飛んだ噂と菊月上旬、風來山人淸住町の別莊に、獨りきほうて是れを評す。

序

不時に吹くを天狗風といひ、當なく打つを天狗礫と呼ぶ。天狗賴母子、天狗誹諧等、みなあてじまひより號けしなり。予が拾ひ得たる異骨を、天狗の髑髏といひそめしも此の類なるらん歟。しかるを風來先生筆を採りてより、普く世上に隠れなく、見ん事をねがふ人多し。我も亦これを見せて、錢を取るべき工みもなく、只持ちあるき隙をつひやせば、諸共によき見せものなり。

人の目をくらまさんにもあらばこそもとより山の天狗でもなしと目をさまして、一座の笑ひ種としけるを、今書林のもとめに應じて寫しあたへぬ。

大　場　豐　水　誌

序

我が風來先生、戲れに筆を採り、多くの小說世に行はれてより、近世開板の俗、文名をかすり文意を贋せ、或は直に風來山人と記すもあり。是れ皆書林智慧もなくて錢を欲しがり、謾に先生の名を騙ること、言語道斷不屆千萬なり。まだしも評判茶臼藝は、森惣先生の作にして、筆勢頗る相似たれども、つくれる花の匂ひなきが如し。其の餘紫の朱を奪ひ、莠の苗を紊る而已ならず、炭團を名玉と欺き、夜鷹を晝三と僞る者少なからず。今より後堅く制して可ならんといへば、先生笑つて曰く、我が飯を喰うて人の聲色を遣ふも、皆人々の物好きにて、百萬人目明き人、賣れるも本屋の渡世なれば強ひて咎むるに及ばずとて、其の儘に打ちやり置きぬ。頃日書肆滿風堂大場氏のかより、天狗髑髏鑒定緣起を得て櫻木に鏤む。是れぞ正眞正銘の風來先生の作なり。善いと惡いはお手にとりて御覽じやれ。

戲　　蝶　　謹　　誌

天狗髑髏鑒定緣起

明和七ツのとし菊月末の四日、門人來りて藥物の眞僞を論ず。折ふし扉を叩く者は大場豐水なり。一つの異物を携へ來りて曰く、「昨夜天狗を夢む。今朝夢さめて思ふに、けふは二十四日にて、愛宕の縁日なればとて、芝の愛宕に詣でけるに、門前櫻川と號する小流の中に怪しき物あり。拾ひ上げて泥土の穢れを洗ひ去れば、しかじかの物なり」とて匣を開いて取り出し、「けふ此の品を得て歸るさの道にて、見る者皆天狗の髑髏なりとて市をなせども、固より俗人の臆見、證とするに足らず。希はくは先生眞僞を辨ぜよ」と。予諾して門人に告げて、各其の志をいはしむ。一人が曰く、「これ大鳥の頭なり、阿蘭陀のほうごろ、すとろいすならん」と。又一人が曰く、「蠻夷の大鳥たりとも斯くまで大きには有るべからず、これ大魚の頭の骨ならん」と。反覆上下の論、異説區々にして衆議一決せず。予曰く、「これ天狗のしやれかうべなり。」門人驚いて曰く、「夫れ倭俗の天狗と稱するものは、全く魑魅魍魎を指すなれども、定まれる形あるべうもあらず。然るに今世に天狗を畫くに、鼻高きは心の高慢鼻にあらはるゝを標して大天狗の容とし、又嘴の長きは駄口を利きて差出たがる、木の葉天狗滿飛

び天狗の形狀なり。翅ありて草鞋をはくは、飛びもしつ歩行きもする自由に象る。杉の梢に住居すれども、店賃を出さざるは横著者なり。羽扇は物入りを厭ふ吝嗇に譬ふ。これ皆畫工の思ひ付きにて、實にかくの如き物あるにはあらず。聖人も怪力亂神を語らずとこそ宣へ。今これを天狗の洒落なりとは、我々を欺き給ふや。」予曰く「諸子の疑ひその理なきにあらず。さりながら我が微意を悟らずんば、いざさらば語り聞かさん。古人の曰く、藥を賣るものは兩眼、藥を用ゐる者は一眼、藥を服する者は無眼とは、とつと昔の譬へ、今時の醫者といふは、武士の子なれば惰弱者、百姓なれば疎懶者、町人なれば商ひを爲得ず、職人なれば無器用ものにて、糊口を爲兼ねるもの、醫者にでもなろうといふ。これを號けて、でも醫者とて、頭ぐるりの長羽織、見えと座なり許りにて、藥の事は陳皮も知らず、長屋も露路も踏ならすべるも、そこらだらけが醫者だらけ、藥種屋も盲、醫者もめくら、病家は猶盲故、臭橘を枳殼とし、鼠麹草を芫花とし、鯨の牙をうにこおるとし、氣鼈を䗪蟲とし、翻白菜を柴胡とこゝろ得、廣東人參を人參と思ふ。其の外千變萬化の大まちがひ、されども浮世は盲千人、はくらんの藥ははくらん病みが買ふ習ひなれば、是れを賣るもの家藏を建て、これを用ゐるもの四枚肩に乘り、これを呑む者往生の素懷をとげながら、恨みもせねば氣の毒なとも思はず。嗚呼悲しきかな文盲なるかな。予これを憂へて藥物の眞僞を正し、世上の醫者の目を明けんとて千辛萬苦すれば、

うぬらが心に引當てて山などとの取沙汰、智者は水を樂み、仁者は山を樂む。后稷は農を教へ、禹王は水を治む。過ぎたるを省き足らざるを補ふは聖人の功なり。山のやまなる山の芋、鰻とならで朽ち果てなば、薯蕷とも甘藷とも、旨い奴等が口の端に、かかる浮世に產まれ來て、牛の糞やら胡麻味噌やら、やみらみつちやの流れ渡り、海參の尻やら頭やら、蟹の竪やら横道やら、にうがにうへとちりあべこべ、錢ある者は利口に見え、出る杭は打たるゝ習ひ、天狗のあたまの眞僞を論じ、時を移せば腹がへり、日が重なれば店賃がふえ、月が延びれば質が流るゝ。儒者は木田あたまの通り者をとらへて堯舜の民たらしめんとし、賢女兩夫に見えずと、女郎屋の二階で講釋をするは、蟷螂が蜈蚣をとらへて、我に似よといふがごとし。動と止との文字は合うても、馬めが合點いたさねば、世話やくがたはけながらも、腹へはひる藥は人の命の存亡に預れば、聞かぬまでも赤目引きはり、茶時宜になりかはり、一問答せねばならねど、呑みもせず傅けもせず、口を歡ばすばかりにて、毒にもならず藥にも、何のお茶とうにもならざれば、諸人自ら甘ンじて天狗というて嬉しがるならば、其の波を揚げその醨をすゝりて、天狗にするが卓見なり。そのうへ縫目の蚤虱さへ悉くは見盡されず。まして天地の廣大なる、萬物の際限なき、一人の目を以て極め難ければ、若しは繪に畫く天狗殿がお出でやるまいものにもあらず。有つたとて天狗ぐらゐにきらはれる男でなければ、微塵こはくもなんともな

く、無いとて小遣錢の切れた程に不自由にも思はねば、只造化といへる細工人のお心持次第なり。若し又天狗が何故死んだと根問ひする人の有るならば、餘り高慢が過ぎて、科なき者を惡くいうたり、人を食つたり抓んだりがかうじた故、天狗の親玉太郎坊殿怒りをなし、木の葉天狗を引捕へ、首ねぢ切つて捨てたるを、豐水が見つけて拾ひ上げしものならん。これ皆餘所のことならず、今時世上に目がなければ、おとなしう爪をかくせば鳶かと思うて、たはけどもは茶にしたり馬鹿にする故、謙退辭讓は間に合はず、高慢いはぬは損なれども、又其の高慢が過ぎる時は、天道からがたまをへさへ、必ず憂き目にあふものなり。人々愼み給へかし。」といへば、皆尤もとうなづきぬ。

天狗さへ野夫ではないとしやれかうべ極めてやるが通りものなり

風來山人誌

跋

天狗髑髏鑑定縁起といへるは、一とせ予が戯れに書きちらし、大場豊水に與へたるを、此の頃書林開板しけるを、或人見て、予に謂つて曰く、嗚呼子が人を誣ること甚しいかな。彼の文中醫者と藥店ともに旨とし、陳皮も知らずとは何事ぞや。陳皮は蜜柑の皮にして、三歳の小兒も能く是れを知る。まして醫者藥屋をや。此の書行はれざる以前、此の文を削り去りて、世の嘲りを免るべしと。予答へて曰く、陳皮の事、神農本草經には橘柚と有り、後世二物自ら別なり。或は方書に橘皮と記し、陳皮青皮の分ちあり。然るを香川氏が藥撰に譫言をついてより、古方家と稱する文盲醫者とも、陳皮を捨てて青皮而已をつかふ。陰陽造化の理に暗く、藥を知らずして療治するは、坐行にて轎夫と成り、達磨が串童を勤むるに似たり。蜜柑の皮より腹の皮、日頃笑止千萬と思ふ息が鼻へぬけ、戯れまじりに書きちらせしなり。こけおどしの大言にあらず。習ひたくば教へてやるべし。若し此の惡たいを無念と思はば、藥屋にもせよ醫者にもせよ、遠い藥はさて置いて、陳皮一味のことなりとも、わかるといふ人有るならば、來りて我と議論せよ。所は神田大和町の代地、一月三分の貸店に、貧乏に暮せども本名も隱れなし。時に安永五ツの年、尻眞赤いな申の極月、借金乞にいひ譯の暇、風來山人識。

里のをだまき評自序

莊子が寓言、紫式部が筆ずさみ、司馬相如が子虚烏有、弘法大師の兎角龜毛、去りとては久しい物なり。予も亦彼の虚言にならひ、氣のしれぬ痲布先生、古遊花景の人物を設へて、詭八百を書きちらす。針を棒にいひなし、火を以て水とするは、我が持ちまへの滑稽にして、文の餘情の譫言なり。或は所々の地名なんどは、人の耳馴れたるに便りて、直に其の名を出せども、もとより作り物語なれば、實に此の事の有るにはあらず、見る人怪しむべからず。安永元年壬辰のはつ秋、有頂天皇九代の後胤、風來散人、居續けの風呂揚り、宿酒の夢中に筆を採る。

吉原細見里のをだ巻評

賢を賢として色に易へよと、唐の親父がむだをいひ、外面如菩薩内心如夜叉と、天竺のすつとの皮が思ひ入れにはり込みても、面白いといふ事を呑み込んでゐる凡夫ども、氣短にいうてはいけぬと、闇雲に踏み破つて、あしびきの山の手に一ツの艸庵を構へ、自ら麻布先生と號する人あり。されば賤しき諺に、牛は牛連れ馬は馬連れ、同氣相求め同類相集まるの習ひにて、古遊散人といへるしれもの、殘暑の見舞に來りし折節、麻布先生の門人花景といへる當世男來掛りて、四方山の物語、三人寄れば文殊の智慧はどこへやら、そろ／＼と理に入つて、例の遊びの魂膽話、花景しかつべらしく懷中より小冊を取り出し、先生達も御ぞんじ有るまじ、これこそ吉原細見の一枚摺、里の緒環といふものなり。抑此の一卷といつぱ、上橋中丁樓下の腐艸化して螢と成り、今五丁町に光を爭ひ、全盛いはん方なし。京の妓に江戸のはりと、それは昔の喩草、今ぞ吉原深川をもみませば、雨の手に梅櫻、遊びのきつすゐ喜見城、此の上の有るべきやと、我ひとり呑み込んで力み返つて味噌を上ぐれば、古遊散人熟聞いて、彼のをだまきの一枚摺、白い所も黒い所も一面に涙をはら／＼とこぼし、山の

手から吉原まで屆きさうなる吐息をついて申しけるは、嗚呼笑止なることを承るものかな。我が日本は小國なりといへども、五穀豐饒に金銀多く、萬の物に事を缺かず。繁華の地甚だおほし。京に島原大阪に新町長崎の丸山をはじめ、諸國の色里かぞへ盡しがたく、各土地の風流有りて、何れも面白からざるはなし。有るが中にもお江戸の吉原、一といふて二のなきことは人々の知るところなれば、今更にいふがくだなり。世上にて目に立つ器量も、此の里の女と競べては、思ひの外に見おとすなり。近き證據は、山下にてしとんだ茶釜と聞えしは、一頃の大評判、よく聞けば吉原にて何とかいへる女郎なりしが、吉原に居た内は本の十把一からげ、さして目に立つこともなし。郭外へ押し出せば、掃溜の鶴砂の中の金、汲んだ茶釜の掘り出しものとは評判に及びしなり。斯く吉原の女郎の勝れて宜しう見ゆることは、幼少よりの育てがら、立居振舞髪容、第一氣取を大切とし、禿の時より姉女郎の仕込み方あることなり。就中其の古、太夫格子の上品に至りては、琴三絃はいふに及ばず、詩歌誹諧香茶の湯、碁雙六躾方、何れの道にも闇からず。諸藝を知つて知つた顔せず、見識有つてべた付かず。上方の女郎などの眞似てもならぬが吉原なり。今のさんちや付け廻しは、以前の太夫格子に劣らず、意氣地あり風雅あり、各たしなみの藝術あり。これ昔の風儀殘り、古川に水絶えず、假令菩薩の影向あり、天人が天降つても、負けぬが此の地の女郎なり。岡場所の賣女ども、奴となりて來りなば、や

はりかゝ玉同然に、一月一貫八百づゝで預け捨てにして置くか、さんとか松とか名をかへて、爨妾傅婢にして使ふか、いつそ鐵砲店へでも追つ下し、免許の遊所と岡場所は雲泥萬里の違ひある勢ひを見せてこそ、吉原ともいふべけれ。いかに末世に成ればとて、岡場所の上娼共に大造なる名を付けて、二人禿座敷持ち、歩行きもしつけぬ道中、其の癖稽古に骨を折り、あひるの足どり南繰傀、中の町の人立に氣を登して眩轉せば、跡のいざこざ面倒なり。又下地から吉原に居る女郎もふがひなし。親方は金さへとれば、幽靈をとらまへても商ひさせ度き心なりとも、イエわつち等は岡場所の土妓衆と傍輩には得なりいせんとつつぱれば、此の相談はじやみる筈なり。吉原中に智慧がなく、女郎に[illegible]がなき故、斯くの如くに成り行きて、剰へ自慢さうに細見までを拵へて世上へ恥をさらすなり。岡場所の客までを引付けうといふ氣をやめて、客が來いでも吉原ぢやと、古流の角を崩さぬ樣に、じつと守つて居る時は、奥ゆかしく見ゆる故、自ら繁昌するなり。移り易きは人心、上方にても、一頃は祇園町島の内北の新地が繁昌し、新町島原は不景氣なりしが、近頃は又そろ〳〵と餅は餅匠へ復るなり。思ひつきにて流行ることは、一花許りでさめ易し。當年の俄なども、初めは手がるくてをかしかりしが、後は段々おもくれて、役者の聲色門をどり、何やらに似て氣の毒なりと、心ある人々の評判も有りしぞかし。病に應かぬまや藥は、るやひを抜き獨樂をまはし、いろ〳〵にしやべらねば賣れぬ

故にもかけども、眞に病に應く藥はだまつて居ても買ひに來るなり。料理で落ちを取らうとしたり、さま〲の思ひ付は、まや藥を賣る同然で、女郎の恥と心得べし。又藝者太皷持も、岡場所にまぎれぬやうにと、不斷の心得第一なり。かくいへばとて、必ずしも大きな面はせぬがよし。米が安うても江戸は江戸なり。買人の來ぬは地合が惡いか、染め模樣が氣に入らぬか、模樣が當世にむかぬかと、代物に氣は付けず、あらぬ所に骨を折り、今の樣に段々と思ひ付がかうじたら、中の町に男出茶屋、大門口で夜鷹が引きとめ、大どぶに船をつなぎ、船饅頭が出ようも知れず。もうそろ〱と此の節は、岡場所が吉原か、吉原が岡場所か、我がおれかおれが我か、女郎と賣女のつかみ賣り、何でも擇り取り十九文、扨苦々しき事なり。」と、眉をしかめて申しける。其の時花景銀煙管を取り直し、灰吹をくわち〱と敲き、あざ笑つて曰く、「古遊子の論高きに似て甚だ低し。されば古歌にも、

　植ゑて見よ花の育たぬ里もなし心からこそ身は賤しけれ

おなじ天地の間に生ずる人間、國をわけ郡をわけ、村をわけ里をわけて、其の品を論ずるは僻ことなり。いかにも吉原は日本第一の遊所にて、女の姿勝れたりと雖も、百人が百人千人が千人ながら能いと定まりたるにも非ず。細見嗚呼お江戸の序に有る如く、或は骨太毛むくじやれ、猪首獅子鼻棚尻の類なきにしもあらず。吉原の女郎なればとて、代々其の家筋有つて、女郎が女郎を產むにもあらず、

腹の中から誂へて拵へさせるにもあらず。又岡場所の女郎とて、下り細工の出來合にもあらず。つまる所は親兄弟榮耀榮華で賣りもせず、爲事なしの廻り足、吉原へ行くも、皆それ〴〵の因縁づく、能きも有り悪いもあり、江戸前うなぎと旅うなぎ程旨味も違はず、下り酒と地酒ほど水の違ひもあらざれば、吉原にも絲瓜有り、岡場所にも美人あり。又幼少からの育てがら、立居ふるまひ髪容、第一氣どりを大切と、此の詞亦非なり。習ひ性と成るといへば、鉢木の梅うけざの松、仕込みにもよるべけれど、堯の子丹朱不肖なり。舜の子も亦不肖なり。三年磨いても無患子は黒く、十年煮ても石は硬し。又龍文鳳姿とて、生まれながらによきものあり。八丈島で八端がけを織り、王子から菊之丞が出たれば、土橋中丁は扠置き、根津音羽薬罐圃にも、楊貴妃西施が有らうも知れず。扠又當世に疎き族、深川の風流なる事を知らず、只一口に岡場所といひ覺えたるは、傍いたき事共なり。吉原の地は北陰にかたより、一方口にして道遠く、くはだてざれば行くこととならず。深川の地は陽氣にして偏らず、船の通ひ路自由にて、牡蠣店の牡蠣、文蛤町の文蛤、鰻鱺は黒江町に名高く、鴈金燒は萬年町に隠れなし。竹子の調味、升屋が洒落、二軒茶屋二軒に限らずして榮え、鹽濱鹽を燒かざれども賑はひ、角力あり開帳あり、山開きあり夜宮あり、木場の岡釣には太公望も歩みを運び、三十三間堂の大矢数には養由基も汗を流す。新地の名いつとなく古石場の人自ら和ぎ、おひ〳〵客の入船

町、遊びの跡を直助屋敷、表櫓裏櫓、裾繼やぐら佃新地。中にも土橋中丁には全盛の君多く、川には船筏を組み、陸には駕夫の屯をなす。送りむかひの提灯は宇治の螢の飛びかふが如く、茶屋に持ち込む寢衣は鳴門の濤の寄するがごとし。間毎の座敷はれやかにして、山海の美味刻めを正し、藝者の調子尋常に勝り、騷ぎの小歌天下に類なし。世上の女の羽織著ると、サツサオセ〳〵の浮き拍子も、皆この里を始めとす。又女郎の氣象をいはば、夜店といへる退屈なく、或は裏の三廻目いと、わけ隔てした仕打なく、新造袖とめ座敷の普請、簞笥長持夜具諸道具、抱への仕著せ茶屋船宿、幇頭末社の付屆、紋日の數々暮のやりくり、無心工面の責めもなく、同じ勤めといひながら、内證の苦しみ薄く、自然と心のびやかにて、氣象に微塵もいやみなし。今吉原へ押出しても、餘り跡へは下らぬなり。是れでも岡場所と賤しむや。」と、顏を赤めて論じければ、麻布先生莞爾と打笑みて曰く、「御兩所の爭ひ最前より承る、各一理なきにしもあらず。されながら井の内の蛙大海を知らず、夏の蟲冰を笑ふの論なり。夫れ古より著しきは、江口神崎野上の里、大磯化粧坂の類、其の名殘りて今はなし。實に治まれる御代の御惠み、繁華の地は都鄙を限らず、色里おほきその中に、押出したる免許の地あり、擬へ者あり、かくしものあり、地者有り、はんかあり。其の品々をいはば、傾城湯女白人踊子、比丘尼飯盛綿つみ、夜鷹蹴轉し舟饅頭の類は小歌にも出でたれば人々の知るところなり。近年提籃と稱す

るは、持ちはこびの手輕きよりいひはじめ、山猫と名づけしは、化けて出るといふことならん。又地獄とあだ名せしは、其の初め清左衛門となんいへるもの、此の事を企てけるを、箱根の清左衛門地獄にもとづきて、仲間の者の合詞に、地獄々々といひしより、今は其の名とは成りけらし。物の名も所によりて易るなり。浪華にては總嫁といひ、伊勢の鳥羽阿濃津にては走りがねと呼び、吉田にてはおんにやといふ。伊豆の下田にせんびりあり、松崎にてねんぼあり、丹後にしやらかう、越後には冷水浮身あをのごあり、長門の萩にかごまはし、下ノ關にて手拍とは、船を見掛けて手を叩くより號く。肥後にきぶし、長崎にはいはちあり、小女性有り、信州上田にくざいあり、松本に張箱あり、加賀に化鳥、名護屋にもか、出羽奧州に根餅とは、其の初めの女共蕨餅を賣りける故、其の名とは成りけるなり。津輕にてけんぼといひ、南部にておしやらくと呼び、松前にて藥鑵といふは、尻が早いといふ事なり。尊きと賤しきと善いと悪いの差別はあれども、情を賣るは一ツにて、極意に至り至りては、粋もなく野夫もなく、無中に有あり有中に無あり、尊きと美しきが面白きにも限らず、賤しきと醜きが面白からざるにもあらず、それ相應の樂しみにて、撮千魚は石菖鉢をめぐり、鯨は大海をおよぐ。牡丹も花なり野菊も花なり、夜鷹船まんぢうを樂しむ者は、鼻の落ちるをこととも せず、岡場所に遊ぶ人は、岡場所を最上と心得、吉原よりも勝れりと思ふ。花景丈の味噌を上げる、女の羽織は世の風

俗を亂り、跡先しらずの浮き拍子は、遊びに風情ある事を知らず、是れ岡場所の惡風儀なり。又内證の苦しみ薄く、自然と心のびやかにて、氣象に微塵もいやみなしとは、鮑魚の肆臭き事を覺えず、深川に遊んで深川の穴を知らず。夫れ彼の地の女郎は鞍替へ者あり、つき出しあり、甚しきにいたりては、人の女房を賣るもあり。或は女郎の身で新子をかゝへ、我が身を買うてあてがりを打ち、掛金百落しの下卑有つて、いけもせぬ癖人を茶にし、客の前にて囁き合ひ、一字はさみであて付けたり、歌の唱歌の耳こすり、亭主の身替りのれん替へ、前の家名は風呂敷に殘り、大工はしがく所に工夫をこらし、一二三王玉と名付く。流れ渡りの岡場所と、萬代不易の吉原をくらべ物にはなり難し　又吉原の裏三迺は扨置き、詞つきからものの日の作法、仕着せ衣裳の模樣まで、古風を少しも易へざるが、此の地の尊き所なれども、未熟の人の知る所にあらず。又古遊子の議論尤もなることながら、これもさりとはいらざる世話なり。いま吉原の女郎少なしといへども、三千人に餘れり　岡場所より來れるは多しといへども、五十人に過ぎず。孟子に所謂、諸の楚人これを咻しうせば、多勢に無勢叶ひ申さず。岡場所の惡風儀もいつとなく徐々と吉原風に變ずるなり、必ずしも厭ふべからず。山は塊を辭せず海は細き流れを辭せず。日の輝らすが如く鏡の映すが如く、廣大無邊の取り込み勝負、六十餘州の人所、千差萬別の物好き、粋は粋だけ面白がり、鈽漢は鈍漢程嬉しがる。萬兩も一夜に使ひ、百

疋で二度も行かれる、勝手次第の衆生濟度、廣いが吉原、つかへぬが吉原、花は三吉野女郎は吉原、他所の櫻を吉野へ植ゑても、卽ち吉野の櫻なり。岡場所の私娼でも、吉原へ來りたれば直に吉原の娼妓なり。美いと惡いは手に取つて御覽じやれ。」

甲午の初秋

風來山人書

跋

童謠に曰く、五尺體が三尺解けて、跡の二尺はちぎる樣な、謹んで按ずるに、解けるが如くちぎるがごときもの、海參に藁あり、人に人あり。或は新五左右部金吉も、一度吉原の風に當れば、其の柔かなること山屋の豆腐のごとし。我が風來先生嘗ていへることあり、豆腐は柔かなるをいとはず、遊びは和するを厭はず。しかはあれども、若し豆腐に膽水を入れざれば、練酒のごとく米糊水のごとく、遊びの節々に極りなければ、闇夜に鐵砲を放すに似たり。我に極りあれば、先の是非自ら明らけし。酒の失を知らざれば、酒を呑んで酒に呑まれ、遊所の是非を辨へざれば、遊所に行つて前後を忘ると。宜なるかな此の言。手前に一箇の曲尺ありて、能く人の長短を知り、今此のをだまきの評を著す。彼の義士大星由良殿の敵ほどにはあらずとも、人皆願ひあり望みあり。望みは本なり、遊びは末なり。本を外にし末を内にすることなく、身の分限を知りて程々に遊びなば、一時の榮華に千年を延ぶるとやいはん。

安永三年甲午秋七月

門人無名子誌

飛花落葉序

春の朝中の町にちる花を見て、山屋豆腐の雪かと疑ひ、秋のゆふべ正燈寺の落葉をわけて、淺茅が原の露をあはれむ。こゝにどこのか風來山人、一文紙鳶の絲きれしより、かきおかれたる狂言綺語、讚佛ならぬ六部集など、すでに書林の櫻木にほひて、茶屋にことわる紙花のごとし。たゞ相對の紙花は風前の塵とひとしく、根なし草の根に歸らず、廊下座敷の帚にはかれて、終に砂利場のすきがへしとならんことを悲しみて、千早ぶるかみ屑を、くれ竹のよくひろひあつめ、近からんものは目に見なんし、遠からんものは音にきく、耳搔寮の腰張の張り交ぜとはなしぬ。

てんつる天明みすぢの絲の長き春の日

四方山人

飛花落葉序

風來先生のかいやりたる戯れのくさ〴〵多かる中に、ありとは見えてさだかならず散りもてゆきしを、四方やまと人のよもに求め、いそのかみ古ふんでのはゝきぎにかきあつめて、飛花落葉となづく其の文は飛んだことの華やかにして、落ちの來る言の葉なれば、見る人無常を觀ぜずして只無性に感ず。遙かに祭す風來の面目何ものかこれに過ぎん。固より觀と感と音相混じて、お慮ぐわいおかんたいのカン則ちかんのんさんのカンなれば、佛におどけの相通あり、髪に本田の大通あり、牛込にはえぬきの圓通ありて、かれたる板の櫻木に花咲かせ、よしてくれ竹のふしみやなして微笑せしむ。それは禪錄これは吉六、所は下谷池のはた、黄泉の客の讃岐圓座に、換へしはちすの絲口の、尻も結ばぬ序幕の口上、飛花落葉のおことわり、左樣にと云つてやみぬ。

天明卯のむ月はじめ

喜三二識す

序

四方山人、こゝに故人何がしが遺草を集めて專ら世上に售りつけんとす。されば現金阮宣が杖にぶらつく風來先生、百家にわたりし百の口は、きなかもぬけめのない人にて、波の文章たくみなるや、眞鍮錢の左氏司馬子長も、恐れをなして三舍を避くべし。げにや先生、一杯機嫌の咳唾は玉の杯となり、そこで肴に千金の裘、一狐の洗鮮なり。そのいり酒に醉の過ぎたる、二三兄弟ひざぐみにて、おいらも一口ゆかうかと、あんときつ口さし出すにぞ。

あけら菅江題

序

悉是吾子は釋迦の世話やき、敎而不レ倦は孔子の世話やき、拍手木ならぬ神會の世話やき、耳に數珠ある後生の世話やき、目を瞎くするおきなゝ、腰をたゝく姥、大小のたがひあれども、終に肝煎の名をのがれず。風來子きたごのごとき志度浦より、あいほふこはいの玉をもち來り、匱にをさめてかくしたり。あらふや／＼大根の切りほしと等しく、書肆家の賣業となりて、漸う百文二文の價をまつ其の紙袋のうらを見れば、憤激と自棄をひきまぜの文章なり。風來子もまた吾が黨一人の世話燒なりしを、今は此の土の世話に厭きて、無何有の鄕の講頭とやなられけん。その書を捨てもたいかしとて、四方山人の世話によつて、此の小冊とはなりけらし。

へづゝ東作書

江戸男色細見序

餅好き酒中の趣を知らず、上戸は又羊羹の旨きを憎む。寒暑晝夜はかはる〴〵をなし、春の花秋の紅葉、何れをか捨ていづれをかとらん。男色女色の異なるも亦しかならんか。吉原に細見あれば、堺町木挽町には四季折々の番附有つて、世の人普くありがたかれども、恨むらくは此の道の盛んなることを知らざる愚癡無智の凡夫もあらんかと、贔屓の腕をさすりつゝ、うつかり有頂天に登り夢中に筆を採りて、ところ斑の譫言を、そこはかとなく書き付くれば、馴染の名に至つてその顔ちら〳〵として目のあたりに出でたるは、ハテ、ラ不思議や生靈にあらざんば是れ親玉のかたまりならん。ヤイ餅好きの茶生ども、みだりに是れを笑ふことなかれ。ナント一番誤つてその粕を食ふに至らば、漸くにして酒中の趣を知らん。きのえ申葉月の比、水虎散人惡寒發熱中に書す。

はこいり　はみがき　漱石香　はをしろくし口中あしき匂ひをさる

二十袋分入　一箱代七十二文　つめかへ四十八文

口上

トウザイ〳〵、抑私住所之儀、八方は八ツ棟作り、四方に四面の藏を建てんと存じ立ちたる甲斐もなく、段々の不仕合、商ひの損相つゞき、澀團扇にあふぎたてられ、跡へも先へも參りがたし。然る所さる御方より、何ぞ元手のいらぬ商賣思ひ付くやうにと御引立て被下候、はみがきの儀、今時の皆様は能く御存じの上なれば、かくすは野夫の至りなり。其の穴を委しく尋ね奉れば、房州砂に匂ひを入れ、人々の思ひつきにて名を替へるばかりにて、元來下直の品にて御座候へども、畢竟袋を拵へ候の、板行をすり候の、あのものゝにて手間代に引け候。依之此の度箱入に仕り、世上の袋入の目方二十袋分一箱に入れ、御つかひ勝手よろしく、袋が落ちたり楊枝がよごれると申すやうな、へちまな事の無之様仕り、かねでせしめる積りにて、少しばかり利を取り下直に差上げ申し候。尤も藥方の儀、私は文盲怠才にてなんにも不存候へども、是れも去る御方より御差圖にて、第一に齒をしろくし口中をさわやかにし、あしき臭をさり熱をさまし、其の外しゆ〳〵さつた、富士の山ほど功能有之由の藥方御傳へ被下候。聢くかきかぬかの程、私は夢中にて、一向存じ不申候へども、高が齒をみがくが肝心にて、其の外の功能はきかずとも害にもならず。また傳へられた其の人も丸で馬鹿でもなく候へば、よもや惡しくはあるまいと存じ、教への通り藥種をえらみ、隨分念入れ調合仕り、ありやうは

は白きないとはず脇指は細きないとはず、今の浮世に交はらぬもの、此の境を知らずんばあるべからずと、案じの鋼鐵棟へまはり、まゝ坊が弟子と成つて斯くいふ坊とは成りけり。しかれども又かかる中にも、おのづから孝弟忠信の意備はれるは我が筆力の妙なり。若し目前の明きたる人ありて、其の妙を知るに至らず、こいつ諂せる奴なるべしと、或は知らずして譏るものありとも、我々へおならの皮とも思はず。

申のはつ春　借道軒書

道行風の妹背筋　太夫 下本加久太夫直傳

戀すてふわが名はまだき立ち出づる、襟の縫目やはだ着のうら、たれし故郷をふり捨てて、何國をあてと定めなく、おもて行く身は人のみか、風の身にも戀のふち、深き妹背の道走られ、生まれ付きたる數々の、あし手まといのはかどらぬ、大椎峠天性の嶮、風門が谷うちわたり、いとかうかうたるけんぺきの、峨々たる峯をよそに見て、背筋海道とはくと、たどり出づるぞうざうざし。見上ぐればば遙かのみねに生ひ茂る、木々の梢や鳥羽玉の、夜晝わかぬ所にも、頭しらみはすなとかや。世上の人のわるロに、花見風と浮名立つ、身の樂しみもいつしかに、きのふはけふの瀬とかはる、あすやこつてやもえ出づる、くさのにそよぐ風さへも、もしや知死期のつかひかと、世をしのぶ身の一筋に、

千手の御手につく〳〵と、杖とたのみし七九の甲、円くわくわれおれ打越えて、鳥のそらねや帯の関、十四十六初戀に、思ひ亂れし物心、血汐の酒のふいゝふざれ、誓ひめの締のたまごかに、縫ひその しころび寢の、そのむつ言にいひかはし、取りかはしたる誓紙のかずかず、かはい男とだきしめて、たとへ野の末山のおく、虎ふす野邊の足の毛や、爪の地ごくへ落つるとも、はなれはせぬといはしやんした、その言の葉がしみ付いて、わたしが背の入れぼくろ、苦勞する身のうき旅も、みんなわしからおこつたこと、こらへてやいのとよりそへば、男もともに打ちしをれ、親のゆるさぬ不義いたづら、襟の住居も叶はねば、かく落ちぶれし二人が中、心はやたけにはやれども、走らうにも飛ばうにも、のみならぬ身の悲しさと、そゞろ涙にくれけるが、ハア、まようたり誤つたり、實に數ならぬ此の身にも、先祖の譽に王猛が、傍若無人と名をつたへ、不思議を殘す節穴に、恨みをむくいしためしもあり。又水中にうかんでは、磁石にかはるの德あれば、ゆびにひねられ灰吹の、底のもくづとしづむとも、戸に譽有明の、つきぬ妹背の旅づかれ、いざや急がん夜明けなば、東しらみと人やとがめん。兎に角に身の用心の腰眼や、雲のかけはし白たへの、加賀越中の國境、ふんどし谷のかたほとり、肛門寺とて名にしおふ、大師の古跡ふし拜み、蟻のとわたり打過ぎて、金だの宿にぞ三重著きにけり。

神靈矢口渡跋

樽ぬき澁柿を笑つて曰く、汝我が身の澁きを恥ぢず。澁柿答へて曰く、汝も澁を拔かずんば澁く、我も澁をぬかば甘からんと。善惡は本不二なり。一日吉田冠子來りて、淨瑠璃の作を請ふことしきりなり。されば盲は蛇に畏ぢずと、下戸はぼた餅に逃げずと、不稽無上の筆任せ、只初段の切三段目の口のみ予が筆にあらず、其の餘は闇雲に綴り合はせども、今をはじめの作者の巣立、しかも初日の急なれば、引書を閲るに遑あらず、校合も足らざれば、其の誤り多からん。澁のぬけざる澁柿の、澁き所は容したまへ。寅の初春中旬、作者の甲拆福内鬼外まじめに成つて誌す。

嫩容葉相生源氏後序

古語に曰く、寸も長きことあり、尺も短きことありと。されば木綿を買ふ者は、價少なうして其の丈長しといへども長しとせず、錦を買ふものは、價多くして其の丈短しといへどもみじかしとせず。予が戯れに作れる嫩容葉相生源氏、九段續きなるを、東都の芝居の習ひなれば、末の三幕をのこし置き、評判しだいにて猶追ひ〳〵に出さんと、先づ六段目まで取り組みけるに、當る正月二日より如月下旬の今に至るまで、引續いての大入、棧敷切落はいふもさらなり、この手をつけて見物雲の如く集まり、舞臺の後人の山を築く。入るにあまえ勝に乘つて、末三段は趣向のみにていまだ筆をさへ採らず。しかるを淨瑠璃をこのむ人々しきりに正本を望むと、本屋が錢をほしがるとにふがにふに止む

ことを得ず、物足らぬ正本を出しぬこ手織木綿の地太にして、しかも丈の足らざるなも、ひいきの目には蜀江の錦とも見違へて、跡の出づるを待ち給へかし。

安永二年癸巳二月三十日　　福内鬼外誌

りやうごく橋の邊

きよみづもち　新見世びらき仕り候

口上

世上の下戸様がた八申上候、そも我が朝の風俗にて、日出たき事にもちひの鏡、手もち金もち屋敷もち、道具に長もち魚に石もち、くるわに座もち室頭、家持は歌に名高く、惟茂武勇かくれなし。かゝるめでたき餅ゆゑに、この度おもひつきたての、器物もきつはり清水餅、味は勿論よい／＼と、御贔屓御評判の御取りもちにて、私身代もち直し、よろしき氣もち心もち、嚊もやきもち打忘れ、尻もちついて嬉しがるやう、重箱のすみから隅まで、木に餅のなる御評判奉願候以上。

未四月　　ゑかうゐんまへ　音羽屋多吉

清水餅口上書第二番

風流餅酒論

私餅店の儀、町中御下戸樣方御贔屓御取立を以て、段々繁昌仕り、あり難く奉存候。然る處此のあいだ底豊饒右衛門樣と申す生醉樣御出でなされ、卷舌にて御意被成まするは、ヤイ亭主、清水といへば水に縁ある酒をこそ賣るべけれ、何ぞや野夫な餅店を出し、下戸めらをうまがらせ、錢をせしめんとの謀、言語道斷の次第なり。汝が口上書を見るに、皆身勝手のせりふなり。我が上戸の眼より見れば、餅ほど穢らはしき物はなし。先づ痰持は胸を苦しめ、疝氣持はきん玉にもてあつかひ、女郎の末は癪持となり、かげまの果ては痔持となる。子持は女の色氣をさまし、やきもちは愛そをつかす。不器量のあくたいを棚から落した牡丹もちといひ、蒲團ばかりの獨寢をかしは餅と異名せり。とりもちは殺生戒を破り、むぐらもちは植木をそこなふ。高望王は下總に朽ちはて、持氏は鎌倉に亡ぶ。秩父におほさき持あり、四國に犬神持あり、賤しきことを荷持歩行持と言ひ、無首尾なことを手もち無沙汰といふ。身持氣質は附合を知らず、餅喰は相手がいやがる。槍持は槍を遣はず、金持は金をかはず、辨當持先へ食はず。かかる不埒の餅ゆゑに、下戸の建てたる藏はなし。早く相止め然るべしと、青筋はつてぞ申しける。

右の返答に、上戸を一まくりにやりこめ、餅の利運に相成候文談、跡より出し可奉入御覽候、已

上。

矢口後日荒御靈新田神德　口上

軍は勢の多少によらず、芝居は水物とは、昔から負けなしに能く申す事なれども、終ぞこれまで寺がらで足ついたためしもなければ、止めるに相談きはまりしを、さる方樣の御意見に、さりとはお江戸の廣いことを知らないか、二丁町を紺色を使うて通り、吉野丸でさわげばになりでも諷ふ。目水の表で駄菓子を賣り、越後屋の門を切れ賣が通る。甚三から夜鷹まで、夫れ相應に賣れるといふが、お江戸の廣い證據なり。裸で物は落さず、女角力で睾丸をつめたためしなしと、闇雲にすゝめられ、運は天にありぼた餅は棚にあり、下りは鄰にあり、此方にはなんにもなけれども、其ン代金の出し人もなければ、請子をしてはるやうな心持にて、はたいた所が元直なり。入らぬ所が平氣なりと、申すもやつぱりへらず口。やねの破れた一德に、寢ながら月を見るといううて、味噌を上げる理窟にて、なくな事ではなけれども、只御見物樣の御贔屓を、下りの太夫三絃とも、守り神とも金主とも、是れ許りが賴みにて、心一杯の思ひ付、福内鬼外先生の新淨るりを出せども、衣裳もなければ道具もなし、江戸のお氣ではお目までだるし、おほ山御參詣の道すがら、旅芝居を見るお心にて、悪い所が面白い、不出來な所もこいつはよい、やりそこなうてもこいつはよい、いけない所もけしからぬ所もこいつはよい

よいと、委細構はずお褒めなされて、御見物の程奉希上候。

同じく口上後日

先達而奉申上候通り、貳文四文のはした芝居、誠に海老雜魚の魚まじり、一寸法師の背くらべ、さりとては厚かましい、ねりま大根で、太いの根と來た萬八芝居と御呵りも可被下處、判官贔屓曾我贔屓、弱い者を見捨てぬは、實に頼もしきお江戸の御氣象、有り難いのでてつぺんにて、屋根の穴から雨の漏るをも御厭ひなく、御出で被下候御贔屓御憐愍を笠に戴き、どうやらかうやら芝居の樣な物に成り懸り、偏に御蔭御取立故と、難有仕合に奉存候。何をがな御禮御慰みに相成候樣にと、心にやたけに逸れども、ない袖は振られず、瓢簞から駒も出ねば、金主から金も出ず、提灯で餅つく樣に、氣ばかり焦つて埒明かず、鐙ふんばり身代限り、えいやつとの思ひ付にて、來ル二十七日を七ッ目の泥仕合、八ッ目九ッ目大切まで、追々出し奉入御覽候へども、是れ以て道具衣裳そこらだらけが不都合だらけ、御目まだるきは勿論なれども、惡うてもよい、負けても勝ちやと、御町中樣御贔屓の御蔭を以て、此の度の四番目、澀團扇の氏子をはなれ、リン／＼／＼に引きかへて、えいたう／＼と御見物、幾重にも奉願上候。

二月　日　　ふきや町

結城座

荒御靈新田神德後序

近松老翁、世を戲場に避けて數の淨瑠璃を作りけるに、筑後播磨の名人有つて、普く世上に行き渡る。勸善懲惡世を教ふるの一助たること、是れ近松氏の本心なり。中頃千前軒文耕堂が類も、また近松氏の意をうけて、作れる所正しければ、此の道甚だ盛んなりしが、いつの頃よりか衰へて、今時の作者は固よりそこ所ではなく、文法を知らず手爾於葉を辨へず、嘲りを遠近に傳へ、恥を千歳に殘す。讀めぬ同士書かぬ同士、金聾雷をこはがらず、盲蛇物におぢず。されども五年か三年に一度、犬も歩行けば棒に逢ふ、闇夜の鐵砲まぐれ當り、はくらんの藥ははくらん病みが買ひに來る、遲牛も淀、早牛も淀、それも作者、是れも作者。鳫が飛べば飛んで見たがる石龜仲間のぢだんだ組、すつぽんの鼈作者、泥水に足を踏み込み首をすつこめ、敬白。

亥のとし卯月上旬　福内鬼外書

木に節の生る辯

つれづれなるまゝに、日ぐらし硯に向ひて、心にうつり行くよしなし事を、そこはかとなくかき付くるといへば、向上らしう聞ゆれど、借金の斷り手紙や質の利上げの書物に、ほつと精をつかせし所

へ、門人無名子なるもの來つて曰く、けふ藥を葛西の邊に採る、至つて珍らかなることあり。木に餅のなりたるとて、人々市の如くいたりつどひ、猶此の說街に滿つ。願はくは先生の說を聞かん。」と、一枝を攜へ來れり。予答へて曰く、「天地の廣き、かかる異物も有るまじきことにしもあらず。然れども、これは餅といへる名ばかりにて、食らふべきにあらざれば、眞の餅といふべからず。又我が家別に木になりたる餅ありて食すべきものなり。」門人驚いて曰く、「先生既にかかる異物あらば、幸ひに我に見ん事を許せ。」と、ねもごろに是れを乞ふ。よつて箱を開き取り出せば、門人笑つて曰く、「これ初春をことぶく餅花にあらずや。」爰に於て予是れに教へて曰く、「世人の愚昧なる今に始めぬことなり。試みに是れを論ぜん。夫れくのぎ類數種あり、（讃岐にてくにぎと云ふ）ならかしはあり、一にかしはといふ、くのぎあり、又大ならといふ。又一種あへくのぎあり、櫧あり、柞あり、小ならあり。皆同類異種にして、漢名實の大なるを栩といひ、實を橡實といふ。實小なるを槲といふ。小ならは槲中の小さきものにして、詩經の樸樕、鎭江府志の孛落葉是れなり。實おのおの蓓ありてその半ばを包む。花は栗の花に似て短し。又此の花實の外に毬ありて、形松かさの小さきがごとく、榿の實のぶの實のごとし。是れ亦別に一物なり、其の名をならがうといふ。今餅といへるは、ならがうの初生木の、勢ひ惡くして一ツ處にかたまりたる物なり。是れ畢竟は木の病なり。吉にあらず凶にあらず、餅にあらず實にあら

ず。又今年のみ有るにはあらず、年毎にあれども、常は氣を付けざれば只に止むのみ。今年はからずも俗人の目にふれしより、一犬形に吠えて百犬聲に吠え、己が愚を賣るとは知らず、木に餅のなりたりといふ者少なからず。只是れのみにしもあらず、國の吉事としてこれを祝す。その祝する下心は貪欲よりおこれり。佛を賴んで極樂へ行きたがるも、先の世の榮華、身には金箔をぬりながら、蓮花の腰かけに半座を分けて、鼻と戲れをなし、耳には二十五菩薩の音樂に、豐後ぶしの艶なるを聞き、口には百味の飮食金翅鳥の燒鳥、天の邪鬼の糟漬等を食はんが爲なり。木の餅を祝するも、國家の安全を祈るにてはなく、國の吉事といへば我が身の上にふりかゝる仕合もあらんかと思ふより、知るも知らぬも祝して曰く、木に餅のなりたるは古今無雙の吉事なりと。夫れ天吉凶を知らしむるに、何ぞ小兒の戲れの如きを以て是れをしめさんや。或人曰く、しかれども又其の理もなきにはあらず。萬物陰陽に造化す。陰陽不順なればよのつねならぬ異物生ず。異物の生ずるは吉にあらず凶なり。後醍醐帝の御宇龍馬を獻ぜしを、中納言藤房の卿評せしも理に當りたるにあらずや。予謂へらく、是れも亦陰陽の大なることを知らざるが故なり。造化の限りなき、億萬を以てはかるべからず、豈悉く全きことあらんや。五瓣の花六瓣に咲き、茄子の巾著形なる、釋迦如來の黄疸色なる、福祿壽の天窗の長き、鎭西八郎爲朝が弓手の臂の長きも、皆同じく出來そこなひなり。六瓣の花は必ず其の實雙仁なりし

人を殺す、二子茄子を孕み婦食らへば二子を産むといふも俗說なり。又贔屓のかたから押して理を付くる時は、釋尊の黃疸は黃金の肌と號す。いかに佛なればとて體が金ならば、風呂に入り火燵にあたらば、五體なま金と成つて病者と成るべし。又指を切つて兩替にもやられねば、正眞の金の持ち腐らしなり。殊更夜道の獨り旅、盜人の用心惡かるべければ、損有つて益なし。故に我は佛は生まれ損ひの病者と見ること理なきにあらず。また福祿壽の天窓が長きとて、南極星の化身といへるも、見て來たものなければ請合ひがたし。爲朝が腕の長きは、弓取と盜人には重寶なれども、つまる處は出來そこなひなり。此の類の出來そこなひ今も世に多し。生まれ付の片輪者、葉替りの草木、蟇盤娘、熊女、馬に角あるの類皆出來そこなひにして、ならごうの餅に似たるも、同じ造化の細工屑なり。何ぞかかる小物を以て國の禍福を論ぜんや。　此の開闔　又吉凶を知らしむるならば、天地といへる名人の作者に、春夏秋冬といへる上手の細工人の手が揃つて居れば、まだ外にめづらしき趣向も有るべし。是れ衆人のまどへる事、言を待たずして明らかなり。去年の春にてか有りけん、江戸西が原といへる所に木に餅なりたりとて群集せしも、楮の木に付きたる瘤の如きものにて、今年の物とは少し異なり。去冬家内に餅のなりたる木は柳なり。此の外に餅のなる木の有りやと問はば、貝稻と答へんのみ。」門人笑うて去る。

寶暦十一辛巳年彌生上の九日

麥飯の報條

高からうよからう、安からうわるからうとは、やほの時代の喩へにて、今どきは御合點なされず、ひつはりみせで二の膳にすわり、安札で棧敷へ上る。賣人のやすり買人のかすり、やすりかすりと云ふことを知らねば、いまごろの商賣はならぬと、さる御方の御說法。聞くとそのまゝ早合點、かしこまり子のとろゝ汁より、むぎめしの思ひ付、南鐐一片六進が三進、二一天作の御一人前、つまり上げて見れば、サァやすい／＼作頭殿のそろばんちがひか、ぬすみ物か、ひけ物か、但し又狐をつかひて馬糞でも喰はせはせぬかと、御うたがひの御方もあらうか、そこがかのやすりとかすり、かひての仕合、うりての悦び、すたつた所が南鐐一片、儲けた所が五十か七十、みぢんつもれば山をなし、頭巾と見せてはゝかぶり、いかな御客も足かろく、と御出で成されて、めしを出せ、コリャ酒をだせ、コウイ得意にならしやんせよ。

追加

吉原細見天の浮橋序

天地開け始りしより、天の浮橋のもとにて契りをこめ給ふは、夜發の濫觴ならんかと、あらぬ物しりに問ひければ、いや／＼それは三つ蒲團を知らぬ神代の物語、お江戸の女郎に長崎の衣裳をきせて、京の揚屋で、元祿年中の譬へ。今のお江戸の吉原は、梅が香を櫻にうつし、柳につぎほしたる如く、そろひにそろひし繁華のてつぺん、それがうそなら來て見給へ。

右の一篇は、此の書編集の折柄、四方に求め侍りしか、得がたくてやみにしを、北里にすめる魚躍主人駿市の記憶して、口づから傳へしまゝ、此の書の末にはしるしぬ。

四方山人識

跋

箱根から此方に何やらのなきこのかた、狂文戯作の弘まりしは、此の風來子に止めたり。首創は功をなしがたく、因襲の業は致しよく、近頃は其の糟を食らふ者多く、作者で目をつく樣なれども、光

る物は飛んで天月となり、黒いものは泳いで水虎となる。何那今の通眼世界、可此可此かの志度浦、吹き出す風來山人、筆をとればよく世上の毛の穴を捜し、舌を出せば阿蘭陀南京までも只一言め、筆の花は梅さくら、舌の長さは三千丈。その風の吹き來るたびに、隨筆したる穴さがしと、太平樂の短文あり。四方山人その天徳寺とならん事を惜しみ、集成ねて飛花落葉と題す。これおかしは羅漢の觀想たれども、今は書肆の巾著の工面となる。意味は播州三箇月味噌、讀む者覺えず舌を鳴らさん。ごあさあ沾之哉々々々貫へたらばよかんべい。箱根から先にはないぞや。

天明三年

八白里野

天放山人

跋

易に曰く、雷は來なり。能く百里を驚かし、聲あれども形はなしと。昨日聞く風來山人、飛んだ噂も七十五日、今は昔と成田屋の、人の噂や我が身の上、この人にして斯の疾、六道の辻駕籠にのり、極樂淨土の居つゞけとは、御釋迦も御存じあるまいと、留守の閑庭を覗き見れば、飛花落葉のちり塚のちり、多くの人の目にふれば、見ぬ世の友ともなれかしと、さる御方の思ひ付、わがむだ口も跋の

心、やうやくこゝに工作けたり。時に天も明るき三の年、兔の耳の長き春の日、虚言八百里の野の片端、逃げ水の流れにのぞみて、三平蒲藏器にかへりて誌す。

跋

佛は衆生の爲に花を降らし、勇士は戰場に火花を散らす。大盡は末社のために紙花を飛ばし、折介は夜鷹の爲に鼻を落す。これ等は落しても散らしても懸替も有るべけれど、此の花の外に此の花なきは、いはずと皆樣御存じの作者の巨擘風來山人、盛りを見する槎もなく、遍陽散の岐穴なく、賊風の心なく、吹き散らしたる花は根に、復花となりしことを、惜しむべきことにあらずや。此の頃嘗て四方山人、彼の風來の書き置かれし、劇本の後序新樣物の報條なんど、敗紙に紛雜れ込んで還魂紙とならん事ををしみ、編みて一部の小冊となし、櫻木に花と開かしむる事とはなりぬ。飛花落葉と標題せるは、春は櫻の花の雨、秋は落葉の村時雨、徒然を慰むる端香の強い茶飲みばなしの、はなしの種兒にも換へ給はば、故人の鼻を高くして、亡名に花を咲かする心で、名をつけた物で御座るてやと、四方山人の話にいはれたりしを、鼻紙に書き留めて、此の書の跋とはなし侍る。

天明三年むつきの頃

風來山人遺稿

下界隱士天竺老人述

細見嗚呼御江戸序

女衒、女を見るに法あり。一に目、二に鼻すぢ、三に口、四に生際、膚は凝れる脂のごとし。歯は瓠犀のごとし。家々の風好き〴〵の顔、尻の見やう親指の口傳、刀豆鬼橘の秘術ありとし、これなきいおこと等閑ならねど、牙あるものは角なく、柳の翠なるは華なく、智あるは醜く、美しきに馬鹿あり、靜かなるははりなく、賑やかなればきやんなり。顔と心と風俗と、三拍子揃ふもの、中座となり、立者と呼ばる。人の中に人なく、女郎の中に女郎なし。貴きかな得難きかな。或は骨太毛むくじやれ、猪首獅子鼻側尻、蟲喰ひ栗のつゝくるみも、引け四つの前後に至れば、餘つて捨つるは一人もなく、ひろいところがァ、お江戸なり。

午のはつはる　　福内鬼外戲作

抑この風來假名文選といつは、錠前鐵物なにしの秀句と聞ゆれども、其の樣な茶な事ではなし是れ我が先師の筆遊にして、狂文戲作を書く人には、白氏の文集紫清が艸紙、夫れにもまさる至寶なり。たれ先生の文たるや、活々たること龍の如く、彼の唐山の文選莞筵を、はるか足下に排川莞筵、詞に咲かかる花莞筵は、堅いやうにて和かく、浮世莞筵の世話にわたる、いふにいはれぬ味い事、あたかも天にあらば比翼莞筵の、飛んだはずんだ筆拍子、文地にあらば連理の枝の、寢莞筵を踏ならしも悪落に類せず。かへすがへすも世上の戲作者、草履をぬいで下座莞筵に手をつかね、此の書を拜して筆を採れよ。我がものよしの先生自慢、書して序文の明地をふさぐ。

于時天明八の歳霜月二十日、他所へ出懸の追つとり筆、出たら目に述之

萬　象　亭

佛法寄噺菩提樹之辯自序

前板其の砌大いに行はれ、所々磨滅に及び、見易からねば、斯界の文章埋木となるを悲しみ、このめる人の望みに任せ、再刻なしてこゝに加ふ。

或人南無阿彌陀佛の六字を註釋して曰く、それ南無とは南無と書きたる文字にて、死んで仕舞へば皆身なし、後生を願へといふ心に、阿彌陀とは世の人を救はせ玉ふ網だ程に、隨分賴めとの御誓願。佛とは念佛を高聲に稱へる名聞なり。口の内にしぶつくと申せよとの事なりと、しかつべらしき傍より、如來とは扨如何。是れには殆どこまりながら、いひ掛り引かれもせず、嵯峨の釋迦でも善光寺でも開帳に出ることは、衆生濟度は勿論なれども、二つには參詣の散錢をによらふ故、そこで如來と申すといへば、一座どつと笑ひけるを、此の書の序とはなしけらし

風來山人誌

菩提樹之辯

今年六月朔日より、本所廻向院において、信州善光寺如來の出開帳、參詣羣集前代未聞のことは、人々の知る處なれば、今更いふもくだ／＼し。ほどなく日延の日限もみちけるにや、閏七月十七日の曉限りに閉帳有りける。然るに十七日の日中より、誰いひ出すとなく善光寺如來の奇瑞によつて菩提樹を降らし給ふと、我先と是れを拾ふ。三十年前開帳の時も降らし給ふ。又今年もふらし給ふは、誠に世は澆季に及ぶといへども、佛法の奇瑞有りがたしと、諸人僉渇仰す。おひ／＼高貴の御方より、予に是れを鑑定せよとて見せ給ふこと七八ヶ處に及べり。予皆眞の菩提樹なりと答へける。或日門人何某來掛りて問うて曰く、先生彼の品を以て眞の菩提樹と答へ給ふ事、甚だ以て不稽の言なり。夫れ菩提樹のことは、翻譯名義集に、佛其の下に生じ成等正覺し給ふ、因つて是れを菩提樹といふと、其の形狀濟確類書に出でたり。又元亨釋書に、千光國師榮西入宋の時、菩提樹の種を傳へて筑前國香椎の宮の側に種ゑしより、京都泉涌寺六角堂、同寺町、又叡山西塔にありと、貝原先生大和本艸に詳かに出されたり。又筑後國鎭西本山善導寺中に、昔より大木有り。東都にては東叡山の寺中

に有りて、先生固より能く知れる所なり。其の實は豆粒より大にして、念珠に作る物故に菩提樹と云ふ。今降る處は麥粒の如く、何ぞ得しれぬ木の實にして、念珠に成るべき物にも有らず。降つた所が役にも立たず、降らぬとて不自由にもなし。捜神記をかんがふるに、粟を雨らし麥をふらし、石をふらし土をふらし、灰をふらし毛をふらし、血を雨らし肉をふらし、虫をふらし魚をふらし、或は沸湯紅雪をふらすも、皆譯のある事なれども、つまる處なきにはしかず。若しも佛の靈驗ならば、虚空に花降り音樂聞え、天津乙女の羽衣の曲にて、諸人の心を慰むるか、同じく降らす物ならば、錢金か麥米なら、下の〳〵ろき、如來の御蔭と有り難く思ふべきに、江戸中から近在掛けて一萬兩餘もせしめて違いて、けふ閉帳の名殘とて、降らぬ物に事缺いて、役にも立たぬ菩提樹の、しかも贋物をふらすとは、さりとはあたじけ如來なり。又熟案するに、日本書紀第十九の卷、欽明天皇十三年冬十月、百濟の聖明王、釋迦佛の金銅の像一軀、幡蓋經論等を獻ず。小墾田の家に安置す。國に疫病行はれて、治療すること能はず。物部の大連尾輿、中臣連鎌子同じく奏して、佛像を難波の堀江に流し棄つと。此の説に據る時は、實の善光寺如來といふは、釋迦如來なるべけれど、これは先づ差置いて、釋迦にもあれ、彌陀にもあれ、浪花の堀江へぶち込まれ、鰐や鱸と相宿の住居なりし。これを川柳點の前句附に、善光も初手は水虎と思うて居といへるごとく、纓と見付けて簽に入れて、處々方々

負ひ歩行きたる佛といふは、何にもせよ一體にて、觀音勢至のきたはなし。是れをも又川柳點に、二菩薩は歩行かつしやいと本田いひとは、後世三尊に作り直せる杜撰を笑ひたる句作なり。扨又書に善光如來を負ひ、夜は如來善光を負ひ給ふといふも、有り難い事のやうなれど、さりとは聞えぬ仕方なり。晝の内長の旅路、重い佛を負ひ歩行き、草臥れて居る善光、せめて夜はとつくりと足踏み延して休んでこそ、旅の勞れも直るべけれ。夜がな夜一夜金佛に負はれては眠る事も成るまいし、寒い時には冷え渡つて、さりとは困つた物なるべし。扨又極樂海道の切手なりとて御印文を戴かす。若し地獄極樂ある物にしてからが、一生涯佛を念じ善根を積んでこそ極樂へも至るべけれ。夫れさへ上品上生より下品下生に至るまで、九品の淨土の別ち有つて、適に極樂へは行かれぬと聞きしに、壹分に壹貫賣る時も、壹貫五百賣る時も相場に構はず、百文で極樂の切手の安賣り、世智辛い人間ども、二百出して蹴轉を買うては、ちつとの間の樂しみなり。其の半分の百だして、億萬劫が其の間、百味の飲食振舞はれ、天人を揚げ詰めにして蓮の臺に店賃入らずの活計歡樂、是れ程安いものはないと、我一と戴いて、只さへ善事は嫌ひにて、惡作りたがる凡夫ども、御印文を楯について、額に極印がすわつたからは、つかもねエどんな惡い事しても地獄へ落ちる氣遣ひなしと、衆生の心を安堵させるは、跡をかまはぬ肝煎が、判賃取らう許りに、どこやらへ遣るべき宿なしを奉公にありつかせ、主人の難

儀かけまくも、忝くも如來ともいはるゝ程の身を以て、さりとは不埒千萬なり。斯くの如く、ニツとして取り處もなき沸なるに、先生も雷同して、菩提樹なりと極めること、以ての外の不見識、言語道斷のことなりと、苦り切つて申しける。其の時山人莞爾として笑つて曰く、子が詞一々理あるに似たりといへども、一概の論なり。先づ日本紀にどうあらうが、善光寺でも阿彌陀といひ、世間一統阿彌陀なりと、覺えて居るが阿彌陀にて、何の邪魔にもならぬことと。小刀細工の青表紙、いらざる所へ骨折つて、法界悋氣闇燒餅、さりとは無用な穿ちなり。さて御印文といふ事も、あさとい樣なることになれども、佛とも法ともわきまへぬ、人間の皮かぶつた猫また姥や、きやん／＼わん／＼の類には、仁義禮智は間に合はず、百位なら極樂へ往つても見ようと、思ひ立つが取りも直さず仁の端、佛家でいふ結緣にて、めくりに負けてはだかに成つたり、夜たか買うて鼻を落すほど氣の毒にも思はぬことなり。また昔は善光如來を負ひ、今は如來善光を負ひたまふとは、陰德あれば陽報あり、善のむくいいちじるく、負へば負はるゝといふ比喩なるべし。こゝらをあしく心得ると、牛馬にむごくあたる人は、死んで牛馬になる故に、佛におごくあたる人、死して佛に成るといふ間違ひも有る物なり。按ずるに三國傳來の閻浮檀金は藏して置いて、新たに三尊にせし譯は、客の多い女郎の名代をだす、まづ其の如く、引手あまたの御手の綠、來る人多きも一方ならぬ閻浮檀金の名代に、新造如來を出されたり。そ

れうしょんぼり只一人では、と見た所が寂しい故、歩行かしやいの二菩薩は、二人禿の心なり。扱又開帳の名殘狂言、いかにも花降り音樂聞え、東遊びの羽衣の曲が相應といふことは、如來をして喰ふ身の上で、知らぬ事はなけれども、五々の菩薩の管絃天人の舞といふも、やはり昔の通りなれば、土佐の芝居見る樣で、甚だ古風なこと故に、慶子路考杜若が所作、噺町の手合には寄つてもつけず。吉はれぬ出來し立てなしに味噌つければ、極樂の株仕舞と思ふ故、是れもさらりとやめしと見えたり。又錢金をふらしては、此の廣い江戸中へ、五千兩や七千兩では、どこのはなへも行き屆かず、出開帳も權兵衞ごんにやく、こゝは一番錢入らずに、輕く刎ねる仕方が有らうと、如來も茶番をする氣に成つて、思ひ付かれた菩提樹なれども、さう/\は有り合はさねば、えしれぬ木の實を取り雜ぜて、おやらくらをやらかされたり。とは知らずして凡夫共、ふつた無上に有り難がれども、聊かも害にならず、若しも腹へ入れる藥ならば、辨じ樣もあるべけれど、天狗の髑髏同樣にて、何の絲瓜の可愛さうに、落ちたを取つて居らるゝ物を、我一人知つた顏にけちを付けるもおとなげなしと、菩提樹にして置くなり。是れにも議論有りやことといへば、門人も倒れた顏にて、詞なく歸りければ、山人も閨に入つて、とろ/\とまどろみける。然るに夜も更け人靜まりて後、表の戸口をとん/\/\、叩くは秧鷄の聲にもあらず、節季でなければ借金乞の氣遣ひもなく、誰と答へてば、からりと明くれば、思ひ掛け

なき善光寺如來、金色の光を放ち、近う〳〵と招かせ給ひ、こゝは一番、善哉々々、我はこれと云ひさうな處なれども、近年雜劇で不斷するゆゑ、古い趣向と笑はれんが恥かしさに、しら化と出掛けたり。其方最前菩提樹の辯、茶にしたるいひまはし、近頃以て痛み入り、面目もなき次第なり。勿論我等が方便で、由事なやらかして人の目を晦まさうと思へば、竹田の關捩出羽の手づま、藥研堀の輕丈が下役ならるはやゝ兼ねもせまいけれども、佛法に奇特なし。たれも開帳が不當りで難儀にも及ぶならば、又思案も有るべけれども、流行り過ぎて困つた位、何に不足のない仕合、菩提樹をふらして入りを取るにも及ばず。又重ねて出る時は三四十年も後の事、今の人間はぐわらりと替れば、跡の仕込にも迂り遠し。殊に降らせた菩提樹といふは、其方も知る通り正眞のものではなく、倭名水木、又俗に水草ともいへる木の實を、鳥が好んで喰ふ物にて、彼の水木の實の肉は鳥の腹中で蕩けても、中の核は其の儘に糞に雜りて出でたるが、度々の雨に能く漂射れて、そこ爰に落ちて居るを、一人が見付けて菩提樹が降つたといへば、百犬聲に吠ゆるなり。眞の菩提樹とは形狀も違ひ大きさも違ふなり。いかに衆生が文盲なとて、如來ともいはるゝ者か、座頭に熱湯浴びせる樣に、贋物を掴ませう筈はなけれど、愚癡無智の凡夫ども、おれを贔屓の引きだふし、却つて恥をかかせるなり。成程一圖に祈るものは、奇瑞もある筈の事なれど、千人に百人も誠の信心で來るは少なく、衣裳自慢器量じまん、見

せに來る人見に來る人、納涼ながらの參詣やら、負けるか嫌ひの日參講中、提灯の伊達前後を爭ひ、念佛の聲遠近にひゞく、人そばへの朝まゐり、鄰のかゝをそゝのかし、門前の茶屋で出合ひ、おれを出しに大それたことをして、日比の思ひをはらしたも如來樣の御陰、有りがたいといはるゝ時は、身をそがるゝよりもせつなけれど、一々罰も當てられず。實に此の度の菩提樹のことは、臺座後光をぶちこはされ、とつかへべいの飴賣が手へ渡る徳もあれ、おれは夢にも知らぬ事なり。都て世上の習ひにて、何ぞ變つた事があれば、名高い人の名を立てて、牛若が切つた石ぢやの、辨慶が捻岩ぢやの、片目の杜父魚武文蟹、石芋、石蛤、臼の目切つたも弘法大師と、あられもない名を立てらるゝ。おれも善光寺の如來というてや、佛仲間での立物ゆゑ、此の度の菩提樹の樣に、無い名を立てらるゝも常不斷ある事なり。扨又おれを安くして、引け四ッまで見世ざらしの新造ッ子の樣に思やるさうな。成程天竺より渡つたるには觀音勢至の脇立もなく、閻浮檀金に違ひなければ、無法の族奪ひ取らんことを慮つて、祕佛として藏し置くなり。然るをなまま物じり共が、いや名代ぢやの前立のと、色々理窟をこねるは、さりとて若輩千萬なり。抑實の無量壽佛と申し奉るは、有るがごとく無きが如く、遠きがごとく近きがごとく、草木國土引きくるめて、皆如來の細工なれば、廣大無邊いふ許りなし。閻浮檀金も燒付も、聊か形容を標する許り、皆同じ前立なり。人間の目から見れば、金は尊く燒付は

賤しい樣に思へども、佛の目より見る時は、金も銀も銅も皆、圓の土にして、佛の照らす光明なり、斯く廣大に說く時は、本尊も念佛もいらず、儒者の獨りを愼み、神道者の正直許りで濟みさうなものなれど、譬へば弓の稽古する者、すびき藁砧許りで手前さへかたまれば、的に掛るに及ぶまじけれども、我が身を我が心で試すには、其の手前のかたまりしか、かたまらざるか、委しう分らぬ物故に、的に掛けて射て見れば、其の矢は上だ下だと、的を目當に手前を直す。本尊に向つて念佛申し、惡念を去つて善心に立ちかへるも、彼の的を射る心にて、閻浮檀金でも燒付でも、目當許りの事なれば、貪著はなきことなり。只人々の力相應、弓は強くも弱くもあれ、的は金でも燒付でも、一心不亂に願ふ時は、風やんで埃なく、浪靜まりて水清し、惡念邪氣の雲晴れて、硝子の如くすきとほれば、心が即ち火珠にて、誠の如來映らせ給へば、其の時悟りを開くなりと、宣ふ聲の耳へ入りしは、是れも我が鼾にて、如來と見えしは有明の、行燈幽におちつきて、夜はほのぼのと明けにけり。

跋

さる御方、善光寺の緣起を聞きたまひ、夜は如來善光を負ひ給ふといへるを難じて宣ふには、閻浮檀金の尊像は小像なるよし、善光が五尺の體を一寸八分にておひ給ふとは、甚だ以て心得がたしと。或人答へ申されしは、そこが佛の通力にて、一寸八分の尊像を、五尺にも七尺にも忽ち變じたまふなりといへども合點し給はず、左程通力自在ならば、尊像變じて負はれんより、竹輿を雇ふが近道なるべし。斯く智慧のなき如來にて、衆生濟度は覺束なしと。ある人又申しけるは、一應竹輿は借られしが善光路錢を持たざれば、なんぼ神の通力でも、柿の蔕では合點せず。爾の時如來の小言に曰く、嗚呼錢なき衆生は度しがたし。

門人　無名子愼書

風來六々部集　終

風來六々部集跋

千里をはしる馬ありといへども、これを知る伯樂なければ、四ツ谷街道の肥取馬と共に引かれ、人を知る識なければ、共に遣つて見ようのはなしも出來ず、なんでも一番やつつけべいと、やたら骨を粉にして、命を縮める程の思ひをしても、殘るものは借金。ソコデマヽヨ今年はちやうど庚申、何事も是れから先のえんぎにもと、ふじ參詣の思ひたち。牛は牛づれ馬は馬連れ、同氣相求める友三人打伴ひ、行手の道も笑ひ艸、採藥しても漢名に、また蕃名もむつかしく、調べた所がひまつひえ、費えるまゝにさしかゝる、御山の廣大靈異なること、今更いふもくだくだし。昔語にふじ山で、近江の湖水を埋めたれば、餘程の新田ができるとは、やつぱり是れも山ばなし。また金銀銅の出るやうすも見えず。物廣大なれば手が屆かず、手のとゞかざるは金のたらざるなり。こゝにおいて止むにはしかじ。止むに至りては古人を友とするにしかず。友としてこゝろを慰するものは、風來六々部集にしくものなし。先生元より世に用ゐられず、世をすつとのかはに引込みしも、その智の餘れるなり。智餘れば人々恐れをなす、恐れられれば用ゐられず。嗚呼難いかなこゝをもつて今六部を増補して、上[illegible]

部の利を得んと欲すと云ふ。

小膽山人

四方のあか

蜀山人

四方のあか

このふみや、四方の赤の一本氣にして、かりにも水くさき駄酒をまじへず、もとより巴人亭の本店につみて、かつて春日をだに開かざりしを、おのれひそかにこれをうれへて、こだみ琉球のかゞみをひらき、樽底のおくをさがし、德利のかけたるをおぎなひ、四斗樽のもれたるを集めて、しるしの杉のはん木にのぼせぬ。もしきき酒の口巧者あらば、來りて名酒の味をなめよ。暖簾にしるき扇巴、これを居酒屋の門にかけて、一字の損益をこふといふ。

宿屋飯盛しるす

四方のあか上

達磨ノ賛

拈華微笑の枇花は、正法眼藏の帶をとかせ、教外別傳の正傳節は、文字大夫が流されしすゝ盞の一葉の猪牙に乘つて、九年面壁の居つゞけとは、汝が尻のくされ緣か。金がふんだんだるまなるか　からから喝。

九年酒のつまりざかなの座禪まめのほかに本來一物もなし

遊女ノ賛

誠はうその皮、譃はまことの骨。迷へばうそも誠となり、悟ればまことも譃となる。うそとまことの中の町、迷ふもよし原、さとるもよし原。

傾城のまこともうそも有磯海の濱の眞砂の客のかず〱

車どめ

たれこめて、小春の行方も知らぬまに、まちし櫻の花をかざれる、御影講も程なくすぎぬらん。今日な

霜月朔日とかや、雪は跡にふりぬ、軒の氷柱のつらみせとて、世にある人の浮かれ出る日なめりと思ひ起して、やをら枕を擡げ、夜のものすべらし、西おもての障子、二三寸ばかり押しやりたれば、さなきだに秋の野らと荒れにしまゝの、人めも草も枯れはてたるに、ふり積る木々の落葉は、夢にだも帚といへるものを見ず。南天の實の二房三房、ひえどりのついばみ餘せるもをかし。あたり近き家るの、棟の板間のいたみて、ところどころ筵やうのものうち著せたるに、苫けの煙たちのぼりて、さながら苫船のけしきをうつせるも興ありて、なまなか前の主の物ずきしおける、ぬりだれめきたるもの一つもなくて、去年なん修理くはへたる用心土の、無用心に泥にすさこね合はせたる、栗栖野の柑子にも恥ぢぬべし。杏こそ孔子の家にもあなりと聞けば、これのみ博士めきたりなど、誇らひみるに、長き繩を梢にかけて、かたへの柱に結びつけたるは、あなあさまし、二つになれる童の、しとゞ濡れたる露のしめしの掛けどころとは。すべて冬がれの庭の景色、しだれ桃のしだれんとするに、葉なければ木振あしく、柊のつのめだちて、やがて節分の用にたたんと、蛸めきたるも憎し。牡丹の花は根にかへりしやら、谷のまゝにて便りもなく、籬の菊も萎みつきて、菊煙草のよきむしり比なり。松ふぐり朝霜にちゞみあがり、竹藪ゆふ風にばさけたり。三徑荒れに就きたるなど書けるも、僮僕の類あれば、かかる不掃除のきはにはあらじ。誰がかみ捨てし鼻紙のくづ、えぬの子のえも言はぬものま

り置ける、いとむさき中にも、梅ばかりは折をたがへず、枝ぶりしやんと、蕾りゝしくぐび出せる、げに一陽の動く所と、うちうめきつゝ、猶も容見出でんとするに、窗につるせる手習の草子の風にふらめき、軒端に掛けしかけ竿の、蒲團の香も惡くさきまゝ、もとの如く障子引きたて、ついそれならについ臥しぬ。

はやり風ひきこもりたる車どめ御用の外の人は通さず

雪見のことば

わすれては夢かとぞおもふといひし、宮樣の御隱居所でもなく、佐野の渡に駒とめし、半合羽の旅人にもあらず。またたちあがりて、梁王の園で、賦といふ所も氣づまり、さればとて、簀子のはしに鉢の木の股火も、あまりなるべし。鶴氅を著て立ち出でんも、加賀蓑の見え坊にひとしと、鵞毛に似たるとんだ料簡より、ふるめかしいが、王子猷が興に上たんばかり乘り勝ち、剡溪の船を膝栗毛にかへ、草鞋うつ藁店の軒に、臼と盥のけしきを見、むつの花の江戸川のはたを、えぬの子とともにさまよひつゝ、お寺の茶の木にちよとどまれとうち誦し、こりては思案にあたはざる、たはれ歌のつどひ所にまとゐしつゝ、風雅でもなく洒落でもなく、詩とも歌とも連誹とも、えしれぬことを書きちらして、二月の雪の降り損ひを、大目に見てやることとはなりぬ。

いざこらば閑めし雪と身をなして浮世の中を轉げありかん

西行法師をとぶらふことば

あたら櫻の咎といひて、大木のはえぎはから、惜しげなく切り倒したる人は誰ぞ、清水流るゝ道のべの、柳かげに小便したる人はたぞ。あるはしろかねの猫はかはねど、江口の里の飯盛に心をとめ、あるは鴫たつ澤の鴫燒の三茄子より、一富士の初夢にまさしく見えし姿さへ、むかし今戸の夕煙り、いづちの風にやなびきけん。ねがはくばこの狂言綺語、三文ばかりの布施ともならば、花のもとにて春死なれし和尚の、今日祥月命日、一ぺんの廻向をなさんといふことしかり。

山ノ手閑居ノ記

わが庵は松原とほく海ちかくと詠みけん、武藏野の廣小路にむすべる、芝のはてにもあらず、ちはや振神田淺草の賑やかならぬも、よしや足引の山の手になん住めりける。春は桃園の花に迷ふ外山の霞たたぬ日もなく、夏は江戸川の螢をみる目白の瀧の音たえず、秋は高田のかりがねに、民の貢の木進をあはれみ、冬は富士を根こぎにして、わが鉢の木の雪とながむ。四季折々の美景をいはば、番町の道の一筋ならず、大木戸の駒のひきもきらざるべし。ふる寺の甍やぶれて、貴無盡の講を催し、神の宮居も所せく、夜遊女のふしどとなれり。頭に置くしも屋敷守、憂きをみるめのうら貸屋まで、た

だ何となく鄙びたり。なべも富みける殿づくりに、みつばよつばの甍をあらそひ、おきさゐ著たる身のほどこそ、いさしら壁のいちぐらを羨むともがらは、この地の住居はなりがたからんか。さはいへ、ひとへに深き山にかくれん坊をし、とほき海に沖釣をせんとにはあらず、吏にして吏ならず、隠にして隠ならず、朝野の間にのがれんとならば、いづこか此の山の手に如かざらめやは。
窓の内に富士のねながら眺むれば只山の手に取るとこそ見れ

遊女高尾朱椀ノ記

此の器や、山谷わたりに名だたる遊女、三浦屋のなにがしとかや、最上氏に従良せし時、百の椀器をつくりて、親しき限りに分ち与へしとなん。時移り事さりて、原富の子香玉子の家蔵となり、美人の彤管にも換へざるべし。原富は、むかしあし引の山の手に名だかき、三絃の妙手なり。
今も世に名のみ高尾の紅葉ばは朱椀朱なしきむかしなりけり

土偶人ノ畫ノ賛

こゝろは巧畫師の如く、畫は泥塑人のごとし。静かなる時は硯よりもかたく、動く時は筆よりもはやし。
あらがねの土人形のおもてこゝろを見ていたづらに動く畫ごゝろ
四方のあか上

鰹魚贊

吾が朝にてはかつをと呼び、もろこしにては松魚といふ。「東西寶鑑」、北狄西戎、四維八荒、天地けん好が「つれ〴〵草」に、大根おろしのおろしかけ、先を辛子にかかれても、「延喜式」には供御となり、「萬葉集」には水の江の浦島が子が、かつをつり鯛つりかねて、七日はおろか七十五日生きのぶる、三千本の初物を、誰か一本買はざらめや。

鎌倉の海より出でしはつかつをみな武藏野のはらにこそ入れ

又

人と名所は古きを求め、肴と器物は新しきを求む。卯月ばかりの初がつを、皿に盛りたるいきほひは、鯛もひらめも鱸も鯉も、首尾をおそれて鱗を正し、ひれふしてこそ見えけれ。むかし天文六年の夏、北條氏綱すなどりする小田原につらぬ。鰹躍つて船に入る。氏綱勝負にかつをと稱す。同じき七月十五日、上杉朝定と戰つて利あり。然りしよりこの方、諸士戰場の門出に、專ら鰹を食ひしとなん。今太平の御代におゐて、武を忘れざる左ききども、庖丁のきれ味を試み、辛子のかけひき、大根おろし、さしみのさしもの箸とりて、酒のたゝかひ必ずかつうを、大いに納屋の商人に利あり。兼好がすねて鰓をたゝかば、われ生擔桶を洗ひて待たん。

兒戲賦

ひとり邵堯夫が枕を高うして、わらはべの戯れを見れば、こよなう心なぐさむ業なれ。年立ちかへる旦の空、松たてわたす大路に、千年の綠を手にならして、散りうせぬ葉をうち散らし、やゝ春ふかき垣根のうち、雪間の草わかやかなるに、桃の木、桃の木と、呼びもてゆくは、己がふたばの生先もと賴もし。午まつりの鼓は初がみなりに先だち、いかのぼりの絲遊に大人も心ひかれたり。ほとゝぎす鳴くや五月のあやめうちは、幟の紋のあやめもわかず。行きかふ空の天河、星の手向の短冊には、草紙にあらぬ硯を洗ひ、荻の上葉の風よりも、唐獨樂の音のかすかに、博多ごまの手に取りあへず、貝まはしの鞭うつ間なく、降り積む雪をまろばしては、消ぬべき罪もむくいもなく、碎くる氷の上をすべるも、世わたりの危きには勝りなん。鬼ついはに追ひつめられて、ひとあしがきの間近きにとらまり、かくれん房はかねてより、ふし柴部屋のすみにかゞむ。草履かくしのはなをたづねて、便りなきところに迷ひ、手拭の目かくしは、しるべなき闇もあやなし。勇む心のこまどりは、子取ろ／＼とわなゝき、つる／＼といふ名にめでて、籠目々々とうたふ。片足立して、ちんがらこと云ひ、たゝむきをかゝげて、てんぐるまとす。竹馬は車にひかれ、蜷の貝は片足にかゝる。雲居の雁を詠めては、鴈々みつ口とよび、水にすむ蛙をうづめて、茶萱殿のみとぶらひを營む。しげき往來の街に立ちて、

大道めぐりのめぐる〳〵も危く、ふもとのちりの掃溜にのぼりて、山のぬしはおれ一人とうち誦したるもおこがまし。西どつちに方の名を知り、履を蹴あげて陰晴をうらなふ、蝸牛の角あらそひも、稚き指きりにやはらぎ、むくろげのむくつけき遊びも、穴一のいちはやきかけごとにかはれば、孟母が三度店をかへ、墨子が絲のくりごとも、お萬が紅の色々に染み、くろ〳〵の紙の向き〳〵なるを、手習草紙大ざらへにさらへて、鳥の跡の千二郎、久しく留めんことに、濱のきさごの爪彈きして、笑はれんもうしろめたければ、ひい〳〵たもれ、ひとりこち〳〵ぬるわざになん。しかはあれど、泥の羹、塵の飯のまゝごとも、韓非子が筆に殘り、ふれ〳〵小雪の唱歌も、鳥羽院の御詞に傳はれる事のなつかしければ、いでや富貴利達の交はりにめかこうして、孩提嬰兒のしやうに入らんとこそ。

庭湖石記

芥子の中に須彌を入るゝとは西域の虛談、大佛の鼻の穴へ傘さしてはひるとは南都の實說。大は小をかね、實は虛のごとし。こゝに攝津國豐島郡櫻井谷水原氏の庭中に一の奇石あり。その圓かなる所おのづから琵琶の湖に似たればとて、庭湖石と名づく。水を掬すれば杜甫が月を手玉にとり、目をすゝげば孫楚が齒みがきに流れをからず。此の石もとは三草山の麓にありしを、民草のふかきめぐみの露の玉、轉ばしあへぬ心をはこびて庭中の物とはなしぬ。これもまた石より重かるべし。

・手水鉢ひくや千びきの石山にむかへばこゝも琵琶の海づら

猫　賦

鷄のあしたを司り、犬の夜を守る、なべて斯様のなれ養ふべきその類、あまたあるなかに、鳥は心をなぐさめども、摺餌まきゑの煩はしく、魚は樂しみを知るといへども、才子すゝみに暇なく、狆は干菓子のあたひに乏しく、蟲は聲とるてふわざのみ、ともに飼へるに損ありて、益なきものなるべし。こゝに一の小畜あり。その飼ふや飯をもてす。鮑貝一つ鰹ぶし一連にて、一年の儲けに事足りぬ。腰に逸物の毛をかくし、眼に六つの時をきざむ。あら玉の年の始めは、若水に手水つかひて、じくき爪をとぎ侍るも、妻こふころの心ちにや。たま／＼涅槃會にもれたるは、菅原が梅を忘れたる類にやとおぼつかなし。夏は牡丹のかげに眠りて、胡蝶の夢にたはぶるゝも、つひに垣根にうかれて、となりの籔の筍をや肥しぬらんとあはれなり。秋は木天蓼の葉にふれて、おのが藥を求め、冬來ればかまどに入りて、灰毛の名に負ふもをかし。こまと呼び、からと名づけ、虎はまだらに、烏は黑し。しろがねの貌は西行が手に觸れ、首玉の綱は女三の宮にひかる。八蜡の祭にあづかりては、孔子の嘆きをのこし、五つの徳を數へては、彬師が戲れをつたふ。昔より國に盜あれば、將をえらびて伐たしめ、家に鼠あれば彼をやとひて取らしむ。大凡桁をはしるもの、牆に穴ほるもの、懸想文ひ

きて名をたつるもの、棗くらひて人を噛むもの、油嘗むるもの、器かじるものも、かれを恐るゝこと甚しく、一度きつと睨むときは、手足を措くところなし。彼がかたちの虎に似たるも、その武く勇めるによれるや。されど虎死して皮をとゞむれども、鬼の犢鼻褌にかくばかり。六乳の皮は三線となりて、なれし昔の膝枕、思ひの色音にひかるゝも、またやさしき方ならずや。

童のために乳の無きをなげくことばに

昔大江匡衡も、斯かる憂き目にあひしにや、ちもなくて博士の家の乳母せんとはとか言ひて、十日一歩の乳附をやとひ給ひしとなん。むしろ嬌兒の乳をたつとも、郎が慇懃をたたじとは、古樂府にも見えたり。飯なくば蕎麥でもくはん。紙なくば手ばなもかまん。錢なくば使はでもありなん　地頭に譬へし泣く子を抱へて、乳のなきこそ悲しけれ。

舌鼓うつほどたんと出でずともちゝとなりともちゝ出でよかし

日を經てかた／＼の乳いでにけり。

鼠をせむることば

偃鼠河にのめども腹に滿つるに過ぎず、汝なんぞわが肉池を飲みほして、わが印石をして顔色なからしむるや。夜もあけば猫にはめなんか。日が暮れば陥しに掛けんか。地獄おとしか極樂おとしか。

罪の輕重をますおとしにはからば、漢の張湯がためしなきにしもあらねど、もし白鼠と内緣あらば、大黒殿のおぼしめしもいかゞと思ひて、石見銀山一等をゆるし、鼠衣をはぎ、鼠算の過料をとり、壁の穴々、けたの隅々、のこらず追放するものなり。この趣を西寺の老鼠より、若草のはつか鼠にいたるまで、よく〳〵申し聞かすべきものなり。

むらさきの外に憎きはにくいれの朱をうばへる鼠色かな

なつくさ

おのが五月の雨のなごり、猶霽れやらで、名高き雪も消ぬといふなる、日吉の祭も近づきぬらし。あらがねの土のこと用ゐる比は、暑氣の見参とて、世にかゝづらふ生若人など、袷がさねに襧ひきはり、綟子肩衣のかたち、雨ふゝゐにうちひしけて走りありきつゝ、扇ぱち〳〵聲づくろひし、つぎつぎしからぬ時候にごきげんようなど、笑ゐふくめたるなりの、すくわいめいて憎しや。あなうの花の咲きそめしより、さなきだに心のすね〳〵しき、すねくさてふもの、夏草と共に茂りあひて、立居るべくもあらねば、公私のことも大ながしに流い、ひたごもりに籠りてのゐ過い給ふ。れいの筆まめの本性なれば、すいかへしの淺草紙の鼠いろなるに、手習の樣にて、

此の頃は世をすねくさのうゐ果てゝたゞ膏藥をねるばかりなり

ごくねものさうやくにはあらで、頭のさうやくだに得させねば、おどろのかみのおどろ〳〵しう、さながら大津繪の鬼かと淺ましう、月代はたゞ稗蒔のごとたかうなりもしつ〳〵に、烏賊の甲もせで、れる鷺も立てまほしう、そこらかい撫でし爪の上の垢もしるく、汚くも惡臭くも、哀れにもあつかましくも、虱ぶづ落ちぬべし。前栽の爲體、草木のたゝずまひも、何がしのえせ受領の下屋敷だつ心地して、たゞ〳〵しき木下闇に、やぶからしのいやみ絡みて、あるじのむしやうもあらはるゝに、小百合葉の誇らかに笑みたると、わすれ草の生ひいでたる、これもまた松ならねど、種しあればと打ちうめかる。軒近う南天の花のさゝやかにかつ散るも、蜘の巣につゝまれて露おもげなる哀れなり。誰が家に燕はらふとてたきしめし、蒼朮の煙の思はぬ方になびきぬらん、伏籠にかせるしめしの香の、かる方きに通ひぬるもむさし。裏ちかく水くむ嫗の竹のかさ、阿彌陀かぶりし、かめのこに手桶うち置き、車井の繩かいくり、瓢のむかしの窗見いれつゝ、あなきたなのていけや。天のそこもや抜けつらむ。出で入りに辛きめするといへば、こなり、忌々しうしくえて焚いつかぬぞ。朝顏のうれへたり。明日のみつけの實に何よけれなど、己がしゝうたへ言ふ。門守の小むすめは、此方のより門へ詣りもおよすげたるが、さみせのこと手まさぐりて、師にうけたる手な殘い給ひそと、母の制するに畏まり、いと黄なる聲をからびたる絲にかき合はせつゝ、尾花といふもことわりやと、ほのめかしたる、よし

やあしかりとも見えず。桁走る鼠の米の櫃かぶる心地ぞすなる。此方のも聞きとりわきに、聲作りしてまねび出けるを、あなかまと母の止むれば、三つになれるおとの、同じ如うゝと叱るもらうたし。あこはしゝ未だせむ、こちへとひき寄するに、否といひて驅け出でんとするを、辛うじて引留めつ、やをら手をやれば、例の漏らしつ。聽て濕りたるもの乾きかへさせ、さきの伏籠にうちきするにぞ、息きもうち添ひ侍りて、鼻持ちならぬものから

橘庵記

右近の橘か、江南の橘か。そもそも戰陣問答の、名にたてる花の小島かさきか。田道間守が植うる所か。橘諸兄公のめでし所か。そもそも中村家橘が家の、目にたてる花の紋所か。その狂言の種となる、工藤が庵に木瓜あり。主人の庵に橘あり。奈良の帝の「萬葉集」には、實さへ花さへとほめことばを殘し、唐人の「三體詩」には、盧橘花開と寐言をいへり。陸績がかくし物、親孝行の部に入り、司馬相如が筆にしたがう、夏熟すと書きちらせり。むかしの人の袖の香は、さつきまつはなの先に匂ひ、一にたてる花、二にしゝ牡丹とは、みつ子もよく歌ふ。橘奴は赤坂奴におとらず、橘仙は下手集におとらず、橘町にやどりの子あり、橘井に名醫あり。「日加古川行國」といへる本草者來り問ひていはく、橘に蜜柑なり。盧橘ははなたちばななり。半地木は出たらばなたなり。同名異物いづれなりやと。主人もとより

り麻布に住すれば、きがしれぬとこ答へける。

右は麻布にすめる沾頂子のもとめによりて書けり、

鉤匙橋ノ記

鉤匙橋は長者が丸の流れにかゝる。その源や六孫王經基の王、東夷征伐のかへるさ、武藏野を過ぎ給ひ、歸鴈の列を亂るを見て、鴈々みつ日、あとなが先へいたら、かうがいとらしよと宣ひて、御佩刀のかうがいを投げ給へば、化して一の橋となる。名づけて鉤匙橋といふと云々。猶尋ぬべし。その所知れずとは、昔より江戸の名所をほりかねの、いづれ作者のにげ水にや。武藏野の廣きことどもを、草のはつかにつまんとならば、いかでかは。されば「鹿子」の所まだらに「砂子」のよむにたらぬ、大方歌人の居ながら知らるゝ名所も、まづ此の位なものなるべし。物かはり星うつりて、富士の煙出も引窓を閉て、飛鳥川の瀬ぶみもかはるものから、狛の藥をもとめずして、井手の蛙をかけほしにし、大工童にあらずして、長柄のはしの木端をきらふ類もこのあたり、三股のながれ二またとなり、藥研堀もうまるなりと聞きて、此の橋のほとりに住める人の爲に、これが記つくりて、朽ちぬ柱に題すといふことしかり。

源はかくぞと人につげのくし鉤匙橋をさして聞きなば

背面達磨ノ賛

八萬四千のお敵に對して、拜みんすにえと、後むきしは、富の緒川の流れの身、しなてる屋の片闇か。如何々々。

雪女ノ賛

雪の白きを白しとするは、脛の白きを白しとするが如きか。脛の白きを白しとするは、肌の白きを白しとするが如きか。雪は女の肌にして、女は雪の肌なり。怪しきを見て怪しまざれば、怪しみおのづから消ゆるとなん。

名にしおふ師走女の化粧より空おそろしき雪のしらばけ

芭蕉庵桃青翁ノ賛

身は芭蕉葉のひろきに居て、風流の細きにたどり、心は風雲の思ひをたちて、花鳥の情にうかる。僧か俗か、はた隱者か。これこの一箇の誹諧師。

から誓文

四方赤良左に杯をあげ、右に天麩羅を杖つきて、以て庵いていはく、来れわが同盟の通人、汝の耳をかつほじり、汝の舌をつん出し、愼んでわが御託を聞け。いにしへ天地いまだ分れざる時、混

沌として、ふは／＼の如し。その清めるは上りて諸門となり、濁るは下りて中汲となる。酒はこれ狂水と、天竺の古先生が一國なことといつても、また百藥の長なり半なりと、さればいへる飛日あり。鄭聲は淫なりと、宇宙第一の文に書きなんしても、とかく浮世はへゝてん／＼、とは、由良殿の金言なり。凡そわが同盟、どうふるのうちに孝弟の實事に、風流のやつしをこじつけ、意氣でも謙慨でもなんでもかでも、よりどつて十九文、詩歌連誹のあひやすに、琴棊書畫のはやし方、拍子を揃へて打つておけ。もしきんなならば汝を用ゐて褌とせん。もし醉ひつぶれば汝を用ゐて袖の梅とせん。もし巨川をわたらば汝を用ゐて猪牙舟とせん。今日のこと四杯五杯ですまず、一杯々々また一杯、ねぢあひへしあひすることなかれ。疊にこぼすことなかれ、天水桶となすことなかれ。飲食すること流るゝが如くにせよ。そら時宜をして悔ゆることなかれ。もし酒盡きば、銚子をかへて以て飲め。もし肴あらば懐中寄を出してもつて行け。つゝしめや。

この盟にあづかるもの上簇人、酒上熱燗をはじめとして、即座に酒を下すこと、瀧のごとし。

時に安永三年甲午。

疊師善兵衞衣の奉加帳募縁疏

それ大恩教主のおもてがへ、涅槃の牀をふみ給へば、一疊二疊の長き手間、あつらへつべき人もな

しこゝに御存じの善兵衛、いつまでか世をふる疊と、雨のびんごを剃りこぼち、やらう疊の樣をかへ、墨の衣の奉加せんと。京間田舍間おしなべて、西は琉球高麗縁、南は紀路土佐おもて。上が旦那にあふみ路や、われからさきのひとつかみ、報謝をまつの青疊、五分でもひかぬ五分縁に、さしつけがましき御願ひの、もつれぬ絲口針のめど、通れ／＼とお叱りなく、勸進帳で世をおくる、おくり狼衣の奉加、種のきれたる八疊敷、南無あびら縕繝縁と 敬 白。

報謝米の安ゝ永きとし御奉加帳にみな月のころ、

大根太木塵積樓ノ記

世の中の塵も積りて山とならば、山籠りせん塵のこの身もと、見世先の柱に押して、いつも月夜につき米の、飯田町のほとりに、出格子の透間をうかゞひ、ひとり二階の物干に上りて、竿竹のよをのがれたる男あり。夫れ大隱は朝市にあり、中隱は路次にあり。四つ切の出入りしはきのふべ、日なかしの喧しき日は、許由が耳を錢湯に洗ひ、伯夷が蕨を八百屋にとり、松風のねを菓子屋に聞き、妻木の道を眞木河岸にたづねて、人遠く水草清き所よりは、中々不自由ならず。常に堀留のほとりするものは、酒のきの字もきのみにて、まちの木戸に心ひかれ、眞名いた橋のほとりに、わすれなば、かんなり文の中段に眼をさらし、古金の古きむかしを慕ひ、姫棚の祕め置きし卷を繙き、文車の文に車留なき

を喜び、塵塚のちりあくた、捨つべからざる世の中の、塵し積りて山田屋とも、塵積樓ともいふべかりける。

月見の說

それ月は久かたの空にいまして、地を這ふ裸蟲などの分際にて、狎れ玩ぶべきものにしはあらねど、ことさへぐ唐國には、月出でて皎たりなどと、桑間濮上をそゝりしよりはじめて、漢魏六朝三唐にいたるまで、そのことば北斗をさゝへ、その影屋梁に滿てり、また足引の大和うたには、ならのはの名におふ集より、世々の撰集に載するところ、月弓の引手あまたに、月の舟にもはしけがたし。されば生きとし生けるもの、昔は三夜の三日月さまより、十九たちまち二十日宵やみの夕に至るまで、いづれか月をめでざりける。そも／＼この月いかなる物ぞと、破れたる壁の隙間かぞへて、月の光に書を閲するに、その月中の混雜なること、數ふるにいとまあらず。まづ弓の師匠の何がしが女房は、老いせぬ藥を盜みてかけこみ、吳剛といへるむくつけ男は、まきわりをもちて桂の枝をこなし、うさぎは米をつき、蟾蜍は油を絞り、その名もつきの色人は、月宮殿の見通しにて、白衣になりての大一座、霓裳羽衣のをどりがあるのと、月のかつらの根も葉もなく、月の鼠のその尾にとりつき、詩人は酒家の店先に、二合半輪の秋をめで、歌人は居ながらめい／＼に、てる月次の定會の、夜食にこそ

はありつきけれ。また連誹となり下つては、百韻に月いくつと安賣の煙草入の思ひをなし、月の定座は何句目などと、役棧鋪同然にあけて置くこそ淺ましけれと、如何に腹ふくるゝわざなればとて、こん黄湯のたてくだしにいふも、また理窟くさし。これなん宋儒の袖頭巾氣、目ばかり出して答をうかゞふに似たり。それ造物の大なるや、月夜よし夜よしと無上にうれしがれば、月やは物を思はすると難題をいひかけ、花はさかりに月はくまなきをのみ見るものかはと、榮耀に餅の皮をむけば、罪なくて配所の月をと得手勝手なる願ひをも、まじり／＼と聞いて御座るか、但し聞かずに御座るやら、音もかもなき上天のことは、知らぬが佛も聖人も、もとは一つの裸蟲なり。われ造物者の無盡に入りて、大塊われにかしつけの目なしをかせしより、詩歌連誹の紙屑拾ひとなりて、籠の目にふれ耳にきく、雪月花のことにおきては、他人のやうにも思はれず。わけて秋のもなかには、桂男へ對してもこと趣向せねばならねど、もとより五侯の門に入らざれば、洲濱にたてる松かけより、雲居の月も眺めがたく、千金の儲けに乏しければ、船のうち浪の上に、遊女の月見も約しがたし。いづれもともに猿猴が、水の月よとあきらめて、江戸の田舍のかたほとり、高田の馬場の松かげに、さらしなや姨捨山のそれならで、信濃屋なる茶屋の門に、十五郎てふ名もゆかしく、三五夜中の團子田樂、枝豆のまめ人らを語らひ、芋の葉月の十三日より十七日まで、いつも月夜に米のめしの大施餓鬼をなん始めける。

濱邊黒人

あかず見ん秋の五夜にむさしのの名だかき月はそらにすめ〳〵

病にふし侍りて高田の月のまとゐにも行かざりければ　唐衣橘洲

酒ならぬくすりを飲みて見る月はくもよりもうき風のかみかな

春日部左衛門尉へ遣はす感狀

今度於高田馬場五夜之間乘月而逢筆戰候之刻。即時飛越出雲八重垣、踏破九章之長城、得李杜之體、探山柿之腸、埋酒池、燒肉林之條。前代未聞無比類者歟。自古來聞以馬度原者、未聞以藤栗毛度原。春日部之振舞希代之珍事也。因爲恩賞、則之開帳歌作取宛行者也。者茶屋之拂方感狀合而如件。

安永八年八月十七日　赤良在判

春日部左衛門尉どのへ

詩歌兄弟對面のつらね　曾我十郎　同五郎　百人一首　唐詩選

十郎「秋の田の、かりほのいほりに横木瓜、一家そろうしみなの川。五郎「主人相識らざ、偶坐林泉のためになる、お客にはじめし哀江頭。十郎「めぐりあひて見し優曇華の、はなの色は移りにけりないた

のらに、十八年の天津風、雲のかよひ路ふきや町、赤澤山のさかひ町。五郎「椎の木山月半輪の、秋の野すりたる一衣、風つようして角弓の、一の矢ぶしに獵馬より、射落されたる無念さを。十郎「物や思ふと人のとふ、人に心をおきの石の、人こそしらね乾く間は、なにはなる身をつくしても。五郎「あはん他席の他郷より、此の場をさらぬ三下の半、憑つて雨行なく涙。十郎「ひるはきえつゝ夜はもえ。五郎「頭をあげて頭をたれ。十郎「おねに繁れる八重葎。五郎「冠をつきぬく三千丈。十郎「尉と姥とは高砂の、まつもむかしの友千鳥。五郎「小苑鶯歌やゑ／＼と、長門朝暮にくるへる蝶。十郎「蝶よ花よと花さそふ、あらしの庭の雪ならで、むら／＼ぱつとうち散らし。五郎「百萬一時につき破り、寶劍直せんべいを、はり／＼／＼と嚙むごとく。十郎「その本望をたつた川。五郎「心をきたふ鐵頭と一つほゝ。二人「うやまつてまうす。

大根太木十五番狂歌合判詞奥書

そも／＼和歌のうら店に借宅し、泉がそまつなる身の分にて、批判を何と正札附の符帳をもれいだめず、和歌三神をかけねなしの安賣して、十露盤のたまをゑがける、何々も三五の十八と、おきまどはせる十五番の歌合に、ほつちりの判をくはふること、さばへなすかゑの町人の宿めきたれど、給金をつくば山のかけよりもしげく、宗旨は難波津のふりを慕ふあまりに、神棚の夷歌をまくらごととし

て、鼻歌はやり唄にうつかへぬれば、これや三井が児世の貸傘ならぬ、六百番千五百番の判取をまねびて、溝板のあつかましく、小便無用の辯をかいつけぬれば、露ぶつかけのもり侍るとも、御免素麵のながき嘲りをのこす事なかれ。安らに永き七のとし、文月十あまり六日。

背 伯 賛

人に三愛の辯あり、牛に雙角のあらそひなし。雲居の月の前には、玉しきの露ふかく、二十日草の花の下には、はだ営のひも長し。後中書王に後ある事を知り、種玉庵に種をのこすと聞く。その源きよく、その流れとほし。

日くらしの日記

女もすなる日記といふものを、野郎もしてみんと、梓弓やたての筆とうでて、花薄ほつきありきし野らまはりを、そこはかとなく書いつく。その懐のかみなづき、空も小春の長閑なる日、友とする人三人四人、夜があけたら詩つくらんと、からうたの礎てふ書ふところにして、物見ぐるまの牛込をおし出す。藁店の里すぎて、司天のうてなのもとを行く。空にも酒星はあなるものをといへば、かたへの人、地にも肴町ありといふ。こゝに日ごとに千句のことばをつどへて、それが判をなすものあり。そのきやうさくなるを、壁に押し置けるを見れば、石でする物石菖蒲のふとんなど書けり。清少

納言が笑本よむ心地す。津久戸明神の宮を過ぎて、冷水ばんそにかゝる。夏ならばたちよりても酌むべきを、この寒さには御免候へかし。江戸川をこえ、立慶橋を渡り、諏訪町を北に泉松山にのぼり、牛天神のみまへに額づく。かたはらに一つの石の祠あり。苔むして戸ぼそなし。白駒がいふ、これ貧窮をまつる。よく人を禍福す。むかし小日向のほとりに住める人、家の内の貧を逐ふとて、窮鬼のかたちをゑがきて、此のところに祀れるなり。その神體は何ものか取り行きて、ほこら許り残れるとぞ。やつがれ多年祈らずとても、此の神の冥助を得ること、形の影に隨ふがごとし。法樂に、

澁團扇あふげばいよ／＼高楊枝かみな月とも思はざりけり

下甲亭白駒

澁團扇ほねも折れねば柹頭巾かぶりふるとも福やいのらん

千びきの牛石のもとより、牛天の鳶坂を下る。いづれの羅綺路もさりあへず。曹司谷の影供にまうづるなるべし。そが中にいづれの深窓に養はれ給ふならん、年はあなにくの十八ばかり、長袖の地をはらふは、いまだ春ならざるに何れの花ぞ。蟬鬢の日にすきとほるは、いまだ盆ならざるにいづれの燈籠ぞ。何やらん女の童にさゝやきて打笑めるなど、楚の國の色男が垣間見し、東鄰の名代のむすめ、阿保親王の息子株が、狩衣のすそを竹馬されほど切りてやられし、はらからすらも、中々もつて

まづ足下のあかるきうち、さんさきを急ぐべしと、行くみちの右に一つの石碑あり、なうなゝおもてとかや。享保十八年丑十月十七日としるせり。これはかたゐの女の死したるを埋みて、七面にまつれるとぞ。「玉造小町」の文も思ひあはせられ侍り。此のわたり、野中の清水柏木の井などありといへど、武隈の松の木で鼻つゝこくりし老父もみえねば、それとしるものなし。知れずば先の辻番に問はんか。いぶせき宿に、くれ竹のよをあみて、煙ぐさをたくはふる器を造れるものあり。莊周がいへる緯蕭の人の類ひにやとゆかし。そのむかひに種樹の家あり。千草萬木を植ゑて、郭槖駝が傳よむ心地す。「古文眞寳」のはなしに、しばらくむだも忉利天、鳶坂の鳶飛んで天に至りし、乙女の姿もわすれたり。猶も谷中をさして行く。笠森稲荷の宮居をみれば、木立ものふり鳥居たてり。二坏の土器にしろき色とくろき色の團子を盛りて、小女ゆききの人を見る毎に、米のかへ土のかへと呼ぶ。あが友何がし秋の比より、

醫者も手をとるやわれこの人にしてかかるへのこの病あること

と詠じて枕にふしたれば、いでやこの御社に、祈らぬことはあらがねの、土のだご捧げつゝ、おもかさ守の神、あが友がきが、持つまへのたひらけく、藥代の安らけく守らしめ給へと、申していでぬ。是れは過ぎし明和の比、おせんといへるいらつめの、茶を侑めて、人の心を浮らかせし舊き跡なり。

葛飾の眞間の手古奈のたぐひにして、なら坂や兒手柏のふたおもて、ひともとの陰とたのみしが、とにもかくにもねぢ錠の、鍵屋の錠もぴんとおりて、またも二度あひかぎなく、腰かけし牀几の足さへ跡かたなく、兒手柏の根つこそも、いづこの里へ掘り移しけん。とんだ茶がまが藥鑵と化けて、松風のみぞ昔たかき。人間萬事早馬のごとし。かた／＼油斷すべからず。

笠森稻荷大明神　　鍵屋ノ阿仙稱ス美人ト　　土器碎ケテ爲ル土團子ト
只今唯有リ煮ル花ヲ新ナル　　面様似タリ足

又

笠守ノ神ノ祠日暮ノ邊　　醉中相伴フ例ノ諸賢　　殊ニ令ム拙者ヲシテ頻ニ懷ハ古ヲ
曾テ識ル高名有ルコトヲ阿仙

日ぐらしの里に到れば、七面の社あり。桼僧讀經の聲高し。養福寺といふ寺に、自墮落先生の墓あり。先生は江戸の人なり。五君に鞍がへして志を得ず、髮を唐輪に結び、齒をかねにて染め、佯狂して誹諧師となる。庵を無思庵といひ、軒を不量軒と名づけ、齋を捨樂齋と號し、坊を確連坊と稱す。昔の反古二卷をあらはす。その中に歸去來の辭を評して、淵明元來金持なるべし。わづかの荒地をもちて、日をきくことを憎けれど、一口にはり込みし痴者なり。鐘樓によりて銘を探れば、鑄ニ華鯨ヲ工と

いへる、鯨の字に才の字のすて假名を彫りつけたり。あまりに淺ましく、此の銘なからましかばと覺えて、

すてがなか又すて鐘か知らねどもおもしろからぬ文字なりけり

妙隆寺の庭より修性院の山つゞきは、寶暦六つのとし庭作りのたくみ、岡扇計がつくる所にして、日暮の宮といへる、小さき宮居の前に石ぶみ立てり。

富士筑波あひの木がらしひゞく庭

といへる句を刻む。紅葉の錦折る得顔に、二月の花毛氈もこれには過ぎじとおぼゆ。何がしの國の守の、宿昔青雲の御志にて、草創し給ふ御寺は、とりもなほさず青雲寺といふ。太田金竹の舩繋松あり。桑田碧海手の裏を飜せるが如し。石碑あり、大きさ覇王鞭を二十ばかり重ねあげたらんが如し。木掩軒の何がしが建つる所にして、入江氏の文を刻む。千とせの松の前に木掩とは、おとなしあひなれど、入江といへる名字こそ、昔の面影に似かよひて、おもしろし。もとの道にかへりて、紙くふ木のさがりに、本行精舍にいたる。扉を叩いて案内すれば、上人よろこび迎へまゐらし、廬山の禁もけふ許りはと、何くれともてなし給ふ。おの／＼懐にせし木の實などさゝげつ。稍ありて東面の障子おし開けば、物見塚凸に、筑波山凹なり。田の面田の守のごとく、人家人の字をならへ煙

なゝめに霧横はり、客あかるく、地くらし。白日さとの名にし負ひて、明月山からぬつと出で、庭に枯れたつ荻薄の根より、京の遣戸の板廂まで、三竿ばかりさしのぼれば、人々こゝぞとかの礎に柱だてして、五七言の長城を、この城跡につくり出せしも、繁ければ皆漏らしつ。物見塚に筑波山人の書ける碑文あり。錦江、

物見塚むかしたづねてふみ見ればみぎと左につくば山人

ともなひし百順、筆とりて、綸にうつせるも興あり。去年の今日なん、朱樂菅江、中島平五郎を伴ひて、この御寺に遊び、十月の望に客と同じく、赤壁の月見ることを興ぜしが、一人は枕上にふし、一人は泉下に歸す。死生存亡は委細承知なれど、あまりに造化も胴欲なり。けふ菅江のもとより、

見し月はそしてすめるや曇れるや一人は死客一人は病客

樂しみ極まりて哀しみきたれり。かうめいりしは面白からず。また逢ふまではさらば／＼と、暇まうして立ち出づる。一寸先は闇の夜の、牛の角文字いろは茶屋、戀の手習見習はんと、玉簾の外にたゝずめば、女三の宮のおんばともいふべきか、犬いうたふの命ならで、胸乳あらはして立てり。膚は生漆のごとく、目は團栗を欺く。されど畫く黛の艶なるは、一里塚の榎のかげより、三日月の影ほのかに見ゆるにたぐへつべし。

立日不ㇾ及美人ノ腰　簾外立ツ如野等猫ノ
数年ノ闇熊為ノ誰ガ出　卑ノ似タリ諧文ノ文字

わが裾の留まれるを見て、走り入りて坐す。三人四人と並びて、缺けたるを補ふなるべし。あなはしたなの遊女や。わがきものしふ從者やなき。何がし居士の三味謡、あけばまた休まぬといへるも、かかる際にはあらざめりと、そこ／＼に見過して、月夜鳥の古巣に歸りぬ。茲に一日のあらましを書いつけて、千里の外の日記にならぶもをこがましけれど、家の庭を出でずして、おぬひの道行と名づけぬるわざをさへ、よき方人として、日ぐらしの日記ともいふべからん。兎まれ角まれなげやりてん。

冬日逍遙亭詠歌序

たはれ歌は人のわらひの種を蒔きて、萬の人の口まめとはなりけらし。あるはうき世をまゝのかはらけ町、くだけてもとの木綱が落栗庵、あるは本町二丁目の、綿屋にあらぬ、腹唐の秋人がよききぬた庵など、月次の會たえずぞなんありける。こゝに京町何がし屋のあるじ、此の道をたしみて、名におふ南瓜のへたならぬ言のはを述べ、梨壺の五町のうらなる逍遙亭の山里にして、ともに心をやり水の面目と、今日のまとゐのあるじまうけをなん爲しけらし。われも硯のすみの江の岸に生ふてふ忘草

の、寐ほけし夢のかよひぢも忘れがたく、かし編笠にしのぶ山、又ことかたの道も辿らまほしく、ただ一杯の茶漬食ふ間に、はしがみの端をけがしぬ。たとひ時うつり客さり、むかひの提灯行きかふとも、みせすがゞきのいと絶えず。給半切の末ながう、くどう／＼此の會に、おいでなんしといふことしかり。天明と聞ゆる二とせ霜月二十日あまり四日になん。

狂歌師の引きつくろはぬ衣紋坂うち連れてゆく晝中の町

竹本政大夫碑　文起に代りて作れり

やつがれ二葉のむかしより、くれ竹の一ふしに心をこめ、豐竹の生立は、筑前少掾に學び、其ののち竹本の風を慕ひて、政大夫の門に遊びき。弟子襪線のすゑしといへども、針にたとへし師にしたがひつゝ、かの秦皇の松に許せし、位山にものぼるべくなんなりにたるを、下里巴人のいやしき曲をもて、殘杯冷炙のむしろの末に侍ること、丈夫の望む所にあらずと、ひたすら先師の留め給ひしかど、好める道の捨てがたく、あながちにも止め侍れば、そこは住吉の人なり、岸の姫松色かへぬ、名は難波江の何とや呼ばんと宣ふ折から、錦大夫來あひ侍りて、住みこし住吉の住大夫こそ、つきなゝしからめなど、一言して定め給ひしも忘れがたく、ことし文月先師政大夫十あまり七かへりの秋をむかへしかば、その流れをくみ、その源をたづねて、大江戸新堀の邊にこの三人の筆の跡をうづめ、思ひ

を千引の石碑にのぶることとはなりぬ。其のことばに曰く、

竹あり竹あり　根を固うして節を異にす
くれ竹の緑枝折れ　紅葉の錦腸を斷り
千ひろの陰に曲を傳へ　一字の恩に名を得たり
此のいしぶみを徴として　仰げば高く鑽れば堅し

天明元年辛丑孟秋十日竹本文起建

木兎引贊

衆鳥來りてこれをわらふ。其の智には及ぶべし。木兎ゐながらこれを引く。その愚にはおよぶべからず。

小鳥どもわらはばわらへ大かたのうき世のことは聞かぬみゝづく

四方のあか　下

向島賦

花のお江戸の隅田川、待乳山から向島の景色は、三圍のみめぐりありきても、洲崎のまさごのよみ盡しがたし。春はやう／＼土手の若草火繩とともに萌えそめ、牛島の角ぐむ蘆酒樽に錐もみし、軒端の藤波見世先に咲きかゝれば、池のかきつばた川骨の色をあらそふ。生醉の目に青葉して、山ほとゝぎすおちかへり啼く比より、屋たか屋根ぶね似たり猪牙もあひをつなぎ、あゆみをかく。秋の千葉の山の紅葉、はなの高雄の色をあらはし、ぶら提灯のぶらつきし果ては、燈籠俄に心かはり、いつしか時雨に落葉きき、雪見酉の町のうき船に、火燵の灰のかき立てゝ云ひつゞくれば、みな源氏の宇治十疊のかし座敷、いせ物がたりの乘合船のはなしめきたり。日も暮れぬ、はや船に乘れとは、むかうへ渡れといふことか。いざこと問はん、あそぶ氣はありやなしや。椎の葉ならぬ蘆の葉の、筏にいれ酒のあらひ鯉をもり、山椒の實は小粒でも、蒲燒のうなぎの長ざきに伴ふ。吸物の赤味噌あかずして、どんぶりのどんぶりはまる生簀のほとりに、藝者の三線堀の名の藥研でおろすかとうたがひ、太神樂

の曲太鼓、日毎に一萬度もまはるべし。斯く浮かれたる世にしあれば、都鳥のはしと足のあかきさへ、秋葉の猿の尻の樣に覺え、晉子が夕立の句も、稻荷の狂歌の額のことかと、己が田へひく水草の、きよき所の外國より、北のくにとははひわたるほど近きわたりの、四方のながめは、名におふ葛西の太郎月より、庵崎の大黒屋、夕越えくれのせはしきまで、いづくはあれどむさし屋と、地口有武が求むるにまかせて、紫の一本ならぬ、赤良が一筆しめすになん。

狂歌如湧ク角田ノ汀　短冊頻ニ飛ブ秋葉ノ庭　向島ノ風流從此始ル

武藏屋ノ額　權三亭

はやうしもおそ牛島もよどみなく生洲のこひにこがれよるふね　　腹から秋人

いつ見ても景色はたれかあか味噌の鯉と戀とにさしむかうじま　　酒上不埒

みめぐりへたえずに船のつき雪や花のお江戸の眞むかうじま　　地口有武

うしじまの亭主のすきの赤味噌は時をゑぼしのこひの庖丁

加保茶元成春帖手鑑ノ序

こゝに京町何かしやとうたひし、家の風もしるく、道理でかほちやの元成は、たはれ歌のせい低からず、ほんに猿丸大夫格子、むかうの人丸赤人や、おや玉つしまのおいらんより、其の名は一倍高かりける。ことしも例の醉心地、内所にこぞりあふみのや、鏡の山の手かゞみに、歌の趣向をたてたれば、かねてぞ見ゆる人々の、名におふ狂歌の染模樣、霞の衣すそ長く、千歳の春をかさねざらめや。

天明四のとし初春。

早稻田太神宮法樂の文并歌

これ天明三年癸卯のとし、卯月の今日にめぐりめぐれる小車の、牛込のさと早稻田の面に行きかふ馬場の、下つ岩根に宮ばしらふとしきたてて、高間が原にちぎ高しりて、大君の御代のまもりと仰ぎ奉れる、かけまくもかしこき太神の廣前に、おそれみ／＼もなく白す。百たらぬ八乙女のみかぐらをまねび、久堅のあまの鈿女の俳優をまじへ、歌垣にあともひたてて、絲竹に絲かきあはせ、大つゞみの大きやかに、小つゞみのさゝやかに、笛竹のよだれくり、太鼓のばちあたりも、すみ酒のすみやかに、御備へのみそなはし、みあかしの光を和げ、ちりからの塵をおなじうし、おたひらにやはらかにしろしめして、この一村の民草の、汗水のひた／＼と、ひたの水田のたなつもの、豐かにめぐみそ

いはひ給へと、おそれみ／＼もなく白す。

法樂躍長歌七首狂歌

法　樂　舞

やまと歌やはらげうへをまたなしとの今日やはらけし法樂の舞

名　所

居ながらに歌人となれし近づきやさても名所はさま／＼の顔

娘道成寺

時しらぬ山といひ來し京がのこ娘のそでをかへすをぞ見る

柱　立

宮柱ふとたちよればこの神はそもばんじやうの君のはじまり

菊　慈　童

少女子は夜はの嵐にいしけうりあしたの雨にかみのおぐしあ

二人椀久

松山をこえたる波のたまくしげふたりちぎりをかさね椀久

執著

はる風をこらいと柳にやりみづの時しらいまは牡丹さく庭

黒づくししばらくのつらね

濱邊黒人
祝髪賀筵

しばらく／＼、桐油はゝち南鐐鐵、四位黒袍天地玄黄の其の中に、なの又玄狂歌の門、人らさへものあらさらんや。京橋中橋中黒の、黒いは北の水谷町、隣からすみゑの三番叟、色のくろい尉殿にさあらばすゝ玉たどんの粉、目黒の不動大黒天、九郎判官九郎介いなり、八瀬や小原の黒木賣り、甲斐の黒こま八幡黒、黒鴨の供黒仕立、香に黒方楊枝に黒文字、にがいは家傳の黒丸子、あまいは名代の黒砂糖、黒米めしの三きね半こ その神明のおはします、芝のはまべの狂歌の御奉行、黒人新翁、おなじみの、黒髪出をそりこぼち、頭もまろきかゞみ山、いざたちよりて黒主も、そこのけといふ歌仙の中へ、つん出た四方の赤つ下手は、人主が造化、請人が菅江、大屋がうら住、腹からが秋人、後楯にはつかもない、わけて此の道すきやがし、黒極上の狂歌仲間、今日のまとゐの御祝義に、おらが連中花道の、つらねが一寸口眞似と、ホ、うやまつてまうす。

桐づくしきり口上

そも／＼桐座の臨場は、千桐坂きり桐長桐、天の八重霧たちこめて、暫くやすみの月切り日切り、

天のいは戸のきり戸口、きいゝとひらく鼠木戸、神をいさめの切狂言、これ俳優のはじめとかや。きりきり屋根をふき屋町、きりかはつたる顔見世の、櫓太鼓のうちきりに、ちよきりちよとこれを眺むれば、さてもみごとな五七の桐、舞臺のきり破風きり目緣、切幕さつと花道の、春狂言には友切丸、夏は俄のひときり／＼、きりの一葉の秋狂言、おつるこがねをちぎりにかけ、菊桐きくきりみきくきり、四季をり／＼の限りなく、ひつきりもなき引船から、棧敷中の間きりおとし、留場しきり場火繩代、ねぎりこぎりはわり込みの、人に揉まるゝこきりこは、ほゝかぶりして膝つきり、しりもちきりもち切りさうめん、蕎麥切船きり亂切いもきり、かやのたんきり饅頭蜜柑、辨當よしか握りめし、ありきりにこぶ吸物臺引、切目正しき切りだめの、菜つきり庖丁薙刀なり、雪踏にきりつけ桐の下駄、切りみせそゝる四つ切の、茶椀酒には青つきり、ほていふりにはきりがれん、源氏にきりつ平家には、西八條のきりかぶろ、切子は齋藤太郎左衞門、藤伊夕ぎり三かつ緣きり、序の切二の切三の切、緋桐唐桐、青ぎりきり島、わらひ道具はきりの箱、引つきり枕上のめきり、きり原のこま桐が谷、きりふりの瀧きりの海、きり山三兩かしこに五兩、きりかね曾我の切り艾、ねつきりはつきり病きり、きりはたりてふきり／＼す、夜霧をはらふ早犬から、まづ今日はこれきりまで、錐の嚢をもぬけた名題、桐の葉にすむ鳳凰や、きりんも出づべきみぎりとは、今日みつ指のきり口上、その日切の爐びら

きに、氣もうききりの紙ぶすま。きり／＼／＼。

右は天明四のとし甲辰、桐座はじめて、葺屋町にて顔見世の狂言せし時、戯れに書けるなり。世にまぎらはしき八の字づくしなど、名をかるといへども、桐の下駄と燒味噌なり。

をはぎの露

それ七々の忌に三の物忌をくはへ、六の齋の中に十あまり三とせを弔ふことは、斑鳩の宮にかくれませしみこより起り、何がし禪師の「京華集」にも、預修十王經をひきてその事を述べたれば、くだくだしくいふに及ばず。こゝに子々孫彦なん、親よりよく仕へまつりし君の、十三回の齋を弔はんとて、おのが好めることぐさをもてするも、無禮に無禮けなるべけれど、まめに實樣なる心から、斯くは計り出でぬるものならし。はたなべ／＼しき和歌の題はをこがましと、ひたすら戯れたるかたによせて、「計年思法事」とかいへるをいだして、「思往事」のひゞきを借りつ。これなんむかしの秀句ふきて、今もわらはべの弄ぶ、地口なりなどあざみいふ人もあるべけれど、きやうごんきごの讃佛のゆかりなりと、頓作頓寫の琵琶を聞きて、青きあせとりの袂をひたせし、昔の人になすりの衣。をはぎのもちもいと露けくて、

十あまり三とせの秋のくろ豆もほとびにけりな法のこは飯

つきぬ恩ながく法事のくるたびにかぞへてとはん百年忌まで　子々孫彦

あつさゆみはるかにかぞふ年の矢の十三そくにあたる命日　多田人成

飯をもりてたてにし年をかぞふれば十といひつゝみつは杉箸　紀定麿

百番月歌合序

大かた月を賞でしたはれ歌を見侍りしに、三五夜中の數取に、十五連城の玉をつらね、又はふたゝびのお月さまいくつ、十三かねの曉を惜しむたぐひなれど、かく鳥の子を十づゝ十かさねしされ歌、ふたもゝちに、あらゆる月をながめ盡し、兎の杵のさきもちびて、三十丈の連木をはなてふ杭州のふる事を思ひ、桂の枝も折り盡しては、神田まつりの事はてゝ、宮居にかへる桂かとあやしむばかり、市ケ谷のいちはやく、四谷のよついつゝと數へたるあまりつもりて、あふげば高き山鳥の、尾張のみくにのすき人ら、もゝちの歌を詠みたるに、良村安世ひとりして、もゝちの歌をよみあはせしは、かの良岑安世朝臣の水車より、よくまはりたる口車にこそ。よりて其のながえの端に、いさゝか筆の轅を

とり侍るのみ。

春日詠㆘寄㆓七福神㆒祝夷歌㆖序

孟子に三つの樂しみをのべて曰く、かぞいろともに在し、おとゝえ事なきは、一の樂しみなり。仰いであめの道に、俯して人の道にはぢることなきは、二の樂しみなり。天が下にひいでし才ある人を敎へはぐゝむは、三のたのしみなり。また人にこの三つの樂しみあり。南にむかふ位もなににかはせんとは、宜なりけらし。わが家かぞいろ堂にいまし、おとゝえ家を共にす。あめが下に秀でし才ある人、たがひに師友の交らひをなす。たゞ恥づべき恥を知らずして、天に人にいひわけなきぞ、また恥づべきの甚しきにあらずや。やつかれ、いはけたる比より文の園にあそび、ことばの林にたちまじり、からうたの道に七あゆみの韻をふみ、敷島の道に六種のひとつをわいだめ、身をたて道をおこなひ、名をこの世にきこえあげてんと願ひしも、陽春白雪の高きしらべはとなふるもの少なく、下里巴人の下がゝりは、誘ふもの多しとかいへる言の葉にたがはず、いつしか博士だちたるまじらひをいでゝ、ひたすら戯れたる方に身をはふらかしぬ。いでやこの身はとまれかくまれ、かぞいろの年を知らでやはあるべきと、思ひおこして、此度たらちをの七十の齢をむかへ給ひぬれば、をとゝし、たらちめの六十の賀に（目白）まじりたる大黒屋に集ひしにならひ、兩つの國の橋のほとり、よろづ代のかめ屋のもと

に、今日のまとゐをなす事になりぬ。題もまめ／＼しき和歌題は、はゞかりの關の憚りあれば、諺にいふめる七つの福ある神の御名によそへて、祝ひ歌をよましむ。そのことばに曰く、

寄大黒祝

わが家の大こくばしら鼠壁こづちもつけていはふ神棚

谷水音が新宅をことぶくことゝて

谷水音、くれ竹の四谷のさとにやどりをうつし、もろ人のたはれ歌をもとむ。やつがれ、おふけなくもかんつよの詞にならひ、その室壽をなして曰く、ついたつる礎、ついたつる柱は、これつちぬしのみこゝろの廣きなり。とりたつる三十日々々々は、これ家ぬしの御心のまに／＼なり。とりあぐる垂木は、これ大きなる繪筆なり。とりまける腰張は、これいろどれる繪具なり。とり敷く疊は、これ主のへりくだれるかたちなり。とり葺く屋根は、これあるじの思ひあがれる藝なり。四谷は竹町なり。くれ竹のよつやの里に、大三輪のながれを汲める繪師たち、花のお江戸に、木の根草葉もよく物いふ戯れ友だち、かく壽ぎをはりて、ひた飲みに飲み、たゞ歌ひに歌ふ。その鼻唄のはしつかたに、聊かほゝかぶりし侍るはや。

所がら四谷丸太のとこばしらかけし墨畫の竹町のやど

鬼念佛畫贊

かたつぶりの角、折れては蠻觸の爭ひやみ、外面は夜叉の如しと雖も、内心菩薩の道に入れり。身を墨染の奉加帳、つくたびごとに奥山の、かねの撞木はなまいだ〳〵

富士山繪贊

そも〳〵此の山、孝靈のむかし生まれ出でしより、若白髮の雪積り〳〵て、千年の末はもかけず崩れず、二十一代の千言萬句も、赤人の田子の浦にうちけされ、五山の僧の抹香臭き詩も、丈山が白扇にあふぎふせられぬ。されど泰山は塵埃をゆづらず、河海は化粧水をいとはず。富士のしら雪朝日でとけてと歌へば、三國一の甘酒の看板にも、をしげなく書きちらすは、また勿體なき事ならずや。むかしより此の山をめでし人いくばくぞや。在五はまだらに雪舟はしろし。その中にまつ黑々の墨衣、西行といへば富士を思ひ、富士といへば西行と氣のつくは、此の山この人古今一對なるべし。嗚呼咲耶姫また出づるとも、わが言をかへじかし。

生國ハ駿河ノ者　本國ハ近江ノ湖　三國一山ノ外　出鄽出店無シ

うかゞへば富士ほど黑きものはなし管もて天をたつた一日

酒中花の報條

桃李物いはず山吹口なし。その口なしの色々と、巧み出でたるひとつもの、南の花にたはぶれし、蝴蝶の翁が夢に見えし、芥の舟のそれならで、ひとたび杯の中に浮べば、花の脣はじめて動き、柳の眉たちまちにひらく。なべての世に行はれるは、淺草のはつかに、やなぎやのいと少なし。いま製する所は、吉野初瀬のたねをうつし、蒔繪沈金の杯をいとはず、摘みてはひたし、飲みては興ず。もし酒中の趣を知るものあらば、いさゝか一枝の春をおくらんといふことしかり。

月見のことば

ならびが岡の何がしも、萬のことは月みるにこそとはいひしか。今夜ぞ秋のもなかなれば、照る月次の會はさふなり、折にふれ時につけつゝ、おのがじゝ心を遣れる中に、かのからうたは、餅は餅屋の、から人の言ひ古したる、清光に蹴押されたれば、かゝげてむかふひのもとの、平仄の影もたどたどしく、連歌は庭の面八句に、浮雲のさり嫌ひおほく、誹諧はさびたる小刀に、澀柹の皮むかんもうるさし。和歌こそこの國の風俗にして、生きとし生けるもの、いづれかこれを詠まざるべかあれど、この比にいたりては、ざれたる詞、あだなる姿をのみもてあそべば、女郎花たはれたるふりをなん、花薄ほゝゑみあへりける。それこの月をみるにつけて、その品もまた樣々なりや。先づはき出しの高どの、はれやかに御簾卷きあけ、花氈の錦所せう敷きならべ、洲濱にたてる綵花のかげに、みさかな

は何などけいめいして、杯のそこしたみながら、何やらんめでくつがへり、どと笑ふなどをこそ、月見とはいはめ。酒の池にやげんぼりをたゝへ、肉の林に橘まちを手折り、みすぢの絲の棹かいやめて、な弾きそ、御酒たうべよなど、戯れたるもあり。五つのおまたに千金をなげうち、ふたつの鈴に一世をちぎり、舌鼓うつ齋頭、歌うたふをうながけいさ連れてこそ月は月なれとおもふ人あり。舟に棹さし野に草鞋はきて、うかれ出でんと思ふも多からん。五條わたりの九尺店に、軒もる影をながめ、いかきの團子、ますの芋に、その樂しみをあらためぬも有るべし。今日なん何がしの許に、としん\/月のまとゐあれば、夕飯の箸おきあへず、袴の腰さしあてんと思はず、外の方を見やりたるに、雲は魚の鱗の如く、月は兎の耳ながく、縁側の端つかたにこしいりたる、わが宿ながらなつかしきに、つもれば人の老と言ひし、老いのまさに至りなんとするを知らず、露霜にそぼちありく、身のはかなさまで思ひつゞくるに、人相のかね時分づかひの人を促し、雲居の鴈も跡なが先へ行くなるべし。

おなじく誹諧文風俗文選の體にならふ

萬のこと月見るにこそ、慰むわざなれとは、「つれ\/草」の法師も申され、今宵ぞ秋の最中とは、「和名抄」の作者も述べられたれど、これみな歌よみ連歌師のぬめりにして、いつも紅葉の錦は著れど、里芋の衣かづく風情を知らず、尾花の袖はふりきるとも、枝豆のゆでたてをいはず。わが誹諧の

自在なるや、宗鑑は柄をさして團扇となし、祖翁は雲をり〳〵人を安むるとは宣へり。さるは虚實の自由を得たらんに、尤も比興の本意を盡したれば、茲に我が輩の閑日といふべく、はた後世の活法とすべし。世に不風雅の人ありて、宵から戸をさしこめて高鼾したらんも、又は夜の明くるまで酒のみ物くひして、これを月見と心得たらんも、かの書物にふみ入りて、夕立に麥を流し、傾城にうち込みて、身代を棒にふりたるにひとしく、品こそかはれ、その罪はひとしかるべし。されやまことの月見る人ぞ、まことの月は見るべく、月みる人の多きにつけて、月みぬ人を喞つなるべし。

巴人亭記

蝸牛の角をちゞめてはひり、蟹の甲に似せて穴を掘るも、家といふもの無くて叶はねばにやあらん。かりこもの亂れし旅うちかぶり、露霜の宿なしとも身をはふらかし果てざらん限りは、膝を容るるの窮屈ならんより、足のばす程の家居なからんやと、新たにひとつの宿りを占む。元より二尊堂にいまし、妻子室にみてり。その緣側の端つ方に、ひとつの妻戸を開きて入れば、ひろさ僅かに十疊ばかり、こゝに四方の客人を迎ふ。維摩が方丈の玄關にて、八萬四千の獅子を舞はせし類なるべし。その北に三枚敷あり、東面に戸をあけて、しやらくさき机を出せり。螢こい〳〵雪こん〳〵の場所なるべし。すべて財乏しければ物すきなし。床なければ違棚も見えず。かけ物は壁に掛け、柳は鄰から

のぞく。澀柿はあるにまかせ、草は所まだらに抜かしむ。土藏の目の上の瘤となり、雪隱の鼻のさきに惡臭きも、かの南のやのかき、東鄰の下水をいとはざりし、司城子罕が昔をしのび、望海の亭、見山のたかどの、きらノヽしききはにはあらねど、張天錫が勸化をもて、家居を營みしたぐひに似たり。わが家に來るとし來る人、わが門に入るとし入る人、こゝに飲みこゝに笑ひ、こゝに歌ひこゝに樂しむ。飲むものは何ぞ四方のあからなり。うたふ所は何ぞ下里巴人の曲なり。もしそれ陽春の白雪操も、また小兒の戲れなり。いづれをか高しとし、いづれをか低しとせん。

里の春柳の五もと　富本豐前大夫歳旦淨瑠璃

楊柳橋邊の川やなぎ、綠の釣の絲垂れり。百花川上の浪の花、とわたる船もたひらかに、安國なれや君が代は、千代にひとたびすみだ川、山屋の酒の諸白髮、わかやぐ尉とうばたまの、やみをあやなす首尾の松、今一しほとゆふしほに、千里も一里こがれ寄る、大さんばしの春景色、待乳の山もわらふかと、うれしの森のむら烏、かはいノヽが憎いやら、憎いノヽがかはいやら、たつた今戸の裏表、日も八町土手つゞき、日本づゝみの辻占や、うそとまことを秤にかけて、どちらがおもい露銀は、部屋そだち賖しやはんに、花のお江戸の總花は、こがね花さく五もとの、柳のちまた花のさと、陸奥山も今こゝに、のりこむ駕籠のかよふ神、しりくめ縄の松かざり、直なる竹のおいらんに、しんぞ禿が初

草のゝうらめづらしき晴小袖、こそのしきせの衣配り、跡著のにしきこきまぜて、出づるいろはにほだはらや、抱いてねまつの初貫の、初會うらじろ藪柑子、かうじかうじて居つゞけの、れんじの窓の北おもて、殘んの雪の封じ文、文がやりたや室の梅、くひさき紙の未開紅、かしくの客愛らしく、けふしといでし枝振は、花のかの樣の〱手に渡せ、花のかの樣の〱手に執るからにゆら〱と、ゆらぐ心の玉箒、えにしは盡きぬ富本の、ながれの末も豐かなる、天の八束穗たなつもの、積み重ねたる御倉町、愛ぞあづまの都鳥、むかしもかかる賑はひは、ありやなしやと語りつぎ、いひつぎ綷のみつの絃、ねじめも長く卷きをさむ。

春色花鳥媒

ならの葉の、名におふ御代の撰集にも、相聞歌とは色の道、藍より出でゝ藍よりも、こきんに戀の部をたてゝ、花と鳥との媒や、花の姿はさま〴〵に、心うきたつ春の色、鳥はもとより妹と背の、ちゑない神にちゑつけて、つがひ離れぬ二柱、はしら暦のひめはじめ、日と日とのはかために、はだとはだとの腹赤の奏、のりぞめよしの乘氣には、いらへもまたの藏びらき、當年の惠方より御祝儀申しいれますと、麻上下のみつ指も、いふにいはれぬ中指と、つい藥子のくすり指、これこの指をかう折つて、じつとしめたるしめ繩の、しめつゆるめつ筒井筒の、井筒にかけし屠蘇ぶくろ、その小袋と

小娘に、ほんに油斷はならぬ坂や、この手がしはのふた茶椀、割れてひゞけてひゞたけの、人間の里の里ちかき、たのむの鴈の玉章は、みよし野ならぬよし原や、色で丸めてさござい〳〵、くじもたふるゝ戀の山、富士はおいらん筑波は新造、このもかのもは玉くしげ、二人禿の門松の、しげき木かげの中の町、嘉例の酒の二日醉、三日のけふも居續けの、風呂の湯上り手ぬぐひの、絲ゆふなびく欄干窓、水殿雲廊別に春をおくふかき、本間ふたまのかざり夜具、やぐら枕の牀入も、まださまる時にあふみのや、鏡の山を立てたれば、かねてぞ見ゆるかねつけ袖とめ、とめてとまらぬ年の内に、引込みかぶろいつしかに、春の水上朧のつき出し、げに三千の粉黛も、この一郭にあつめて海の、濱の眞砂はつくるとも、君が代は〳〵、孔雀鳳凰おしきせの、天の羽衣いくかへり、みほの松原氣もうき島、愛鷹山や巫山の雲、雲となり雨となり、うるほふ民のまくらごと、いねの間もよろづよく、猶ゆたかなる年德の、あきの富こそめでたけれ

・　春日龜樓詠二初芝居一狂歌序

大塊われに聞うていはく、われ汝に形をかすことひさし。目の見るべきあり。耳の聞くべきあり。鼻のかぐべきあり。手の舞ひ足の踏むべきあり。口はまた二役ありて、食ふべく言ふべし。耳目の欲にしたがひ、手足の勝手づくはしばらく措く。汝が口節あらず、たゞ酒を嗜む。汝が口則あらず、た

だむだを吐く。酒は量なくしてつねに亂醉に及び、むだは務めを廢して自暴自棄におちいし。汝を天地のむだ者といふ。如何々々。四方山人杯をあげ青天を望みて曰く、われ寧ろきん／＼として大通のごとくならんや。はた默々として野暮のごとくならんや。むしろ黒鴨をつれて五侯の門に入らんや。はた白眼にして世上の人を見下さんや。寧ろ深き山に小路かくれをせんや。はた水草きよき所に岡釣をせんや。むしろ茶ににじり上らんや。はた香に鼻をひこつかせんや。むしろ碁將棊に隙をつぶさんや。はた十露盤を枕とせんや。むしろ絲竹を友とせんや。はた書畫を愛せんや。むしろ螢と雪とをあつめて、萬卷の書をよみ破らんや。はた詩と文とをつくりて、千秋の業にほこらんや。むしろ高間が原に神いさりをし、拍子の音をきこしめせと申さんや。はた鷲の山の佛くさく、經論に目をさらさんや。寧ろ老莊の徒たらんや。はた醫卜の道にかくれんや。富貴天にあり、梯子のとゞく所にあらず。窮達命あり、耳たぶをさぐるのみ。大魂われをわらふことなかれ。これも同じく役者にて、もろこしの康熙帝でたのみやす。そこらの仕出しはあめつちの大芝居の帳元さん、それ日月の鼠木戸、一夜あくればにぎやかに、風雷のやぐら太鼓、はじめて聲を發せしより、百千鳥のとびふ／＼、梅と柳の引道具、はるのはじめの初芝居、その時を得たる哉／＼。いざ大入の杯をかたぶけて、例のことばの花道につらねん。造化のおぢい聞き給へ。大塊默していらへなし。人をしてその心を述べしむ。その

ことばに曰く、

かほみせが周の春から正月は初芝居かの時をおこなへ

春日泉亭詠ニ雜煮餅ニ狂歌序

不忍の池の氷、風や、渡り、廣小路の鉢の梅、雪なほ殘れる比、あふみのひえの山を、はつかばかりかさねて六日といへる睦月の末、あけら館の主の門に遊べる人ら、大人の常に書きすさめる、のの字なすまとゐせんとて、これかれけいめいす。ことしは丙のわらは、竹馬にのれる年なりと、人々愼み恐りしが、はたして春日野の飛ぶ火にはあらで、漏るてふ水の手あやまちより、市人のかりずまひも、野寺が庵の心地し侍りて、いま幾日ありて戯言いひてんなど、いひしらふも本意なし。さばれむさし野のひろき殿づくり、みつばよつばの緣にかへり、筑波山のしげきいとなみ、このもかのものかげ頼もしく、日あらずして舊のごとくならんと、ついとりたつる室壽に、祝ふことばの和泉屋てふたかどのを借り、野中の淸水むすび置きし、もとの心うしなはじと、入り來る人々中々所狹うなん。そも／＼年の始めの壽は、すでに申しをさめつ。猶はた漏れたる客人やあると、日をすぎばしのとりあへず、雜煮餅といふをもて題とす。もとよりもろ人の心を大根として、萬のことばの菜の葉ともなれば、里芋の中をもやはらげ、燒豆腐の串のたけき心をも慰め、目に見えぬ鬼神に、青こぶ取ら

それもはかるべからずと、匂ひすくなき花鰹、そのひとふしの連中の、筵の上にもあみつらねていふ

いもが子の髪の毛程な昆布につなげ、禮者の大きふに餅

栗花集序

年ころ栗のもとにたゝずみて、落栗の見あつめ聞きあつめたる、みゝづくの形をつくねたれば、そのまゝ栗花集と名づく。見る人さゝげの花のみじかきを見て、この花の長きをいふことなかれ

茶杓記　石原氏に代りて作れり

いにし寛延己巳の秋、近江の國三井寺の櫻の根をわかちて庭に植ゑ置きしに、志賀のうら浪たちかへり、としなゝ春のながめ絶えせず。今年いさゝか其の下枝をきりて茶杓となし、人のもとに贈るとて、そのよし箱の蓋に書きつく。猶一爐の清風をそへて、百花の餘香に飽かれとなり。

鄰家におくれることば

むかひ三軒兩どなりとは、ふるくより言ひならはせど、將棊のこまの銀將のごとく、うしろをおろすにしたるもをかし。小家がちなる夕がほの宿に、きた殿と聲をかけたる、もし日あたりのよき家ならば、きはめてうしろ鄰にもやあらん。必ず鄰ありと宣ひし孔子を、東家の久兵衛と覺えしかたくなる者はいざしらず、鄰の醯を借りにやりしは、微生高が一生の名をれにして、鄰のちやほを盜むなとは

孟子のよき譬へなり。またその孟子のおふくろは、鄰えらみのむつかしやにて、たび〳〵豆いりなくばり、子どもあそびの上たぶりに、行ころで買物しても、浮世小路の店をかへられ、まして寺町門前地をきらいば、淺草谷中の住居はなりがたからん。宋玉が東鄰のあね樣は、楚國一番のだてしやと知り、喜撰がわが庵は小野小町が鄰に見ゆ。美濃と近江の寝物語は、木曾道中にかくれなく、鄰の寶をかぞふるが如しとは、「童子教」にもしるせり。鄰の甚太はわが内の澤庵漬より好もしく、鄰しらずの牡丹餅は、春慶ぬりの重箱におどろく。鄰のばあさま茶をまゐるのとは、どうまゐるの斯うまゐるのたの口拍子にして、何の意義なく、鄰の疝氣を頭痛にやむは、僭上なることながら、いさかひ同士の軒ならびより、まだ深切なる方にやあらん。われらもとより猫の額ほどの地に住めば、馬の屁をかぐ長屋住居にもあらず。暗闇からひく牛込のほとり、東南にもまたあれば、この二方に鄰なし。北には姉弟はた甥など家居し居れば、他人のはじめの鄰ともいひがたし。たゞ西鄰の主の名、まことの鄰といふべくして、しだしき中の垣根より、一もとの柳さし出でたるは、彭澤が五本にもまさりたるに、この比いとよりかくる春雨の、醉けかゝりたる綻びだも言はんかたなし。ひと日鄰のあるじ、木こりに命じて枝をすかさしむ。主のいふ、この木はわが家のかたにあれば、見はやすべきかたにあらず。たゞ鄰をおもふに作るべしとて、はた其のもとに桃を植ゑしむ。木こり、なぞといへば、たゞ植ゑよ。

花咲きなん時、鄰の簀子にしりうたげて、酒酌まましなど、戯れたるいと興あり。遠き三千年はいさ知らず、まづさしあたりて此のはるのながめなり。細船に棹さしおして桃源の洞に入り、夜船に乗らずして伏見の里に旅寝すべく、物いはぬ桃もこと問ひかはす風情ありて、ねぶたき柳のよき話相手を得たりといふべし。長嘯子がぬすみて植ゑしは、あくる日の讒言もおかしく、杜子美が樹木の進物は、なしくひもまじりなん。われはたゞ夭々たるをまち、灼々たるを愛す。蓁々たる葉を行水になしり、蕡たるその實に長竿を出す所存は、青柳のいとかけて、毛桃の毛頭あらじといふ。

三年になるてふ桃を垣ごしのはなの先にも見るぞうれしき

春日唐衣橘洲初會狂歌序

けふなん呉竹の四谷の里に、から衣きつゝなれにし友がきをつどへ、軒端の杉の丸太をしるしに、大三輪の酒たうべよなど、いひおこせ給ひしに、この比日でりうち續きて、直なる柳のいやな風にのみなびき、ものうき歲の塵埃たちまされば、水のとばしり池の鱗におよび、火あやふしの夜行わり竹のふしぶしに響きしを、このひと日ふた日春雨そぼ降りて、もろ人の心も漸くおちゐる侍りしかば、いざや戲歌の會にまかりて、結べる口を開きてんと思ひしに、よべより童の熱の心地し侍りて、膚もかのこ斑に、時しらぬ山をあげ侍りしは、世におこなはるゝ疱瘡にてもやあらめと、近きわたり醫師の

がり行きて訪ひはべりしに、とく來りみて、さなり。されど顏よかめり。なひやしそなど制するに、日頃は四方の人にまじはりて、三たび門をも過ぎてしかど、かのなにがしが言ひけん、その子の母もわれを待ちて、とかう養ひきこゆるものから、今日のまとゐに外れぬることの、よにどころなき思ひをのばへて、過ぎし折からうけがひ物せし、言葉のせめをふたぐといふことヽしかり。

初雛ノ賦

門びらきの御祝儀すみ、眞綿のつむのもてあそびもの所せく、桃のやうノ＼咲きそむる比、この子のこヽに歸ぐべき、ひいなあそびの調度もとめんと、十軒店の二階に雲の上の雲をつかみ、麴町の室咲につくり花の花をかざらんと、鷄合はせの雌ときをすヽむれば、潮干のひかぬ父親の心こそをかしけれ。内裏雛の袖は、かけ鯛の尾をさかだて、次郎左衛門の丸顏は、卵子に目鼻つけたらんが如し。紙ひいなの雨ふりに腰はたたずと、てるノ＼法師のかたちにて事たりなんを、今は古今の雛の裝束の詮議より、大宮人を裸にして、折からの「桃華蘂葉」に一條禪閤のお肝を潰させ、ふらそこの壺井も義知ぎちと爪をくはふべし。小人形の寸は箱の蓋にあらはれ、男とも見え女とも見はやすべき方にはあらぬが、長たぶの首うちかたぶけ、足のうらより竹釘を打ちつけられたるもいたノ＼し。からくりこそ猶をかしけれ。綿やの窓に弓うつ音の心地し侍りて、唐子の雪をまろばし、蘭局の獅子をあはす

も、みな一つひゞきなるよ、されど此等はみな古代にして、行女のはり箱の上にはけたる蝶足の膳をすゑられ、見たふしの古道具屋にみてつけの日切りをや歎くらん。近頃囃方といへる者いできて、きりかぶろのぜんじをもて、芝居の下座にやうつしけん、笛小つゞみ大つゞみ、太鼓地謡まで、一つをかきては事足らぬ心地ぞする。裸人形ははらがけに美をつくし、六尺の手まはりは鉢巻に氣をつけたり。まして調度はのゝ物外居のみにかぎらず、御廚子黒棚は東山殿の牀かざりをあざむき、箪笥長持は座敷持の二間かとうたがふ。一雙の屏風は柳櫻をこきまぜ、式正の本膳にあさつき鱠はまぐりもをかし。毛氈しき幕うち廻し、落雁の鯛杉折のはぜ、草餅のひし、豆いりの霰、山川白酒は豐島屋矢野をかたぶけ、饅頭干菓子は鈴木金澤をつくす。かゝれば紫清少が筆すさみは知らず、加田栗島の故實は猶さらうとくしけれど、世に男子もちて幟いかめしげに立て竝べても、柏もち粽のかはをなくもうるさく、干鰒かさごの齒にはさまらんより、先づ何事もさし置きて食物の多きこそ、こよなうにぎはしき節句なれ。

樟腦のにほひもまだき箱入のむすめのことしけふが初雛

初幟ノ銘

鯉かぜをふくみて、うな木にのぼり、鍾馗が出でて、鬼地をはしる。あがりかぶとの金箔は、延喜

式[しき]の儉約[けんやく]をつたへ、あさかの沼の花がつみは、中將殿[ちうしやうどの]の歌枕[うたまくら]にして、頃[ころ]はさつきの初[はつ]のぼり、紋のあやめもあざやかに、月ののぼりの如[ごと]く、日の昇[のぼ]りのごとく、終南山[しうなんざん]の進士[しんし]のごとく、柏餅[かしはもち]の葉[は]のしげきがごとく、菖蒲刀[しやうぶがたな]の刃[は]かけず崩[くづ]れず、猗竿竹[きをだけ]の直[すぐ]なる道をたてて、つけたる父[ちゝ]を辱[はづか]しむることなかれといふ。

初瓜ノ頌

二月中旬の青籠[あをかご]は、唐詩[たうし]にあらはれ、山城[やましろ]のこまのわたりと和歌[わか]にもよめり。曲禮[きよくれい]は六[む]かは半[はん]にむき、兒手柏[このてがしは]はふたへにつゝむ。かの青門[せいもん]の五色にまぎれる、さかりの花の江戸[えど]往來[わうらい]、當所の新田鳴子[しんでんなるこ]瓜[うり]は、四谷[よつや]の馬の糞[ばふ]をいれず、茄子[なす]のならぬ蔓[つる]をもとめて、目にみえぬ鬼[おに]をしてやる。うまいかな甜[まくは]瓜[うり]、其の仁にしかんや甑[なかご]。

わらはべもくは甜瓜[まくはうり]めづらしと兩手にもちてころびうつなり

初鮭ノ傳

はらゝごの牛子年魚[しやうしねんぎよ]、その先東海[せんとうかい]の人なり。文治の比[ころ]、源廷尉[ていゐ]きはるみ王に從[したが]ひ、奥州高舘[たかだち]の亂[らん]を避[さ]けて蝦夷[えみし]に入る。よりて名を變[へん]じてさけといふ。石狩[いしかり]の川邊[かはべ]にすみ、いちごといへる妻[め]をめとりて子をうむ。名づけてはらゝ五郎といふ。源順[みなもとのしたがふ]が「和名」に、其の子いちごに似たりといへるは、

此の故なり。年魚その顔の色きはめて赤し。人呼びて赤光と異名す。性急にして、進むことありて退くことなし。其の年の秋にいたりて百千隊をなし、士卒をひきゐて石狩の川にのぼる。一尺の劒をふるつて鎌倉を襲はんとす。佐々木三郎盛綱討手に向ひ、そのはた頭楚割四郎なるものを討ち捕り、首を折敷にすゑ、小刀を相副へ幕府に獻ず。幕府御感の餘り御自筆を染められ、一首の歌を詠じ給ふ。時に建久元年十月十三日なり。事は「東鑑」にみえたり。年魚たゝかひ利あらずといへども、その太刀風にあたれるもの、三年の古疵起りて、ことごとく死せしとかや。その時常陸下總の人、はじめて年魚が猶あることをしり、はつ鮭〳〵ともてはやせり。或は曰く、常陸坊海尊なりと。又貝原翁の說には、鮭にあらず、鱖なりなど、異說まち〳〵なり。年魚時のいたらず、月の迫れるをしり、鹽引に引きしりぞき、越後の國山川の城に隱るといふ。或はいはく長門なりと。

大酒公曰く、われかつて南嶺子に聞けり。あるひと、病中に河豚をくはんと欲して醫生にとふ。其の書簡に、河豚の正字をかきて鮭とす。醫生、本草を知らずして、鮭の性はよろしき者なりといふ。病める人河豚を食ひて死すと。此の說ははなはだ非なり。河豚もと鮭にあらず。これなん萩の苗をみだる多田氏が臆說なるべし。

初霜解

初霜々、おきやすくまた融けやすし。柱あれども太しからず、花あれどもしぼむに早し。雨冠に相の字を書きしは、雨と雪との相のものか。もとの露末の雫の順にあたらば、さしづめしもの訓なるべし　それ青女いたりて時を感じ、君子踏みて亡き人を思ふ。軒の妻さへ白々と、新たに薄化粧したる橋のゆきげた、所まだらに二つ三つ四つ足跡の残りたる、月おち烏なき、もみぢ橋の寐醒、白菊の花の心あて違ひも、いつしか師走女の霜焼となりて、遂に手水鉢のかたき氷にもいたりなん。青柳の絲よりかくる春にもなれば、百たらぬ八十餘り八の夜のわかれをや歎くらん。星と霜との移り變るは、誰も知りたることながら、しらず明鏡の裏、頭に霜のおきそむるこそ、二度とけしなき恨みなれ。

臍穴守禪師におくることば

もろこし青州に臍縣あり、わが近江には臍村あり。天竺にては黄金のはだへに、臍くり金をたむるとかや。そもそも四支九竅の必用を考へ、この一物の不用を歎くことは、自堕落先生の臍人の説、世有翁の臍の頌に事古りにたれど、名におふ臍の穴守禪師、臍下に心を落ちつけて、口から出臍の文をこふ。よりてすばしりの臍の腥きをいとはず、臍がはらけのさしも愚、たゞ頼まれし口ふさげに、いさゝか臍の垢をひねるにこそ。

されことにお臍の笑ふ聲きけばおさなき笛の心地こそすれ

吉田李園翁を祝することば

おほよそ忠臣は孝子の門に求むとかいへれど、忠孝兩つながら全くすることかたしとなん。こゝろみに看よ、たらちねの病を看るとて斷りをたつれば、君の宿直に人だのみをし、とほき先觸の問屋場に、具足櫃の繪符を耀かせば、ちかき目の前のおふくろの佛間の氣をやすむることなし。こゝに李園先生の父君、武夫のまねぶべき事をとりて、なにがしの國の守につかへ給ひしが、遲々として去るわけありて、其の後なくなり給ひしより、今の李園君に至るまで三十あまり八年、松柏の操を守り箕裘の業をつぎ、梓弓柳の葉を百歩の外にうがち、勝つ色みするやり梅の一枝をかざしとして、つるぎたちはき庭の稽古場に、やつとう／＼の家聲をおとさず。ことし天明六とせ、ふたたび錦をきてらきの比、もとのごとく召し還され給ひしは、まことに忠をかね孝をそなへて、二なきものゝふの鑑なるべし。やつがれ、すでに先生を知り、また其の子を知れり。其の子よく其の道を傳へて、かたはらざれ歌を好む。よりて聊か、稱辭をのべて其の子に示す。猶親の親のふみわけ給ひし道筋をたがへず、子の子の末をみちびける先達にたち給へかしといふことしかり。

たちかへり李の園の花みればもゝの祿までその中にあり

邊越方人をいためることば

方人々々、むかしは日の本の橋のほとりに、朝市の利をあらそひ、今は築地のおきつきどころに長夜の夢をむすぶ。その世にあるや、親につかへ妹をめぐみ、その藝にあそぶや、詩をならべ戯歌をたしむ。その志をたつるや、商人のよき衣きんことを恥ぢ、その家を治むるや、小鮮を煮るがごとし。我かつてみづから過てり。汝まのあたり諫めてかくさず。われかつて人に誹らる。汝あなどりを防ぎていれず。たとへば孔子の子路を得て、逆言耳に入らざるがごとし。今や時うつり事さりて、春もまた半ばを過ぎぬ。これに告げんとすれば、其の人花に先だちて散り、これに見えんとすれば、其の影鳥の翔るが如し。いたれる悲しみは文なし。つかみじかなる筆を止めぬ。古よりみな死あり、ひとり西の方人のみならんや。例の友どち例の戯歌、外には何も手向なし。靈それ知ることあらば、尚はくは饗けよといふ。天明七のとし二月二十六日。

百喜齋ノ記

角田川を前に、待乳山をしりへに、鵲のわたせる橋にはあらぬ、今戸といへる橋のほとり、うれしの森のよろこび鳥、百のよろこびを告ぐる庵あり。かの東ぶりにうたふめる、のぼ上らねば見えぬてふ、なにがしの鳥居もみわたされ、高瀬の高き、いかだの長き、舟屋形の塵を動かせるは、みな

の絲のよりにして、ふす猪の牙のほそき小舟には、山谷わたりの里ちかき故なるべし。春は角ぐむ牛島のあしの若葉、波こゆる洲の上に、嘴と脚の赤きとりのいひ名たる、角田の堤の川ぞひ柳、やゝしげりゆく夏の日の長きながめに、薫風微凉を生じては、玉樓金殿の高きをも羨まず。窓の巽にわたり、白髭秋葉の黄ばみ落ちて、冬がれの炭がまならぬ、瓦やく煙のかすみに棚引きたるは、小野のけしきに思ひなぞへ、あづま橋の横ぎりふせるは、宇治のわたりにも似かよひて、とりあつめたる所のさま、ちゝの目をよろこばしむること多し。あるじは浅草の蔵さし深くなづみし、ふる商人の御蔵町のほとりに生ひたち、[illegible]侍[illegible]にはあらねど三つの時の、禄給ふ事をつかさどれば、その身は市にありながら、おほやけのことにかゝづらひありくも労かはしと、今年竹の子にゆづりの松の葉みなく、までも、浮世の外の路次口に茶事をつくる暇、客人あればあるじまうけして、大空を蔽ふばかりの廣きしとね、大きなる衾つくりてんといひし、昔の人にも恥ざれば、あるじの獨り喜ぶのみならず、また百の人のよろこびならずや。

春夜伯樂宴集序

それ天地は萬物の宿屋なり、光陰は百年の同行なり、而うしてさきたんは闇の如し。寝がへりをうつこといくばくぞや。古人燭をとりてはたごにす、まことに故あり。いはんや一樽われにまねく、ためるに、

瀧水をもつてし、大會われにかすに、筆硯を以てす。伯樂のうまぶねに遊びて、千里のこまごとを吐く。今夜の秀逸はみな曉月房たり。われらが詠歌はひとり補陀洛にはふ。兼題いまだよめず、探題すでにいり。樺燒をさいて花に坐し、夕河岸を呼んで月に醉ふ。批判あらずんば何ぞ勝負をわかたんもし狂歌のつがひならずんば、ばちは角力の太鼓にあたらん。

はるごまのいさむ心をたねとしてよろづの言のはく樂となる

宿屋飯盛

歌よみは下手こそよけれ天地の動きいだしてたまるものかは

四方のあか 終

四方の留粕

蜀山人

四方の留粕の序

此のあかは吾が酒ならず、四方に知る赤良のうしの醸みし酒ぞ。うまらにをせさゝ、さゝをせ〳〵と流行唄に浮れたりし、安永のむかし、はじめて滑稽の目を開きて、狂薬好むたはれ人にすゝめ、下醉あしふひ醉ひくるはせ、一筋の路をともじに踏ませしより、千鳥あしの跡久しくとゞまり、今も昔ににほ鳥の、かつしか早稲のうま口なる、大人の新醴もがなと、ふみのはやしの杉をしるしに、たづね來る人日々に絶えず。げに戯れもんざうは年月にさまかはりて、あらたなるをなかしと思ふ習ひなれば、何とかやの酒の十とせを經て損ねざるも、口なれたるは珍らしからず。然りとて酒つくる才なき人の、しぼり出したるは、新しきも味ひなし。かくては何をちからとしてたはれうたをうたひ、戯れ文をつくるべき。瓶のつくるは罌の恥とか。いざたまへよき酒こひにと、書屋と共に大人のみもとに參りて、此の殿の奥の酒屋のうはたまり、あはれ中汲をだにとこひもとめたりしに、留粕といふ物四十枚ばかりとう出て、かう黴くさきものながら、幸ひに接骨醫師の泥鏝にもかゝらず、漬物店の桶にも入らずて、爰に留粕のとまりて久しきが、さすがに人醉はすべき所なんある。かの劉伶が寢むしろに敷き、憶良の太夫の寢酒に暖めけんやうに、からの大和のねごといひ出すたねともなるべくは、

そのしるをすゝり、その糟をくらひて、ふみ商人の腹をこやさせよと、投げあたへ給へりしを、やがて寧樂の櫻木にふらせて、糟堵のかけず崩れず、幾久々々と南總館のあるじと共に禱ぎくるになむ、まづ粕の匂ひに醉へるなるべし。

文政二年己卯正月吉日

四方歌垣眞顏

四方の留粕　上

狂歌新玉集序

久かたの天、輕口をひらき、あらかねの地、おも口を結びしよりこのかた、神代のむかし、あまの鈿女の乳房には、猿田彦もたゝなうらをうち、月のみくに、何がし尊者の花には、くどこにも微笑をゆるし給へりき。されは、麒麟に感ぜし翁も、時ありて笑ひ、胡蝶となりし痴者も、笑ひを大方にとらん事を恥づ。青樓の春の風に、ちゞのこがねの笑ひをかひ、廬山の雨の夜に、三つの笑ひの友を忍ぶなど、いづれか笑ひのたねならざる。わきて新玉の年たちかへる日には、山も笑めるが如しとかや。花になく鳥追も、笑ひ上戸の杯をあげ、ちまたにうたふ萬歳も、舌鼓をなんうちそへける。やゝ春ふかく笑みをふくむに至りては、柳はみどりの眉を開き、梅は白きにもとをあらはす。春の詠めのくさぐさの歌、ざれたること、たはれたるふりをのみ書い連ねたるしりに、舊年の暮のしまひのをかしき笑ひの中に、つるぎたち博士も智をうしなへるが如く、武士の道もかけごひにはたられし、田のいとなみのたゞごとまで、つゆ記して一巻とし、名づけて「新玉狂歌集」といふ。斯くおとがひを解きぬれ

ば、飛鳥川の淵はせゝらわらふとも、さゞれ石のいははほとなりてこけ倒るゝほど、うま人のうまき笑ひや、いづこのやい太郎冠者、あるにもたらぬ我等まで、この時に生まれあへるをよろこび、弓は袋に、笑ひ畫は櫃にをさまれる代に、腹鼓うち、のどけきあしたに御茶をわかして、わらはざらめや、樂しまざらめや。

狂歌千里同風ノ序

改年の御慶千里同風、いつかたも同じ御事にいはひをさむる中にも、たはれ歌の道なかに、さごされ、さごされと呼びあつめたる飴寶引の、いと口きれぬざれごとども、みな櫻飴の色をふくみ、ことごとく分銅の玉をみがく。智慧の袋のよねは八十の才藏をあざむき、言葉の泉の杯は、百千の鳥追をまねぶ。都となく鄙となく、巧みなるもつたなきも、手鞠の歌の數あげてかぞへがたく、針うちの紙のあたへ、これがためにたふとし。木でもかねでも俗耳の耳かきにあたり、鼓と吹きものと詩腸のはら合ひによろし。これなん長閑けき御代をうたひものせる、擊壤の歌の初音ならんと、鶯笛のひとくひとく、羽子の九十二十みそじ餘り、若草のところまだらに書いつけぬれば、かへる鴈の跡なが先なも侍らんかし。

亀樓狂歌會ノ序

そも天地は、萬物の大芝居にして、光陰は百とせの居續け客なり。はつ日の鼠木戶、留場のとめてとゞまらず、狂歌の大門口、會所の會たゆることなし。けふなん壺屋の淡雪きえ、袖の梅の香をふくみ、春風のふく山三階のたかどのに滿ち、言葉の總花内證のはり札にひらく。百づゝみの太鼓について前へ〳〵とすゝみ、ざれ歌の諸君このところへ出て遊ぶ。御老人樣しづかに跡よりいたれば、御町中樣ます〳〵御機嫌よく、武士も長道具を忘れ、醫者の外乘物をもちゐず、張子のお馬お駕籠でこす。名におふかり橋三曲りにまがる、すみだ川のむかうの人々、龜やに人々、こんな〳〵、うき木の龜や優曇華の對面は今日が初日にして、むれつゝきの字の題詠は、年中月次の紋日、二十日頃よりみせをひくまで、入りくる〳〵大入の會、くどうも〳〵此の會に、おや馬鹿らしうおさざらめや。

歲旦年鑑ノ序

たはれ歌は人の笑ふをのみ種とせしが、いつしか實のあるやうにぞなれりける。こゝに京町かぼ茶の元成、ふかく此の道を嗜みて、すり鉢をかく鶯、ながしのしたの蛙まで、いづれか徒をいはざりける。されば遠慮もないしようの客、ゐろりの枝ずみ折々にたえず。けふなん智慧も淺草の、市にたつたるおすがたの、をかしきふりのすき人等、籬のもとの木綱を、室咲きの梅の花棒として、手桶のたがのわれも〳〵と、おみきの口々よみ出せるさま、誹諧にあらず詩にあらず、唐土の鳥と日本づゝ

み、渡らぬ先の春がすみ、其のたちうりの顆もよく、たうなりのとをはたえそ、よそ〳〵しう書いつくることとはなりぬ。

めでた百首夷歌ノ序

抑めでたいと申すは、天竺にても始まらず、大唐にてもはじまらず、我が日本の夷三郎、めでたいつりの絲より鯛、此のめでたいを釣り上げしより、めでたいことのかゞみ鯛、末の代までも引き出す、延喜の御代のいただひ箱も、蓋あけて見ぬ京物語。今や四つの海波しづかにして、沖釣のめでたいかゝらぬ日なく、十日の雨風さはりなくして、一升のつちくれ金一升の富にうるほへり。されば弓は袋棚の上にすゝけ、お太刀はさやがたの小袖に纏はれ、甲冑は笑ひ道具となり、鐵砲は藥ぐひのたねがしまとなり、酒は酒屋に、餅は餅屋に、たけき親分も太平樂をならべ、あやしの百姓も萬歳をとなへて、誠にめでたう候ひけるとは、今この時をや申すべき。斯かるめでたき御代なれば、この唐土の何某が、何でもかでもよし〳〵といひし跡を踏むとはなくて、夜も晝もめでたい〳〵といふことを口癖にして、めでた男と名だたる人あり。われも又めでたいことをほり川の、流れのまゝによみ出せし、めでた百首のたはれ歌を、めでた男に示さんとて、覺えずひとり笑ふ門に、今福といふ書林の來りて、春まつ花の櫻鯛、あまだひの普くつたへ、鯛石のいはほともなるとほねのなみ〳〵ならぬ、

めでたい中の鯛のあらを、三ッ道具のすきものと共にせゝれといふに、まづ手をうつておきやだひ、いく千代かけし掛鯛の、尾めでたいと見給へかし

太平樂卷物ノ序

天竺の婆羅門組は、偏袒右肩片はだぬいで、せんだまどろぎや何んのことだと張り込めば、もろこし燕趙ひかぬ氣の侠者は、ちんぷりかくさく、ちんたいらう、しやぐわん〳〵でけつかれとほざく。わが日本は柔和理と、あなにへやのうま事から、二柱の親指が國々の小指を生み給ひしより、二千年來お御輿をすゑた蒼生、唐天竺にけちりん程も、ひけをとらぬ太平樂。其の太平の御代につれて、此の頃はやる狂歌師の、とつと昔のお師匠さん、曉月房が「酒百首」に、

醉うてのち太刀ぬく人は酒の人太平樂を舞ふかとぞ見る

といふ句があるが、太刀をぬくだけまだ野夫だよ。拔くべき處をぬかりんと、ぬかぬ太刀の高名は、嘘はないてふ本所の親分、相生町のはえぬきの桃栗山人、「太平樂」の一卷に、ちよつと兩國の橋詰まで出てもらはうと聲懸けられて、かた山の手も足もない、よもやに懸る卷のはしに、是れがじよさいの序の字でも、ないぢやァ〳〵ないか。

江戸 花海老ノ序

めでたくの若松さまよ、枝も榮えて葉もしげる。その千代の子の目出たき顏見世、名も改めて海老藏と、尾鰭をふつてふりしきる、時雨のあめの晴れ間も待たで、登蓮ならぬ東牛子と、四方山の手のかた隅から、住吉町の成田屋を訪ひはべりしに、主は杯とりあへず、折からの濁酒さかなに何よけんと、あつ蕎麥のあつき遇にし、天地一大戯場の外に、又四疊半日の閑を得たり いでや贔屓の腕をこく、吾が黨の連中のはなしの種ともなれかしと、此の度おくれる狂歌の受取、自筆をとつて梓に鏤め、世に傳ふる事左の如し。

仙術影畫はりこの虎の卷序

抑仙術影人形は、人の目玉をくらま山、まつくらやみから牛若丸、鬼一法眼の弟子となり、ちよちよらをもつて娘をあやなし、得給ふ所の「虎の卷」、新かげ流のかげ人形、一子相傳の祕書として、おそばさらずの影辨慶にさづく。其の後辨慶衣川にて、立往生のかげ法師、水にうつれる姿を見て、なんだら法師の柿のたねと、とつかへこうと鳥がなく、東の方のさる御屋敷にて、此の書を求め得たり。夫れ影の數さまぐにして、かげまかげみせ影芝居、かげばりかげ膳かげ日向、月影日影花のかげ、松かげ帆影柳かげ、山かげ木かげみかげ石、鳥かげとかげかげの病、歳旦帳に初日影、勘當帳は若げの至り、おかげでぬけた伊勢參り、七尺去つて師匠のかげ、人ごといへば影がさす、形にかげの

廻り燈籠、まはつて來たは／＼。親も景時子も景季、かけ請かけ政勘解由左衛門、湯かけん火かけん匙かげん、かけの奉公かけ這入り、是から神田のかけ祭、七つのかけの將門が、鬼かけといふ名馬にうち乘り、木の下影を宿として、物かげくまなく捜しても、こんなかけ畫が唐にもあるか、日本一のかけ膝團子、ひとつ御覺えなされにも、月待日待庚申待、御人影のすたらぬあそび、見る影もないかけとは違ひ、まつとらお影のない商賣と、思ひつくばの山うりが、しけき影畫の長口上、お立合の御方御用はござりませぬか。

右に顯はすかけ人形は、すべて口もとの處にして、初學のいろはに本屋の望み、此の外かけ角力の四十八手、相馬の將門七ヶ條の傳、日待の夜食の夕ごりあるいて、どぶふ踏み習ふ、鷺の足どり、今きりかけたは見さんか、あぶ內々のお縫が秘說等は、予が家の奥秘なれば、猥りに他見をゆるさず。御執心の御方は、來つて口傳を請け給へ。處は鐵砲町の百丁目、あいた口から出格子にて、おや／＼どう四郎が鄰、とんだや萬八が筋むかう、雪隱がくさい店ちんが高い。弟子入が五百疋、盆暮が千疋宛略案は御心持しだい、秘傳の許しは七兩貳分、壹分自慢の座敷藝、八人藝の口のあく法もあれ、八天狗の鼻をそぐとも、これが出來たらしてごらうじろ。打身くじきが鏝療治、けがの基と笑はば笑へ。飽くまで食らひ煖かに著る、上々の方の御目覺し、お子樣の腹のこなし、これをするも猶已にまさ

らん。

飛花落葉ノ序

春の朝、中の町にちる花を見て、山屋豆腐の雪かとうたがひ、秋のゆふべ、正燈寺の落葉をわけて、淺茅が原の露をあはれむ。こゝにどこかの風來山人、一文紙鳶の絲きれしより、かきおかれたる狂言綺語、貴佛ならぬ「六部集」など、すでに書林の櫻木に匂ひて、茶屋にことわる紙花のごとし。たゞ相對の紙花は、風前の塵とひとしく、「根なし草」の根に歸らず、廊下座敷の帚にはかれて、終に砂利場のすきがへしとならんことを悲しみて、千早振かみ屑を、吳竹のよく拾ひあつめ、近からんものは目に見なれし、遠からんものは音にきく、耳搔籤の腰張の張り交ぜとはなしぬ。

現金論ノ序

いにしへ穴の中にすまひ、恙の用心許りして、酒薦一枚もたぬ世はいさしらず、其の後吳服の二女、唐の請人人主にて、日本の飯につきしより以來、開帳で見た十二一重、雛さまの裝束はいふもかしこく、麻上下の巍々たる、黒仕立のきん／＼たる、袷袷の身柱もとから、裾はきの踵に至るまで、其の情をのべ其の穴をさがして、百馬があらはす一狐の腋、誠に千金かけ直なし、正札附といひつべし。嗚呼天人の羽衣も、青樓の跡著にしかず、吳綾蜀錦も三ヶの津の貨物にしかずと、昔の人の靈綺

羅を忍び、今の通の見え坊を歎じ、かけ硯の向うから聊か筆を染むるのみ。

唐來參和戲作ノ序

夫れ支那の地をはりには、漢に遊女ありといふたび、天竺の貝多羅は、衒賣女色と書きのあり。わが日本のふたはしらは、床柱にもより給はず。蒼海原の青傘に萌黄きなたの紐解いて、出合のひとつ穴にえやと、天神七代御代參、地色ばかりをかせぎ給へば、人の代となりて、「伊勢」「源氏」の物語にも、ゆびきり髪切の誠なく、一條の后若紫も、おいらんの意氣地心もとなし。今や京の女郎に江戸の張をもたせ、長崎の衣裳をきせて、大坂の揚屋で遊ぶ、自由自在の樂しみを得る時にあひて、和漢の人の大一座、晦日の月のまん丸山に、むすび卵子の四角な文字を、唐來參和といへる中位なる色男、あらゆる贅にかきねの外、ぶらりとさがる瓢簞で、鯰を押へた大あたりは、慥かなるものから、我等請人にたつものならし

金銀開運筬簪内傳ノ序

謹んで宵から天をよくを窺ふに、雲居の菊を天つ星と誤ち、老父の顔を梅星かと疑ふ。爪に出るを物著星とよび、軒端につるを甘星といふ。外黑星は内黑星に近く、筆ぼしは物干にかゝる。丹星は太々講中の爲に抽んで、揚星は遊女の迷惑星たり。津輕の分野に膃肭星、松平これでやつと星、是れ

らば二十八宿の、問屋仲間にあらず。茶字の袴の星入の類なるべし この頃星見世の書肆何某、「簠簋内傳」を携へ来て、頻りに序がほしいといふ。是れ又金銀開運の種なるべしと、星をさすこと然り。

通言無茶揃序

武は戈を止むるとは、蓋し典舗の藏の内にして、花は三芳野人は武士とは、昔名妓の言の葉ならんや。されど長壽臺の安きに居て、猪牙船の危きを忘れざるも、太平の代の御子様方に、昔のきつたりはつたりを見て、今の悠々寛々を知らしめんと、思ひつき地のそれならで、芝全交が鍛へし名作、それから御覧なされよ、さしつけられて、お小柄はありやなしやとしかいふ。

和漢同詠衆序

天神七代地神五代の間の宿に、通神十八代といふ時ありき。この時世界通にして、天竺にては大通佛、唐土にては漢通とも、梵字の阿字の夕河岸を蓼冷しにし、文字の四角な玉子をも、ふは／＼にして飲みかけければ、まして和國のいろはにほへと、ちりてつとんと連彈の、口三味線の調子にのる、「道行和漢同詠衆」。唐もやまとも色事の、中は丸山たゞ丸かれと、思ひそめたる筆ずさみ、時代をおして考ふれば、凡そ十千萬八千年以前、わい／＼天皇の御宇にあたれりとぞ。

續百鬼夜行序

子怪力亂神を語らずとはいふものゝ、口の下から木石の怪を夔魍魎、水の怪を龍、土の怪を羵羊とは、魯の季桓子の井戸の中から、羊を一疋掘り出して、問ひたる時の御挨拶なり。されば中華の歷々たちの書きおける、「山海經」を始めとして、「搜神」「述異」の諸記錄ども、うそ八百の百物語、闇から出づる牛に汗し、また堂上の棟に充てり。今此の「續篇百鬼夜行」も、石燕叟が繪そらごとを見て、摸捫籥の口あいた任せに、ある事ないこと書き集めぬれば、もし箱根から先にすむ、石部金吉金兜、かぶりを掉つて嘲るとも、だんない〳〵大事ない。ない物くはうの化物ばなし、東坡が野人と話せし如く、しばらく是れを妄言せん。それ妄聽して可なり。

百鬼夜狂集ノ序

あやしきを見てあやしまざれば、「左傳」の化物ばなしも嘘らしく、怪しきを見て怪しめば、六部の地獄の沙汰もまことならん。今の學者のおし事と、坊主の不思議すきより、あやしきをあやしまず、かへりて怪しからざるを怪しむ。それ月日の眼風の息、雲の鬢雨のあし、海山かけてよく見れば、天地の間もまたひとつの化物屋敷ならずや。うば玉の闇の夜に、百のあやしきことを語れば、かならず其の驗ありといへる、ふる事に本づきて、此の頃たはれたる歌の友どち、鬼神をも挫ぎつべき體に、狂へる水をうしろだてとし、富が岡の北深川の東、青きともし火の油堀のほとり、鬼一口にわん

ぐらとか言へる、何がしの御荘にして、物語を狂歌にかへ、其の數百に滿てり。もとより箱根よりこなたに野夫と化物なし。ないものは食ひたし、こはいことは見たし。よりて奈良のさくら木にちりばめ、子どもだましのがごせにかふせぬ。讀むものこはきや、はたをかしきや。

野夫鑑序

穴の中に貉あり、これを得んと欲するにかたし。一人曰く、貉は睡りを好むものなり。試みに枕一つ酒一徳利、生薑味噌一片、細引を附け穴の中におろすべし。貉酒を飲み、とろ／＼と枕を引きよせ一寐入する處を、かの細引にて縛る時は貉を得べしと。一人曰く、これ甚だ迂遠し。井戸釣瓶を落せし如く、細引に碇をつけ、穴の中をかき廻すべし。貉の目鼻か、體の中へ引つかけぬ事あるまじ。とり逃しては仕方なしと。一人曰く、所詮むじなは人を魅すけものなり。人間の智慧才覺にて、效を奏することかたかるべし。其の細引を絃にして、穴の口にて三味線を引き、つゐた／＼、貉をつゐなと浮かす時は、萬に一つもまぐれ當り、貉を得まじきものにあらずと。按ずるに腹の中の病は、穴の中の貉にあらずや。始めの一人後世家なり。其の次の羅漢は古方家なり。跡の／＼、せんじやう、常のごとくの匙加減、古方ともなく後世でもなく、せうことなしの山師の玄關、見え脈ひん／＼たる時は、胸だく／＼たる泰頭坊主のはやり醫者なり。駿河の國の富士の人あな、穴のむじなの「野夫鑑」、化生

のものか魔生のものか、いざ立ちよりて御覽候へ。

繼華集ノ序

玉くしげふた夜の月は、中御門右府の保延元年の記に見え、寛平法皇の明月無雙のみことのりより起れり。菅家の十三夜の詩は、三五十八の桁ちがひ、十五夜の字の誤りにして、兼好が婁宿の說は、八月九月の間の宿、さらに本宿と定め難し。十三夜の影、古に勝れりとは、法性寺關白の詩、あきらけき御代の昔の影よりやとは、「草庵集」の和歌、十三夜の月華やかにと、「源氏」の卷に出でたるは、あながちこよひのことにはあらず。たとへば「五雜俎」に田家のことわざを載せて、九月十三晴といふが如し。此の頃横川禪師の「京華集」を見れば、津の國住吉の社、このゆふべ月なければ、小祝の夜をつかさどるもの、かならず左遷せらるゝことありとて、齋戒沐浴することつねに百倍すとなん。その「京華集」にておもひ出せり。九月十三夜を繼華會と名づくることと、延久二年にあらはせし「眞俗交談記」といへるふみに見え侍り。きぬかつぐ芋の土くれをうち、枝豆のさやけき後の月を賞づるざれ歌を集めて、しきりに序を書けといふ。繼華會の名のおもしろければ、「繼華集」とも呼ぶべしといふ。

牛天神集會ノ序

あら玉のやうなる日の若みこの生れませる、正月のはじめこそ、竹に雀の宿になるまで、五十の翁

小躍りする時忘れし思へばむかし月代の容青みたる頃は、つね聞く鷄もわかくして、二日三日のきそはじめ、抱いてねの日の一丁の蠟燭、沅湘日夜東に、流れて早く忽ちに、今日なんなくして七種の、日本の鳥と唐土の鳥の、わたらぬ先の聲聞けば、生まれぬ先の心地して、みな大人の人の目なれば、かの物部の翁のいへる、牛天神は大人なるべし。

狂歌すまひ草ノ序

そもそも相撲てふことのおこりは、たはれ歌したりぶりにも漏れにたる、野見の宿禰當麻の蹶速にはじまり、俣野河津のなきごゑよりぞ、太鼓に雨のふることとはなりぬ。また歌合のはじまりは、亭子とやらの御宇それにおこり、ついでつゝてん天徳のころ、判の詞をしるせしより、三葉よつばに富札の「六百番」「千五百番へ」の出番附となれりける。こゝにいにしへの事をも、今のことをもはみあらし、千里の馬もわいだめつべき、名におふ市の市人ら、おのれがえてに最手をあげ、初會のお客をうら手とし、晴となく、雨となく、ことりつかひの鳥の子の、十日の筵をはり、四方のしるしのみつ巴、扇もてうちはに代へしむ。もとより西も東も知らねど、右から左否みがたく、つたなき心の内取りに、出來合の判なくはへぬ。左右のかたやの人々ら、相撲とるなら、くはと雄たけび、まぐれあたりの點にあへよといふ。

職人部類序

そのはじめや、觴を浮ぶる江の流れに筆をそゝぎ、百の工のわざをうつして、梓弓つくれるものの子の、箕をつくるために備へしも、かたくななる庖丁童子の爲に奪はれ、心のたくみの色墨師も、今は其の國の底なき人の數にさへ入りぬるを、玉くしげふたゝび器を利くして、花咲く春の櫻木に鏤むることとはなりぬ。よりて其のことわりを冠師にかうぶらしめて、硯の海に棹さし侍るも、かの工のはじめ終りをしるし侍るものならし。

江都二色序

わらはべの玩び物畫きて（毛茱子）と記せし圖あり　北尾氏の筆に寫し、赤鞜子の狂歌を添へて、一つの草紙とはなりぬ。繪はとゝの目を悦ばしめ、歌はあわゝの笑ひを催すこてうち〳〵の拍子よき、はなしの鹽のしほの目に、かいぐり出し絲口の、いと面白き筆を見て、硯の海の鱗形が、よき繪ざうしの種なりと、思ふ心の花にかけて、兒櫻木にゑる物ならし。明和十年睦月のころ、四方のあか人、飲懸山の麓に記す。

送眞顏旅行詞

むかし丁寬とかやいへるもの、田何に従うて易をうく。其の東にかへるに臨みて、易すでに東すと

田何はいへり。今狂歌堂のあるじ鹿津部眞顔、戯れたる業すでに成りて、四方の春秋に遊ばんとす。

これなん狂歌東西南北をとゝのふといへし。

幼戯の圖の序

おほぢうばの物語に、虎關禪師の「異制庭訓」にしるしゝ鼠の嫁入猿の聟取とは、「羅山文集」の詞にも見えたるをや。かの三千年になるてふ花の、名のみことぐ〵しういひけたれたるなにがし太郎が物語は、うなゐ子總角の頭さし集へて、語りつぎ言ひつぎつゝ、目に見ぬ鬼の住める國の、寶もとめしことゞもは、新羅の國の秀色とかやが、黄金の槌の故事も、うち出でつべし。なべて斯う様のはかなき諺も、今様はなかに賤しくのみなりもてゆけば、うつし畫にものして、しろきを後の戒めともなせりけんこそいとかしこき。

鶉衣ノ序

いにしへ安永のはじめ、角田川のほとり長樂精舍に遊びて、也有翁の借物の辯を見侍りしが、あまりに面白ければ寫しかへりはべりき。それより山鳥の尾張の國の人にあふ毎に、此の事うち出でゝ問ひはべりければ、金森桂五兎の袞にはあらぬ、「鶉衣」といへるものゝ二巻をもて來て見せ給へり。翁亡くなりぬと聞きて、なほ馬相如が書き殘せる文もやあるとゆかしかりしに、細井春幸、天野布川

に託して、其の門人紀六林の寫しおける全木を送れり。巻き返し見侍るに、から錦たたまくをしく、頓に梓のたくみに命じて、是れを世上にはれざぬとす。翁の文におけるや、錦を著てうはおそひし、方なる袖を圓かになして、よく人の心を寫し、よく方の外に遊べり。鶉衣の百結びとは、自らいへる言の葉にして、狐のかはのちゞの黄金にあたらざらめや。右の缺の短章作はなえたるも惜しけれど、たゞにやはと、けにもはれにも書いつけ侍りぬ。

五葉松ノ序

二葉の松の色ようて、三つ葉四つ葉の殿作り、さかゆく里にひとしほの、色そふ君の名寄せの株、けふゆづり葉を口にふくみ、五葉の松と題せしは、松にからまる蔦屋の板。是れは正直正銘の、相違あらざる自筆の文、返す／＼も十かへりの、花のお江戸の大都會。江口神崎はことふりたり、島原新町はいさしらず、千代萬世もよし原細見。これより毎月あら玉の、としのはじめの常磐の松、つきせぬ下葉をちよつとかく。

馬蘭亭舊友尺牘帖ノ後序

王羲之が十七日の手紙は、唐机の上にあげられ、光源氏の二の町の文は、雨もりの腰張りにすゝけたり。かの顔氏が家にをしへけん、尺牘書疏は千里の面目にて、「雲州消息」「三月庭訓」も、もとは錦

帶のくぢら帶、これも去年の品川の噂、五十の翁の繰言なるべし。そのくり言はやめにして、公務が富士の山を張り拔きたらん文の數はいさしらず、たり〳〵ではかどらぬ、かほよ御前の用事にはあらぬ、近比世に名だたる狂士醉客の書簡を、一駄ほど、馬蘭亭のあるじのあつめ置きしを、馬の虻の後序ともなれかしとて、また机に水のつきやすく、古川に水たえず、筆をとれば物かかれ、杯をとれば何時でもかくのごとし。

筆はじめ

春は曙やう〳〵懸取を戻してより、雜煮の餅も咽につまらず祝ひ、銀燭と詩に作れば仔細らしけれど、古行燈の信田なまとも化けさうなるを、梯子の下に片よせ、やぶれ障子はれ〳〵と掃き出すべきを、元日なれば帚もとらず。陳子昂が福如二東海一と書きし掛物、日ざしのむきに馬鹿がたけれど、初春の延喜を祝ひて、あやしき三尺の附牀にさらりとかけ、伊豫簾は却つて卷きあげたる庭の景色、そゞろごとの浮み出づるを、試筆とかいひてしたりがほに書きつけたるも、大つごもりの苦しさを忘るゝに似て、火燵辨慶とや笑はれなんとをかし。されば清女がすさみも「狹衣」の發語も、少年の春をめでざるはなく、いつも嬉しき正月心に、願はくは二十年あとへ、猿辷りのごと滑りかへれと、我のみ思ふかも。

吉初書

大晦日の裝束榎に狐火を見んといひ、洲崎の日の出を七つ起きして見んといひ、二日は茶屋にゐの日の約束も皆あらましごとにて、年甑の膝くり毛に鞭うち、日傭のかへの諸太夫を召しつれて、な閨の式臺のあがりおりに、二三日の光陰を費しぬ。もういくつ寢て正月と思ひしをさな心には、よにど面白き物なりしが、鬼打豆も片手に餘り、松の下もあまたたび潛りては、鏡餅に齒も立ちがたく、金平牛蒡は見たばかりなり。まだしも酒と香に惱まされず、一杯の醉ひ心地に命をのべ、一椀の吸物に舌をうてば、一丁鼓の音をおもひ、三線枕のむかしを忍ぶこそやみなん／＼。我年十に餘りぬる比は、三史五經を經緯にし、諸子百家をやさがしして、詩は李杜の腸をさぐり、文は韓柳が髓を得んとおもひしも、いつしか白髮三千丈、かくのごとくの親父となりぬ。狂歌ばかりはいひたての一藝にして、王侯大人の懸物をよごし、遠國波濤の飛脚を勞し、犬うつ童も扇を出し、猫ひく藝者も裏皮を願ふ。俳優人の羽織に染め、うかれめの晴衣にも、そこはかとなくかいやり捨てぬれば、吉書はじめといふなるべし。

鶯笛といふ笑話の序

春の山の翠のわらひ初めて、雪間の氷うち解けたるに、梅が香いきを吐きかくれば、柳の絲も腹筋

をふる。笑ふ門には福壽草、三つ葉四つ葉とさき草の、はなしの種を蒔き初めて、花さく春を待つものならし。

山東京傳畫美人合序

花の色をうつせるものは、その匂ひを繪がく事あたはず、月の素きを後にするものは、その明るかなる影を得ること難しとには、唐囀りの言にして、烏が啼くあづま錦繪は、柳櫻をこきまぜて、都の春の玩び物とし、千枝つねのりも及びなき、時勢の粧ひを盡せり。わけて姿もよし原や、二の町ならぬ五つの町に、名だたる君の形をうつし、それがおの〳〵自らの、水莖をさへ添へたれば、物いふ花の匂ひをふくみ、晦日の月のあきらかなるが如く、見るに目もあやに心もときめき、魂は四つ手駕籠とともに飛ぶこゝちし、身は三つ蒲團の上にあるかと疑ふ。斯くうつくしき寫し繪には、僧正遍昭も徒らに心を動かし、吉田の兼好もつれ〴〵を慰めざらめや。因つて此のはしつ方に其の斷りを書きつけよと、五葉の松の蔭たのむ、蔦の唐丸がもとむるに、稲舟の否まんもをこがましければ、蒼牙舟のちよつきりちよつと作り出でて、立ちならびたる中の町、櫻の花のかたはらに、深山木ともろ〳〵、まつとみやまの山の手から、こはん〳〵筆をふるふにこそ。

天明四つのとし辰の初春

八月十五夜蘆中の月をめづる言葉

蘆中の人〳〵とよばれしは、向うの人〳〵のそれにはあらで、呉の東門に目藥の看板かけし、さる人のことになん。潯陽の江の邊には蘆の葉の笛をふき、難波の賤の一節には、蘆刈の名をつたふ。蘆のかり寢のひとよ故とは、百人一首の耳近く、蘆の花ちる遠干潟とは「老葉集」でちと耳遠し。抑天地ひらけしより蘆かびの如くなる、豐あし原の中津國に、名だたる蘆づゝの親類よりしたしき友どち、今日の天氣をうらやみ、蘆屋の道滿大うち鑑、大うちよりて月をかんがみ、あし屋の里に蘆火たく、蘆の丸屋の原庭の、蘆の間に圍居しつゝ、蘆葉の達磨の禪にもあらず、蘆屋釜の茶人でもなく、蘆火淺水の舟さす漁父とは確か見しり越し、あし手にかける大和詞に、蘆荻の花の杜律をかじりて、蘆花の雪をほしいまゝにする、米顚が草書になぐり、紫塵のわかき手を握る色氣はなけれど、碧玉の寒き蘆、錐の嚢のもぬけの才子、蘆水がかきし兩岸一覽、月の最中の中の鄕に、あし分舟をさしいれて、蘆毛の駒の足竝に、てる月なみをかぞへこん、片葉のあしの片手わざに、此の頃世上にもてはやす、五箇の冊子の一箇の奇會、畢竟一部の西園雅集、あすは東渡の分解を聞け。

讀阿多福面

夫れ美人は天上より落ち、牡丹餅は棚から落つ。さればさかさにつるす硝子の危からんよりは、立

臼にまく薦の歪からんにはしかじ。此のおたふくの面もかぶらず、罷り出でたる教訓本、詞のはなは卑しといへども、燈籠鬢の透き間かぞへて、二枚櫛の歯にきぬ着せず、羽子板の殿さまかみさま、駒下駄の娘子達、意見をたまの上にさす、かんざしの耳掻より、耳つたふ世の諷諫ともなれかしと、今大通の通の中へ、この一通を書き残せしは誰ぞや。破鍋にとぢ蓋すてふ、粥腹得心が腹ふくるゝわざなればなるべし。

狂歌の反古あつめたるものの跋

花はさかりに月は隈なきをのみ見るものかは。その花も根にかへり、月も山に傾きぬ。今この一巻を見れば、げに花ならば花簾、月ならば影法師。

春の遊びの記

論語しらずの言葉にも、繪の事は素きを後にす。曰く、お禮は後のことかと。上下袴かち栗も、歳神の棚へあげて、白衣の三人御見舞申す。頃は安永八つの年、睦月はじめのよかの日、御代はめでたの若宮のほとり、よろづよふしだの何がしにて、寫繪の書きぞめあり。御座敷の上客は墨繪の雲のごとく、御勝手の膳部は彩色の繪具皿に似たり。皆ひとはけの筏をくみ、硯蓋に燒筆をたつ。鄰松が畫がける松魚は、左慈が鱸よりあたらしく、蟠車が役者の似面には、壺屋が壺も底ぬけなるべし。蘭雨のおとり持ち、御舍弟のおとり込み、銚子のかはりは袴をぬぐに暇なく、杯の廻りは錢ごまよりはだしなるべし。上戸は酒を飲み、中戸は飯をくふ。下戸は肴をあらしふく、三室の山の紅葉の色にけおされてや、小松はみどりの龜の尾を、泥中にひきしりぞき、鴈奴も同じひとつらの、越路の方へや歸りけん。跡に殘りしかの三人、橋の小島を先として、朱樂菅江くわん／＼と長居すれば、四方のあからめもなく、歸る方角を失ひて、東方の明くるも知らず。やゝありて銀燭天井に耀き、花氈地上に滿ち、

棧敷の障子に穴ぼちく／＼とあき、樂屋の咳ばらひえへん／＼と高く、三絃長唄はやし方などいへるもの、列を正して居流れたり。先づ一番に劒烏帽子とかやいふめる唄にあはせて、あたりも照葉のさかうきを、ひとさし舞ひしなりふりに、思ふ心のあればこそ、跡の／＼の名にしおふ、いざこざなしに都鳥の一曲、業平も氣はありやなしや。次に吉原すゞめの、品よくとまりし竹の葉の、みだれし髪もいはけなき、少女の姿やゝしばし、感ずるも猶あまつ風、雲のかよひ路吹きとぢし、樂屋の唐紙さと開きて、二八ばかりのたをやめ、燈籠鬢の透き額、烏帽子水干きの國の、道成寺へと舞ひ出でたるにぞ、作りし罪もきえ／＼として、君が名字のよだれをながし、名さへおみきの醉ひ心地、思へば／＼この子の金箱を引つかついでも失せまほし。今まであるじの繪にかける女を見てさへ、徒らに心を動かせしに、これや誠に正のものを正で見たりし諸見物、僧正遍昭から五節句をとり、祇王祇女の眞中へ、佛の來迎し給ふが如し。長唄いと竹鼓やうのもの、皆世の中のえらみを盡したれば、梁の塵も散り、空行く雲も闇雲となり、ひたのみにのみ、唯くひにくひ、無遠慮に腹打ちたゝき、方外に口うちたゝく。門松の葉の散りうせず、わかざりのわらながき夜の、とをのねぶりのさめやらで、千秋樂をやや諷ひけん、萬歳樂をや奏でけん、一向醉うて知らずかし。

右は畫人東牛齋蘭香畫の書初めの夜のことになん。

狂歌堂に判者をゆづること葉

いにしへもかくや戯れけん、今もかくこそ戯れけれ。抑久方のあまの岩戸の俳優に、おとがひのかきがねをはづさしめ、あらがねのつちの形を蜻蛉の舐臀とみたてまし〱し御利口こそ、神も人もたはれたる事のもとなりけれ。かかれば代々の物語にも、「伊勢」の飯匙つくも髪、「源氏」のひる食末摘、狹衣大將のいたち笛吹き猿かなづなど、滑稽のをどりなれや。さるを歌によみ出づることは、ならの葉の名におふ集には、大寺の餓鬼のしりへに額づき、夏やせによき鰻とりめせなどの類あまたなるべし。「古今集」えらばれし時にぞ、誹諧歌の一體を立て給ひき。これなん狂歌のはじめともいふべし。是れよりのち代々の撰み、家々の集に載する處、擧げて數へがたし。まことや水無瀨の離宮にして有心無心のふたつの姿をわかちたまひしぞ、栗の本の面目なるべき。あるは百酒の味をなめしさるものの子には、定家卿の力のほどを見せたまひ、あるは三井の深きを汲める、雄長老の「百詠」には、也足軒の判のことばを添へたまひき。其のほか長頭丸を頭として、鄰山の自歌合をむすべる八百首の歌、入安が大阪の雲居はるかに、未得か「吾吟」の山田歌にも、其の世のふりは思ひやらるゝよ。かの半井氏の子などは、彼をさへや〱。かけまくもかしこき何某の院の第八の宮と聞えしは、あやしく戯れたるかたに御心をよせ給ふとぞ。此の時にあたりて難波の行風といへるもの、「古今」「後撰」の二

つの集をえらびて、かの宮にさゝげしかば、院の御所にめでさせ給ひて、始めて夷曲とも、夷歌ともよぶべしといへる、みことのりをさへ下したまふぞ辱き。しかるに「新撰狂歌集」には、落書を書きまじへ、「銀葉」「夷歌」の頃よりぞ、金の響きもうつろひにたるに、言因とかやいひし痴者、いかなるゆゑんの侍りしや、雲の上まですみのぼる、煙の名をたてしより、其の流れを汲み、其の泥をあぐる輩、京わらんべの興歌などいへる、あられもなき名をつくりて、はて／＼は何の玉とかいへる光なきことの葉も出で來にけり。鳥がなく東ぶりは、わづかに二十年ばかりこのかた、我輩よりもてはやして、其の名聞ゆる人々、のべの紙の風に吹き散り、林の杉の葉門々をたてたれど、四方の巴の扇の紋、赤とのみおもひて、其の味知らぬなるべし。爰に鹿津部眞顏ふかく數寄屋の河岸にありて、西河の思ひ淺からず、すでに狂歌の堂にのぼれり。其の室に入らんの志、いたく切なるに愛でて、玉篋はこ傳授めくもをこがましけれど、鳥の跡久しきものながら、馮婦が手うちけんとらの歳のはじめ、河原崎の翁わたしとともに、三體の傳こと／＼く傳へぬ。われすでに此の道を捨てて、陸羽が「毀茶論」の思ひをなせれば、さいつ頃何がしの需めによりて、おしでは人におくりぬ。なほ吾が家の古き氈と、祕め置きし文机一脚にそへて、この一卷を與ふ。今より四方の道しるべをとはば、南をさせる小車の、わが一流の狂歌堂なるべし。

欲レ問ニ狂歌堂一 先開ニ枝折戸一 寄レ語諸連中 勿レ迷ニ四方路一

二水樓ノ記

東岸西岸の柳橋は、淺草のはつかに見わたされ、南枝北枝の槍梅は、兩國の橋の上に絶えず。駒とめ橋の駒に鞍おけといふ山里の使來りて、藤代町の藤の紋に、あるじの家の名もしるし。春はやうやう霞み渡れる川面より、夏の涼みはおほよそわが國六十餘國が中に、いづくはあれど兩國に如くはあらじ。よし野高尾の舟屋形、玉屋鍵屋が花火船、秋の月冬の雪、この二水のほとりに盡きたれば、二水樓とも呼ぶなるべし。

角田川に三船をうかぶる記

遠くいにしへを仰ぎ、近く今を思ふに、山城の國大井川の水上にさかのぼれば、詩歌管絃の三つの舟をうかべ、言さへぐ唐國米內史の好みにしたがひては、文とうつし畫のふたよの蘆の葉をたゞよはす。あるは敷島の道にたどりて、唐詩の林にたちまじはらざりしを悔い、あるは蘭亭のいしぶみを奪ひて、うたかたの水に消えなん事を思ふなど、すびの松の葉末の人は、椎の木のしひてもとめず。あまさかる火なは箱を枕として、伏猪の船の夢にだも知らざりけりな。爰に鳥が鳴く東ぶり家々にとなへ、をそのたはれを道々に好きてより、いにしへ今のことぐさを、行きかふ蟻の穴ぐり求めて、朝餉

の箸のあけおろしにも、こは珍らかなりかは新しなど、えみ栗のてゝうち鳴らし、うち柿の熟柿くごく、果ては杯のそこともわかぬどち、から錦たちきられぬことをなんなせりける。ことし水無月の暑さをさけんと、かの中川の方違へも、しうとのもののゆかりあればにや、蔦のから丸がそゝのかし聞ゆるに、あし引の山の手都合よく、馬喰町の口々に言ひのゝしり、數寄屋のすきにすきたる戯れうたびと、武藏の國と下總の中川に、みつの舟やかたをうかべ、歌は心なきをすがたに、詩は狂へるを旨とし侍りき。絲竹こそ猶豐原の流れにつぎて、さだすぎたる限りをつくすべきを、もろこし何がしの國のかみすら、いにしへの樂を聞きて、眠り給ひしとなん聞けば、神樂のもとすゑたしかならんは、五節の舞姬の華やかなるに如かず。名管祕曲の手をつくさんは、三筋の絲の心ゆくに如かじと思ひおきて侍りて、柳橋のまゆに籠れる、親のかふ子のよきをえらみ、やげん堀のほりするものに、大みきのさゝ執らせつゝ、詩をもて歌にあはせ、歌をもて詩に番ひ、勝てるは誇らかに鼻おごめき、負くるは罸の杯を受く。其の爭ひはまめ人のすさみにして、其の遊びは古のたはれなり。たとひ山水のきよき音のみめでし梁の太子の嘲りありとも、ひがし山に白拍子めしたる、高潔翁の頷くところならし。然りやあらずや。

左方人　　右方人

各賦狂詩　　　　各詠狂歌

飯盛　　眞顏
定丸　　金埒
秋人　　光
古人有正　　裏住
三和　　米人
唯取　　高彥
躬鹿　　森角
酒船　　唐丸

講師　　紀定丸
讀師　　鹿津部眞顏
判者　　四方赤良

此君杯の記

道中雙六の振出しなる橋のほとりに住める、月知とかや言へる人、四方赤良が書きおける、七賢圖

式」を見て、ひとつの杯を賭れり。杯中に竹をゑがく。よりて名づけて此君といふ。それ杯は樣々ありて、羽觴、玉爵、鸚鵡杯、金屈卮など、見ぬ唐土の京物語にて、其のかたちをだにわいだめず。我が日のもとのいにしへは、汙尊抔飮の風すなほにして、土器のみ用ゐたり。されば三つ組のみつ指にて、左樣しかればの挨拶も、候べく候のべく杯となり、引くに引かれぬ引杯は、さいつ押へつあひの手もとに、入りくるくく大杯、百藥のてうどうけて、椰子の毒けしをたのみ、しつほく臺の一つの隅をあげて、こつぷを三つの隅にめぐらす。何某門院の黑木の詠は、大原杯の製をのこし、難波江の浮む瀨も、淺草川の淵と變ず。たとひ時酒移りうまごと去り、樂しみ悲しみ行きかふとも、天さへ醉へるはなの朝、頭もふらつく月のゆふべ、雨のふる日も雪の夜も、日々醉うて泥の如く、一年三百六十日、一日も此の君なかるべけんや。

此の君はいづくよりぞと問うたれば笑つてこたへず心かんなべ

昔ならで誰れかはくれん呉竹の色をも香をもさかづきぞ知る

談洲樓ノ記

竪川の流れ市川に通じ、聲と響きの相生のまちに、談洲樓といへる高どのあり。一たび此の樓上にのぼれば、三階の高きに登りて、登ればくだる稻荷町の情を知り、大日本の東側より、天地の大芝居を

見るが如し。嗚呼此の樓の高きこと、あるじが自慢の鼻柱、はなの高いはたらちねの、譲りものせし飛驒たくみ、うつすみかねの筆とりて、帆柱たてる橋柱に題せし、それは司馬氏これは焉馬子。合はせて「兩面年代記」のむかしより、「碁太平記」の宮城野を、しのぶに餘る語路の露、萩に薄に玉菊が、狂歌燈籠數度の月、いま酒力さめ茶番歇んで、只牛島の牛のよだれ、長きはなしの種のみぞ、洲崎に立てる松のはの散りうせず、はくことは長鯨の汐をふくが如し。談天の桁、雕龍の奭、轂の油しぼれども盡きず、大鋸屑の粉いはばいはれん。たとひ蘇秦張儀がさかやきを剃り、富婁那子貢が皮羽織きて、夫子を以て鐵棒とすとも、主人の舌を卷物の、「太平樂」におよぶべからず。かの晉人の淸談などは、錢ごまのはだしなるべし。嗚呼つがもない。

里の花燈籠の記

九つの枝をつらね、萬の燈火をかゝげしは、見ぬ唐土か西域か、日本堤のこのかはり、三河屋の燈籠見んと、きつゝなれにし北の里、はる〳〵きぬる旅ならで、うかれ女の道中姿、たちならびたる家家の、ともし火の花の傍に、みやま木ならぬ山人の、ひなぶりを書いつけてよと、二日醉のさけの上、不埒の大人がふら〳〵と、たしかもとめし約束は、ほん〳〵盆の今日あすと、團扇太鼓のうちすて難く、釣燈籠の手柄のあそ、高燈籠の松のやかた、山の手の舞どう籠、名に高彥の揚燈籠はいふも

さらなり、八百八街のはじめにおす、手車の本つ町、おほんたからの宿りとる、かり草の馬はむ町、馬に鞍置くくらやみの、恥づかはしき言の葉を、四方のあかゐにになひ出づることとはなりぬ。もとより數寄屋燈籠のすきめなき、切子のあみの目に觸れなんは、はづかしのちりならぬ、水ぶつかけの釣瓶てふ、名に大門のそばきりさうめん。御免候へ、たわい／＼としかいふ。

岡目八目　草雙紙の評判記也

右に見えたる位附、大極上や黒吉より、上々等にいたるまで、必ずあてにし給ふべからず。御旬到來次第不同、にくい／＼はかはいの裏、善惡不二の片手打、拍子を揃へて打つておけ、しやんと小褄をとらの春、正月二日の初夢見て、とんち早咲早梅の、うみ出したる趣向なれば、三千世界をたづねても、こんな作がと人さんが、笑はんすのも大事ないが、そりやこそ鳴いたは透頂香、波錢一本うそ八百本、向う通るは清十郎ぢやないか、笠がよう似た花菖蒲、いづれあやめとひき／＼を、頭にいただくつうるの羽重ね、千秋の雲晴れやらぬ、朧夜のつれ／＼なるまゝに、青柳硯に向ひ、一寸二寸三寸の、つか短なる筆と墨、つかひ果して一部の書と、ならの旅籠や三輪の茶や、合の宿にて臍村の、おかげで腰が拔參り、島さん紺さん中乘山人、おつゞら馬の後に記すと、敬つてござえすヨヤヨウ。

狸の圖ノ贊

一荷の土船の危きに乘らんよりは、八疊の金玉の安きに坐せんには如かじ。狼のそのしたくびを踏んで、其の尾につまづかんよりは、己が臍に茶をわかして、文福の毛をはやさんには如かじ。

ことぶきを長地にうつや腹つゞみたん〳〵狸ちゝ千歳經ん

猩々贊

あしの葉をふき、竹の葉を酌むあしの、よもつきじ。竹のよもつきじ。

織物の贊

相生町の松にはあらで、竹屋町のきれを織り出して、柳櫻の錦にかへ、書畫の牀のながめとなさんと、思ひ月夜の烏亭のあるじ、焉馬の誤り更になし。竹屋町々々々、此の君なくばあるべからず。

蛙の贊

花に鳴く鶯にともなひては、催馬樂のちからなくして、あめつちをも動かすべく、月の桂もをりを得ては、不死の藥をまどかにして、おのが齡も久かたなるべし。むしろ香山の石となるとも、ゆめゆめ鄭門の蛇にならふことなかれ。

七拳圖式

唐山にては酒令といひ、吾が朝にては拳酒といふ。天竺にては酒のむもの、五百生が間手のなきも

のに生まれし故、此の拳の沙汰を聞き及ばず。抑此の七拳は、もろこし晉の七賢の直傳にして、竹の林のふしはかせ、聊か相違なきものなり。今幸ひに一巻を得たり。熟閲して其の傳の絶えたることを、伊丹諸白、鴻のいけどりの圖式をあらはして、四方のあからさまに弘むといふ。夫れ賢は拳なり。十目のちらつく所、十手の指ざす所、それ拳なる哉。富は酒屋を潤し、徳利は身を潤す。心廣く體よろ／＼と、足もとのさだまらぬこそ、上戸はよけれ。

新酒ノ頌

酒々、儀狄つくり大禹嘗む。古きは新しきに如かず。重きは輕きにしかず。輕く清めるものは、暫時の頭にのぼり、重くにごれるものは、二日醉の枕となる。たちまち醉ひたちまち醒む。日々に新たにして、又日々にあらたなり。

風流狂歌杯報條

そも杯の濫觴は、ちよくらちよとこれをかう持つて、三日月なんどの形を表はし、左のきくは天の道、底をしたむは地の淨め、天地のあいは手本となる。人と生まれて酒のまぬは、玉の巵かつもりの如し。見ぬもろこしには金屈巵、わが日本には内ぐもり、其の土器のすなほなる、ためしを今に引杯、又三組の三指より、候べく候のべく杯、小原たつもゝとらまへて、酒のませんとの一興には、

狂歌をよもに過さるべしと、例の赤良の筆をかり、すゝむる酒の徳孤ならず、かならず鄰の松陰も、今一しほの色を添ふ、枝も榮えて葉もしげる、千代のこの〳〵杯が、まはつて來たは〳〵。まはらぬところは御目長に、御覽の通り狂歌杯、よいもわるいも御手にとつて、唯よい〳〵と御評判奉希候以上。

土佐の麻衣報條

神樂催馬樂今樣のむかしはいさ知らず、近頃世にもてはやせる淨瑠璃となん言へるものは、琵琶法師の「平家」にならひ、六十帖の事をつらね、「源氏」とよべるとなん。この二つは謠ひものの父母として、此の道の難波津淺香山ともいふべし。しかるに「源氏十二段」といへる物語に、淨瑠璃御前の事を述べしよりこのかた、源氏をあらためて淨るりと呼べるとぞ。武藏野の廣きおほん惠みしげく、角田川の水ひとたび清みしより、太平の代をうたひ物せし、江戸節の元祖を筑後といふ。其の子虎之助受領して土佐少掾正勝といふ。これより其の流れ千筋に別れ、暝江の底なきがごとし。今其の源にさかのぼれる内匠はしらふかくこの道に耽りて、受けつぎし家の風を普く世にも吹きつたへんと、ふたつの國の橋のほとり、萬代の龜屋てふ高どのに、波のあやつりをりからの興を添へ、柳の絲道長き日のながきめと爲さんとす。斯かれば花の江戸に有りとしある人、八百八街に住むとし住む人、東錦

のふいとう〳〵、朝は疾うから集はざらめや。

壁書

屁をひらば尻をすほめよ。毒を食ふとも皿をねぶることなかれ。一寸さきを闇と思はば、天道人を殺すべし。

三谷傳來吉原細見説

此の里こゝに移りてより以來、延寶に「吉原戀の道草」ありて、淺草橋より大門口まで、輕尻駄ちんのあたひを記せり。三人づれにて馬一疋は、「塵劫記」のりかへなど、上手ぶしに謠ひしもをかし。元祿の「吉原草摺引」、寛永の「吉原大黑舞」、享保のはじめの「丸鑑」、これ等は其の名を記すのみにあらず、其の姿心ばへまであからさまに品定して、今見る如し。「源氏」の雨夜の物語、曉傘をかはせたる頃なるべし。其の外にも「兩巴巵言」は大人先生の筆をふるひ、「洞房語園」は莊司の家になれり。抑吉原細見は、始め横本黃表紙なりしが、享保のなかばより唐紙表紙となり、明和の頃よりぞ今のすがたの小冊とはなれりける。新命婦は月々にあらたに、大正は春秋にあらたむ。はた細見と名づくること、大行は細謹をかへり見るか。醉うて茱萸をとつて仔細に看ろと、唐上人の菊の節句に、臺の物や水菓子を見て、つくれる詩にもとづけるや。細身の御太刀の武左にもあらず、いなさ細江の旅人客に

もあらず。楚王の好めるおいらんの、ほつそりとすわりの柳腰、みかへり柳の總堀に、細谷川のながれの身、三千の粉黛五町の一郭、醫師の外には乘物を、ゆるさぬ祕傳の御高札、御覽の通油町、五十間からはえぬきの、大木のかげに立ちよりて、からまる蔦屋重三郎、田圃にあらぬ耕書堂、一子相傳祕中の祕說、とつくと細見あられませう。（エヘン／＼と目がねをはづし小湯をのむ。茶わんに黑ぬりのふたあり。）

悼大飯食人祭文

水すまば先づ赤えひをあらふべし、にごらば蛸の足をあらはんと讀みて、浮世を茶漬一はいともおもはざりし大飯食人、かりそめの病にふし侍りしが、つひに北の枕飯となり侍りしと聞きて、例の戯れたる友どち、みそひともじの精進ものに、其の人のとしの數も三十五歳のかけ膳をするゐぬ。靈それ知ることあらば、尙はくは饗けよといふ。

ひとりごと

素盞嗚尊の月代剃り、衣通姫の革羽織きて、天の浮橋のはし詰に出で、天の八衢につくばふとも、花のお江戸の戯れ歌、よみ出でん事は難かるべし。今の世におほかる大人々々々々々々々々々々々等は、神も御存じなきことなるべし。

五十初度賀戯文

東方朔は四千歳、三浦大助七十九、浦島太郎が七世の孫は、思ひもよらぬ厄介を引請けたれば、他人にかゝるも同然にて、餘りめでたきことにはあらじ。武内の宿禰の厄拂に譜れたるは、同名の誼あれば、親も嘉兵衛子も嘉兵衛なる師に寄す。鶴と龜より長生なれど、烏に寄する祝ひともいへる御出題もなし。私當年五十になり候。御馴染の御方詩歌連俳狂詩狂歌とも皆御斷りなり。名代に愚詠一首。

竹の葉の肴に松のはしたてゝ鶴のすひもの龜のなべ燒

狂歌三體傳授ノ跋

たゞ狂歌には師もなく傳もなく、流儀もなく絲瓜もなし。瓢簞から駒がいさめば、花かつみを菖蒲にかへ、吸物のもみぢをかざして、師走の闇の鐵砲汁、戀の煮こゞり雜物の質草にいたるまで、いづれか人の言の葉ならざる。されど昨日今日の今參りなど、戯れたる名のみをひねくり、よりものの怪かしの青くさき分際にては、此の趣を知ること難かるべし。もし狂歌を詠まんとならば、三史五經を簑の目にきり「源氏」「萬葉」いせより鉢、世々の撰集の開引崇、ざく／＼汁のしる人ぞ知る。狂歌堂の主人眞顔にとふべし。其の趣を知るに至らば、曉月房、雄長老、貞德、未得の迹をふまず「古今」「後撰」「夷曲」の風を忘れて、始めて共に狂歌をいふべきのみ。いたづらに月をさす指をもて、

繪にかけるなの尻を抓むことなかれ。これを萬載不易の鼎といふべきかも。

長櫃序

萩を姓とし藤を名とし給へる人、戯れたる名を紫のゆかりと呼ぶ。とし頃赤良が筆の跡をあつめて一巻となし給ひぬれば、やがて「長櫃」とは名づけはべりぬ。ゆめ／＼人にみやぎ野の、露ばかりももらし給ひそといふ。

旅日記のはしがき

それ天地は萬物の問屋場にして、光陰は百はたごの旅人なりとは、沈香亭にてあつかひし、生織の名言なるべし。いづれ旅ほどおもしろき物はなし。朝の雲助長櫃の長々と、旅路をとりやるとうたひつれ、夕の月代ふたゝび鏡臺にかたむき向ひて、晩におじやれの約をなす。本宿よりも間の宿にぎやかなるに、名所よりは名もなき所に山のたゝずまひ、水の流れと人の行方の果てしなき松原、つかの間かなる棒ばなに筆をとる。

謎の言葉

謎のよつて來ること久し。「左傳」に山鞠窮の庾詞あり。後漢の世に、黄絹とかけて絶と解く。其のこゝろは色絲なり。幼婦とかけて妙と解く。其の心は少女なり、などは、此の頃の謎に似通ひたり。

其の外「瑯琊代醉編」、または「寄園寄所寄」の類に見えし商謎の數々、猜燈に判じ物等、數ふるに暇あらず。我が日の本には、小野の篁の無悪善をさがなくばよからんと詠み、子子の子の子子子の類、枕草紙のなぞ〳〵、小野宮右衛門督家五番三番の「何曾歌合」、「つれ〴〵草」の馬のきつりやう、後奈良院御撰の「何曾」など多かる中に、慶長の比洛陽に宗鐵居士といふ者あり。謎百句をつくりて「酸物圖」といひしは、羅山先生十八歳の時作り給ひし「謎辯」の序に見えたり。其の後いつの頃にやありけん、なぞ〳〵なあに菜切庖丁長刀、納戸のかきがね外すが大事といひし、昔のふりを傳へて、寶永の「御所謎の本」、明和の「讀みうり謎かけぶし」など老いの耳にも殘れるを、今年淺草寺大悲者の側、正月屋の市に先だちて、人あまた集へるを、何ぞと問へば、陸奥國二本松より來れる、都春雪といへる盲人の、謎をとくことと、とくほんの十念の口よりも大いに都下に流行して、辻々に謎の番付を鬻き、家々に謎の警句を傳ふ。まことに謎の世界といふべし。

鬼念佛ノ贊

蝸牛の角折れては、蠻觸のあらそひ止み、外面夜叉の如しといへども、内心菩薩の道に入れり。身を墨染の奉加帳、つくたびごとに奥山の、鐘の撞木はなまいだ〳〵。

南無あみだぶつとさとりし發心におにも早速滅無量罪

十三夜十三體　醉月樓會、今闘二三體一

詩

島臺ノ野菊尾花ノ前　卽席ノ詩歌雜ニル誹連ニ　團子夜中新月ノ後

十三里ノ海鎌倉ノ先

歌

十五夜につゞく山流の琴の曲くもるもすめるなが月のかけ

連歌

置く露やしろきを後の月の影

誹

賣りのこる薄に早しのちの月

謠　武藏野

草より出でて草に入る／＼、月の行方を尋ねん。「是れは北國方より出でたる僧にて候。我しばらく正燈寺に籠りて、紅葉の落葉を觀じ候ひしが、いまだ武藏野の月を見ず候ほどに、此の度おもひたち素見せばやと存じ候。またよき序なれば、千川上水の源をもききはめばやとおもひ候。通行「あやめさく

馬糞の中を立ち出でゝ〳〵、轡路の鈴を追分の、宿につき毛や黒駒の、甲斐ある今日の門出を、いのる熊野の十二所の、名に高井戸の草ふかく、はや武藏野に著きにけり〳〵。

開帳場緣起

是れにかけ奉るは、忝くも菅丞相、筑紫安樂寺にて御詠歌に、

宵の間や都の空に照りもせで心づくしの有明の月

と詠ぜられし、この靈驗あらたなる、一卷勝負一口になの尊像、唐高麗には御座りませぬ。たつた日本に一體の月見でござる。近うよつて拜あられませう。雲切よけの守はこれより出ます。杯は左へ左へと廻らつしやい。

錢湯張札

一暮六ツ時より相始め明六ツ時まで月見仕候大風大雨之節は相休み申し候

一足留の御方貳度の月見御無用

一しつひぜん總て惡しき病の御方樣岡場所の月御仕舞可被成候

　鼻へかゝり候小唄淨瑠璃御免可被下候

一薄三文

一子芋衆十六文
一枝豆附八文
一毎月晦日は闇と御心得可被下候以上

月　日　　　　醉仲間月行事

御祭禮番附

壹番　勘當町　内は野となれむさしのゝだし、新造の附祭り、よし原雀の總仕廻、たいこ末社あまた、もゝ前てこずり大勢
貳番　いき開町　高慢の萬度臨でたい、大通人、来朝の髯、黒仕立の對の小袖、見え坊あまた
參番　川井新五左町　かつをぶしのだし、淺葱うらつゐの小袖、すけん大勢

請　狀

差上申御請狀之事

一此の照平と申す桂男さやかなる影につき我等御請に罷立當卯の八月十五夜より同じく九月十三日まで御奉公に月出し申す處實正なり御給金は價千金に相定め爲御取替摺物一枚被下置慥かに請取申候事
一御家之御工夫月見の御趣向爲相背申間敷候若し此の月見に付外々より如何樣の半疊打込候共我等

罷出急度致八分可申候若し又鳥影客来仕候はば早速料理方へ可被仰下候はば其の節臺のもの成とも御給仕成共御望次第可仕候事

一御好物樣御はつかうのきりしたん樟にてばてれん三味線にては無御座候銚子之儀代々上戸宗に而新川滿願寺旦那に紛れ無御座候爲其の通帳取置申候後日の月醉而如管

酒のかん田長のみ町ずぶ六店

受人　糟九郎　印

人主　芋助　印

天明元丑年九月十三日

野島地藏樣

御用人中樣

中空祓

天窗乃上仁酒止利座須率頭茶屋船宿乃命於以天薄賀本乎燒鎌乃燒木杭仁火乃附安伎事乃如久柳橋加良猪牙船鐵砲玉仁帆乎掛太留如久四手駕乃八乃御耳乎振立天後乃月見乎仕舞給邊茶屋乃負債乎拂給邊止申須

十日目三日目晴給部陰利給奈

巴人集後序

「巴人集」は四方赤良が家集なり。按ずるに寶暦本繪草紙にいはく、鯛の味噌ずで四方のあか、のみかけ山の寒がらす。イかんとんびトモ今の本に載することなし。筑地善閣御說を以て、さまよがどうだと考ふるに、鯛は魚の名、進上目錄にいはく、鮮鯛一折、と是れなり。みそずは舊說みそうづといふは非なり。みそずは味噌吸物の下畧。四方は江都泉町の商家にして、酒醬をひさぐもの、赤はあからなり。また文選ござ花ござにいはく、宋玉が陽春白雪は和するものすくなく、下里巴人は和するもの多しといへることばあり。四方の家の紋、扇に三巴なり。かれこれ合はせて斯くは名づけたるか。或は四方山の話にかけて四方山人ともいひ、或は丈夫四方の志をいだく思いれなきにしもあらず。委しくは先の辻番に問ふべし。天明四のとし皐月十あまり八日、たれかしるす。

四方の留粕 終

都の手ぶり

石川雅望

都の手ぶりのはしがき

赤螺のはらばふ田居も都なしつゝ、こゝらの世々を經ぬるまに〳〵、其の手ぶりの移り變れることなんさはなりける。此の書は石川雅望その手ぶりを一つ二つ書いつけたるが、斯くはなれるなり。其の書けることはさとび事ながら、詞はみやび言にとりなせり。そも〳〵古と今と手ぶりのうつりもて行く如く、ことばもはた變り行くものなれば、今の事を古ぶりに書かんはいと難きことにして、石上ふりにし書らよく見わたして、我がものとせざれば、斯くはなしがたきわざぞかし。たはぶれごと書けるは、思ふ心ありてなるべし。見ん人心あらなん。此のはしにいさゝか書いつけてよと、某が請ふまゝに斯くなん。

橘　千　蔭

都の手ぶり

とみ澤の市

大江戸のうちに、とみ澤といへる町あり。朝市とかいひて、そこにある商人のかぎり、つとめてより起きいでて、門の戸になしろ敷き設けて、ふるき帶なえばめる衣など、いくらともなく積みならべて商ふ。明けはなるゝ頃より、かしましきまで人つどひ來りて、おのが欲しと思ふ物はもとめつゝ去ぬ。新しげなるはふつになくて、紅のうはしらめるもの、紫の灰おくれたる類のみぞあめる。よるは解衣の亂れたる、藤衣のまどほなる、不知火の筑紫の綿、河内女の手ぞめの絲、陸奥のしのぶすり、いせをの蜑の潮衣などさへこゝら見ゆ。そも山吹の花いろ衣、ぬしは誰とも問ひ知るべき。又あさぎ色の木綿といふものに、花橘を染めつけたるもこちなげにて、ことさらに昔の袖の香なつかしとも覺えず。その中に、袂ゆたかなる唐衣は、誰がうれしきをつゝみたらん。胸あひかたき細布は、もの思ふ人や著ならしけん。麻衣の肩のまよひたるは、新防人の褻の衣ならし。花田の帶のなか絶えたるは、石川のこまうどの解きすてしなごりなるべし。うすものの一重を見ては、すぐ出でにし空

蟬の心しらひを思ひ、綈袍のあつごえたるを見ては、寒きをあはれみし范叔がむかしもしのばる。緼袍のやぶれたるが、狐貉のかはぎぬの中にはまじはれど、とばり帳のあかつきたるには、むこの大君も逃げ目やつかふべき。法師のかくる袈裟にあまたどころ引き破りしあと見ゆるは、西寺の鼠の喰ひたるやらん。琵琶の緒に腸たゆといひけんごと、うちつけに亡き人の記念にやと、あいなき衣さへまじりてあり。また今様の湯かたびらに、藍もてさま〳〵のかた染めたるなど、一つ〳〵にあげ言はんもわづらはしければもらしつ。男の禮服とすなる物の中に、うへのきぬの袖を切りて、上下と名づけたるものあり。これに次ぎて、ふみこみ、はちゝ、もゝひきなどいへるもの、あがりての世人は見も知らぬ物なるべし。かかるくさ〴〵の古物をあつめて、馬におはせ、船につみなどして、越の國、陸奥の果てまでも持て行きて鬻ぎ賣り、それより蝦夷が千島の遠き境にも行きわたる事とぞ聞く。かかるものは、もとたづきなき佗人の、あしたゆふべの煙たてかねて、せんすべなきまゝ、たくはへたる衣取う出て、あしいくら、黄金いくらとて、おぎのり借りつるを、八月のほどに購ひ得ざれば、さだまれることにて、ものかす人の心に任せて、かかる所には賣りはたしぬることとぞ。すべて新しきにくらぶれば、古物は價いやし。されどよろしき人のこれを求め買はんやは。買ふもの、失ひし人、共にまた佗人なれば、かかる市のにぎはしきこそ、世に貧しき人の絶えざるしるしなれと思へば、例

のもろき涙ほろ／＼とこぼれ出づるを、あしたの露にかこちなしつゝ、鳴く音悲しき千鳥の橋をうちわたりて、かしこへ急ぎぬ。

兩國の橋

大江戸より、本所へわたしたる橋を兩國の橋とぞ呼ぶ。いにしへこの川よりをちは下總の國なりければ、しか名づけたりと或人いひき。在五中將の遠くも來にけるかなと侘び給ひし隅田川は、此の上つ瀨にして、淺草なる大悲者もこの流れより取り上げ奉りけるとぞ。富士の嶺はさらなり、ますかけはなしと詠める筑波の山も、手にとるばかり見ゆ。そこに行きかふ舟の多かるは、たゞ柳の葉をこき散らしたるが如し。夏の頃は殊に舟あまた集ひて、絲竹の音川波に響き合ひて、恐ろしきまで聞ゆ。げに賑き都の中にも、なぞらふべき所だになく、こよなう賑はしきわたりになん。川面には葭を編みて隔ての垣となし、簀子だつ物あまた竝べて、いこふ人ごとに茶をもてあきなふあり。又同じつらなる假家つくりて、小弓の射場まうけて營みとするものもあり。髮つかぬる家、舟貸す家、もちひ、くだもの、酒うる軒など、所狹きまでたち竝びたり。すべて名高き商人の家々は、かぞへ盡すべうもあらねば、うちおきていはず。此の大路の中に、菰簾かけ假家つくりて、外の方にあやしき繪をかきてかゝげたるあり。肩ぬぎたる男の、戸口に立ちて口に手をあてて、聲たかく呼ばひいへるは、ここは丹

波の國なる奥山にて捕へつる山あらしてふ獸なり。世に稀有の物なり。前代未聞、又たぐひあらじ。家づとによき物語のたねぞ。見たらん後に錢おこしね。」と聲かるゝばかりのゝしる樣は、むさゝびの大きなるをとらへて、斯う誇らしげにいふなりけり。その鄰も同じすぢなる假家つくりて、薄衣かづきたる女子をたかき所にすゑて、うしろには白き青き紙をへだて張りたる明障子をたてつ。添ひ居たる男の、扇さかさまにとりて、まづしはぶきを先にたてて、見る人にむかひていへらく、「此の女子こそ、越の國なにがしの村なる狩人の子なれ。殺生の罪の子に報い侍りて、斯うあやしき身とは生まれにたり。されば十が一つ罪障の消えうせなんよすがともなれとて、こたび率て來て、あまねく人々に見せ奉るなり。」とて、かの薄衣をとりのけつれば、げにいひしに違はず、顏より手足まで一面に黑き毛生ひ續きて、目鼻のつき所さへ分たず。熊女と名づけつるも理にこそと、人々うちまもり惘む。「斯かるかたはにさへ生まれたるを、かゞやかしう人集めて見する事よ。彼の女いかに侘しとや思ふらん。汝が名はいはじ。」とうちたはぶれて出でぬ。向ひなる家は、ことに人おほく集まり居り。こゝは女子を六七人あつめて、ふことい へる今樣のうたひものを歌はす。こはあだ〳〵しき男女の、ゐそか事せるがあらはれて、せんすべなく互に死なんと契り語らひしことなどあるを、かかる節物にあやなししなり。此の頃世の中ゆすりてもてあそび興ずれば、さて爰にも斯うは設け出でたるなりけり。

げに世籠りたる人などの、斯うざまのことに耳馴れゆかば、自然にあだなるすさみに心やひかれん。女子には聞かすべきものとも覺えず。又高きあぐらに上りゐて、文机のうへには拍子木のかたしを置き、ふるき世の軍物語をまねびいふ。まことにや僞りにや、己が目に見しごと語りなすもをかし。片つ方に人あまたつどひ立てる所あり、何ぞと寄りてのぞけば、くろき筥二つならべ、これに大きなる太刀二つをかけ置きつ。若き男の裾ひきあげて襷結ひたるが、高足駄はきて、ついがさねのやうなる物二つ重ねたる上に乘りて、この太刀をひき拔き、さまざまに打振りて、とみに鞘に納めなどす。ずさと見えたる男、これも襷ひき結ひて、これはいま少し短き刀をぬきて、ぬしと打合ふまねをす。扨かの人のいへるは、「かかる太刀打のわざは、たゞ諸人の目をよろこばしめん業なり。まこと我が家のいとなみは、藥ひさぐ業にこそあれ。」とて、さゝやかなる紙づゝみ二つ取う出て、此の一つは返魂丹といひて、家に傳へたるらうやくなり。あたはら、あくたの病、或は尻より口よりこく病、舟やまひ、酒やまひ、いづれに用ゐても頓にしるしあり。又こなたなるは、齒をみがく藥なり。此の藥むしかめ齒をいやし、口の中のくさき香をのぞく。齒を白くせんことは、殊にすみやかなり。」などいひつつ、錢一つを彼の藥もてみがくに、十日の月の雲間をいづるがごと照りかゞやきて見ゆ。皆人おのがじゝもとめつゝ去ぬ。こなたなる葭のかこひの中には、乞食の頭巾きたるが、扇を襟のあたりにさし

て、上中下の人のうへを面白くまねび語る。うしろの方に、若き女三四人ならび居て、かい彈きうたふ。とばかりありて錢もとむとて、彈きさし立ちて、小さき籠を人の胸乳のあたりへ持て來てふりうごかす。つれなしづくりて、錢もやらで出でて行く人あるを、かの乞食見て「權兵衛の尉きたなし。正なうも後を見せ給ふか。馬かへされよ。なう〳〵」と呼ぶに、皆人笑ふ。投かたみなる錢かぞへ見て、「あな嬉し、百ばかり集まりて侍り。いみじき御惠みになん」などいひて、缺けたる錢一つ取う出て、「これ御覽ぜさせ給へ。半ら許りになりにたり。物惜しみし給へる人のかゝる物取う出てたびぬ。これもて歸りて鑄物師にあつらへなば、六七文の錢やつひやさん。あなやうなし」などいひて取り隱しつ。「さてもますかげもなき君達の御蔭によりて、饑ゑず寒からず、世をいとなみ侍り。常も妻子なるものを教へいさめていへらく、必ず殿ばらの御惠みをあだにな思ひそ。ひとへに親とたのみ奉れとこそいひつけ侍りしか。よう思へば、おのれが親と聞え奉るからは、君だちの爲に、おのれは子にて侍り。さばかりよき子をもたせ給ひて、世のきこえ面目やおはすらん」などいへば、人また例のどよみ笑ふことかぎりなし。さてそこを出でてさまよひ歩くに、佐々木の家の幕じるしかと思ふばかりなる紋つけたる軒あり。藥ひさぐにや、長命帆ばしらなど、金字にだみたる札をかけたり。長命とは不死の藥なるべし。帆ばしらとは何ならん。もしくは風の藥をいへるなぞ〳〵にや。かかるむつかしげ

なる藥さへ、その心得て買ふ人あればこそ、なりはひとなして世をわたるなめれといとをかし。又人形を頭より手足までもあまたの絲もてつけて、うたひ物に合はせて、絲引きあやどり使ふを、南京のあやつりと名づけて、むかしよりこゝにて行ふ。をさなき者は皆これに心よせつゝ、つどひ寄るめり。柳の橋の方に添ひて、殊にたかやかに假家つくりたるあり。京くだり某の大夫と、いかめしく旗に書きたり。これも外の方に繪をあまた書きてかゝげ置きつ。入りて見れば、袴をばぬぎて上ばかり著たるもの三人ばかり、笛鼓うちはやす。耳もとにいさゝか髮のこして、頭なごりなう剃りすてたる翁の、おなじごと上ばかり著たるが、見る人に向ひてざればみさへづりいふ。かの大夫、頭に鉢卷といふもの後ざまにむすびて、手足みな赤き絹におしつゝみて、半臂のやうなる物著て出で來たり。見る人にむかひて、ひざまづき拜して、さて太く長き竹の三丈ばかりもやあらんと見るを中に立ててあるに、するするとのぼりて、竹のうらに身をとゞめて、扇取う出てうち煽ぎたる樣、いとやすげなり。竹は右左になびきて、いまや落ちなんと、見る人心をのゝき目くれてあやぶみ思ふに、竹を膝にからみて居ることも、常の人の地に坐したらん如し。さて或は立ち或は伏し仰ぎて舞ひ、そばだちて踊る。そのさま一方ならず。これに樣々の名あり。かの翁笛鼓に合はせて指さしいふ。その曲の名は、

達磨大師の坐禪のゆか

野中に立てるひともと杉
からしゝの洞の出で入り
東山の大の字
梢つたふさるまろ
餌落したるやまがら
住の江のそりはし
松に這ひたる藤波

猶こゝらあめり。さて長く引きはへたる綱の上を、傘さしてわたる。ながき紙の上をもわたるに、みな足ぶみを拍子に合はせて踊る。見る人あさみ興ぜざるはなし。事果てぬれば、したゝかに太鼓うちならして、「もと見し人はかはりね。」と呼ぶ。遣戸一つあけて人いだすに、押しあひて出でもやられず。ほと〳〵しりなる人に皸も踏まれつべし。向ひなる川づらには、水にひたりて十餘人ばかり、聲そろへて何ごとにかあらん、高らかに唱ふ。こはおもきばうざを救はんとて、垢離といふこと行ひて、相模國なるあふり山の不動尊にねぎ祈るなりけり。手ごとにわらしべを持ちて川に擲つ。流るゝをよしとし、たゞよふを惡しとすとなん。こと果てぬれば、己がじゝ衣著さわぐに、猶若きものは、

こなたかなたうかび、かづき出でて遊ぶもいとあやふし。すべてこの橋の前うしろには、ひまもなく商人の家立ちこみて、大君來ませと呼ばへる軒には、蚫さだをかきら〳〵しう、われもの申すといひたる家には、夏瘦によき鰻もありぬべし。あるは虎てふ神を木もて作りする、又あらたまれ障子に畫きて外の口に立てたるもあり。いがらしと名のるものの家にさしむかひて、破れたる芭蕉を壁にゑがきたるは、つきな〳〵しう見ゆれど、おほゐといへる豆腐ひさぎて、あかしと名のりたるは如何ぞや。此のほか、餅を幾世の名にことぶき、煎餅を羽衣の松になぞらふなど、取り出でて數へいはんも、言の葉たるまじうぞ覺ゆる。かかるあたりを經めぐらひて、まゝと共に遊びさまよひしも、はや四十年の昔とぞなりにたる。げに年月の流れ早きは、この川の瀨に劣らざること、夢のわたりの浮橋をわたりくらべし人は知るべきにこそ。

ばくろの町

大君は神にしませば水鳥のすだくみぬまを都となしつ

とは、あがりたる世に詠みたりけん。げに野中ふる道あらたまりて、いまぞ都とこそなはれる中に、くらかけの橋の左右は、なべて人やどす家たち續きて、いと〳〵にぎはしき所になん。このあたり昔は海につゞける入江の沼なりとか。今はさるおもかげだに殘らず。橋より北ざまを、ばくろの町と呼

べり。其のかみは、古りたる寺ならびありて、さびしき草の原にして、橋の南は六本木とて、中つ世の驛路とぞ。今はこてまの三の町とぞいふなる。元祿の比までは、人やどす家ども、この三の町に僅かに十ばかりありしを、同じ六年といへるに、信濃國なる善光寺の御佛をもて來り奉りて、本所なる回向院にて拜ませしに、世の中ゆすりて、これに詣づる人おほく、とほく田舍のうば翁まで數知らずつどひ來て、此の宿りに居あまりつゝ、夜も大路にむしろ敷きてぞあかしける。この頃より斯かるなりはひする者やゝ數まさりて、遂にばくろう町のわたりまで住みわたり、營みする事とはなりぬ。今の人、これをはたごやと呼ぶ。そもはたごとは、まづ行く人の、かたみ、あるは旅行く人の持てる籠などの名なりけるを、いかなる故ありて、斯うは呼びつけたるにか。家居のさま、門毎にあるじの名を記しつけたる札をかけ、明障子にも、筆太に同じこと書きたり。簷子の下に解きすてたる藁沓、うらなしなどいくらともなく重なりあるは、やはぎの市も斯うぞなど覺ゆ。あるじにや、しも男にや、町の辻にたゝずみ居りて、旅人の過ぐるを待ちつけて、「宿とり給ふや。」など問ひきく。「知りたるやどり有り、かしこへ。」などいへど、なほ追ひ來て、「かしこはまびろけれど、人居こみて、所狹う侍り。わが家こそさゝやかなれど、合宿りの人もなし。疊夜の物も皆きよらにし置きて侍る」など、様々にこしらへいふ。始めはいなみぬる人も、すかし責めらるゝにし侘びて、しぶ／＼に彼に引かれつゝ行くも

をかし。軒のはしに、菅笠たかく掛け置きたるは、おくらかしたる女を待つ目標とぞ見えし。これらはみな、伊勢の濱荻折りふせて、旅寝せんと出で立ちし神詣での人にぞありける。湯あびんとにや、はだか鶴脛にて、三四人ひき連れて、湯屋たづねさまよふもをかし。凡て天ざかる鄙人にしあれば、家にありては、栗稗などをのみ食物とはすめり。さるを、よくしらげたる米の飯、笥に盛りて喰ふ。椎の葉に盛ると詠みしには、様かはれる旅のやどりなり。奥まりたる方に居るは京人にや、長き旅路にいろは黒みたれど、さすがに其のさは見えて、なだらかにもてなしつゝ、日記のやうなるもの取う出て讀みなどす。「旅は嫉こそ。」などうち誦しぬるもゆかしげなり。外の方に女どちも七八人、老いたる若きうちまじりて、足ひきながら入り來りぬ。あるじ「いづこよりぞ。」と問へば、「こよろぎの磯近きわたりより。」といらふ。「さらば御肴とりにわかめかりあげてん。」と立つを、「さるものはねぎ侍らず。玉藻の中はかしこし。人けとほくだにあらば、薦簾中にすゑ給ひてよ。」と、うち笑ひていふ。田舍びたれど、さすがにつゝましうちうち忍びて、だみたる聲人にきかせじとにや、言少なにもてなしつゝ、さし出でたる盥に足さし入れて洗ふ。調度めく物はつゝみにつゝみて馬に負はせつるを、從者はこれに乘りておくれ來つ。何事にかあらん、下りざまに馬ひきたる男と諍ひてのゝしり騷ぐ。わかき人はあきれて手まどひしつゝ、みな逃げて入りぬ。乳母にや、おとなしき女の出で來て、從者が手をとら

へて「人わろし、物ないひそ。」と制して奥ざまへ率て行く。「都人の思ひいはんもはづかし。旅の空にて、かかる心はつかふものか。ようせずばかの男に打たれやせまし。淺まし。」とて、口々從者をあはめ責む。口附の男は、あし思ふさまに得て、咲みまけて馬ひきて歸る後でもにくしや。一間なる方には、髭生ひこえて、まぶしつべたましき男、一人諸手くみ、頭うちかたむけて、壁に向ひ居り。問はず語りするを聞けば、「おのれもとより家遠くして、さきに鄰なる主にこゝらの黄金借り出でたれど、たゞ朝霧の日にむかひたるやうに、時の間に失せにたり。返すべき期もよく知りぬれど、持たらねばいかにせん。たゞかの人の死にもやすると、はかなきあいなだのみにひきじろひて、年頃をすごし來ぬ。さるを、こたび村長のあつかひ物すとて、いたくおのれを責めさいなみて、今年の程に、此のこがね殘りなく返しやりねといひおきてたるぞ理なき。此のこがね、もと村長の貸し與へつるにもあらぬを、しかばかり腹立ちいふなるは如何なることにか。村長若しめぐみの心あらば、鄰の人をいさめて、百年千年過ぎんまでも、なだらかに待ちてあれとこそ言ふべけれ。無き物つぐなへと責めいへるは、尼御前にむかひて、ふぐり出せといはんに異ならず。」と、頭うち振りつゝつぶやく。たかどのの方に、がや／＼と人の聲するは、越の國人なるべし。三四人つどひて酒飲みあそびて、いたく醉ひやすゝみけん、からき聲しぼり出でてうたふ。それが中に、わかき男の立ち上り、扇とりてすづりも

ぢり舞ひ踊る。その歌は、かしこの國ぶりなりけり。

酒をたうべつ　五句の酒を
一合たうべて　醉ひいやましぬ

などうたふ。猶あかずや、皆立ちて舞ふ。

盆の十三日に　舞人はそろひつ
稻の穂よりも　いとよく揃ひつ

拍子とる度に、「やとせのせ」と打囃しつゝ手うつさま、鄙びたる物から、見知らぬ目には珍らしく、興有りてをかし。こなたに並み居てゆふげ食ふ人は、信濃の國の人とか、大きなるまりに飯たかう盛りたる、さながら越の白山を折敷の上にうつし据ゑたるやうなり。あつものの汁一口にすゝりて、あはせの魚、頭も骨も殘りなく食ひつくしつ。さていへらく、「腹をそこなひて日頃になり侍る。心地あしければ、自然に飯はむも甘くもあらず。今宵たゞまりに五つばかりを食べぬ。かばかりにてはいと心細しや」とて、伏目になりていふ。かかる人の心ゆくばかりものせば、いかばかりの飯をや食はまし。いと恐ろし。隔てたる障子のあなたに居るは、衣手の常陸人なり。うちゆがみたる聲してさへづり言へるは、「今晩ないたく困じにたり。なでふにもかでふにも、脛いたくて動くべうもあらず。うち

そべりて聞えん、ゆるしめせ。」とて、端ざまによりて臥しつ、とばかり有りて、つい起き上りて、目をを大きになして、雷の落ちかゝるばかりの聲して「大事をなん忘れにたる。果の節にていこひし時、うるまのいも谷二つ乞ひ求めて食ひたりき。そはおの札錢を代へ置きつ。すが〳〵とおこしめせ。」といふ〳〵、寝たる人をさへ起す。「明日こそ物せめ。ねむたきに。」と侘ぶれど、えしも許さで、うちはたるも情なげなり。ほどなく無緣寺の鐘きこゆるは、亥の時にや、おの〳〵うちやすみたりけん、音せずなりぬ。疲れし業のなごり、夜一夜大どれたる聲して、寢言とか互にのゝしるも氣疎く、例はあなかしがましと聞きつる聲の中なるきりぎりすさへ、けおされたるにや、音たてぬやうなり。明くれば朝餉疾くしたゝめて、己がじゝ心々に行きわかるめり。「げに何れかさしてと思ふにも、旅ばかり哀れにをかしき物は又あらじはや。古人の詞に、天地は旅のやどりなり。行きかふ月日は旅人の如しといへり。されば生まれに生まれたる人、誰かはとこしなへに此のやどりに留まり居らん。浮生は夢に似たり。ようなき財に心をかけて、草枕旅寢の崎ふい浮びたる雲をのぞまんは、いと〳〵愚かなる心にこそ。」と、その夜やどりし山伏法師のうちひそみつゝ語りたるを聞きて、ふかき心のゆゑよしは知らねど、げにと目さむる心地こそせられしか。

やくし堂

いつこも同じなど續けたりしは、片山寺のかごかなる所にてこそ詠みためれ。[illegible]しける都の中は、なべて所狹う人の行きかひ賑はしうて、秋とだに知らぬ人も多かり。女どちは折にあひたる色の綾薄物、己がじゝ好心にまかせてさうぞきつゝ、男方も今樣の一重衣うるはしう著なし、扇とりて夕暮おそしと待ちとりつゝ出でたつ。下つ方はとりあへたるまゝの湯帷子に、帶しどけなげに引結び、老いたる若きうちまじりて、道さりあへぬまで押し合ひつゝ行く　なにしに斯うはと思ひめぐらすに、錦のわたり近き所におはす藥師佛をおがまんと行きつどふなりけり。人ごとにいきみ立ちて、そゞろに思ひなげなるおももちなれば、あり煩ふ人としも見えぬを、さる御佛たのみて何事の祈りするにかとをかし。爰に海賊の橋といふあり。貫之に見せましかば、渡りも果てず逃げなましとをかし。されどしづけき御代とて、いさゝかの白波だに立ちわたらねぞ尊きや。橋より南ざまに折れ行けば、いつこの野山よりか持て來にけん、さま〴〵の木草數知らずならべ置きてあきなふ。こゝらある中にも、九日を待ちあへで咲き出でたる菊の花、うち見るより老いも忘れつべき心地ぞする。また夏に遅れて咲き出でたるも數多あり　くさのかう、桔梗、龍膽、紫菀、苦丹、薔薇など何れかまさり劣りやはある　されど昔より物の名によみいひつけつゝ、その樣を顯證に詠み出でぬぞ本意なき。かき數ふれば七草の花ごとに見どころは多き。藤袴のにほひたちあかりたるは、常ざまの花にも似ず、誰が[illegible]物にや

すらんといとゆかし。あるは古枝に咲ける萩の花、もとの心は斯うもあらまほしと思はる。また朝顔を根ごめに移して、さかり久しかれなどいはふも、とり〴〵にをかし。高やかに咲きみだれたる女郎花を、人々集ひつゝ競ひ買ふ。あなかしがましとひとり笑みぞせらるゝ。姫百合、撫子などは、人めきたる名なるを、犬蓼、えのこ草としも名づけるたるは、いかに思ひくたしたるにや。鳳仙花、鶏頭草などは名のみにしもあらず、形さへこの國の物とも覺えず。そも秋好む宮の御前はいかなりけん、遍昭が庭のつくり樣はいふにもたらじ。嵯峨の大井のわたりは、未だ行きいたらざれば知らず、あたりちかき武藏野の原といふとも、げにけおされつべき秋のいろなり。うしろの方に大きなる松を根こじきたるが、さかしらに高砂の松と書きて下げたり。今日しも知らぬ人に引きとられて、誰をかも知る人にとをかし。そのほか、竹、榧、柊など、常磐木のかぎりならべ置きたる、やう〳〵さま〴〵にて、いくそ度見めぐらふもあかぬ心地す。又かたへに小さき籠をいろどり、それにくさ〴〵の蟲を入れて賣る。いなごまろ、はた〳〵、松蟲、鈴蟲、猶こゝらの蟲あめる、等しく競ひ鳴く。生絹もてはれる箱に、螢あまた集めたるを見ては、「色ごのみの家のすさみも斯かりけん、唐國の巣が窗やいかなりし。」などいふもあり。「蟲のしや尻に火のつきて。」とのゝしり通るは、よからぬ人とこそおしはからるれ。兎角する程に日も暮れぬ。いそぎ御堂に詣でてねんごろに伏しをがみて下りつ。御くるわ近

きわたりにては、この御佛をおき奉りては、藥研堀といふ所にたたせおはす不動尊、さては白銀の町にましますす觀世音、この三所ご參りつどふ人もおほく、また植物などあきなふ人も、共にひとしく覺ゆる。げにはるかなる野山の草木をひとつ所にあつめ見んは、人の國にてはいとも難きことなるを、何事につけても、事たらひぬる都の樣ぞかたじけなきわざにはある。

よたか

沖つ舟よるべ定めぬをうかれ女と呼び、家にありてまらうどを待つをばくゞつとぞ呼びつけたる。これはさる類には樣かはりて、家にしもあらず、舟にしもあらず、たゞ大路の隈々、あやしき木の下などを尋ねもとめて、しばしの寢屋とは定むるになん。京難波には總嫁といひ、東の方にては夜鷹とぞ呼ぶなる。さるは、晝は臥し夜は行きて鳴くとかいへる古き文の意もて名づけ初めたりけん。日入る頃より裝ひこちたく物して、彼處へとて急ぐ。むかしは木綿の黑きを衣とし、白きを帶となして、頭をば手拭に包みていでたちしを、今樣はさるまねびをもせず、常ざまの市人の女のごとく見まがへ歩く。若きはまれにて、四十より五六十ばかりの古おうなぞ多かる。みづはぐむまで老いにける身をひきかくさんとにや、額髮のぬけ落ちたるをば墨をもて染めかくし、白き髮をば黑き油したゝかにして塗りかくしつ。されどえしも隱しおほせで、白きがはだらにまじり出でたる、見ぐるしうきたなげ

なり。げに雪は頭につもりぬるさへ、あとつけまうき色そしたる。暮れ果てぬれば、例の所に立ちて行きかふ人を呼ぶめり。つれなく過ぎ行く人もあり、また近く寄り來て、ひた／＼と顔をまもり見るもあり。初めよりこれをむねと思ふ人は、こゝかしこ立ちも通らで、たゞちに走り來て奥さまへ入るを、やがてなゝつゞきて入る。臥所と見えし所は菰簾かけたれば、夕月夜のさだかならぬには、あらはにしも見えず。さるは、秋ならずとも露けからましと覺ゆ。裾高くかゝげて小太刀さしたる男のにくい顔したるが、「なににか來けん、馬つからしに」とうめきて、よご／＼歸りいぬるは、おもへる人に會はぬにやあらん。また痩せさらぼひて杖にすがりたる老法師の、わなゝく／＼見めぐり歩く、かくてもすゞろごりけるよとをかし。古博打のうちほうけたるにやあらん、垢つきたる衣著て、海松のごとき帯に手拭さし挾み、木履はきたるが、女のもとに寄り來て、うちさゝやきていふ、「此のごろ錢といふ物ににくまれて、窟も蜘のいにとぢ、引きかぶるべき衾だになし。さるから日頃經れど來すなりぬ。人のつてに聞けば、某殿の從者こそ夜がれせず來通ふなれ。面つきをくらべ見んに、おのれいかで彼におとらんやは。わ女、人わきして、錢ある方に心寄せて、人をはちふくこそにくけれ。」といへば「くは何ごとをいふぞ、此の身は草の原なる屍ぞ。鳥の來てついばみ散らすを、いかですまふべき。」といふ。男「さないひそ。ましがめづる戀の奴の、今しも來て、つかみかゝりなん、待ちてあ

れこそ心もとなからめ。」などいひ居り。又片つ方には、人たちこみてがや〳〵とさへづりいふ。こゝには女もなきを、いかに斯くは集ふにかとおもふに、かくれの方より、手拭に面をかくしたる男の走り出で來て、たちこみたる人を押し分けつゝ出で行くを、人々見おくりて、「しやつ、天下の色ごのみよ。あたら男のかゝる者に身をはふらすことよ。貴ならましかば面をも見まし。あなむざん。」など譏りいふ。かの男は知らず顔つくりて、耳にもかけず、いづくへかこそ〳〵と逃げて行きぬ。やがて奥まりたる方より女出で來て、彼のあつまれる人をものしともせず、そこに立ちゐて猶人を呼ぶ。しわがれたるかすこし鼻聲なるは、病つきたる女とぞ知らるゝ。そこにある人、「あなけしからず。まみ口つきは、荒海に住む鰐のかほこそ斯かれ。されど物思ひやすらん、鼻さへ大空をあふぎてをり」などいへば、うしろなる人、「そやつよも女にはあらじ。文殊菩薩の乘物よ」など、さま〴〵惡げなることといひしろふ。ぎうといへるものは、かの女ばらを率て來て、かへさの道をもともなひ行くものとぞ。あまりにかしかましきに出で來て、「斯かる業も今日の煙立つるなりはひにて侍り。いとなみの妨げなし給ひそ。」と制す。理にや折れけん、各とよみて右左へ別れつゝ行く。その中に大ざれたる聲して、

もろこしの　虎てふ神は　千里なる

藪さへはしる　などや此の　障子ひとへの
ま丶ならぬ　あはれわりなの　心いられや

とうたひつ丶行く。又一人が、

我が兒子が　いざなひ行かば　如何ならん
里へも行かな　率て行かせ　斯く知らませば
ち丶の實の　父やいさめん　柞葉の
母やなげかん　かにかくに　せんすべしらに
息つくを　せなが言へらく　朝鳥の
朝立つがごと　率て行かな　何かものもふ
しかばかり　心よわくて　よけくやはある

とうち歪みたる聲を艶に聞かせんとて、たかくひきく紛らはしつ丶謠ふめり。市近きあたりなれば、めくら法師の笛吹き鳴らして「お足まるらん。」などいひありく。あぢ、つなしなど鮓につくりたるをも賣りもて行く。また蒟蒻をゆでて味噌つけたるを、鹽梅よしやなど呼びて行くもあり。ものさわがしけれど、さすがに夜に入りしけにや、川浪の音しづかに聞え、岸の柳のそよと靡くさへ、うち曇り

たる夜ながら、いとしるく知らる。市の中には橘などは植ゑぬを、いづこに宿らんとか、ほとゝぎす鳴きてわたる。されど聞き入るゝ人だになきぞあたらしき一聲なる。北ざまより來る男あり、聲高やかにうちあげつゝ、「今こそ名のれ、某こそ平氏のつはもの七兵衞尉景淸なれ。保童の君をかしづき奉り、なき君だちの報いせんと、容をやつし隱ろへ來しを、重忠が爲に見あらはされつる念なさよ。よし〳〵、さらば日を過さず軍をおこし、鎌倉へおし寄せ、敵の奴ばら皆殺しにせんず。汝重忠頭を洗ひて待ちて居れ。」と、いきほひ猛に叫びいへるは、わざをぎの家に親とすなる、市川の某が聲音をまねび出でたるなりけり。門守の拍子木うちまはるは亥になれるなるべし。かの女ばら、已がじゝさうざき、帶ひき結び、もすそ鶴脛に引きからげて、かたみに名を呼びかはしつゝ、十餘人ばかり一つらになりて宿りへと急ぐ。道すがら大きなる聲してうた謠ひ、聞きも知らぬ物語しつゝ行くさま、つゆ女しき所ぞなき。或はいさかひ腹立ちて、人をのりつゝ步く。蕎麥あきなふ男の荷ひたる箱に、風鈴といふ物結ひつけて、風のまに〳〵ゆり鳴らしつゝ行くを呼びとめて、立ちながら食ふめり。ひともり、ふたもり、さら〳〵と食ひて、口おしのごひつゝ、いざとて手ひき合ひて、行く〳〵聲ひとしくしぼり上げて謠ふ。

我が思ふ　なにがしどのは　などおそき

いとなみ作る　わらぐつの　出で來あへぬか

かなとさせるか

歌さへこゝろなげにて、いと聞きにくしや。そもいかなる人のおちあぶれて、かかる身とはなりにたるならん。あやしうも膺かはれる女のふるまひにこそありけれ。

六樹園のあるじ

石川雅望

都手振前編一巻。我師六樹園先生所レ著也。嘗借二鈔其男清澄子一。頃日求二先生校正一過。乃上レ梓以藏二文庫一云。文化戊辰九月。山本長祥識二于六出園一。

都の手ぶり 終

狂文あづまなまり

石川雅望

眞鍮の鴈首一錢の代りをなして、百貫の中に交はり、銅のはりがね島臺の松を撓めて、一夜千兩の座敷に列なる。猫につゞられししろがねは西行法師にきらはれ、金賣(かねうり)橘次が荷になりしは黄金も馬の尻をかゞ。七度燒のかんざし、うるらうの古金、すべて似た山のみ世に多かれど、皆一つらに見たよるは古かね買の荷ひ茶、目をそなへたる人のなきにや。おのれさきに師なる六樹園のちり塚をさぐりて、されたる文の草稿を得たり。上がきにあづまなまりとしるされたる　此のなまりいかで天神の御姿と仰ぎ奉り、永く狂文狂歌の守(まもり)たらん事を望むと雖も、いなとかぶりをふりにし錫のくぼみたる德利と共に棚にあげて久しかりしを、書肆なにがし、一日すゝはきの手傳ひに來りてこれを見出し、かゝるめでたき代物をむなしく鍋釜いかけいかな壺に入れたらんやはと、やがてたゝらにかけて交ひろぐることとはなりぬ。いでやつきせぬ言葉の種が島に、あづまなまりの丸(たま)をこめつゝ、其の音たかくひゞかせんとするものは、常に大人(うし)の隨筆をねらひをりて、はづさぬ的の只中なる衆星閣のあるじなるべし。

ときに文化十とせといふとし

文月星まつる夜清めたる硯にむかひて

東　虎　庵　吉　渡　し　る　す

狂文吾嬬那萬俚上

目録

狂文吾嬬那萬俚　下

目錄

狂文あづまなまり目録

狂文吾嬬那萬俚　上

六樹園飯盛述
清澄校

いかのぼり

いかのぼりといふものは、あづまの方にてはたことぞよぶなる。さるは東風のあがれる世には、師勞之とよびて、もてあそびけること、順朝臣の文にぞ記したる、この物よ。あらたまの春の頃は、若草の綠兒はさらなり、福引のおやげなき人らも、猶これにこゝろよせつゝ遊び戲るめり。さゝやかなるものは稚兒のふところにも入るべし。大きなるは維摩の庵をもかくしつべし。これに文字を書きたるを見るに、蘭といふ字は畫たらはず、國といふ字は畫あまれり。筆法もいかりそばだちて、宛ら義之獻之の跡とも見えね阿吽の仁王のひぢもちおぼえて、いかめしくこちなげなり。又繪をかきていろどりたるも見ゆ。つきがね凧の空さまにのぼるは道成寺の昔もかかりけん。釜凧の鳴り高きは吉備津宮の神祕もかうぞなど思ひ出でらる。扇凧の空に舞ひたるは那須の與市に射させつべく、提灯凧の

ふらめきたるは折助が手にや捕へつべき。清玄が頭は袖なくばえて睨み、猪のくまがかう〳〵は草指を嚙みて怒る。高凧は北風にいばえ、達磨凧は西天にひいる。奴の鼻珠にひきゝ、般若のおとがひ更に長し。鳶凧豆腐屋の軒に落つれば、鳳凰凧は桐の木にかゝる。景清は青く、金太郎は赤し。雲居に昇る龍の凧、風を起す虎の凧などとりいでて數へんには、絲まきのおよびもてこなはれつべし。かの李笠翁の作りたる風箏誤といふ正本を考ふれば、かかることのものずきは、唐國も猶ひとしきにや。あはれあがりたらんは煮て食はまし。さがりたらんは燒きて食はまし。あまつ神は強し。たつたびこは弱しなどうけひ戲れつゝ、かなびきの絲引きもきらず、風をたよりに揚卷のたちはしるさまぞをかしきや。

狂歌いせの海序

狂歌の趣向といふは上手にうそをつくことなり。これを手のある傾城にたとふ。ねんの長歌みじか歌、かへる羽織のかくし題、猪牙に棹さす旋頭歌など、其の體いと多かめるを、口でつゝたるふりしんは物まへの無心所著に勘定合はぬ言の葉をもいふめり。玆にこの道のお職あり、自ら是れ三千の第一人とぞ聞えし。八代集の八文字に、狂歌本歌の仲の町をふみしめ、古今傳受の三蒲團、源氏狹衣のしつけ学さへ、たてぬきに通しつれば、戲歌の全盛はこの人に止まりたりと、兼題とりし約束客より

むすび題のまはし客まで、なじみ初會のけぢめをいはず、こゝらそのあたりにつどひよりぬ。此の頃むくの齒磨の鼻脂、簞笥の金具光あるものをえり拾ひて鳥渡むかうのひと卷とはなしたる、これ伊勢の海と名づけつる深き心の故は知らねど、こはだの鮓のおしあてに云はば、雪のあしたの飢たて貝、なま貝や拾はん、ふは〳〵の玉子や拾はんとかなんとかかとか簪の、ひねくりたるいはれあるならん。おのれ未だこの文をひやかさざれど、某が乞へるに任せて、ついきの字やのはしがきして返しつ。さるはふところ紙の小菊一枚、當座の責めをふさぐになん。

花の屋道頼會集

普賢菩薩の乘物町、白象のはなのやの主、例のざれ歌の莚をひらきて、今年のえとの兩國橋、團子さす柳橋のほとり、いかのぼり大のしがたかどのにて、疳氣なす公達あまたつどへて、大きな玉の言の葉を集む。さるはいくよ餅のうま味に、羽衣煎餅のかうばしきなど、おの〳〵とり〴〵なる中に、川瀨の浪の幽玄體、はしゆく槍の丈たかき體、はなしむなぎの心ある體、かるわざの日傘うらゝかなる體、獨樂廻のこまやかなる體、口まめ藏のおもしろき體、講釋師の見樣體、土場太夫のひと節ある體、薄衣かゝく小娘の、鬼ひしぐ體なども見えたり。此等はみな年季野郎の腰あふぎ、實體の姿とやいふべき。此の外にもれたるは、女太夫の艶なる體、せんごりの聲の細くからびたる體、四つ目屋が

賣る代物の、太く大きたる體さへ見ゆめり。すべては淡雪ひさくこしばりの、なゑ〳〵の歌にはあらず。然るに會主の所望にておのれに代僧御名代、木でも竹でも耳學問、何でもよりどり三十八文に、此のはしづくりをかけよとある。依つて文手を放ち龜、おくらはんしの安賣の、てうどたらはぬ智慧をはたきて、豐年もちの黑い顏して、にた山うりの口上書き、巾着切の鋏にあらで、ちよつきりここに記しつけつ。

狂歌細見記ノ序

狂歌會の大門口、中の町の花の言の葉、ふたり一座の判者のゑたてに、大夫格子と數へつゝ、その名を呼び出し付けまはし、名歌をあげてかきのれん、ゑんり江戸町、伏見町、すがかきひくは、二の町の、新造となり部屋となる、有心無心の文の數、讀んでゑなせの連ね歌、つらりと團欒にお竝びなされて、大よせ吉原細見記、五葉の松葉や丁子屋の、たぼに比べて御覽ぜよと、こたびの會主のつる村さんが、おつせゑすといふ言つてを、名代に出た廊下とんび、けび藏すなる帆たて貝、鳥渡つまんで申すになん。

げいしや

藝者といふものは、おのれが若かりし頃までは、をどり子とこそいひたりしか。をどらばころばん

うき名をやいとひけん、いつしか今の名にはよびかへたる、羅綺の重衣を織元にのゝしり、脂粉のけがれを下村にいましむなど、みなこの色をおもへばなるべし。されば蘇州刺史のはらわたを悩まし、江州司馬の袖をうるほせし、むかしもさるためしありき。きのふは六波羅の御館に召され、けふは瑞川の御所に参る。もゝ川に三杯を献じ、やほぜんに百杯を辭せず、東林をわけ、川口に趣く。武蔵屋、大黒屋は舟にておすべく、海老や扇屋は駕籠にてとばすべし。大里は頭にかざやき、金華山は腰をめぐる。紫檀の竿、花櫚の胴玉、黄金管のあるからには、船館の簾もとぶとこそ覺えし。さりみにをかしからぬことをも、聲高くうち笑ひ、癪にさはる言を聞きても、悪口ばかりとながしてすます、文句もわかぬ豐後義太夫、醉ひに乘じてうなり出すをば、あしらひながら彈いてもやるべし。あるは拳酒順のまひ、此の 杯をかうもつも、物憂き時もありぬべし。又無理強ひの杯に溢れて、血色の羅裙、しとゞにぬるるなど、いかでかはつらからざらん。銚子のかはりめ、あひの又あひ、すべて献酬のむつかしきは、故實の家にも知ること能はじ。我が家に歸る頃ほひは、むかう側の搗き米屋が、から臼を踏むをりなれば、ごほ／＼といふ鼾のこゑだに、一夜も安くかねぬなるべし。かゝる人の住家のしをりに、あけて六はんも口さがなきやうなれど、昔物語にもさるためしなからずやは。いとさゝやかなれど、三尺の入り口、かたへに江市といふ格子つけて、床あいたる壁には、なにがしが朱鍾馗をか

けり。つき／＼しからぬ繪のさまと見るは、ひとつ長屋の古金買が、かつぎし荷笊をさながらなり。左にけやきの段階子あり、中敷居の襖は、青土佐にて、すりもの所々おしてあり。分銅銅壺の竈まばゆく、一坪ばかりの庭ながら、廁めく物も見えて、藥師不動に求めたる、槇おもとなど植ゑ渡して、石二つ三つ据ゑてあり。兄の國忠懦弱にて常に妹のすねをかじる。母と見えしは六十路ばかり、常磐の嫗がかたちしながら、念佛嫌ひの面つきなり。すべて家内のをさめかた、娘が裁判を待ちて行ふ。今より十年のその昔は、引窗の煙、綱のやうに細く、錢車のまはり、悪かりければ、煮る粥のじるいをすゝりて、唐茄子薩摩芋に、腹をこやしたりし、それから出世のつるが生えしを、大屋ばかりが悦ぶのみかは、檀那寺の和尙さへ、歡喜恭禮して向ひ給へば、所化も思はぬ非時に遭ひて、盂蘭盆の棚經さへ餘程長くぞ讀みあげたる、そも亡き父のありし時は、きらずとてこい、質屋へ走れ、味噌よ鹽よと使はれつゝ、貧乏徳利手にさげて、油屋の緣の氷の上に、すべりころげしこともありき。又饂飩屋の汁つぎを持ちて醤油買ひに行きたりしなど、昨日のやうに思はれて、日かげ隙ゆく駒下駄の、かへらぬ歲をかぞふるも、おのれが眉に恥づるなるべし。十九といひしも五年ばかり、さまではいかに此の頃は、目蓋くろみて目尻に、少々波さへうち寄せぬ。されども長袖よく舞ひて、多錢よくあきなへる、腹ふくれの心に入らば、いかにおかまを起すべき。さらずば潯陽江に舟をむやひて、ゆかりの

月をやうたふらん。又筑紫のわたりに飯をたきて、井戸端に米や洗ふらん。水の流れと人の行末、案じすぐしのせらるゝも、いらざる苦勞性とやいふべき。

狂歌勸進帳

熊鷹和尚の本堂建立にもあらず、また新米坊主の衣の奉加でもなく、そも此の冊子は、あらゆる一切の夷曲の衆生に、一首半錢の物入りをかけず、僅か一首の布施をこふ、大恩狂歌の勸進帳なり。あはれ願はくは、十方の諸檀越、いろある心の花講中より、胸に趣向を疊講中、一日百首の日參講中にいたるまで、金銀珠玉の詞を惜しまず、俗名狂名の分ちなく、假名のいろはの文字肩衣、かいつけ給へといふことを、勸化このたびの發願人にてにはの藏人にかはりて申す。

灸

如月の二日、天氣も長閑なればとて、妻なるものの、晝過ぐる頃、行燈に火をともし、艾おぶりて、いざ／＼といふにぞ、おのれ生得灸嫌ひにて、一寸のがれに、あすあさてと延しつれど、今日ばかりは遁るべきならず、籠城の強者の、種盡きたる顏色にて、泣々敷皮の上にゐざり出て、潔くもろ肌おしぬぎつ、九寸五分には足らじと思ふ灸箸を見やるにも胸はがた／＼と躍られぬ。菊川の宗行卿、木津川の重衡卿の御心も、かくこそと推し量るほど、襟のあたりに物ぞあたる。すはと思ふより、熱

さこそは難く、歯ぎしりしつゝ、高くうめけば、妻なるもの「あら痛々し。灸てんの墨をつけたるにて候。」と云ひて笑ふ。「けふはいかなる事にか、墨を塗るさへ熱し。」など云ひてをれば、「今ぞ皮切りにて候。」と云ひて、指して背の邊おさへつ。なんでふ我もますらをなり、世に灸すゑぬ人やはなき、かかる時おくれを見せんは、妻子にもあなづられて、かひなしとや笑はれんとおもひ念じて、せめて眼をとぢ、息をつめてをる程、總身脂の汗流れて、魂消ゆる心地して、もの云ふべうもあらず。「これは灸にてはあらじ。まさしく錐もてもむにやあらん。」こゝろなしの、大きなるをえりて燒くにこそ、最初は、小さきをえりて物せよ、よや／＼。」と叫ぶ程、今は三つ四つ一度にすうるにや、背なか一面焔を負ひたるやうにて、「あら熱や堪へ難し。」といふ聲太政入道殿の最期の苦患にも劣らず。かかるにうまごなる者の走り來て、「おぢいさまの灸すうる見ん。」とて、前の方に坐りてをり。今までは手拭をかみ、眼口もひと所によせてしのぎつるを、この幼き者に恥ぢて、聲を忍ぶも術なしや。こやつ皮切りの時に、よくぞ來らざりしと、いよゝ聲を呑みてをれば、胸にあまりて落つる涙は、灸饗にと設けたる、團子も恥づる大きさなり。此の孫が顔を見るにも、さしも知らじなとさへうめかる。背なかはてつれば、帶ひきしめんとするを、「もぐさ猶殘りあり。」と云ふに、なにと返答いぶき山、しめぢが原をすゑんとなるべし。覺悟をきはめて此の度は、二つ胴いざと云ふ身になりて、のけさまにうち臥し

たるを、會釋もなくすゑかゝる。これはさしもむたぐひにはあらず、生きながら皮を剝ぎて、腑分けをさるゝ思ひにて、肛門の穴もすぼみて、ちりけへのぼる心地して、手足ばかりをもがくさま、さながら俎にのれるすつぽんの如し。いでや世に用なきほけ人の、さまで延年の望みはなけれど、生きてあらんその間、看病人にあくびをされ、大壺に鼻をつまませんは、苦しと思ふ心より、ころばぬ先に杖をつきて、老いの坂をばくだらんとすなり。併し病まざるを治す上醫ならねば、前三後七の禁忌などは、いかにあらんかおほつかなく、おのれ幼かりし頃、總角蟲腹に惱みければ、過ぎゆき給ひし二親の、たゞ灸すゑよ〳〵と、口につけて宣ひき。かく灸すうる度ごとに、これこそ庭の敎へなれと思へば、惠み給へる慈愛のほどは、今も熱くご身にこたへたる。

呉竹根春が手鑑の序

世の手かゞみにおしたるは、光明皇后の寫經のきれはし、貫之躬恒がやまと言の葉、さては辨慶が借用證文など、すべて實正ならぬ筆の跡ぞおほかる。さるものを寶とせんは、道風の朗詠集には劣りて、うま〳〵いつはいはんまちどり、跡にそしりや燕人の、石をめでたるたぐひとこそいふべけれ。玆にものせるひと卷は、ひとつものくふ友どちの、箸杯の片手間に、ちよつきりちよと筆をもちの夜の、霞に月の詠めをはじめ、知つた同士の涼み臺、たつたの紅葉、佐野の雪まで、相違あらざる白

筆の帖、なにぞにとりそへ給はるとも、貰ひてもなく買ひてもあらじ。にせた所が錢にならねば、僞筆をすべき道理もなし。かの三十一文字の疑はしき、贋か本手かわき難き、摸稜の手鑑に競ぶべき物にあらず。されば子孫に傳へんには、こよなき不朽の寶なるべし。このはし書をかきねとて、垣根に生ふる吳竹の、根春のぬしの賴みに任せ、心え田圃に鳥のあと、骨なき蚯蚓のたくらせつ、あはれ此の文永く傳はりて、揩屑買のはかりを免れ、乾物屋が袋とならず、千とせの後の古筆見の、めがねにかゝる事しもあらば、それこそありが定家のしきし、與れにしばくれのちんぶつ茶や、狂歌をごらうじて、お茶をあがれともいはましや。

草子此主狂歌帖の序

浪波津淺香山のふた歌を、初登山の手本に請け得て、色揩短冊の走りがき、懷揩詠草の清書きに、よろしく候の褒美をとり、硯の海に玉を拾ひ、詞の花を水滴にうつして、たゞ此の道を慣み習ふ。草子の此主といふ人あり。嘗て筆のしりとる博士の軒に、同門の筆の跡、看板にかけしを見てより、思ひ机の置き物にもと、かかる文ならば作れるなりけり。折柄の花鳥風月は更なり、春風春水一時の興、神祇釋教無上やたら、十二箇月の題詠より、十三の春初め、戀の歌さへ集めんとす。これを同社の人々に告げ奉る。一老新部子の差別を云はず、かの鏡の歌字うくしに、源平藤橘の名乘りをあらはし、

天神講の一人も餘さず、二十五日の小豆餅うまい詞を書きつけ給へと、年にも恥ぢぬよだれくり、人形をかくかたてまに、例の蚯蚓をのたくらせつ。

狂歌買出帳

この小冊は狂歌の買ひ出し帳なり。元手は二文も掛らされど、代物は一字千金に當るなりとぞ。さるは奇貨おくべしの心より、儲け出でたる黄金の言の葉、十呂盤の珠の、光ある歌ども、總締めて百千々餘り、二十日の賣り買ひ速うた、江戸連中の正札つき、負けぬが店の三十一文字、立派に申さ春と秋、合はせて四つの時相場、戀雜神祇釋教まで、お目にかけ賣仕らす、現銀掛値なじみの得意。もし此の文を讀みながら、つい〳〵と斯のかき出し、横に寢ることなかれといふ。

はつ磯五郎が墓

某寺の墓所に、一つの塚あり。こは昔磯五郎とかいへる男、はつといへる女と、契り語らひけるが、いかなる憂き事やありけん、この御寺の門に來りて、ともに死に失せけるを、とりをさめはうふりものして、形ばかりのしるしを殘せるなりとぞ。あはれわりなき戀の切なるには、なにとは露のあだものをとらいひけちてん。なるはいやなりならぬはしたし、任せぬことの積りてはとは、淨瑠璃の文句にも見えたり。さるをえせ博士だつかたくなな者は、かうやうの事をいたく笑ひて、目にまかせて

義るあり。むべなりその人を見るに、顔はみ山の猪猿の如く、化物にて見まほしきかたちぞしたる
されば、いもとせの語らひの、死ね死なうといふ目に逢はざれば、その心をしもさとらぬなるべし。そ
とこ女の若ざかり、なさけの道のやるかたなきは、四角なる文にて、論ずべきならず、命のうちに、添
はれずは、生きてありとも何かせんと、肩にかけたる毛氈に、赤き心を表はしつゝ、閨の褥の露よわ
も消えなんことを急ぐあるは、志のあはれさは、かなしといふもあまりあり。ことしさる人の、百歳の
忌に當りぬとて、春風つかぬ就枕丸など、まめ／＼しき心より、かの塚の塵かき拂ひて、うるはしく
香花をそなへて、追善の法事をご營みぬる。この礒五郎といへる人は、富士の山に籠りいでさし、寶永
生まれの色男なりとか、百年をへだてぬれど、おのれもまれなる色男なれば、同氣もとなる所にや、
十文錢のはしたなくも、大粒なる涙をさへこぼしぬ。さるはたゞにやむべきならねば南無阿彌陀とい
ふ五文字を句のかみに据ゑて、例の狂語をのばへつゝ、過ぎにし人の御靈の爲に、寶永まつりをやら
かすになん。

なき人のむかしをくればあはれ世にみじかき數珠の玉の緒やこれ

紺忠新宅勸化帳の序

貧道紺忠相模女に無情をさとり、浮世を夢と神田のわたりへ日本橋より西の空、寫經の金泥紺屋町

に、このたび尻をかいするて、壽雪隱の糞を目當てに、しばらくあとをたれんとす。素より貧道の大院なれば、什物寶はいふに及ばず、ちやんが一文南無藥師、かやば町を出でしより、樹下石上の宿なしとなりて、身に一休のふどしをかきて、思はぬ千手觀音を安置しつれば、本尊には事をかかず。竝に十方無惑の施主をあてがきに、五人組のやもめの僞を開き、大佛供養をせまく願ひす。近づきの御なを、紫磨黄金の一分もひかず、此の道場の施主とならせ給へ。さらば未來世の時に至り、河童となり、翁となりて、お臺は淺間の山つなぎ、嘻喜の涙をこぼし申さん。よつて勸化の序文の口上、持たまへの瘡毒斯くの如し。

大呈山睡德寺紺忠頭陀

吉原細目記ノ序 七月改

初春とて、しきてふ稀書て、門松の陰になれ出でたると、俄にうちそうぞきて、うたはやしつゝまへわたりすとは、いづれのながれをかしたらん。又大路に咲きつゞける夜櫻のけしきと、燈籠にひともし連なりたるとは、いづれをためでたしとせん。これらの初日をおきて、えびす書に月見をくらべ、彌生の節句に八朔をとり出でて爭はんに、まさりおとりきく分くべうもあらじ。兼好法師は、今一きは心も浮きたつものは春と云ひつれど、萬葉集には、秋山ぞ我はと詠ませ給ひ、光源氏の物語には、

秋好むと申す宮もおはしましき。さればこの春秋の品定めわいだめんことは、昔の人だにかたかんなるを、まいて小車にたとへし里の紋日、春と秋との二つ輪は、いづれの方にか心ひかれん。たゞよき人のよしとよく見て、よしといひてし吉原細見、この文にくはしき人こそ、このさかひをば知るべけれといふ。

柳をよめるざれ歌のはしがき

おのれ武昌西門に家居しめてより清少納言が所謂、ひろごりたるはにくしと思ひとりて、川柳點のざれことなどをば、さらりと柳にやりやらひて、柳々州が文などをひねくり、折楊柳の古調をうたひて、ひたすら五柳の門をとぢゐたるに、さまで繭に籠りなんや、いやな風にもなびけといふ歌だにあるをと、柳の間の廊下づたひ、諸士の勸めの無理強ひに、逢ひて、又もおふてふ跡川柳、新京のさかのしたり顔して、かかるむしろに出口の柳とは、さるは片絲のよりのもどりたるなるべし。そも柳星は南方の七宿にて、柳谷は西方の地名なり。佛に楊柳觀音あれば、神に柳大明神あり。柳のいたりはどぶ店の塵にまじはり、青柳寺は西の洞院に跡を殘しぬ。御柳は未央のお庭にはびこり、柳營は大將の居城を稱す。やないばこはやごとなき御調度にて、柳樽は婚禮のへい物なり。旅行く人は行李に製し、料理人は俎となす。宿老の下襲に柳の名をもてよぶことは、裝束家の說に傳へ、年の初めの粥

杖にこの枝を用ゐることは、金術兵制にくはしく載せたり。春の錦の都には柳の馬場に柳の井、やなぎの水の名所あり。大江戸にては柳原、小柳町に柳島、倡臺近き五十間に、傾城の賢なるは、これと其角が見返りの、柳はみどり花川戸、渡れば名ある梅若塚、金龍山の楊枝みせには、柳屋ならぬ家もなく、花をあきなふ軒毎には、これを植ゑざる門もなし。かけんもかしこけれど、後白河の法皇は、岩田川の柳にて、御頭痛をいやし給ひ、蓮華王院の御建立には、棟あげのお世話まで遊ばししとか。扨なん平太郎が妻のお柳が故事は、淨瑠璃かたりのはこ柳とはなりける。あるは道風の青柳硯、蛙の面へ道のべの、清水流るゝ柳陰には、蝙蝠に山椒を食はす、清水の三本柳に雀が三匹とまりに來る、女の肌の雪にをれぬは、柳下惠が賢とぞきこえし。風新柳の髪を結ひて、柳しぼりの浴衣かけ、柳茶の帯をしめ、柳屋の紅粉をぬりて、柳湯へ入らんとするは、柳橋あたりの藝者なるべし。素より細き柳腰、柳の眉を見たらんには、春日路傍の情ある人は、ちとかたけれど東門之柳、昏を以て期とやすらん。續博物志を案ずるに、正月門ごとに柳をさす事あり。さらばまゆ玉の團子などは、此の流俗のまねびなるらし。高野の山の蛇柳の、ぬらくら者の齒をみがく、楊枝に日の熱を去ることは、僧祇律にそしるしたる。謝氏の娘は、雪こん〳〵にほめられ、顧愷之に、かくれんぼのをかしみあり。嵆叔夜が樹陰には、呂安きたりて物語し、成通卿の梢には、神靈やどりて守護をせり。なにがしといへる

人、柳を植ゑて宰相に至り、又柳汁に衣を染めて、及第しける人もありとぞ。柳の下の御ことほと、元日の朝けに祝ふは、天地をふくろにぬひてと唱へし、ふるきこと忘れの名残なるべく、さるめでたき植ゑ物なれば、露の玉散るざれ歌の、けふのむしろの題には出しつ。然るに隨堤の新堀、かけまくづれず、養由基が弓、ひきもきらず、つどひ集まる人々の、かゞやく詞の玉のを柳、かくいや繁りに繁りぬるは四本がゝりのあげまりの、けしうはあらぬ喜びになん。これに朽木のふる柳、ねも葉もあらぬはし書をそふるは、力なくして先づ動く、氣の勝つまたの兵衛の佐と、人の笑ひも恥ぢらはで、小刀細工の削りかけを、鼻のあたりにぶらつかすになん。

青山集　枇杷丸撰

ぬば玉のくろごじたて、あまのかるめばかり頭巾、菅のねのたが刀さして、名ばかりの土藏切り破りて、何かしら木の箱をたづさへ、あまたたびおしいたゞきて、これはこれ青山集と名づけしざれ歌の一卷、地に擲てば金石のひゞきをなす希代の寶物、世に名高かる人々に、筆さしつけて無理無體、奪ひ取つたる自筆の一首、手に入れしは大願成就、ありが定家の色紙にまさりて、天下一なるこの手かがみ、永く子孫の寶とせんと。それよと云ひてゆかんとするを、待てととめたる裃いでたち、下座口より躍り出で、盗人のたつたの山師いかさまし、蝸牛の角をうしとあがむる、にた山狂歌の一卷を、

手かゞみなどとはことをかしや。拙い詞の牛の糞、味噌にあぐるはすりこぎを、しやくし定規のその一卷、かなてにをはのわいだめも、ちくらが沖に素人藝、うぬぼれかゞみのその手かゞみ、うちやり捨てん置いていねと、たちむかへば、あざ笑ひ、井のうちなる蛙は荒海を知らず。さる歌詠みの曉月坊が、毛のむく／＼とよみしを知らずや。汝がみやびと稱ずるは、道學者流の古頭巾、當世に合はぬ寐言にこそ。名古屋物の古手鏡、何に聖武の紺紙金泥、なにかならぎれ、にせものの皮をかぶりし越なぎれ、とくそこのいてとほしぎれ、やだあと云はばひきさき短冊、五體の筋きれ、上段下段、こよみぎれにしてやるが、返答うてときめかへす。負けじ心にひき拔く太刀、見事なたてを見物の、諸連中がくち／＼に、大かたこちらは枇杷丸ならん。あなたは見慣れぬ老いこみ役者さだめて田舍の食はせものと、知らぬ人も多かるべし。されどあつらへの拍子に乘りて、うち出しぎはにたゞひと筆、矢たての墨のくさまくら、旅の宿屋の飯盛が、せうことなしにたゞ今のおわらひ草を、ちよと書いつけつ。

守信亭をこたる

詠二梅花一狂歌會ノ序

正面三開の間一面に梅の兼題、前うしろは人の山幕、言の葉の玉、所々にかゞやきてあり。

全體なにがしがたかどの、狂歌會の總、寺信亭をこたるといふぬれ事師、くわん菊の紋附けたる裃衣裳、いかにも綺麗なるいでたちにて、詞の花を花活けにさしてゐる見え、金石のひゞきにて幕あく。

ト切幕にて敕使とよぶ。

をこたる
一 なに敕使の御入りとや。

ト又敕使とよぶさがりはにて六樹園冠裝束にて出て來て上座へ通る。

をこたる
一 思ひよらざる敕使の御入り。シテ敕諚のおもむきはナ。

六樹
一 汝ざれ歌の道に執心深きを、帝大いに御感あつて梅壺の后を賜はり、すなはち紅梅の右大臣に任じ給はんと、難波津に都を占め給ふ仁德天皇の敕諚。

をこたる
一 シテお敕使の御尊名は。

六樹
一 あづまに育ちし鄙人は色をも香をも知らぬよナ。唐衣とめて北野の神ごとは、我が定紋の梅にても知れ。

をこたる
一 さては菅原の右大臣にてましますか、我が國の梅の花とは見つれども。

六樹
一 大宮人はいとまあれや梅をかざして今日こゝに。

一をこたる　乞食の家ものぞかるゝ、貴人の御入りの返答は、まつ此の如く。

ト梅がえを地にうちつけ、花を散らして見せる。

一六樹　これは。

一をこたる　おのが羽風に散る花を、などさはなくぞ鶯の、こなたへやほしき母やこひしき。

一六樹　なんと。

一をこたる　食はせ物のないとり公家、とく本名をなのるまいか。

一六樹　不禮なるをこたるが一言、奏聞とげなば違勅の罪。

一をこたる　ハヽヽヽ、勅なればいともかしこし鶯の、やどやのあるじと知りたるは、さいぜんおとせし此のしやくし。

ト杓子を出してきつとする。

一六樹　それを。　トとらうとする。

一をこたる　喰らひつぶしのへぼ狂歌師、いつはい食つてつまる物か。

一六樹　今は何をかつゝむべき、汝が秀歌をめづるあまり、いかで汝を味方につけ、此の頃はやりの大人と呼ばれ、毛氈の上に坐して、だみこゑをあげんと思ひしに、香にあらはれし花盗人、かきつ

けられしか殘念々々。

トいひながら冠裝束をぬけば、袖なし羽織の田舍親仁となりて、花道の中程へ來て、

一　狂歌の會席へ出てこの儘でも歸られまい、かうもあらうか。

借り物と人や見るらん山がつの袖に似合はぬ梅がかが紋

一　かさねて逢はう、さらばだ。

このあと狂言長けれど、披講をだに聞きあへず、草履をさがす人もあれば、まづ此の文はこれぎり。

狂歌玉笹集序

醉龜亭の翁は易の道にとりては、やんごとなき上手ながら、ざれ歌をさへいたく好きて、曙の鳥啼き、宵啼きの鷄を聞きても、歌をつゞりて詠めること、日には幾たびうらやさん、三十一字に萬物をつくして、其の變化をしもきはめぬことなく、短冊色紙の墨色の考へ、本末の句の相生相剋當卦本卦の兼題當座も柑子を鼠の自在をなせれば、師なりける橘洲ぬしも、本所の方を見やりては、我が道ひんがくせりとは宣ひけるとか、この翁こたび思ひたちて、めどぎの數のひとつかみに、よみ人の方角を論ぜず、ひたすら歌の吉凶をえらびて金烏玉兎の集冊をつゞりつ。まづ春はいろある梅花心易、夏は

涼みの辻占より、秋は肩ぬく鹿の聲、冬の火燵のあて物まで、式神の四季を始めて逢ふと見し夜の夢合、期にのぞんで變易のうせ物、待ち人の戀の歌さへ此の一卷にもらす事なし。げに〱飛龍天にあり、大人を見るに利ありとは、かかる判者をさすのみこ、世に有り難き人ぞと云へる、我が判ずる所の當れりやいなや、翁について人問ひねかし。

巴扇堂昔語狂歌集

みやびたるをもて大和歌とし、あざれたるをもて狂歌とよぶ。たゞ詞に雅俗あるのみならず、そのおもむきも大いにたがへり。此のさかひを知らざる人は、音樂をもてちりからに混じ、たうの芋をもて楚王に獻ぜんとす。そも明月を鍋燒となし、燒味噌に鼻緒をすげんとするは、日王のあかざるあやまちなり。溫石なんぞ大通の袂に入らんや。貫之躬恆が闇をのぞかず、藤六曉月が雪隱にだにのぼらで、いかで味噌と糞とのけぢめを分たん。判者々々とおしやますが、判者が文盲で、てにはにうとくて、假名も知らいですむものか。こゝに巴扇堂のあるじは、我が年頃の念者にて、和漢の文をしりこぶた、くそ高慢なうる人にあらず。此の文にくさ草子の名をかりたるは、憤を發せる所になれり。誰かぶつともすうともいはんと、四谷のはての馬糞賢人、げすの話のしりへにしるす。

放屁

屁は脾胃の氣の大腸に溢れたるが、下つて下風となるものなり。くさめおくびせきさくりと、ならごへだつるものならん。されどくさめさくりは、人なかでもよべく、屁をひらばわれも恥ぢ、かつは人も無禮なりとて、柄に手をさへかくべければ、たやすくはひり出で難し。さはいへど、世にありとある人の限り、男女のけぢめなく、これをひらざる人やはある。ひりかくしをする世のならひなれば、おとなし川の音にたてず、きびすを尻に押しあてて、我が名もらすなとやうけふらん。げに僞りのなき世なりせば、人の股ぐらくさからまし。順徳院の御ときに、へひりの判官代といふ人ありて、御所にありてもひりければ、強ち御勘當も蒙らず、ひつて／＼ひり散らし、宮内大輔にさへあがりぬ。又忠家の大納言はしのびたる女房の、思はぬひとつのおならより、出家せんと思ひきはめて、鼻をつまんで逃げ給ひぬ。本院のおとゞのうたへごと聞き給ひける時、うたへ文持ち出づる男の、たかだかと屁をこきけるに、笑癖おはすおとゞにて、え堪へたまはで、さしも御仲うるはしからぬ菅公に向はせ給ひて、此のうたへ聞かせ給ひねとて、手をすり涙を流して笑ひ給ひけるとなん。此のおとゞはさしおき奉りて、後世あがめ奉める、天神様のおまへにて、沈香は焚かずして、屁をひりたるはなにごとぞ。されど賤しき賤の男の、やごとなき書にしるされて、今に人の傳ふめるは、あやまちの高名ならんか。佛在世の御時、あまりに豆を食ひすごして、腹をはらせし比丘のありけるが、南無ぶつ

ぶらとこきたれければ、外に出てひれとなん、佛は誡め給へりける。げに百日の說法も此のあやまちの一つより、聽衆の信もさめぬべければ、增賀ひじりの外ならんは、尻にて金鼓は鳴らすべからず。それ屁には、くさ〴〵の異名あり。はしご屁はならひある事にや。握り屁は惡されなり。いきみ屁はせずともあらなん。殺し屁は殊に罪深し。屁ひりの神の紙線香も、ひつた方へはつんむかで、ゆもじに黄なるぬれぎぬ着せて、あらぬ人をも泣かせつべし。ある先生の說に、屁は本音ブゥ、去聲に擬して脊スゥと申されしは、陸德明も尻をまくりて逃げぬべき音韻なるべし。己ひそかに思へらく、屁の字唐音にてピィの音なり。ピィとはひる時の聲なるべし。我が國にてへと呼べるも亦ひる時の聲ならんか。これをブゥの一音のみとするは、一をひッて二をひらざる、ヘッぴり儒者の管見なり。昔の人のみやびたる耳には、此の聲をヘッと聞きたるなり。但しブッといふも、はひふへほの通音なれど、古人はヘッと聞きしにたがはじ。口より出るをへどと呼べる、これも亦その聲なり。蟬をせみ、鴉をからとなづけしなど、皆聲によりてなづけしなりと、物知りの人の傳へなり。李笠翁先生の十種曲に、他人の屁は臭し、みづからの屁はかうばしとあり。屁にだに自他の差別あれば、まして才藝口腹のうへには、手前勝手もいふなるべし。唐國の昔、趙襄子廁に入りて、大きなる屁をこきけるに、屁に殺氣の音ありければ、心騷ぎて踏板をのぞきて、かくれたる豫讓を見つけつ、趙襄子半分しかけて跳び

出し、もみ屁しつゝ下知なして、終に豫讓をとらへたり。又越王勾踐は呉王夫差のおゐどを嗅ぎて、屁とも思はぬ顔付せしより、終に呉國はへこしとなりぬ。これらは共に屁の德にて、ひとりは危きを遁れ、ひとりは本意を遂せしならずや。嗚呼屁德大いなるかな、あるひはいきみ、あるひはすかす、一張一弛ぶうぶうの道なり。なにがしが詞に、大丈夫の世にある、燒芋の芳しき名をとらずば、最期のひとつ屁をひりて、臭味を萬代に殘すべしとぞ。おのれ此の言に感ずることありて、ヘッぴり腰をひッたてつゝ、河童の屁といふ文を書きつ。ほむるか、そしるか、根からわからず、尻口でものいふ男かなとて、世の人へゝへと笑ひやせん。

此の文書きはてつる頃、例の隔てなき人々來て、物語しつゝをる程、思はず臭きかのしければ、すは誰かしつらん、あなくさやなど云へど、なのりする人もなし。さては屁玉の外より飛び來たるならんと云ふ人あり。さらば我玉結びせんと云ひてよめる。

すかし屁のぬしは誰とも知らねどもふるうてくれなしたかひのつま

音成をおくる詞

あさもよしきぬたの音成は、もと衣手の常陸人なり。ぐゐんじの物語なる、常陸殿とは事變りて、やさしくみやびたる人にぞありける。此のたび故郷の人訪はんとて、あからさまにいでたちて行くに

この人草枕足袋縫ふわざをよくせり。志もまめやかにて、うすがきのうすからず、師の針に随ふと、柳の絲のすなほなりしかば、さしたびのさしのぼりつゝ、半沓の效あらはれて、藍鼠のちうぎ人よと皆人もめであへり。されば故郷に飾る花たびも、にしきはえある心地やすらん。今日なん新宿の馬のはなむけすとて、又いつ歸りこんのたび、ちをはくばかり名殘をしみて、

あはぬ間はみじかきたびもうらみつゝかゝともろ共指をこそをれ

馬蘭亭狂歌會ノ序

馬蘭亭の大人のすみかは、牛天神のもとにありて、牛込の北にあたりぬ。此の大人常に牛頭天皇のやへがきのふりを仰ぎ、はた牡丹花がみやびを慕ふ。牧童の綱に、新しき趣向をひき出でて、甯戚がひとふしに人を感ぜしめしこと、赤奮若の年を積むこと久し。いまや桃林に放ち飼ひせる、をさまれる時に逢ひて、土牛をまつる春のいろこそ、蘇あまくりの使、思ふ壺なれと、名だたるうしたちを家につどへて、大原女の鄙ぶり歌を詠ます。その算締めて、一石六斗二升八合、口のまはることは、諸葛が牛車より速く、うち誦しぬる聲は、犀牛がせりふよりきよし。さるはたけき舍人が心を慰め、目に見えぬ牛鬼をも、あはれと思はせつべし。はやうしおそうしのよどみなく、ひきつれ集まる駿牛繪詞、牛に汗さすよみ歌の數は、物見車の袖口覺えて、錦はえあるまとゐとこそいふべけれ。おのれ田

夫野人の山中左衛門にして、九牛が一門に遊ぜず、うしふちくらふ青ばへの身なれば、かゞやける牛佛の、道にうしはくおまへに出でんは、牛のくそ橋の臭きを恥ぢず、牛賣りそこなふたとへの如く、にせべつかふの水牛細工、鷄をさくなまくら刀、やかたなき車に、あめ牛のそしりあるべしと、墮落の僧に角の生えんは、うしと見しよの後悔やあらん。假令牛の御前のたすくる神ありとも、山川それこれをすてん。たゞいきうしと云ひてやむにはしかじと、あまの河原のわたりをとゞめ、茄子に寧がらの足をしゞめて、十六むさしのかた隅にこそ、ひき籠りしか。ひたすらにあるじのうしの、尻尾に火のつく催促に逆ひて、けふしも思はぬ善光寺参りして、牛のけまんの縁を結びつゝ殊に十八町の長小便、くだらぬことをかいつけしは、牛の角文字いかゞあしや、時参りの釘こちたゝしと、養土丸が鞭にやあはめど、流石に花さしのひかぬきも出で來て、人は耳をも洗はば洗へ、角をさしたる蜂と見なして、神農樣の面の皮をあつくし、丙吉が前に喘ぎまどひて、こりつむましばおふけなくも、大理のはまかたにかけのほりぬ　あはれざん高繩のうしたちら、角つきあひの思ひをやめて、ことひのうしの鞍の瘡てふ、無心所著を大目に見給ひ、函谷關の大木戸を開き、一番はなをとほして給へと、なでうしの蒲團重ねて、暗闇からひそかに名のりするを、右近の司の殿居とは見るとも、必ずさめがはしの牛となな見まがへ給ひそといふ。

こゝぞとてうしは牛づれつどふなり麓に歌人山に天神

四谷新宿

かは竹の四谷のほとり、振袖のしんかくといへるは、おにすだく所にて、しひの葉に杓子とる、飯盛女あまたあれば、かりそめの行きかひ路に、滋春のしげりすごして、傾城に死ぬ人もありとなん。あら玉川の春の頃は、常圓寺の花の雲、鐘は上野か天龍寺と、聞き耳たつる曉に、若鮎の荷の小唄ぶしもをかし。三光院のすみれや摘まん、大久保のつゝじや咲きいでたらんと、酒ゑひ共の騒ぐ中に、これ見給へや藥種屋の、ないらの藥袖の梅と、うたひ出でたるもすさましげなり。あるはいろかへぬ操を、千駄ヶ谷の松にたぐへ、みち年の契りを、桃園の桃にや比ぶらん。閨の屏風の十二さう、寝ながらをがむ大宗寺の、閻魔に誓ふ仲町もたのもし。ちはやぶる上町には、帯をだにせぬ客ありて、横鉢卷の御ふしんかと、聲高ううめくもあるらし。げにやそれも戀これもこひにして、いかでまろあし馬の糞、ふんと匂ひのくさまくら、旅けいせいと人はいふとも、よく淀橋の水商の、はなれじとかたらふ人も多かりとぞ。

新驛狂歌會ノ序

湯屋で見たより大きなる、武藏野の原の片隅にかゞまりゐて、過ぎこしかたを思ひ出づれば、げに一

場の春夢婆の、腰折れひとつ讀み出でんは、なか〳〵にかゞやかしとて、口をとぢたる葎の門に、古編笠の侍二人、誰ぞと見れば睦び交はしし、笹丸垣成の主達なり。九尺二間の隱居所には、さもにつかへしまらうどながら、且せゝなげのめいぼくとかしこまるを、いでや此の狹いこそ羨ましけれ。いざこん春はこの庵にて、あざれ歌のまとゐせましなどのゝしる。あるじの翁ためらひて、すがやかにいらへだにせざるを、しゞまのかねのしやん〳〵と手うちて、おの〳〵あがれて歸り去りぬ。かかる小田原相談さへ、うゐらう賣の口々に傳へて、かつ〳〵御存じの御方々もいで來にたり。さは新宿の馬も追ひ難からんと、なまじひにさるまうけをぞなしたる。されど餘りに所せしとて、浦内の乘吉といふ人達るあつかひて、あたり近き仲成が家を假宅となして、しひて割床の筵を開きぬ。今日なん睦月の二十日にて、えびす歌にはびんぎよしとて、まづ人々の言の葉をよみ味はふるに、けに百萬の黄金にもかへつべし。翁が例のなたつくりなるは、口口もわかぬいびつ三郎、いかで高盛の高きに在らんや。されど鄕黨の禮義ある、人々におしすくめられて、よんどころなきむほん勝負に、重か判者の座に坐りぬ。何のたはこと、いまさらに、破戒の僧のうしにこそと、うしろ指をも承知にて、又駒がへり狂ひ出す。鹿まつ所の狸宗匠、八疊敷にはだかりゐて、きん〳〵がほも人笑へにこそ。

食はせ物

諺に食はせ物といふことあり。其の語の基く所を問へば、味なき物をうましと云ひて、人を欺きけるよりいへるなりとぞ。さううまくは参るまい、又四も五も食はぬといへる詞も、この欺きをいれざるにて、一はい參つて重疊とは、大田了竹が臺詞にも殘れり。世の中に、この食はせものあまたありて、武藝の稽古をぶつさき羽織に見せかけ、學問の心がけを、懷中の文にひけらす物少なからず。錢はもどりの香具芝居、旅役者の市川某を初めて、神道者の秘事口訣、なまぐさ坊主の長談義、總嫁の化粧山師の玄關、えせ歌よみの三箇の傳、藪醫者の手柄話にいたるまで、皆悉く食はせ物なり。朝鮮鼈甲銀ながしなどは、見すノヽそれとすきて見ゆれど、熊膽人參うにこおるは、買ひかぶりぬる人も多かり。されば狐の出せる小豆餅は、必ず馬のくそにして、狸の設けし敷革は、やはり八疊の睾丸なりけり。お師匠樣のおつしやつた、都々平丈我の百姓よみは、村學究の上のみならず、連誹狂歌の宗匠達にも、猶このたぐひ少なからず。拾ひ首の高名帳、うけ歌出して判をこふ人、俄分限の系圖がき、傾城の空涙など、猶こゝらあふれど、化かされてゐる人の目よりは、糞壺の中にはまりて、居風呂に入りし心地やすらん。上下つきがよければとて、これを有司といふべきや。きはめ折紙あてにはならず、こしらへばかりのなまくら丸は、いかでまさかの用にたつべき。唐國の昔、王莽安石などいふ者ありて、周公旦の身ぶり聲色をやらかしたりとか。さる時に當りて、吾官酷吏の時を得て、

されもの顔してふるまひたりしは、げに虎よりも恐ろしかりけれ。これ等は毒とも知らで開合し、上一人のいか物食ひを、下萬民が相伴して、思はぬ食傷をしつるにぞありける。すでに尚書の皐陶謨に、人を知るにありとしるされしは、この食はせ物にはまらざれとの、かしこき聖の教へなるべし。虎を畫きし犬つくばひ、尾をよく振りてかゞむとも、かかる食はせ物の据膳に、たやすく箸な取らざるこそ、あまい辛いの世の中を、よく呑みこみたる人とはいふべけれ。

天命

天命は是か非かといへるは、伯夷傳の要文なるべし。菅公の筑紫に終り給ひ、屈子の汨羅に沈めるをさへ、まじり〱と見てござるは、福善禍淫のお職分には、御免相とこそいふべけれ。顏子の貧乏、孔子の不遇、みな積善の家なるべけれど、さる餘殃のありしはいかにぞ。子路が孝なる横死をなし、子夏が賢なる盲となりぬ。孔明楠こゝろざしを遂げず、神皇正統記の道理づくめも、北朝に團扇かあがり足利に無盡は落ちぬ。あはれなにぞはよけく刈萱道心、宿世因果といふものならずば、天命の總勘定十呂盤のあふ日はあらじかし。

春雨をよめるざれ歌のはしがき

雲ゆき雨施して、品物流形すとは、易の乾の卦の詞にて、穀雨雨水は暦にしるせり。太禹の御代に

、は黄金の雨、梁の武帝の御時には、玉の雨降りぬとか。粟の降りしは歴史に記し、甘露の雨は年代記に載せたり。げに十日の雨土くれをやぶらざる、有り難き折に逢ひて、廬山の草堂に足を延し、推沈軒頭に鼾かきて、襄王の夢を結ばんは、まさに泰平の餘澤ならずや。鮭の魚は雨に集まり、雨虎は雨に乗じて出づ。商羊は雨に先だちて舞ひ、石燕は石を銜つて飛ぶ。雨師は同名異物にて、人をもいひ蟲をもいへり。殷湯は桑林の野に禱り、皇極帝は南淵に行幸し給ひき。雲漢の詩は、尹吉甫が宣王をほめ奉りたるにて、雨と降りぬる音にぞありけるとは、俊惠が澄憲を賞せる歌なり。唐國にこの類の故事あまたあれど、淵鑑類函のしり自慢は、うるさければ筆を止めつ。小町の長歌菅家の御作、能因額觀其角が類、昔よりためし多し。西行法師鎌倉右府は、青天井のひじ傘、さしたる祈りはことなれど、感應は猶ひとしかるべし。天に雲なくして雨降るは、天のお泣きなさるなりと、五行志に見えたるを、日本紀にも往々しるし、又釋迦佛の涅槃にも、かかる雨の降りし由は、博物志にもしるしたり。ぬるとも花の陰にかくれむを、實方朝臣の詠なりとし、あをかりしより思ひそめてきを、和泉式部が歌とおもふは、紀氏六帖を見ぬ人なるべし。わびつゝも寝なとよみたるは、戀する人の心やりにて、器に盛りてつながれしは、白河院の雷霰ならし。朝雨に笠をぬげば、ひおりが雨に簑をかつて、雨やどりかさやどり、やどりてまからむあづまやのその戸開かせとうちあけしは、交野の少將もどき

たる、落窪の少將なるべし。月畢にかゝるはとき、桐油出たちの道中雙六、しら須賀ふた川のわたり許り、たゞ一所雨降るもをかし。ぬれざらましを旅人の、雨の宮にぬかづけば、雨降山を伏し拜む。豆腐小僧はしよぼ／＼雨、鬼を射る矢は雨あられ、お狐どののお嫁入り、梅若様の涙雨、龍池の柳のいろ、志賀から崎の一つ松、匡廬のぼるべからず。佐野のわたりに家もなし。とても乾ける袖ならばとは、雨降つて地かたまる、夫婦喧嘩のさへにんともいふべし 法華かけこむ阿彌陀堂、猿も小蓑をほしげなりとは、誹諧蕉流の詞なりとか。その猿まろが猿智恵も、龍宮城に雨降りてこそ、生膽の難をば遁れけらし。四天王の夜話のはては、羅城門にて腕を斬り、十八問答の終りには、指食ひの女も出でたり。三味線嚙る娘の子は、あしたの雨に髮洗ふとはりあげ、琵琶にめでたる醍醐の聖は、極樂の雨だれに感じ給ひき。下野武正は、法性寺殿の御感にあづかり、西の宮どのの大饗には、庭の拜なきを待ちつけ給ひき。此の外の古事來歷どもは、川どめの岸に溢れ、天水桶に餘りぬれど、蛤貝の計るべきならねば、不破の關屋の板びさし、大方はもらしていはず。玆に我が友まがほのぬしは、雨こん／＼この幼き頃より、五七は雨のざれ歌を好み、時雨の亭の風流を慕ひ、喜雨亭のふみを愛し、登蓮がますほのすゝき、雨に浴し、風に沐して、遠きに雨のあしをいとはず、近くは軒の雨だりびやうし、止む時もなく學びつれば、つひに及時雨の宋公が如く、一百餘人のおやとはなりにたり。今日

なん睦月二十三日、朝六つの橋にはあらぬ、雨そゝぐ柳橋のほとりにて、春雨を題となして、あざれ歌のまとゐをなす。まことや號を傳へて千里を霑すとの、菅神のから歌の如く、つどひにつどふ人々は、あるは走り、あるは倒れて、新猿樂記のうち出し太鼓、音聞きさへいといみじかりける。しかるに此のうしのお望みとござりまして、あふぎ巴をおもてにかざして、我が師と頼める赤良ぬしの、聲色でこぢつけんとす。雨の降る夜はひとしほゆかし。序に書きますはと名のらんも、梢にのぼるくちなはの、をこがましきわざなりかし。いでや雨おちのかきがら惡くしやれて、しばし時雨の一樹の陰に、座席をあらそふ角づきあひ、うしの聲なすやほ人などは、此のむしろにあらぬなるべし。芝居の雨のとひ竹の、ふしのなきこそめでたけれと、春の若草めでたがりつゝ、八十評の行列の、しりにさがりし合羽筥もち、辨當箱のふんぬきの飯もりといふ髭奴、すたすた筆をはしらせていふ。

烏亭焉馬ガ六十ノ賀

頭九いはく、このたび大名題相生長者千金の春第一番目、みちとせの桃のみたてめに、のみてうなごんすみかねと名のり、尚齒會のむしろを開き、千歲のほら貝の血潮をとり、不死の藥に合はせてのみほし、たけのうち三浦の大助を短命なりとそしり、それより仙術を以て、ちとせの坂に到り、龜のをの山によぢ登り、東方朔が桃をぬすめるは我なりとあかく、億萬歲をたなごころに握らんこと、さ

ざれ石の巖とならんよりやすしとよろこび、まことは松の相生町の佳人、西王母の桃栗山人なりと名のらるゝ所、桃源の舟あたりました〳〵。むだ六十の翁ならば白髪の筈だやが、子供のやうに見ゆるはどうだや。頭九一二番目常磐津が浄るり、波あや波あつきぬ泉岳に、福祿壽の三びやうし、よくそろひたる御家の所作事、めでたい〳〵と聲のかゝること、南山のくずれぬばかり、幽谷のはめをはづしての大入、まことにありが丁靈威、羽をのす華表の大だて物、天地間の一番藪場、ながく居たいの談洲老人、すみまへ髮の面影の、かはらでとしのよりかけは、ながいのものやな〳〵。

さくらをめづる詞

花くはし櫻ばかり、世にめでたき物はあらじ。霞み渡れる彌生の空に、雲續き咲き出でたるは、又たぐふべき色やはある。いざやかごめにさそふ風の来ぬ間にと、花のかゞどふ麓をよぢのゝ、木の下風を寒しとせず、ひきわたしつる芝生の幕の、なが〳〵し日もあかぬ色かなといひしろひて、花の宿かる旅ねには、さゝえ重箱小杯、藥罐頭の老人も、物思ひをも忘れつべし。此の物よ、花の中の王にして、わかん桃李の及ぶべきならず。よその國にはありがたき、日本一の黍の餅、花より團子をこのまん人とは、氈をおなじくして語るべからず。あはれ花しなべての色ならばと、家にありて鼻を高くすれば、こぞのしをりの道かへてと、山路に足ひく人もありぬべし。あるは見てのみやとたゝずみを

りて、山守のしもとにうたれ、花やこよひのと寝はらばひて、番人の棒に、おはるゝもありなん。嵐も白きあけぼのはさらなり　山里の人相を聞きても、散るを惜しまぬ人やあるべき。げに大空おほふ袖ばかりは、古著の朝市にもなかりけり。かの櫻町の中納言は、いかなる佛神にいのり給ひけん、心は絲によりがたく、風のすむてふかくれざと、行きてたづねん道もなし。たゞ寐ても花さめても花、あだし草木に目もやらで、身にいたつきのいる事も、いかでしら雪白くもの、かかるを花にめづるとはいふべからん。

醜女の贊

外面河豚の如くなれどもいまだ据膳を人にふるまはず、内心菩薩の如くなれどもをがむといひてくどく人なし。

　ほれられたためしなければ名もたてずこれやその身にそなはれる福

年中行事

ひましらみゆく元日のあした、大神樂の笛太鼓に耳そばだつれば、雙六賣はぜ賣の聲なども、春めいてきこゆ。屏風のはざまにて柳の下の御ことはと、たかやかにうちあけたるもをかし。とうざさんの藥くさき、雜煮のもちひの鰹くさきも、あたらし椀のうるしの香に、けたれぬるぞめでたき。こよ

ゑの下段に、はがためはじめよしとかきたるもをかし。悪しとて一日食はであるべきかは。ややひたくる頃、なにの兵衛、なにの左衛門など名のりして、裃いかめしう着なして、御慶申すなどいへば、供たる男の、物ひとつはふり入れたる、とり入れて見れば、扇の箱のからからとなりたるもをかし。あをざい鳥追大黒舞、すべてむつきに出でくるものは、なにもなにもめでたし。如月の初午、また賑はしく、せばき長屋の間なる稲荷さへ、おどろおどろしうならしたつるよ。月の末よりひゝなたてならべて、供の節句何くれしも待つめり。としまやが白酒買ふとて、こゝにたちこみたる、さばかりひろき大路とも見えず、徳利さへうち割られて、泣きて帰る童も見ゆ。いかに母御つみなましといとほし。下女は古葛籠にたらひ下駄結ひつけて、月ごろの名ごり惜しむめり。折からの涙雨には、郡内縞の紬も朽ちぬべう思はるゝ。初鰹賣る聲いといさまし。さるは袷ぬぎてもかはましとておぼゆるゝ。五月の幟兜をゝしくめざまし。神功皇后武内などならべたてたる、つきづきしくみゆ。戦ひ負けて死にうせける人をさへ、人形に作りて祝ふことぶくは、親こそ幼く思はるゝぞかし。みな月の富士詣でに、仁田の四郎とも名のるばかり、いみじき武士の、富士長屋とかいふなるかたへの穴めく所を滑り入りて、北さまに行きて、ひかり異なるなに見えぬるもありとぞ。あるはごくねちの消息すとて、籠に入れたる芋、竹村がなりうつなど、うちさゝげて持て来る。興なからずやは。あやしき家に土用干すとて、

綿ひきくはへて、垢じみぬる小袖二つ三つうちかけたる、殊更びたり。あなわづらはし、我は伊勢屋が家にあつらへてさらすなりなどいふ。大かた蚊屋だに吊らぬ人なるべし。たま棚いとなむこそ見るもうれたけれ。女子らはをどりゆかた物好きして拍子とりつゝ、千代の松坂など唄ひのゝしる。さるわざは此の頃大江戸にてはなきを、田舎の方には猶することにて、ようさりよりあうこ泥濘踏む足どりもするなるべし。商人の家は、かかる折にも猶忙がしげにて所々せめはたりて、茶代味噌代と受取りて、帳を消すさま、とりあつめたる事は、盆まへぞ殊に多かる。月の字揃る頃、団子の粉ひく頃、あゆさへさびゆくなるを、神田祭ばかりは、秋にも似ずはなやかなり。恵比寿講とて、世に知らぬおたひよびて、そゝき騒ぐ、手うつ様は同じことながら、顔見世はまして勇まし。夜いたう暗きに提灯ともして夜すがらやくしやの門門きり歩きて、何がしのおやかたなどのゝしりて、足も空にまどふが、暁方より見えずなりぬるこそ、初日のしるしも知られて、をかしけれ。紡着帯とき可酣なり。すゝはき餅つきまたなくめでたし。すべて折節の移りゆくさま、これを花鳥につけて数へたらんには無好な四季の段を、今一ぺん語るに似たらん。同じきこと云はんは、はすばいたる頭のふくれしなるべし。此の頃ある人の月なみのことぐさを集めて、これにことを加へよと云ひおこせつれど、例の物ぐさの何事をか云はん、たゞなまり聲の口たゝきて、こちなき四季のことわざをならべて、自ら野暮の正銘

と名のるになん。

三千丸が家の記

住み所はいづれをかよしとせん。山の奥は嵐激しく、海邊は浪の聲かしましからん。市町は火のうれひあり。假令百兩のうりする家ありとも、鄰をかふに、千兩の物入りありぬべし。田舍こそ氣散じならめと思へば、代々居士の席順に、袖なし羽織の肱をはりて、合壁の境論、根掘り葉掘りのいさかひ絶えねば、蘭に生ひたる筍も、たやすく拔いて食ふべきならず。さらば世の憂きことの聞えぬとよみにし、巖の中に入りなんや。また俊蔭が娘のやうに、朽木のうつほにかくれんや。此の二つの住家は、地代をはたる家主なければ、月の晦日はのどかなるべけれど、さりとて痔もち、疝氣もちは、しばしもたまらぬ住居なるべし。さては世によき住み所はなしと思へば、又別に天地の人間ならぬもありけり。我知れる三千丸ぬしの家居なん、海邊にあらず、川邊にあらず、山にあらず、市にあらず、いさゝか闇めく所なれば、水厄にかゝることなし。殊に鄰に遠ければ、夫婦喧嘩のさへにんに、聲をからすに及ばぬなるべし。さりとて里をへだてざれば魚豆腐と呼びて通れば、めぐりの物にもことをかかじ。前はちまちの田井青やかにて、見渡すにはてを知らず。もちつと頭をかゝげてみれば、信濃の御嶽、越の白山、美濃のを山に伊吹山、たゞ一望のうちにあり。あるじ食ひつぶしのえせ隠者なら

ねば、常に長裾を朱門にひきて、湯沐のいとまごとには、ひとり欄干にそひて、興をやるのみ。げに白雲のまがき、碧山の屏風、倹にあらずしておのづからなりぬ。かかる勝地に常住のあるなれば、楽天東坡も知らぬなるべし。おのれもゆきて見まほしけれど、大井川のわたりがこはく、箱根の山が胸につかへて、未だ品川に足を向けず。せめては見ぬもの見たやの心ゆかしに、かうざまに筆はとれども、ことなきけしきの羨ましく、魂飛んでかしこにいたれば、こゝには留守居のからばかり、さるから詞もあとさきになん。

丸屋が新宅

私方舊來麁末なる御料理奉差候處、御かへりみ厚く、日々枉駕被成下難有奉存候。扨申上候は年頃のあうまやもまやのあまりにふりゆきて候へば、此の度あらたに普請仕り、障子襖もはり替候に、あらた丸屋が見せびらき、わざと御披露申上候。田舎びたるあじろ屏風も、かの宇治川のむかう島、四季をりをりの時方が、をちの宮めく家居ながら、千數ける大江戸の御めうつしにはなかなか御興にもなるべくや。たゞ〳〵ひとく〳〵の鶯と共に、朝夕ひきもきらず、御入來被成下候樣奉希上候以上。

向島秋葉　丸屋文次

狂文吾嬬那萬俚　下

狂歌萬代集序

神樂催馬樂は、あまりに舊ければうちおきぬ、今は今様といふあれど、今より見ればうひ〳〵しく、昔を初めて見る時の心地す。さては何をかうたはまし。あるはかゝりの三十一文字、八雲八重垣やみ雲に諸事でたらめとやらかしみれば、花は白雲紅葉は錦、昔は千代まで〳〵の、同じことのみいはれねば、花くたいた佳題も、撰者貴公と思案の、骨折り損とはなりにたり。さらば自分の力を出さん、人の手作の田植歌、円き頭も用有ければ、もと當世をと考へて、此の節のはやりより、色深川のされき歌、さまよふ神楽の常陸歌、越の国ぶりさまざまに、爐路を通る宗助隣、娘の[illegible]子守歌、ねん〳〵ねぶる盆歌に、念佛歌まじりまぜて、馬士唄舟歌樵夫歌、簑歌琴歌きやり歌、しめ路やいやも四くさりの、あやしの路次のそゝり歌まで、凡しまたびきる所なければ、天のなせる無器用にて、節のそろはぬ鹽から聲、革におはぬをいかにせん、狂歌はかねば三味線いらず、われさへ人聞きかしましからましと、上上の調子のにぎはい心にはやう讃好きの名さへとりて、けしからぬ聲をさ出したれば

るゝかくて口よゝむ老いの末にも、猿鼻歌の癖がやまねば、聲よき人のつゞしり歌は、聞いてこらへぬはやり歌、よみ賣唄の上下をいはず、淺草紙にうつしとりて、これまじへたる餅つき歌、めでためでたの若松に、十割増の慾をかわきて、萬代集とはこぢつけたりき。されば候べく候ながら、女郎の文のもしやの末にも、晝寝の涎ながくつたはり、ゐつゞけの尻ひさしくとゞまれらば、狂歌のをかしきふりをも知りて、かうもあらうかといへらん人は、大空の凧を見るが如く、うならざらめや、狂はざらめや。

狂歌集會式　應二名古屋繁重需一

此のところのおきてといへるは、わり膝の疊蛸、いたく禮經のすぢを守れとにはあらず。しかりとて、天竺流の結跏趺坐、偏袒右肩もむらいなるべし。かたく／＼よらぬなかつ國、敷島の道のゆくてに竿をたてばのながもち唄、をはり名古屋のしげ／＼が、もつといふなる此の會席、ちよふとつまんだる制詞の條々。

一　文道を知らずして、歌道勝利をえざる時、負けをしみに腹たつべからず。

一　席上温厚柔和にて、いさみの心を出すべからず。もしちうの字をふるまふ人には、五十五貫の贖錢を出さすべし。

一 他人の秀句をぬすみ、或はうけ歌をもち出て、高慢の鼻を高くせんとするは、なか／＼心ひくきわざなり。必ずこれを愼むべし。

一 當日禁酒勿論のことなり。但し、隱者の心にあらず。きちがひ水の勢ひに乘りて、悪くふざけんことを恐るればなり。

一 披講の時あくびを戒む。放屁これ亦同斷。但し於テハ雪隱ニ者、可レ爲ニ制外ト。

一 行脚の旅人一宿たりとも許すべからず。名所古跡をあなぐり、堂社順禮の歌枕にはあらで、半分渡世の田舍わたらひ、頭陀袋のそこひ知られぬ、にた山伏の多ければ、滅多に油斷すべからず。

右の條々深く心にかくるに及ばず。勝手次第の論模稜、諸事は柳とやらかすべし。そのため壁書如件。

梅芳軒八景

瀟湘八景のさしつぎには、南都八景近江八景、あるは金澤隅田川とかぞへて、屛風にうつし、壁に畫きて、ちんば腰ぬけの臥遊の具とはなすめり。近頃これにも新地の出來て、芝居八景吉原八景といひ囃せば、おらが屋敷にも八景がある、こつちの村にも八景と、八景でめをつく世の中、所詮は年貢

雲上の沙汰に及ばねば、他領こしこくの差別もいはず、見わたす所に名をつけて、その物好きにするにやあらん。こゝにも御目もじは致さゞれど、山鳥の尾長の園、しまつ鳥うへ手のごとに、なにかしかるべき所ありとか、梅芳軒といふ茶店にて、やがてこの花の好き人とは知りきに、こゝにも八景の出店あれど、世間一同出来合ひの景気落雁晴嵐の、あるべきかゝりのこじつけにはあらず、自然天然の風景にて、四季の花鳥月雪の、折にふれたる眺めなれば、一ときを此庭に経さすれば、その趣は知り難かるべし。いかで自由にさせるくゆらし、能見堂に茶をすゝりて、眼鏡とり出す目論にては、かかる風ある佳境を知るべきに、此の図の初めに八ひらの絵あり。このの八景かくの通りと、はなしを高がきしあるどの手まはし、御意にかなはゞ御勝手次第、詩歌連俳なんでもござれ、此の袋中に書きつけて給へと、朦朧實地を見ぬ諸君子、眼引のほから、戯鍋かくやうの、ふところいれもあらんなれど、そこらは歌人の名所とやら、随分茶かしてやらかし給へと、あるじに代りて此のはし書き、やつぱり茶かしてやらかすやつよ。

鯛屋が櫻の間　藤森宮の前にあり

西三條の百花亭、崇の上の春のおとゞ、成範卿の櫻町、宰町どのの花の御所、いづれかまさりいづれか劣らん、されど目に見ぬ京の物語、雲上も雲上も定め難くや、爰に彌生の客あつたのわたりに、

一木の不断桜あり。春より冬をかけ地の風流、屏風障子に咲き出でたる、散る事知らぬ花盛りは、ありが鯛屋がもの好きにて、五彩の筆にうつし絵は、吉野初瀬も寝ながらに、つい壁と見る仕業なるべし。かかる桜の記を書けよと、あるじの案内にしをりして、まだ見ぬかたの花見酒、たよつきり目を開くになん。

とふ人は潮の湧くが如くなり名ある鯛屋が家さくらとて

七小町の屏風

いな舟のあるじ、新たに屏風一隻を作りぬ。瑠璃雲母の類は唐めきたり。月なみの十二つがひも、なにがしの御筆めきてふるはしからず。出来合ひ屏風の松に鶴、竹に雀もここ古りたり。近江八景あるは又、七賢人も野暮らしからんと、様々と思ひ廻らすほど、ついさら／＼とした張は出で来ぬ。引きまはして見たところが、風の入るべき穴もなし。穴のないから思ひつきて、七小町とは定まりぬ。もとより姿の美しきは、虞氏西施にもかつしかの斎が筆にあやなしつれば、ちつとも抜け目はないはないに、心動かす人もありなん。もし金岡が馬にならひて、夜な／＼出でて寝所の、枕へ近く這ひあがらば、思ひの外の幸ひにて、あるじの喜び知りぬべし。かの恐ろしき地獄絵や、坤元録のいにしへは知らねど、しふつかひの折にかなひ、雀形のつきぐ／＼しき、今様の寫し繪には、たち並ぶべき屏風や

はある。こゝに經師がたばこのひま、八枚なりのおき開をかぞへて、心に糊のはけついで、べつたりはしたよごすになん。

杏花園先生六十ノ賀

先生の六十賀めでたく祝ふ心なれど、高い唐紙にちくらをこじつけ、雲紙に蚯蚓をのたくらんも順朝臣の所謂同じ事にて珍らしからず。先のきかざる小刀細工に、千代萬代の壽をこめたればとて、さして長壽のたしともならじ。されどついとほりの追從にも、口には錢のいらざれば、虚語のうりかひにならひて、上ち萬歳もいきの松と、聲高に謠はまほしけれど、それもむさしき名所にて、耳にも秋の寐醒めとや人いはまし。さはいへど、物はいはひがらとやら、蟻の思ひもてんぼの皮、神田の納受あるまじきにあらず。そもく近頃のじまの地藏尊に、子供を假の奉公人、請狀書いて出す時は、其の子息災延命なりと、ある物知りの話を聞きていかで我が先生をも、其の數にと思へども、さいの河原の株式にて、子供の外はならぬといふ。そこでおのれ智惠をふるひて、地藏からの思ひつきにて長生の親玉といふ仙人のかくれ里へ、先生を誘ひて、小姓奉公に出さんとす。さるは蓬萊の龜の尾をわけて、一番先生の尻を持つ氣なり。高野六十のためしもあり。桃源の湯島よし町にいださば、掘り出し物と云はざらんや。御歳少しさだ過ぎ給へど、仙人の齢にくらべんには、振袖ざかりといひつべ

し。よしんば前髪がないと云ひて、捲つた尻の割れればとて、其の時われら尻くらひ、かまはずにな
る分のことなり。

僊家請狀の事

一　此の先生二三百歳は慥かなる人に付、拙者しまつ鳥請人にたち、朝もよし貴殿方へ、仙人奉公に差出すところ實正なり。年季は當三月三日、六十賀の誕辰より、五十六億七千萬歳、みろく出世のあかつきまでと相定め、しきせは二季のこのは衣、たち縫はぬきぬのふどし一つ。もつとも給金の代として、不死不老の金丹一貝、たしかに受取り申し候。右御藥の效にて、長病はいかまつらじ。たゞしみちとせの桃においては、東方朔が例にならひ、取り逃げ驅落ち致すべく候。

一　たゞ皇帝樣御法度相守り、仙家の御作法相背かず、孫彦やしはごのすゑ〴〵まで邪魔にされ候まで、歳多に長生致すべく候。

一　宗旨は代々上戸宗、酒に力士の金剛寺坂。但し近所ながら切支丹坂にては無之候。

右の奉公人、ながくゐの會のねん明けまで、御氣にいりまめ福山椒、節分の數をかさね〳〵、いつまで草のいつまでも、なまなかなれぬ蓬萊の山出しながら御奉公大切に致すべく候、仍つて玉

胡桃ほどの判をおしたる仙家の受状如件、

所は不老門前町

壺山の五老兵衛

蓬莱星漳十殿

尚左堂を送る詞

車上に吉禮は左を貴むとか、左に肩をぬぎたるは、漢に忠ある例にて、左に鉞を授けられしは、薩摩守の武勇なり。冠婚の杯も、必ずこれを左にとり、開帳の靈寶も、左へまはつて拜すとか。こゝに江左の一書生、歌あはせの卷頭にすけたことなき左きゝ、左ならはの一本さし、作者によりては左丘明、細工は左甚五郎、左はらみの男の子に、尚左堂といふ風流士、今年長月末つかた、けふは日がよい左へござる、東海道へと出でたたんとす。いでや人を送るに言を以てすと、惜別のかなりへまはる、符左隱者の左まへを、旅人にして左の如し。

ざれ歌の神にしませば旅たちて十月をしもるすにし給ふ

鶯谷のさくらゐ

鼎ほどなる家居の所せきに、たれこめて暮しわびぬるを、思ひかけず鶯谷よりとて御消息あり。開

き見れば、四谷の馬に鞍おけとのみあり。嬉しくてそゞろに出でたちてゆく。道いとはるかなれば、かのうばそくの宮がりゆき給ひし、薫大將の昔もかくやなど思ふ。引きごとさへいとこじつけがましや。參りつきて、はひりの方をのぞけば、とある人めく翁の、ひなたに脹うちひろげて、きんかきならしゐたるぞ、かの宮のさまにはかよひたる。廊めくかたをのぼり行けば、えならぬにほひの、さとかをりくるを、おのが追風にやと、鼻うごめかすに、さにはあらで、勾欄の前なる櫻の咲き亂れたるが、けふのみなみにやゝ散りそむるなりけり。あるじの御傍にうちそばみて、長崎土産の鏡取りあげて、これしても月の水はとるべかりけりといふは、中の君にはあらぬ、中戸屋の婆々なるべし。さて様々の人々入り來る中に、横川の僧都の妹君、源内侍だつさだすぎ人も見ゆめれば、盛なる二十の若人の、うちまじるべき心地もせざれば、あなたざまにゐざりよりて、股の下の道さばみと打誦しぬる後めさへこと人には似ず、うぬぼとは見ゆめり。かねて契り物し給ひし人々の、ぶんながしてまうこぬもあれば、やみ雲にはらたち給ふも、げにことわりなる梢の花のさまなり。あるじの君料紙とり出でて、難波津でも常磐津でもと、上調子にてせめ給ふ。さてはいかにせん、かかる櫻の木に立ちて、矢立のちび筆取り出でんは、便なき備後の三郎めきて、かくれみの笠ほしくあれど、天香煎をおなしくせぬ、上野の山に劣らざる、櫻の花のかはつるみに、人のめつらを忍びつゝ、たゞあてがきに

書きさしてやみぬ。

人の六十賀につかはしける文

君ことし六十路の春をむかへ給ひぬとか。さるは鶴龜にたぐへ、松竹にかこちて、限りなき壽を祝ひ物せんは、おほかたの人のそら追從にて、昔よりためし多かれど、つひに歌の德によりて、長生したる物を見侍らず。然るに萬歲に汗をかかせ、厄拂ひに聲をからさせて、あはよくば蟠桃會の百膳に坐り、人魚の燒物に箸をたて、白鳳のつみいれ汁をすゝらんと思ふは、蟲のよき願ひなるべし。これらの類とはこと變りて、昔には過去の福をそなへ、現世に陰德を積み給へれば、祈らずとてもたつぷりと、億萬歲は確かなるべし。さるを殊更に濱の眞砂を數へ、ちとせの杖をつくらんとするは、やくなき骨折損にや侍らん。されど壽筵の酒はつれせんは、さうざうしき心地し侍れば、引杯の人なみに、わざとかつちりの一首をのべ侍りつ。

食傷と腎虚をなせそよいとしをしてと子供や孫が笑はん

出雲國の人々よりおこせける狂歌集のしりへに書きつけける詞

あらがねの土に始まりける、三十一文字の言の葉を、お國歌舞伎の狂言にあやなし、すがすがしうよみ出でたるを、をろちがもこよふ二十尋の卷紙に、出雲八重垣かいつゞけたるは、あはれつむかい

の、たちまさりても見ゆるかな。ゆづのつまぐしさしながら、心はひの川の深きに劣らず、詞はとりかゑのたかきにまされり。げに／＼住吉よし玉津しまも、こゝにとつどふ大やしろ、かのひろまへのゆふならで、おもしろしとや人の見んかし。

鯛亭記

鯛は魚の王なり。土臭き鯉をめづるは、牡丹をのみ目にふれて、櫻の花を見ることなき、言さへぐちんぷんかんどもが寐言なり。此の物神代の紀には、赤女とめされ、又袁徳をちぬともよびつ。仲哀帝の御時よりぞ、初めてたひとは名のりたる。ひるこに三年の腰をさすらせ、浦島に七日の手をたゝかす。風俗歌の神さびたるには、いそらが崎のあまと歌ひ、臣房卿の博識なるも、あおかたの浦とは詠じ給ひき。抑雛店の毹にのりては、らくかんとよばれて紅粉をよそほひ、婚禮の席に出でては、掛鯛となつて赤縄をつなぐ。すはやりとしもいひたるは、若狭古代の詞にて、味噌づとばかり昇せるは、めで太平のしやれなるべし。いまや、あまのきる美濃の國に、鯛亭となづけし庵あり。おなじ濱燒のあま口ならず、味噌漬のしほじみぬる人にしあれば、よみ出づる言の葉は、あたかもうしほ煮の湧くが如し。こゝに鯛亭の名をよばんこと、海なき國のほまれならずや。あゝ鯛亭々々、大抵の人にはあらず。

天王行燈

例年の地口あんどん、かけまくもかしこけれど、天王様のひろ前に、通すと申すはいかゞなれど、つきやがきねの額さきて、こいつァおそれ入、恐れ入て申さく、その積善の家にはよけいの仕事あり、正直の大あたまには幽介かとゞまるとか、いんつうまん／＼歳の内に神つどへにつどへ給ひ、神ばかりにはかり給ひ、逆由物見のようだいひ、我が家らくの爺はらひ、やんちんしの脈筋すさゝけ豐年祭日なきしめ給へ　さて汗くさんゝの爨ひはもちろん、釜のはだたち、盆のはだたち、犬の子を捨てたる罪、鼠を升におとし罪、すつぽんのいけはぎ、おなぎの播きし、こゝだくの罪といふ罪は、蚊遣火のうちはをふるひ、うち拂ふことの如く、神はらひにはらひ給へと、欲気はみおんな内外清淨、踏考柱若が愛敬をそなへて、細ひく娘のあちらを向かす、女郎の尻を抱くことなく、やれこれほんまによしよしと、守らせ給へといふことを、煮賣酒屋の蛸の足、やつのお耳をふりたてゝ、一はいちよつきり聞召せと申す。

殘月堂記

東條氏のなき所に、殘月堂となづけし家あり。かの輞川の竹里館のうちこもりて蚊の多かる、不物好きにはくらぶべきにあらず。西南遙かにうちひらきて、村野のけしき青みわたりて、ましばの庵に

たつ煙、並木の松の朝霞など、とり出でていひたてんには、のぞきからくりの口上おぼえて、看板の繪にもかきとりがたくや。あるじ大和歌のすき人なれば、石のすゑざま木草さへ、さながら心あり明けの、影をさまれるなごりにめでつゝ、さてぞ此の軒の名にしもおふせける物ならし。あるは京極黄門の山荘をやうつされけん。出雲の前司が物好きも、たちならべて見たらんには、讓状をやかきなましと、問ひくる人のことぐさには、此のすまひこそと羨みいふめり。おのれ百里の遠きにをれば、未だ此の堂にのぼり見ず。目に見ぬ京の物語、知り顔に云ひたてんは、鄙を山のたがひ多からめど、唐虞三代の家作りをさへ、見て來たやうに語りなす、えせ儒生の口つきにならひて、宰家の美をだにうかゞひえぬ、人の家居のぬきはしら、穴のむだなりのねをするになん。

贊酒ノ詞

亭子院の賜酒記を見れば、我が國にも猶八人の左ききはありけり。まことや、素戔嗚尊のひがわざし給へりしを、醉ひてはきあがつにこそと、天照御神はゆるさせたまひき。我醉ひにけりの綸言あれば、あかずをせさゝの敕命あり。うまらにをやらふるかねとは、をけのきみのたつゝ、舞ひにて、ぬきすたばらんとよみ給ひしは、丹生の姫みこのあれんの時なりとか。歌よみの家盛は醉ひさまたれて家に歸り、武勇に名ありし文屋秋津は、べそかきてこそのみけらし。そも百福の會、酒でなければ初ま

らず、冠婚の御祝儀、元三のしるとり、大饗のかいもとあるじ、めぐり水のとよのあかり、又折から
の花紅葉、月雪はいふにも及ばず、初會のかつちり、なじみのつけざし、ゐつゞけのむかへ酒、口舌
の背の寄りそひまで、下戸ならぬこそをのこはよけれ。醉郷氏の國、温和の天、しれとたまらぬ又六
が、杉の門こそ浄土なれと一杯をかさね二杯、お下戸なるなら趙氏連城、いかなる玉も酒にはしかず
と、大伴卿の御詠のとほり、奈良漬に醉ふ馬鹿ものゝ猿にかも似たらん人は、此のあぢはひを知ら
じかし。

酒をいましむる詞

酒は桀紂が愛せる物にて、堯舜の嫌へる物なりと。孔子の門になほ醉ひなく、二十四孝に上戸なし。
咽ごしの味を愛しては、五尺の軀の内損を思はず、親はらからの嘆きを知らで、おのれ一人舌打して、
これを樂しと思ふにや。いでや醉ひたる人のまなこ血走り、大聲あげて人をのゝしる、さながら桀紂の
面影あり。人として桀紂たらんことを欲するか、堯舜たらんことをねがはんか、夢中作左にこれを問
はまし。

さくらゐ

彌生の初めの二日、かけごひの責め催促、今やおしよせ來ぬらんとおぢゐたるに、鶏の羽たゝくに

とりに、くゝたちつゝみ焼きのみさかなには過ぎざるべし。さる位たふれの所せき遊びは、したはしからず。かううちみだれやはらぎて、一ッ物くふまとゐこそ、昔後家の髪のたたふくみしけれどいへば、あるじゑみ／＼と笑ひ給ひて、けふの半日のむしろをなづけし、朝野群載にいふある、さくらゐとや呼びつけてん。此の會けふにかぎるべからず。花のなごりの跡とめて、なにがしくれがし祠を結びて、夏にまれ秋にまれ、櫻に名ある上野の大師、輪番にあるじまうけすべしとのたまふ。いとよか、なりなどきこえはやす。かのかけごひ恐るゝかたる翁、よろぼひつゝさくら木のもとにより、、けにつれなき命のこの花の盛りにしもあへりける、時なるかな／＼とうちながめて、

きんりやうのしらにおきなば質屋めもこたびやかがん花の香の袖

これはいとゞ人わろき言の葉なるを、腹にふまれるたゞ小便、つゝみもあへずもらしつるかな　人やしらみのふる布子、とまれかくまれかいやりてん

醉龜亭酒百首

こゝに廣丸といふ左ききあり。小百篇のすき人にて、常にはうたひ、うたひては醉ふ。定家本の高ッきりに、杯の數つもれるを、伊勢屋が通ひのうらをかへして、しめて百首のくだをまき散らしつゞきてあかぼしのちろ／＼目していへらく、てにがくのみぞおやァねえが、花すゝきぼんの事だ、

みつはゞむおいらが歌には、旅人のきちん宿りや、たくはつの曉月坊にも、少々肝がつぶれべい、ひな詞たみそおやァねえが、潤のうはゞみぬしがしつてだ。しまつ鳥うんといひねえなど、あきもよしきほひかゝりて、ぎをん祭のほこりかにぞ見えたる。おのれ日ごろのきげこながら、敷島の道づれにして、よそにみて過ぐべきならねば、こゝにひいきの肩をたすけて、はこばす筆の千鳥あしに、此の一巻をくりかへしつゝ、いゝきもつともきうだらう、いゝき／＼とほめながら序を書く

なんだ樓

武藏の國青梅の里に、なんだ樓といへるたかどのあり。あるじ敷島の道のきぶりに、ふみの林に分け入りつゝ、あらばすなはち書樓をたてよの、古きをしへにもとづきて、はやう此の樓は造りけるとぞ。そのかみ四方赤良ぬしの、例のすがやかなる筆にものして、南陀樓とは名づけられる。人この額の文字を見て、なんだ樓／＼、なんだら法師の柿の種、根のないことにはあらざるべしと、根どひ葉どひのむつかしきに、あるじおのれが日まめをとりえとして、強ひて此の返答をこじつけよといふ。そも／＼南陀は梵語なり、曾我祭の俄にいふある、なんだ／＼の類にあらず。如是我聞釋迦の舍弟に難陀といへる阿羅漢あり。海龍王にもきる名あり。こゝに譯していはんには、大慶喜俱の文字にあたれり。烏帽子親なる赤良ぬしの、そのおもはくは知らねども、おほかたこゝらで有識游の、濱のまさ

この子々孫々、福壽無量のよろこびは、このたかどのに積むとも盡きじ。これ積善の餘慶の仕事にて、喜ばしき此の記を書くを、なんだらうとや人いはんかし。

妙閑信女十三回忌祭文

我おもと三えんの江戸町をはなれて、西方のつき出しとなりてより、紋日物日のくげんなく、上品上生のお職とよばれて、いつゝ蒲團の蓮臺に乗りて、無量壽佛のあげうめとは、ありがたいまに織り出せし、まんだらでない果報ならずや。げにや紫雲たなびく道中には、總花を茶屋にふらす。これ前生のうらやくそくから、すぐに浄土にゐるつゞけなじみ、お文様やら一枚起請、せいしふけんに文殊の智恵、たんと手のある觀音をさへ、友朋輩にすがきの、音もたふときごゝろなみ、實相おかのうみべなる、長者も及ばぬ全盛とは、見せ行燈の光明にも知られき。おのれ御印文の判人ならねども、昔が年忌をかぞへ見て、けふ靈まへにむかうの人、ちよつと茶漬の祭文をかくせりつ。かの格子さきのきせるにはあらで、廻向にくゆらす香爐のけぶり、こゝろざしは松葉屋の、青ッきりうけてくんなんしと申す。

便々館狂歌集序

おとぎきたかき便々館のあるじは、いとすぢの四徳そなへたる人にて、宜陽殿の一とよばれて、一

なき此の道の長者なりけり。此のぬし秘曲の集册をつゞらるゝ所謂流泉啄木のしらべにて、玄象牧馬の聲あり。あはれ樂天も眼をしばたゝき、いぬめの少將もはなをかみつべし。此のはしつくりかけよとこはれて、めくら法師の蛇におそれず、ふるめいたる聲をそのまゝに、見ぬ極樂とあましたゞり、ほちく筆を運ばすになん。

狂歌太郎百首序

太郎の呼ばんもことゞもしけれど、かの堀川の昔にはあらず。そも此の二卷は、太郎國經の大納言の、みやびたる姿はもちろん、將軍太郎のいさめるふりより、香太郎の賤しき體、しつぺい太郎桃太郎の、幼き話もとりまぜて、金太郎小僧の強き體、浦島太郎のめでたき體、葛西太郎のしやれたる體など、すべてあたごの太郎坊、鼻に知られし長點の、きはある歌をご集めたりける。こゝにちとなめすぎたれど、太郎殿の犬俳者ありて、かの又太郎忠綱にならひて、たゞ一人の下知をなしつゝ、さばかり大河の坂東太郎、底のそこまでかい探りて、いけどりにせし河太郎百首、太郎狐のしりをなる、玉の春てふ太郎月の、めでまし草にもなれかしと、太郎べい駕籠のかたりの如く、とりいとなめることになん。

九月十五夜正齋につどひて月を見る詞

天神池とは、天下一といふ地口にや通ひぬらん、月に心をのべかゞみ、おかゞみが[illegible]の光あれとて、丹の菅平法皇の、無雙やたらにほめ給ひしより、まかしよかおらす天神様さへ、罪なき配所の御詩作もありけり。こよひの月の行方なむまでとよみしは、世に憂きことの昔にとほりし、金星のなきこ殿の、みく／＼ならぬ船中のすさみなりとぞ、そも要宿は清明なりとは、吉田のなにがし法師も、二階から招きてぞいひけらし。歌人はふた夜の月ととなへ、講諸師は後の月とよぶめり。かた月見は忌むものなりとは、客に紋日の口をわる、くつわや共が手だてなるべし。つら／＼神代の昔を考ふれば、あなにゑやいとしらしい殿御ぢやといひしは、しまつ鳥うき橋がいざこみ詞なりと、蝙蝠草疏の御説には見えたり。又お月様いくつと数へたるは、子守のあまが宵まどひせる、ねぬきのすけが日記にそのせたる、いでや芋に團子にゆであぐる、なべて世にある人といふ人、にえ湯のふたしあく許り、こよひの月をめでぬやはある。しかはあれど、夜よしとだにも告げやらぬにまたぬ臨時の客あらば、油にまじる水の月、よる所なきことゝおもふめりと、細屋にてらしあはせてとのばして、あつらへ染のことつ紋、こくもち月のまろき夜に、まとゐのむしろを開かれしは、あはれあるじの御心の、いたりいたらぬくまこそなけれど、おのが勝手のにはふ歌まじり、もと中の字のはら庭を見あぐらひて、廓中の人の隣なしるべに、月の夜みせをひやかさまになん。

三浦大介が繪

此の翁何ものにか、素袍につきたる紋を見れば、居酒店の暖簾にかゝりしに似たれば、もしは内田三郎にやと思へど、歳の程を考へみれば、三うら黨のかしらとよばれし、大介義明なるべくや。此のおやぢ、敵なる佐奈田十郎に、ことから首討たせしをおもへば、たてひきを知りたる男なれ。七十九を一期として、越中ふどしひとつになりて、いさぎよく討死せしは、ふたりもなき武士のたましひ、そのかみ佐殿の御心には、金とも玉ともほめ給ひつらん。されどいま節分の宵ごとに、浦島東方朔とさしならべて、百六なりと稱せらるは、厄拂ひが十呂盤造ひか、布袋和尚をとり出でて、福神と仰ぐ類とやいふべからん。

禪中庵

華陀が五禽のかるわざをまねびて、はりとう／＼の針書となれる。林杏といふやさ法師あり。俗なりし時は、覆面のさぶらひにて、憂のおもへをさりあへざりしか、うき世を夢とくわんずのふみて、自在に我が身をふるまはんと、梓のまゆみそりこぼちて、竊風流のおもむきを明らめんと、京難波にさへ行きいたり、四國をまはりてきたるものの、かゞはしき名をぞ顯はしけるに、さてぞから此の林生ひしける、ことの葉の道に花は咲かせける。一日法師子にいひけらく、翁をひるはば家ひとつ作らまし、さるべ

き號をつけてよといふ。さらば褌中庵とやよびなましとは、劉伯倫が讒言に、家居をもて褌とす、人我が褌中に入れり、といひけることばになん。そも褌とはたふさぎのから名なり。よし庵にふさはしの名ありとて、世間の義理を缺くことなかれ。又こづかひに事をかゝざれ。つねに唐やまとの文字を書くべし。家臣となりぬとて、五人組をばかくべからず。此の數々のいさめのうちに、かぎなききをとくはうるは、はゞかる所あればなり。いひなばそこのあたまやへこまん。褌中庵々々にしめたる色を見せず、錢ひとつこぼさざれ。うき世の河のながれわたり、うかとふぐりをつん出して、世の人にな笑はれそといふ。

いけ花

古今後撰枕草子に、櫻の花をはながめにさせりとあるは、今の世の人の如く、自門他門の流儀をいふめる、祕事傳受あるわざにはあらじ。かの馬子才が賣花の詩は、こゝにひかんもすさまじければとどめつ。此の頃插花を好む人を見るに、花を愛する心はうすくて、ひたすら活け方の手際にのみ誇るめり。さるは葉をむしり、花をこきとり、枝をたわめからを切りて、ことなるふりをつくらんとす。貧朝帥にみせましかば、かたはものを愛すとやのたまはまし。まことに花を愛せんとならば、いさゝか花葉をいたむることなく、清き水に根ふかくさして、命ながからんことを願ふべし。されど秦代の

暴政にならへる、落花微塵のひたふる心には、かかる說を笑ふべけれど、花神もし靈あらば、翁が詞にうなづくべくや

四 睡の圖

黃帝睡つて華胥に至り給ひ、魯生いねて楚王に封ぜらる。宰予がいびき、目蓮がよだれ、共に師匠にしかられぬ。莊子が胡蝶、昭公の鳥、みな唐人の寢言にて、俚諺抄の假名かきならずば、寢ぼけし聲だに、聞きとり難くや。もの思ふ時のわざなりとは、拾遺集に見えたれど、老いたる親の晝寢したるは、すさまじき物にかぞへしぞかし。そも五つ蒲團の狸寢入りは、必ず初會の客にして、三尺去つて猿ねぶりとは、飯焚女の傳受なりとぞ。連歌師の晝寢は、月のためにすめれど、盜人の晝寢は、いかなるあてのありけるにか。肱を曲げて枕とせしは、かしこき人の例にいへど、あふちの樹にうち眠りて、祭も見ざる馬鹿ものもありけり。詩書論孟の講釋はすべても、なほうつぶしにふしをるは、一癡才學ある人にはあらじ。鳳凰孔雀を身にまとひて、ひるみせの壁によりて、目うち明いて寢ぎたなるは、また世にこもれる小傾城なるべし。ねるほど樂はなきものをとは、いかなる人かよみたりけん、我また朝寢坊のあだ名をへつきて、食うて寢るより外に能なし。然るに今日此の畫繪をけみして、かかる大悟の聖たちも、睡魔に犯され給ふならずやと、此の繪をおのが人にとりて、また我の夢のひお

枕、まがりすぢりしことの薬を、いびきと共にかきつゞりつ。

俊蝦樓が蕎麥をめづる詞　尾張国名古屋に住あり

蕎麥は仁明帝の御時、專ら畿内に植ゑさせ給ひしとか。されど今の世のうちなを知らされば、一そばかきとなして、おまへらつけてや食ひたりけん。此の物よ、みすゞかる信濃の國に出づるをもて、最も絶品とはすなり。さるは朝日將軍の院參には、これをや獻じ給ひけん。日野大通か饗宴には、これにて酒をやすゝめつらん。そのはらさへもうとましき、信濃坊さへ患ひ給ひしは、善院上人の手うちの御作なるべし。長命をや著たりけんとは、鄰の翁を常しまれし、淺惠僧都のされごとなりとか。そも蕎麥は食物の用のみならず、今日渡世のうへに於ても、益ありてめでたきものなり。まづ千金の夜具の敷初はさらなり、三百長屋のわたましにさへ、千歳ふることぶくゝさはひとはすなり。和尚は檀那に寄ゐ取らせて、堂建立の日聞きとし、奴婢は出替の靑膳となして、主從三世の契りをかたくす。棟上げの大工は、これがために高きより下り、あらうたいな官は、手を洗ひてこれを拜す。詩歌連誹の筵はもとよりにて、儉約の夷講にさへ、近頃これをとり出づめり。あるは新そばのはしりと聞きては、小判の耳を傾くる人もありたん。又麺棒を質へ貸して、夜食を食はぬあいな頼みもありぬべし。二十四文の辻君は、これに深夜の寒氣を凌ぎ、四十餘人の義士たちは、これを夜討ちの兵糧とせりと

かゝ今本草を考ふるに、五臓の滓穢を消する效あり。論より證據にひくべきは、湯の盤のめいえうなことには、此の蕎麥きりの名におへる、垢によごれし褌なりとも、ゆで湯をとりて洗濯せば、まことに日々にあらたなるべし。されば、ふるひ粉のからくに人も、これを食うたらうまからう、おいしからうと云ひしより、つひに河漏の名をさへおほせぬ。うるひきす都の歌詠みは、物の名にかくして詠み興じ、あまさかる賤が子どもは、そば切素麺食ひたいなとぞ歌ふめる。おしてるや難波の津には、信場といへる名物あり。烏なくあづまには目直といふなだいあり。寺に知られしとうこ庵、社に名あるそばいなり、一の谷には敦盛そば、蓮性法師がねぶつそば、名も高砂の翁そば、秋のなが夜のねざめそば、味も吉野にきこえたる、名におふ吾山いもつなぎ、うそを月夜の名もしるき、くるわに容をつるへそば、めぐりは闇の晦日そば、娘の戀のしのびそば、緣をつなぎのたまごそばなど、とりたてて云はんには、汁つぎの口にも餘りぬべし。これにうちかたゆで加減、水のきりやうつゆあんばい、祕事口訣の傳授あることは、天下開物の筆にも書きとりがたくや。此の品々の美を備へて、紙がかみなる代物といふは、高き名古屋のみその町、春慶椀が蕎麥にてぞありける。おのれことし旅行のついでに、しばしとてこそと杖をたてて、貴簽の雜とく〳〵、まづ四五杯をぞ試みたる。いでやたまくしげ箱根を越えてより、うつの山べのうつゝにも、夢にもかかる美膳にあはず。さは思ふこと云はざらん

は、胴卷の腹やふくれなんと、腰なる矢立の筆とり出でて、大根おろしのあつたやたらに、花かつを
かきつゞけつるは、けんどん箱のこつなき、此の家のそばにあつればなるべし。

茶

茶をたつるに法あり、これを飮むに式あり、此の法式にうとき人は、むしろに列なること能はず。こは三禮の文には見えざれど、定めてゆゑある禮にやあるらし。ふくさきばきとかいふことして、なつめのふたかいのごふひおちあ、殊更びたりて點じをはりて、茶椀とりて、まらうどの方にさし置きたる、いと／＼したり顏なりや。まらうどはあからめもせず、主の用意を守りゐたるもをかし。このことにたど／＼しき人は、僅か一杯の茶をすゝらんに、おど／＼しきふるまひよと、をこづきそしりいふめれど、酒ともだちのはした／＼に、いさかひさわぐに比ぶれば、まじはりのゐや／＼しく、うちあがりて見えたるは、茶のむしろにますものはあらじかし。

雪

鵞毛に似たりとは、樂天が詞、鷺の如しとは、于鱗が見たてなり。鹽を空中に散らす樣なりとは、謝氏の總領が出そこなひにて、いとよく似たる白粥とは、仲文が當座の秀歌なりき。そも新場の河豚の北むきは、腹に入りて熱く、芝居の梅の北面は綿封じて寒し。あはれ降りたる雪かなとうめきて、

鶴氅ならぬ丸合羽に、あとつけまうき木履はきて、興つきて歸る毒情にはならはじ。君を見んとはと
よみ給ひし、まめ男こそしのばしけれど、姨にあひたる犬のごとく、ひたすら朝けの空にめでつゝ、
木毎に花のさきはしりて、いで白たへの雪女に、初雪の見參せんとよばはりて、たち出では出でたれ
ど、寒風肌骨に石ばりして、孟宗が鍬の歯の根だにあはず。後へも先へも參り難く、雪片大きさ疊に
等しく、さして行くべき道も見えず。南もしら山の觀音ほさち、此の寒けさ救はせ給へと、たゞん程
なる涙おとして、辛うじて宿に歸りつきぬ。げに香爐峯の景色は、簾の内より覗くべく、梁園の風光
は火燵に寢てこそ見るべけれ。かかる憂きめをみわが崎、佐野のわたりの夕ぐれなど、親しく行つて
見んことには、向後けふの詞ともすべしと、ほだのたき火にあたゝまりて稍よみがへれる心地しながら、
猶こりずまに庭うち見やりて、ふどしだにせぬ股うちひろげて、ふれ〳〵小雪とうたひたるを、雪に
こゝろのあらましかば、つもらん所もはづかしくこそ。

龜

蓬萊を背におふあり、泥中に尾をひくあり。堯帝に洛にあへりしは黒く、毛寶が軍をたすけしは白
し。もとより甲蟲三百六十の親分にて、祭に玄武の高きにをれど、蠟燭たての下から出て、くだつて
きの字やが臺となる。龜の尾の山、かけずくづれず。かめゐの水、流れ清し。龜井算の早割りに、小

遣ひの錢龜をかぞへ、龜井町のいとなみには、おのれが甲の笊を作らす。むかし〳〵海づらに猿うら島をのせたりしは、幼い人の放し龜にて、今に其の功をば稱しぬ。假令なら茶店の障子に畫かれ、吳服屋の暖簾に染められて、今戸の土に燒かるとも、龜卜の廢れし世にあひて、生得の壽を保たんは、汝が爲に萬年の幸ひとこそ云ふべけれ。

ひなあそび

田舍に京の内裏雛、桃に櫻のにしきのみかは。びいどろの菓子のきら〳〵しきなど、五人ばやしの絆おぼえて、華やぎたるものは、上巳のいとなみになん。曲水の古きあとは、山川の酒にのこり、鳥あはせの儀式は重詰の庖丁にあらそふ。羊羹饅頭のたかつきには、上戸も摸稜のひし餠に、つい蛤の口もあきつべし。十に餘りぬる人はとは、右近がいさめの詞ながら、今樣は老若をいはず、女男の豆いりに、娘にまじる母子草、あさつきなますあさからず、今日のせちをば祝ふ事とぞ。人形は大きなるを好み、道具はすべて小さきをよしとす。その中の間の上段に、ひき渡したるみすもかう、屛風毛氈に至るまで、去年の樟腦の名殘知られて、にほひやかなる戲れは、みりん酒のあまえ勝ちなる、女子どもの遊びなればなるべし。

不朽堂　駒庄となのりて名古屋に店あり

我が國に、茶の名産多かれど、山鳥の尾張の國、内津にこしたる茶はあらず、いまや、不朽堂が家にひさぐ茶は、もつとも其の絶品なるをえらぶ。さるは龍團雀舌のわたり茶も、むちやになすべきた茶なり。そも茶の人に益あることは、榮西法師の喫茶養生記にしるしたれば、殊更にこれをいはず、宵まどひの寢ほけ人にしるしあることは、博物志にもけちえんたり。杜牧はこれを瑞草と稱し、子尙はこれを甘露なりとほめつ。陸羽盧仝はいふも更なり。利休遠州のすき人たち、かぞふるに盡くべからず。皆々もろこしには、長沙國に茶陵あり、だら／＼おりし大江戸には、お茶の水の名高きあり、稻荷にさゝぐる茶の樹あれば、佛に供する茶たうあり。人に茶坊主茶師茶人、ちやん／＼坊主茶筅後家、お茶ひき女郎茶屋をんな、扠食物にはうちびさす、都の茶粥靑によし奈良茶の飯にきぬ／＼の、なごりの茶づけ醉ひざめの、鹽茶にそへし茶うけ菓子、四季にとりてはあら玉の、春を祝ふ大福茶、夏は茶舟の川すゞみ、秋はあま茶の玉まつり、冬の茶室の爐びらきに、ならべし調度の數々は、茶入れに茶椀茶のひさく、茶杓に茶臼茶はうろく、茶盆茶臺にちやのふくさ、文福茶釜にけし炭を、おこすは花見の茶辨當、月の前には茶たて蟲、拍子にちやきりちやるめら笛、チャチャンは三味線、茶つみ歌、茶番はしろとの狂言にて、義太夫節にはちやり場あり、戀には忍ぶあみ笠茶屋、迷へばうそも茶と知らず、さとるは空也の茶筅賣、寺に卯月の灌佛茶、かたへにまうけの接待茶、朝茶に茶のこ藥

には、效をゑのぐや茶調散、著用ものには茶字茶まゐる、ひい茶丁子茶うヾひす茶、芝居に茶賣遊里には、茶屋に茶をいふ太鼓持、おつと北野の大茶の湯、攝津の國には天下茶屋、道頓堀に芝居茶屋、どんどとたえぬちやのとくい、土産に買つてこま庄が、茶の看板を目につけて、ちやつちやとお出でを願ふなりと、茶屋が名茶のほめ詞、こいちやァをかしと人々の、おへそに茶をやわかすらんかし。

三友園

松と竹と梅と三人の友の中に入れよあなかま我も好きものとは、長嘯子の釜を愛せるざれ歌にて、湯島にかけし松竹梅とは、八百屋の女が額の文字なり。かけまくもかしこけれど菅原の御神も、宣風坊の山陰亭に、此のものを植ゑさせ給ひしこと、おほん書齋の記に見えたり。こゝに沼波法眼ときこえたるは、山鳥の尾張の人なり。その庭を三友園とぞよぶなる。これ白樂天が所謂琴詩酒の三にはあらず。また兼好がかぞへたてて、物くるゝ友など云ひける野鄙なる心をまなぶにあらず。字義を論語の益者にとりて、月令廣義の古きにならへり。此の三つのものは菅公のめで給うける物なりとて、御神を信ずる心より、これを同志の友とはすめり。さるは松に百丈の高きを慕ひ、竹に千竿のすぐなるを思ひ、梅に萬斛の香をなつかしむ。あるじの風流この庭を見て知るべし。あはれ人り來んまらうどたち、七松處士が昔にならひ何遜子猷が物好きをまねび、めかれずむかふ庭神樂、み子がちはやの模

樣にあらで、さながらすはまの作り物、めに正月をせん家のうるもの、これを見、これをめでん人、ちとせのいのち延びざらめやは。

三陀羅法師會集

千秋庵のあるじの名は、もと一葉といひけるを、狂歌などよまんには、ざれたる作り名こそをかしけれとて、一葉の文字をそのまゝに、やがてちよつと一葉とはなのりたりき。其の頃はおのれあしかきの近きわたりにすまひつれば、あしたゆふべに睦びかはして、こよなき得意にてありけるを、一㒵かしこに去るとかいへる、河梁の別れをなしてより、鴈の使の道だに絶えて、終に秦胡の思ひをなしぬ。これは二十年を過しぬる、ふりにし昔の物語なれば、聞き知らぬ人も多かりなん。この翁いま猶風流の道を捨てず、矍鑠として詠歌にふけるは、五條三位の桐火桶、いと〳〵厚き志ならずや、今年の春、人々を集へて初春祝といへるざれ歌を集むと聞きて、野中の清水さしぐみに、例のあやしきことの葉をつゞけて、ちよにやちよにさゞれ石の、いと輕少なる祝ひごとを述べつゝ、さるは此の翁の所謂、昔の人のつぶて文字なるべし。

三陀羅の君がわかなを祝ひつゝちよつと一葉と今日もつむなり

新吉原細見の序

天地はあげやの二階の如く、光陰は客衆に似たり。浮生は夢の四つ手駕、通ひくるわの寛闊に、燭をとつて夜遊ぶこと、實にゆゑあり。いはんや陽春我に假すに中の町の夕ばえをもつてし、おいらん我を呼ぶに文章をもつてするをや。昔が笑顔の桃李園、すだれをあげて花に坐し、連子を明けて月に醉ふ、あたひ千金金谷の酒はものかは、春のよしはら。

馬蘭亭狂歌帖ノ跋

おのれ桃源の奥にかくろへてより、十とせ餘りにやなりぬらん。都のてぶり忘らへにたれば、いかでつき出しの新あることを知らん。もとより風雅にあらず、洒落にあらず、せう事なしの山籠りなれば、ほゝゑむ梅に對ひては、とめこかしとうち嘆き、櫻樹のもとにやすらひては、散らば散らなんとうめかずしもあらず。庭にかけひのええうもせざれば、問ひくる物の音だになく、遊びがたきの散亭山さへ、流石しゞまにたへざるにや、霞がくれに笑ひ出せば、いとゞ友なき心地せられて、長き日あしにしびれきらして、暮しわびぬるぞあぢきなきや。かかるにゆくりなう、物のたよりに此の二巻の文をぞ得たる。しうのをだまきくり返しつゝ、うちひろげ見るに、昔を今の心地せられて、おもほえず袖に鯨のよる心地こそせられしか。これこそ親しき友の筆のあとなれ。哀れ亡きが多くもなりにけるかなと、すゞろにうちなみだぐまるゝに、某のあるじ、これにはし詞をそへよといふ。いかでお

くまりたる身はと、すまひぬれど、せめてゆるさざればいかにせん。さばれ人みぬかたのぬりごめの壁には、男女のかくし所、山水てんぐ〳〵も、かけばかくはやと、思ひおこして、しぶ〳〵筆をとりぬるも、木の實に飽ける山猿の、をこがましきわざになんありける。

深見翁年賀集ノ序

せんずまざいの三河の國桃源のふかみの翁ときこえしは、五福そなへし長者にて、仙風道骨じねんに備はり、貌さへわらはべの昔に劣らず。そも命長き人をかぞへんには、ことさへぐ唐國の彭祖、敷島のやまと猫の命などをこそ、とり出でて云はましか。されど此等の歳の數は、南鐐二朱のはした錢にて、蟠桃會の汁のみの代にも足らざるべし。今此の翁の壽をはかり見るに、おい行かん末の世には、みちとせの桃をつみて、千石船に棹さすべく、羽衣になでし巖を取りて、火うち箱の隅にや置きなまし、翁今年鄕に杖つく齡となれるを、子なりける淺くらぬし、蓬萊の山ぐち、いははでやはと、楊次公がから歌をまねびて、鶴龜にたぐへて、長年を賀せんと定めおきてけるに、相知れる人のいはひ歌ども、濱の眞砂の數そひまさりて、五岳の山とつもりぬるを、斧の柄の長く傳へてんとて、福祿壽の杖にぶらさけし、一卷の文とはなしつ。いでや此の歌どもをよみあぢははば、甘露の酒の醉ひざましに、胡麻飯のさら〳〵茶漬食ふごとく、人間ならぬうまみを知るべし　この仙牒のかたつ方に、

三青鳥のはしがき加へてよと、かの眞老の敎へにまかせ、霞に霧の一杯機嫌に、手飼ひの鳳の鳥のあと、飛んだ言葉を書きつらねつ。

虱

虱こそ穢けなる物なれ。やごとなき御前に出でざるは、身の賤しきを恥づればにや、あやしき埴生の小屋、蓬葎の宿のあたりは、所えてはひもこよふよ。大あなむちの御神に捜され、王猛にひねられしを思へば、昔より人にはいとはれけらし。嵇康が家の壁を傳ひ、五位がかり着のひたゝれにうつりゆくなど、いかにむさからざらん。さはいへど、馬援が軍謀、紀昌が射術は、これが功ともいふべきか。磁石にかはつて北を向いて走り、死にのぞめる病夫にうしろ向くなど、いかにしてその機を知れるにか。皮は吝蟲のあだ名によべども、手は觀音の尊きに比す。かしら蝨の烏帽子を渡り、虎蝨のあやしき所にすめるなど、かれにも貴賤のへだてはあるにや。廻國のふどしにたかりて、日本の靈場をめぐるあれば、賈唐人の背なかに産まれて、丸山の女郎の二布にうつるなど、これらはたがはぬ唐わたりなれど、兩國四條の見世物にも、一度も出でしためしを聞かず。彌生の頃の花見蝨、みつ指の上巳の使者の、うつむきし襟のあたり、そよ／＼と這ひ渡るを、取次は見つけたれど、あなたのお襟に蝨がとも云はれねば、尻込みしつゝ、禮をするは、こなたへうつらぬ用心にやあらん。あるは裏屋

の夫婦暮し、かゆい所へ手の届かぬからおこりて、蝨たかりと呼びたるが、夫妻反目の初めにて、こなたのうつした蝨ぢやとわめきかへす。火吹竹のしもと、擂木のむねうちに、鍋すり鉢のくづるゝ音は、茶椀鉢みせの地震に似たり。相借屋がかけつけて、とりさへて騒ぐ中に、蝨ひとつが起りにて、女房をさつてやと、人の云はんも外聞わろし。鍋屋紐で顛縊らうとは、お内儀も氣がみじかい。腹や背は店賃とらず、蝨どもにかしておく、大ぶく中な家主の長屋にゐるやうにもないと、こそばゆい大屋が挨拶に、鄰の女房、こちの亭主は心中もの、わたしが襦袢の蝨狩りして、汁椀の中へためたを、茶をかけて食うてしまひました。夫婦の中に隔てはない、亭主の蝨は女房のしらみ、互にうつしつうつらせつ、かゆいの物やな／＼と、はひかゝるこそむつましけれと、さがない口が仲なほりにて、夫婦はじめてふきいだすを、背中の蝨や笑ふらんかし。それよりいかにしたりけん、布子は質屋の土藏ずまひ、親方の貧乏が、今は蝨の上となりて、飢ゑつかれて痩せさらぼへど、命のつなや切れざりけん。八月ばかりに辛うじて、此の縲絏の苦を逭れて、富澤町に日影を見し時、今こそ肉の味を見めと思ひつらんを、川端に持ちゆきて、丁稚が帚の先にかけて、布子の裏を掃き捨つれば、思はぬ彌生の櫂の浦、一門底のみくづとなりぬ。少々の殘黨餘類も、鄰の住居いぶせくて、田舍親仁の背にひそまり、縫目に深くかくれたりしを、兩足ゐろりに踏みまたぎて、背腹を掻くにいたりては、猛火の中に

さかさまに落ちて忽ちに命をおとす、其の醫業を修するにひとしゝ。介子推が身のはてもかくやとはかり見るほどに、父猫が計略にならひて、皆殺しにするものもあり。さらでは花山院の陰陽師にならひて、爪さきで見知らすべし。竜に角に見つけらるゝと命におよぶ、汝が宿世こそつたなけれ。いかで佛印に近づきて、一身の由緒をとはざる。もし又一貫が見えしかば、長田が刑にや行はれまし。蝨しらみとうち呼びて襟背すぢとたゞりぬれど、はかなきたまごの名殘とゞめて、いづちゆきけん、かたちは見えず。

川柳集ノ序

遠江のあと川柳、あともなくかれはてぬれど、えらびおきたる言の葉は、今もなほ世にはびこりて、枝をつらぬく白露を玉とみはやす人も多かり。吾が友三尺庵のあるじ、さるしなひのいろに心やよりけん、ひとすぢにこれをめでつゝ、やがて垣根にさし柳、手ぞあの緑のくるとあくと、みづから上かひ水そゝぎて、つひに一本の陰とはなしつ。これをこそかれども、またもおふてふあと川柳、いま盛りなりとも云はましか。

かつをぶし筥

かつをとは堅魚の器なりとか、令義解より延喜式、さてはうつほの物語、順が和名抄にもだしが

らをさへしるしおきたり。さるを兼好が精進口に、猫ぶしの如くやすくせるは、ちとなまりぶしのさし過ぎならんと、小刀學者のはゞかりながら、證文ひいてちよつと書く。

玉光舍

こゝの詞の高間が原に、とゞまりましますハ百萬の、諸公達のざれ歌をこはんとて、四方の國々は島屋が馬の荷の緒結ひかため、大江戸のうちは、占正がむかもゝにふみさくみて、色紙短冊の容つどへにつどへ、詠藻懐帋の、かみ集めにあつめて、もゝたらぬむそたりの判者によざして、子供遊びのたけくらべ、どつちの山が高かるといふことの如く、此の一卷に書きならべぬきたらはして、諸公達のおほ前に持ち出でて、捧げたいまつると申すことのよしを、玉光舍が手ならしし、ふりにし鈴の音をかすめて、つまらぬごたくをのべ奉らくと申す。

七葉亭

七葉亭の主人、作者七人の書を見てより、常に七教の道を守りて、七情の慾を愼み、孟子の七篇、枚乘が七發などはおろかにて、七徳の舞七徳の歌、七步に詩をさへつゞれれば、かの孔門の七十子、建安の七子はさらなり、竹林の七賢にも、その才學は劣らざめり。武藝に七書の奥義をさぐれば七ッ道具の武藏坊、惡七兵衛が勇ありて、七本槍もつきつべし。七面明神七觀音、七福神の守護ありて、

七難即滅疑ひなく、齢は彭祖が七もゝとせ、般七々が術を得て、七世の孫にもあひなまし、此のおなじ七年あまり昔、醉竹翁のざれ歌をしたひて、七尺去つて師とたのみし時、七月七日の梶葉によそへて、七葉亭とぞ名づけられける。折から四方の七梅、赤良のうしのその座にありて、お七吉三が狂言ならで、みしまに書きし筆のあとに、七星かゞやくじわだの、ほひかる額ぞいできにたる。おのれ七松處士の隱居なれども、もとより七叟の老いほれにて、七ッ子のさとりもあらぬを、七里法華の友達なりとて、強ひて七草の膳を据ゑられ、せんかた七色唐がらし、三文ほどの智慧もなければ、何をたねてふ七小町、七ついろはをならべてしるしつ。

夕顔のもとに夫婦すゞみゐる繪

粒々辛苦の玉の汗、いつしか花の露にゆられる、夕顔棚のしたすゞみ、男は垢のふるてゝら、くさい物にはふたの嬶、梁伯鸞が荷持ちこぶ、陸龜蒙が鍬だこをさすりて、梁父の吟のはなうたをつゞしるなど、まさに有莘の野鄙とせんや。かたへに負郭二頃の田あれば、六國の印などは三文判とや見くだすらん。おごることなくむさぼらぬ、掘井戸の水、手さくの麥、帝力なんぞわれ鍋に、とじが盛り出す釜のなか、疏食を食らふ水のみ百姓、肱を枕にふみのばす、あしのまろやの月の影、すめる心やすゞしかりなん。

蕎麥屋の引札(ひきふだ)

そも〳〵蕎麥は仁明帝の御時と、古いはなしの種が殘りて、當國にては深代寺(しんだいじ)を以て、こいつは日本一と稱す。此の物五臟の滓穢(しゑ)をのぞき、氣力を益すの效(かう)ありと、加古(かこ)川本草(かはほんざう)のおきてを守りて、天川屋が馳走を食ひし、由良之助が女房まで、おいしい〳〵とほめけるとぞ。まづ蕎麥のめでたきためしをいはば、棟上井戸がへ柱だて、土藏のあらうち煤(すゝ)拂ひ、引越しの長屋配り主從固めの請狀(うけじやう)にも、件(くだん)の如きまうけとなす。堂建立の日開き、みつ蒲團の敷初(しきぞめ)まで、煩惱菩提ふたつながら、そばをはなるゝ事はなしと、我が田へ水を引き加減、こね方うち方ゆで方まで、手練をえたる私めは、深代寺村の住人にて、蕎麥一道にあかるきこと、やつたやうには候はず。その味ひは御好物の、知る人ぞ知る汁(しる)つぎの、日々御評判あそばされ、老若男女子供衆まで、ぞろ〳〵御出でをこひねがひ候。以上。

そばや　某

越後國白根諏訪明神祭禮奉納の額

かけまくもかしこき、諏訪の御神のひろまへに、ざれ歌の好き人らつどひて、おそれみ〳〵てまうさく、ことし例の御祭(みまつり)に、みあらかをはきのごひ、かき清めたてまつりて、吹きはらふ夕風に、ひときはすゞしめ奉らまくほりして、こゝに神主(かんぬし)が祝詞(のつと)にかへて、こゝらのざれ歌をよみあげつ。さる

は詞の花だし花萬燈をどりやたいのいろふしをつくして、兼題のねり物、當座の俄、すべて錦繡の色をかざりぬ。これかやつはり神樂歌、手にとり物の榊葉の、しげき榮えを守り給へと、さじきの強飯赤い心に、おほみきの瓶子口から出次第、もひとつおそれ〳〵て申す。

淺草庵詠梅狂歌會ノ序

淺草庵のあるじ、大伴卿のためしにならひて、友達の限りつどへて、梅花のあざれ歌をよます。さるは好文木のみやびたる、大宮人は何といふらん、人はいさとは、貫之がことば、とめこかしとは、西行がすさみなり。梅が谷は鎌倉志に記し、梅州は、南宗の地理志に見えたり。南枝花初開とは、梅鉢の紋つけ給へる、文時卿のから歌にて、風の匂はす園の梅とは、紅梅の右大臣の御詠なり。菅公の御書齋、梅壺の御わたりは、かしこければ爰には言はず。げにや今を春べの盛りには、鶴が岡から杉田へとまはれば、又龜戸から梅屋敷ともしやれつべし。二條院のはしかゝしは、常陸の宮のざくろ鼻にかよひ、壽陽公主の野郎帽子は梅幸が若ざかりにや似給ひけん。春の芝居のみつけ柱に、つくり枝の咲きわけもをかしく、序びらきは花笠をどり、一番目は梅若もまじるべく、さて二番目は梅川忠兵衛、さらずはお梅久米之助、梅の由兵衛に二人の女房、りんきいさかひ梅雪爭奇、驛使のはしる鹽梅梅澤、鄰の宿の落梅花、梅の木村の和中散、おほもり茶漬の梅びしほ、粹にかはるゝ袖の梅、八重

梅はつうめその梅の、かべ新造がほたて貝あふぎて、ぬしちよつと鹽梅なんしとは、昔の諺命の詞なるべし。たま〳〵渾雅を閲するに、江湘雨浙四五月の間、梅に實のいる五月闇、香やはかくる、梅の花、それ咲いたかと聲をあぐるは、賽の目をこふふるばくちなるべし。下戸は菓子屋の梅の雪をあまんじ、上戸は樽の七ツうめをひらく。一枝を折らば一指をきる、こゝも名高き難波津に、もし梅が枝が手水鉢あらば、よき梅漬のおもしなるべし。羅浮山ノ下梅花村、玉雪の指五本出して、梅とよびしは中町の、梅本のけん酒にやあらん。そはうつゝ茶の銘にはあらで、うめさく山の匂ひには、何遜か鼻をひこつかせ、三閭大夫のだまり坊も、頭をかいてくやみやせん。さては梅屋か詩もはえなく、梅溪が綸筆も投げつべし。ぐふんじのたき物あはせに、たいの上のみくさが中に、わきて此の匂ひの華やかなりしことは、梅がえの巻にぞしるしたる。木の枝を、たがいひそめて花の兄とは、梅たんせいが字彙には見えねど、王安石が時節到らば、猫の足あとも花かとやこじつけてん。梅の花貝、かひがひしく、梅花を折つてかうべにかざすは、梶原源太のさきの久作、田舍じみたる麥めし腹には、いろをも香をもいかで知るべき。さるを梅花心易あてずつぼうに、花のあにいの無い智慧をはたき、やり梅のやりばなしに、つくしのうめの飛んだ事のみ、筆に垣根の梅干親仁、たそと問ひなばいかゞ答へん。たび鶯の宿屋のあるじ、口をすくして囀るを、聞く人うめのほゝゑみなんかし。

蘆葉達磨

あしの一葉の舟遊山、拈華微笑の臺の物、本來空の生醉に、教外別傳の歌三味線、かた岡山のいいぞいいぞ、あはれ親はなしや。

あさつま舟の繪　今様の體にならふ

君にあふみの琵琶の湖、ひかれていく夜か通ふなる、我があさつまのいかなれば、ぬもとにしほのあるならん。

福祿壽の頭を大黒のそる繪

大黒の足は剃刀と共に短く、福祿壽の頭は、階子と等しく長し。されど壽福の背くらべせんには、まさりおとりは浪のり舟、その浪錢の七つの神々、あはせて二十八文の、錢もぬがけぬ正直の、かうべに福の髪ゆひ牀、さかやきをするおとのよきかな。

瓜

いでや甜瓜を清泉にうかべて、すゞしき風にむかははん。禮記小笠原の說はむつかしけれど、余はではいかに山城の、こまのわたりはもとよりにて、美濃の國なる眞桑の里、となりかくなり成子村など、とり〴〵にその名高し。げに青門の五色瓜、乞巧奠のそなへ物には、此のひとくさをかくべから

ず。七月瓜を食らふとは、唐歌の古風にして、我をほしといふいかにせんとは、ずつと昔の馬士唄とか、ほぞちと古事記に記せるを思へば、早う此の國にはうゑけるならし。ばゝア瓜にはひきかへて、をとめが頬の瓜實には、瓜田に履のうたがひあれば、人の心を兼盛も、見てしがなとはよみけるなるべし。曇恭が孝は此の物にあらはれ、晴明が占は御感にあづかりぬ。王羆は落ちたる皮を惜しみ、寂蓮はむかおしてしてやりき。水波みたるはひさごなりと、曉行法師はそしれれど、瓜にかいたる兒の顔と清少納言もほめしぞかし。朱陵の靈瓜七千歳、上元夫人西王母、瓜を二つのにた〳〵笑ひ、梁楚の人のなかなほりも、此の畑からなりぬと聞けば、まことにめでたきためしには、まづこのつるをひくべきものか。

雲茶集序

文宣王のおゐどのあたりに、こしかけ茶屋の賑はへるあり。一河の流れ一樹の陰、これも他生の緣側に、一冊のさうしをおきしは、詩歌連誹繪のことは、素人黑人の隔てなく、いらせ給ふを待ちとりて、書いて給へのあるじが結構、かの茶どころの宇治亞相の、唐天竺のはなしの會、今は昔のふることを、ちよつとつまんだ雲茶集、茶棚にしるき詞の錦手、牀几とともにならべ給へと、ちとくちばしの長過ぎた、藥罐頭をふりたてて申す。

西行忌

身を富士の嶺の煙にたぐへ、吉野の山にかきこもりしより、草鞋の到らぬ山なく、杖ひかぬ里もなし。保元平治のらうがはしきも、空吹く風と聞きなして、廻國修行せられしは、前見ある人とやいふべき。上人の遁世いま十年おそかりなば、はせべの信つらがふるまひならずは、六條の介の大夫が如き、あはれなる身とやなり給はまし。さるを世にほだしなき身となりて、弓馬の道を語りては、源二位を感心させ、釋門の道を說きては文覺をさへ閉口させ給ひき。また煩惱のきづなを斷ちては妻子をだに顧みず。にんにくの行をつとめては、渡守のむちに逢ひしなど、げにありがたき行ひ人にこそ。あはれ道心の堅固なると、歌の道にかしこかりしは、上人にます人やはある。けふなんたちぬる鴫のあととふばかりに、その如月のもちひを供へ、ふりにし昔をとめこかしの、うめを花びんに挿りて、抹香くゆらす富士香爐、煙を風になびかすになん。

ほどの繪

人の身になり／＼て、なりあはざるところあり。千早ぶる神代には、これをほどとよびけるとぞ。しらぬひの筑紫人は、ひなさきと呼ぶとなん。門がまへに非の字の說は、王荊公は何とかいふらん。されど和名抄にも噂したれば、腰細のすがるをとめ、あがれる世よりや傳へつらん。つら／＼いにし

へを考ふるに迦具つちの神の御ほどは闇山津見の神とあらはれ、いざなみの尊の御ほどには、裂雷なりとゞろきけるとか。かけまくもかしこけれど、天てらす御神のいはやに籠り給ひし時、天のうずめの命のほどうちふりて舞ひ給ひしにぞ、たやすくかしこをはあらはれ出で給ひける、三輪の大物主の神は、丹塗りの矢に身をとりなし、せやたら姫のほどをつきて、いすゝき姫をご産ませ給ひし。大げつ姫の神と申すはみまかり給ひて、ほどのあたり、畑となりて、思はぬ麥が生えけるとぞ。うけもちの御神にも豆や小豆が生えけるを、いかなる鎌にてかき切りけん。後世畠といふなるは、據つてはたけし所なれば、はたけとはいふなりと、ある和學者は講じたりき。さればほどはめでたき物なり。殊に出生の門口なれば、ほどこそ人の本といふべけれ。君子は本をつとむとか、本を忘れぬ心しあらば、野中の清水ぬるきをいはず、あしたゆふべに茶湯をたむけて、ぬかづかざらめや、あがめざらめや。

鍾馗の贊

大臣と稱すれども、隨身舍人も隨へず。降魔の靈驗ありながら、鎮座せる社も見えず。顏に手足に朱を注ぎて、ぬき身をとつてふりまはす。もしなま醉ひかと見てあれば、かしは餅を引窗から覗く。下戸か上戸か、分くべからぬ、文武兼備の進士の垂跡、げにちはやぶるかみのほり、あふけはいよい

よ軒に高し。

番頭の意見法事

親旦那は伊勢人にて、七ッの歳に本家に來り、丁稚奉公の艱苦をしのぎ、三十餘にて別宅して、つひにかばかりの身代はとりたて給ひき。まことや其の父母稼穡に勤勞すれども、その子はぐつと平氣なりとか。うす醤油のきすかれひにて、育ち給へば、世のせちがらきは知り給はじ。人間の行路難は三枚うらにてゆくべからず。そも／＼商人の家に産まるゝ輩は、と、商賣往來に書いた通りを、今算もうるさければ申さず。今日きこえ奉ることは、あなたの腹の店おろし御一生の總勘定なり。しめて六十貫といはれぬやう、御身の分際を秤にかけて、十呂盤のたましひの置き所をよく愼み給へ。

家業怠慢なくつとめ給ふべき事

一　あしたは舂米屋と共に起き出で、ゆふべは饂飩屋と共に臥し給へ。帳場は拙者があづかりなれど、一日に三度ばかりは、店に出て見はり給へ。檀那といふ心をやめて、我は天道に使はるゝ、年季やらうとおぼしめせ。もし此の事に怠らば、主人たる天道の叱りや受けんと恐れ給はば、此のくらゐの事はつとまるべし。

年季祭日供養あるべき事

一 御先祖の法事第一なり。佛書に年忌をいはずとて、世間普通の禮なれば、わろくすましして流すはわろし。然るに伯父叔母の忌日は、朝精進と定め給ひ、又母御様の御命日に、ゆふ鯵の聲がすれば、七ツをうつたから、おちでもよからうなどとは、法外至極と申すべし。茶たう靈膳香花も、御みづからの役とおぼして、朝夕禮拜なし給へ。今日安樂のお暮しは、みな親御様の身のあぶら、はかり知られぬ御恩なれば、一生忘れ給ふべからず。

吝嗇を禁ずべき事

一 近所のつきあひ義理じんぎ、かゆいことをしたまはず、蚤の皮といはれ給ふな。檀那寺の寄進を惜しまば、有財餓鬼の罪や得らん。祭禮のあつめ錢、かけすての合力無盡などあらば、太箸につかせ給へ。青道心の衣の勸進、ぬけ参りの奉加帳に、駕籠かきの太郎兵衛が、いき杖で一本つく、肴賣の團七が、ぶりがれんとなのる中に、十四五箇所の地主殿が、をしい／＼の涙の玉銀ひとつぶとは何事ぞ。しはん棒を握りつめし、金の番人とは、あやつがことぞと、必ず必ずいはれ給ふな。人の渡る川を渡ると申す、諺のごとくならば、裏借屋の者がかちわたりせば、あなたは蓮臺にてこし給へ。もち乞食といはれんは人非人よとおぼしめせ。

めしつかひを憐み給ふべき事

一　めしつかふ人はあつく惠みて、我が産みの子とあはれみ給へ。叱つて動くは軍陣の令なり。今の世にては主人のかたから氣がねして、だましてて使ふが專一なり。人使ひの悪い親方と、山椒大夫の名をたてば、お家に損こそたつべけれ。又少々の仕損じありとて、ざのみ目を大きくし給はじ。手代より子供までが、かくれてのらやかわくらんと、乳母や下女を近づけて、見聞きしたこと、聞き給ふな。夜なべ仕事に使ひたる、針を棒とも申すべく、市には出ぬ鹿の尾花火、ほんといふめや見給はんな。臺所のすみずみに、蜘蛛の巣がいくところ、河岸藏の鼠の穴が、きのふより三つふえたなどと、人びつくりのきいた風は、驚く人もあるべけれど、拙者は承知仕らず。癡ならず聾ならざれば、阿家阿翁となられずとは、古人の詞なり。その何も承知の顔をせず、よろづ摸稜の宰相にて、おほやうにこそあらまほしけれ。

奢侈を禁ずべき事

一　御新造の櫛かうがい、幅びろの二重緞子、女髪結常あんま、これらも過分にならぬやう御心をつけ給へ。商賣に骨を折る、手代どもには徒食くはせて、自分御夫婦ばかりにて、鈴木大和田のええうをば、すぢなきことと人申さん。

遊藝過分ならぬやう心にかけ給ふべき事

一平生のお樂しみに、碁將棋雙六揚弓など、ひまつひえとは存すれど、かるたごいころばしの惡風俗にまさりたれば、少々は可なるべし。鞠は養生のひとつともなれば、ときにおすゝめ申ししかど、橫さまにのみけやり給ひて、おきらひなれば論に及ばず。活花茶の湯の遊藝も、大かたにてありぬべし。目きき自慢のふる物扱ひ、假令正眞の故物とても、もと德ある人の持たし物かは。書畫はやんごとなき物なり、見知りたらんは殊勝にて人がらもゆかしからん。學問し給ふともこゝろあるべし。此の頃の人は寢所にて國字解ひろげながら、見識だてをばいふなりとかく書齋の樣より器物まで、唐土ざまにつくりて、やらう頭の坐りてゐるんは、鉢卷を忘れし國性爺のやうにてパァ／＼人や笑ひぬらん。和歌をよまんも同じかるべし。類聚雜要に形をとりて所せくならべたらんは、相馬公家の土川ほししたる如く、あるじの心ぞおし量らるゝ。劍術は商家につきなくしからず。泰平の町人には歯みがき賣りばかりにて、外にはいらぬなま兵法、なか／＼其の身の讎なるべし。申さばお腹も立つべけれど本性不器用にておはしませば、いづれの道をまなび給ふとも、堺に入ること難からんか。一年謠の稽古なされし時、ある日鼓を肩にあげて、ハァ／＼と手をのばす拍子に、腰元が茶を汲んで來たも知らず、持はかつらの鼻ばしらを、ヤァといふ程ひつかき給ひき。これは猿の皮をたゝきたてられし、因果の報いと

思はれて、その時ひそかに笑ひたりき。いづれの藝も精しだいにて、あへぎながらも、つとめてゆかば、高き山にも登りなん。横ぐはへのなまうかべは、生涯麓の枝みちにまごつきて、藝道の奥の院をば、まさしく拜すること能はじ。案内なしの獨り歩きは、極樂寺高良ををがみて石清水にまゐれりと思へる如く、固陋寡聞は身の損にて、切磋琢磨ぞ第一なる。おのが及ばぬ先達をそしるは、かたへに伯樂のあるをも知らぬ、盲馬の高いなゝきにて、誰かはそれにのる人あらん。あるかたくななる長者の言葉に、町人は無藝無能がよし、秤目そろばんのみ學ぶべしといひたりし。かゝる人はおとしばなしの落ちになりても、それからあとはと問ひかけて、馬牛襟裾のそしりや得らん。御心につきし技あらば、一ッはみがきて成就あれ。但し三味線鼓弓歌淨瑠璃、角力歌舞伎のたぐひには、其の家に上手あれば、これを聽きもし、見もすべし。みづからやらかし給ふべからず。

いろあそび堅く禁制たる事

一　遊所のあたりは鬼門なりと心得て、必ずむかひ給ふべからず。近所の葬送のついでは格別、永代橋と隨身門は必ず越えんとおもひたまふな。これはあまりにきびしき掟よと、仰せあるべけれど、あなたは生得女に目がなく、杖をつかねばたてぬほど、はやく腰をぬかし給ひて、おさ

きまつくらのおくせあれば、ことさらきびしく申すなり。近所の娘藝者など、度々の騷ぎはうちおきて申さず。はや五年にやなりぬらん、出入りのせんきす伯老が紹介にて、贅澤先生へ御入門、これは德行もすゝみ給ふべきことと、喜んでをりしところに、誰か知らん此の贅澤といふ先生、論語知らずの醉ひ倒れにて、面諛をよくせる佞者なりとは。その頃平仄のあはぬ詩會にとて出で給へりしが、宿題の青樓曲をその儘に、ぜいたく先生の教導にて、すぐに登樓萬里の春、木公にや到らん、五明にや行くべき、鷄舌の香も亦憐むべしとて、つひに一層樓にのぼらせらる。す伯が加減の匙先、蜜練りのうまみあれば、それからがやみつきにて、限り知れざるさんや通ひ、發熱のいきり強く、うは言をのみうならせ給ふ。鷄鳴狗盜の食ひつぶしらに煽てられ、逆上の血冠を衝いてのたまへるは、我は新渡の唐本もよめば、助六が文盲なる、我がまたゞらなくざらすべし。されば紫の鉢卷は、ふんどしにして睾丸を結び、蛇の目の傘はひきやぶつて、かも鹿を包まん。遠くは本屋の舊番頭、近くは出入りのあんまとり、我が學力を知らざらんや。依つて五町のおいらんどもが、徂徠表紙のきみなら／＼と稱す。俗物の獅子鼻へは、唐船をけこんでやる、鬚のあひだから覗いてみやれ、明州の津が浮繪の樣に見えるなどと、ばか／＼しき御見識、近日に身受けして、かこはんとやらの相談にて、手つけもすんだ

る樣子にて、內を外なる居つゞけなれば、とく御隱居の耳に入りて、はじめのむかひは、手代の淸十郞をつかはしたるに、智は諫めを拒むにたれれば、すご〴〵とかへつて來る。今度のうつては權九郞、ひきずつて來いとの御意、こいつ日中に行きたれば、みいらとりとやなりにけん。但し子供のねぶるあめわか彥、うまいめにやあひぬらん、四つの鐘にも權九郞、再び歸り來らざれば、其の時拙者まかりこし無二無三にお供して、お家へ罷り歸りたれば、御親類の相談きはまり、お拂ひ箱の神風や伊勢の國へつけのほせ、直に御出立ときはまりしを、拙者命にかへておわび申し、さま〴〵の御諫言、良藥の苦みが利いたか、漸う蟲のをどりがやみて、今かくていらせ給ふ。かやうにくど〴〵申すのも、御持病の起らぬ用心に少々灸をすうるなり。聽きにくしともこらへさせ給へ。

一　物に堪忍あるべき事

常に柔和謙退にて、大つらをし給ふな。醉ひどれの無法者あらば、耳をつぶしてよけ給へ。さては護摩祈禱の功力をからでも、家內安全長久ならん。このほか逐一申しつゞけば、奧藏の棟につかへ、車力も汗やかくべからん。それ故前後きりつめたる、しきせ布子も古めいたる番頭が意見法事、淸行朝臣のやごとなきにも、その忠心はおとらじものと、似合はぬ拙者が高慢禮

節、よつて謹上恐惶謹言。

狂文あづまなまり下 終

大正十五年八月二十五日印刷
大正十五年八月二十八日發行

近代日本文學大系
第二十三卷

（非賣品）

編輯兼發行者　東京市麹町區内幸町一丁目六番地
國民圖書株式會社

右代表者　東京市麹町區内幸町一丁目六番地
野中次郎

印刷者　東京市本所區番場町四番地
井上源之丞

印刷所　東京市本所區番場町四番地
凸版印刷株式會社本所分工場

發行所　東京市麹町區内幸町一丁目六番地
國民圖書株式會社
電話銀座二七八三番
二八八八番
振替東京五二二九八番